

額見町遺跡 V

(H地区及びF地区一部区域の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 —



額見町遺跡遠景（北東方より）

2010年 3月31日

石川県小松市教育委員会

額見町遺跡Ⅴ

(H地区及びF地区一部区域の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 —

2010年 3月31日

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は小松市が施工する串・額見地区産業団地造成事業に伴って、平成6年から平成12年度までに小松市教育委員会が調査主体となって実施した額見町遺跡（ぬかみまちいせき）の発掘調査報告書である。本報告は平成17年度から平成22年度までに6分冊で、刊行を予定しており、本書はその第5分冊目、H地区とF地区南東端区域の報告書にあたる。
2. 発掘調査及び出土品整理は、小松市の単独事業として行なったものであるが、発掘調査費は小松市土地開発公社からの受託という形態をとった。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。

《調査地》 石川県小松市額見町な1番地外
《報告対象面積》（F・H地区にわたる区域の一部）約3,700㎡
《調査期間》（F地区）平成10年10月12日～平成12年3月14日
（H地区）平成12年4月10日～平成12年11月30日
《調査担当者》（F地区）大橋由美子
（H地区）望月精司、大橋由美子
4. 遺構の測量図作成については、向出泰央・坂利彦・稲石純子・松本敦子（以上臨時職員）・谷口佳代・中村悦子・宮川明美・本村美那子・山岸陽平・西島一代・久乘仁美・塩原咲織・南健一・森本雄介ら測量補助員の協力を得て、調査担当者である望月と大橋が実施した。また、遺構全体測量及び基準点測量に関しては、アジア航測株式会社に委託した。
5. 出土品整理は、平成9年度から平成21年度までの中で、遺跡全体として行ったものであり、当該地区の整理は、その中で随時、出土品整理作業員を雇用し、望月精司が主に担当した。なお詳細な整理経過は第1分冊報告書『額見町遺跡Ⅰ』第1章第3節の記載に基づく。
6. 遺物実測、製図、観察表作成、遺物構成把握、遺構図修正、原稿執筆については、出土品整理作業員、江波圭、奥出桂子、柿田康子、上口広子、国本久美子、立原真里、谷口佳代、山崎千春の協力を得て、望月と大橋が実施した。
7. 本書の編集は望月が担当し、執筆分担は目次に記載した。
8. 写真撮影は遺構を望月・大橋が、遺物を望月が担当し、空中写真についてはアジア航空株式会社に委託した。
9. 本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
10. 本書に掲載の写真等については、無断で複写、転載することを禁じています。転載利用の場合は小松市教育委員会へ使用許可を申し入れてください。
11. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい（所属及び敬称略、五十音字順）。

赤澤徳明、穴澤義功、宇野隆夫、大澤正己、春日真実、亀田修一、木立雅朗、北野博司、小嶋芳孝、小林正史、権五栄、坂井秀弥、笹澤正史、杉井健、田嶋明人、出越茂和、戸潤幹夫、橋本澄夫、菱田哲郎、藤原学、朴天秀、宮田進一、森内秀造、山中敏史、吉岡康暢、渡辺一、(財)石川県埋蔵文化財センター、額見町町内会

目 次

例 言	i
目 次	ii
凡 例	iii
報告書抄録	iv
第 I 章	額見町遺跡の概要と今回報告の調査区	1
第 1 節	額見町遺跡と発掘調査概要 (望月 精司)	1
第 2 節	今回報告の調査区 (H地区及びF地区の一部) 概要 (大橋由美子)	6
第 II 章	今回報告区域検出の遺構 (大橋由美子)	15
第 1 節	建物遺構	15
第 2 節	土坑・井戸	37
第 3 節	手工業生産関連遺構	49
第 4 節	その他の遺構と包含層	56
第 III 章	今回報告区域出土の遺物 (望月 精司)	79
第 1 節	出土遺物概要	79
第 2 節	古代の遺構出土遺物解説	81
第 3 節	中世の遺構出土遺物解説	123
附表 1	額見町遺跡 V 報告区域出土古代遺物観察表	141
附表 2	額見町遺跡 V 報告区域出土中世遺物観察表	150
第 IV 章	総 括	
— 三湖台地集落遺跡群の古代後半期土器様相 —	(望月 精司)	158
第 V 章	自然科学分析報告	
— 額見町遺跡の自然科学分析 —	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	175
写真図版	183
		~ 190

凡 例

《遺構について》

1. 本書で示す方位は、座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。また、水平基準は東京湾平均海水面水準（T.P.）である。
2. 遺構名称は竪穴建物跡をSI、掘立柱建物跡をSB、土坑をSK（土師器焼成坑・一部の製炭土坑もSK）、道路状遺構と溝状遺構をSD、炉状遺構をSJ（鍛冶炉・製炭土坑もSJ）、井戸跡をSE、集石遺構をSX、ピットをPとする。土器溜まり遺構で特に遺物が集中するものは番号を付し、特殊祭祀遺構は土器集中と名称づけする。
3. 遺構番号はいずれもA地区からの通し番号を付しているが、ピットは調査区毎である。遺構名・番号の変更について、土器溜まり5-IIをSK437とし、土器溜まり5を土器溜まり遺構とし、続いて付されたローマ数字を、I→集中1へ、III→集中2へ、IV→集中3へ、V→集中4へ、VI→集中5へと遺構名を改めた。
4. 遺構図の基本的な図掲載縮尺は、竪穴建物跡に関して平面図・断面図を1/60とし、造り付けカマド平面・断面図は1/30とする。掘立柱建物跡は平面・断面図を1/100。土坑、炉状遺構は平面・断面図を1/40。生産遺構の平面図・断面図を1/20、一部1/10の場合がある。道路状遺構、井戸跡、土器溜まり遺構は平面図・断面図を1/60とする。溝状遺構は、平面図1/100、断面図1/30。集石遺構・土器集中遺構は平面図を1/20とする。
5. 遺構図で示す平面図の+はグリッド杭の位置を、断面図-は水平レベルラインである。これに付記するH=とした数値は標高値を水平基準から求めた海拔高で示す。
6. 竪穴建物平面図に記載する薄いドット網掛け範囲は被熱焼土化範囲を示し、特に被熱焼結する範囲を濃いドット網掛けで示す。掘立柱建物跡の柱穴内に示したドット網掛けは柱圧痕位置を示す。炉状遺構での薄いドット網掛け範囲は被熱焼土化を示し、濃いドット網掛けは特に焼結する範囲を示す。遺物出土状況図に示す土器を結ぶラインは接合関係を示し、付記する図Noは遺物図Noに対応する。
7. 遺構図の土層断面図に示す数字は覆土土層を示す。アルファベットや○付き数字は覆土と区別するために付した。断面図の太線は機能面を示す。また、土層註に示す色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に基づく。

《遺物について》

1. 本書または観察表で示す遺物の種別や土器の器種名については、本文80・81ページに示したとおり、基本的に前回報告の『額見町遺跡Ⅱ』の出土遺物分類に基づく。また、観察表や本文に示す遺物帰属時期については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』及び田嶋明人1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』）に基づく編年標記であり、その編年の筆者暦年代観については観察表の巻末にまとめて掲載する。
2. 遺物図版の縮尺は須恵器大甕を1/5に、それ以外を1/3に統一した。
3. 遺物図版で示す実測図断面に示される網掛けは、黒塗りが須恵器または須恵質製品、白抜きが土師器または土師質製品、ドット網掛けが陶磁器類、ストライプ網掛けが石器、鉄製品とした。また、土器の内外面に示される網掛けについては、細かいドットが赤彩、粗いドットが黒色焼成、砂目が墨痕跡または油煙痕跡、漆附着痕跡を示す。
4. 須恵器や土師器、陶磁器類の実測図右断面に示す「←→」はヘラケズリ調整の範囲を、外面や内面に記される「→」はケズリに伴う砂粒移動の方向を示す。また、砥石に示す「←→」は磨耗痕跡範囲を示す。
5. 須恵器、土師器の実測図においてロクロ（回転台等回転使用も含む）による成形や調整を行うものについては、口縁部ラインや底部ライン、内外面調整ラインを非ロクロ製品と意識的に分けるため、定規で線を引き、非ロクロ製品はフリーハンドで示した。ただ、中世土師器はロクロ使用でも回転力の弱いものはフリーハンドとしている。
6. 遺物説明、観察表で示す法量計測について、口径（受け部径・返り径）は口縁上端部（受け上端・返り上端）での直径を、底径は底部切り離し外端部での直径を、高台径は台の外端部径を、頸部径（基部径）は頸部（基部）屈曲部の最小径を、胴部径（つまみ径）は胴部（つまみ部）最大径を、脚部径は脚下端部での直径を示す。なお、器高等の高さ計測については、器形の安定している部分での平均的な数値とし、立高や返り高は受け部下端から口縁端部、返り端部までの垂直高とした。
7. 遺物説明、観察表で示す胎土については、観察表巻末に凡例をまとめて掲載する。
8. 遺物説明、観察表の土器成形痕跡の中で、叩き出し成形に伴う叩き痕跡については、内堀信雄分類案に基づき（内堀信雄1988「須恵器甕類に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』）、H類を平行線文、D類を同心円文とし、H a類は平行線彫り込みに直交して木目のあるもの、H b類は右上がり斜交の木目のあるもの、H c類は左上がり斜交木目のあるもの、H e類は木目の見えないものとし、D a類は木目の見えないもの、D b類は同心円彫り込みに沿って同心円木目の見える芯材使用のもの、D c類は柁目状木目のもの、SD類は木製無文当て具の年輪痕跡のものとした。また、別のものは記号以外の表記にした。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぬかみまちいせき (Nukamimachi Sites)
書名	額見町遺跡
副書名	串・額見地区産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5
巻次	V
編・著者名	望月精司・大橋由美子
編集機関	小松市教育委員会
所在地	〒 923 - 8650 石川県小松市小馬出町 91 番地 (電話) 0761-22-4111
発行年月日	西暦 2010 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぬかみまち 額見町	いしかわけん こまつしぬかみまち 石川県小松市額見町 な 1 番地外	160	03089	36 度 21 分 16 秒	136 度 24 分 30 秒	F 地区 1998.10.12 ~ 2000.03.14 H 地区 2000.04.10 ~ 2000.11.30	F・H 地区の 一部 約 3,700 ㎡	小松市が施 工する串・ 額見地区産 業団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
額見町遺跡	集落跡	飛鳥・奈良・平安時代 今回報告区域は 8 世 紀～9 世紀と 11 世紀 後半～12 世紀前半に 集落経営の主体があ る。	竪穴建物 1 軒、掘立柱建 物 31 棟、土坑 63 基、井 戸 1 基、道路状遺構 1 本、 溝状遺構 15 条、炉状遺構 8 基、土器溜まり 4 箇所、 製炭土坑 1 基、鍛冶炉 3 基	須恵器 (特に獣脚付鉢、 獣脚付羽釜)・土師器 (特 に羽釜)・甕形土製品・ 円筒埴輪・円面硯・土 製馬形・土錘・専用焼台・ 緑釉陶器・白磁・砥石・ 鉄鏃・刀子・馬具	古代では大規模な土 器廃棄遺構と掘立柱 建物、鍛冶炉 4 基と関 連製鉄遺物を検出。古 代末では土師器大量 破棄と大型総柱建物 4 棟を検出。

要 約

6 世紀代に墓域化した台地に、古墳群消滅とともに突如出現する古代集落遺跡。7 世紀初頭の集落成立時に L 字型カマド付設竪穴建物を高い確率で選択している点から、朝鮮系移民を主とした集落と判断される。7 世紀後半に当集落内で生産される朝鮮系軟質土器や同時期に始まる鍛冶生産、須恵器窯製品を産出した際に生じる窯道具片の出土など、当集落が手工業生産に携わったことを示す。当集落の近隣にある南加賀丘陵製鉄・製陶遺跡群が 7 世紀に変革期を迎えることと関連性が強く、広義での台地上集落群は丘陵部工業生産地帯の母村としての性格を持つ。7 世紀後半は集落増加期であり、8 世紀前半までに全盛期を迎えるが、7 世紀後半の新たな建物様式の導入や近江系煮炊具、丹波系煮炊具の導入など、朝鮮系移民のみならず、西日本各地または西を經由しての移民流入によって集落の拡大が図られたことを示す。律令政府主導の下で計画的に設置・経営された集落と言え、それは地方支配政策、評制施行前段施策としての性格をもつ。当台地集落の成立は近隣地に置かれたであろう江沼評や工業生産地と一体的なものであり、潟湖を媒体に屯倉的な領域支配がなされた地域と性格づけられよう。

S A M A R Y

The NUKAMIMACHI SITES are an ancient village ruins in the fee that appear suddenly on the plateau that was the grave region with the disappearance of the old tomb group in the sixth century. In view of the point to have selected the Ana building where L character type kitchen range is set up when the village is approved century seventh by short odds, this village ruins are judged to be ruins mainly composed of a Korean immigrant. The excavation of the kiln tool splinter caused when the blacksmith production and the Earthen kiln product that starts from existence of Earthenware group that introduces a Korean in be produced in the latter half of the seventh century technology and a simultaneous period are selected etc. show that this village was involved in the manual industry production. The vicinity Minamikaga hill steel manufacture and the pottery manufacture ruins group's in this village coming the revolution period in this in the seventh century has and the relation has the location village group on the plateau strongly said by the wide sense with the character as the mother's body village in the hill part industrial production zone. The latter half of the seventh century is a period of an increase of the village, and it is shown that not only Korean immigrants of the introduction of a new building style in the latter half of the seventh century and the Receptacle of cooking of the Ohmi system and the Receptacle of cooking of the Tanba system, etc. but also the expansion of the village was attempted by the immigrant inflow via West Japan various places or the wests though the glory period will come by the eighth first half of the century. It can be said the village that was set up and managed in premeditation under the Ritsuryo government initiation, and has the character as the steps measure by it before enforcing the criticism system of the local rule policy. The approval of this plateau village is an Enuma criticism, is industrial production ground that might have been put on the vicinity ground, is united, and it is thought the region where the seashore lake is assumed to be the medium and it was performed by area rule ton warehouse.

第I章 額見町遺跡の概要と今回報告の調査区

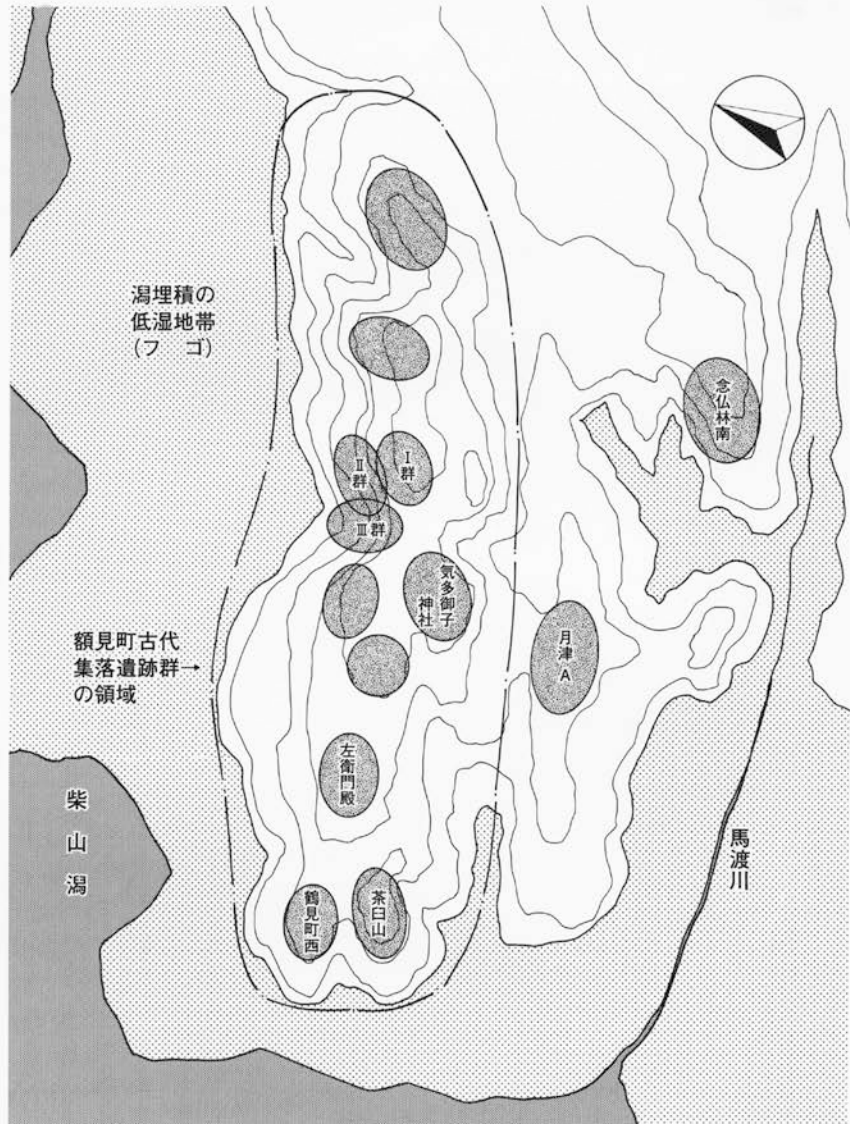
第1節 額見町遺跡と発掘調査概要

第1項 額見町遺跡と額見町古代集落遺跡群

額見町遺跡は、長軸 800 m、短軸 550 m の北東方に長い遺跡分布を示す 440,000 m² の広大な集落遺跡である。幾つかの集落単位が集合した結果、広大な面積の集落域となったものであり、大きくは額見町古代集落遺跡群と称したエリアが広義の額見町遺跡であると評価する。当地は昭和 20 年代の耕地整理によって起伏に富んだ台地地形が階段状に削り取られ、その際に台地南西端の茶白山周辺が削平を受けた。茶白山古墳や茶白山祭祀遺跡、茶白山遺跡はその時に発見された遺跡である。昭和 30 年以降、加賀三湖干拓工事に伴い、額見町遺跡から北東へ伸びる台地は土砂採取により大きく削平を受けたが、その際、埋蔵文化財調査を行った形跡はなく、存在したであろう額見町遺跡の北側部は消失することとなった。その後、大規模な開発等が行われなかったこともあり、当地は遺跡の発見が遅れ、昭和 56 年の石川県立埋蔵文化財センターが行った詳細分布調査まで、遺跡所在すら確認されずにあった。石川県立埋蔵文化財センターが平成 8・9 年度に発掘調査を行った額見町西遺跡にしても、平成 7 年に小松市教育委員会埋蔵文化財調査室が地主の依頼によって行った試掘調査において新発見した遺跡であり、当台地上にはほぼ同一時期の集落遺跡が点在していたのだろう。明治 42 年及び昭和 37 年に行われた地形測量図をもとに、これまで近隣で調査してきた成果、遺存する地形等から額見町古代集落遺跡群の台地地形を復元したものが右図に示したものである。当台地領域は柴山潟に面して北東方に細長く伸びる台地で、馬渡川の開析谷に面する台地よりも若干小高い独立台地状を呈す、長軸 2400 m、短軸 750 m、約 150ha にも及ぶ広大な台地である。図に示した集落分布予想図は、旧地形をもとに想定したものだが、今回の調査所見で得たように、台地には複雑に小支谷や鞍部が入り込むため、さらに集落単位は分断されていた可能性が高い。今後の詳細な地形把握と分布調査により、遺跡分布の検討はなされなければならないが、既に削平を受けた地域は多く、これから検証することは困難を極めるだろう。

第2項 平成7年度～12年度発掘調査概要

今回報告する額見町遺跡は、平成7年度から12年度までの6年間にわたる発掘調査報告で、石川県立埋蔵文化財センター調査分も含め、38,500 m² の面積を発掘調査した。当調査で

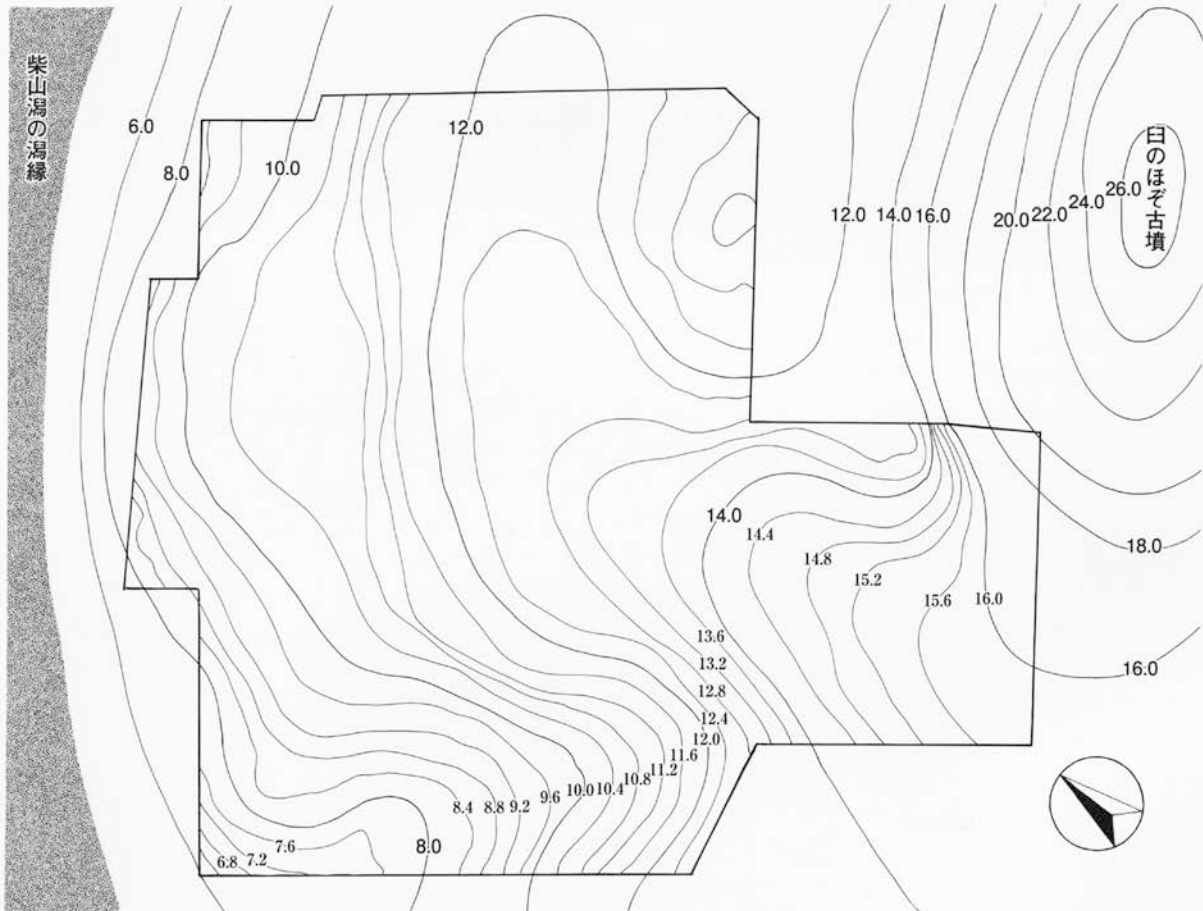


第1図 額見町古代集落遺跡群の復元地形と集落分布予想 (1 / 20,000)

検出した遺構は、竪穴建物 119 軒、掘立柱建物 330 棟、土坑 424 基（うち土師器焼成土坑 10 基、製炭土坑 7 基、墓坑 15 基以上）、炉状遺構（うち鍛冶炉跡 12 基）、井戸 3 基、溝状遺構 53 条（うち道路状遺構 5 本）、集石遺構 2 基で、他に土器溜まり遺構を 20 箇所以上確認している。後述するように調査面積の多くが削平されていたため、相当数の遺構が既に消失した状態であり、遺跡が完存していれば、どれだけの建物数が存在していたのか、悔やまれるところである。14 世紀頃の集石遺構 2 基と縄文時代に遡るであろう落とし穴土坑 1 基以外は全て、7 世紀前半から 12 世紀に位置づけられる古代遺構であり、多くの遺構が密集、重複する状況であった。

当地の旧地形を調査所見に基づいて作成したのが以下の図だが、調査区の東側に存在する標高 26 m の尾根頂上部（白のほぞ古墳立地）から南西側に張り出すようにして尾根筋が延び、そこから北側へと緩く標高を減じる形で、馬の背状に尾根筋が延びていく。東側尾根頂上部から北側へ延びる尾根筋の間には谷部が入り込み、尾根頂部との比高差は 15 m にも及ぶ。谷部から見て、白のほぞ古墳の立地する尾根頂上は、見上げるような高さがあり、集落立地に際して古墳を意識したような選地を行っていたことは間違いない。また、北側へ細く延びた尾根筋から北西方へは緩く張り出してテラス状の部分（テラス状部分の中央は鞍部が入ったように若干下がり気味となる）を形成しており、そこから柴山湯の湯縁へは比高差 7 m 以上の急傾斜となる。この張り出し部の南西側では、柴山湯から南東側へ延びてくる支谷に続く小さな谷が入り込み、楕円形状を呈する緩い傾斜地を形成している。比高差 6 m 程度を測る傾斜面で、南西側へ谷は広がっている。

極めて起伏に富んだ複雑な地形を呈していることが復元地形コンタから見て取れると思うが、耕地整理においては尾根筋部分を削り取り、鞍部や谷部へ土砂を埋めるという造成を行っている。この結果、約 14,000 m²、調査面積の 36% が削平による破壊を受けてしまっていた。一部深い遺構に関しては、遺構基底部が遺存していたが、大半は遺構痕跡も残さない状態であり、特に尾根筋部分は遺構がどのような分布をしていたのか、把握できる状況にない。ただ、尾根筋でも削平を受けていない部分もあり、その箇所での遺構分布が確認できないことや鞍部から尾根部へと徐々にではあるが、遺構密度が希薄となる傾向などから考えて、尾根筋上での遺構分布はもとも

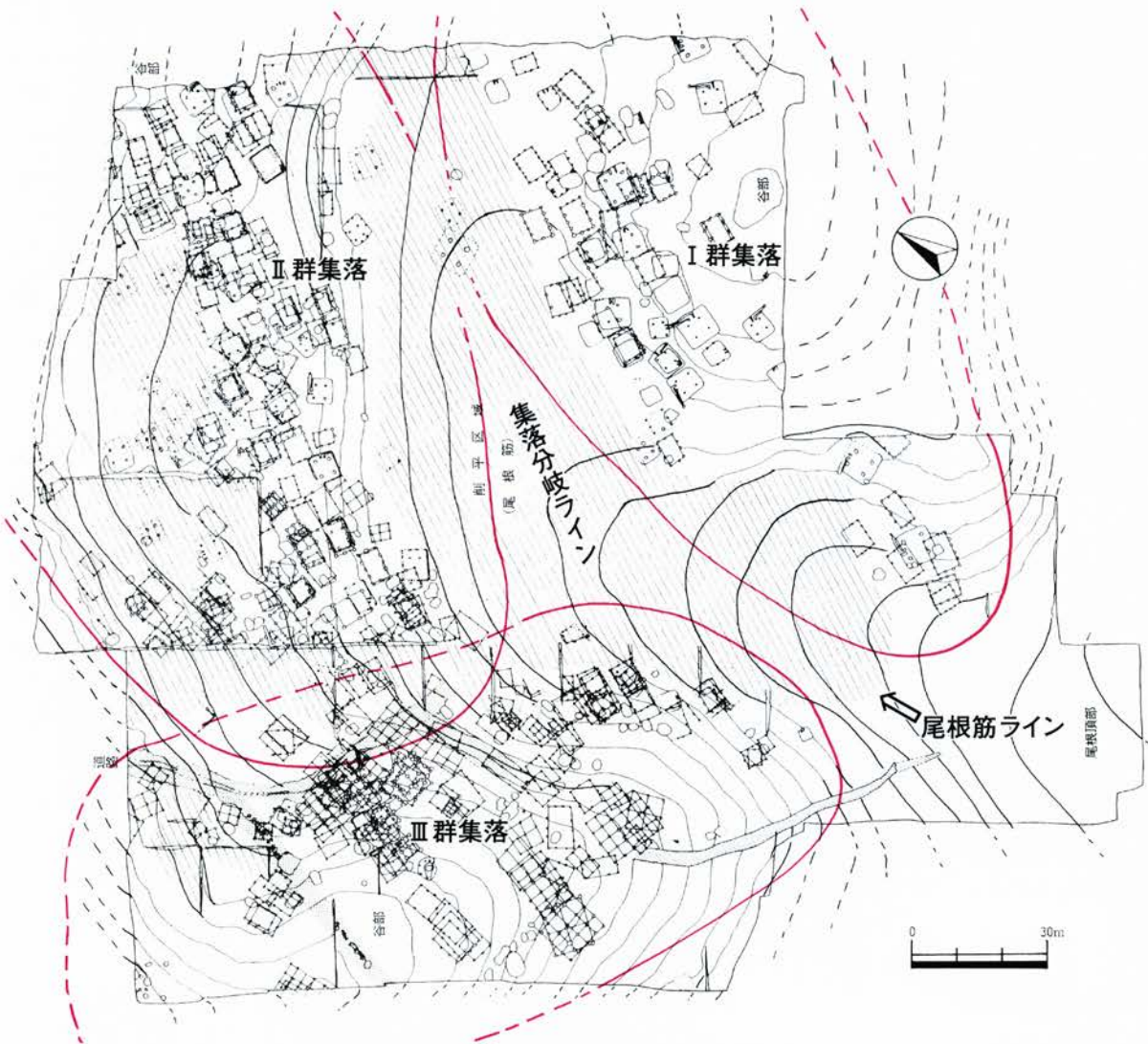


第2図 額見町遺跡発掘調査区域内の復元地形（1 / 2,000）



第3図 額見町遺跡主要遺構配置図 (1/1,000)

と低かった可能性がある。尾根筋が集落の分岐線であった可能性がある。当地は柴山湯から吹き込む風が強く、風当たりの強い尾根部を避けて選地していた可能性があり、建物立地は緩傾斜地を形成する谷部や鞍部を中心になされていたと予想される。鞍部や谷部は黒色土堆積が厚く、粘土質の黄褐色土地山が露出する尾根筋部分よりも比較的水捌けがよいという点も、建物選地の一つの要因であったろう。削平地が多く不確定要素は多いが、以上の集落分布傾向から想定すると、以下の集落群構成になるとみる。Ⅰ群集落はA・D地区に展開する鞍部緩斜面上の建物群、Ⅱ群集落はB地区からC地区そしてF地区北端へ南北に延びる鞍部緩斜面上の建物群、Ⅲ群集落はF・G・H地区に分布する柴山湯へ緩く傾斜していく広い緩斜面上の建物群である。Ⅰ群集落は7世紀前半の竪穴建物の検出例が多く、7世紀代から8世紀前葉に主体を置く集落群と言える。Ⅱ群集落は7世紀前半から8世紀代までの長期集落と言えるが、主体は7世紀中頃から8世紀中頃で、最も建物検出例の多い集住区域と言える。Ⅲ群集落は7世紀前半の建物も確認されるが、それはⅡ群集落からの延長で捉えられるもので、総じて8世紀以降に主体を置く集落と言える。古代祭祀に伴う大規模な土器廃棄遺構や仏教関連施設、または井戸や道路状遺構など、Ⅰ・Ⅱ群集落では見られなかった特殊な遺構も検出され、集落様相を異にする。Ⅲ群集落は11世紀後半～12世紀の建物群が広く展開することも特徴である。古代から一時衰退時期を挟むが、大きくは同じ集落経営の流れで存在する建物群であり、Ⅲ群集落の流れで考えて妥当である。以上3つの集落群のまとまりを重視し、報告書刊行順を調査年度に捕らわれず、Ⅰ群集落であるA・D地区を報告書Ⅰとし、Ⅱ群集落であるB・C地区を報告書Ⅱ・Ⅲとした。Ⅲ群集落はその北西側に当たるG地区を主とした報告書Ⅳ、南東側に当たるH地区を主とした報告書Ⅴとして刊行し、平成22年度には鉄関連遺物報告を報告書Ⅵとして刊行し、完結させる予定である。



第4図 額見町遺跡の集落のまとまり概念図

第2節 今回報告の調査区（H地区及びF地区の一部）概要

第1項 遺構の概要と分布

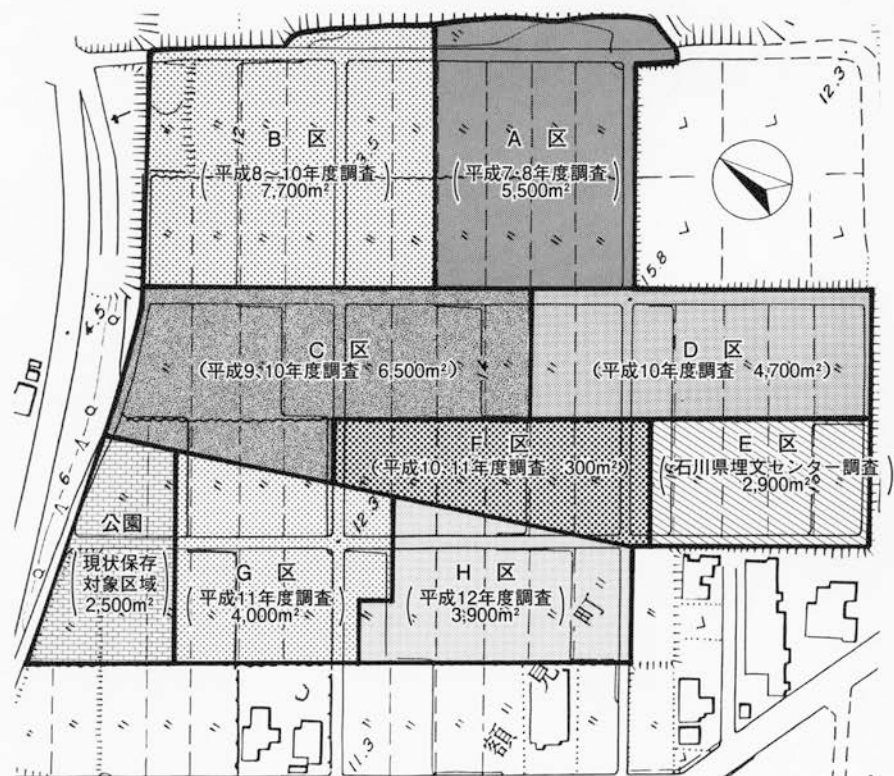
今回の報告区域は、本調査区全域の西南地にあたり、H地区と東に隣接するF地区を含む区域である。H地区報告分3,485㎡、F地区報告分375㎡、総計面積は3,860㎡となる。前回までの報告で、本遺跡には、昭和初期の農地開発により段状に切り盛りが行われていたために、完全削平され遺構の検出されない区域や上層削平により遺構基部のみ検出される区域が認められている。A地区からF地区においては、このような削平区域の面積が1/2以下を占める状況となっていた。前回報告区域の中心であるG地区では、削平面積が比較的少なくなっており、今回報告区域の主体となるH地区でも完全削平された区域はなく、南側のみ削平が認められるものの建物の掘方が残る状況となっている。この削平は、標高の高さによるものであり、最も標高の高い尾根筋ラインが最も削平を受け、標高が低くなるにつれ削平割合が減ってゆくためである。

本遺跡の南北に走る尾根筋ラインから西側に着目すると、南西では、H地区からG地区にかけて楕円状の谷部を形成している。北西側では、B・C地区を中心にF地区西側からG地区の一部にかけ、テラス状となる緩やかな平坦区域を形成しており、ここに遺構が極めて密集する。今回報告区域は、テラス状区域の南側に位置し、尾根筋ラインから谷部へ下る途中にあたるが、その中でも比較的緩やかな傾斜地を形成する区域と言える。そのため、テラス状区域の遺構密集区から続く形で遺構が広がっている。

今回報告区域から検出された遺構数は、本報告のために遺構整理した結果、竪穴建物1軒、掘立柱建物31棟、土坑60基、製炭土坑4基、鍛冶炉4基、土師器焼成坑？1基、井戸1基、道路状遺構1本、溝状遺構16条、炉状遺構7基、集石遺構4基である。この他、土器溜まり遺構、土器集中遺構がある。土器溜まり遺構は、現地調査時に、土坑のような落ち込みを持たずに、多量の遺物が検出されたものである。F地区側である東側からH地区そしてG地区にかけて延びてゆく大きな谷部に向け、H地区内の標高の高い南側部分以外のほぼ全区域という広範囲に及んでおり、谷部地形に伴った土器廃棄を行っていた可能性を考え、土器溜まり遺構と名称付けたものである。しかし、整理段階で見直してみると、出土遺物に明確な時期差もなく、殆どが包含層的なレベルに至るものではないかと思われる一方、古代遺物の明確な時期が認められる、特に集中する箇所も確認できており、

これを土器溜まり遺構“集中”とした。土器集中遺構は、皿が重なって廃棄された箇所であり、何か意味を持つ廃棄場であった考えから、遺構として取り扱うこととしたものである。

前回までの報告でも述べてきているように、本遺跡は、黒色土系地山を地山上層レベルにもち、G・H地区の西側谷部には、質の異なる黒色堆積土が認められている。そのため、黒色土系地山での遺構検出のしづらさに加え、前述した土器溜まり遺構や、流れ込みとも捉えられる多量の包含層遺物出土により、遺構検出は一層困難を極めるものであった。こういった状況での調査であったため、今回



※調査対象全面積:41,000㎡

第5図 額見町遺跡発掘調査地区割図（S=1/2,500）

報告遺構でも、本当に遺構であるのか疑問を抱かせるものが確認できる。しかし、前回までと同様に、図面上の判断は現地判断に及ばないと言う考えから、現地調査を重視し、そのまま報告してゆくことを基本とする。ただ、土器溜まり遺構は、遺構はなく遺物のみに限られるため、変更を可能とした。

今回報告区域での遺構は、前回のような遺構密集区域はなく、比較的空間に余裕があるといった分布となっている。調査区南端にて検出された唯一の竪穴建物は、最も標高が高い位置で近代削平を受けている状況である。掘立柱建物や土坑などの遺構が検出される区域に対し、この1軒のみが離れる形をとり、前回報告のSI105と似たような役割をもっていた可能性が窺える。竪穴建物1棟以外の建物は、全て掘立柱建物である。掘立柱建物は、基部のみが検出されている状況で、古代建物桁行・梁行が直行しないような建物や簡易な建物が多く見受けられる。中世建物でも小規模建物に、このような現象が認められる。中世建物とは、古代末から中世の構造主体となる低い床をもち、柱が碁盤目状に並ぶ、柱穴規模の小さな総柱建物を示しており、時期は本遺跡の終焉期でもある11世紀～12世紀にあたる。これら建物の遺構時期の推移については、1軒のみの竪穴建物は8世紀後半であり、掘立柱建物では、7世紀末～8世紀初頭が1棟、8世紀中頃が1棟、8世紀後半が1棟、8世紀末～9世紀初頭が3棟、9世紀前半が4棟、この他、出土遺物はないが古代の建物と考えられるものが7棟、本遺跡の古代以外で終焉期までにあたる11世紀～12世紀の中世建物が16棟である。古代掘立柱建物の時期は、8世紀末以降の9世紀前半代が主体であり、中世掘立柱建物の半数を占めることになり、前回までに比べかなり増加する。これは、今回報告区域が、本遺跡の変遷で最も新しい時期にあたるためと考えられる。

今回報告区域で報告する井戸跡は、段状の土坑を伴ったもので、前回報告したSE02の外周土坑をより簡素にした印象のものである。この他、生産遺構、特に鍛冶炉や製炭土坑は多く、製炭土坑は比較的まとまった区域に、2カ所に分かれて集中する。同様にまとまった区域に集中するのは集石遺構であり、4基のみの検出であるものの、東西軸一列に並んで検出されている。

第2項 基本層序

本遺跡では、遺跡全体の包含層を含めた基本層を一貫して記録してきており、これは本遺跡調査全域に打設されたGr杭のライン軸で設定して土層観察を行ったものである。完全削平を受け、包含層の残っていない区域では、耕作土や表土を取り除いた時点で、黒色地山土よりもさらに最下層となる褐色地山土や黄褐色地山土が露出するという現象がみられ、このような区域では極一部を除き土層断面図は作成していない。

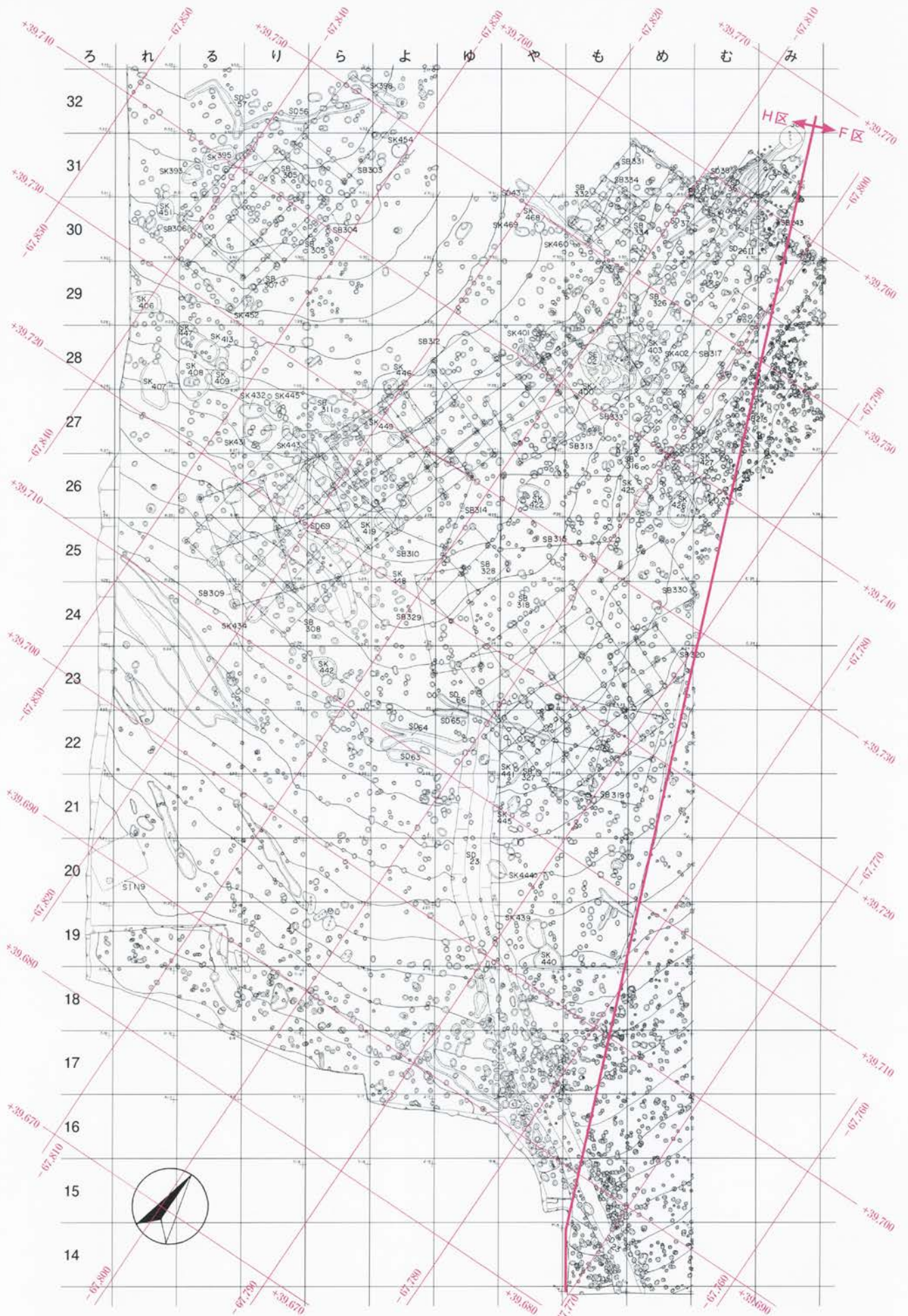
今回報告区域で、地形傾斜を捉えられるものは、Gr「や」「る」ラインと、「18」「22」「26」「30」ラインである。「18」「22」「26」「30」ラインでは、ライン中央が最も低くなって谷を示す。この浅い谷は西へ行くに従って次第に深まり、G地区への谷部へと繋がってゆくのである。このような地形を示すためには4本も提示は必要ないかもしれないが、上層で検出されている土器溜まり遺構の土は、標高の高いものと、谷部へ近づくものとの、土の違いが認められるため記載することとする。

基本土層として土層註に記載はないのだが、本遺跡では、最も下層に黄褐色系地山が存在し、この上の層に褐色系地山、さらに上の層に暗褐色系地山、この上の層に黒色系地山土との間の漸移層である黒褐色土地山、この上層に黒色系地山が確認されている。黄褐色系の粘土地山と黒色系地山を中心に、この両層の間に土色差によって分層されるといったものである。質的には、壤土や埴土を基本としており、下底にゆくに従い粘質性が増す傾向にある。そして、前回報告では、谷部での堆積層には地山が酸化する現象が認められた。

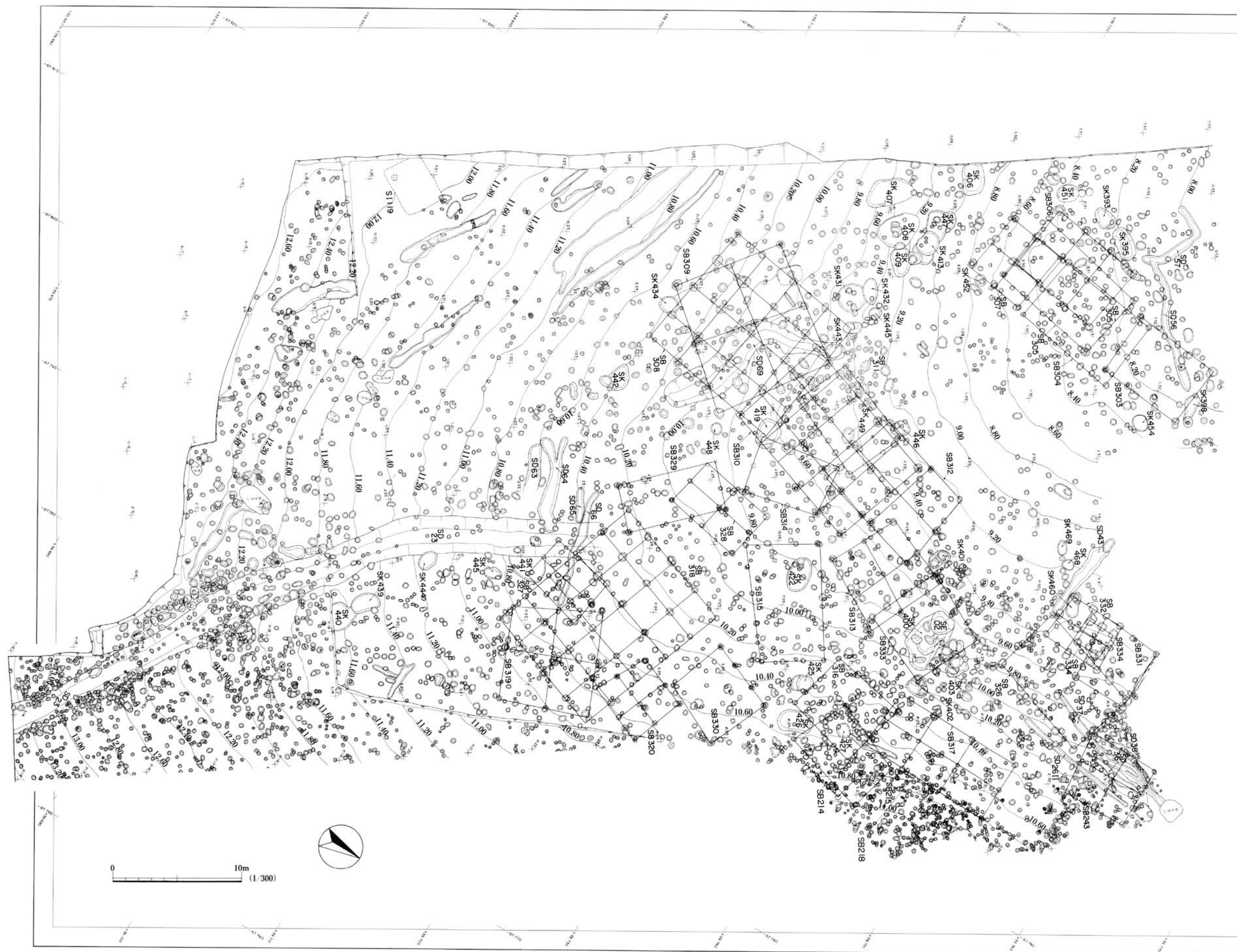
谷部を中心に検出されている古代末や中世の上層土器溜まり層も確認されるが、意図的な遺物廃棄としての土器溜まりは、部分的に留まっている。今回報告区域では、H地区とF地区境から中央の小谷にかけての範囲一体に、土器溜まり遺構を捉えている。但し、整理段階にて、遺物時期のまとまりがみられないことから、包含層的な要素が強いものある考えは前述のとおりである。しかし中には、極一部に限り小皿が集中して廃棄されるなどの遺物のまとまりがみられ、大規模なものを土器溜まり遺構としている。

さて、今回報告区域では、H地区中央の小谷から南側にかけてと、小谷から東側にかけての基本層の違いが生じている。これは、どのラインでも同じ様な現象が見られるものである。小谷から東側にかけては、提示する土層断面図中には殆ど地山層は図示されていないが、下底に近い所で、黒褐色系地山であるⅧ層、この上位にⅡ層、この上位にⅣ層、さらに上位にはⅣ'層が認められる。これに対し、小谷から南側にかけてでは、同じく提示す

第2節 今回報告の調査区（H地区及びF地区の一部）概要



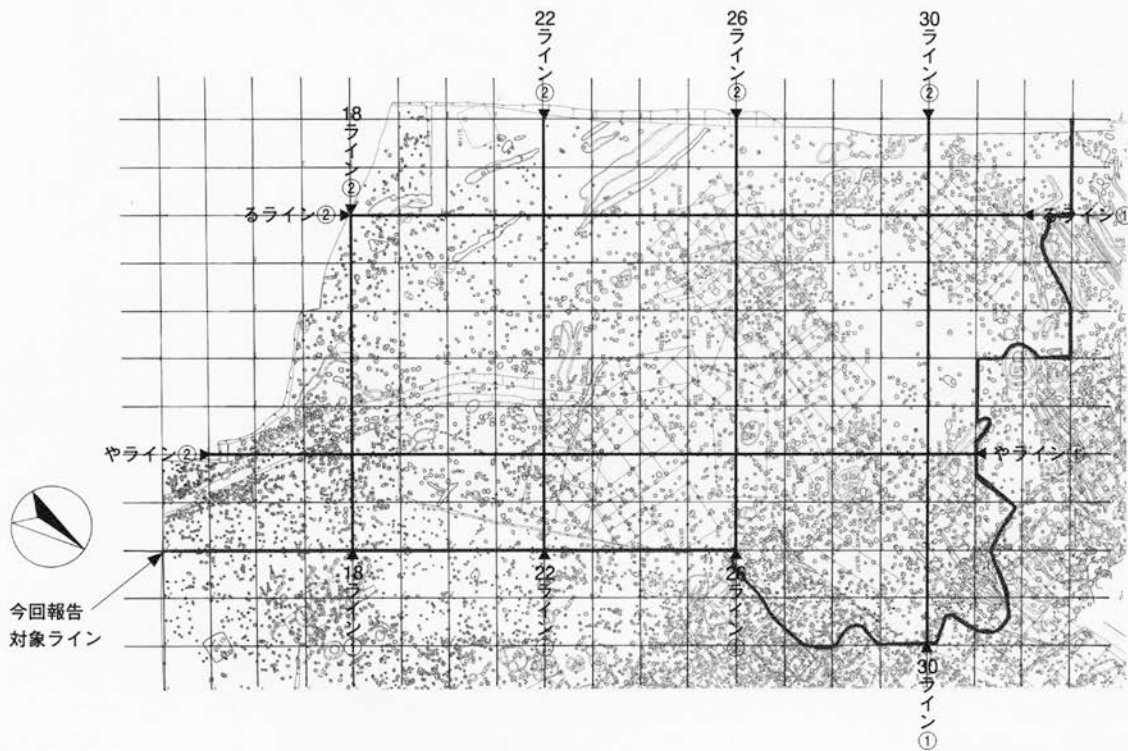
第6図 今回調査区の座標軸とグリッド配置図 (S = 1 / 400)



第7図 今回報告の調査区（H地区・F地区の一部）（S = 1 / 300）

る土層断面図中で殆ど図示されていないものの、下底に近い所で黒褐色系地山であるⅧ層があり、この上位にⅨ層、この上位にⅩⅣ層、さらに上位にⅣ層やⅣ'層が認められる。Ⅸ層は、黒褐色系地山の可能性をもち、両者では、地山の色調に違いが認められる。谷部堆積であるがゆえの影響と考えてよからうか。

このような層が基本となり、遺構はあらゆる層位で掘り込まれている。前回までの報告と同様に、Ⅳ層やⅣ'層で掘り込まれるものは多いが、ⅩⅣ層やⅨ層、Ⅳ層で土坑等の遺構の掘り込みが認められる他、土器溜まり的な層であり包含層として認識してもよいと思われる⑫層・⑬層、確実に土器溜まり遺構土層である①層・④'層・⑥層・⑦層・⑦'層においても掘り込みは認められる。土器溜まり遺構土層の④'層・⑥層、また包含層レベルとも考えられる土器溜まり遺構土⑪層・⑫層・⑬層の上層には、Ⅳ'層が確認でき、土器溜まり堆積後に、Ⅳ'層が堆積していることがわかる。⑪層・⑫層・⑬層を切る様に掘り込まれるのが、土器溜まり遺構であり、土器溜まり遺構を切る形で存在するのがSD23である。なお、Ⅳ層面で掘り込まれるSK426やSK425は田嶋編年Ⅳ1期を示し、Ⅳ層・Ⅸ層面で掘り込まれるSK425は田嶋編年Ⅳ2～Ⅴ2期を示しており、これは、本遺跡C地区以降、今回の調査区でも認められる傾向である。そして、中世Ⅰ-I期であるSK419の上層にⅣ'層堆積が確認できることも、前回報告区域であるG地区と同じ傾向をもち、Ⅳ'層は中世以降に堆積していったものと判断できる。



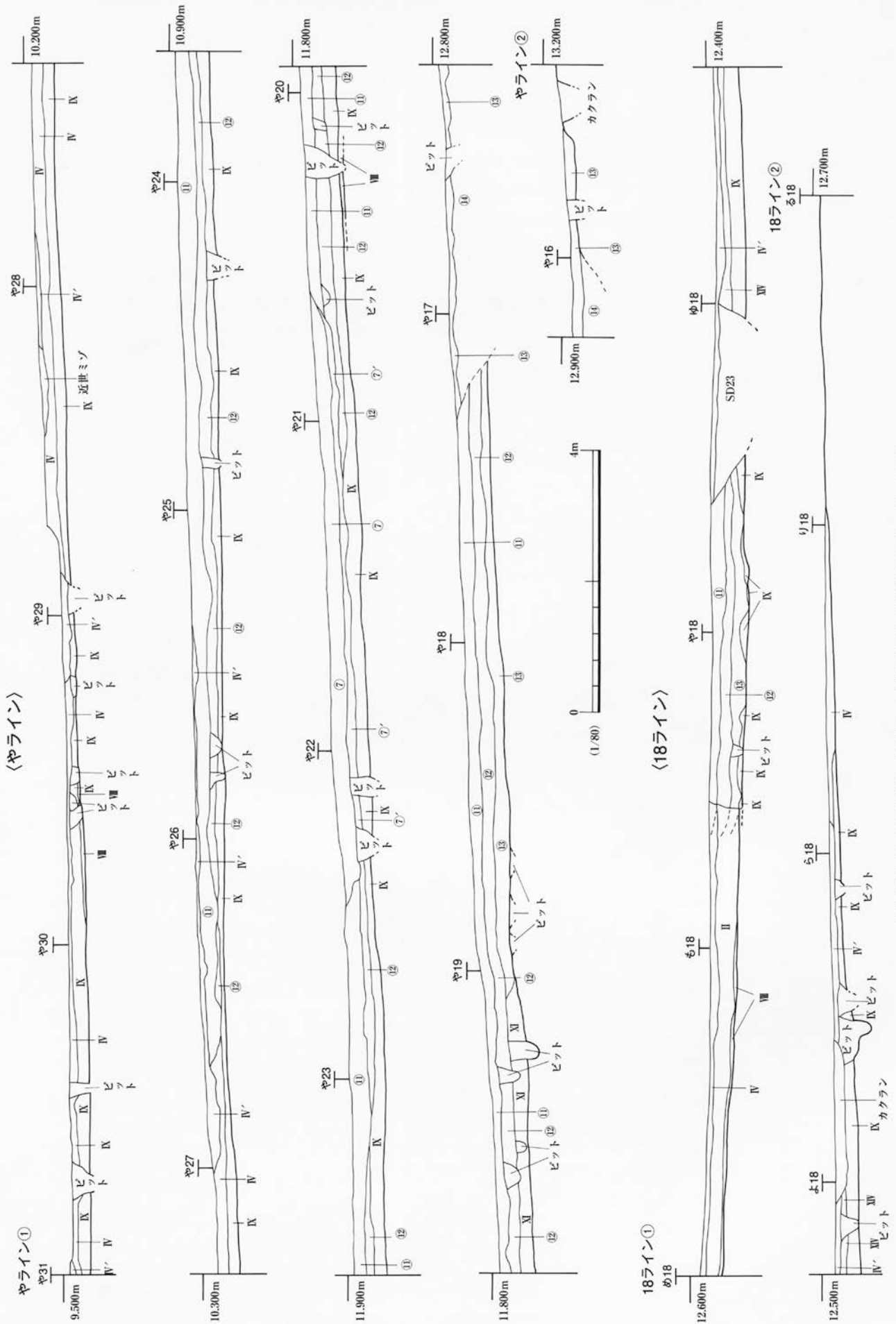
額見町遺跡基本土層註

I層 黒褐色土(10YR2/2): 焼土小塊・黄褐色土粒少量含有。
 II層 黒色土(10YR1.7/1): 黄褐色土粒少量、焼土小塊・炭化粒微量含有。
 III層 黒色土(10YR1.7/1): 黄褐色土粒少量、焼土小塊・炭化粒少量含有。
 IV層 黒褐色土(10YR2/2): 焼土粒・土器片を少量含有する。地山に類する。
 V層 黒褐色土(10YR3/2): 焼土小塊・黄褐色土粒・炭化粒少量含有。
 VI層 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色土粒・焼土小塊・炭化粒・土器片を多目に含有する。堅穴建物の覆土上層の土。
 VII層 黒色土(10YR2/1): 黄褐色土粒・炭化粒・焼土小塊微量含有。
 VIII層 暗褐色土(7.5YR3/4): 極暗褐色土(7.5YR2/3)を多量含有。砂質。
 IX層 黒褐色土(10YR2/2~2/1): 黄褐色土粒多目、炭化粒少量含有。
 X層 黒色土(10YR1.7/1): 土器の混在もなく、地山土の可能性大きい。
 XI層 IX層の酸化土層。地山土の一つ。(※前回報告ではII層となっており、II層からIX層へ訂正。)
 XII層 黒褐色土(7.5YR1.7/1): III層の酸化土層。極暗褐色土(7.5YR2/3)と混在。
 XIII層 黒褐色土(7.5YR2/2): 炭化中塊少量、土器片やや多く混入。
 XIV層 黒褐色土(10YR2/2~2/3): 地山塊混入少量、土器混入多い。締まりあり。
 XV層 黒褐色土(10YR3/2~2/2): 炭化中塊含有。XII層に比べ締まり硬い。
 XVI層 黒褐色土(7.5YR3/1): 黄褐色土中~大塊少量含有。
 XVII層 黒褐色土(7.5YR3/1): 黄褐色土中~大塊少量含有。炭化中塊微量含有。土器包含少ない土層。
 XVIII層 黒褐色土(10YR2/3): 暗褐色土(10YR3/3~3/4)4割混在。黄褐色土大塊・焼土塊・炭化塊多量含有。

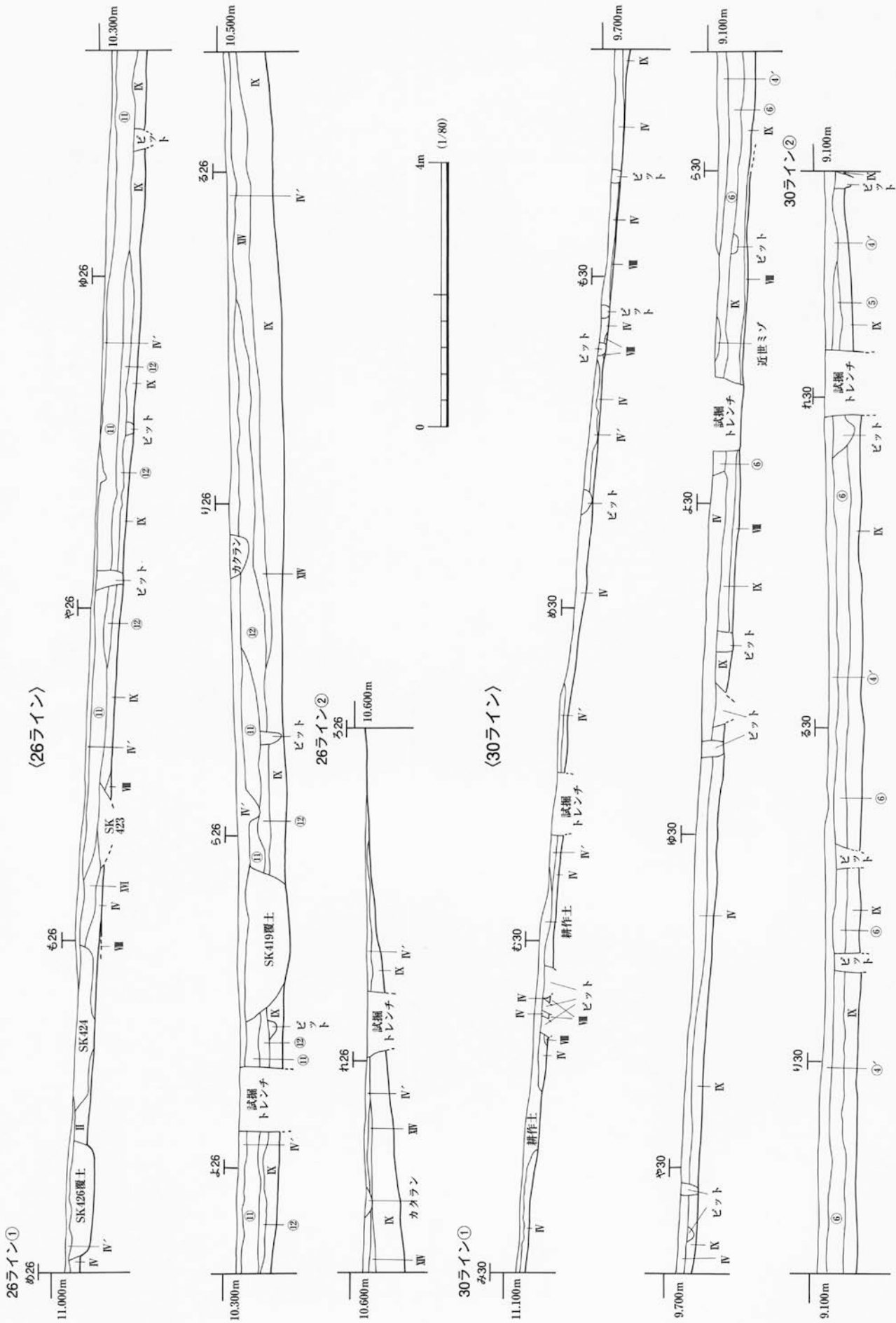
包含層ライン遺構覆土土層註

①層 黒褐色土(10YR2/2): 黒褐色土(10YR3/2)混在。若干砂質帯びる。土器器片を極多量含有。焼土小塊・炭化中塊多量含有。古代末の土器混在。上層土器溜まり層。
 ②層 黒褐色土(10YR2/2): 所々砂質土が混じる。焼土小塊・炭化中塊多量含有。①層より黒く、土器の混在が少ない。土器器片多い。古代と古代末混在。上層土器溜まり層。
 ③層 黒褐色土(10YR2/3): 焼土中塊多め、土器器破片多量含有。(前回報告 SK387 土層)
 ④層 黒褐色土(10YR2/2): 焼土中塊多め、土器器破片多量含有。(前回報告 SK387 土層)
 ⑤層 黒褐色土(10YR3/2~2/2): 炭化中塊含有。砂質土がシミ状に入り、土器含有する層。IV層とⅣ'層の間層。
 ⑥層 黒褐色土(10YR3/2~2/2): 上層土器溜まり層よりも土器の混入少なく、土器溜まりに含めなかった層。土器器片を多量含有。炭化中塊多め含有。黄褐色土小塊・焼土小塊少量含有。
 ⑦層 黒褐色土(10YR2/2): 土器混在は少なく土器器片少量含む程度。炭化中塊・黄褐色土小塊少量含有。
 ⑧層 黒褐色土(7.5YR2/2~10YR2/2): やや砂質帯びる。焼土塊・炭化塊多量含有。8世紀中頃からの遺物を遺物集層。
 ⑨層 黒褐色土(7.5YR2/2): 黒色土(7.5YR2/1)塊4割混在。焼土・炭化・褐色地山の土塊が⑦層より少なく、土器も少ない。
 ⑩層 基本は⑦層と同じだが、比較的遺物少ない。
 ⑪層 黒褐色土(10YR3/2~2/2): 砂質帯びる。炭化中塊少量、黄褐色土小塊少量含有。土器溜まり層最上層の砂質帯びる土。
 ⑫層 黒褐色土(10YR2/2): 焼土小塊多目、黄褐色土多目含有。
 ⑬層 黒褐色土(10YR2/3): 若干砂質帯び褐色味あり。焼土・炭化中塊多目、黄褐色土粒を多量含有。
 ⑭層 黒褐色土(10YR2/2~2/1): 黄褐色土小塊多目、炭化・焼土小塊少量含有。土器含有する。
 ⑮層 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色土小塊・中塊多量、炭化中塊少量含有。やや締まりあり。
 ⑯層 黒褐色砂質土(10YR3/2): 黒褐色土(10YR2/2~3/2)4割が混在。炭化中塊が少量含有。土器片含む。軟質土。SD23の上面土。SD23・I層に對比。
 ⑰層 黒(褐色)土(10YR2/2~2/1): 黄褐色土・炭化中塊少量含有SD23・2層に對比。

第8図 額見町遺跡基本土層断面位置図



第9図 額見町遺跡 H地区・F地区基本土層断面図 1 (1 / 80)



第11図 額見町遺跡H地区・F地区基本土層断面図3 (1/80)

第II章 今回報告区域検出遺構

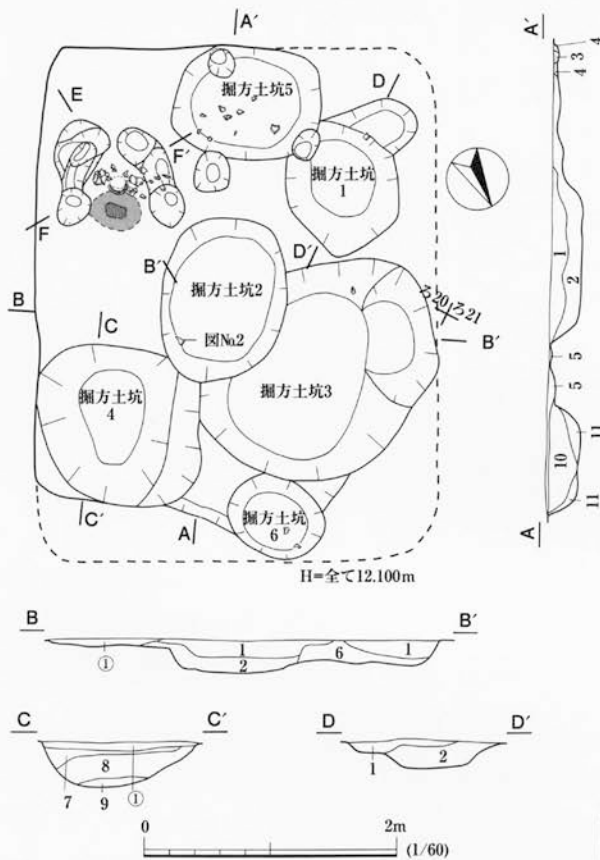
第1節 建物遺構

第1項 竪穴建物

今回区域で報告する竪穴建物は1軒である。H地区南端に位置するものであり、本遺跡A地区からの遺構番号の連番でSI119にあたる。前回までの報告と同様に、規模については、縦長×横長cmで記載し、建物主軸は、カマドを奥に向けた位置を中心として北・南からの角度を表示した。面積においては、竪穴外も建物空間として使用した可能性をもつものがあるが、竪穴の部分のみの面積を示している。面積による建物類型は、特大が55㎡以上、大型が55～39㎡、中型36～25㎡、小型が25㎡以下としてこれまでの報告にしており、これに準ずるものとする。掘方土坑の位置づけも前回までの報告に準じた。竪穴建物の出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

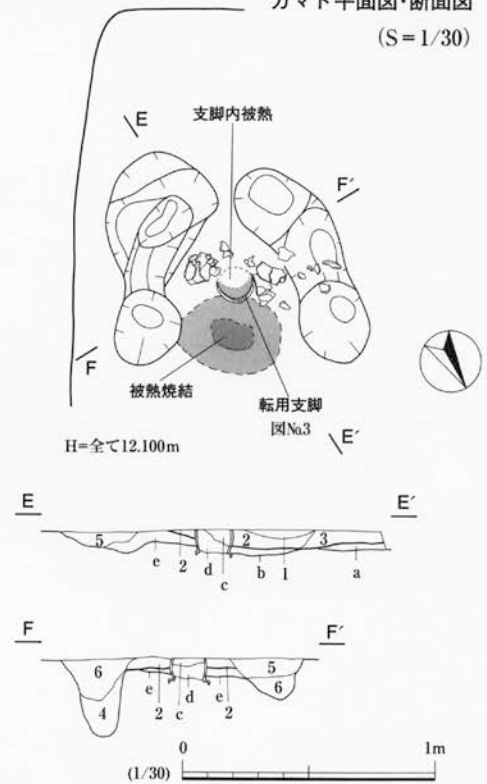
〈SI119〉

平面図(掘方)・断面図 (S=1/60)



カマド平面図・断面図

(S=1/30)



SI119 覆土・掘方土層註

①層 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色土の中塊多め含有。炭化中塊少量含有。覆土。
 1層 黒褐色土(10YR2/2): 黒色土中塊多め、黄褐色土中塊多量、焼土中塊多め含有。黄褐色硬化粘土塊が上面に混じる。點状土。部分的に硬化面もつ。
 2層 黒褐色土(10YR3/2): にぶい黄褐色土(10YR4/3)と5割率で混在。黒色土中塊、焼土中塊少量含有。黄褐色中塊多め含有。
 3層 黒褐色土(10YR2/2): 褐色(7.5YR4/4)硬化粘土の中塊多量含有。締まりあり。
 4層 褐色(7.5YR4/4): 硬化粘土中に、にぶい黄褐色土(10YR4/3)が混在。締まりあり。硬化。
 5層 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色土粒種多量含有。やや砂質帯びる。黄褐色土が砂質系の土。炭化中塊、焼土小塊多め含有。
 6層 にぶい黄褐色土(10YR4/3): 黄褐色土中塊多量(4割)含有。炭化中塊・黒色土中塊少量含有。
 7層 にぶい黄褐色土(10YR4/3): 黄褐色土(10YR5/6)7割との混在土。炭化・黒色土中塊少量含有。
 8層 黒褐色土(10YR3/2): にぶい黄褐色土(10YR4/3)4割、黒色土中塊2割、黄褐色土中塊1割との混在土。やや締まりあり。
 9層 にぶい黄褐色土(10YR4/3): 黄褐色土(10YR5/6)3割、黒色土2割の混在土。
 10層 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色土小塊・中塊多め含有。焼土中塊・炭化中塊少量含有。軟質。
 11層 黒褐色土(10YR3/2): 黄褐色土小塊多量含有。焼土中塊・炭化中塊少量含有。

SI119 カマド覆土・掘方土層註

カマド覆土 土層註
 1層 暗褐色土(10YR3/3): 砂質褐色土(7.5YR4/3)小塊多量(3割)含有。焼土小塊多量含有。カマド内覆土。焼土が混じるカマドソデか?
 2層 黒褐色土(7.5YR3/2): 焼土中塊多量含有。褐色土(7.5YR4/3)小塊多量含有。炭化中塊少量含有。カマド内覆土。焼土が混じるカマドソデか?
 3層 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色土の中塊多め含有。炭化中塊少量含有。建物覆土①層と同層。
 4層 にぶい黄褐色土(10YR4/3): 黄褐色土小塊多め含有。締まり欠く土。ソデ石抜き取り穴の土。
 5層 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色土小塊多め含有。焼土小塊少量含有。締まりやや欠く。
 6層 にぶい黄褐色土(10YR4/3): 黄褐色土小塊多量(2割)含有。焼土中塊多量含有。締まりあり。ソデ石抜き取り穴に詰められた土。

カマド掘方土 土層註
 a層 褐色土(7.5YR4/6): 硬化粘土ブロック層。締まり強く硬化強。にぶい黄褐色土が混在する。建物床(地山硬化床)。
 b層 赤褐色被熱床(5YR4/6): 1層が被熱して焼土化。カマド被熱床面。
 c層 赤褐色被熱土(5YR4/8): カマド支脚に付いた小釜内に詰められた黄褐色土が被熱して焼土化。被熱床側のみが焼土化している。4層土の焼土化したもの。焼けは2層より強い?
 d層 褐色土(7.5YR4/4): カマド支脚内に詰められた土。地山土に近い土。
 e層 にぶい黄褐色土(10YR4/3): 黄褐色土中塊・小塊多量含有。焼土中塊・炭化中塊少量含有。被熱しているカマド貼土。

第12図 竪穴建物遺構図〈SI119〉

1. SI119

〈立地・規模・形態〉 H地区南端、れ・ろ20Gr、当遺跡の最南端に位置する建物で、孤立して立地する。上層削平されている区域にあたり、覆土は極一部で検出されているものの、削平は著しく、床面までも削平を受けている。カマド周辺に残る床面のラインと、掘方土坑の端を建物規模として想定すれば、410（残存380）cm×320cm、推定面積15.58㎡の小型建物で、プランは方形状になるものと思われる。内外に柱穴はなく、南端にカマドが造り付けられており、カマド底部が低かったために辛うじて残存する状態である。建物主軸はN-152°-W。

〈カマド〉 カマドは、ソデ端に設置されていたと思われるカマド石の抜き取り穴と、ソデ土も基底部から除去したと考えられる穴状の痕跡と床面が検出されている。焚口被熱や抜き取り痕跡の位置から、当カマドは、南端寄りの壁と直行して焚口が位置するもので、壁から離れていたものと思われる。カマド規模は、推定縦80～90cm、推定幅90cmになるものと考えられ、焚口幅は内寸50cm、ソデ厚は推定で20cm以下と思われる。支脚には径15cm程の小型釜を逆位置に据え転用しており、焚口床被熱は顕著で、支脚にも被熱が及んでいる。支脚内部に埋め込まれた土も、手前側のみ被熱している。床面は、焚口から支脚までは床傾斜2°とほぼ平坦であり、支脚より奥の床は傾斜角10～13°となる。床面の構築土は、建物床構築土と同様のものである。なお、カマドは建物床レベルよりも5～6cm下がる。建物床自身が削平されているため、本来はかなり下がった位置に焚口が設けられたと考えられる。

〈掘方と出土遺物〉 貼床は、上面削平された状態で部分的に残存し、黒褐色土に黄褐色粘土塊を多量に混在させた土を貼ったと考えられる。部分的に掘方土坑土も床として使用した可能性が高く、掘方土坑は、やや規模の大きな掘方土坑3に接して合計6基が連なって位置している。カマド支脚に転用された小型釜はIV1～IV2古期、掘方土坑内から出土する坏蓋や盤BもIV1～IV2期を示すことから、当建物の時期も同様と思われる。なお、出土遺物は総数で、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具97点である。

第2項 掘立柱建物

掘立柱建物は殆どの建物がH地区から検出され、遺構番号は、本遺跡全体で通し番号を付しており、今回対象となる掘立柱建物は、SB214～215・218・243・303～320・326～334の総数31棟である。前回までの報告では、本遺跡の遺構は、近代削平により、標高の高い部分が削平を受け遺構が消失する状況が多かったが、今回報告区域の掘立柱建物は、11.000mの標高ライン内に収まる形をとり、思いの外削平を免れていたと思われる。

今回報告区域から検出された掘立柱建物の基部構造をみると、側柱建物、古代末頃から登場して中世へと繋がってゆく大型の総柱建物、あるいは床束建物と言ってもいいのかもしれないが、低床構造である総柱建物が検出されている。また、2間×2間のしっかりとした柱穴と規模をもつ棟持柱建物が検出されており、構造的にも特異な事例と考えられ、前回報告では「社的建物」として位置付け（望月精司2009「額見町遺跡の古代「村寺」に関する考察」『額見町遺跡IV』石川県小松市教育委員会）しているものである。

これら建物の検出数は、古代側柱建物が14棟、棟持柱建物1棟、中世建物である低床の総柱建物が16棟である。前回区域に比べ、側柱建物が減り、古代の高床総柱建物は見られなくなった。さらに低床タイプの総柱建物が格段に増加していると言える。ここで、触れておくべきことがある。低床構造の建物の特徴として、柱が細いこと、柱穴規模の小さいものが多いが、柱間規模が大きなことが挙げられる。このような構造のものの中世遺物が出土する例が多く、似た構造であるのに古代遺物しか出土しないものも見られる。もちろん、出土遺物も重要な判断基準と言えるが、このような建物に対しては、古代の建物とするのではなく、中世建物として判断した。

文中表記では、長軸側を桁、短軸側を梁として、桁行×梁行として表示する。建物主軸については、桁行を主軸と設定して、北からの角度を表示した。但し横向きに配置するものに関しては考えられる主軸を提示した。掘立柱建物の各名称は、奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡 I 遺構編』を参考にした。出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、古代遺物の時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。中世遺物としたものは、本遺跡の古代以外の終焉時期までのものを示しており、これは中世I-I期～中世I-II2期（11世紀2/4期前後から1110～1150年頃）にあたるもので、詳細は遺物観察表凡例《南加賀地域古代土器編年軸と歴年代観》に掲載されている。なお、出土遺物破片数について、中世遺物の破片数が突出した数値を示すものについて記述しておく。今回報告区は、上層中世遺物がまとまっている区域でもあり多量混入があったもの

と考えており、また、中世遺物は古代遺物に比べ極細片が殆どであることから、突出した数値を示したと考えている。

1. SB214

む 26Gr で、標高の高い側の柱穴 7 本のみが検出された建物である。柱穴規模も小さく浅いため、本当に建物であったのか疑問も残るが、側柱建物として報告する。残存 2 間×残存 3 間、桁行・梁行とも残存で 2.4 m を測る。主軸は N-15° -E、柱穴は円形・不整円形プランを呈し、断面形状は柱部分のみが下がって段掘りとなるものが多い。柱穴規模は、径 24～44 cm、深さは 16～28 cm、基本的に旧地表に添った深さをもつものの、深さ自体は一定ではない。柱間寸法は、桁間 104～132 cm、梁間 72～88 cm を測り、寸法は極めて小規模、柱筋の通りは概ね良い。建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物はないが、構造的に古代建物と判断される。

2. SB215

む・め - 26・27Gr に位置し、桁行・梁行が直行しない、南側が出っ張る形状のひしゃげた側柱建物である。建物規模は、桁行 6.2～6.8 m、梁行 4.12～4.88 m の 3 間×2 (3) 間で、面積は 29.25 m² を測る。柱間寸法は、桁間 132～260 cm、梁間 108～268 cm、寸法を同じにもつ柱間はない。柱穴プランは、円形、不整楕円形、楕円形と様々で、径は 30 cm を主体に 24～64 cm、深さは 20～36 cm で、基本的に旧地表に添うものの、一定値ではない。掘方断面形状は、柱位置を深くする段掘りが多い。柱筋の通りは悪く、廃絶時に柱は抜き取られているが、方向はランダムである。径 10 cm 程の柱圧痕が残存、全体の形状や規模から簡易な様相が否めない。建物主軸は N-25° -E。出土遺物はないものの、形状から古代のものとして判断される。

3. SB218

む 37Gr で、桁行と思われる 1 本だけの柱の並びが検出されたものである。残存 3 間分で 4.12 m を測り、柱間寸法は 120～160 cm、主軸は N-39° -W。プランは円を呈し、径は 28～36 cm、深さ 20～32 cm を測る。柱筋は良く、廃絶時に柱は抜き取られ、抜き取り方向は東側である。出土遺物はないが、古代建物の形状を示している。

4. SB243

み・む - 30・31Gr に位置する、低床の総柱建物である。規模は、桁行 5.2～5.8 m、梁行 4.8～5.2 m、2 間×2 間、建物面積 27.5 m² を測る。西側の柱穴配置、特に P7 が大きく飛び出す形で配置されることにより、歪な形状をなしている。建物主軸は N-1° -W。柱間寸法は、桁間 224～352 cm、梁間 196～272 cm を測る。柱穴掘方プランは、円形、長方形を呈し、柱穴規模は径 45 cm を主体に 28～64 cm を測り、深さは 44 cm で旧地表に良好に添い、四隅が深めとなる。柱圧痕が検出されており、径は 7～16 cm、11・12 cm が主体である。柱筋の通りは悪く、掘方には P1 や P7 のように斜め配置をとるものが確認できる。建物廃絶時に柱は抜き取られており、方向は外側である。出土遺物は、須恵器食膳具 3 点、須恵器貯蔵具 5 点、土師器煮炊具 5 点と古代のものしか出土していないのだが、構造的には中世建物と判断される。

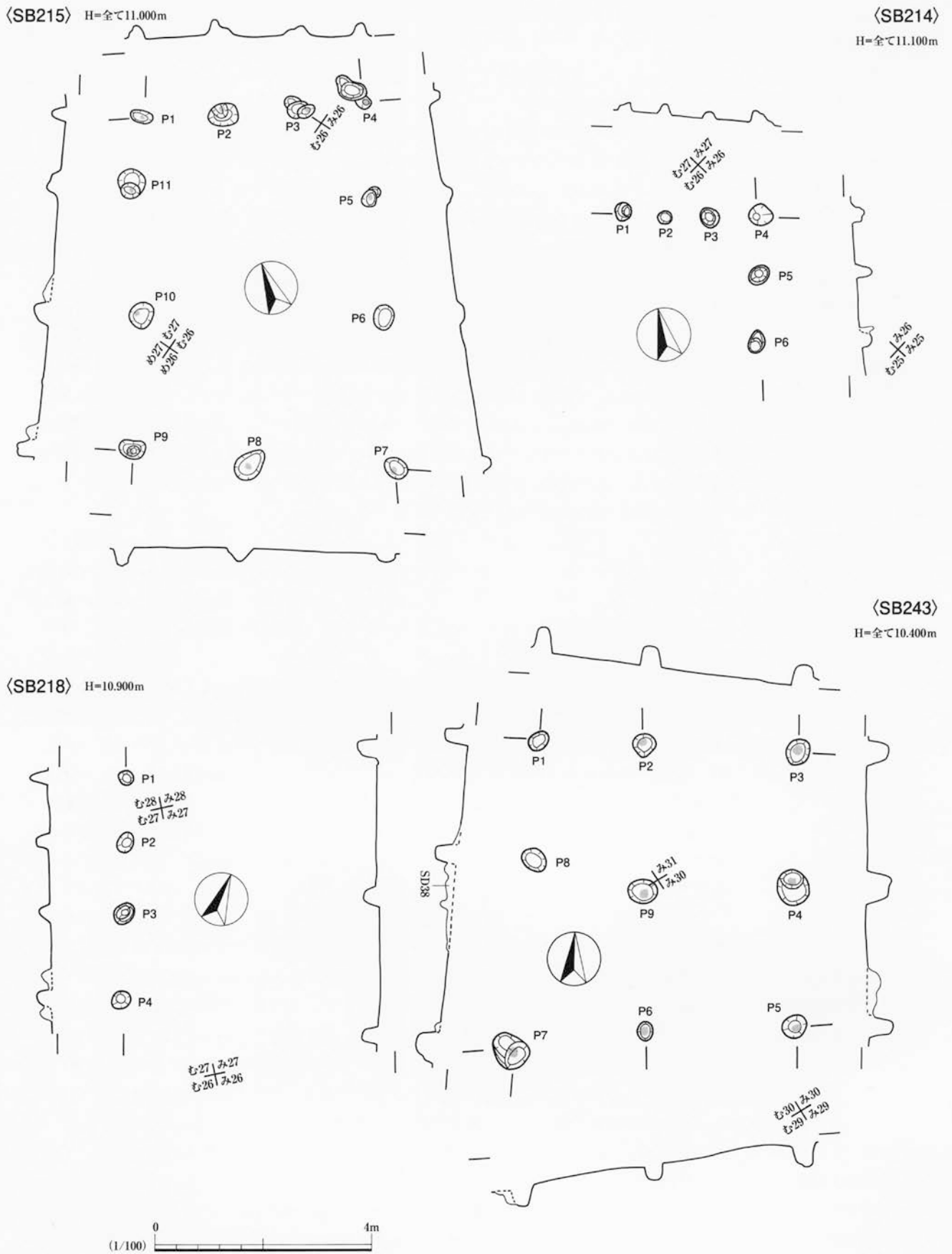
5. SB303

よ・ら - 31・32Gr に位置する。規模が桁行 6.92～7.08 m、梁行 4.8～4.96 m、3 間×2 間、建物面積 34.16 m² を測る側柱建物である。P4 が飛び出して配置するため、若干歪な建物プランとなる。建物主軸は N-6° -E。柱間寸法は、桁間 208～248 cm、梁間 224～256 cm を測る。柱穴掘方プランは円形、断面形状は段掘りを呈し、柱穴規模は径 52 cm を主体に 40～88 cm を測り、深さは 40～60 cm、P5 が最も浅く 22 cm を測る。深さは基本的に旧地表に添い、隅柱を深めにもつ。柱圧痕が残存しており、この径が 10～15 cm であった。また、覆土では‘柱のあたり’が P8 のみ認められ、この径は 20 cm。柱筋の通りは、建物がひしゃげているものの良好で、廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総破片数は、須恵器食膳具 4 点、須恵器貯蔵具 7 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 2 点、中世土師器食膳 27 点、灰釉陶器 1 点であり、時期はⅣ 2 新～Ⅴ 期と判断される。

6. SB304

ら・り - 30・31Gr に位置、建物規模が桁行 8.08～8.52 m、梁行 5.4～5.6 m の 4 間×2 間、建物面積 45.65 m² を測り、主軸は N-10° -E、P1 がずれて配置されていることから全体的にひしゃげた形状の側柱建物である。桁行・梁行が直行するのは P7 位置のみである。柱間寸法は、桁間 132～264 cm、梁間 248～292 cm を測り、掘方柱穴プランは円形、柱位置のみ底面が若干深くなるものも見られる。柱穴規模は、径 36～48 cm、最小で 28 cm であ

第1節 建物遺構



第13図 掘立柱建物遺構図1 (SB214・SB215・SB218・SB243)

り、深さは24～40 cmで、基本的に旧地表に添いながら、中柱の深いもの浅いものが認められる。柱圧痕が残存しており、径は10～15 cm。なお建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されたとみられる。柱筋の通りは、東桁行・北梁行が良く、西桁行・南梁行が悪い。SJ69、SJ71が当建物内に収まる形で位置するものの、掘立柱建物検出レベルよりも30 cm以上高位であり、関連性がないものと判断される。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具6点、土師器煮炊具4点、中世土師器食膳具42点、石製品1点である。時期は中世とされるところだが、極細片で信憑性に欠けるとともに建物形状は古代であり、この古代遺物の時期はV期前後である。

7. SB305

ら・り・る-30・31Grに位置する側柱建物である。P7にて桁行・梁行が直行しないために、やや台形状の建物プランとなる。規模は、桁行8.68～9.2 m、梁行5.6 mの4間×2間で、面積50.06 m²、建物主軸はN-13° -Eをとる。柱間寸法は、桁間180～272 cm、梁間232～328 cm、柱穴掘方プランは円形・方形状を呈し、断面形状は柱部分が一段下がる状態で段掘りを呈する。柱穴規模は径40～52 cm主体に最小30 cm、深さは32～40 cmを主体に、浅いもので24 cmを測る。深さは、基本的に旧地表に添っている。柱圧痕が検出されているが、径が8 cm前後であるため、部分的に残存したものだろうと判断する。柱筋の通りは良く、掘方配置に関してはP11やP7の方形状プランが斜め配置されている。建物廃絶時に柱は抜き取られており、SB305内に収まるように位置するSJ69は検出レベルが30 cm以上も上位であり、当建物には伴わないものと思われる。出土遺物は総破片数で、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具5点である。中世土師器食膳具の極細片70点が出土するものの混入品である。時期はIV～V期になるものと判断される。

8. SB306

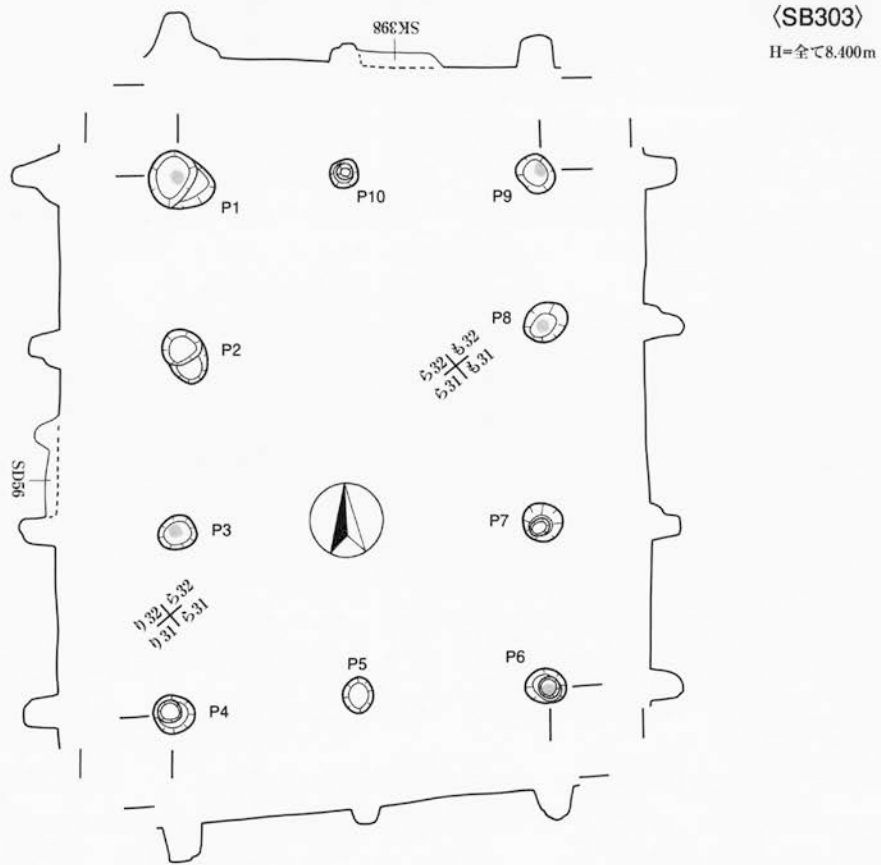
り・る-30・31Grに位置する、3間×2間、低床の総柱建物である。柱穴規模は、古代の様相を伴って大きくしっかりしているものの、柱間寸法が大きく、中央に位置する柱が認められることもあり古代末以降の低床総柱建物とした。建物規模は、桁行7.64 m、梁行5.4 m、建物面積42.78 m²。主軸はN-10° -E、柱間寸法は、桁間240～272 cm、梁間280 cmである。柱穴掘方プランは、円形・方形状を呈し、掘方断面形状は柱部分が下がる段掘りを呈す。柱穴規模は、径52～88 cm、深さ40～44 cmが主体となり、28～50 cmを測る。深さは基本として旧地表に添うが、P10のみ浅い。なお、P11の深さは27 cm、P12の深さは24 cmを測る。柱圧痕が残存しており、径は10～20 cmである。柱筋の通りは、桁行・梁行とも良く、掘方の配置ではP1が北側へ出る形状、P6は南側へ出る形状で不整楕円形を呈す。柱は廃絶時に抜き取られているが、抜き取り方向はランダムであった。また、重複するSJ72鍛冶炉は、検出レベルが40 cm以上も上位となるため、関連性はないものと思われる。出土遺物総数は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具27点、中世土師器食膳具122点、白磁片1点、石製品3点が出土する。時期は中世1 - I期と判断される。

9. SB307

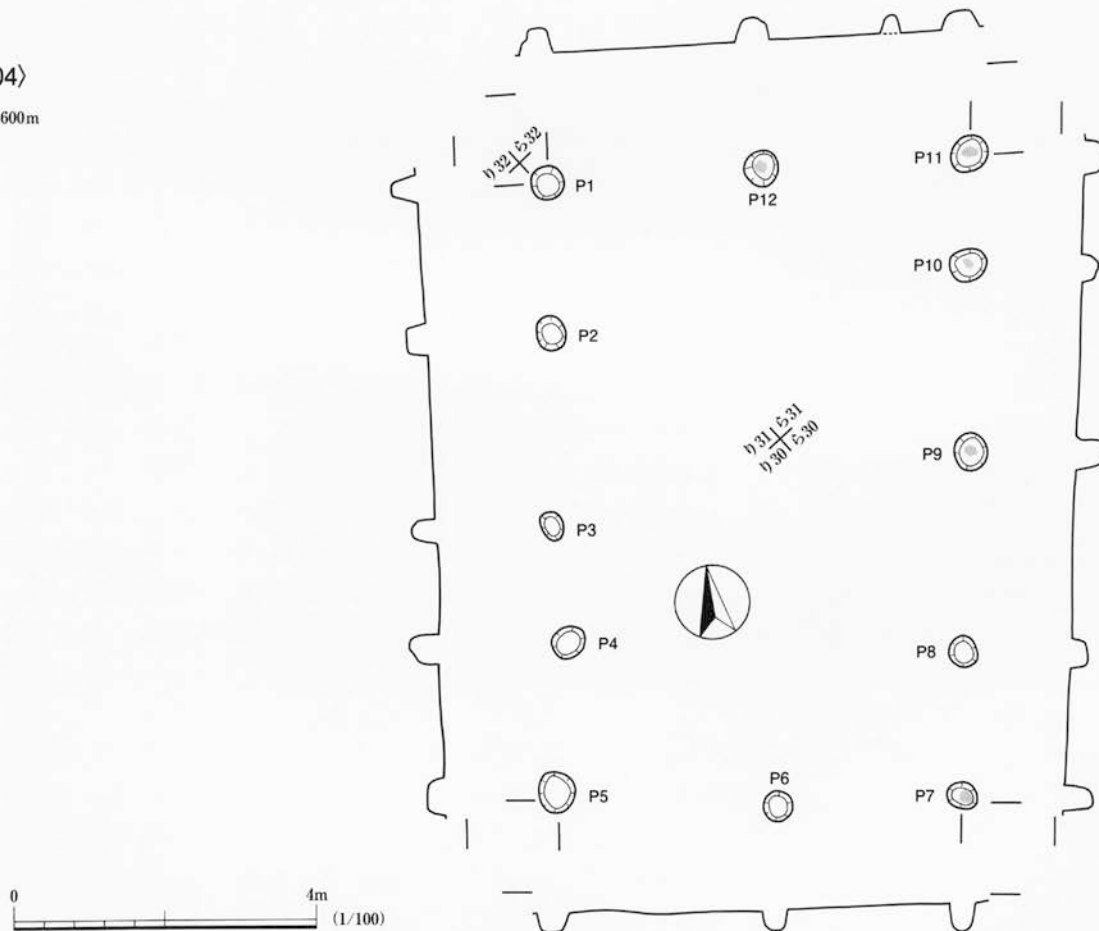
り・る-29・30Grに位置する、規模が桁行5.0 m梁行4.8 m、2間×2間の低床総柱建物である。面積24.0 m²、建物主軸はN-12° -E。柱間寸法は、桁間240・260 cm、梁間240 cm、掘方プランは円形・方形・楕円形を呈し、掘方断面形状は柱部分が下がる段掘りとなる。柱穴規模は、径60～72 cm主体で、最小36 cmとP1～P3の径は小さいのだが削平影響によるものだろう。深さは40～44 cmが主体で最小26 cmを測り、旧地形に添いながら、全てにおいて中柱の方が深くなっている。なお中央P5の深さは36 cmである。柱筋の通りは、桁行は良好で、梁行はP8がずれているため悪い。ピットプランに方形が認められるものの、縄張りされたとは言えない。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、中世土師器食膳具16点であり、時期は中世1期とされる。

10. SB308

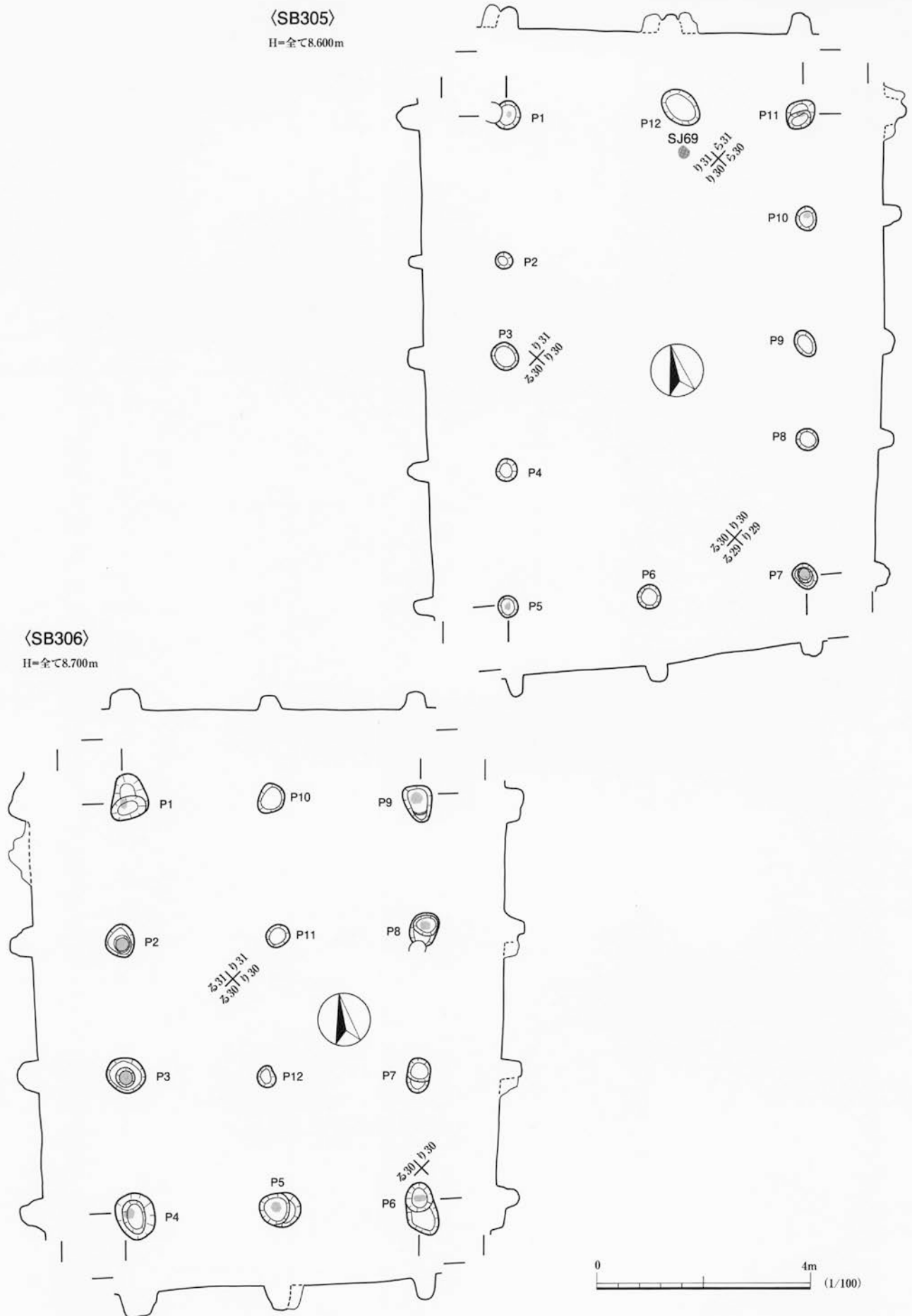
ら・り・る-25・26、り24Grに位置する、低床の総柱建物である。建物規模が、桁行11.72 m、梁行10.52 m、4間×4間で面積123.29 m²、建物主軸はN-10° -E。柱間寸法は、桁間252～320 cm、梁間240～280 cmで、柱穴プランは円形・方形・楕円形を呈して、規模は、径52～60 cmを主体に42～88 cm、深さ40～52 cmを測る。深さについては、南北軸に対して顕著な旧地形に添う深さを持ち、柱筋の通りは概ね良好である。なお、廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は総数で、須恵器貯蔵具13点、土師器煮炊具34点、中世土師器食膳具223点、石製品2点、白磁片1点が出土しており、時期は中世1 - I期を示す。



〈SB304〉
H=全て8.600m

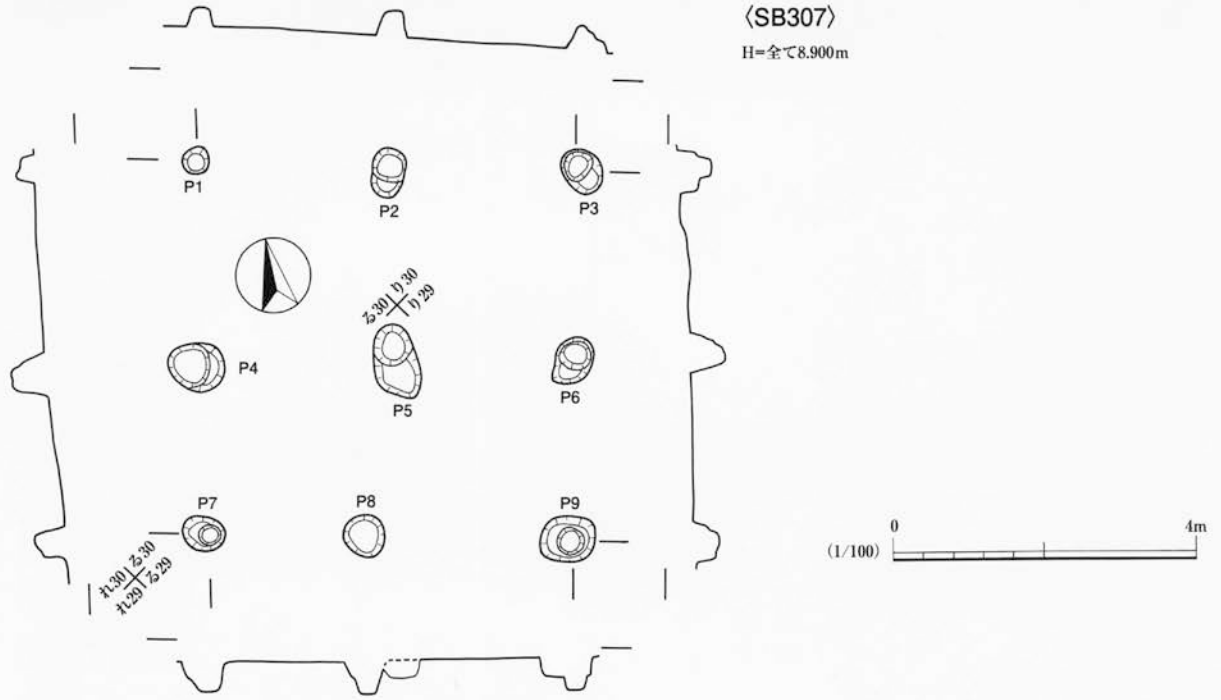


第14図 掘立柱建物遺構図2 〈SB303・SB304〉

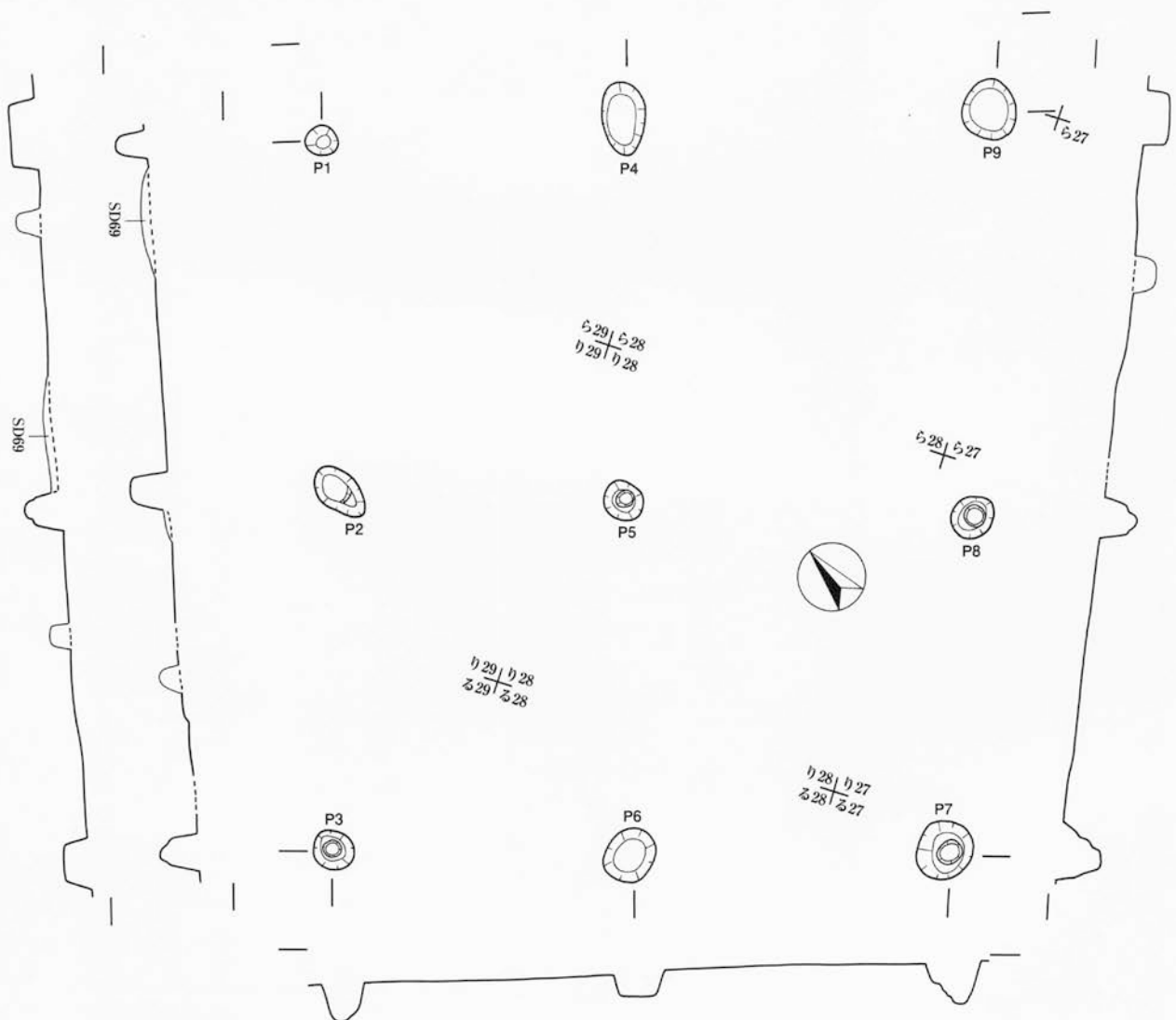


第15図 掘立柱建物遺構図3 〈SB305・SB306〉

第1節 建物遺構



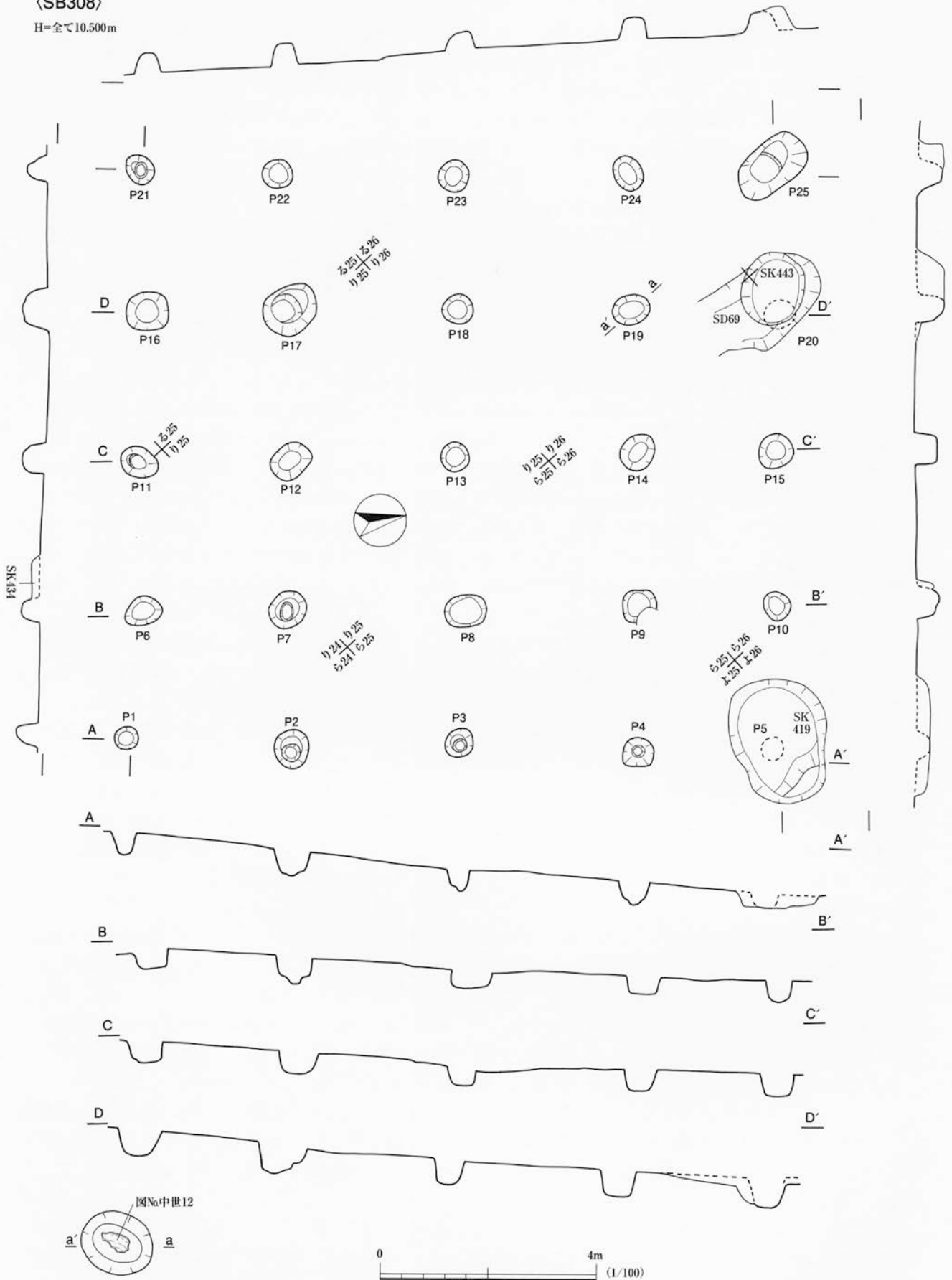
〈SB309〉
H=全て10.600m



第16図 掘立柱建物遺構図4 〈SB307・SB309〉

〈SB308〉

H=全て10.500m



第17図 掘立柱建物遺構図5 〈SB308〉

11. SB309

ら 25、り・る - 25・26Gr に位置。建物規模は、桁行 10.6 m、梁行 8.8 m、建物面積 93.28 m²。柱間寸法は、桁間 480～580 cm、梁間 420～520 cm。2 間×2 間の低床の総柱建物と現地調査で判断したものの、柱間寸法が大き過ぎることや、桁間・梁間が何れも直行せず、建物として成立するのか懸念を抱いているところである。ただ、挿図上に薄く示したように、柱間に小ピットが確認でき、4 間×4 間である可能性もたれる。掘方柱穴プランは円形・不整楕円形を呈し、規模は、径 56～84 cm、最小径で P1 の 46 cm、深さ 40～60 cm を測って、基本的に旧地表に添うものの、中柱に深いものも認められる。歪な建物の割に、しっかりと掘り込まれた良好な柱穴をもつ。柱筋の通りは良く、径 6～10 cm の柱圧痕が残存し、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具 2 点、須恵器貯蔵具 2 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 5 点と古代遺物のみが出土するが、建物形状から中世建物と判断するのが妥当であり、古代遺物は混入品になるのだろう。建物主軸は N-40° -E。

12. SB310

ゆ 26・27、よ 26～28、ら 25～27Gr に位置する、低床の総柱建物である。建物規模は、桁行 12.2 m、梁行 8.2 m の 5 間×3 間、建物面積 100 m² を測り、主軸は N-20° -E。柱間寸法は、桁間 216～280 cm、梁間 248～300 cm、柱穴掘方プランは円形・不整楕円形・楕円形を呈し、規模は径 52 cm 主体に 44～72 cm、深さは 36～80 cm で基本的に旧地表に添いながらも、浅いもの深いものが認められる。径 10～20 cm を測る柱圧痕が残存し、柱は建物廃絶時に抜き取られて埋め戻されている。なお、埋土の上層に石が埋められ、石の混入が認められるのは P3・4・6・9～11・16・17・19～21 で、最大 20 cm 四方の不整形を呈す。柱筋の通りは悪く、当建物内では、多くの炉状遺構や鍛冶炉が重複するものの、この建物の検出レベルと似たような検出レベルをもつものは SJ67 のみである。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 21 点、須恵器貯蔵具 17 点、土師器食膳具 4 点、土師器煮炊具 59 点、中世土師器食膳具 246 点である。この他、ミニチュア土器・カマド型の土師特殊品 2 点、須恵質の馬形が 1 点、水晶や瑪瑙を含む石製品が 18 点、白磁片 1 点が出土する。時期は、中世 I - II 1 期とされる。

13. SB311

よ・ら - 26・27Gr に位置する。建物規模が、桁行 7.2 m、梁行 4.4～4.88 m の 4 間×3 間、P1 が飛び出すように配置するため建物全体が台形状となる側柱建物である。面積は 33.41 m²、主軸は N-25° -E、柱穴は円形・長方形・楕円形を呈し、径 48 cm を主体に 38～64 cm を測り、深さは 32～48 cm で、C ラインのみ深さが揃うものの、他は様々な深さをもつ。柱間寸法は、桁間 136～212 cm、梁間 128～160 cm で、寸法を同じにする箇所はない。これら値のばらつきから簡易で建物設置時の無計画さが窺えるのだが、柱穴はしっかりと掘り込まれている。柱圧痕が 2 本のみ残存、この径は 18 cm・20 cm を測る。柱筋の通りは悪く、建物廃絶時に柱は抜き取られている。重複する炉状遺構の SJ65 は、当建物検出レベルから上位 10 cm 以内で検出されており、関連性が窺える。出土遺物は総破片数で、須恵器食膳具 4 点、須恵器貯蔵具 4 点、土師器煮炊具 3 点、土師器食膳具 2 点、中世土師器食膳具 45 点である。中世遺物は極細片で信憑性が低く、時期は古代 IV 期頃になるものと判断される。

14. SB312

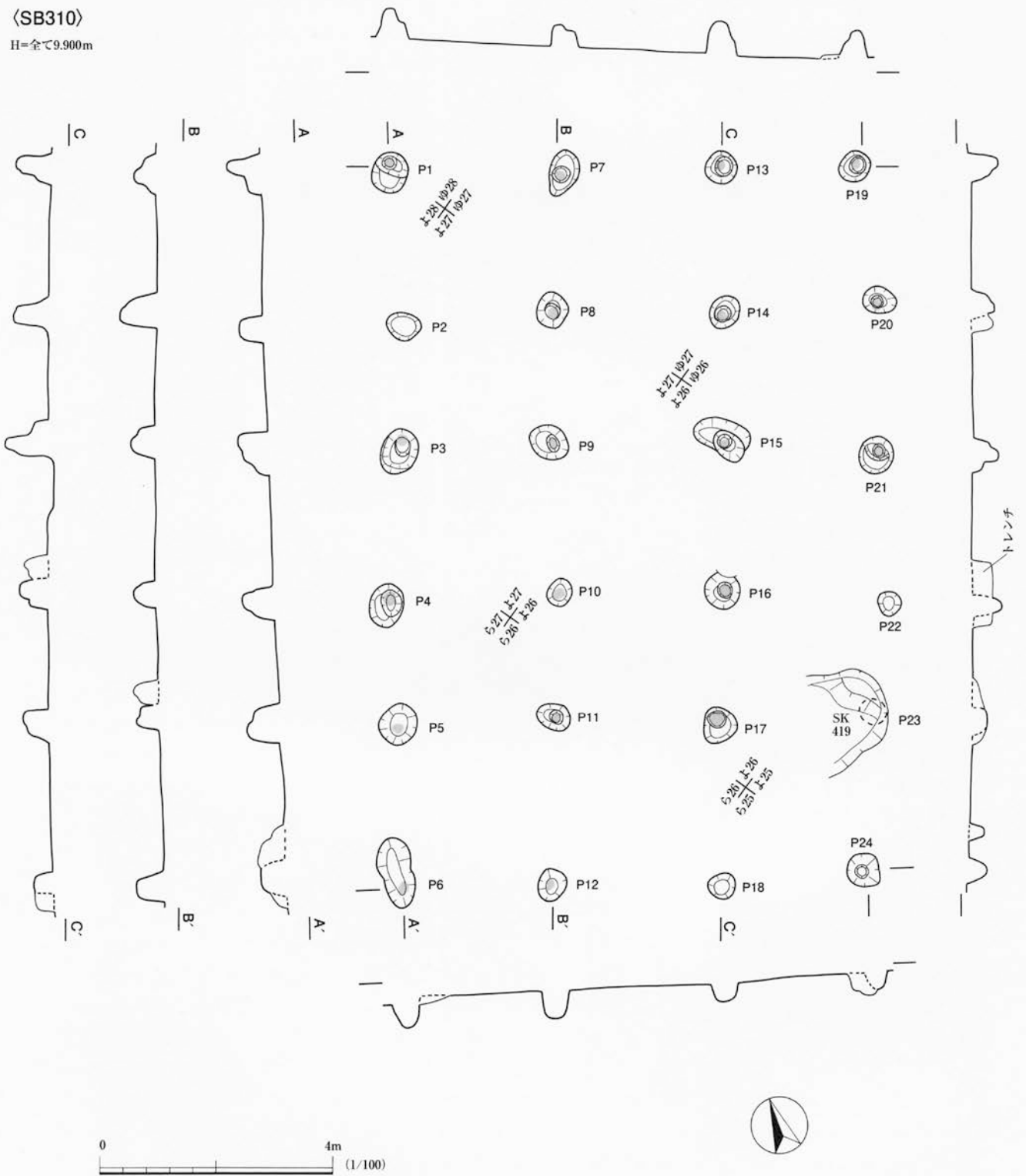
ゆ・よ - 27・28Gr に位置する、低床の総柱建物で、北梁行が直行しない台形状プランを呈するものである。建物規模は、桁行 8.2～9.32 m、梁行 6.28 m の 2 間×2 間で、柱間寸法は桁間 328～488 cm、桁間 300～320 cm を測る。P1 や P9 が飛び出して配置、建物プランの歪さ、桁行の柱間寸法が大き過ぎるといったことから、果たして建物として成立したのか疑問を払拭できないものの、現地調査で良好な柱穴と柱圧痕が検出された。建物主軸は N-17° -E、建物面積は 44.87 m²。柱穴掘方プランは円形・不整形・楕円形を呈し、断面形状は柱位置が一段下がるか窪むものが多い。柱穴規模は、径 52 cm 主体に 40～70 cm、深さは 28～56 cm を測る。深さについては、基本的に四隅が深いタイプだが、中柱 P5 のみで深い。柱筋の通りは悪く、残存する柱圧痕は 6～14 cm を測り、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具 3 点、須恵器貯蔵具 2 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 6 点、中世土師器食膳具 14 点で、時期は総じて中世 I - II 1 期と判断される。

15. SB313

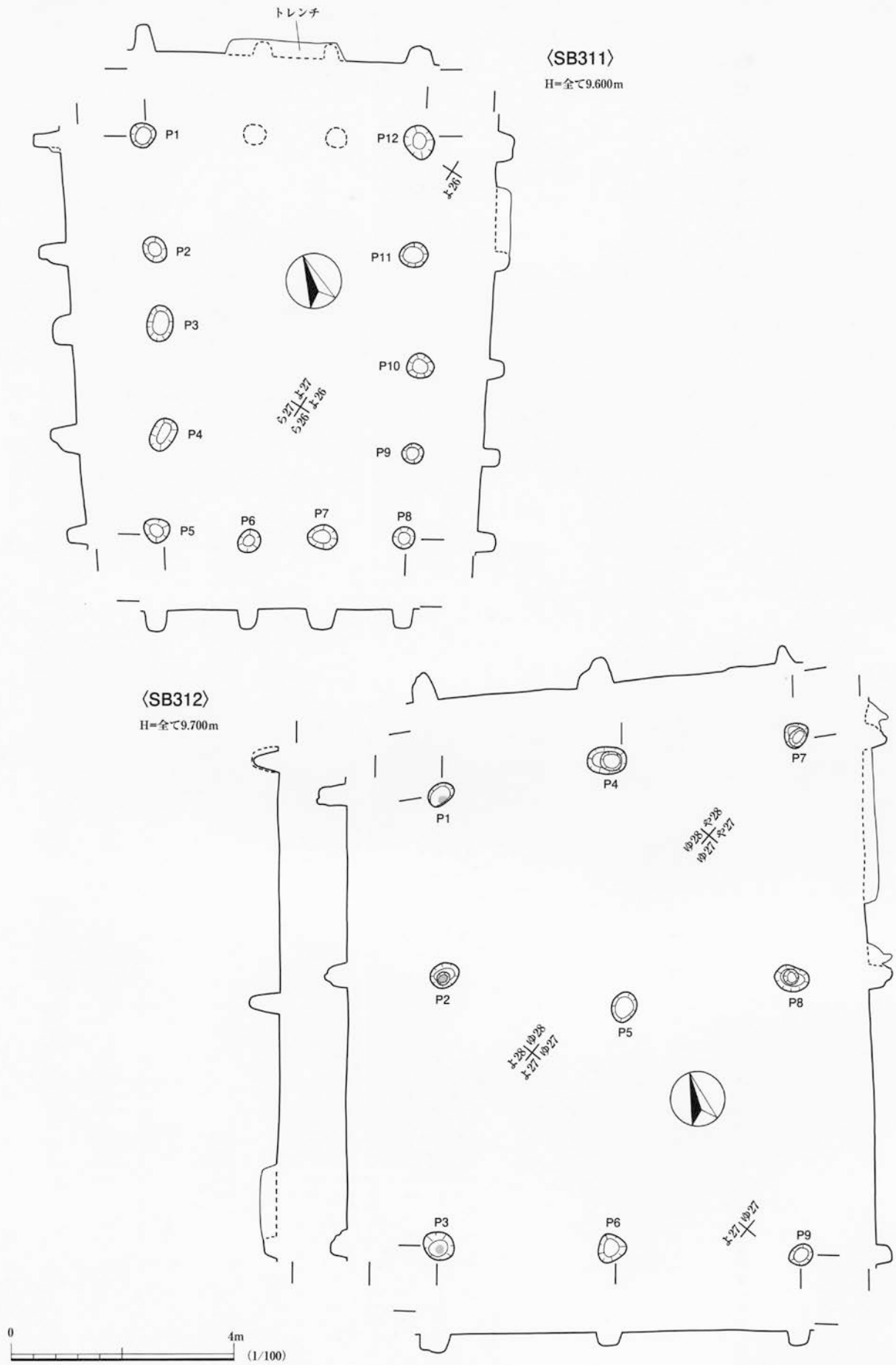
や 27Gr 主体に、や 26～28Gr に位置する、建物規模が桁行 5.88～6.4 m、梁行 5.6～6.8 m、建物面積 38.07 m²、2 間×2 間の低床の総柱建物である。建物主軸 N-32° -E。柱間寸法は、桁間 284～340 cm、梁間 272～388 cm、桁行・梁行の何れも直行する箇所がない歪な建物である。柱穴は円形・方形・不整形で、断面形状は柱部分

〈SB310〉

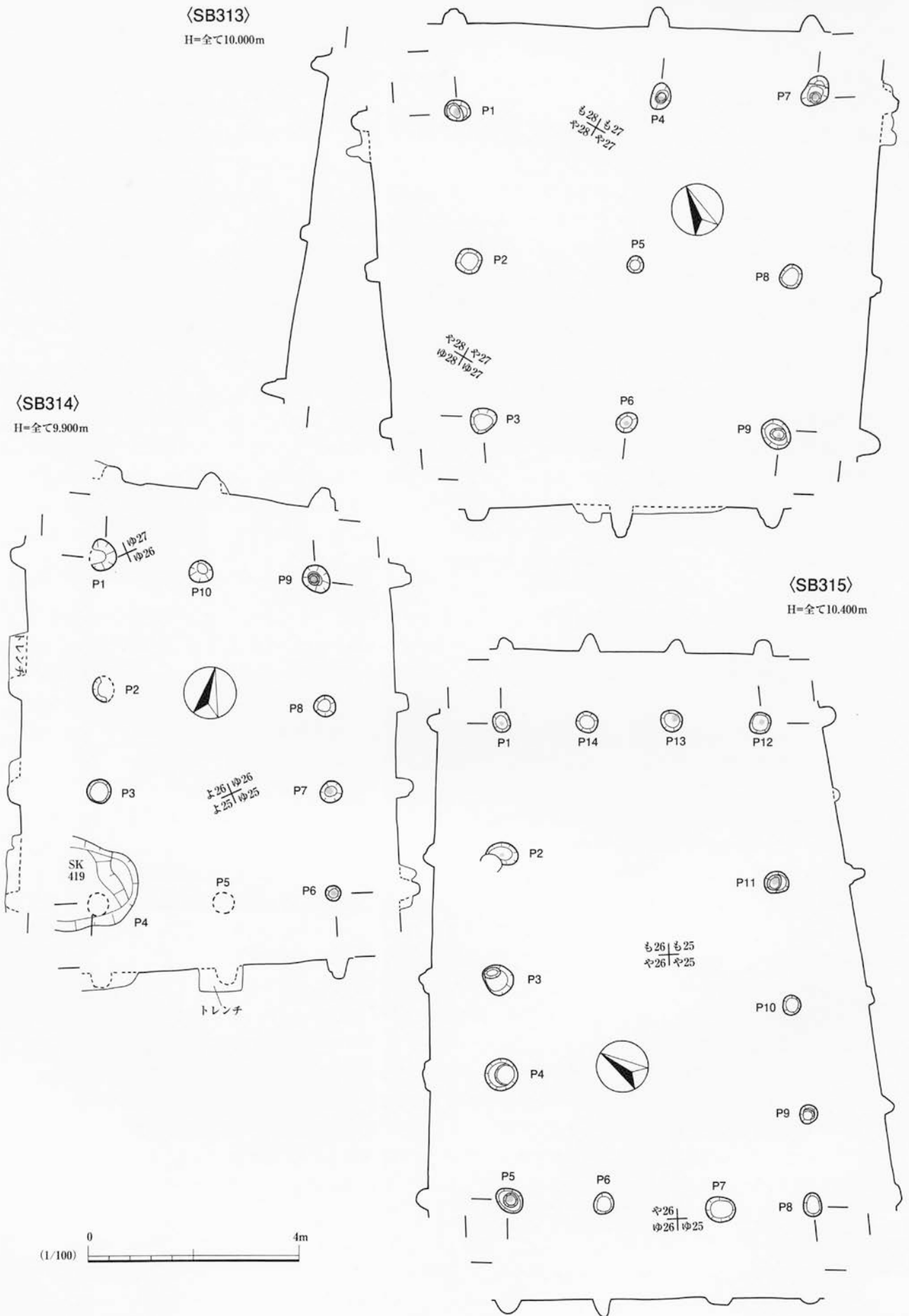
H=全て9.900m



第 18 図 掘立柱建物遺構図 6 〈SB310〉



第19図 掘立柱建物遺構図7 〈SB311・SB312〉



第20図 掘立柱建物遺構図8 (SB313・SB314・SB315)

が下がる段掘りが多い。規模は、径が40 cm主体に30～60 cmを測り、深さは32～44 cmを主体に20～60 cmで、基本的に旧地表に添いつつ四隅深めタイプだが、P6・P9のみ中柱が深くなる。残存する柱圧痕の径は6～10 cmで、ひしゃげた建物の割に柱筋の通りは良く、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具2点の古代遺物のみだが、建物構造は中世と判断される。

16. SB314

ゆ・よ-25・26Grに位置する。建物規模が、桁行6.0～6.6 m、梁行4.08～4.48 mを測り、建物面積29.96 m²、3間×2間の側柱建物である。P6位置の桁行・梁行のみ直行し、これ以外は直行しないため、全体的に歪な建物プランである。柱間寸法は、桁間120～260 cm、梁間208～220 cm、建物主軸はN-19° -Wにとる。柱穴掘方プランは円形・不整形円形を呈し、柱穴規模は径40 cmを主体とするもののP6で最大56 cmを測り、深さは24～40 cmである。径12 cmの柱圧痕を3本のみ検出しており、柱筋の通りは概ね良い。出土遺物は、Ⅲ～Ⅳ期にあたる土師器煮炊具1点のみで、遺物時期からの時期判断は難しいが、建物は古代の構造をもっている。

17. SB315

も・や-24・25Grに位置する側柱建物だが、P1位置のみ桁行・梁行が直行、P8が出っ張るためにひしゃげた形状をもつもの。建物規模は、桁行9.0～9.24 m、梁行4.92～5.68 mの4間×3間、建物面積48.34 m²、建物主軸はN-52° -E。柱間寸法は、桁間が176～332 cm、梁間160～220 cm、柱穴掘方プランは円形・方形・楕円形を呈して、規模は径40～60 cm、深さ10～32 cmを測る。残存する柱圧痕の径は6～12 cm、柱筋の通りは悪い。なお、重複する炉状遺構SJ74は当建物検出レベルよりも25 cm上位にあたり、関連性はないものと考えられる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具6点、中世土師器食膳具16点、総じて時期はⅣ期前後になるものと判断される。中世遺物は混入品であろう。

18. SB316

む・め-26・27Grに位置する側柱建物で、P1・P10がかなり外側に配置されているため、建物プランが台形状を呈す。建物規模は桁行6.08～6.16 m、梁行4.88～5.72 mの3間×2間、面積32.37 m²、主軸N-15° -E。柱間寸法は、桁間180～244 cm、梁間220～320 cm、プランは円形や楕円形を呈し、規模は径40 cmが主体で、西桁行のみ60 cmを主体にもつ。深さは20～36 cmを測り、旧地形に添いながら四隅を深めにもつ。残存する柱圧痕の径は6～10 cm程度で、柱筋の通りは歪な建物形状の割に良好である。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具9点、中世土師器食膳具1点であり、時期はⅣ2期を主体に、Ⅰ・Ⅱ期のものが混在する。

19. SB317

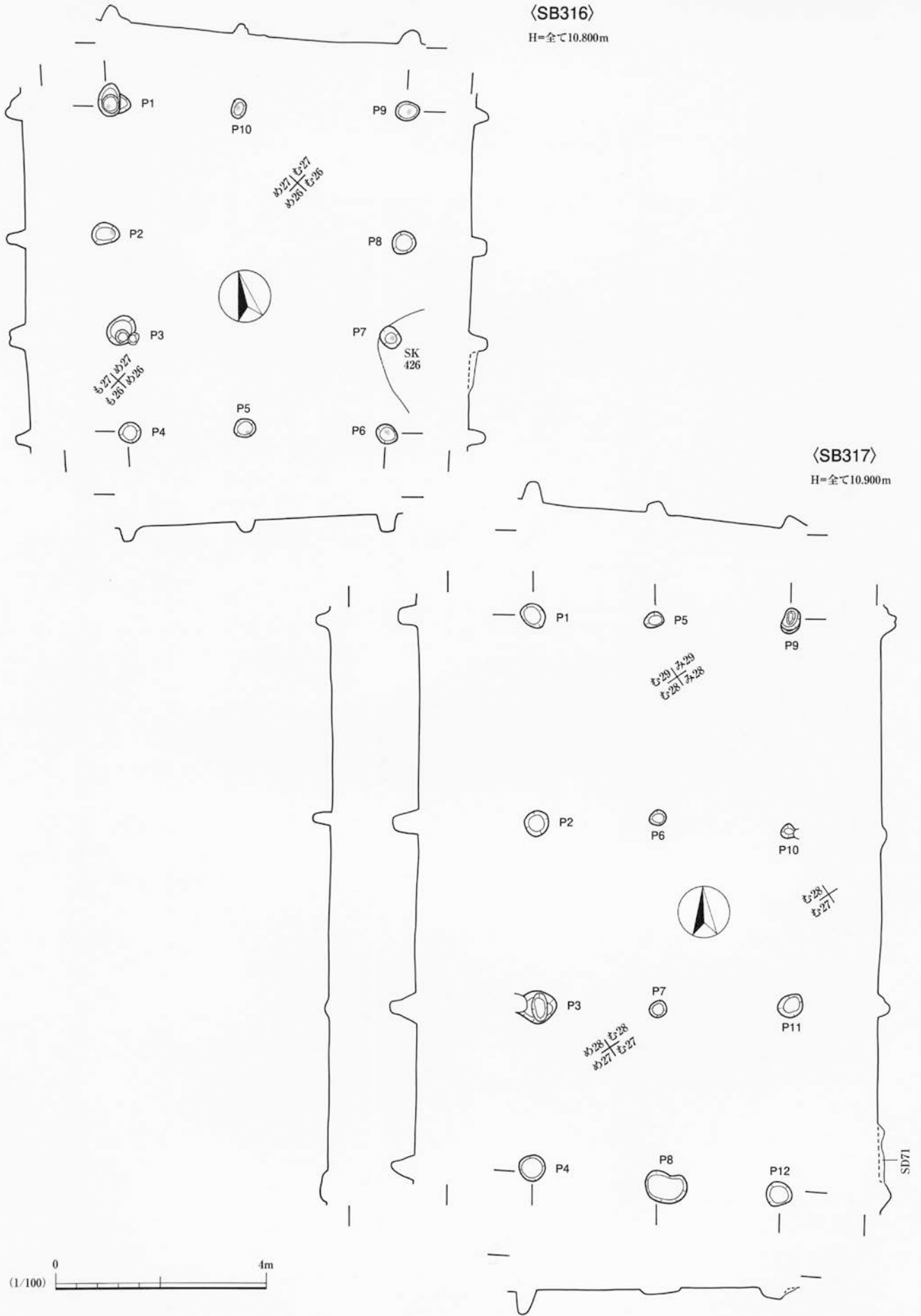
み28・29、む27～29、め27・28Grに位置するものである。建物規模は、桁行10.4～10.92 m、梁行4.8 mの3間×2間、建物面積51.17 m²、南梁行が歪となる低床の総柱建物である。建物主軸はN-1° -E。柱間寸法は、桁間300～408 cm、梁間232・248 cmで、柱穴は円形・不整形を呈す。柱穴規模は、径48 cmを主体に32～52 cm、深さは西梁行のみ48 cm主体で、この他は8～32 cmを測り、梁行は旧地表に添った掘り込みをもつもの、他は様々な深さとなる。なお、P6の深さは25 cm、P7の深さは10 cmである。柱筋の通りは良好で、出土遺物は須恵器食膳具3点のみだが、柱間寸法が広いことから建物構造は中世を示すと思われる。

20. SB318

め22・23、も・や-22～24、ゆ23Grに位置、低床の総柱建物である。桁行13.12 m、梁行10.68 m、5間×4間で、面積138.84 m²、建物主軸はN-20° -E若しくはN-70° -W。柱間寸法は、桁間260 cm、梁間248～280 cm。柱穴掘方プランは、円形や不整形楕円形で、柱穴規模は径52～60 cm主体に40～72 cmを測り、深さは16～64 cm、東西梁行は旧地表に添い、これ以外は様々な深さをもつ。柱筋の通りは、南桁行は良好、東梁行は概ね良好だが、北桁行・西梁行は悪い。なお、建物廃絶時に柱はランダムな方向に抜き取られている。P18上層からは、鉄製鍋が出土している。出土遺物総数は、須恵器食膳具25点、須恵器貯蔵具33点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具74点、中世土師器食膳具104点、白磁片1点、石製品7点で、時期は中世Ⅰ～Ⅱ期と判断される。

21. SB319

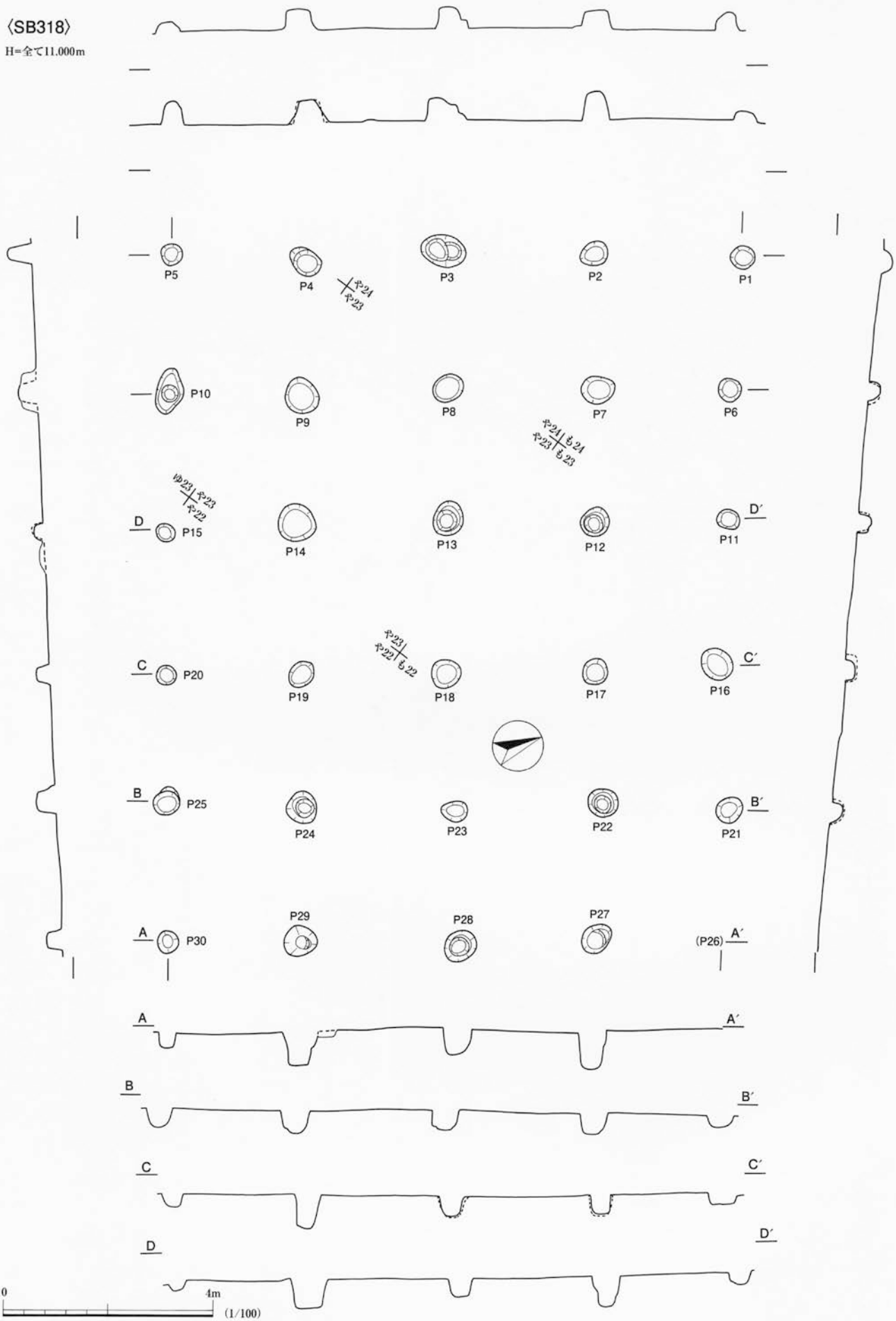
め～や-21・22Grに位置、桁行7.0～7.2 m、梁行7.2～8.4 mの2間×2間、低床の総柱建物だが、桁行・梁行とも直行する箇所がないため、かなりひしゃげた建物である。柱間寸法は、梁間340・360 cm、桁間320～440 cmを測り、寸法が広すぎるため建物として成立するか懸念を抱かせるもので、形状がSB309やSB313と似



第21図 掘立柱建物遺構図9 〈SB316・SB317〉

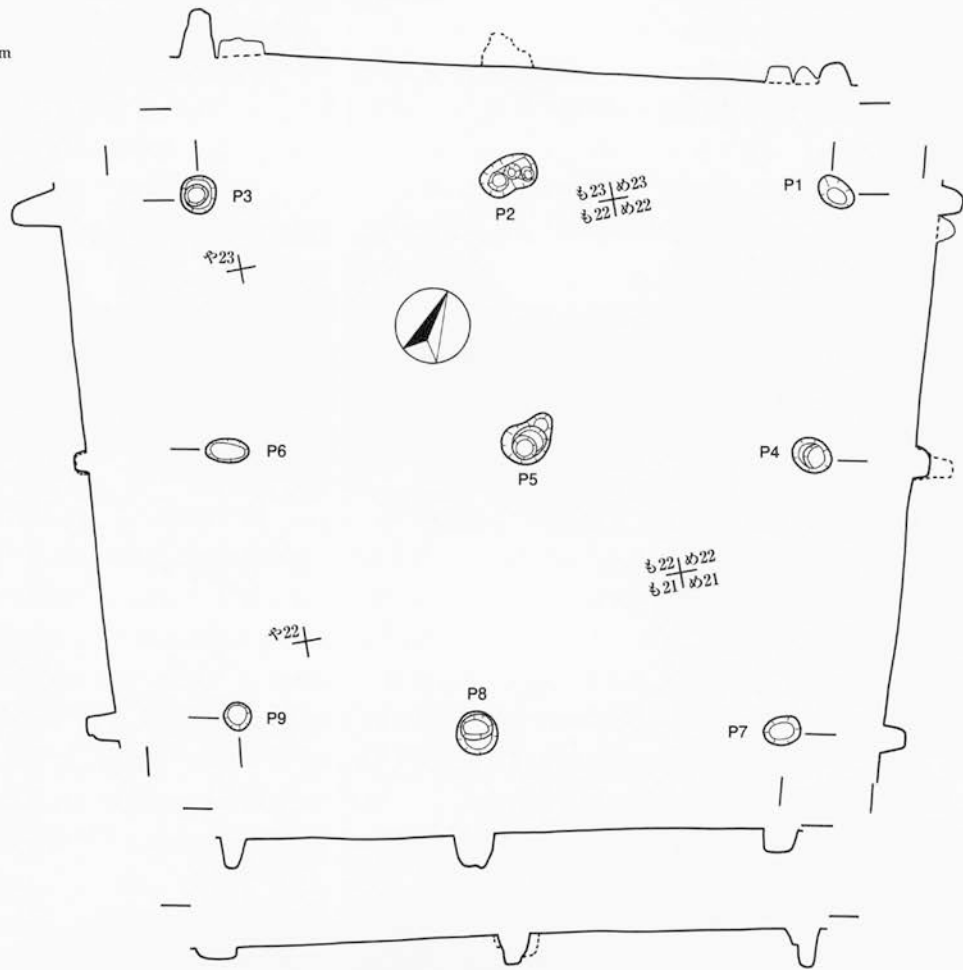
〈SB318〉

H=全て11.000m

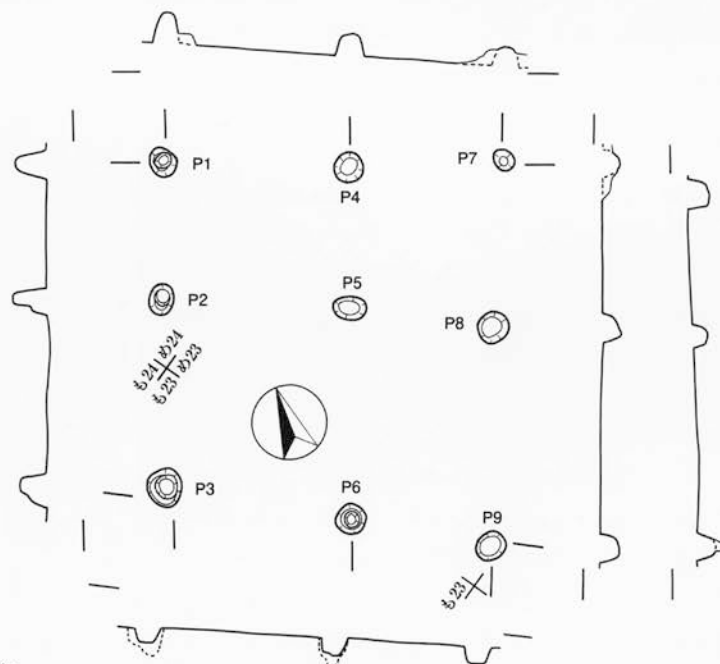


第22図 掘立柱建物遺構図10 〈SB318〉

〈SB319〉
H=全て11.200m



〈SB320〉
H=全て11.000m



第23図 掘立柱建物遺構図11 〈SB319・SB320〉

ている。建物面積は 54.94 m²、建物主軸は N-22° -W。掘方柱穴プランは円形・不整形円形・楕円形を呈し、径は 34～54 cm、深さ 14～60 cmを測る。基本的に旧地表に添う深さをもちながら、四隅を深めにする。柱筋の通りは、桁行は概ね良く、梁行では南梁行は良いが北梁行は P2 が完全にずれていて悪い。柱は建物廃絶時に抜き取られており、かなり締まりをもつ土で埋め戻されている。出土遺物総破片数は、須恵器貯蔵具 5 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器煮炊具 4 点、中世土師器食膳具 1 点である。建物形状と合わせ、総じて時期は中世 1 期と判断される。

22. SB320

め・も 23、め 24Gr に位置する。北梁行側のみ桁行と直行し、南側が酷く歪な低床の総柱建物である。建物規模は、桁行 4.28～5.12 m、梁行 4.4～4.48 m の 2 間×2 間、建物面積は 21.06 m²を測る。柱間寸法は、桁間 176～292 cm、梁間 192～248 cm、建物主軸は N-20° -E。柱穴は円形・楕円形プランを呈し、径は 40 cm 主体、深さ 18～46 cm を測り、基本として旧地表に添う掘り込みをもつ。柱筋の通りは良く、建物廃絶時に柱は抜き取られているが、確認できるものでは全て外側へ抜かれている。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 8 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 13 点、中世土師器食膳具 7 点が出土する。建物時期は中世 1 期とされる。

23. SB326

む 30、め・も - 29・30Gr に位置。建物規模が、桁行 8.64～9.0 m、梁行 5.4～5.68 m の 4 間×3 間の、側柱建物である。柱穴はしっかり掘り込まれた良好なものであるのに、建物が意外とひしゃげており、特に東桁行・南梁行が歪む。桁行と梁行が直行するのは P1 の位置のみである。建物面積は 48.86 m²、建物主軸は N-19° -E。柱間寸法は、桁間 192～280 cm、梁間 120～244 cm、柱穴は円形・方形・不整形・楕円形と様々なプランをもつ。柱穴規模は、径 52～56 cm を主体に最大 74 cm 最小 28 cm を測り、深さは 16～60 cm で基本的に旧地表に添う掘り込みをもちつつ四隅深めとするタイプである。但し、P2 や P9 のように深いものもある。残存する柱圧痕は 10～16 cm、14 cm に主体をもち、建物廃絶時に柱はランダム方向へ抜き取られている。埋土内で確認できる‘柱のあたり’の径は 16～24 cm、柱筋の通りは、桁行は良好で、梁行も概ね良い。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 11 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 13 点、この他特殊品として須恵質埴輪 1 点が出土する。時期は IV 2 期を主体とするものである。

24. SB327

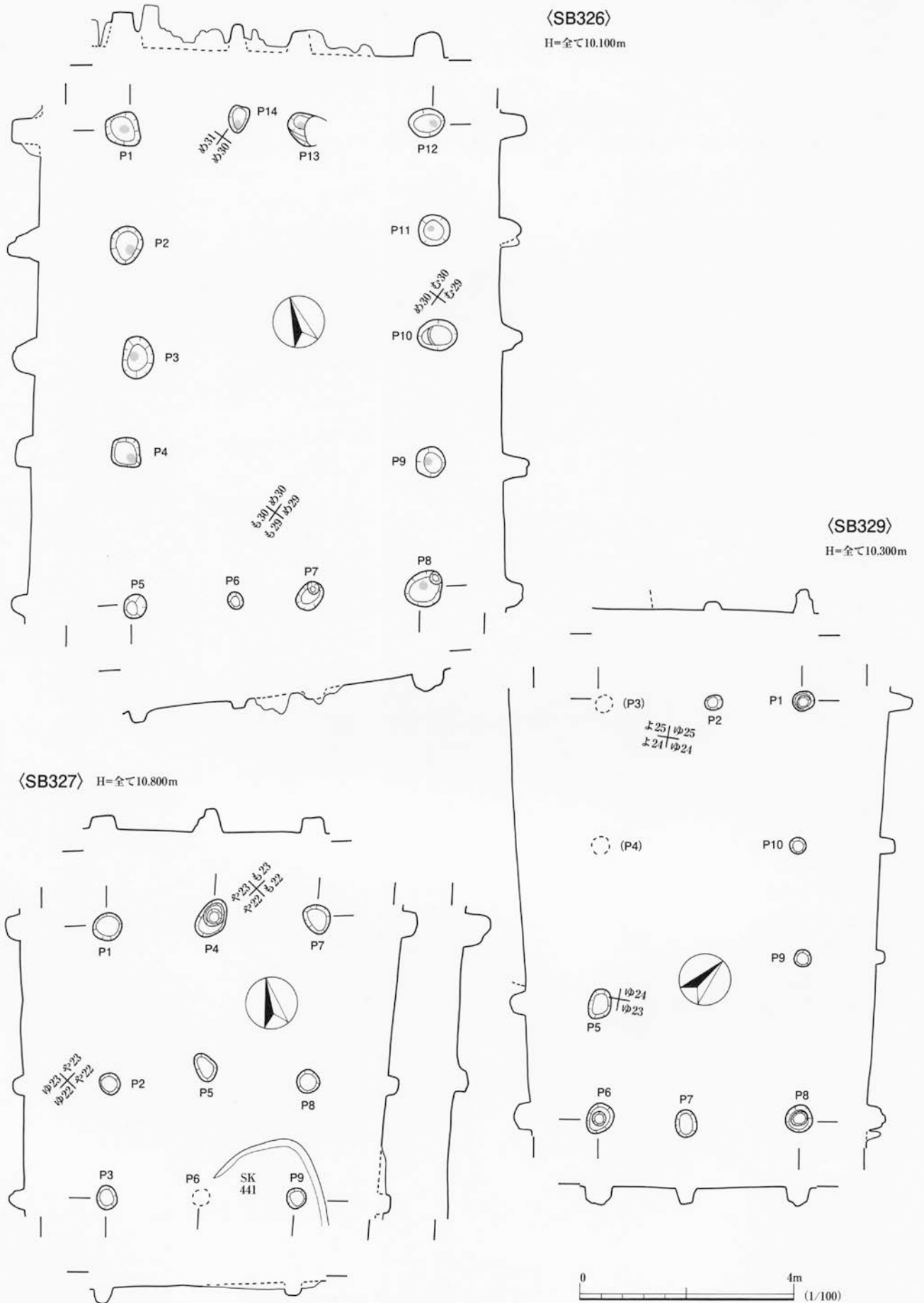
や 22・23Gr に位置する、低床の総柱建物で、桁行 5.2 m、梁行 3.12～3.92 m、2 間×2 間で面積 18.3 m²。主軸は N-11° -E。P7 が外側に外れて位置するため、建物が台形状を呈す。柱間寸法は、桁間 220・300 cm、梁間 192・200 cm。柱穴は円形・不整形プランで、径 36～76 cm、深さ 20～50 cm を測る。柱筋の通りは概ね良く、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器貯蔵具 6 点、須恵器貯蔵具 5 点、土師器煮炊具 12 点が出土するものの、細片であり時期を判断できるものではない。ただし、建物形状は中世建物を示している。

25. SB328

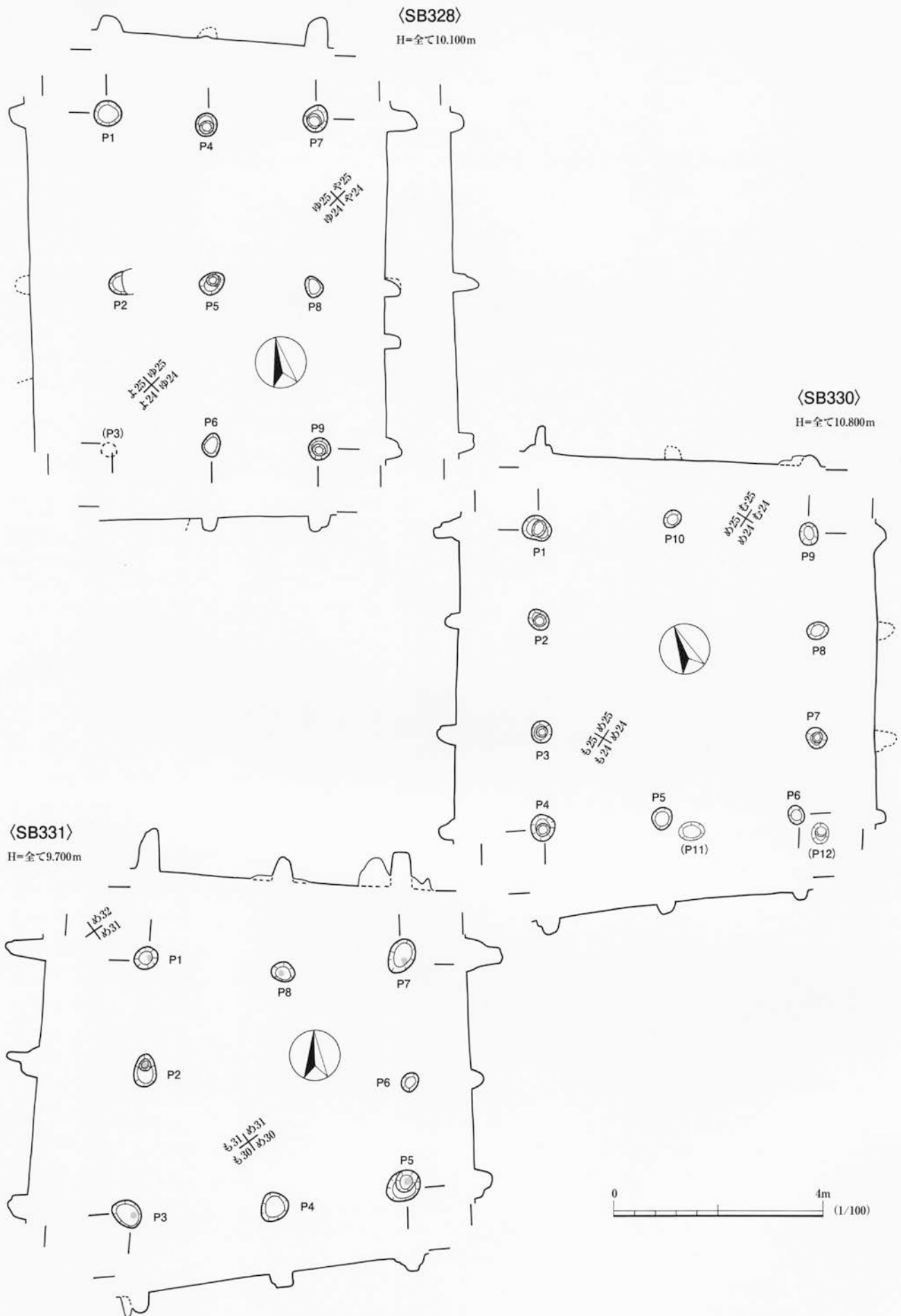
ゆ 24・25Gr に位置、低床の総柱建物で、桁行 6.32 m、梁行 4.0 m の 2 間×2 間、面積 25.28 m²を測り、主軸は N-11° -E。柱間寸法は、桁間 312・320 cm、梁間 200 cm で、柱穴プランは円形・不整形楕円形を呈し、断面形状で段掘りするものが多い。径は 40 cm 前後が主体、深さ 24～56 cm を測り、若干旧地表に添いながら四隅深めとするタイプである。但し中央の P5 のみ深くなっている。柱筋の通りは、東桁行のみ良く、この他は悪い。廃絶時に柱は抜き取られている。なお、重複する SJ73 は当建物検出レベルより下位層となり、関連性は薄いものと判断される。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 3 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器煮炊具 7 点、中世土師器食膳具 7 点である。時期は中世 1 - II 1 期とするものである。

26. SB329

ゆ・よ - 23～25Gr に位置する、建物規模は、桁行 7.8 m、梁行 3.8 m、3 間×2 間で面積 29.64 m²の側柱建物である。建物主軸は N-44° -W にとる。試掘時のトレンチ攪乱により、谷側方向の柱穴を 2 本分消失している。柱間寸法は、桁間 208～300 cm、梁間 160～212 cm、円形や方形の柱穴プランを呈し、断面形状で柱位置が若干下がる柱穴も認められる。柱穴規模は、径 60 cm 程が主体で、最小 32 cm を測り、深さは 16～44 cm、旧地形に添いつつ四隅深めとするタイプである。柱筋の通りは、桁行は悪いものの梁行は良好で、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器貯蔵具 2 点のみで、これらは古代 I・II 期を示すものの、遺物から時期を判断することは難しいが、建物構造から古代建物と判断してよいだろう。



第24図 掘立柱建物遺構図12 〈SB326・SB327・SB329〉



第25図 掘立柱建物遺構図13 〈SB328・SB330・SB331〉

27. SB330

め・も - 24・25Gr に位置、桁行 5.48 ～ 5.8 m、梁行 4.8 ～ 5.16 m、3 間 × 2 間で面積 28.09 m² の側柱建物である。主軸は N-23° -E。柱間寸法は、桁間 228 ～ 260 cm、梁間 156 ～ 216 cm、柱穴は円形・不整形を呈して、径 40 cm 主体に 32 ～ 56 cm、深さ 20 ～ 52 cm で梁行が旧地表に添い、四隅深めとするものである。柱筋の通りは、西桁行・南梁行のみ概ね良いが、他は悪い。特に東桁行は全く通らず、桁行・梁行も直行箇所がなく、酷く歪んだ建物となる。挿図で示した P11・P12 が本来の柱穴であった可能性を考えれば、P9 位置のみ桁行・梁行が直行せず、柱筋は通ることとなる。ちなみにこれらの柱穴の底面レベルは、P11 が標高 10.26 m、P12 が標高 10.32 m で、P5 や P6 と同じ様な深さをもっている。出土遺物は、須恵器食膳具 11 点、須恵器貯蔵具 6 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 17 点、中世土師器食膳具 7 点、石製品 1 点である。ただし、時期判断可能な遺物は限られており、判断できた時期はⅡ期である。

28. SB331

め・も - 30・31Gr に位置、桁行 4.2 ～ 4.92 m、梁行 4.8 ～ 5.24 m、2 間 × 2 間の側柱建物である。面積 22.89 m²、建物主軸は N-1° -E。桁行・梁行の直行する箇所がない歪な建物である。柱間寸法は、桁間 236 ～ 268 cm、梁間 192 ～ 288 cm、柱穴は円形・不整形を呈し、径は 48 cm を主体に 36 ～ 68 cm、深さ 24 ～ 80 cm を測って旧地表に添いつつ四隅深めとするタイプである。径 8 ～ 14 cm の柱圧痕が残存し、廃絶時に柱は抜き取られている。柱筋の通りは、桁行は概ね良いものの梁行は悪い。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 3 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器煮炊具 6 点、中世土師器食膳具 3 点である。建物時期はⅡ 2 ～ Ⅱ 3 期と判断される。

29. SB332

め・も 30Gr に位置する低床の総柱建物で、桁行 4.2 ～ 5.04 m、梁行 3.8 ～ 3.92 m の 2 間 × 2 間、面積 17.83 m²、主軸は N-2° -E。桁行・梁行の直行するところがない歪な建物である。柱間寸法は、桁間 180 ～ 272 cm、梁間 180 ～ 208 cm、柱穴は円形・方形を呈し、底面柱位置が若干窪む。径は 60 cm 主体で 44 ～ 72 cm、深さ 16 ～ 56 cm を測って旧地表に添いながら、西桁行と中央 P5 以外は四隅深めとする。径 8 ～ 18 cm を測る柱圧痕が残存し、建物廃絶時に掘方土が残る状態で柱は抜き取られ、径 16 ～ 18 cm の「柱のあたり」を確認できる。柱筋の通りは良い。出土遺物はないが、中世建物の形状を呈している。

30. SB333

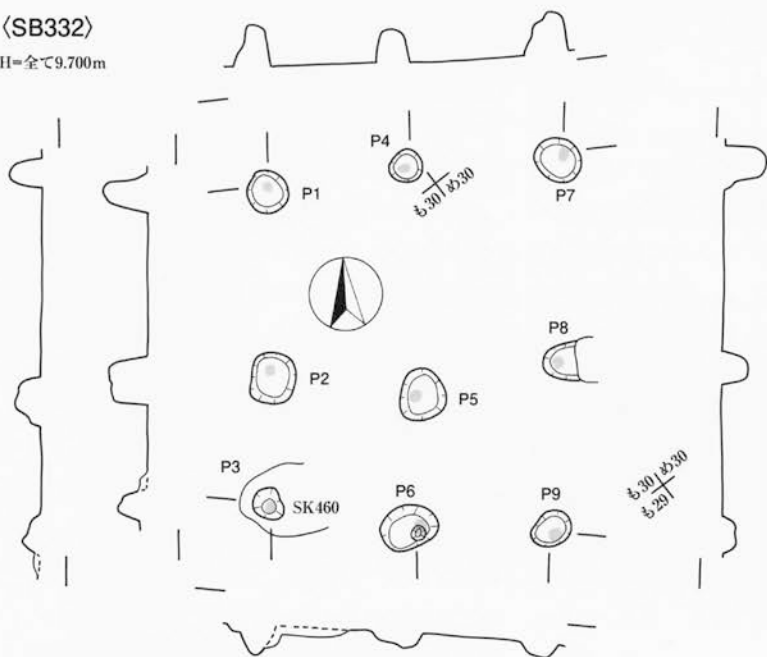
も 27・28Gr、SK400・SE02 を取り囲むように位置する側柱建物である。桁行 6.04 ～ 6.08 m、梁行 5.52 ～ 5.92 m、3 (2) 間 × 2 (3) 間、建物面積 34.55 m² で、主軸は N-28° -E。建物プランは P7 が内側に位置するため台形状を呈している。柱間寸法は、桁間 156 ～ 340 cm、南梁間 140 ～ 300 cm、柱穴は円形・楕円形を呈し、径 44 cm を主体に最大 60 cm、深さ 28 ～ 52 cm、P9・P10 のみ深さ 14 ～ 20 cm と小さく断面形状も他に比べ異質である。基本として旧地形に添った深さをもち、柱筋の通りは良く、建物 廃絶時に柱は抜き取られている。SE02・SK400 を取り囲むように位置することから、井屋の可能性がもたれるが、簡易な構造をなしていたと思われる。出土遺物は総破片数で、須恵器貯蔵具 1 点、土師器食膳具 3 点、土師器煮炊具 6 点。土師器からの時期は古代Ⅰ・Ⅱ期されるものの、建物の柱間規模が広いといった中世建物の形状を捉えることができ、中世建物の可能性が高い。

31. SB334

も 30・31Gr に位置、2 間 × 2 間の近接棟持柱建物である。規模は、桁行 2.0 m、梁行 1.92 m、面積 3.84 m²、建物主軸 N-1° -E で、ほぼ真北にとる。柱間寸法は、桁間 88 ～ 112 cm、梁間 92・100 cm、柱穴はほぼ方形を呈す。柱穴規模は、径 60 ～ 72 cm 主体で、P4・P5 のみ 50 cm、深さは 24 ～ 60 cm で若干旧地表に添う。棟持柱である P7・P8 は同じ深さをもち、両者の柱間寸法は 300 cm、側柱の梁行中間にきっちり直行して配置され、柱筋が通る。棟持柱以外の柱筋の通りは、P3 が外れ気味だが通らないということはなく、概ね良い。残存する柱圧痕径は 18 cm で、方形掘方は P4 のように斜めに配置するものがある。P3 が少し気になるころだが、総じて計画設計された建物と言える。しっかりと掘り込まれた柱穴を有す点、形状・規模・柱筋とも良好な点、小型の近接棟持柱建物である点から、特殊な事例と言うことができる。似た構造のもので「門」が挙げられるところだが、付随する築地塀などがなく、周囲の建物との関係からも門とは判断出来ないと考えられる。前回報告の考察内で、望月により「社的建物」として位置付け（望月精司 2009 「額見町遺跡の古代「村寺」に関する考察」『額見町遺跡Ⅳ』石川県小松市教育委員会）されている。出土遺物は、須恵器食膳具 4 点のみで、時期はⅡ～Ⅲ期を示すものである。

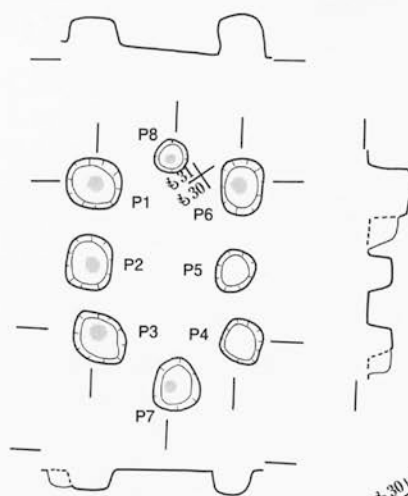
〈SB332〉

H=全て9.700m



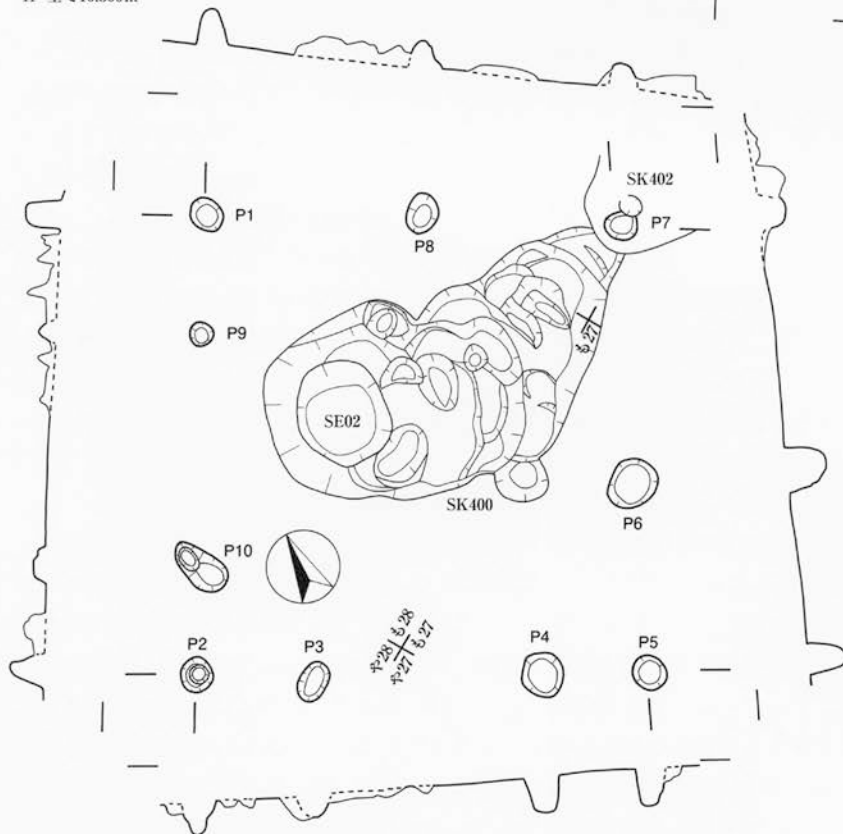
〈SB334〉

H=全て9.600m



〈SB333〉

H=全て10.300m



第26図 掘立柱建物遺構図14 〈SB332・SB333・SB334〉

第2節 土坑・井戸

第1項 土坑

土坑には、他遺構と同様にA地区からの連番で土坑番号を付している。今回の報告対象となるのは、SK393～415・419～456・460・461・466・468・469で、この内SK405・437・438は欠番であり、生産遺構でSK番号が付されているものがある。SK394が土師器焼成坑の可能性をもつもの、SK404・412・415が製炭土坑であり、これらは第3節手工業生産関連遺構で述べる。この他、SK400はSE02外周土坑と認識し、SE02内で同時に報告することとする。よって、今回報告対象の土坑数は総数61基となるのだが、この内、遺物が多く出土するものや特徴的なものを23基選んでここに報告することとする。

今回の報告区域では、前回報告まで確認できたような様々な特徴をもつものではなく、かなり偏った傾向であるといえる。これまでの土坑の分類は、A類土坑を通常の土坑、B類土坑を遺物の比較的多い大型土坑で、当初は粘土掘削が目的とされ、その後土器廃棄として利用されたとするもの。但し今回粘土掘削が目的であったか不明なものも多く、大型で遺物出土の多い土坑をB類土坑に含めた。C類土坑は柱穴状の小型土坑。D類土坑は堅穴建物の掘方土坑状を呈すもの。E類は被熱焼結した小型炉の床下土坑と位置づけられるもの。F類土坑は焼成土坑であり、土師器焼成坑でないが何らかを焼いたとされる土坑である。墓壙またはその可能性のある土坑をG類土坑とし、方形プランで小型堅穴状のものをH類土坑とする。といったように8種類に分類されていたのだが、今回報告区域では、A類土坑・B類土坑・F類土坑のみに限られている。1基のみ墓壙の可能性をもつものもあるのだが、これは確定できないため、A類土坑としておいた。概して、今回調査区では、殆どが廃棄を目的として掘り込まれたものとなっている。

出土遺物については、出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。なお、中世と時期を記述しているものについては、古代遺物以外の当遺跡廃絶期までの11世紀2/4～12世紀中頃、中1-Ⅱ1期や中1-Ⅱ2期を示している。

1. SK393

る31Grにおいて、時期を古代末にもつ土器集中が認められたため土坑と判断したものである。上面でのプランは検出できておらず、遺物取り上げ後の精査により下層でプランを検出している。上層遺物は、長径100cm×短径70cmの範囲に、瓶を中心に同一レベルで集中出土し、これを除去後に下層プランと落ち込みを検出、この時の規模は長径190cm、短径100～130cm、深さ15～20cm、底面は平坦を呈す。本来はこれよりも規模が大きかったものと考えられるものである。土坑類型は、通常土坑と位置づけているA類とする。出土遺物は総数で、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具105点、中世土師器食膳具10点、匣鉢片1点、石製品4点で、土師器からVI1～VI2期の時期が確認できる。

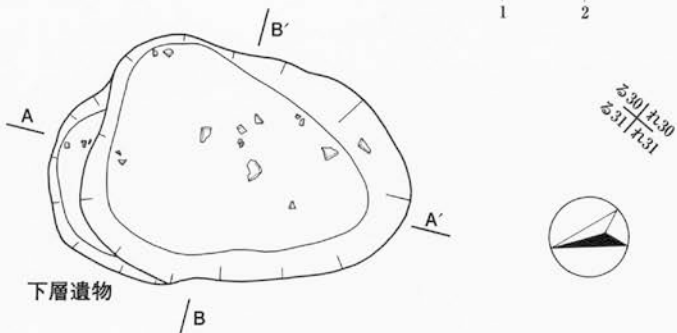
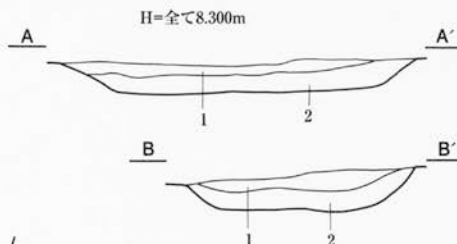
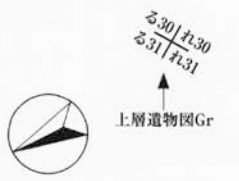
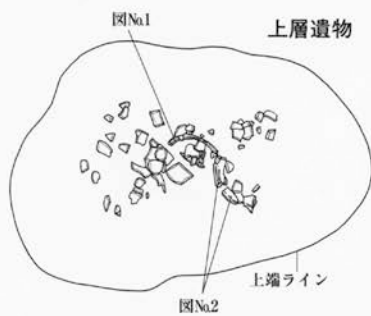
2. SK395

SK393と検出状況は同じである。古代末の土器集中が認められたため土坑と判断したもの。上層遺物は、長径180cm×短径80cm範囲に同一レベルで集中出土し、これを除去後に下層プランと落ち込みを検出、規模は長径260cm、短径126～130cm、深さ12cmを測り、底面は平坦を呈す。SK393と同様に本来の規模はもっと大きかったと思われるが、土坑類型は通常土坑と位置づけているA類とする。出土遺物は総数で、須恵器食膳具5点（摩耗痕跡1点含む）、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具144点、中世土師器食膳具49点、石製品13点、匣鉢片32点で、時期はVI2～VII1期と判断されるものである。

3. SK396・397

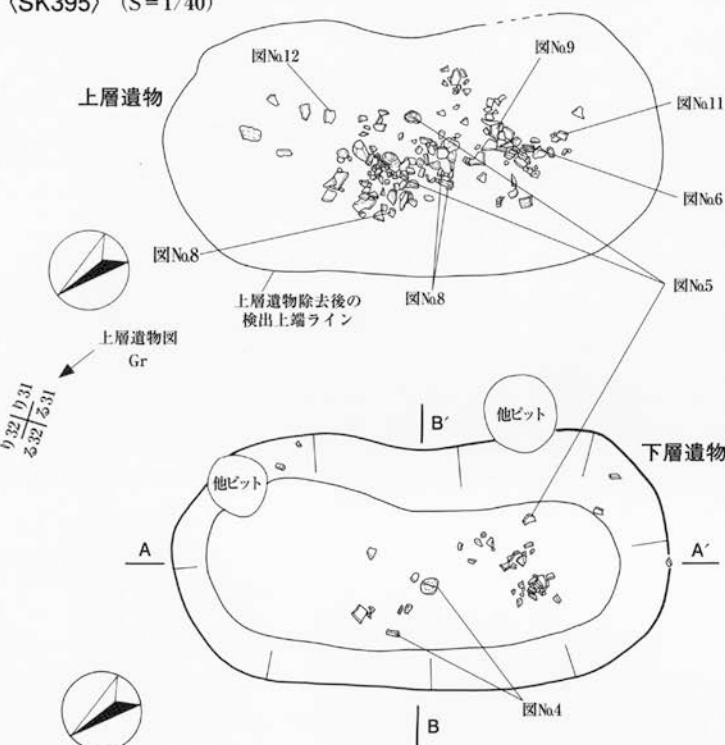
ら30Grにおいて、土器集中が認められたために土坑として取り扱い、SK393やSK395のように下層でもプランを捉えられなかったもので、2基が並んで検出されたもの。SK396は長径280cm×短径200cm範囲に、SK397は長径200cm×短径110cm範囲に、完形や略完形の壺・皿が目立って出土している。土坑分類は、いずれもA類土坑としておく。出土遺物は、SK396で、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具14点、土師器煮炊具17点、中世土師器食膳具290点、製塩土器片2点。SK397で、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具8点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具2点、中世土師器食膳具73点、灰釉陶器片2点、石製品1点である。SK396・397とも時期は中世1-Ⅱ1期になるものと思われる。

〈SK393〉 (S=1/40)

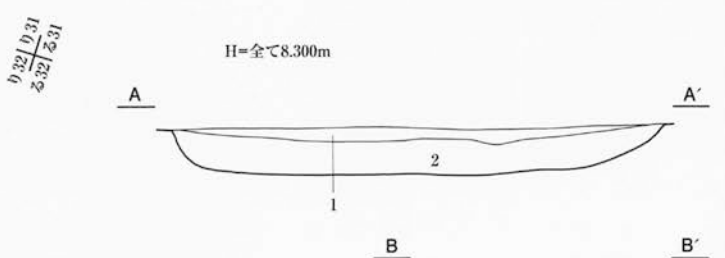


SK393 土層註
 1層 黒(褐)色土 (10YR2/2~2/1): 炭化小塊・焼土小塊少量含有。黄褐色小塊少量含有。土器やや含む。
 2層 黒色土 (10YR2/1): 炭化小塊少量、焼土小塊微量含有。

〈SK395〉 (S=1/40)

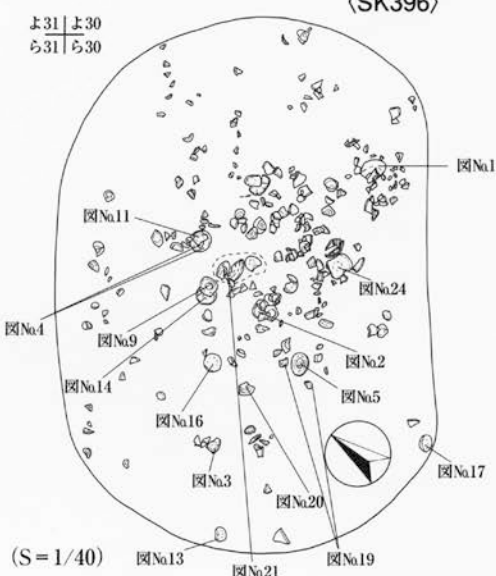


上層遺物除去後の検出上端ライン



SK395 土層註
 1層 黒褐色土 (10YR2/2): 炭化小塊・焼土小塊少量、黄褐色小塊多量含有。土器含有。
 2層 黒(褐)色土 (10YR2/2~2/1): 炭化小塊・焼土小塊少量含有。土器含有殆どなし。

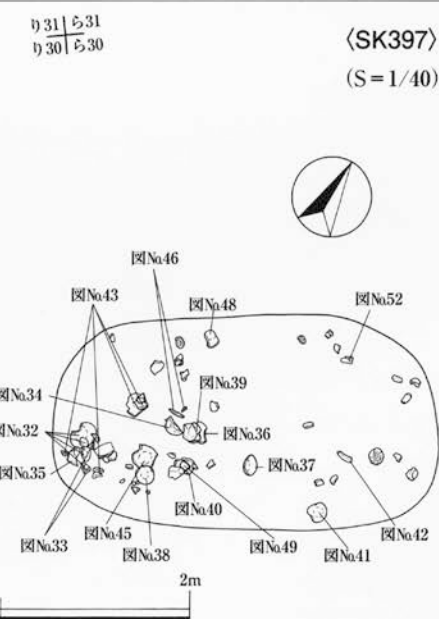
〈SK396〉



(S=1/40)

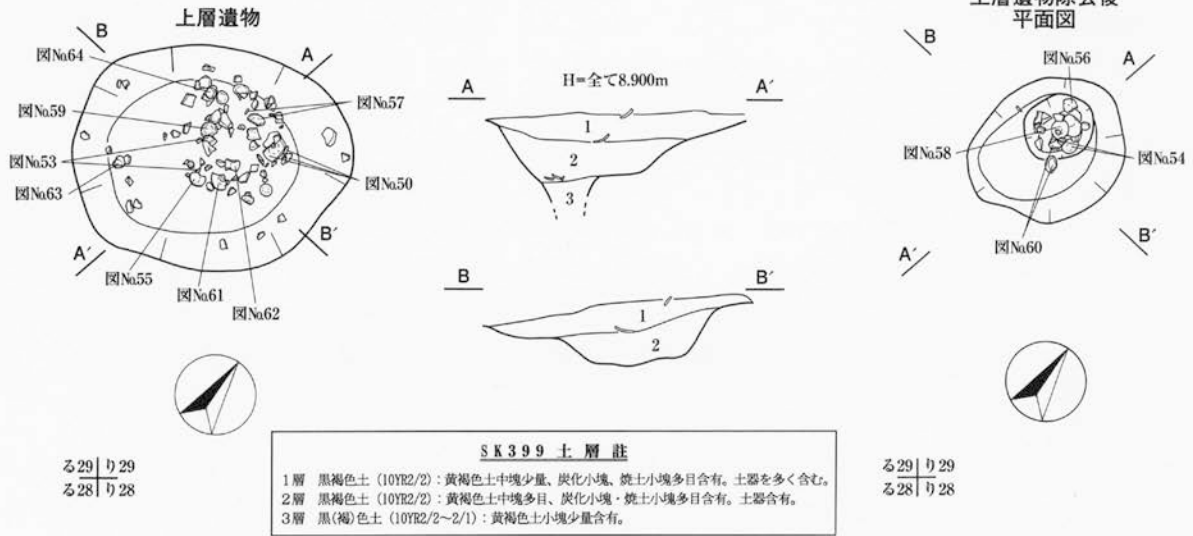
〈SK397〉

(S=1/40)



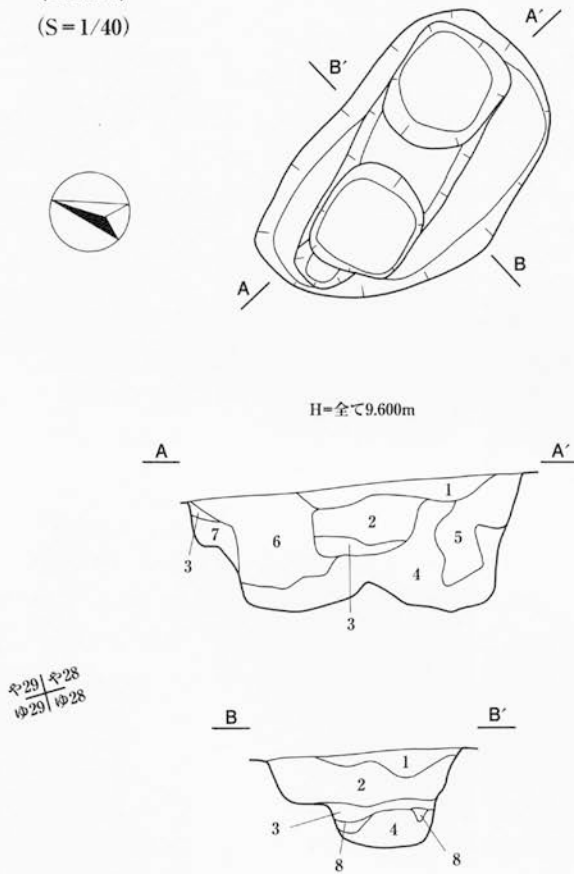
第27図 土坑遺構図1 〈SK393・SK395・SK396・SK397〉

〈SK399〉 (S=1/40)



〈SK401〉

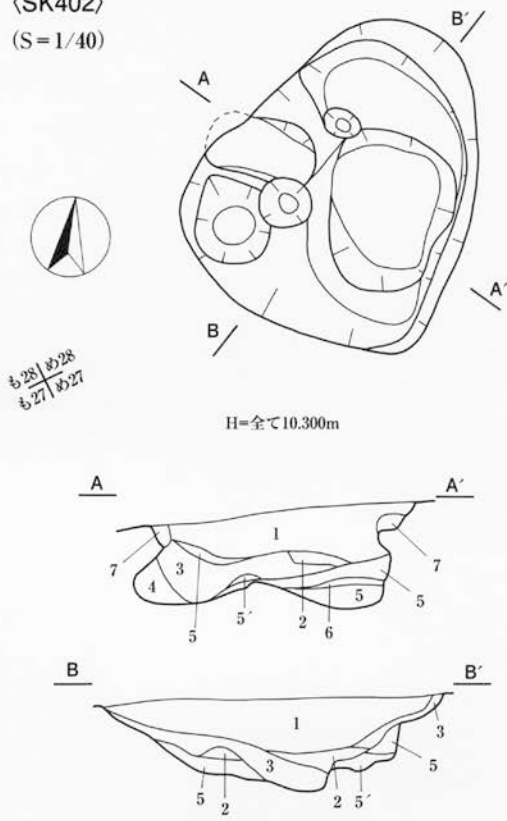
(S=1/40)



SK401 土層註
1層 黒褐色土 (10YR2/3) : 褐色土(7.5YR4/6)塊少量含有。
2層 黒褐色土 (10YR2/2~2/3) : 暗褐色土(10YR3/3) 3割、褐色土(7.5YR4/6)中塊・大塊が3割混在。
3層 黒色土 (7.5YR2/1) : 褐色土少量含有。軟質。
4層 暗褐色土 (10YR3/3) : 黒褐色土大塊(10YR2/2) 2割、褐色土塊(7.5YR4/4)混在。やや締まり有り。
5層 黒褐色土 (10YR2/3) : 褐色土(7.5YR4/6)小塊・中塊多量含有。
6層 黒褐色土 (10YR2/2) : 褐色土(7.5YR4/6)小塊・中塊多量含有。
7層 黒褐色土 (7.5YR3/2~2/3) : 褐色土塊(7.5YR4/6)、焼土小塊含有。
8層 明褐色土 (7.5YR5/6) 特大塊：隙間に黒褐色土(7.5YR2/2)が2割混入。締まり有り。

〈SK402〉

(S=1/40)



SK402 土層註
1層 黒褐色土 (7.5YR2/2~2/3) : 黄褐色土小塊少量含有。炭化塊含有。やや砂質。やや締まり有り。
2層 黒褐色土 (7.5YR2/2) : 黄褐色土の地1中塊多目含有。締まりなし。
3層 黒褐色土 (10YR2/2~2/3) : 黄褐色土大塊少量含有。締まりなし。
4層 黒褐色土 (10YR2/2~2/3) : 硬化する黄褐色土中塊少量含有。締まりなし。
5層 黒褐色土 (7.5YR2/2) : 褐色土(7.5YR4/4)塊3割含有。黄褐色土中塊・大塊多量含有。焼土塊少量含有。締まりなし。
5'層 : 5層と似るが黄褐色土塊が少ない。
6層 黒色土 (7.5YR2/1) : 締まりなし。
7層 黒褐色土 (7.5YR3/2) : 褐色土塊(7.5YR4/4) 4割混在。極締まりあり。



第28図 土坑遺構図2 〈SK399・SK401・SK402〉

4. SK399

り 29Gr に位置、長径 148 cm × 短径 120 cm の円形プランを呈し、深さ 30 cm、底面は平坦を呈し、北側端にピット状の落ち込みを有するものである。上層遺物のみならず、ピット内からも完形や半完形が出土、土坑規模から A 類土坑とするのが妥当だろう。出土遺物総数は、須恵器食膳具 1 点、須恵器貯蔵具 11 点、土師器煮炊具 9 点、中世土師器食膳具 140 点、石製品 2 点である。時期は中世 I - II 1 期とされる。

5. SK401

や 28Gr に位置する土坑である。後述の SK402・SK403 とよく似たものであり、これら 3 基の土坑は SK400 を取り囲むように展開することも特徴である。SK401 は、長径 174 cm × 短径 102 cm の楕円状で、深さ 60 ~ 70 cm と深く、壁面にテラスをもち底面に 2 箇所の落ち込みを有す。土坑類型は A 類土坑と位置づけておく。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 17 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器煮炊具 5 点であり、須恵器食膳具で III 期 IV 期の遺物が確認できるが、詳細は不明である。

6. SK402

め 27・28Gr、SK400 東側に近接する。不整形円形プランの長径 174 cm × 短径 100 ~ 145 cm、深さは 40 ~ 55 cm を測る。オーバーハングする壁面、底面も凸凹状を呈す。覆土は締まりをもち、自然堆積したものと考えられる。土坑類型は A 類土坑と位置づけておく。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 10 点、須恵器貯蔵具 12 点、土師器食膳具 2 点、土師器煮炊具 8 点だが、時期を判断できるものがなく不明である。

7. SK403

め 28Gr に位置、長径 205 cm × 短径 120 ~ 164 cm、深さ 34 ~ 54 cm を測る不整形円形土坑である。テラスをもち、底面は凸凹としてピット状の浅い落ち込みを有す。SK400 北側に近接、両者間には小土坑やピットが連続する。覆土は自然堆積層を示し、土坑類型は A 類土坑と位置づけておく。出土遺物は、須恵器食膳具 15 点（摩耗痕 2 点、油痕 2 点含む）、須恵器貯蔵具 21 点、土師器食膳具 2 点、土師器煮炊具 10 点、石製品 1 点、古代で IV 期・V 期のものが確認でき、この他、中世土師器食膳具 27 点が出土する。

8. SK407

れ 27・28Gr に位置し、トレンチ掘削により約 1 / 4 を欠損してしまった土坑で、楕円状プランになるものと思われる。規模は長径 370 cm × 短径残存 180 cm、深さ 30 cm を測る。土坑類型は土器の比較的多い大型土坑とする B 類とすることができる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 14 点（摩耗痕跡 1 点含む）、須恵器貯蔵具 227 点、土師器食膳具 8 点、土師器煮炊具 41 点、中世土師器食膳具 9 点、円筒形片 2 点であり、IV 2 期を主体として II 期のものも認められる。

9. SK408

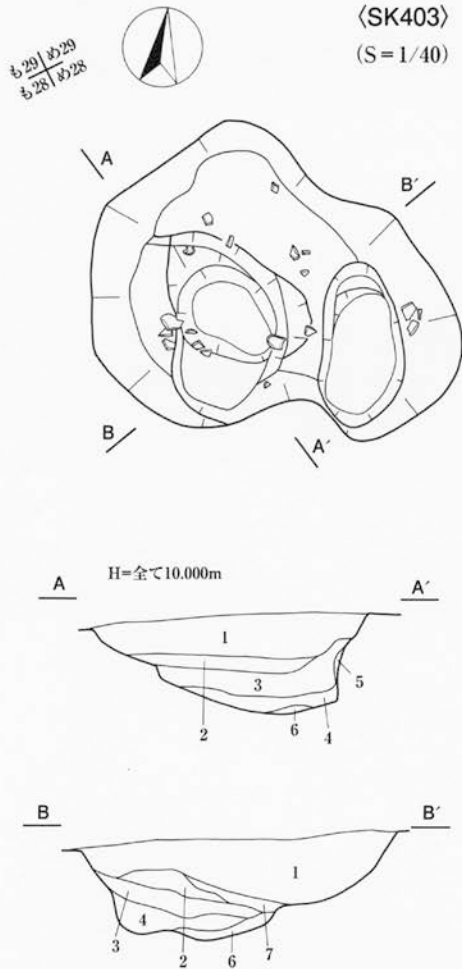
る 27・28Gr に位置する。不整形長楕円プランで、長径 368 cm × 短径 260 cm、深さ 24 cm を測る。底面は平坦を呈しながらも南側に向かい若干下降し、覆土は、黒褐色土を基本に砂質褐色土が混在するものである。土坑類型は B 類と位置づけられる。出土遺物の総数は、須恵器食膳具 61 点（摩耗痕跡 3 点含む）、須恵器貯蔵具 86 点、土師器食膳具 11 点、土師器煮炊具 516 点、中世土師器食膳具 58 点、石製品 1 点、円筒形片 1 点であり、時期は IV 2 古段階を主体とする。

10. SK409

る 28Gr に位置し、不整形長楕円形プランを呈し、長径 240 cm × 短径 160 cm、深さ 25 cm を測る。底面は平坦で、出土遺物は多く、典型的な A 類土坑とすることが出来る。出土遺物は、須恵器食膳具 40 点（摩耗痕跡 1 点含む）、須恵器貯蔵具 49 点、土師器食膳具 2 点、土師器煮炊具 153 点、カマド 1 点、支脚 1 点、中世土師器食膳具 2 点である。時期は IV 2 古段階 ~ 新段階が主体である。

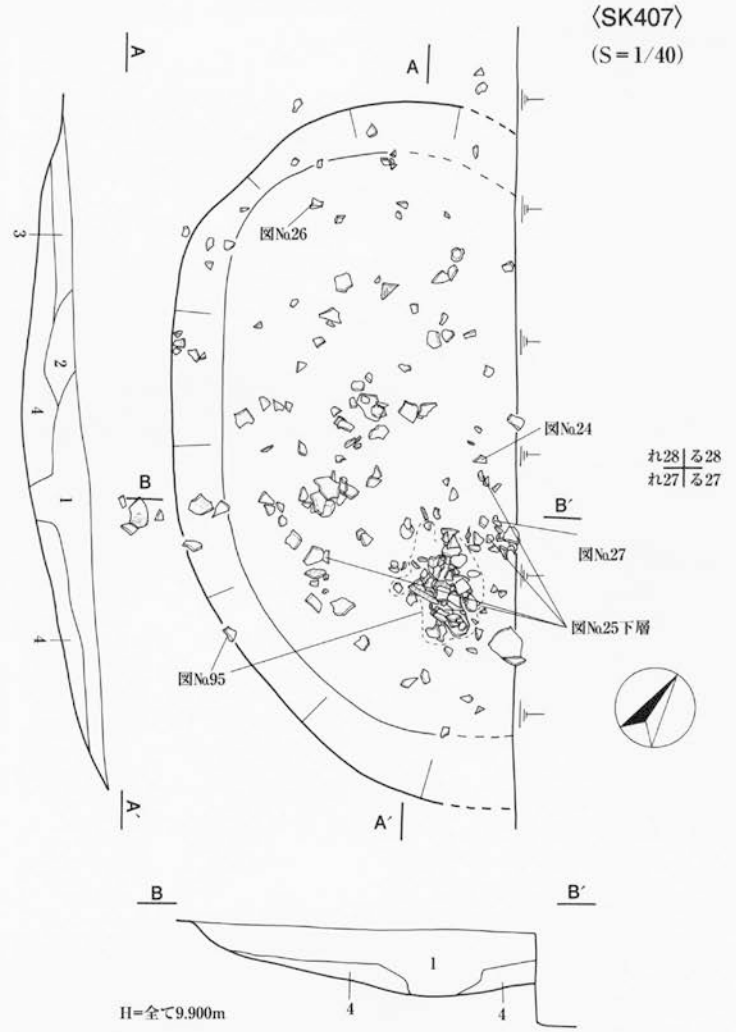
11. SK410

ら 27Gr に位置、方形プランをもち、長径 100 cm × 短径 60 cm、深さ 12 cm を測り、底面は平坦を呈する。覆土は黒色土や黒褐色土の混在土を主体に、炭化塊を極めて多量に含有するという特徴をもつ。壁や底面での被熱は認められず、また規模が小さく深さも浅いので墓塚とも言い難いため、灰などを廃棄したものと思われ、A 類土坑と位置づけておく。出土遺物は、土師器煮炊具 3 点、匣鉢片 1 点と少なく、時期判断は難しいものの煮炊具で V 期を確認している。



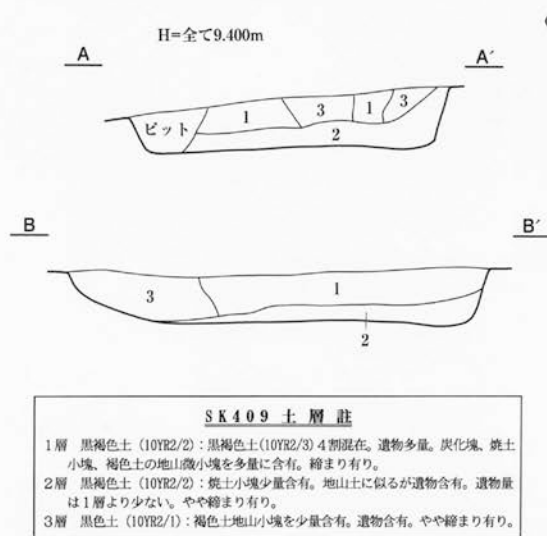
SK403 土層註

1層 黒褐色土 (7.5YR3/2~2/2) : 炭化・褐色土小塊を少量含有。
 2層 黒褐色土 (7.5YR2/2) : 褐色土塊微小を含有。
 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2~2/2) : 褐色土(7.5YR4/4)小~大塊多量含有。炭化塊含有。
 4層 黒褐色土 (7.5YR2/2) : 褐色土大塊少量含有。
 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2~2/2) : 褐色土(7.5YR4/4)と5割率で混在。炭化塊多量含有。
 6層 黒褐色土 (10YR2/3) : 褐色土(7.5YR4/4)中~大塊多量含有。
 7層 褐色土硬化塊 (7.5YR4/4) : 隙間に黒褐色土(7.5YR3/2)1割混入。黒色土塊多量含有。締まりあり。



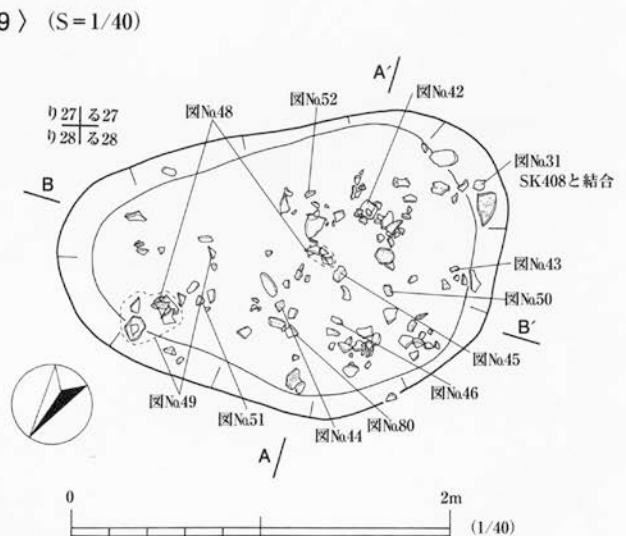
SK407 土層註

1層 黒褐色土 (10YR2/2) : 砂質の暗褐色土(10YR3/3)塊混入。焼土塊多量、黄褐色粘土小塊少量含有。やや締まり有り。
 2層 黒褐色土 (10YR2/2) : 砂質の暗褐色土(10YR3/3)塊が5割率で混入。軟質。
 3層 黒色土 (7.5YR2/1) : 砂質の暗褐色土(10YR3/3)混入。焼土塊少量含有。締まり有り。
 4層 黒色土 (7.5YR2/1) : 焼土小塊微量含有。砂質の暗褐色土(10YR3/3)塊少量含有。地山土に似るのだが、遺物を含む。

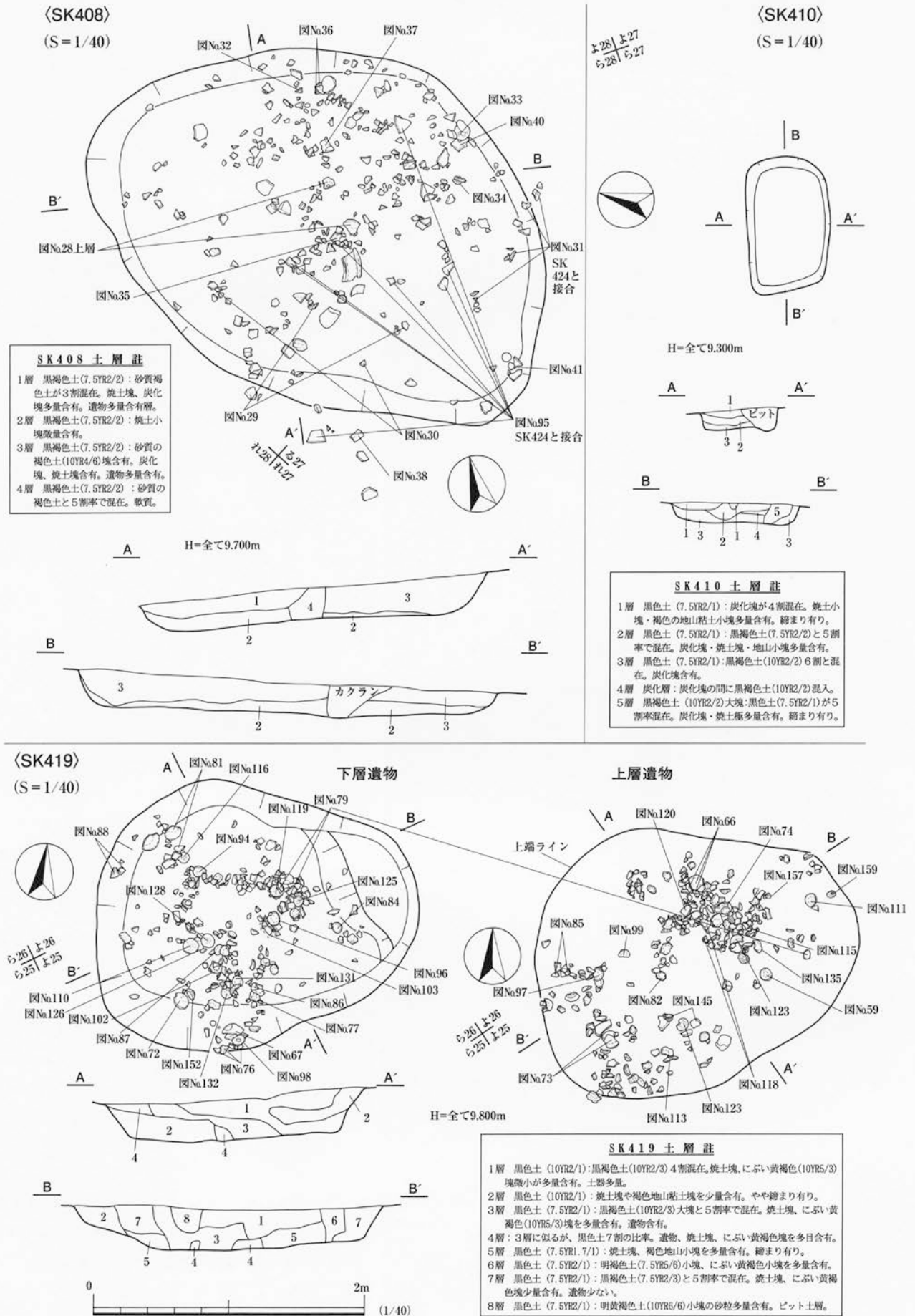


SK409 土層註

1層 黒褐色土 (10YR2/2) : 黒褐色土(10YR2/3)4割混在。遺物多量。炭化塊、焼土小塊、褐色土の地山微小塊を多量に含有。締まり有り。
 2層 黒褐色土 (10YR2/2) : 焼土小塊少量含有。地山土に似るが遺物含有。遺物量は1層より少ない。やや締まり有り。
 3層 黒色土 (10YR2/1) : 褐色土地山小塊を少量含有。遺物含有。やや締まり有り。



第29図 土坑遺構図3 (SK403・SK407・SK409)



第30図 土坑遺構図4 〈SK408・SK410・SK419〉

12. SK419

よ 25・26Gr に位置、洋梨状の不整円形プランで、規模は長径 240 cm×短径 140～200 cm、深さ 30 cm を測るものである。底面を平坦にもち、極めて多量の遺物を伴い、完形や半完形の埴・皿が目立つ。底面から 10 cm 以内に出土する遺物を下層遺物としているが、上層・下層とも同量の出土である。土坑類型は、A 類土坑とする。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 11 点、須恵器貯蔵具 19 点、土師器食膳具 4 点、土師器煮炊具 57 点、石製品 1 点、分銅土師器 1 点、匣鉢片 1 点。中世の土師器食膳具 1,372 点と中世の鉢 2 点である。時期は中世Ⅰ-I 期と判断される。

13. SK421

よ 25・26Gr にて埴・皿の集中出土があり、下底にて落ち込みは確認できなかったものの、土坑として判断したものである。長径 220 cm×短径 100 cm の範囲に遺物は集中しており、類型は A 類としておく。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 2 点、須恵器貯蔵具 4 点、土師器食膳具 2 点、土師器煮炊具 14 点、管状土錘 1 点、石製品 1 点、中世土師器食膳具 134 点である。時期は中世Ⅰ-I 期と判断される。

14. SK422

や 26Gr にて、まとまった遺物時期がみられたために、土坑と捉えたもの。上層遺物を除去後に、下層プランを検出した。上層での遺物範囲は、長径 310 cm×150～208 cm を測り、下層で検出したプランは楕円形を呈し、径 276 cm×164 cm、深さ 12～16 cm を測る。底面は平坦だが、南に向かって若干下がり、覆土は上下 2 層からなるもので、下層は締まりが強い。土坑類型は B 類になるものと思われる。出土遺物総数は、須恵器食膳具 96 点(摩耗痕跡 4 点含む)、須恵器貯蔵具 72 点、土師器食膳具 19 点、土師器煮炊具 351 点、支脚や匣鉢等の土製品 3 点、石製品 3 点、中世土師器食膳具 12 点である。遺物の時期は、Ⅱ 3～Ⅲ期が主体と判断されるが、Ⅲ期からⅥ期までの時期が確認できる。

15. SK423・424

め・も 25Gr で検出されたもので、現地調査では深さに違いが認められたため 2 基が連続しているものと判断した土坑である。但し、遺物整理段階で、接合可能であった土器が多く、1 つの土坑であった可能性が高い。長径は、両者あわせて 675 cm、個別で、SK424 の長径は 400 cm 程×短径 305 cm、SK423 の短径は 200 cm である。両者とも底面は平坦を呈し、深さは両者共 20 cm を測るものの、確認できた覆土の深さであり、SK424 では底面から 20 cm 以上、SK423 では 30 cm 以上のレベルで多くの遺物が出土している。遺物出土状況は、SK423 では須恵器と土師器が 5 割程の割合をもち、細片が多い。一方 SK424 では、須恵器大甕破片がまとまっており、獣脚や陶馬といった特殊品、鉄製品や鉄滓も多く出土する。土坑類型は、両者とも B 類土坑である。出土遺物総数は、SK423 で、須恵器食膳具 245 点(油痕跡 2 点含む)、須恵器貯蔵具 72 点、土師器食膳具 7 点、土師器煮炊具 268 点、カマド石 1 点、円筒形 4 点で、時期はⅣ 2 期を主体にⅡ期～Ⅴ 2 期までが確認できる。SK424 では、須恵器食膳具 360 点(摩耗痕跡 12 点含む)、須恵器貯蔵具 183 点、土師器煮炊具 560 点、中世の鉢片 1 点、中世土師器食膳具 50 点、土錘 1 点、土馬 1 点、カマド 2 点で、時期はⅢ期～Ⅴ期が認められるものの、Ⅴ 1 期が主体と考えられ、中世遺物は混入した可能性がある。

16. SK425

め 26Gr に位置する楕円形の小土坑で、長径 172 cm×短径 124 cm、深さ 38 cm を測るものである。底面の北側に若干窪みをもつものの、ほぼ平坦を呈し、土師器釜が目立つことから、これを主体に廃棄したと考えられる土坑である。類型は A 類とする。出土遺物は、須恵器食膳具 21 点(摩耗痕跡 1 点含む)、須恵器貯蔵具 11 点、土師器食膳具 8 点、土師器煮炊具 225 点、支脚破片 1 点である。時期はⅣ 2 新段階が主体と思われるものの、Ⅴ期のものも認められる。

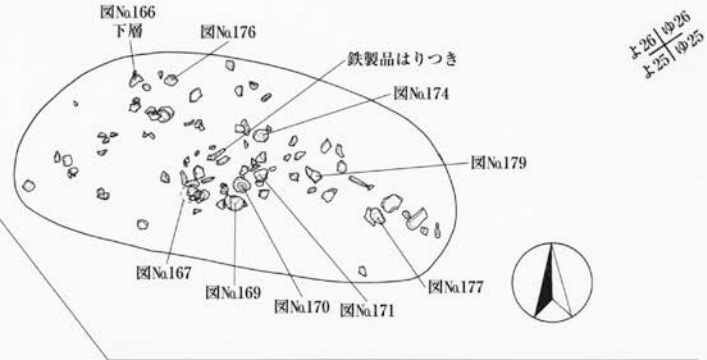
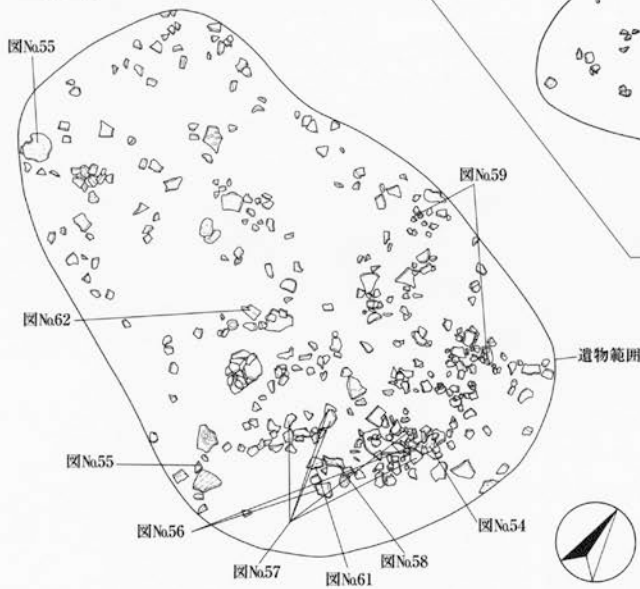
17. SK426

め 25・26Gr に位置し、方形状プランを呈した土坑である。規模は、長径 272 cm×短径 180 cm、深さ 36 cm を測り、底面は北側の一部に若干の落ち込みを有するものの、ほぼ平坦を呈す。規模から、類型は B 型とするのが妥当である。出土遺物には鉄滓が目立ち、特に下層が多い。出土遺物は、須恵器食膳具 90 点(摩耗痕跡 1 点含む)、須恵器貯蔵具 41 点、土師器食膳具 19 点、土師器煮炊具 215 点、円筒形土器片 2 点、カマド石 1 点である。時期はⅣ 2 新段階が主体と考えられる。

〈SK422〉 (S=1/40)

〈SK421〉 (S=1/40)

上層遺物

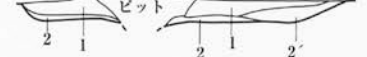


よ26 | も26
よ25 | も25

B B'

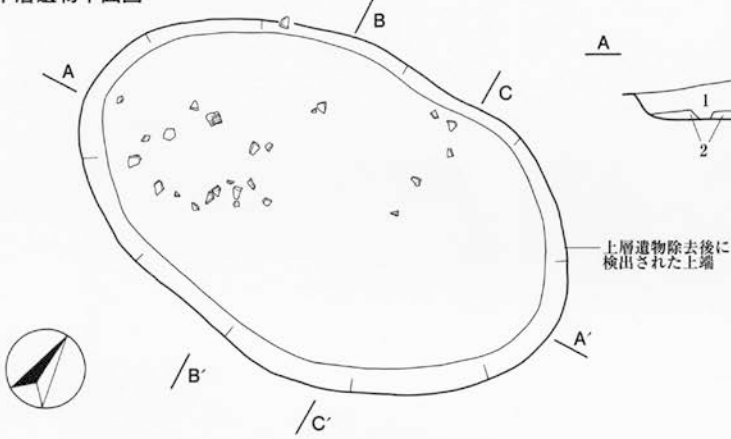


C C'

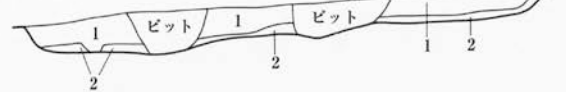


よ26 | も26
よ25 | も25

下層遺物平面図



A A'



H=全て10.000m

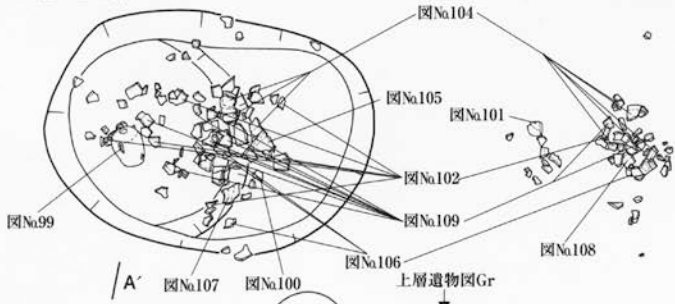
SK422 土層註
 1層 黒褐色土 (7.5YR3/2~2/2) : 暗褐色土 (7.5YR3/3) 1割が混在。炭化塊多量含有。焼土塊多量含有。締まり有り。
 1'層 1層と同層だが、暗褐色土2割、焼土小〜中塊2割の比率で混在。炭化塊多量含有。締まり有り。
 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2) : 暗褐色土 (7.5YR3/3) 塊と5割率で混在。極締まり強く、粘性あり。
 2'層 2層に、焼土塊、炭化塊が多量含有。

よ26 | も26
よ25 | も25

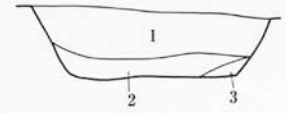
〈SK425〉 (S=1/40)

上層遺物

上層遺物除去後
下層遺物



A A' H=10.700m

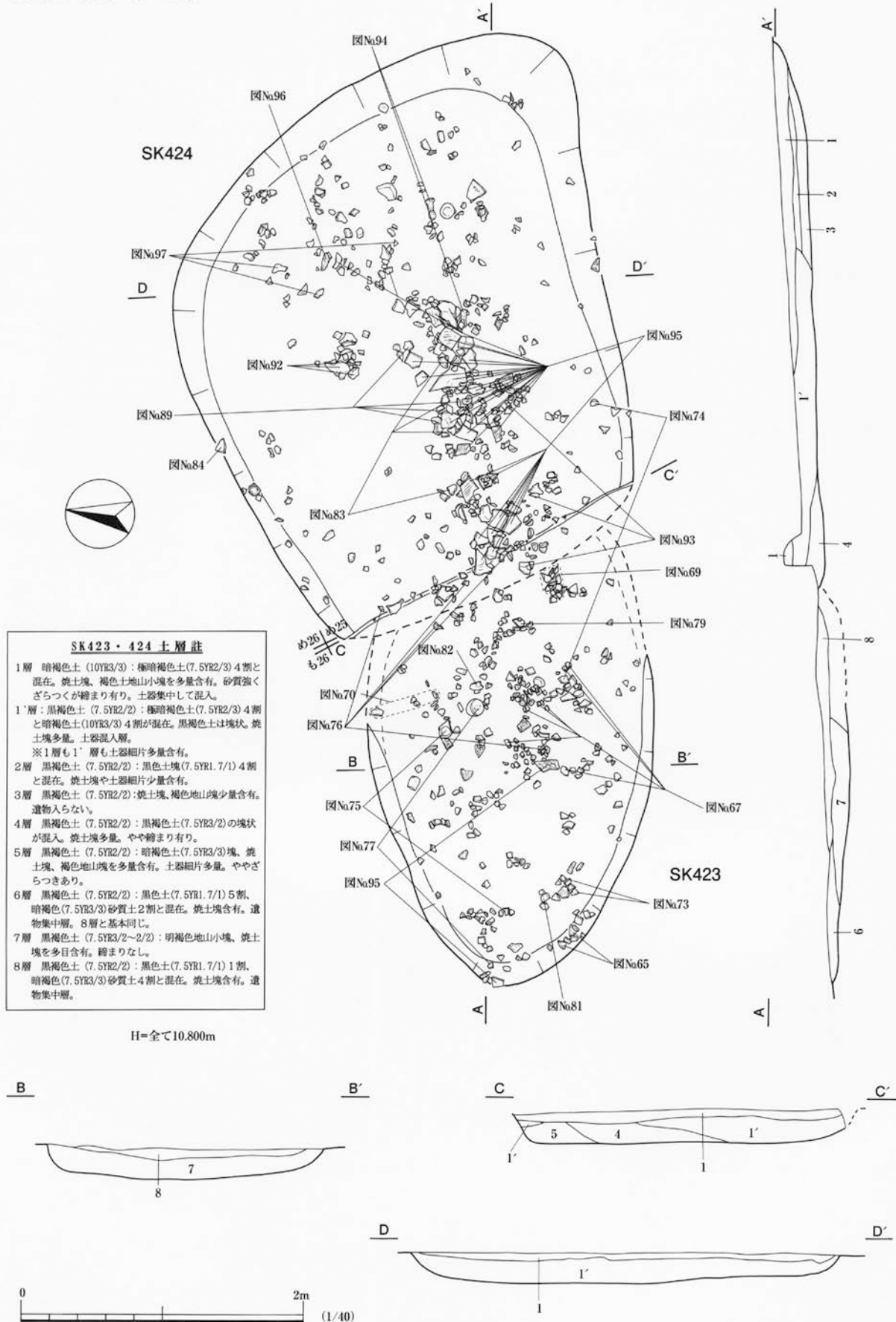


SK425 土層註
 1層 黒褐色土 (7.5YR2/2) : 褐色土 (7.5YR4/4) 塊を多量含有。砂質暗褐色土 (10YR3/3) が筋状に混入。焼土塊・炭化塊多量含有。締まり有り。
 2層 黒褐色土 (7.5YR2/2) : 褐色土 (7.5YR4/4) 多量含有。焼土塊多目、炭化塊を多量含有。締まり有り。1層と似る。
 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2) : 褐色土 (7.5YR4/4) 5割と混在。粘性強く、締まり強。

め26 | め25
も26 | も25

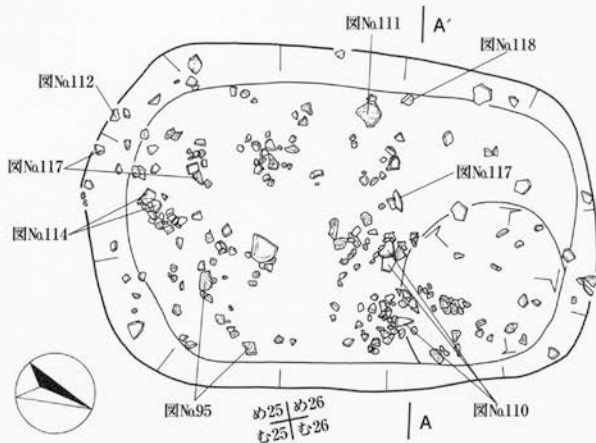
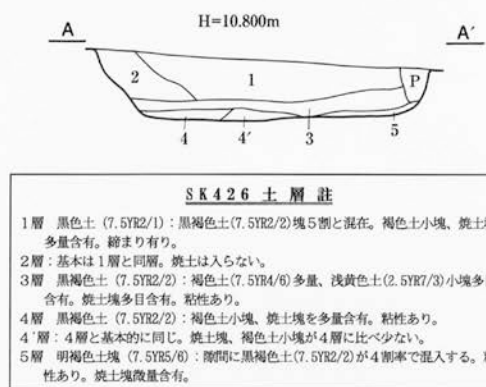
第31図 土坑遺構図5 〈SK421・SK422・SK425〉

〈SK423・424〉 (S=1/40)



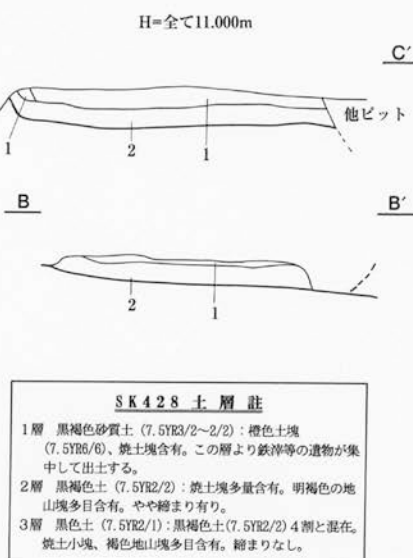
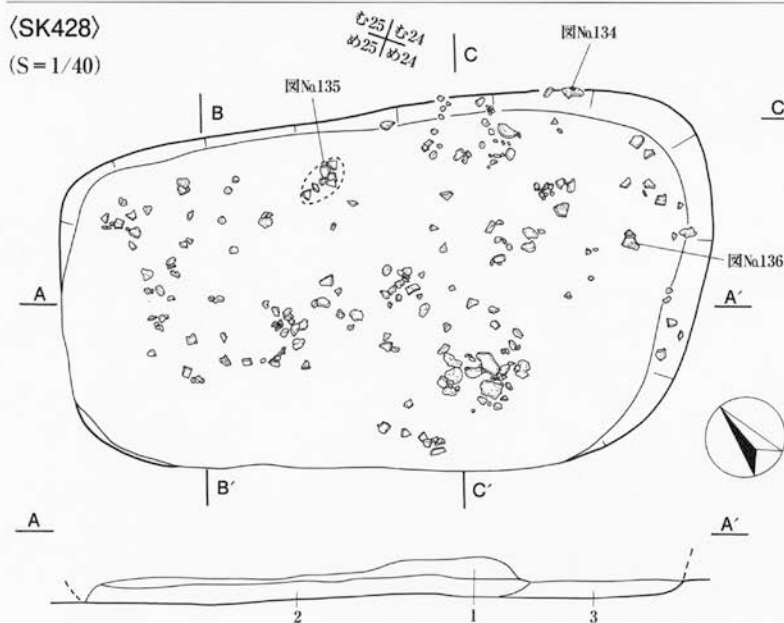
第32図 土坑遺構図6 〈SK423・SK424〉

〈SK426〉 (S=1/40)



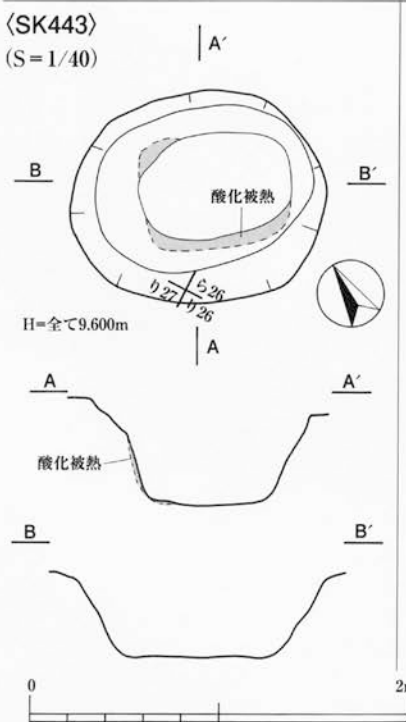
〈SK428〉

(S=1/40)



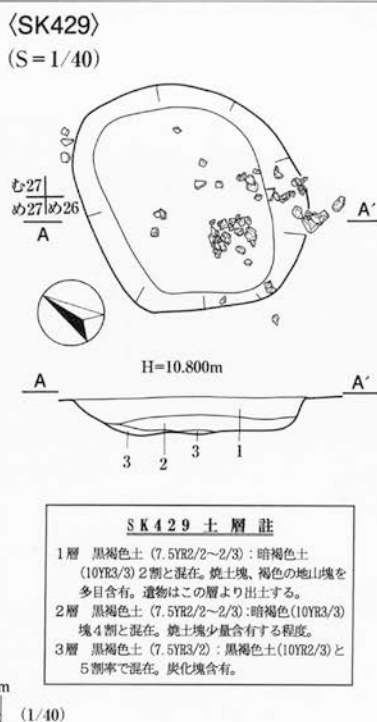
〈SK443〉

(S=1/40)



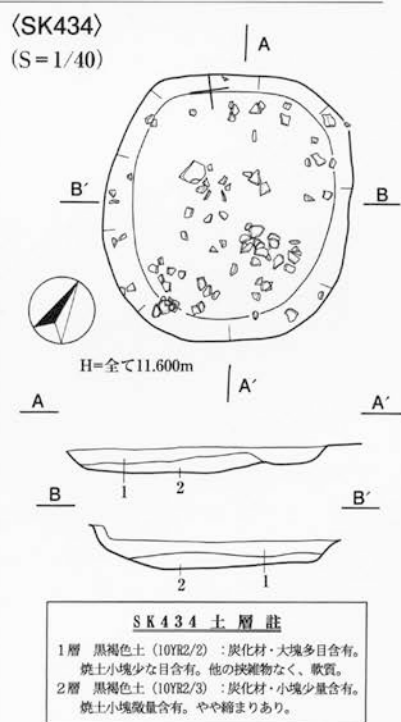
〈SK429〉

(S=1/40)



〈SK434〉

(S=1/40)



第33図 土坑遺構図7 〈SK426・SK428・SK429・SK434・SK443〉

18. SK428

め 24・25Gr で、遺物の集中が認められたため土坑と判断したものである。長径 346 cm×短径推定 200 cm、深さは最大 20 cm を測る。底面は平坦で、出土遺物では鉄滓が非常に多く目立ち、土坑周辺からも出土している。当土坑は SB330 に収まる形で位置、類型は B 類としておく。出土遺物は、須恵器食膳具 47 点（摩耗痕跡 2 点含む）、須恵器貯蔵具 28 点、土師器食膳具 6 点、土師器煮炊具 142 点、カマド石 1 点、円筒形土器 1 点である。時期は、Ⅳ 2 古段階～新段階が主体である。

19. SK429

む・め 16Gr に位置、長径 120 cm×短径 110 cm、深さ 20 cm の小型土坑である。上面から遺物が出土し、鉄滓が非常に目立ち、土坑周辺からも出土している状況である。土坑類型は A 類土坑とする。出土遺物は、須恵器食膳具 5 点、須恵器貯蔵具 7 点、土師器煮炊具 17 点である。時期は、Ⅳ期・Ⅴ期が確認でき、食膳具にもⅤ期のものが出土している。

20. SK434

り 24Gr、SB308 に近接して位置する。規模は、長径 150 cm×短径 130 cm、深さ 15～18 cm を測る、円形プランの小型土坑である。遺物は少ないものの、上下 2 層からなる覆土で、炭化材を多量混在することが特徴である。被熱を有しないため、製炭土坑とは言えないものの炭廃棄の目的で掘り込まれた可能性がある。類型は A 類土坑とする。出土遺物は、土師器煮炊具 1 点のみ、時期は不明である。

21. SK443

ら 26・27Gr に位置、楕円形プランで、規模は 156 cm×110 cm、深さ 50 cm を測るものである。非常に深く、焼土や粘土が混じる覆土をもつ。また、南北の壁面や底部立ち上がりの一部で酸化被熱を検出しているため、焼土坑と考えられ、土坑類型は F 類と判断する。出土遺物は、須恵器食膳具 12 点、須恵器貯蔵具 14 点、土師器食膳具 7 点、土師器煮炊具 102 点であり、時期はⅢ期・Ⅳ期が確認できる。

第 2 項 井戸跡

本遺跡では、井戸跡が 3 基検出されており、今回報告対象となるのは SE02 である。SE02 の上層レベルでは SK400 が連結するように検出されており、現地調査において SE02 の外周土坑と判断しているため、ここで同時に報告する。また、これら井戸と外周土坑を取り囲むように、前述した SB303 も検出されており、簡易な井屋として機能していた可能性がもたれる。

1. SE02 と外周土坑 SK400

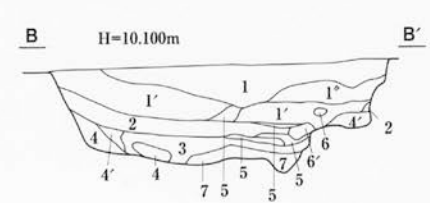
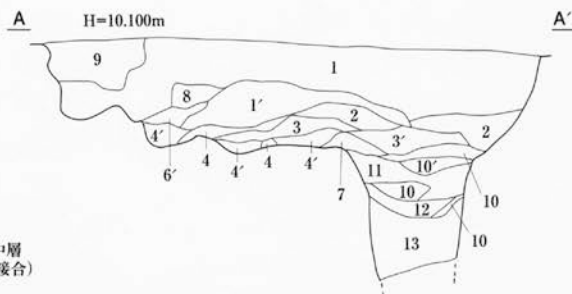
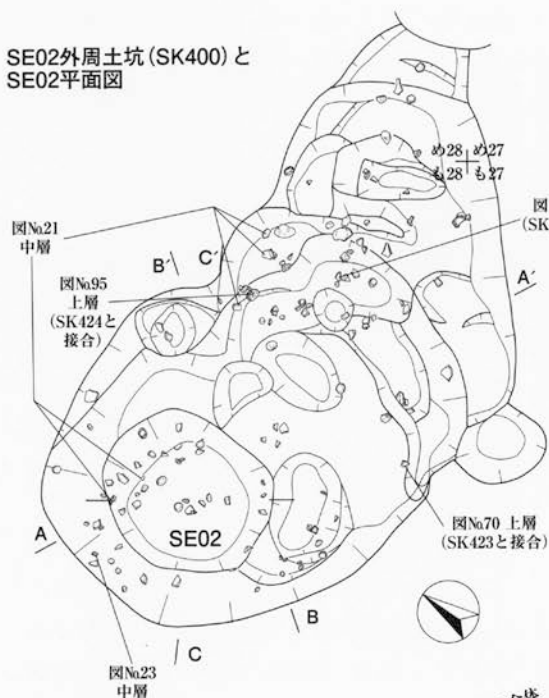
〈立地、外周土坑 SK400 の規模〉 H 地区め・も - 27・28Gr に位置する。SK400 外周土坑は、歪な不定形状プランをもち、土坑西端にあたる最下底平坦面に SE02 井戸が位置する形である。外周土坑は、内部に段や窪みをもちながら検出面から平坦面へかけ 80～90 cm の深さをもち、西側方向から平坦面へ飛び降りる形となるものの、東側からは段状を呈している。いわば、井戸へ向かって降りてゆく形状をもつ。外周土坑の規模は長軸径 415 cm、短軸径 270 cm を測る。深さは、東側から井戸へ向かって次第に深さを増しており、東端で 30～35 cm、次の段階の深さが 50 cm、最終的に深さ 80～90 cm に至る。なお、土坑平坦面の標高は 9.100～9.200 m を測り、この面で SE02 プランが検出されたのである。

〈井戸の規模と形状・埋土〉 SE02 井戸は、プランがやや楕円状の円形で、長径 138 cm、短径 118 cm を測る。深さは検出地面から 336 cm 下で一旦平坦を呈し、この面から先細りのピットが 50 cm 程掘り込まれている。この井戸最下底面では、標高 5.100～5.200 m を測る。調査時に、人力による掘削作業が危険を伴うため、途中段階の標高 6.700 m まで重機で掘削、なお、標高 6.700 m 地点でのプランは円形、長径 84 cm、短径 80 cm を測るため、井戸の断面形状は、上端から次第に先細りする形状となる。

埋土は、基本的に軟質で脆く、上層にあたる 11 層内で人為的な挟雑物である炭化塊が少量、中層にあたる 14 層で少量の遺物が認められるものの、この他は、殆ど焼土塊や炭化塊を含まないものである。自然堆積というより埋め戻されたものとみている。下層にあたる標高 6.700 m 以下では、特に砂質土を主体とした軟弱土で、井戸壁面も砂土が地山土となっており、埋土と壁面地山土の間に流水があったためか、砂土が凝固し砂岩状になる現象が壁面周囲で認められた。前述したように、調査時に標高 6.700 m 以下人力掘削しているが、軟弱層のため、

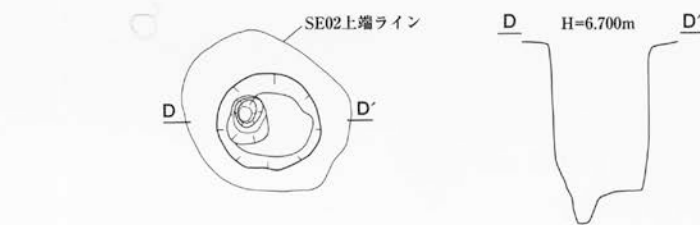
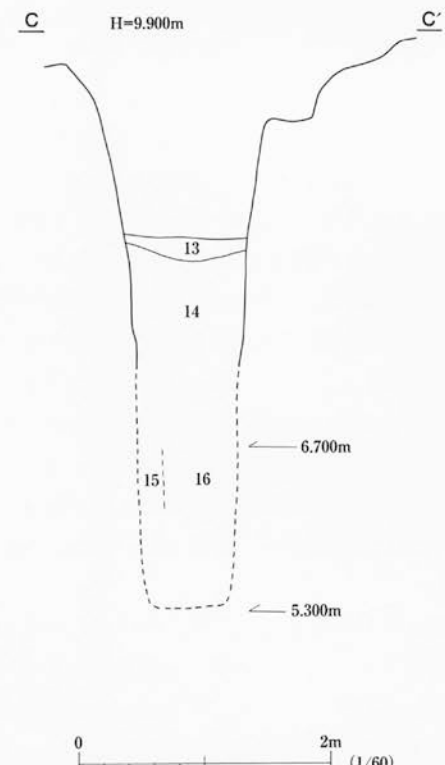
〈SE02〉 (S=1/60)

SE02外周土坑(SK400)とSE02平面図



SE02 標高6.700m 地点Gr
め28 | め27
も28 | も27

標高6,700m地点



SE02・SK400 土層註	
SK400 覆土	
1層	黒褐色土 (7.5YR2/2) : 炭化・焼土塊、土器細片を多量含有。暗褐色土(7.5YR3/4)塊含有。
1'層	黒褐色土 (7.5YR3/2~2/2) : 炭化・焼土塊・明褐色土(7.5YR5/6)の小塊、土器細片を極少量含有。 1''層 : 1層と同層。炭化・焼土・暗褐色塊がやや少なめ。塊が細かい。
2層	黒褐色土 (10YR2/2~2/3) : 褐色土(7.5YR4/6)大塊・暗褐色土(7.5YR3/4)大塊・褐色土微小塊を多量、炭化塊含有。
3層	黒褐色土 (7.5YR2/2~2/3) : 褐色土(7.5YR4/6)小塊~大塊を極少量含有。締まりなし。
3'層	基本的な3層と同層。3層に比べ褐色土塊少な目。
4層	黒褐色土 (7.5YR3/2) : 褐色土(7.5YR4/6)塊4割、黒褐色土(10YR2/2)塊2割と混在。炭化塊少量含有。粘性有り。軟質。
4'層	4層と同層。夾雑物の比率が違ふ。褐色土塊3割、黒褐色土塊2割。
5層	黒褐色土 (10YR2/2) : 締まりなし。
6層	明褐色土塊 (7.5YR4/6) : 隙間に黒褐色土(7.5YR2/2~2/3)2割混入。
7層	褐色土塊 (7.5YR4/4~4/6) : 黒褐色土(7.5YR3/2)が2割混在。締まり有り。
8層	黒褐色土 (10YR2/3) : 明褐色土(7.5YR5/6)大塊が2割混在。締まり弱い。焼土小塊・炭化塊を少量含有。
9層	黒褐色土 (10YR3/2~2/2) : 褐色土塊(7.5YR4/4)が微量含有。焼土微量含有。
SE02 覆土	
10層	明褐色土塊 (7.5YR5/6) : 黒褐色土(7.5YR3/2)が2割混在。明褐色土塊は締まりもつが、全体的に軟質。
10'層	8層と同層。明褐色土塊と黒褐色土の比率は5割弱。
11層	黒褐色土 (7.5YR2/2) : 5割、黒色土(7.5YR2/1)4割、褐色土(7.5YR4/6)小~中塊1割が混在。炭化塊含有。締まりなく、頗る軟質。
12層	黒色土 (7.5YR2/2) : 締まりなし。
13層	黒褐色土 (7.5YR2/2)3割、暗褐色土(7.5YR3/4)3割、明褐色土(7.5YR5/6)中~大塊4割と混在。やや締まり有り。
14層	褐色土塊 (7.5YR4/4~4/6) : 黒褐色土(7.5YR3/2)4割、黒色土(7.5YR2/1)塊1割と混在。砂質明褐色土(7.5YR5/6)の大塊多目含有。締まりなく軟質。土器少量含有。
15層	褐色粗砂土 (7.5YR4/4) : 暗褐色粘土(7.5YR3/3)塊が1割混在。黒褐色粘土(7.5YR2/2)小~大塊少量含有。軟質で締まりなく脆い。
16層	褐色 (7.5YR4/4)砂岩状が4割と、暗褐色粘土(7.5YR3/3)大塊4割の隙間に粗砂褐色土(7.5YR4/4)が2割混入。炭化塊少量含有。締まりなく脆い。 ※15層・16層は調査時既に崩壊した。

第34図 井戸遺構図 〈SE02・外周土坑 (SK400)〉

途中で埋土が崩れ崩壊している。総じて埋土は、前回報告の SE01 や SE03 に比べ、極めて綺麗な状態で生活痕跡の夾雑物が少ないこと、壁面等にも使用痕跡が認められないことから、井戸掘削土をそのまま埋め戻した可能性が高いとみている。平坦底面以下に掘り込まれたピットは、湧水を求めて掘削してみたという印象であり、調査時での掘削中も湧水は全く認められなかった。よって、この井戸は使用されなかったのではないかと考えている。

〈遺物出土と関係性〉 SE02 井戸からの出土遺物は、須恵器食膳具 5 点、須恵器貯蔵具 7 点、土師器煮炊具 6 点、中世土師器食膳具 34 点と非常に少量である。時期は、下層から出土する中世Ⅰ－ⅡⅠ期が主体であり、混入する古代遺物はⅣ期・Ⅴ期のものである。

SK400 外周土坑からの出土遺物の総数は、須恵器食膳具 105 点、須恵器貯蔵具 118 点、土師器食膳具 10 点、土師器煮炊具 99 点、中世土師器食膳具 269 点、灰釉・白磁片 7 点、管状土錘や製塩土器の土製品 2 点、石製品 3 点である。時期は、古代遺物はⅤ期、中世遺物は中世Ⅰ－ⅡⅠ期で、2 時期が確認できる。

以上のように時期を確認すると、ⅣⅡ～Ⅴ期段階で土坑が単独で機能し、その後、中世に入った段階で井戸と土坑が関連性をもって機能していたものと思われる。なお、同じく重複する SB303 は遺物からの時期判断は不明だが、建物構造的に中世である可能性が高い。とすると、SB303 も同時に機能していた可能性がもたれる。よって、当井戸には簡易な覆屋が付いていた可能性がある。

第3節 手工業生産関連遺構

これまで報告書Ⅱから前回の報告書Ⅳに渡って報告してきたように、本遺跡では手工業生産を生業としていたことは明らかである。遺構では、土師器焼成坑、鍛冶炉、製炭土坑が多く検出されており、遺物では土師器焼弾品、鉄滓・鍛造剥片・坩堝滓をはじめ、鉄滓が付着する石、多くの鉄製品や鍛冶道具類など、遺構を裏付けるものが多く出土し、この他にも、南加賀窯跡群で出土するような窯道具である焼台や窯壁など、多くが出土するからである。

さて、今回報告区域では、土師器焼成坑 1 基、鍛冶炉 4 基、製炭土坑 4 基が検出されている。平面的な位置関係を述べると、H 地区の中央、H 地区と G 地区の境にある遺構密集区域より南側のひらけた空間を挟むように、それぞれの遺構が位置している。今回報告の生産遺構が、比較的まとまった区域にて検出されたことは、これまでの様相とは少し異なっている。それは、この位置関係が、意図的な配置か否かはわからないものの、製炭土坑を中央にして東西に 2 基ずつ鍛冶炉が位置することである。

なお、ここで前回報告分について、訂正がある。前回報告分布図で示されている SK415 は土師器焼成坑でなく焼土坑と判断し、ここに訂正する。また、前回分布図には掲載されていなかったのだが、SK412 の西側隣りには、SJ66 製炭土坑が位置することを付け加えておく。

第1項 土師器焼成坑 (SK394)

今回報告は SK394 の 1 基である。酸化被熱焼成が認められるものだが、焼き損じ品が検出されていないので、土師器焼成坑と断言できず、可能性が極めて高いだけに止めておく。規模は長径 117 cm×短径 60 cm を測り、この範囲が酸化被熱する。上層部分がかかなり削平されているとみられるが、南側から北側に向かい、底面を平坦にもちながら立ち上がって緩やかな壁面を形成していたものと考えられる。また、この土師器焼成坑には、掘方が確認されている。掘り込んだ地山に 3～5 cm の黒褐色土を投入し、この上位層に 3～8 cm の厚みの粘土を貼って床面を形成しているものと考えられる。なお、重複する掘立柱建物 SB304 との関連だが、掘立柱建物の検出レベルよりも 50 cm 上位で当遺構が検出されていること、被熱面のレベルも掘立柱建物より 30 cm 上位であり、両者に関連性はないものと考えている。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具 1 点、須恵器貯蔵具 2 点と極めて少なく、時期を判断することは難しい。

第2項 製炭土坑

今回報告の製炭土坑は 4 基である。2 カ所に分かれる鍛冶炉群の中間、鍛冶炉に挟まれるように位置しており、鍛冶炉近くで検出されている。

1. SK404

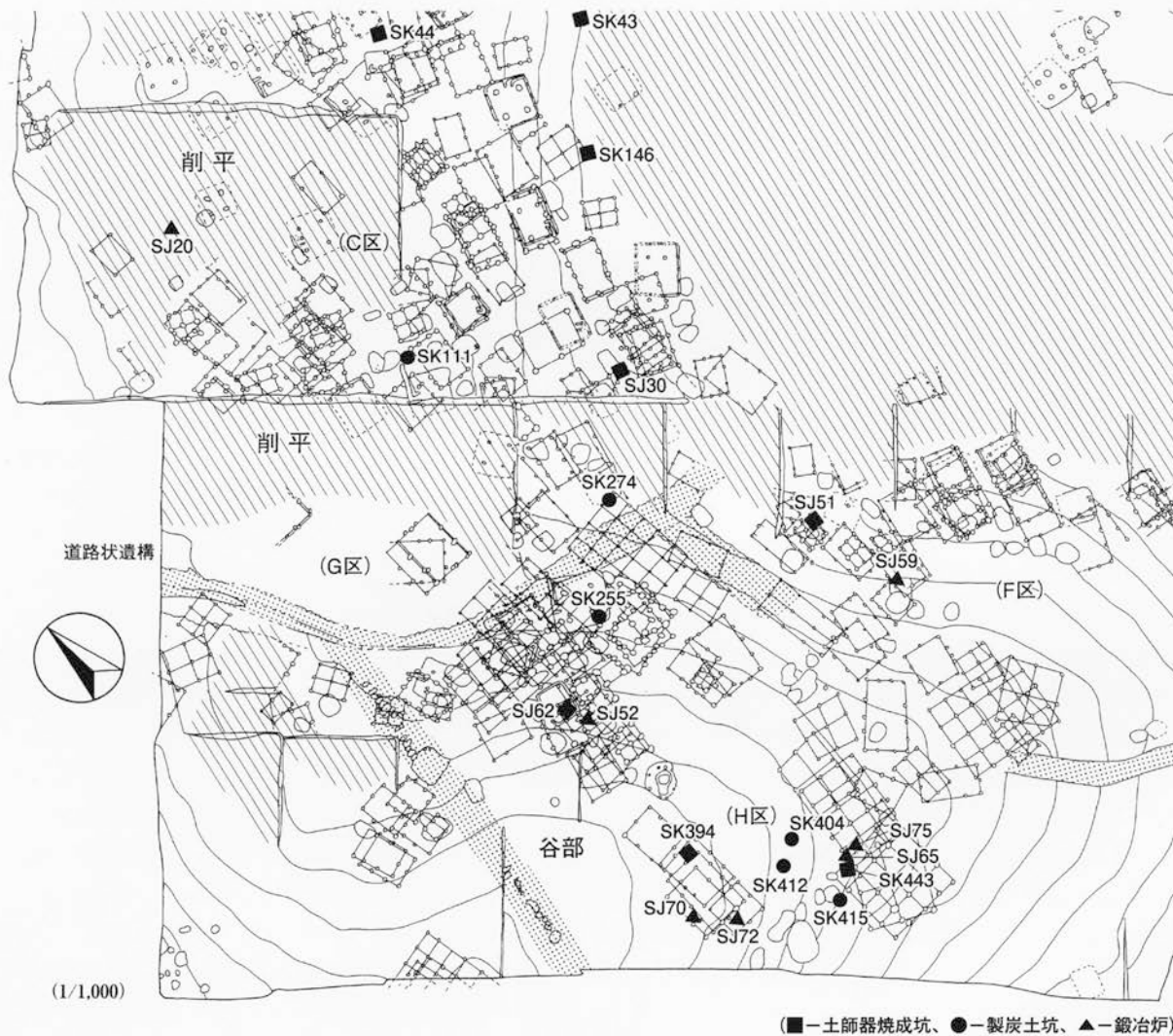
ら28Gr内、ら28Gr杭・ら29Gr杭の中間に位置する。方形土坑状を呈しており、規模は長径75cm×短径58cm、深さは20～22cmを測り、底面をほぼ平坦にもつ。壁立ち上がりは緩やかで、底面から5～6cm上位で炭化層が検出され、壁際まで及んでいる状態である。この炭化層は4層にあたり、4層に接する壁面が被熱する。また、炭下層の中央には、大きめの炭化材が集中して検出されている。

出土遺物は総数で、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具4点と極めて少ない。煮炊具はⅢ～Ⅴ期の特徴を備えているものであるが、当土坑の時期は判断しかねるものがある。

2. SK412

ら28Gr内だが、り29Gr杭に近く、SJ66のすぐ南西に隣接するものである。土坑状を呈して底面は平坦、底面からの壁立ち上がりは緩やかで、北側のみ傾斜が強く、西側・南側には幅の狭いテラスが設けられている。土坑規模は、長径100cm×短径85cm、深さは17～18cmで底面となる。上面から10cmで炭化層をもち、テラス側の壁までも続く。壁面には、部分的な酸化被熱が認められ、この被熱は、明赤褐色塊の隙間に黒褐色土や炭が混入するものの弱い被熱である。

出土遺物は、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具29点である。土師器煮炊具破片は、北陸型煮炊具の特徴を備える破片であり、時期はⅡ3期以降が確実と思われるものの、断定することはできない。



第35図 B・C・F・G・H区の手工業生産関連遺構分布図

3. SK415

り27Grの南側、SK431を切って構築されているもので、胴張りの楕円形を呈したプランをもち、規模は長径60cm×短径43cm、深さ6cmを測る。北側壁が酸化被熱し、底面には炭化層が認められ、特に西側に炭化材が集中する。残存状況があまり良くないのだが、北側から南側の斜面に掘り込まれ、南側奥壁をしっかりとった構造であったと予想している。また、底面は若干窪んだ状態をしていたものと判断される。製炭土坑で、この1基だけが少し離れて位置している。

出土遺物は、土師器食膳具3点、土師器煮炊具4点のみである。土師器食膳具では、8世紀代の内黒高坏が認められるものの、時期判断は難しい。

4. SJ66

ら28Gr内になるのだが、り29Gr杭に極めて近く、SK412の北側に隣接して位置するものである。プランは不明で、土坑状の落ち込みは検出できていないものの、長径75cm×短径70cm範囲に、粘土分布と被熱面と炭化層が検出されたことにより、製炭土坑の可能性のあるものとして報告する。粘土は3～4cmの厚みをもち、この粘土の東側が被熱する。粘土の下位は地山となるため、恐らく最下底面が辛うじて検出されている状況だと思われる。よって、人為的に粘土を貼った、貼床をもっていたものと考えられ、粘土層の東側には、弧を描いて幅の狭い炭化層が、地山に食い込んでいる状況で検出されている。

出土遺物は須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具7点、土師器煮炊具9点、中世土師器食膳具が1点であり、時期は須恵器食膳具でⅢ～Ⅳ1期を示すものがあるものの、時期を判断することは難しい。

第3項 鍛冶炉

今回報告となる鍛冶炉は、SJ65・SJ70・SJ72・SJ75の4基である。鍛冶炉には、精錬鍛冶と鍛錬鍛冶があり、精錬の場合には、炉を壊して鉄素材を取り出すため上部の構造がわかる例は少なく、炉に付属する遺構としては、送風管(羽口)座、送風管に空気を送る鞆座がある。鍛錬の場合には、叩き台石、鍛冶場を被う施設などがある。

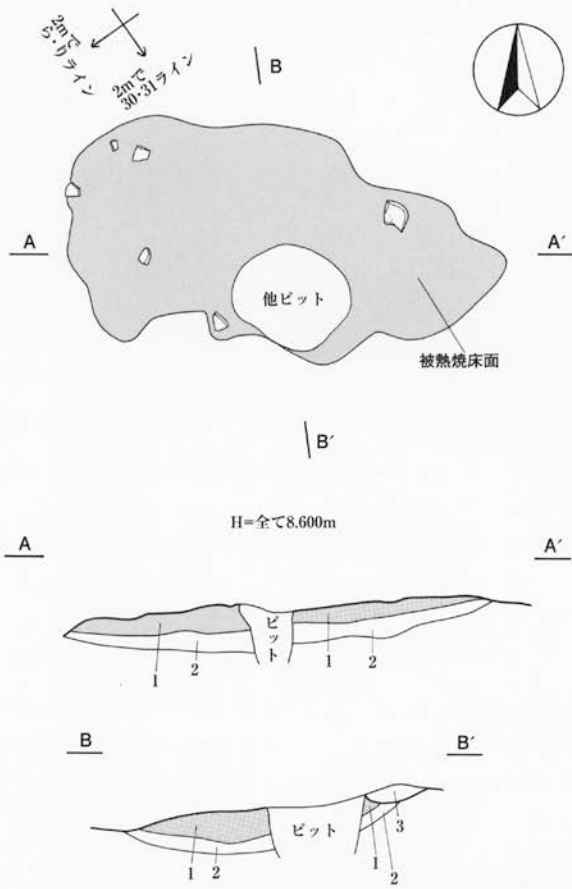
本遺跡でも、炉の上部構造がわかるものは1つも検出されておらず、炉面下底のみ検出される状況である。しかし、鍛冶炉内や周囲から出土する遺物により、本遺跡では、精錬・鍛錬鍛冶の両方が行われていたものと考えられている。当遺跡で検出されている炉底部に残された流動滓や大型の塊形鍛冶滓、羽口は精錬鍛冶に付随するものであり、一方で、炉床土内で検出された鍛造剥片や粒状滓、叩き台石など精錬鍛冶を行った痕跡があるからである。両方を分業する形で炉を設けていた可能性もあろうが、額見町遺跡Ⅲ 第Ⅱ章第2項では、穴澤氏教授により、様々な行程を可能とする鍛冶炉であったものと推測されている。

さて、4基の鍛冶炉のうち、SJ70・SJ72・SJ75の3基が古代末から中世にかけての建物構造をもつ低床の総柱建物内で重複する。本遺跡では、これまで報告されてきた事例から、掘立柱建物内に収まる形で検出される例、竪穴建物内で検出される例、屋外で単独の炉として検出している例がある。鍛冶炉の炎色を識別するために室内に設けられる方が都合がよいとされることから、掘立柱建物の重複は覆屋としての可能性が考えられると、これまでの報告で指摘してきた。また、屋外単独炉の事例においても、本来は覆屋があった可能性を掲げている。そして総柱建物との重複については、構造的に無理があるとして、これまで除外してきた。しかし、今回は総柱建物内の重複のみとなっている。中世掘立柱建物は低床構造であり、建物内には低い床が設けられているのが特徴である。こういった建物構造の中で鍛冶炉を設置するためには、土間が必要となるだろう。しかし、本遺跡では、鍛冶炉周囲の硬化、総柱内部の部分的な硬化というような検出がされておらず、確実に土間とも判断できないことから、建物との共存を証明するに至っていない。

1. SJ65

ら27Gr、H地区内中央を走る浅谷の中央の、今回報告の鍛冶炉で最も標高が高い9.500mに位置する。鍛冶炉上部はなく、中心が窪む小型円形状の還元炉床が残存しており、5.5～7.0cm厚の覆土により埋まった状態である。還元炉床は、粘土を貼って構築されており、黒色を呈して被熱焼結・硬化する。炉床の規模は、径30～32cmで、厚みは2～5cmを測る。還元層の下位層では、還元が及ばず、粘土質が残る状態である。覆土は、黒褐色土がベースで、黒色の焼粘土塊が極めて多量に混じって焼土塊も含まれる土で、1層には小鉄滓が多量に含まれている。当鍛冶炉はSK443やSD69と重複するが、両者を切って構築されている。また、掘立柱建物や総

〈SK394:土器焼成坑〉 (S=1/20)



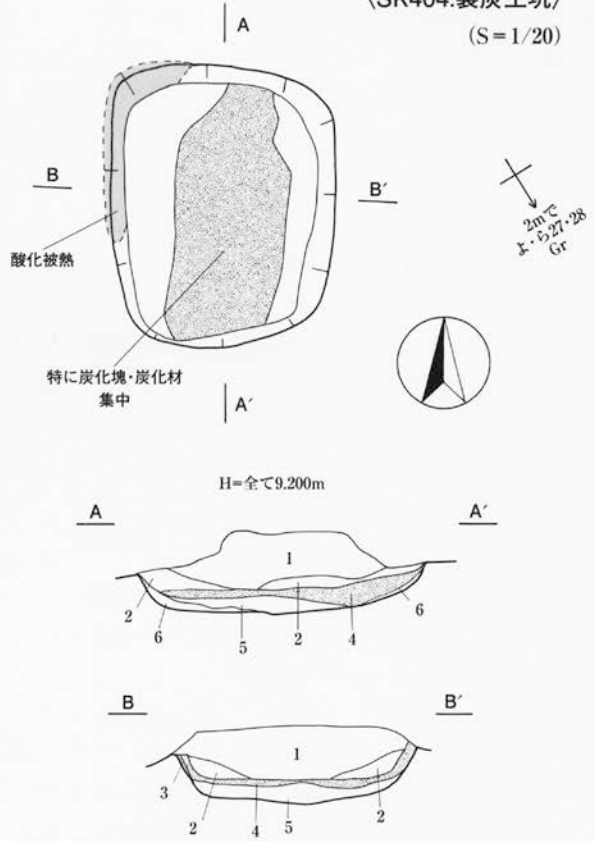
SK394 土層註

1層 明赤褐色(5YR5/8): 強く被熱した粘土層。黒色土上に粘土を貼り付けて床とし、これが被熱する。表面は明褐色で、2層近くは暗赤褐色(5YR3/4)を呈す。

2層 黒褐色土(7.5YR3/2): 焼土小塊混在。炭化小塊も含有。被熱を受けて若干赤味帯びる。

3層 黒褐色土(10YR2/2): 焼土小塊・中塊多量含有。焼成坑の上層土。

〈SK404:製炭土坑〉 (S=1/20)



SK404 土層註

1層 黒褐色土(7.5YR2/2): 黒色土(7.5YR2/1)と5割率で混在。炭化大塊少量含有。明褐色土微小塊を微量含有。

2層 黒褐色土(7.5YR2/2): 黒色土(7.5YR2/1)と5割率で混在。これが基本土で、炭化小塊~大塊を多量含有。基本土との割合は炭化塊4割。焼土小塊を少量含有。やや締まり有り。

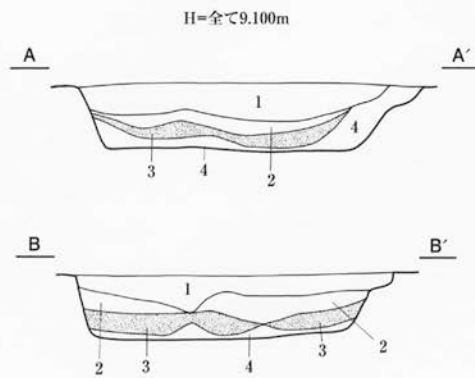
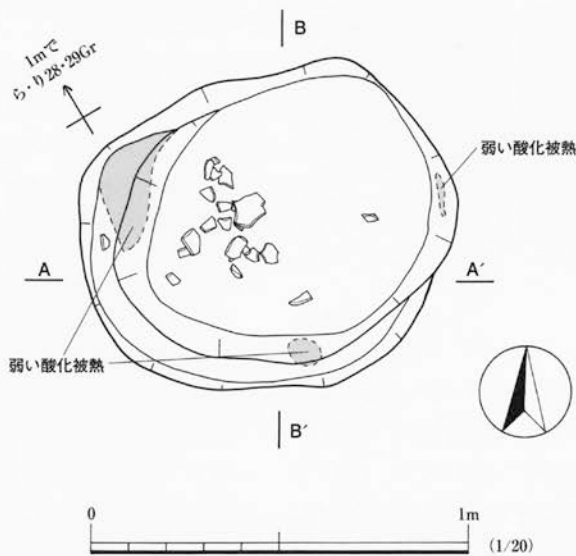
3層 赤褐色塊(5YR5/6)と炭化塊が混在。これらの隙間に黒褐色土(7.5YR3/2)が3割率で入る。土中の粘土塊が被熱するが、弱いものである。

4層 炭化層: 炭塊(径1cm大~棒状径5cm程度)がベースになっており、間に黒褐色土(10YR2/3)が3割率で混入。焼土塊も多い。

5層 黒褐色土(10YR2/3): 炭化塊や焼土を多量含有。

6層 黒褐色土(10YR2/3): 炭化塊少量含有。

〈SK412:製炭土坑〉 (S=1/20)



SK412 土層註

1層 黒褐色土(7.5YR2/2~2/3): 焼土小塊・炭化塊微量含有。この層のみから遺物出土する。締まり有り。

2層 黒色土(7.5YR2/1): 炭化小塊~大塊極めて多量含有し、4割率を占める。褐色土塊微量含有。締まり有り。

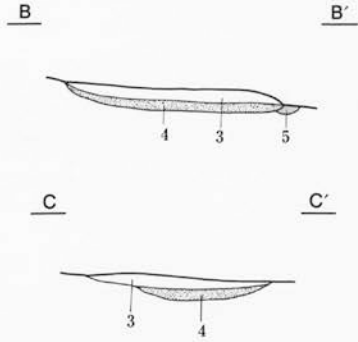
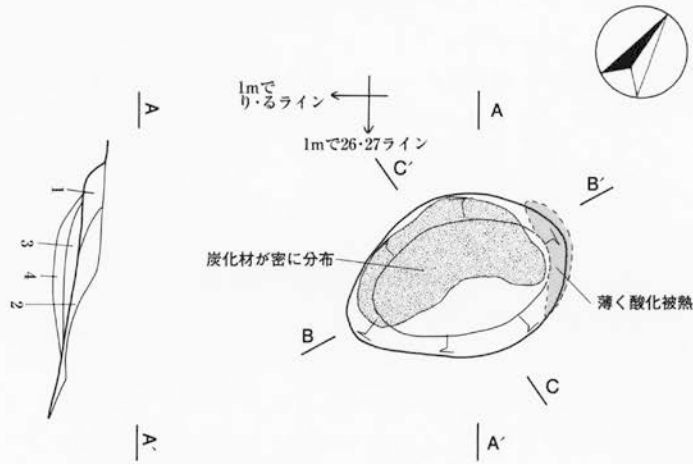
3層 炭化塊: 黒色土が隙間を2割程度埋める。炭化塊は小塊~大塊、特大含有。締まり有り。

4層 黒色土(7.5YR2/1): 炭化塊1割混在。やや締まり有り。

第36図 手工業生産関連遺構図1 〈SK394・SK404・SK412〉

〈SK415:製炭土坑〉 (S=1/20)

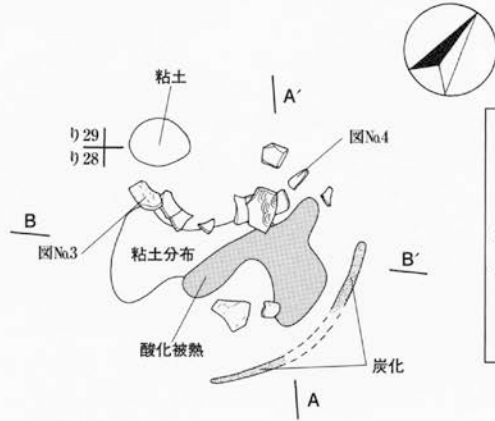
H=全て9.700m



SK415 土層註

- 1層 黒色土 (10YR2/1) : 黒褐色土(10YR2/2)が4割混在。褐色土小塊を少量含有。
- 2層 黒色土 (10YR2/1) : 黒褐色土(10YR2/2)が4割混在。褐色土小塊、焼土塊、炭化塊を多目含有。
- 3層 黒(褐)色土 (10YR2/2~2/1) : 炭化材中塊・大塊を極多量の2割程含有。焼土小塊多目含有。
- 4層 黒(褐)色土 (10YR2/2~2/1) : 炭化材極多量の5割程含有。炭化材が突き詰められている印象である。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2) : 焼土小塊極多量(3割程)含有。被熱壁面。

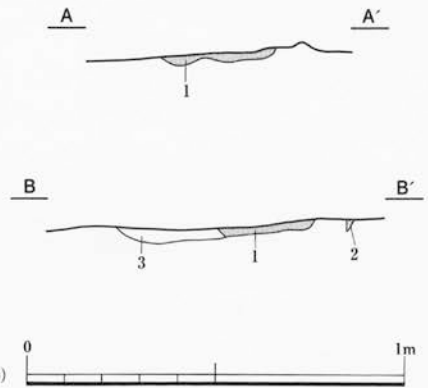
〈SJ66:製炭土坑〉 (S=1/20)



SJ66 土層註

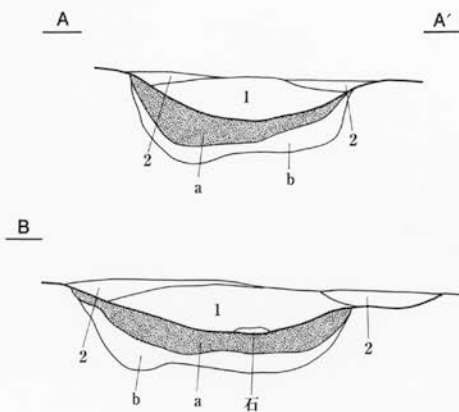
- 1層 赤褐色土塊 (5YR4/6) : 隙間に暗赤褐色土(5YR3/2)2割程、炭化塊が少量入る。締まり強。被熱。
- 2層 黒色土 (10YR2/1) : 炭化材層。
- 3層 明褐色粘土塊 (7.5YR5/6) : 塊単位は中〜特大。隙間に極暗褐色土(7.5YR2/3)混入。締まり強く、硬め。

H=全て9.100m



〈SJ65:鍛冶炉〉

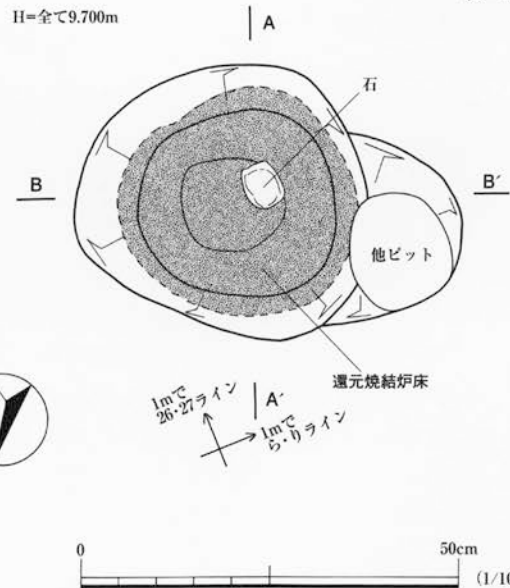
(S=1/10)



SJ65 土層註

- 1層 黒(褐)色土 (10YR2/2~2/1) : 黒色(10YR1.7/1)焼粘土中塊を極多量(3割程)含有。黒(褐)色焼粘土(10YR3/1~2/1)多量含有。焼土中塊多目含有。小鉄滓多量含有。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3) : 黒色(10YR1.7/1)焼粘土中塊を多量含有。焼土小塊少量含有。
- a層 黒色還元焼結 (N2/) : 粘土の強く還元焼結した層。締まり強く硬化。炉床土。
- b層 黒褐色土 (10YR2/2) : 粘土帯びる層。夾雑物なし。炉床下面土。

H=全て9.700m



第37図 手工業生産関連遺構図2 〈SK415・SJ66・SJ65〉

柱建物との重複は認められないものの、極めて近接して位置する。当鍛冶炉が、屋外炉である可能性もあろうが、やはり極めて簡素な覆屋があった可能性ももたれる。SJ65内からは、鍛冶滓・含鉄鍛冶滓が出土し、周辺からは塊形鍛冶滓（含鉄品含む）の極小片・羽口・含鉄鍛冶滓・鍛冶滓・含鉄流動滓・鍛造鉄製品・鑄造鉄製品が出土している。精錬鍛冶を主体として、鍛錬鍛冶も行われた可能性ももたれる。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具6点、中世土師器食膳具2点である。須恵器食膳具ではⅣ1～Ⅳ2期の時期が確認できるものの、中世のものである可能性もあろう。

2. SJ70

る30Gr、SB306に収まるように位置し、SK396とも重複する。炉床の下層に還元被熱層が認められ、この上層に、粒状鉄滓を多量に含む砂質系暗褐色土が確認されている。要するに、敷砂の痕跡が確認できているものであり、本遺跡での同事例は、SJ03やSI37鍛冶炉があり、塊形滓の剥離をたやすくするためであった可能性をもつ。還元炉床は、粘土で構築された貼床が還元して黒色を呈しており、規模は長径25.5cm×短径21cmである。断面形状は塊形状を呈して中央が窪み、なお、鍛冶炉南側を中心に壊されたと思われる。この鍛冶炉は、SB306内に位置しているものの、SB306は低床の総柱建物であり、両者の共存があったか否かは判別できない。これに関しては冒頭で述べた通りである。SJ70からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄）の極小片・鍛造鉄製品・炉壁・炉材石が出土しており、周辺からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄品含む）の極小片・鉄塊系遺物・炉壁が出土する。総じて、精錬鍛冶を行った炉である可能性が高いと思われる。

出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具2点、中世土師器食膳具9点が出土する。時期の判断出来るものは中世遺物であり、中世1-I期?と確認できる。

3. SJ72

SJ70から1Gr分南、る29Grにあたり、SB307内に収まるように位置するものである。SJ70と同様にSB307も中世掘立柱建物・低床構造で、両者が共存していたか不明である。SJ72は、上位層のかかなりの部分が削られてしまっており、炉床が露出して上面が剥がれている状態で検出されたもので、よって埋土はない。炉床は還元被熱し、規模は長径37.5cm×短径25～33.5cmを測る。炉床中央には、特に硬化し黒灰色を呈した強い還元被熱箇所が認められる。この還元層は、最大のもので長径20cm×短径9cm、5～8cmの厚みをもつ。炉床付近からは、羽口破片や石、塊形鍛冶滓が出土している。石は、石囲炉の炉材石や、石座の可能性をもつと思われる。また、周辺のグリッド内からも炉材石や流動滓が検出されており、これらからみると、精錬鍛冶を行った炉ということが出来る。一方で、鍛造の石製品が検出されることから、鍛錬鍛冶も行われた可能性をもつ。

SJ72からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄品含む）の極小片・羽口・含鉄鍛冶滓・鍛造鉄製品が出土しており、周辺からは、鍛冶滓・含鉄鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄含む）の小片・鍛造鉄製品・炉壁・炉材石・流動滓が出土する。この他の出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具7点、中世土師器食膳具9点である。須恵器食膳具ではⅥ2～Ⅵ3期の時期が確認できる。

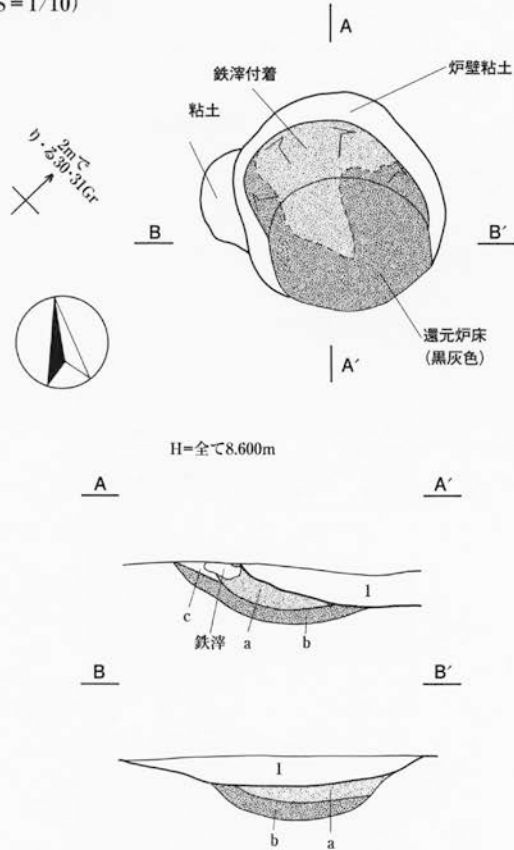
4. SJ75

SJ65東側に隣接して位置する鍛冶炉である。包含層掘削途中に鍛冶炉を検出した経緯で、周囲と上面がかなり削られてしまったものの、炉床のみが残存していた状態である。炉床は青灰色に還元して焼結する粘土層と、その下層に黒（褐）色に半還元する粘土層の2層が認められる。炉床土の下位層で、地山土が被熱する層が認められるため、炉床粘土は地山に貼っているおり、炉床面は中央が窪む形状をしていたと思われる。なお、還元炉床の規模は、長径12.5cm×短径9.0cmである。

SJ75から出土する鉄関連遺物はないが、周辺からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓・含鉄鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄品含む）極小片・鍛造鉄製品・鑄造鉄製品が出土する。これらの出土品が全て当鍛冶炉に伴うものとは言えないものの、精錬鍛冶・鍛錬鍛冶行程の最終段階の作業を主とする小型の鍛冶炉と予想する。鍛冶関連遺物の他に土器などの遺物出土がないため、時期は不明である。よって、近接するSJ65とSJ75が同時併存かどうかは確定出来ないものの、鍛冶関連出土遺物がよく似ている。SJ65も精錬鍛冶・鍛錬鍛冶を同じ炉で行った可能性があるとしたため、一方で精錬鍛冶・鍛錬鍛冶の炉として、それぞれ分担して使い分けがされていた可能性も推測したい。

〈SJ70:鍛冶炉〉

(S=1/10)



SJ70 土層註

1層 黒褐色土 (10YR2/2) : 炭化小塊多目含有。(黄)褐色土小塊少量含有。小鉄滓多量含有。

a層 暗褐色砂質土 (10YR3/3) : 粒状鉄滓を多量含有。灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土小塊を極多量含有。炉床土。

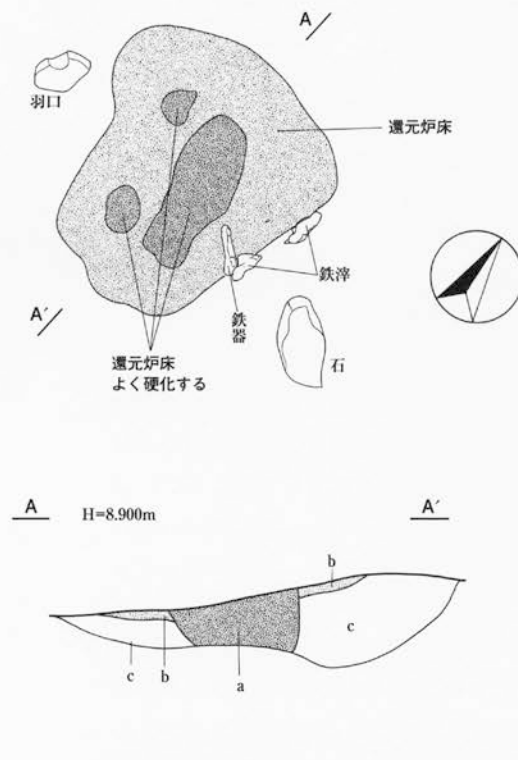
b層 黒色還元被熱粘土 (2.5YR2/1) : 貼った粘土層が還元被熱。

c層 灰黄褐色砂質粘土層 (10YR4/2) : 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土小塊を極多量含有。炉壁粘土?

〈SJ72:鍛冶炉〉

(S=1/10)

2mで
り・る29・30
Gr



SJ72 土層註

a層 黒色粘土 (10YR1.7/1) : 還元して黒色化した炉床粘土。硬化しており、強く還元被熱。

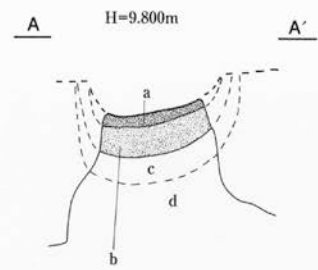
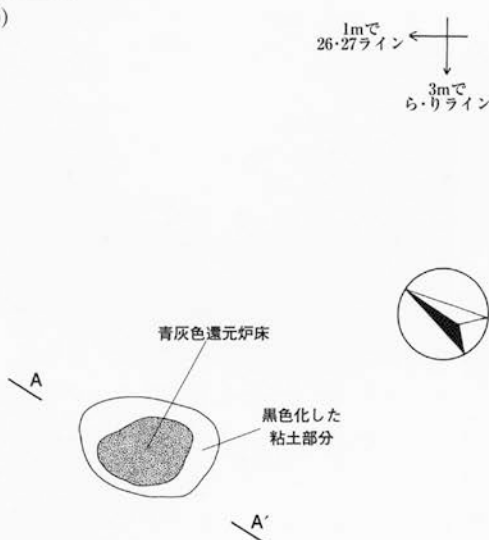
b層 黒(褐)色土 (10YR2/2~2/1) : 黒色 (10YR1.7/1) 粘土中塊・大塊を多量含有。炉床土だが、粘土が割がれた状態。還元被熱している。

c層 黒褐色土 (10YR2/2) : 黒色 (10YR1.7/1) 粘土中塊多目含有。焼土小塊、黄褐色土小塊多目含有。

〈SJ75:鍛冶炉〉

(S=1/10)

1mで
26・27ライン
3mで
ら・りライン



SJ75 土層註

a層 灰色粘土 (7.5Y5/1~4/1) : 炭結してカリカリ。炉床の貼床粘土が強く還元した層。

※ a層とb層の境は、灰色と黒褐色土との中間色調。

b層 黒(褐)色還元粘土層 (10YR3/1~2/1) : 被熱が甘く還元して黒色化した貼床粘土層。

c層 黒褐色土 (7.5YR3/2) : d層が被熱して赤味帯びた層。

d層 黒褐色土 (10YR2/2) : 黄褐色小塊多目含有。



第38図 手工業生産関連遺構図3 〈SJ70・SJ72・SJ75〉

第4節 その他の遺構と包含層

第1項 道路状遺構と今回報告部分

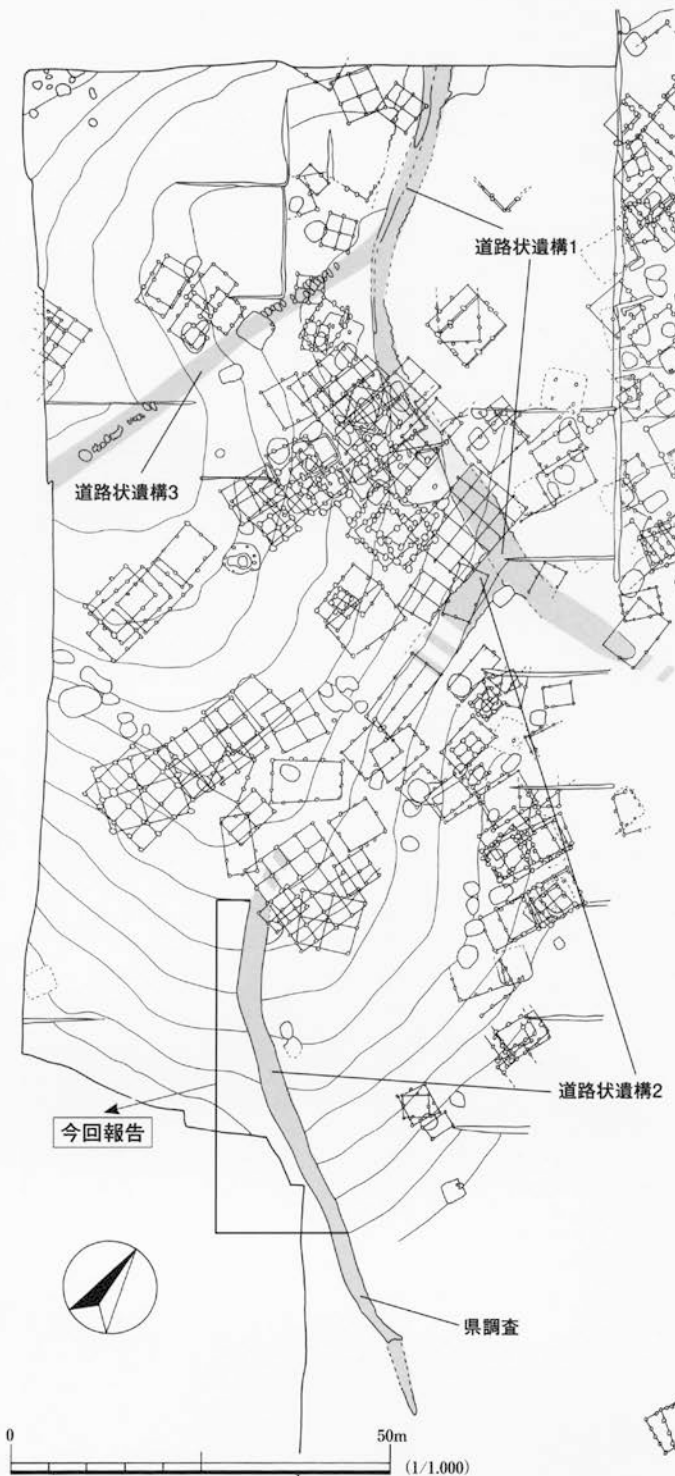
本遺跡で検出された道路状遺構は、路面の検出、道路幅員と思われる溝状遺構、道路の付帯的構造痕跡と思われるビット列や波板状凸凹面の検出が個別になされ、削平により路面削平や消失もみられるものの、それぞれつながり全体として面的に捉えることが出来たことから、最終的に大きく3本の道路状遺構であると判断したものである。道路状遺構1・道路状遺構3は、前回の「額見町遺跡Ⅲ」で報告済みである。これに加え、道路状遺構1から分岐するように位置する道路状遺構2の北側にあたる分岐地点を、道路状遺構1と共に「額見町遺跡Ⅳ」にて報告している。今回報告区域は、道路状遺構2の南側区域にあたり、遺構番号はSD23である。

今回報告の道路状遺構2は、F地区とH地区にまたがるものである。平成9年度に（財）石川県埋蔵文化財センターがE地区とした区域の調査で道路状遺構を検出した。平成11年度の当教育委員会調査で、隣接区域であるF地区にて続きの道路状遺構が検出され、平成12年度にH地区の調査を実施するという経緯をもち、調査年がまたがっている。道路状遺構2は、他の道路状遺構に比べ近代削平を免れた区域に位置していたため、比較的良好な遺存状態であったものの、次第に谷部となるH地区区域では、土器溜まり遺構との重複により、検出においては困難を極めたと言ってもよい。

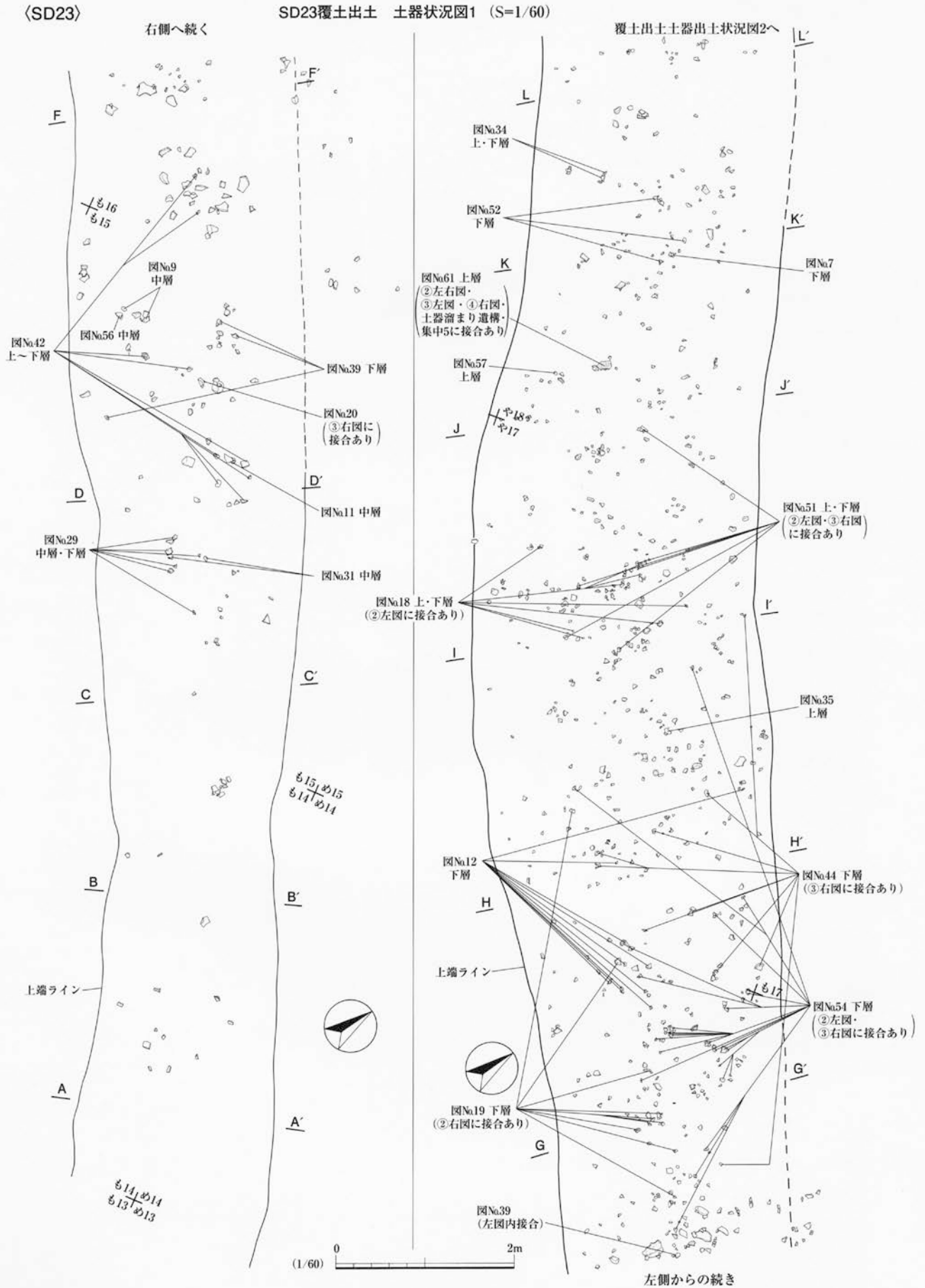
1. 道路状遺構2 (SD23)

〈立地・規模〉 溝状を呈する道路状遺構で、本遺跡全体の南端、東尾根付近から西側の谷部へ下ってゆく本遺跡の中でも最も標高差をもつ傾斜地に立地する。Grでは、め14、も14～16、や16～19、ゆ18～22Grにあたる。これより北側では検出できていない。これは、H地区における路面硬化が、南側から北側へ進むにつれ、次第に顕著でなくなっていくことによる。あわせて、土器溜まり遺構（調査当初に土器溜まり5と名付け、当報告では土器溜まり遺構とするもの）との重複により、遺物の出土量が尋常でない状況であり、硬化の顕著でなくなっていく路面の検出ができなかったためである。

検出されたSD23の全長は22.5mである。東西を横切るように位置しながら、ゆ20Grで自然に北側へ向きを変えており、そのまま道路状遺構1の分岐地点に繋がるものと考えられる。上端幅は、170～330cmを測り、F地区では230cmが最大となる。断面形状は皿形で、内面に路面と、路面下の路床をもつ。路面までの深さは、F

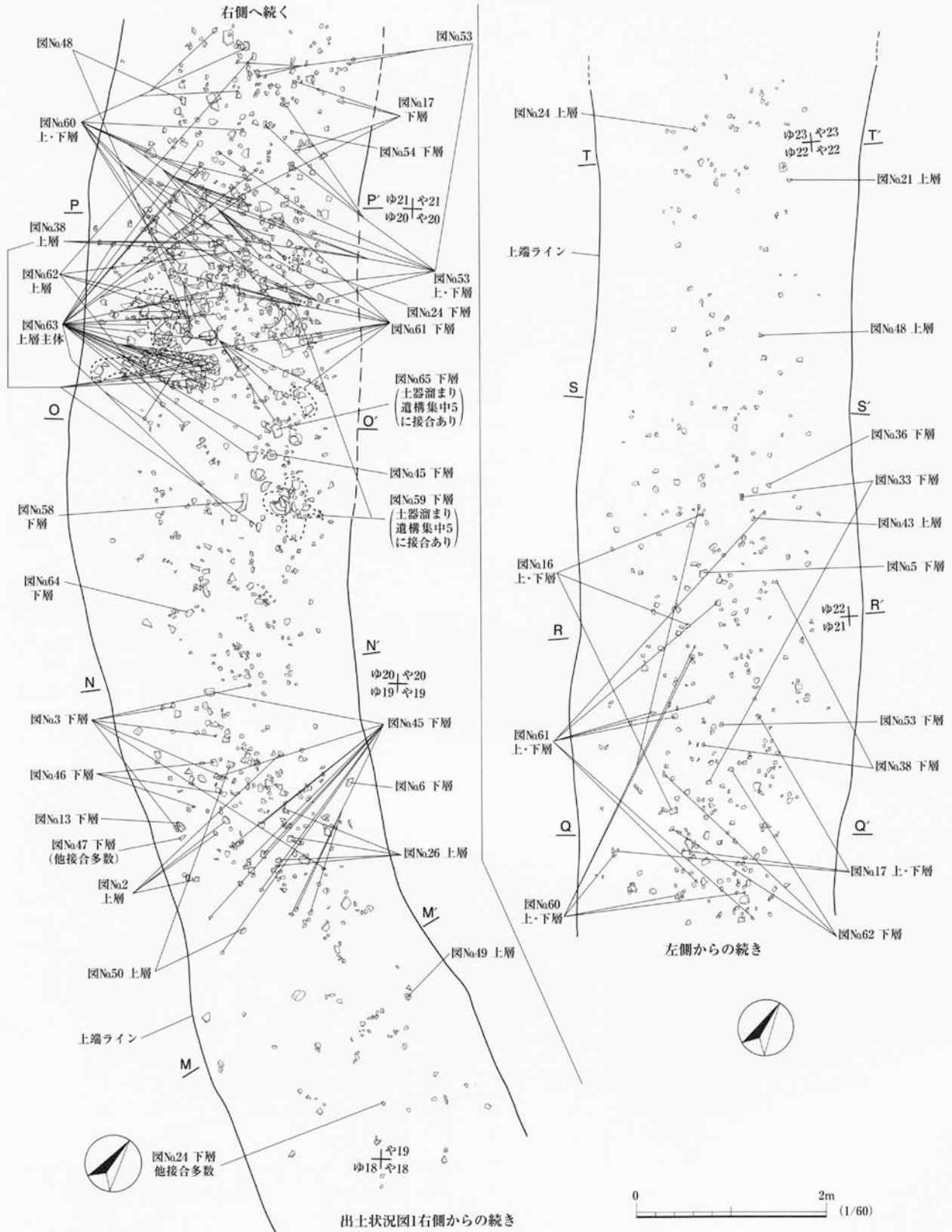


第39図 額見町遺跡道路状遺構全体図



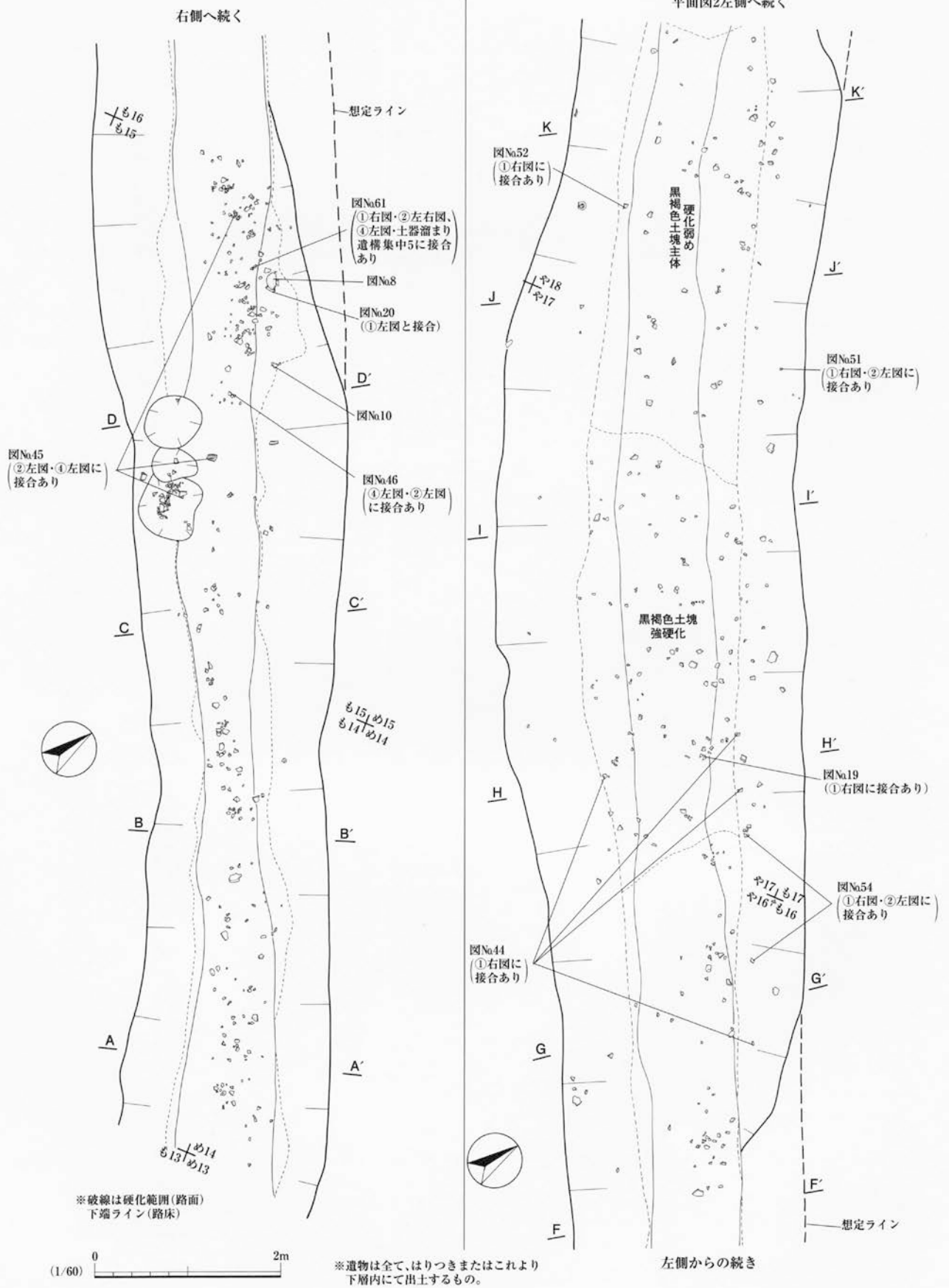
第40図 道路状遺構2 遺構図1 (SD23 ①)

SD23覆土出土土器状況図2 (S=1/60)

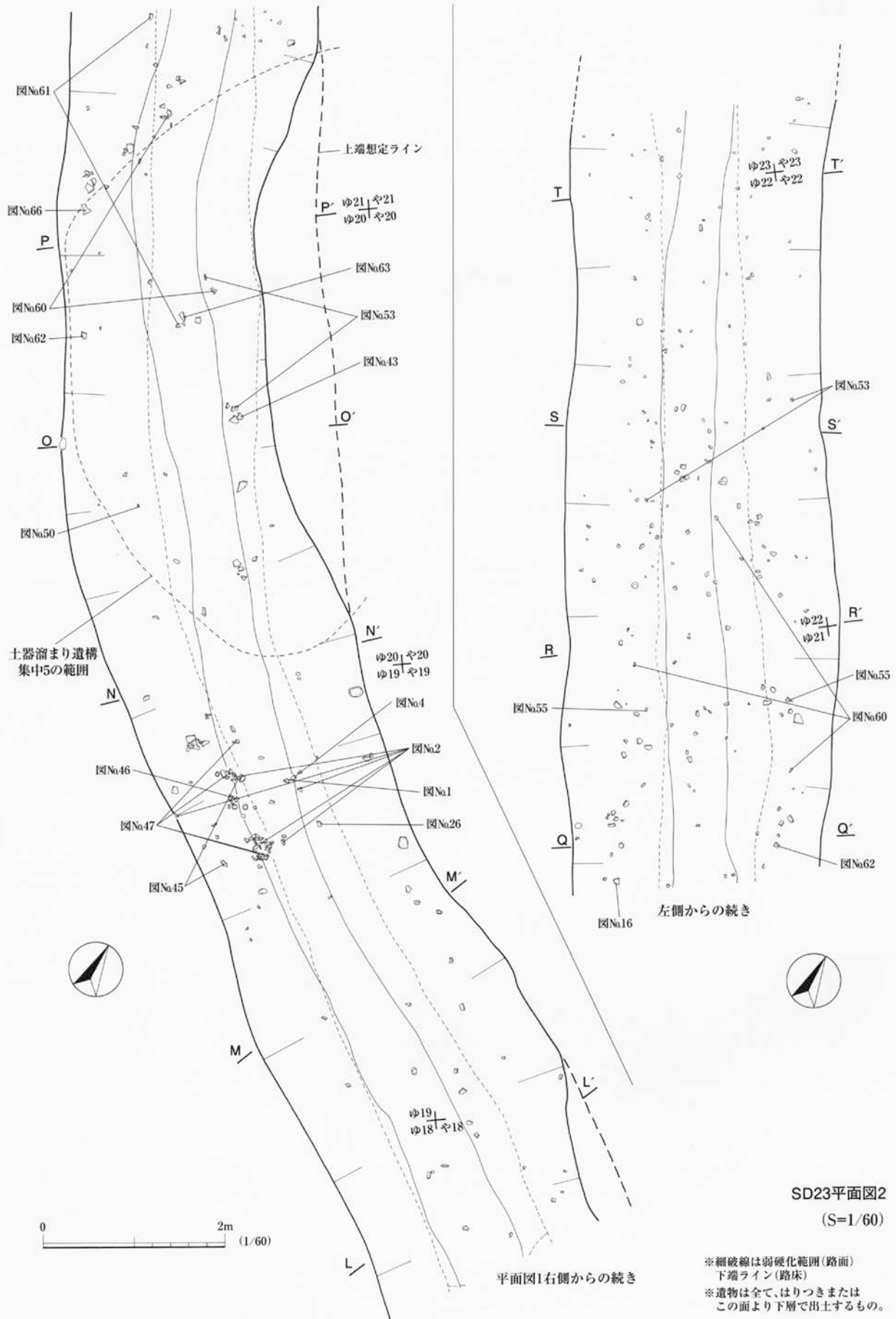


第41図 道路状遺構2 遺構図2 (SD23②)

SD23平面図1 (S=1/60)

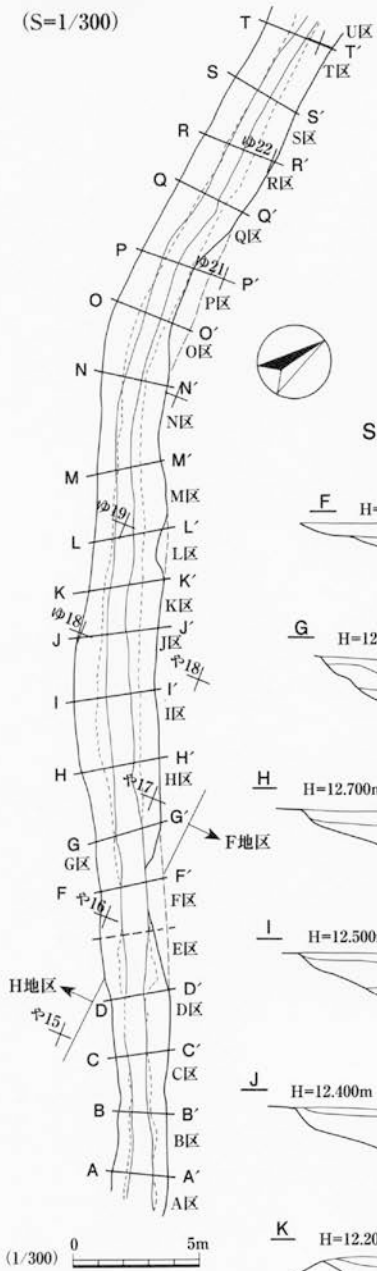


第42図 道路状遺構2 遺構図3 (SD23 ③)

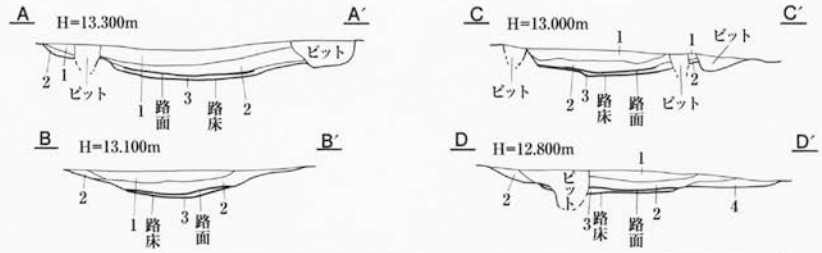


第43図 道路状遺構2 遺構図4 (SD23④)

SD23区割り全体図 (S=1/300)



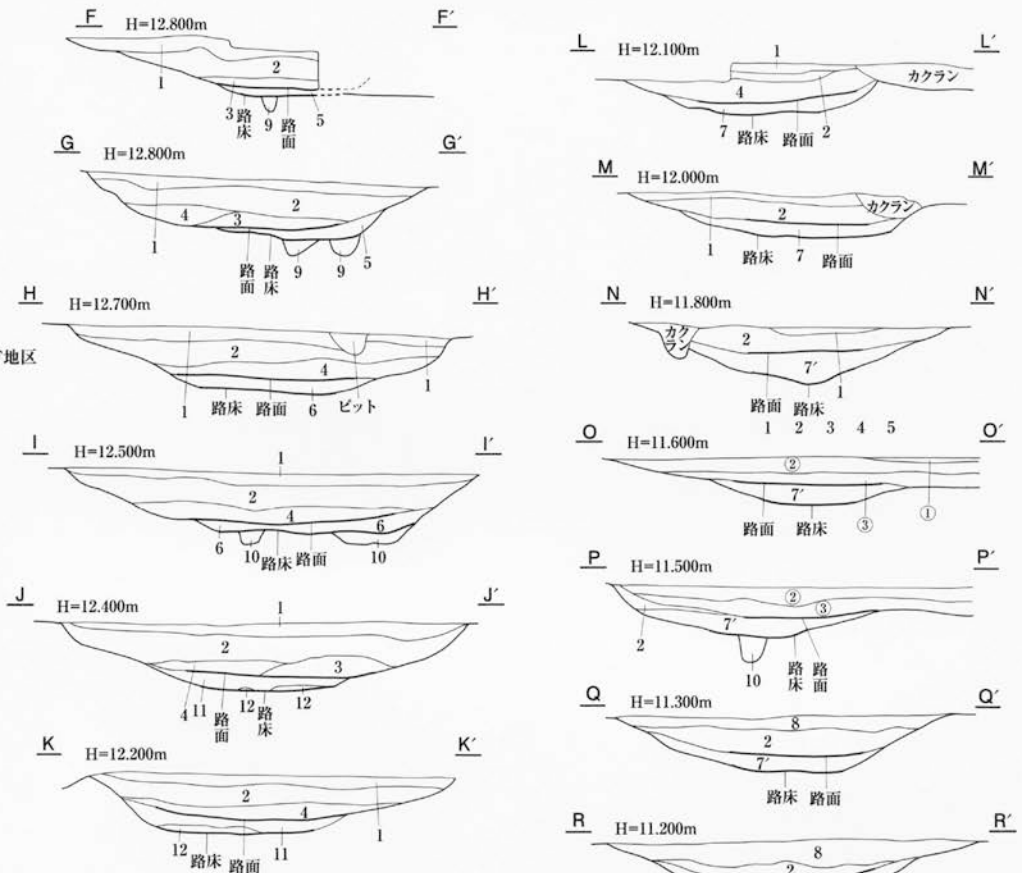
SD23 (F地区側) 断面図 (S=1/60)



SD23 (F地区:A~Dライン) 土層註

1層 極暗褐色土(7.5YR2/3)：橙色土(7.5YR5/6)塊が少量、炭化塊含有。締まり有り。
 2層 極暗褐色土(7.5YR2/3)：暗褐色土(7.5YR3/3)3割と混在。橙色土微小塊を多量含有。ざらつきあり、やや締まり有り。
 3層 褐色土(7.5YR4/4)：暗褐色土(7.5YR3/3)4割と混在。褐色土塊が少量含有。2層と3層の間のレベルで壊破片有り。3層下底が硬化する。
 4層 黒褐色土(7.5YR3/2)：暗褐色土(10YR3/3)と5割程度で混在する。褐色土塊少量含有。締まりなし。地山土に似る。

SD23 (H地区側) 断面図 (S=1/60)



SD23 (H地区:F~Tライン) 土層註

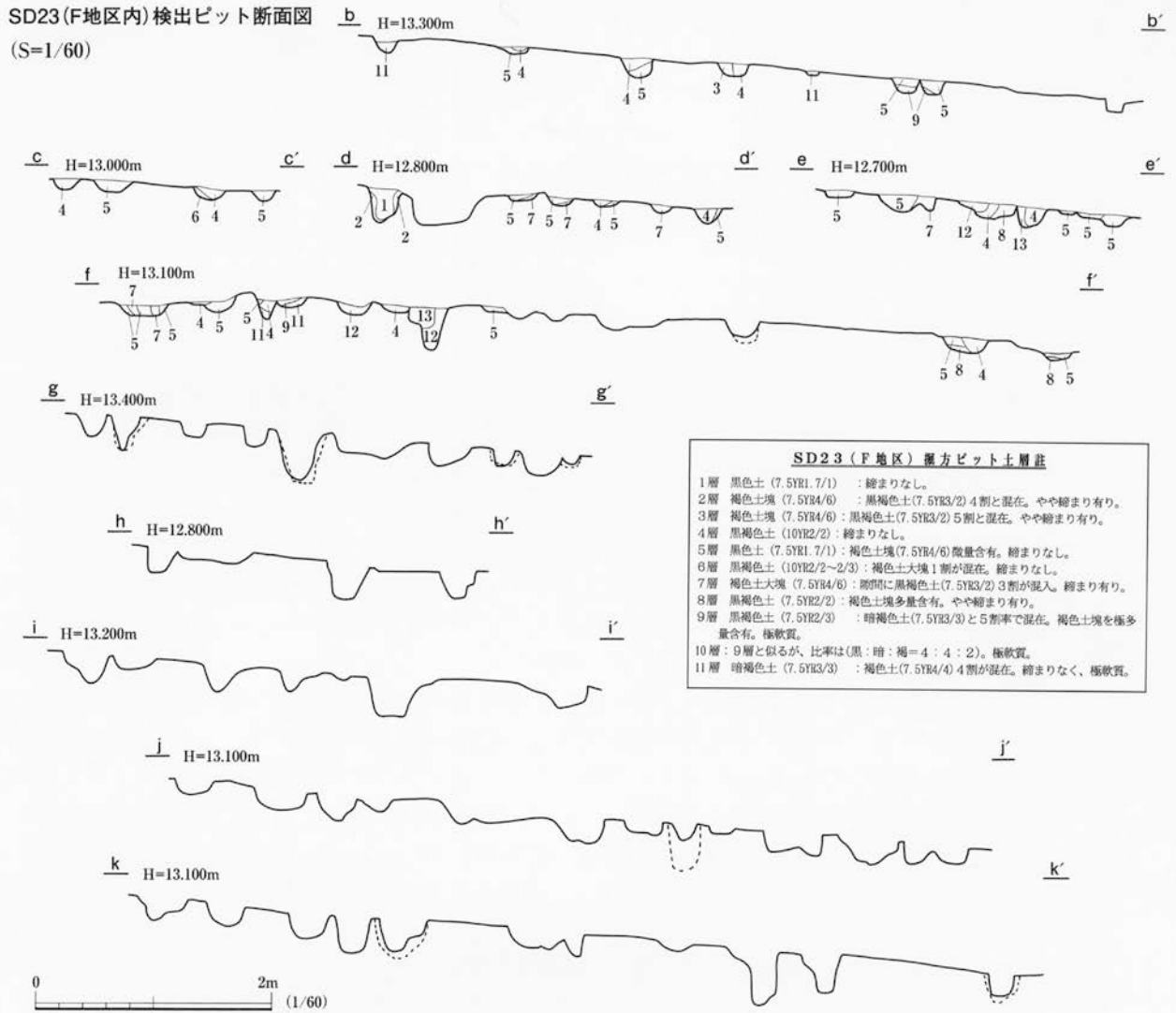
1層 黒褐色砂質土(10YR3/2)：黒褐色土(10YR2/2~3/2)4割が混在。炭化中塊少量、土器片含む。軟質土。SD23の上面土。
 2層 黒(褐)色土(10YR2/2~2/1)：黄褐色土小塊少量含有。炭化小塊少量含有。
 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)：黄褐色中塊少量、焼土中塊少量含有。土器片を含有。やや砂気あり。
 4層 黒褐色土(10YR2/2~3/2)：黄褐色土小塊少量含有。2層に近いのだが、やや砂質おび、褐色味あり。
 5層 黒褐色土(10YR2/2~2/3)：黒褐色土(10YR3/2)硬化粘土大塊を多量混在。締まり強く、硬化。匙状状。
 6層：5層に近いが、黒褐色土硬化粘土塊の混じり少なく、硬化少ない。
 7層 黒褐色土(10YR2/2)：黄褐色土中塊多目に含有。炭化中塊少量含有。締まり有り。
 7'層 黒(褐)色土(10YR2/2~2/1)：黄褐色土(10YR4/3)中塊多量、炭化中塊多目含有。2層に似るが黄褐色土が多い。
 8層 黒褐色土(10YR2/2)：砂質帯びる。1層より砂質ではないが、2層より褐色味があり、砂気あり。白色酸砂粒を含有。炭化小塊少量、黄褐色土小塊を少量含有。
 9層 黒褐色土(10YR3/2)：黄褐色土(10YR4/3)が1割混在。黄褐色中塊多量含有。
 10層 黒褐色土(10YR2/2)：黄褐色土中塊、黄褐色土中塊を多量含有。締まり有り。所々、黒褐色土の硬化塊混じる。
 11層 黒褐色土(10YR2/2~3/2)の砂質帯びる土に、黒(褐)色土(10YR2/2~2/1)の硬化中~大塊が2割程度含有。黄褐色土中塊多量含有。やや締まりあり。
 12層 黒褐色土(10YR2/2)：黒(褐)色土(10YR2/2~2/1)の硬化大塊を極多量(4割)混在。締まり有り。
 ①層 黒褐色土(10YR3/2~2/2)：砂質表土層。炭化小塊少量、黄褐色土小塊少量含有。土器溜まり5-Nの6層に對比。
 ②層 黒褐色土(10YR2/2)：黄褐色土中塊・炭化小塊・焼土小塊少量含有。土器片特に須恵器片多量混在。土器だまり5-Nの4層に對比。
 ③層 黒褐色土(10YR2/2~10YR3/1)：黄褐色・炭化中塊少量含有。土器片やや少なめ含有。土器だまり5-Nの5層に對比。

第44図 道路状遺構2 遺構図5 <SD23⑤>

SD23(F地区内) 検出のピット列
(S=1/60)



第45図 道路状遺構2 遺構図6 (SD23 ⑥)



第46図 道路状遺構2 遺構図7 (SD23 ⑦)

地区内あたるA~Dラインで18~20cm、H地区では20~40cmで、より標高の高いF地区の方が浅い。路面幅は74~140cm、路床幅は60~100cmで最小50cm、但しj区から北では60~70cmとほぼ一定幅を呈す。F地区の方は、路面幅が狭くなるのが特徴となる。

〈路面の状況と路床〉 路面は、断面形状が皿形の溝底面がそのまま路面となっており硬化する。特に、a区~j区までは顕著な硬化が認められる。j区途中~k区~1区途中までは、硬化ブロックが認められるものの全体の硬化は弱く、1区途中から以降北の区域では明瞭な硬化ブロックが認められる。F地区にあたるa~d区では、路面下と路床間の埋土は2~4cmと頗る薄いものである。路面自体は平坦で、須恵器甕に見られるような土器細片が張り付いているものの、道路状遺構1・3で検出されている量と比較すれば極めて少ない方だと言える。

路面と路床の間には、埋土を伴うが、区域によって埋土や硬化に差違が認められる。

路面下の路床は、F地区での検出にあたる区域、SD23をセクションポイント間で区割りしたa~d区で、顕著な硬化が認められる。極めて硬化しており、土そのものは貼り付けたものではなく地山である。明褐色土塊(7.5YR5/8)粘質の地山土が硬化しブロック化したもので、この隙間に暗褐色土(7.5YR3/3~10YR3/3)が2割程混入する。いわば堅穴建物の硬化床に類似するところがあり、踏みしめられ、晴天風雨にさらされた通行痕跡であるのだろう。この地山面が、当初の路床として機能していたと思われ、補修によるものか次第に上位に土を補充し、新たな路面を形成したものと考えている。一方路床は、浅い皿状底面を呈して平坦面が狭まり、F地区で検出された路床では僅かだが硬化面に土器が張り付いている。路床が第1路面として相当の期間機能していた可能性をもつ。薄く張り付いて検出された3層土は、流土堆積や部分修理の補填であった可能性もたれる。

また、2層と3層土間で、甕破片がまとまって検出されていることから、部分的に強度をもたせるため施された痕跡として理解する。

H地区の路床は黒褐色地山土内にあり、この上位にやはり黒褐色土を補填する形で路面を形成している。路床を歩行したものか、硬化が認められないため不明だが、F地区での検出状況から自然路が形成されいたものと判断でき、H地区では黒褐色地山に自然路を形成していたものと思われる。路床上位に5～14cmの路面土が充填されており、路面土は黒色土系を主体に、硬化する黒褐色土ブロックか、同じ主体土に黄褐色土・褐色土・にぶい褐色土ブロックが混在するものであり、F地区に近づくに従い混在ブロックの硬化が顕著となる。このような状況の中、硬化ブロックの検出をもって路面と判断している。しかし、前述した土器溜まり遺構との重複により、谷部に近づくにつれ、硬化ブロックを検出できない状況になっていったのである。

〈覆土と出土遺物・時期〉 覆土は、自然堆積していったものと考えられ、出土遺物はH地区調査分のe区より以北の区域では極めて多量の遺物を伴っているものの、土器溜まりと重複の関連で量が増加した可能性が高い。土器溜まりと重複しない区域での出土量をみると全体に満遍なく出土している。路床から出土するものは、張りついたり食い込んだりして検出されている。出土遺物はSD23全体で、須恵器食膳具884点（摩耗痕跡7点含む）、須恵器貯蔵具1,626点、土師器食膳具49点、土師器煮炊具1,050点、中世土師器煮炊具532点、白磁片6点、土製品（円筒形3点、カマド2点、製塩土器1点、土鈴1点）7点、砥石を含む石製品14点が出土する。出土遺物の時期は、I期からV期まで非常に広い時期幅をもつ。この中でもIV2期新段階、V1期、V2期にまとまりがみられ、このあたりが当遺構の時期に相当すると思われる。

SD23は、土器溜まり遺構集中3（Ⅲ～Ⅳ期）を切り、土器溜まり遺構集中5（V期）に切られる。出土遺物時期においては、路床に張り付く遺物がV2期に相当し、これ以前の遺物は検出できていない。よって、SD23はV2期に機能し始めたと考えられる。道路状遺構1の場合、IV2期段階で自然路を発生し、V1～V2期段階で幅を拡げる等の改修を行い、VI期には通行をやめ埋没してゆく変遷をもつ。これを踏まえれば、今回報告のSD23（道路状遺構2）は、道路状遺構1の改修期に通行し始めることになる。道路状遺構1と道路状遺構2の分岐地点には、同時期のSB259四面廂建物が存在しており、この建物を中心とした道路形成がなされた可能性がもたれよう。

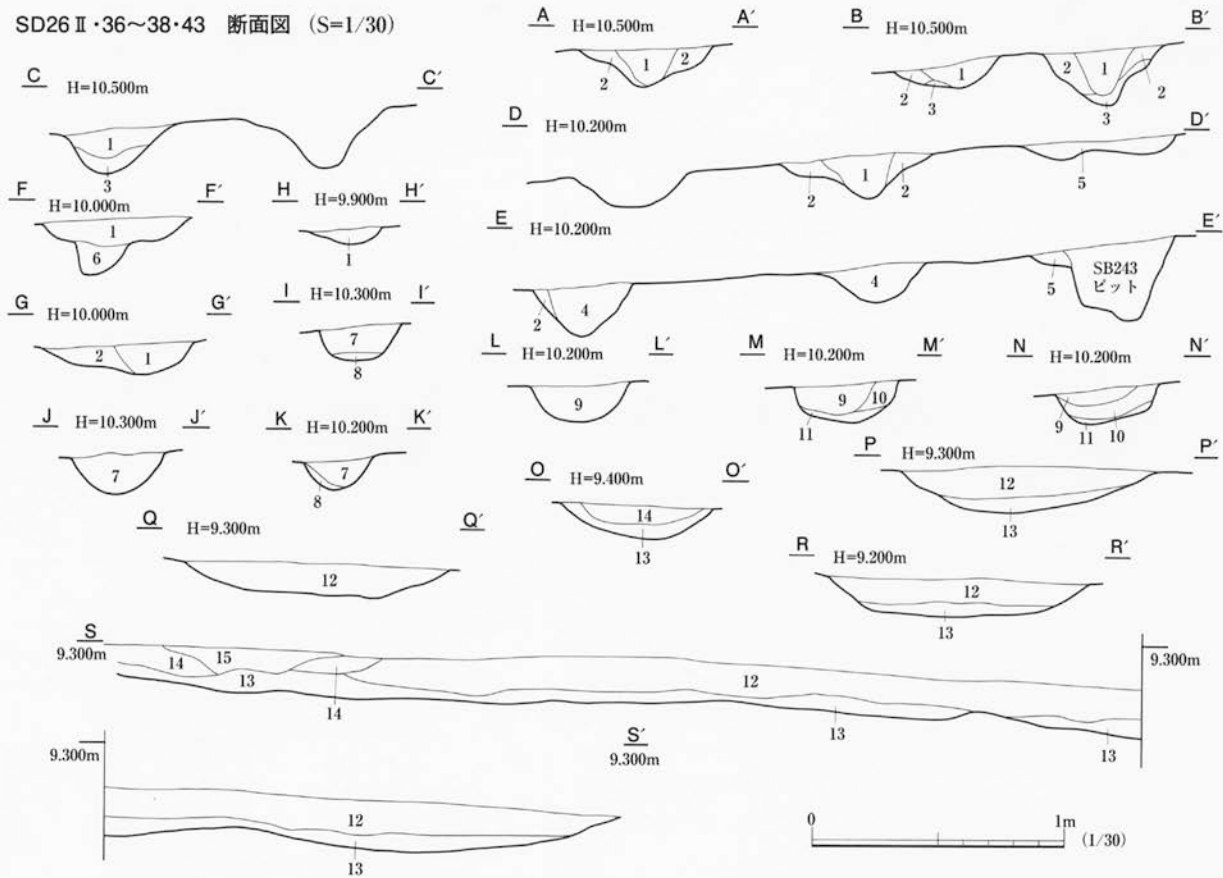
〈外内ピット群の検出〉 路床精査時、内外に小ピット群を検出している。径16～50cmが主体で、大規模なものは径125cmと土坑に近いものの内部にいくつかの小ピットを伴う。深さは、道路の溝内外で違いが認められる。F地区においては、溝際・溝内のものは、路床の深さと同等かこれより深いものが多く、溝外東側では路床と同等か、10cm以内で浅いものが多い。H地区検出分では、溝際・溝内のものは路床よりも深いものが多く、溝外東側にまとまって検出されるものは路床よりも深い。H地区のこのような状況は、標高12,000mより標高が低くなるにつれ、より顕著となっているようである。また、H地区の西側に連続するものは、路床よりも10cm以内で浅いものが多い。このように、大まかな傾向はあるものの、小ピット底面も平坦なものあれば、すり鉢状のものもあり、規模・形状は様々である。埋土は軟質であることが特徴で、底面に硬化面をもつものはない。埋土には、ごく一部で検出される‘杭のあたり’と考えられる痕跡をもつものも認められる。この径は4～10cmを測るが、これが本当に杭であるのかは疑問を抱いている。

第2項 溝状遺構

今回報告する溝状遺構は、SD26Ⅱ・36～38・43・56・57・61～71であるが、この内61・62・70は欠番となっている。今回報告する溝状遺構の特徴は、まず、前回報告した道路状遺構3主軸に並列・直交する形で位置する溝群の続きが、北区域で確認できることである（SD26Ⅱ・36～38・43・56・57）。このような溝状遺構と性格が異なると考えられる不整形を呈すものが、中央よりやや南に位置して検出されている（SD63～66・SD69）。この他、小規模なものが点在するように検出されている（SD67・68・71）。

SD26Ⅱ・SD43は、建物や空間を区画したと考えられる直線的な溝で、SD26Ⅱの長径は1,045cm、幅30～50cmを測り、断面形状は堦形で深さ13～14cm、東西軸に平行に配置する。SD43は、長さ740cm、幅55～120cm、深さ10～18cm、底面は平坦面を形成、SD39と平行しSD26Ⅱに対して直行する形で位置するものである。

SD26Ⅱ・36～38・43 断面図 (S=1/30)



第48図 溝状遺構 遺構図2 (SD26Ⅱ・36～38・43-②)

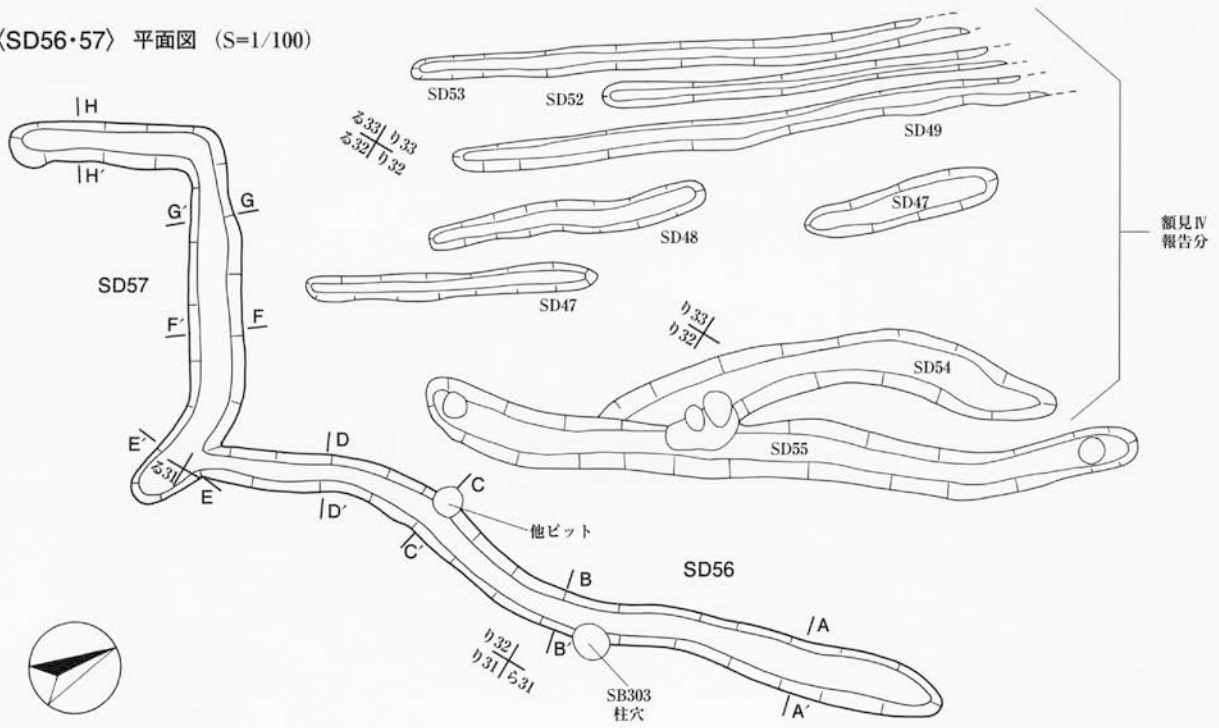
SD36～38は、SD26Ⅱ西側で同軸をとり、建物の区画溝内に位置するもので、SD26Ⅱのような直線形状ではなく、歪で曲がりくねる形状をもつ。3本がほぼ並列、SD38はSD37から分岐する形をとる。SD37・38は底面にピットを伴い、特にSD38には連続ピットが確認できる。これらの規模は、SD36が長径450cm、幅40～45cmを主体に最小26cm最大62cm、深さ6～13cm。SD37は、長径1,170cm、幅32～80cm、深さ13cmで、ピット底面までで15～22cm。SD38は、長径510cm、幅40～45cm、深さ10～13cmでピット底面までで20cmを測る。

SD56は、前回報告のH地区西側で並列して検出された溝状遺構群の最南に位置。このSD56の南端から連結し直行してL字をなして西に延びるものがSD57である。SD56の規模は、長径1,020cm、幅50cm主体に最大76cmを測り、深さ13～22cmをもつ。SD57は、長径が分岐地点から屈曲地点までで500cm、これより端まで240cmの計740cmを測り、幅は50～70cm、深さ11～15cmと浅い。両者の埋土に若干の違いがみられ、SD56の方が夾雑物量は少ない。尚、SD56北端の方が高く、SD57末端に向かい緩やかな傾斜をもち、高低差は36cmを測る。

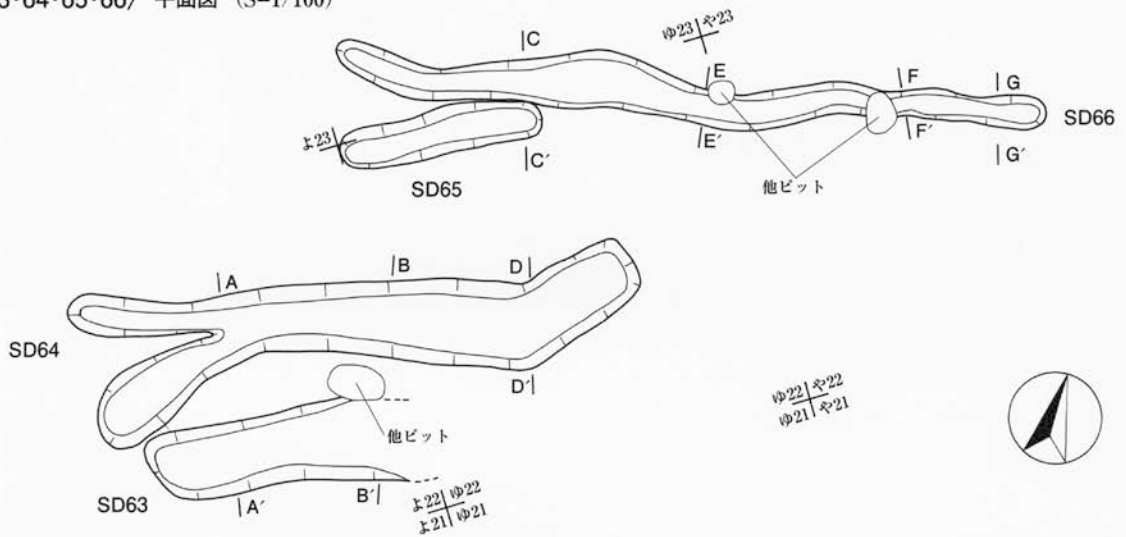
SD63～66は、H地区建物遺構群のほぼ南末端に位置するもので、4本の溝状遺構が並列するものである。SD66の東側が高く、この遺構のみ高低差33cmを測るものの、この他は高低差が認められない。SD63は残存長径300cm、幅90～104cmと比較的幅広で、深さ7～13cm、底面は平坦を呈す。SD64は、西端が二股に分岐す

遺物大別	遺構No.	26	36	37	38	43	56	57	63	64	65	66	69
須恵器食膳具		0	1	1	0	25	3	1	1	2	2	0	7
須恵器貯蔵具		2	0	3	3	7	1	0	2	4	0	1	9
土師器食膳具		0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	1
土師器煮炊具		2	1	1	2	23	4	7	9	2	2	1	48
土製品		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石製品・その他		0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
中世土師器		0	0	0	0	4	1	3	0	0	0	0	5

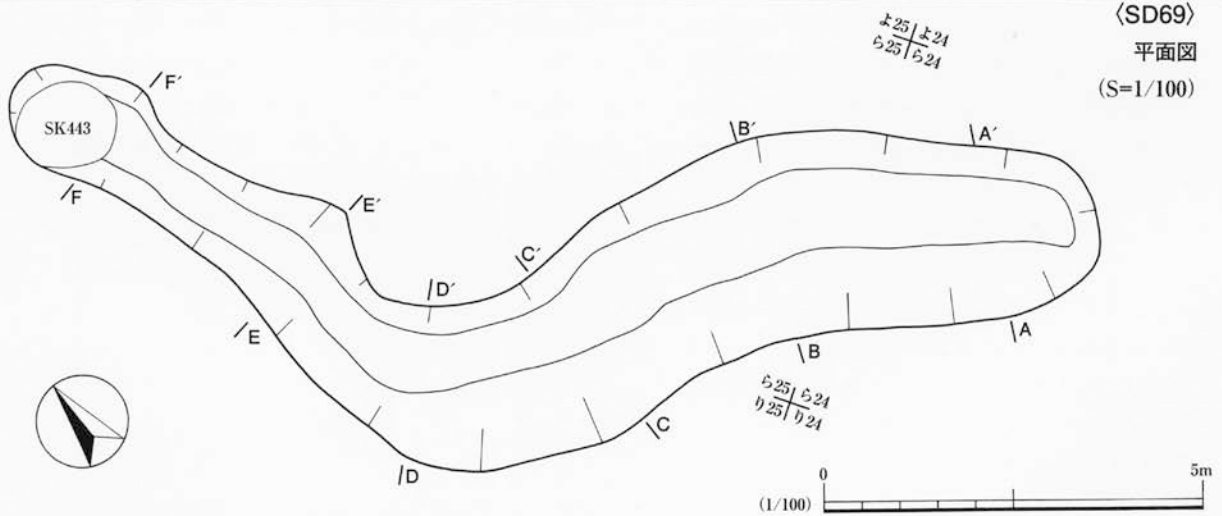
〈SD56・57〉平面図 (S=1/100)



〈SD63・64・65・66〉平面図 (S=1/100)

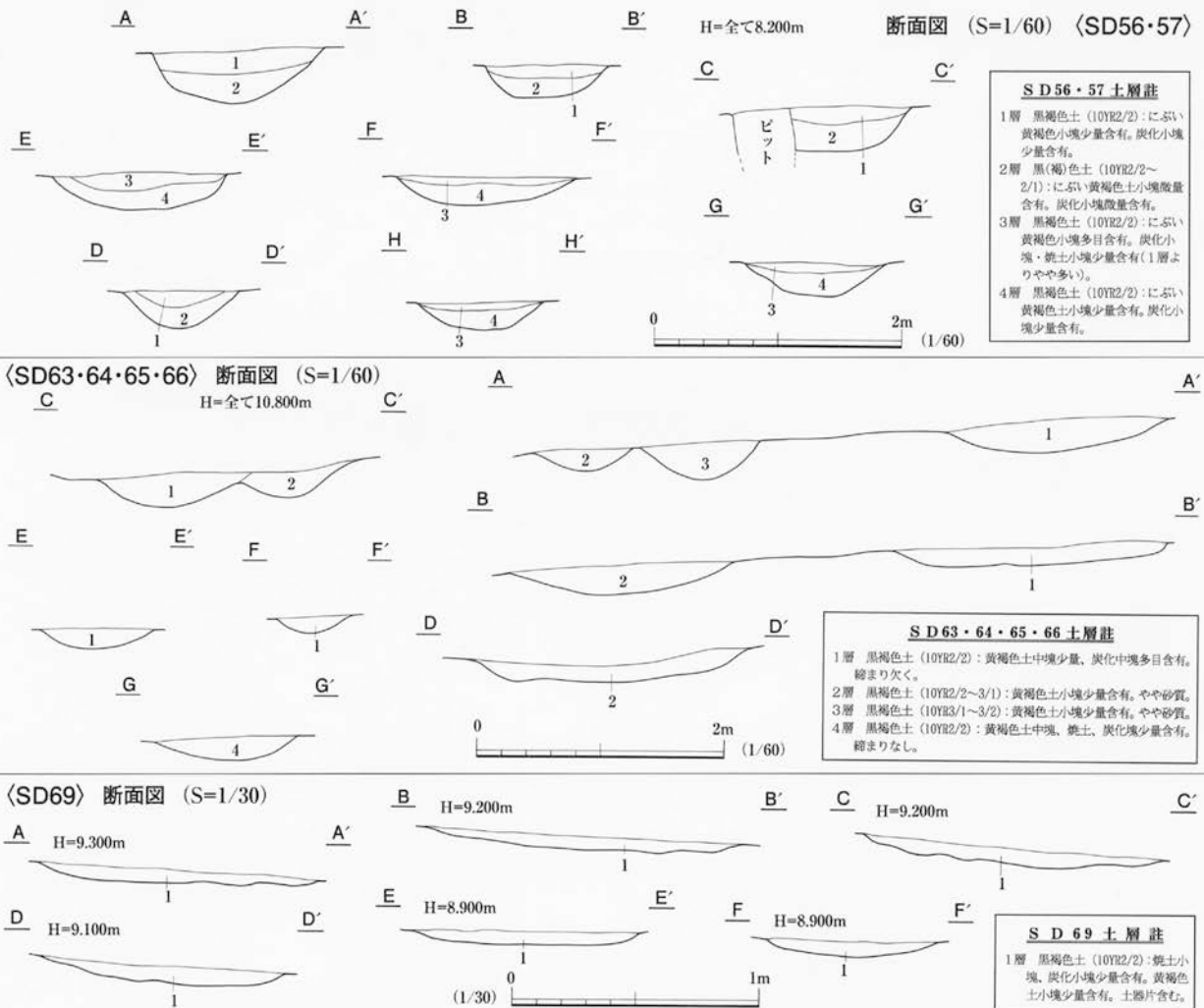


〈SD69〉
平面図
(S=1/100)



第49図 溝状遺構 遺構図3 〈SD56・57・63～66・69-①〉

第4節 その他の遺構と包含層



第50図 溝状遺構 遺構図4 (SD56・57・63～66・69-②)

るものであり、長径 740 cm、幅 112 cm で、二股部分で、は 40～52 cm と 46～86 cm を測り、深さは 8.5～14 cm。SD65 は、長径 268 cm、幅 50～60 cm、深さ 10 cm。SD66 は、うねるようなプランをもち、長径 940 cm、幅 45 cm 主体に最小 32 cm 最大 74 cm で、深さは 7～13 cm。これらの溝状遺構は、深さに類似点が見いだせるものの、幅やプランは様々である。覆土は、SD63 と SD66 に類似点が認められ、締まりのないことも特徴である。SD64 と SD65 は、覆土は同質層となっており、SD66 が SD65 を切っているため、時間的な差をもっていた可能性がある。

SD69 は、前述の SD64～66 の東側に 1Gr 以上離れて、単独で位置するものである。東から西へ延び、り 26Gr 杭位置付近で北方向へ屈曲する。規模は、長径が東端から屈曲地点まで 940 cm、屈曲地点から北端まで 650 cm で形 1,590 cm を測る。幅は、最小で 105 cm、東側へ行くに従い幅広くなってゆき、最大 270 cm を測る。深さは 10 cm を主体に最大 14 cm と非常に浅く、底面は平坦を呈すが、底面レベルに高低差が認められ、東端と北端ではおよそ 60 cm の差をもつ。

出土遺物の破片総数は 66 ページ表のとおりである。各遺構からの出土遺物は極めて少ない。特筆できるものとして、SD37 からはヘラ切りの油痕付き小皿、V 期と考えられる土師器煮炊具が出土している。SD43 では、IV 期と判断される須恵器食膳具や土師器煮炊具が出土するほか、中世遺物が 4 点出土している。SD56 では、IV 期から VI 期の須恵器食膳具が確認できる。SD57・SD63 からも IV 期・V 期の遺物が多く、SD65 も V 期を主体とする。これら遺構から出土した中世遺物は混入品である可能性がある。

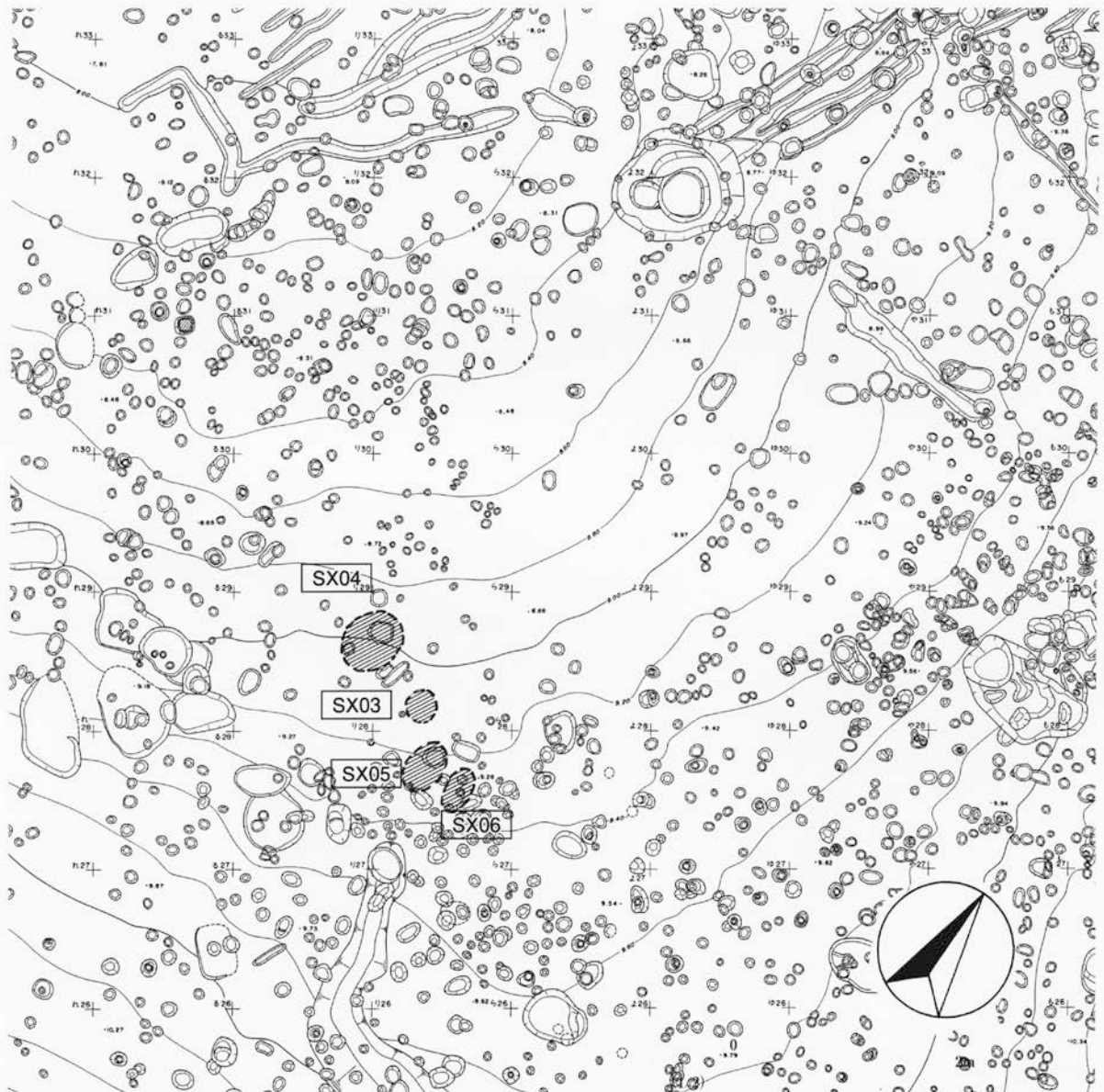
第3項 集石遺構

河原石が多量に検出されたことで、集石遺構として位置づけしている集石遺構は、前回までで SX01 (C 地区)

とSX02(G・H地区境)の2基が報告されてきた。今回報告区域の集石遺構は、続き番号にあたるSX03～06で、全てH地区からの検出である。すべてH区中央北寄りに広がる空間の南端に集中、東西軸に一直線に並ぶ。Grは、ら27～28・り28にあたる。4基の集石遺構は、河原石の除去後に土坑やピット状の落ち込みは検出されず、河原石が黒色土系地山に直接張り付いくものである。なお、SX03では鉄滓も張り付いており、SX04では土器の検出がみられる。

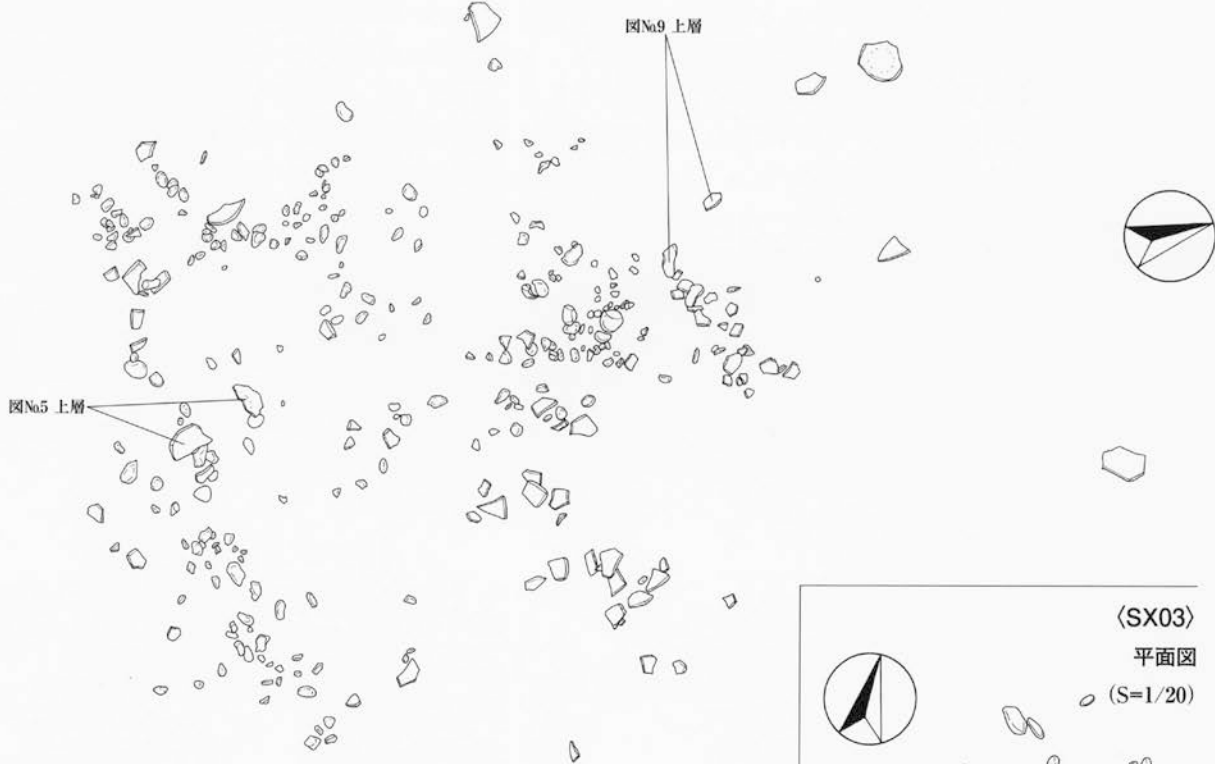
SX03は、長径85cm×短径70cm範囲に川原石が検出されており、石が出土するレベルは標高9.220～9.225mを示す。SX04は、4基の中で最も西に位置し、川原石の検出範囲は200cm四方、出土レベルは標高9.150m前後である。SX05は、長径100cm×短径80cm範囲で、最も川原石がまとまって検出されているものであり、出土レベルは標高9.150mを示す。SX06は、SX05と比較すれば散在しているといったもので、長径190cm×短径90cmの範囲に及び規模としては大きく、出土レベルは標高9.100～9.150mである。

これら集石遺構の出土遺物は次の通りで、いずれも総数である。SX03から出土する遺物はないため、時期は不明である。SX04からは、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具11点、土師器煮炊具30点が出土しており、時期を判断出来るものでIV2期を確認できる。SX05からは、須恵器貯蔵具1点のみの出土で、時期は不明である。SX06では、須恵器煮炊具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具1点のみであり、時期を判断するには難しい。

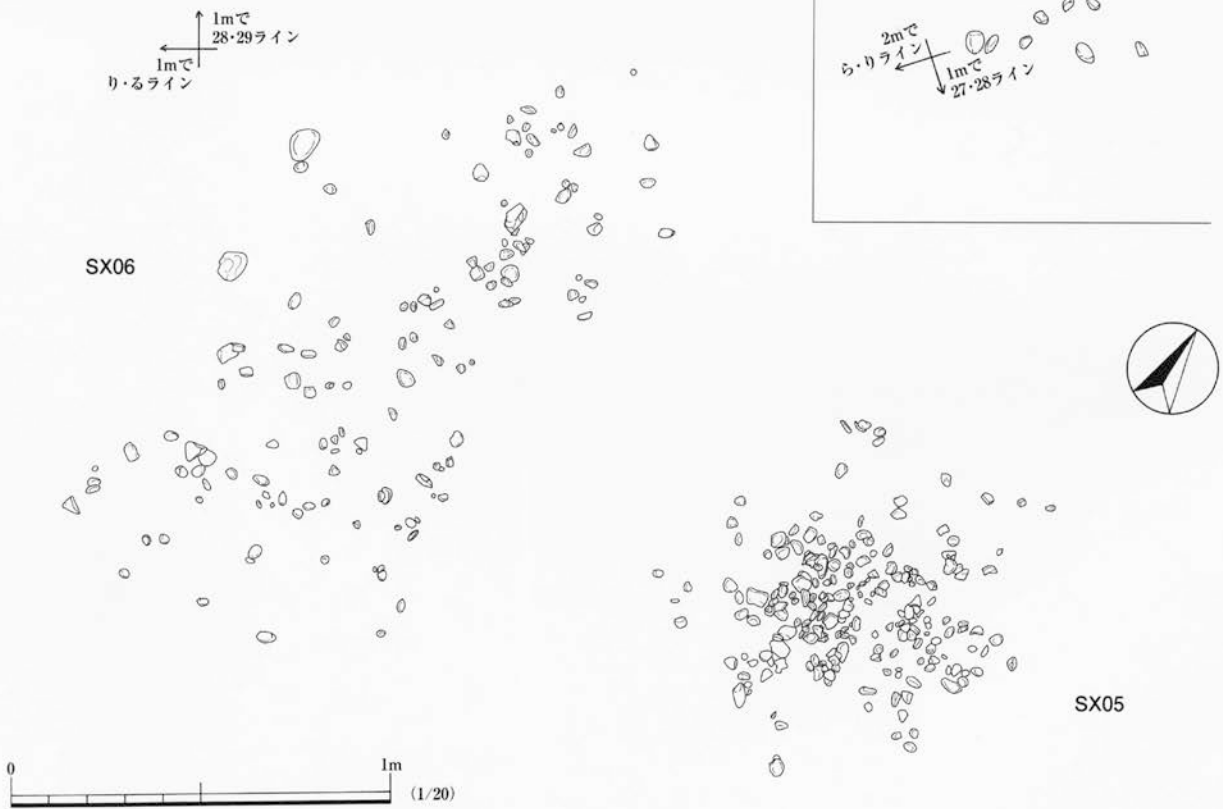


第51図 集石遺構位置図 (S = 1/250)

〈SX04〉 平面図 (S=1/20)



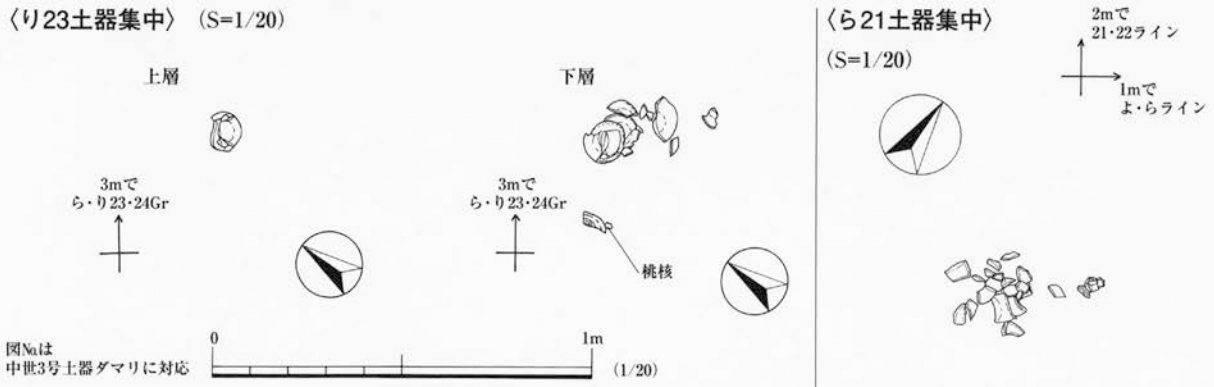
〈SX05・06〉 平面図 (S=1/20)



第52図 集石遺構 遺構図 (SX03・SX04・SX05・SX06)

第4項 土器集中遺構

土坑やピットのような掘り込みがなく、現地調査で土器集中と名称づけられた遺構である。特筆すべき遺物出土状況をもつもので、何れも、地山面で検出されている。「り23Gr 土器集中」は、小皿が正位・合わせ口で7～8枚が重なって出土していたもので、桃核を伴っており、土器埋納されたものと考えられる。後述する第7項の「中世3号土器溜まり」と同じ遺構である。「ら21Gr 土器集中」は、支脚が一括廃棄されていたものである。支脚は癒着等の焼成痕跡が確認できることから、本遺跡で焼成されたと考えられる。但し、図化区域以外からも、よく似た支脚が出土している。それは、「よ21Gr」と、その隣りのGrである「ゆ21Gr」内のSD23に重なっていたSK435からであり、SK435は、今回図化していないが、支脚が主体に出土する土坑である。「よ21Gr」のみならず、この付近一帯に関連が及んだものだろうか。



第53図 土器集中遺構 遺構図

第5項 炉状遺構

炉状遺構は、被熱面を有し炉として機能したと考えているものを示し、本遺跡全体を通じて番号を付けている。今回報告する区域で対象となるのは、SJ64～SJ74にあたるが、この内SJ65・SJ66・SJ70・SJ72・SJ75は鍛冶炉や製炭土坑であり、第3節手工業生産遺構において述べている。

今回報告の炉状遺構は、全てH地区から検出されたものである。H地区内では南側にまとまりが認められ、これはH地区とG地区との境の遺構密集区域に相対する位置にあたる。単体で検出されるものが殆どだが、掘立柱建物内にて検出され、検出時の標高が極めて類似するものが認められるものの、非常に少なく、掘立柱建物に伴うものと確定できないことから、地床炉や屋外炉となるものが殆どになる。但し、SJ73のみ、被熱層が土坑状の底面にあたる地山となり、規模も大きいことから、焼土坑の可能性をもつものと思われる。

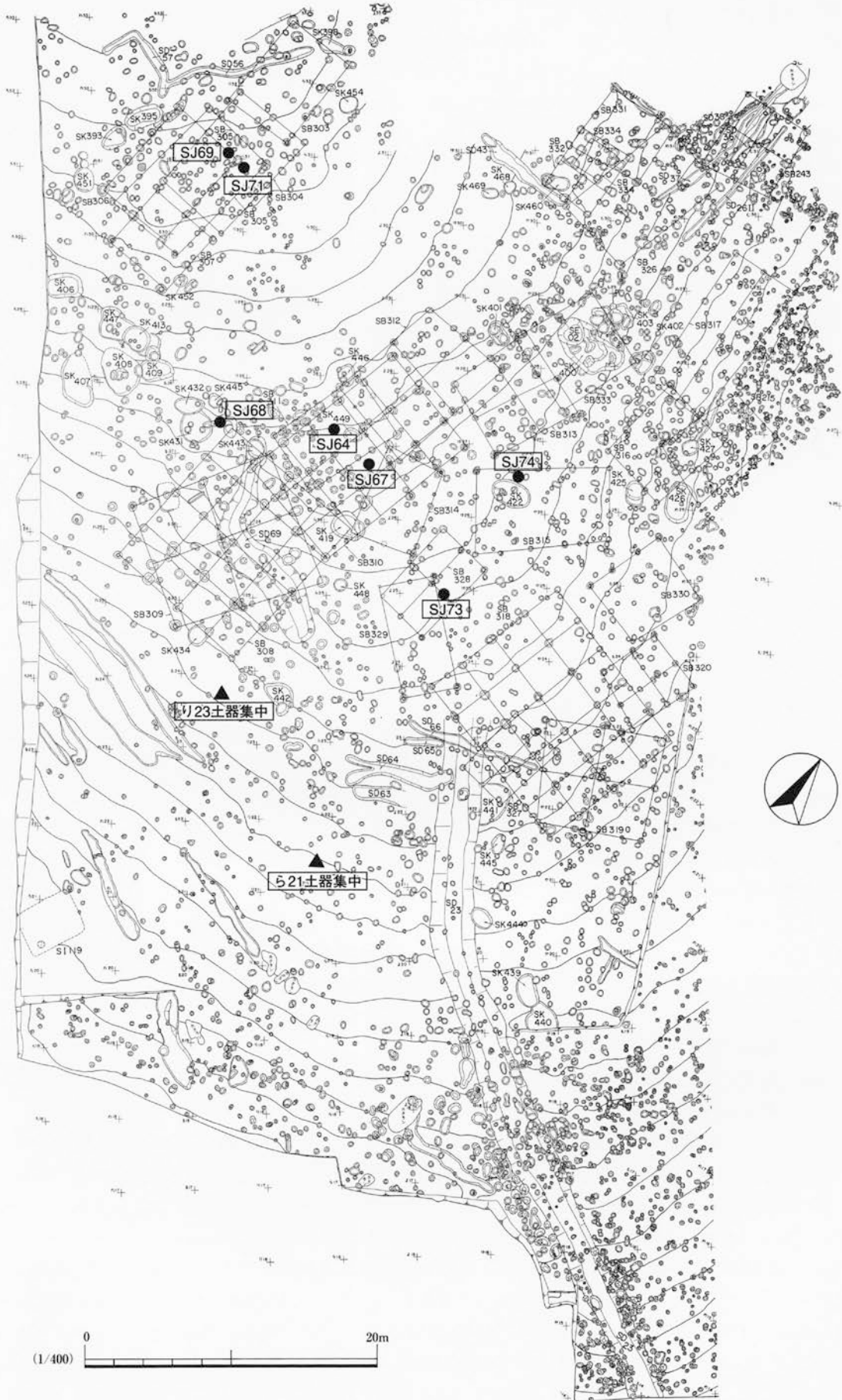
前回までの報告では、以下のような特徴を持っていることが確認されている。

1. 人為的な構築（貼床）が見られ、掘方を伴っているもの（A-①タイプ）
2. 人為的な構築（貼床）が見られ、掘方は伴っていないもの（A-②タイプ）
3. 人為的な構築はなく、地山が直接被熱しているもの（Bタイプ）
4. 竪穴建物や土坑内覆土で検出され、貼床の構築が見られるもの（C-①タイプ）
5. 竪穴建物や土坑内覆土で検出され、貼床の構築はなく、下の遺構覆土が被熱するもの（C-②タイプ）

今回報告区域では、竪穴建物や土坑内覆土で検出されたものはなく、上記1～3のタイプに限られている。4・5は、竪穴建物や土坑が人為的埋め戻し・自然埋没後の窪みが利用されたと考えられ、また、当区域での竪穴建物が極めて少ないこと、土坑埋没時期と炉状遺構構築時期に隔たりがあったために、検出されなかった。

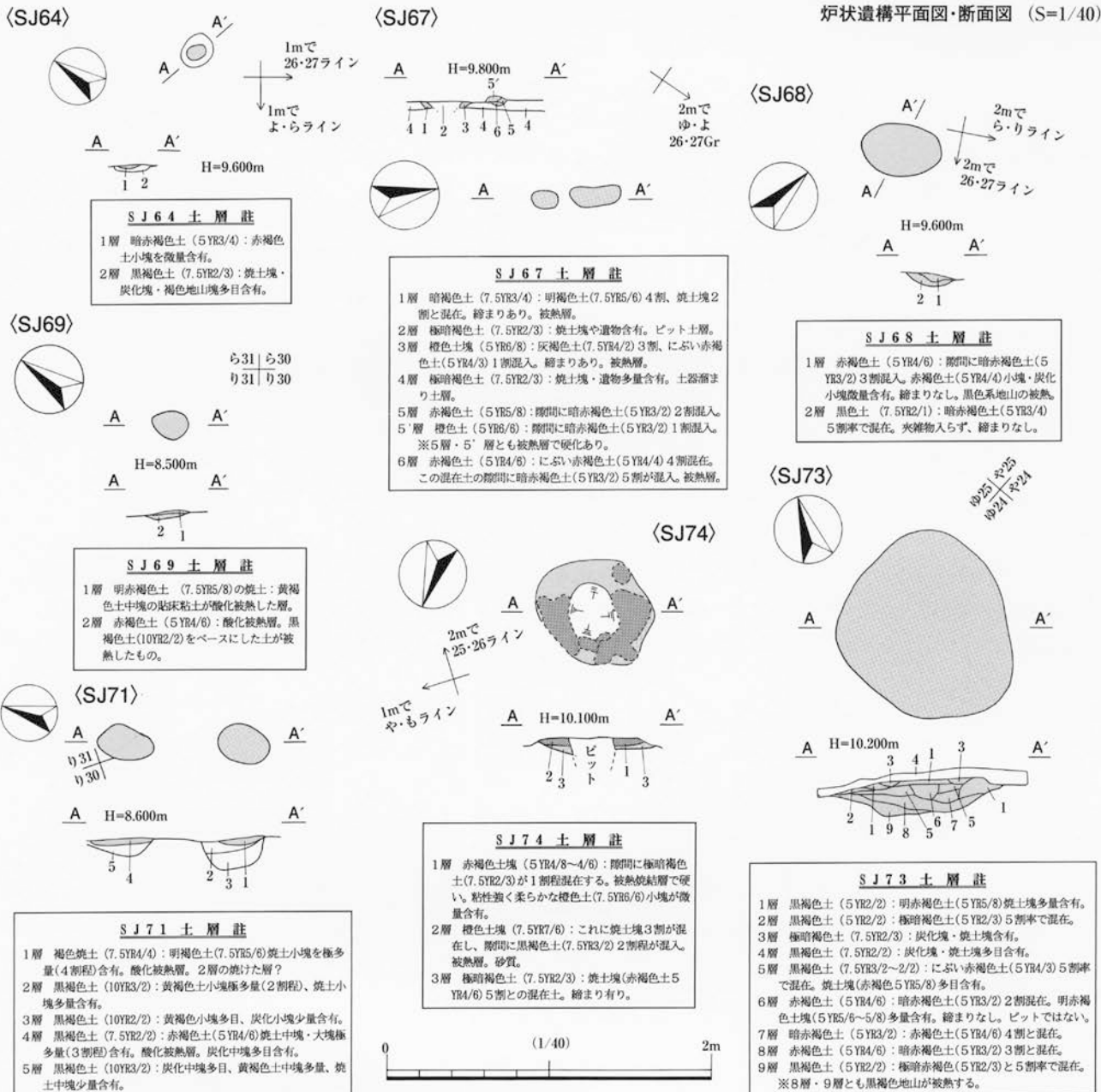
SJ64は、被熱面標高9.550～9.560m、被熱長径12cm×短径8cm、被熱下の長径23cm×短径18cmに地山被熱が認められるもので、厚み3.5～4.0cmを測る。よ27Gr、SB310・SB311内に収まるように検出されているが、これらの掘立柱建物の検出時レベルよりと違いがありすぎるため、関連はない。特徴としてはBタイプとなる。

SJ67は、よ26Grにてピット等で破壊されつつ検出されたもので、被熱面が辛うじて残存する状況である。検出レベルを同じにしてSB310に収まるよう位置するため関連の可能性をもつ。被熱標高9.600m、長径30cm×



第54図 土器集中遺構・炉状遺構 全体位置図

炉状遺構平面図・断面図 (S=1/40)



第55図 炉状遺構 遺構図 (SJ64・67～69・71・73・74)

短径 12 cm、貼床厚 5 cmを測る、A-②タイプのものである。

SJ68 は、り 27Gr で検出されているもので、被熱標高 9.450 ~ 9.500 m、長径 49 cm × 短径 32 cm、被熱厚 8 cm を測るもの。黒色土系地山が被熱し、被熱自体は締まりをもたない、Bタイプの炉状遺構である。

SJ69 は、り 31Gr 杭付近で検出されているものである。被熱標高 8.340 ~ 8.365 m、平面規模は長径 22 cm × 短径 17 cm、厚み 4 cm、炉床として人為的に構築した粘土床が被熱する。A-①タイプで、SB304・SB305内に収まるように検出されるが、SB304は検出標高に大差があり関連はないものと考えられる。一方、SB305の検出面は当炉状遺構よりも5 cm程標高が低くだけであり、両者が関連性をもつ可能性はある。

SJ71 は、も・り 30Gr にまたがり、り 31Gr 杭の近くに位置するもので、被熱層が北側の a と、南側の b に分かれている。SJ71a は、被熱標高 8.490 ~ 8.510 m、長径 35 cm × 短径 21 cm、厚み 11 cm を測るもので、黒褐色系の炉床を構築後に被熱しているものである。SJ71b は、被熱標高 8.490 ~ 8.520 m、長径 32 cm × 短径 24 cm、深さ 18 cm のピット状掘方を持ち、最上面が被熱する。SJ71ab とも、A-①タイプを示し、SB304・SB305内に収まるように位置しているものの、検出レベルに 30 cm 以上の差をもつため、関連はないものと思われる。

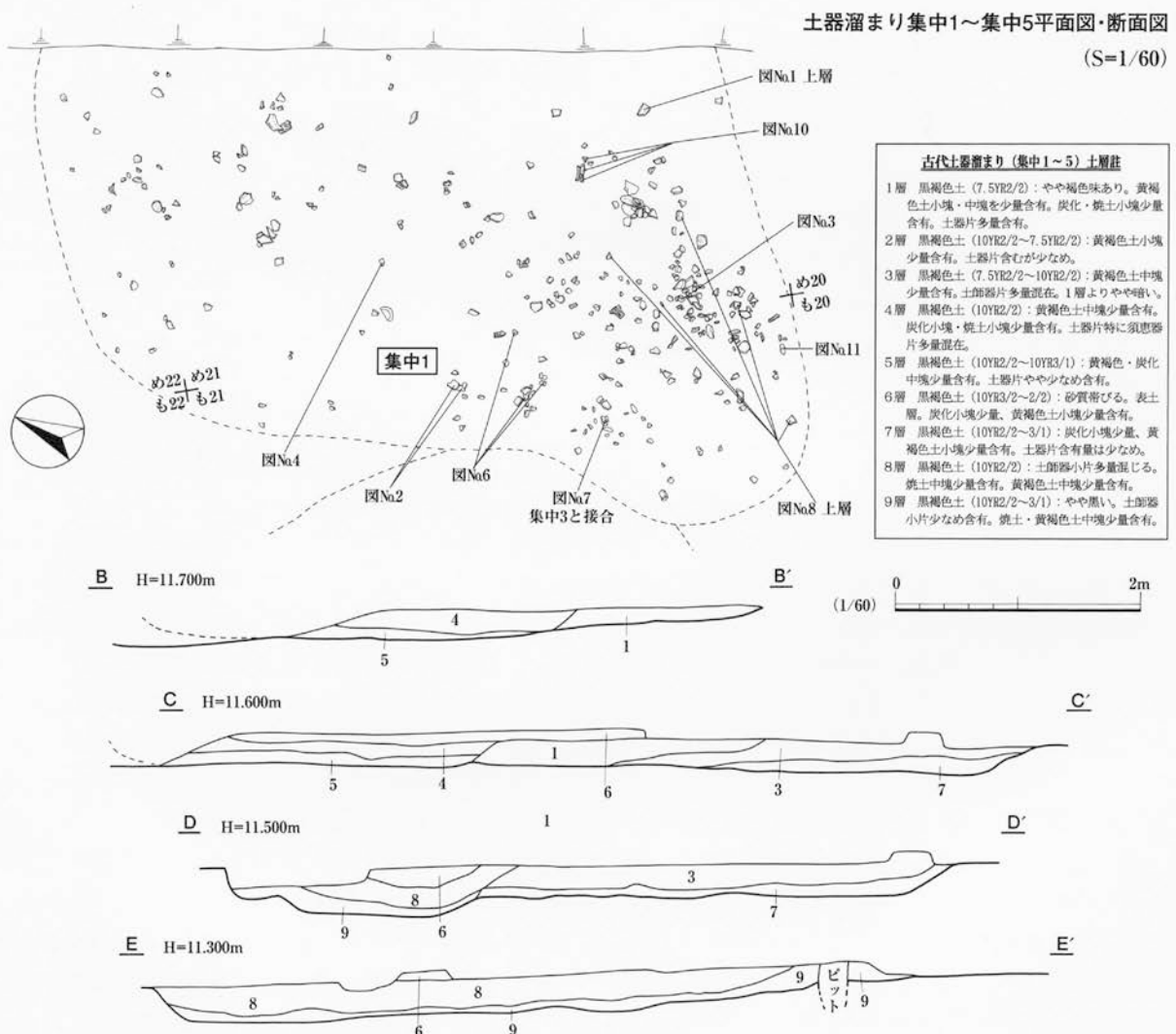
SJ73は、φ24・25Grに位置する。土坑状の窪みを持ち、底面の地山が被熱する。埋土的な層でもある地山被熱面上位層には焼土が多量に混在、この層も黒褐色系の土が被熱しているものと考えられる。被熱層は長径236cm×短径230cmと大規模で、底面の被熱標高は9.920～9.970mを測る。炉状遺構というよりは、焼土坑に近く、土坑状の窪みを作って何かを幾度か焼くと同時に、土も堆積していったものと考えている。被熱そのものは弱いものである。地山が被熱するためBタイプとする。

SJ74は、や26Gr中央に位置し、ピットによる破壊のため部分的に被熱層が検出されているものである。それでも被熱層は焼結して頗る硬く、規模は復元で長径75cm×短径65cm、被熱標高9.960～9.980mを測る。被熱層には、粘土が貼られており、7～11cmの厚みをもつ。これより下位層では地山土が被熱を受けている。よって、A-②タイプの炉状遺構となる。SB315内に収まる形をとるが、検出レベルに25cm以上の差が認められるため、両者に関連性はないものと判断する。

これら炉状遺構の出土遺物だが、SJ71からのみ出土するものの、これ以外からの出土はない。SJ71での総数は、土師器煮炊具2点、中世土師器食膳具18点である。

第6項 土器溜まり遺構

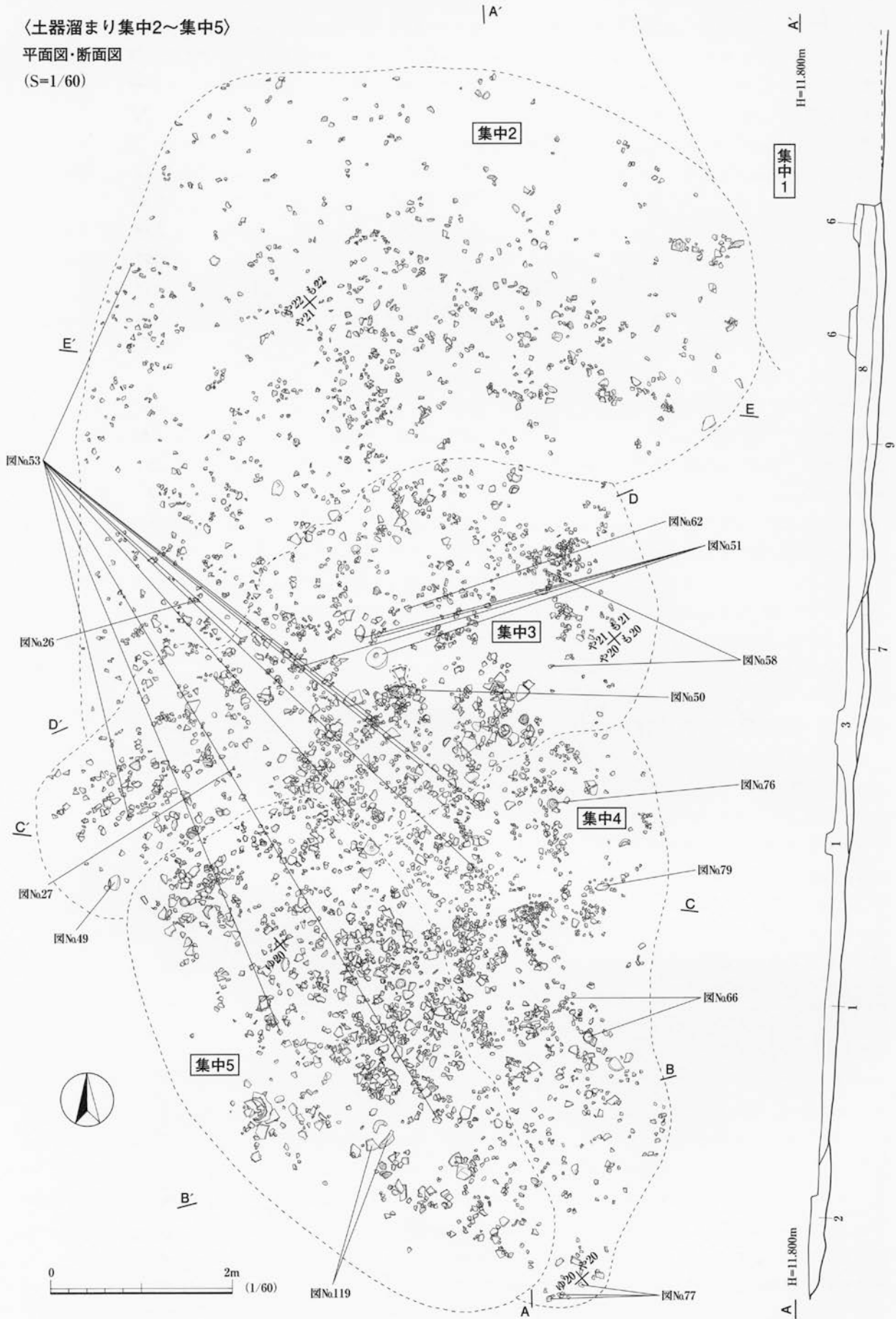
土坑としての掘り込みやプランが不明瞭であるのに、極めて多量の遺物を伴うものを、土器溜まり遺構としている。H地区には、SD23東側一帯にかけて広く古代遺物土器溜まり遺構が確認され、特にH地区南東、建物遺構が途切れる境の、め～φ21Gr、や・φ20Gr、も・や22G内で、極めて多量に集中する箇所が認められている。これを「集中1～5」と名付けて遺物を取り上げている。全体規模が長径1,740cm、短径1,120cmの広範囲に及



〈土器溜まり集中2～集中5〉

平面図・断面図

(S=1/60)



第57図 H地区古代土器溜まり遺構 遺構図2

ぶものであり、出土遺物に時期差をもち、時期も含め分布にまとまりが確認できるために、「集中1～5」と分別した。この他にも集中1の南に接して集中が認められた箇所があり、現地調査で土器溜まり遺構として認識したものがあつた。これは規模も小さく、明確な円形プランと明確な掘り込みが確認でき、土坑と判断してよいと思われ、整理中にSK437と変更している。

集中1は、他に比べると細片が多く、土器分布は比較的疎らである。集中3は大型の長頸瓶のまとまりが検出される他、須恵器・土師器どちらも出土する。集中4は、土師器釜が主体に出土し、須恵器は8世紀代中頃のものと考えられる。集中5は、比較的須恵器が集中し、深さをもち、SD23を切っている遺構である。

出土遺物総数は、集中1では、須恵器食膳具123点、須恵器貯蔵具104点、土師器食膳具31点（摩耗痕3点を含む）、土師器煮炊具316点、中世土師器食膳具114点、白磁6点、須恵製品の硯1点、打製石斧2点であり、時期はIV2期が主体にもつ。

集中2では、須恵器食膳具424点（摩耗痕6点を含む）、須恵器貯蔵具385点、土師器食膳具42点、土師器煮炊具1,330点、中世土師器食膳具112点、土師製品5点（支脚1点、円筒形3点、カマド1点）、灰釉・白磁3点、石製品5点が出土しており、時期はIV2期～V2期に位置付けされるものである。

集中3では、須恵器食膳具587点（摩耗痕5点、墨痕1点、油痕1点を含む）、須恵器貯蔵具617点、土師器食膳具51点、土師器煮炊具1,663点、中世土師器食膳具120点、土師製品として支脚3点、砥石を含む石製品4点である。これらの時期は、Ⅲ期～IV1期主体で、IV2期やV期も認められる。特筆すべきものとして、突帯付獣足壺が出土している。

集中4からは、須恵器食膳具208点（摩耗痕4点含む）、須恵器貯蔵具180点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具1,656点、中世土師器食膳具42点、須恵製品として硯1点、土製品6点（支脚3点、円筒形1点、匣鉢2点）この他カマド石が1点出土する。これらの時期はIV1期を主体にⅢ期～IV2期と判断されるものである。

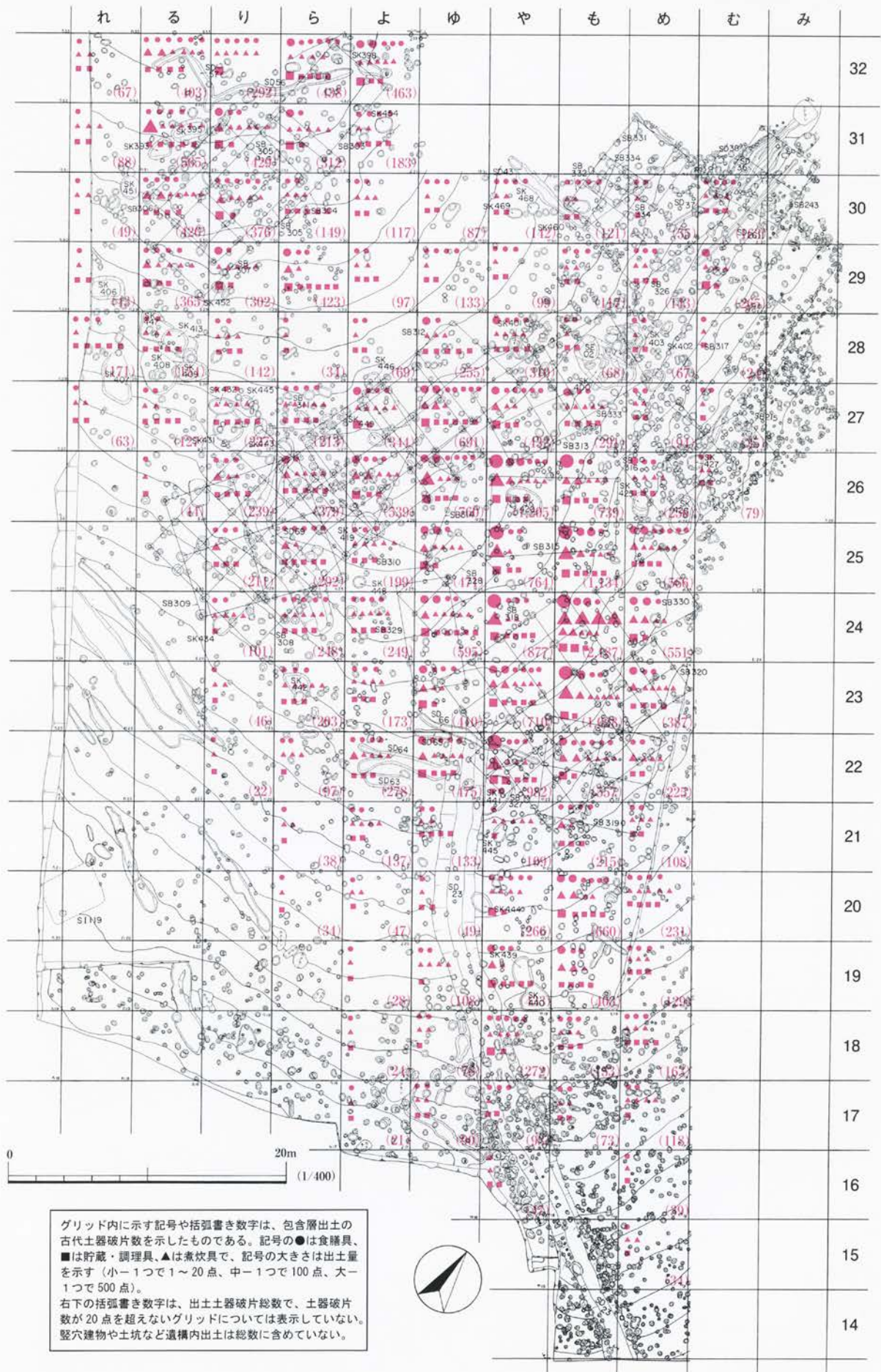
集中5からは、須恵器食膳具422点（摩耗痕5点含む）、須恵器貯蔵具645点、土師器食膳具23点、土師器煮炊具1,151点、中世土師器食膳具105点、土製品7点（カマド片1点、管状土鉢3点、円筒形3点）、石鏃を含む石製品3点が出土する。これら遺物の時期は、IV1期～V1期に相当するものである。

第7項 包含層と中世土器溜まり

包含層として提示したものは、第4項や第6項のような「土器集中遺構」や「土器溜まり遺構」以外の、遺構を認定できずに取り上げた遺物を示している。これは、土坑のように落ち込みを検出できないものであるものの、出土状況にまとまりが見られるなどの特質をもつ。

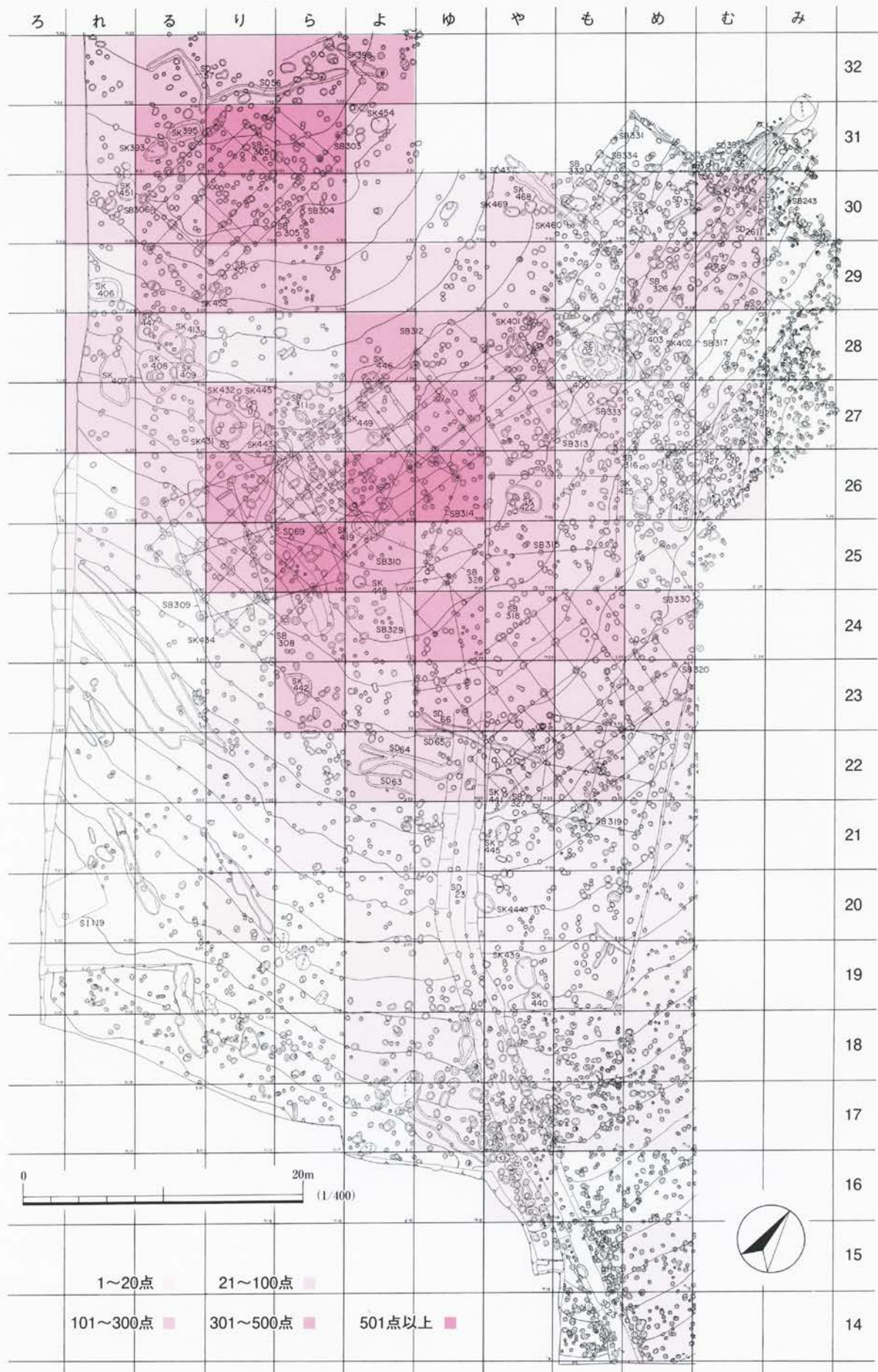
古代の包含層遺物は、これまで本遺跡が報告してきた中で最も出土量が多い。やはり、近代削平箇所が少なく包含層がよく残っていたことが一番の原因と思われる。出土遺物は時期幅をもち、I期のものから時期が確認でき、古代全般に及ぶ。特質すべき痕跡をもつものとして、転用硯、墨書、油痕跡、漆付着のものが認められる。今回報告区域では、南端にあたる区域での出土は削平のため少なく、前回報告区域の続きにあたる西側、ほぼ中央にあたる東側ではまとまった出土が認められる。このまとまりを前回は、谷部への流れ込みとした。しかし、中央から東側にかけての分布は、谷部への流れ込みだけでは済まされない分布状況となっている。分布に満遍さが欠け、地形ではない明らかな集中箇所が認められるからである。

中世の包含層遺物は、古代遺物破片数の約2倍の数となっているものの、Gr毎の出土点数を見ると、前回報告と同じような値をもつ。中世遺物は細片が多いということもあるが、近代削平が少なかった分、出土点数の多量区域が多い。最も多いのは、ゆ26Grの828点、次いで、ら31Grの656点となる。500点以上を示すGrでの出土点数は600点前後が主体である。この値と比例するように、土器にもまとまりが認められるため、ら・り31Grを中心とする一画を「中世1号土器溜まり」とし、ゆ・よ26Grと中心とした一画を「中世2号土器溜まり」としている。「中世3号土器溜まり」は、り23Grにおいての完形皿出土を示しており、これは第6項で記述した「り23Gr土器集中」と同じものになる。中世遺物には、土師器食膳具や土師器鉢の他に、白磁や青磁、加賀焼といった陶磁器があり、これらの点数は1Grに20点以内である。これらは、中世土器溜まりの分布と相対しており、多量の遺物量があるGrでは陶磁器出土点数も多くなっている。



第58図 古代土器包含層出土分布図 (S = 1/400)

第4節 その他の遺構と包含層



第59図 中世(11~12世紀)土器包含層出土分布図(S=1/400)

第Ⅲ章 今回報告区域出土の遺物

第1節 出土遺物の概要

第1項 出土遺物の総量と時期別比率

今回の報告の対象とした区域は、H地区の大半と報告書Ⅲから除外したF地区の南端区域である。8世紀以降を中心とするⅢ群集落の分布域であり、調査グリッドでは、ら〜れ-31・32Grとむ〜ろ-26〜30Gr、め〜ろ-14〜25Grの区域だが、遺構の広がりや土器の分布のまとまりから、ゆ〜ろ-30〜33Grでは前回報告した部分も一部存在する。

今回報告する区域より検出された遺構は、竪穴建物1軒、掘立柱建物31棟、土坑63基、井戸1基、炉状遺構12基、集石等祭祀遺構4基、道路状遺構1本、溝状遺構15条、土器溜まり4箇所ほどで、出土した遺物は遺物収納箱(645×380×145mm)で190箱を数える。内訳は須恵器(陶磁器含む)が89箱(F地区3箱+H地区86箱)、土師器が72箱(F地区5箱+H地区67箱)、石製品が10箱(H地区のみ)、鉄滓・鉄製品が19箱(H地区のみ)で、遺物片総数で示すと古代の須恵器28,856点(食膳具14,524/貯蔵具14,319/土製品13)、古代の土師器27,732点(食膳具1,494/煮炊具25,968/土製品270)、中世の土器20,339点(陶磁器401/土師器食膳具19,896/煮炊具41/土製品1)、石・石製品385点、鉄滓・鉄製品約7,800点となる。

今回の報告区域は過去の造成工事によって完全に消失した区域はなかったが、遺構下底面のみで包含層や遺構埋土層が削平された区域が600㎡ほどあり、これを今回の報告面積3,600㎡から差し引いた約3,000㎡が実質調査面積となる。これまでの報告でも示したが、遺跡における遺物出土指数(1,000㎡換算での箱数比率。田嶋明人「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会1992年)は遺跡の格付けを示す要素となるものとされているが、今回報告区域の出土量から割り出した遺物出土指数は63.3であり、報告Ⅳ区域の54.2や報告Ⅲ区域の43.4よりも高い数値となる。遺物出土が多い竪穴建物が密集する報告Ⅱ区域の59.1よりも高い数値であり、これは大規模なH区古代土器溜まりが存在すること、そして中世の土器廃棄土坑が数多く存在することが要因であろう。

遺物の時期は、これまでの報告区域と同様、田嶋明人編年の北陸古代土器編年と北陸中世土器編年案(田嶋編年で示す場合の古代土器は「古代〇期」、中世土器は「中世〇期」と示す)、そして筆者が報告ⅡとⅢ、Ⅴで考察した三湖台集落資料を基軸とした土器編年案(「三湖台〇期」と示す)で示す。

額見町遺跡は、Ⅰ群集落、Ⅱ群集落が古代Ⅰ1期から古代Ⅲ期までを中心とし、古代Ⅳ期以降はやや衰退傾向を示す集落群であるのに対し、Ⅲ群集落は古代Ⅲ期以降に中心をおく傾向があり、竪穴建物の数はⅠ群、Ⅱ群集落よりも著しく低下する。それに比例して掘立柱建物が増加するわけであるが、特に中世1期に位置付けられる掘立柱建物が広く展開することが当群集落の特徴である。また、今回の報告地区では、古代Ⅳ2新期〜Ⅴ期の遺構がⅢ〜Ⅳ1期の遺構の数を凌ぎ、それが土器溜まりの主体的時期に反映されている。前回報告した仏堂や大型

出土遺構名	須恵器食膳具	須恵器貯蔵具	土師器食膳具	土師器煮炊具	土製品	石製品	遺構別計
竪穴建物	2(2.0%)	1(1.0%)	0(0.0%)	97(97.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	100(0.2%)
掘立柱建物	130(21.6%)	106(17.6%)	18(3.0%)	314(52.2%)	3(0.5%)	31(5.1%)	602(1.1%)
土坑	1,348(20.7%)	1,196(18.4%)	218(3.3%)	3,628(55.7%)	69(1.1%)	52(0.8%)	6,511(11.4%)
炉状遺構・集石遺構	11(11.6%)	27(28.4%)	0(0.0%)	57(60.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	95(0.2%)
道路状遺構	884(24.4%)	1,626(44.8%)	49(1.3%)	1,050(28.9%)	7(0.2%)	14(0.4%)	3,630(6.4%)
溝状遺構	59(22.7%)	44(16.9%)	5(1.9%)	146(56.1%)	3(1.2%)	3(1.2%)	260(0.4%)
土器タマリ内集中	1,764(17.7%)	1,931(19.4%)	134(1.3%)	6,113(61.3%)	23(0.2%)	9(0.1%)	9,974(17.5%)
土器タマリ・包含層・ピット	10,326(28.8%)	9,388(26.2%)	1,070(3.0%)	14,563(40.7%)	178(0.5%)	276(0.8%)	35,801(62.8%)
計	14,524(25.5%)	14,319(25.1%)	1,494(2.6%)	25,968(45.6%)	283(0.5%)	385(0.7%)	56,973

H地区及びF地区南端区域出土古代遺物集計表(破片数表示)

※なお、土器タマリ内集中とはH区古代土器タマリうち集中1〜5のみを別に集計したものである

井戸を中心とする仏教施設はⅢ群集落の中核であり、その仏堂施設の存続時期や繁栄の様相が、そのまま当地区の遺構や土器の中心的時期に相当していると理解されよう。なお、これまでの報告においては古代遺構の盛衰の様子を述べたが、当地区の古代建物遺構は、堅穴建物が1軒、掘立柱建物も17棟と少なく、集落群のはずれに位置している感がある。古代においては当地区が建物空間というよりも土器廃棄場（祭祀場）という性格をもつものであり、それは上記に示した遺物集計表の、土器溜まりや包含層出土が8割という高い数値を有し、土坑が11%程度に留まるという状況からも明確であろう。

次に、中世土器についてだが、全て中世1期の範疇におさまるもので、11世紀2/4期頃から12世紀中頃の100年を超える程度の時期幅に入る。大型掘立柱建物をはじめとして14棟が存在しており、当集落群の中で最も中世遺構が分布する地区である。遺物出土は、中世土器溜まり遺構を中心に、掘立柱建物、土坑からも多く、土師器食膳具をはじめとして、白磁碗皿や灰釉陶器碗が多く出土する。前回報告地区の1.5倍近くの出土量があり、この時期の加賀地域の白磁出土量としては突出した量と言えるだろう。なお、遺物の時期は、中世1-I期（南加賀8A期）が3割弱、中世1-II1期（南加賀8B期）が7割弱、中世1-II2期（南加賀8C期）が1割程度といったところである。

出土遺構名	土師器食膳具	土師器煮炊具	白磁食膳具	施釉陶食膳具	陶磁貯蔵具	土製品	遺構別計
掘立柱建物	954(99.4%)	0(0.0%)	5(0.5%)	1(0.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)	960(4.7%)
土坑・井戸	2,620(99.3%)	5(0.2%)	5(0.2%)	6(0.2%)	0(0.0%)	1(0.1%)	2,637(12.9%)
土器ダマリ・包含層・ピット	16,349(97.4%)	33(0.2%)	273(1.6%)	110(0.7%)	17(0.1%)	0(0.0%)	16,782(82.4%)
計	19,923(97.7%)	38(0.2%)	283(1.4%)	117(0.5%)	17(0.1%)	1(0.1%)	20,379

H地区及びF地区南端区域出土中世遺物集計表（破片数表示）

第2項 出土遺物の分類と器種名

1. 古代遺物

古代遺物は大半が土器・土製品で構成されるものだが、少量の鉄製品と石製品が出土する。石製品は、砥石（大型砥石含む）、鍛冶炉材石などの鍛冶関係の遺物とカマドや炉の芯材などの部材があり、鉄製品では馬具、刀子、鉄鎌、鎌、釘、加工途中品などがある。鉄鎌の出土は多く、馬具の轡部分の完形品も良好な資料である。

古代の土器・土製品は、食器として分類される須恵器と土師器、施釉陶器、そして須恵質製品と土師質製品とがある。施釉陶器で古代に位置付けられるのは緑釉陶器のみで、近江産と推察される有台碗が2点出土する。須恵器は食膳具と貯蔵具、土師器は食膳具と煮炊具に機能分化している。各器種を食膳具、貯蔵具、煮炊具に大分類する中で、各個別の器種名を付しているが、須恵器の鉢や甌などの調理具機能を持つものについては貯蔵具に、土師器の鉢類については煮炊具に分類してある。各器種名並びに土師器粘土素材における分類、胎土特性に関しても、これまで報告してきた『額見町遺跡Ⅱ～Ⅳ』の分類案に準拠しているので参照いただきたい。

以上の食器類を除くと、各土製品は283点出土する。土製品については分類案提示とするまでもないので、今回報告地区出土の概要をここでまとめておく。

まずは、須恵質の土製品だが、文房具類である円面硯の破片が8点、土製形代である馬形土製品片が3点、南加賀窯跡群で使用された貯蔵具専用焼台2点が出土する。当地区の円面硯出土量は多いとは言えないが、時期的に古代Ⅳ～Ⅴ期に位置づけられるものが主体であることが特徴であろう。転用墨溜め・転用硯は6点、墨書土器は3点と少なく、油煙痕跡をもつ灯明皿転用坏類も26点と前回報告地区に比べて少ない。ただ、当地区では漆附着痕跡のある須恵器坏類が5点確認されており、注目される。

次に土師質土製品だが、煮炊きに伴う竈関連用具として、竈形土製品が87点、円筒形土製品が31点、支脚形土製品が51点出土する。前回報告地区の竈形21点、円筒形2点、支脚形29点に比べるとその差は歴然で、A地区～C地区の出土量に近い（A区＝竈：84点、円筒：6点、支脚：103点、Ⅱ報告区＝竈：38点、円筒：5点、支脚：60点、Ⅲ報告区＝竈：64点、円筒：23点、支脚：100点）。今回報告地区の掘立柱建物の数から考えて、意外な数値だが、出土箇所が古代土器溜まりに集中しており、古代Ⅲ～Ⅳ期の煮炊用土師製品をまとめて廃棄した感がある。なお、他に製塩土器片が8点、漁労網錘として使用される管状土錘が8点、土師器焼成に伴う焼成

道具として使用される匣鉢状土製品が79点出土している。

2. 中世遺物

当報告地区より出土する中世遺物については、大量の土師器食膳具でほぼ構成されることは前述したとおりだが、これに灰釉陶器と白磁類などの陶磁器類が定量含まれることが特徴である。灰釉陶器は碗類が117点、瓶類が4点確認され、ほとんどが東濃窯産と推察され、灰釉陶器から山茶碗の過渡期的な段階のもので占められる。型的には丸石2号窯式から明和27号窯式、そして一部西坂1号窯式を含み、年代的には11世紀1/4～12世紀初頭頃に位置付けられる。白磁類は碗皿類283点が出土する。細片での出土が多いが、接合可能なものは少なく、かなりの個体数が使用廃棄されていたものと見られる。山本B期から山本C期に位置付けられ、中世土器の年代と合致する。この他に、中世焼締陶器12点、中世須恵器1点が確認される。中世焼締陶器は加賀または越前と思われる甕で、中世須恵器は珠洲のすり鉢である。破片のため時期はわからないが、当中世資料には中世Ⅰ～Ⅱ期に位置付けられる土器群も存在しており、共伴する可能性もある。なお、中世土器の分類並びに胎土や焼成状況などについては、古代土器と同様、『額見町遺跡Ⅱ～Ⅳ』報告の分類案に準拠してあるので参照いただきたい。

第2節 古代の遺構出土遺物解説

ここでは、古代に位置付けられる遺物について述べるが、遺構出土の個別の遺物説明は観察表に譲るとして、特徴的なものや特記の事項、時期を代表できるような一括資料の土器様相などを中心として、竪穴建物、掘立柱建物、炉状遺構、集石遺構、土坑、道路状遺構、ピット、土器溜まり遺構の順で提示する。なお、本報告においては、鉄滓や羽口、炉壁等の製鉄及び鍛冶に関連する遺物は除外してある。これは、当遺物群の取り扱いについて、遺跡全体との検討が必要であり、地区別に報告する性格のものではないと判断したからである。当遺跡は生産・鉄加工の工程を行っていることが、集落の成立や遺跡としての性格を物語る重要な要素と見ており、遺跡総体での報告を科学分析結果とともにまとめ、報告書Ⅵとして別冊で刊行する予定である。よって、今回の報告では、鉄生産に関連する遺物群の報告は一切行わず、それと切り離して処理できる鉄製品のみを報告する。

第1項 古代竪穴建物及び古代掘立柱建物、古代炉状遺構、古代集石遺構出土遺物

当地区で検出された古代の建物遺構は、1軒の竪穴建物と17棟の掘立柱建物があるが、出土遺物が少ないため、炉状遺構、集石遺構などもふくめて、ここでは述べておきたい。

1. 古代竪穴建物出土遺物 (SI119)

小型竪穴建物で床面の一部まで削平を受けているため、遺物出土量は極めて少ない。カマド掘方や掘方土坑から少量の須恵器坏B蓋や坏A、土師器煮炊具が出土しており、概ね古代Ⅳ1期からⅣ2古期に位置付けられる。なお、同様に掘方土坑から鉄製鎌の刃先部分が出土している。直刃鎌の破片と思われるものである。

2. 古代掘立柱建物出土遺物

掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は、遺構としての一括性や同時期性を問にくい資料が多い。それは遺物出土量に少なさにも起因するが、遺構重複するものが多い点と土器混入が多い点はその要因である。よって、ここで図示した遺物がこの掘立柱建物に伴うものであるのか、微妙な部分があり、最終的には出土遺物全体の様相と遺構から時期決定するしかない。以下では特筆すべき遺物のみを取り上げ、その他は一覧表に代えたい。

SB326は四面雨落ち溝をもつ仏堂の建物の南方に主軸をあわせて建ち並ぶ付属屋の建物で、仏堂の建物の時期と同様、古代Ⅳ1期からⅣ2期の土器が出土している。器種は須恵器坏B・坏A・盤A・横瓶・甕、赤彩土師器坏B蓋、土師器煮炊具で、坏Aは内外面に厚く油煙痕の付着する転用灯明具が出土している(15)。当建物が仏教施設に関連することを示唆する資料と言えよう。なお、時期は6世紀に位置付けられるため当掘立柱建物に関係しないが、須恵質に還元焰焼成された埴輪片1点(18)が出土している。注目すべき遺物なので、ここで取り上げておきたい。

《須恵質埴輪》 当埴輪は所謂、高火度還元焰焼成された須恵質埴輪で、表面はチョコレート色に酸化冷却される。底径の大きさから見て、人物埴輪の円筒部と思われるもので、胎土から南加賀窯跡群産と推察される。外面は縦方向のハケ目調整、内面は縦方向のナデ調整で、底部内面を倒立させて、底部内側にはみ出した粘土をケズリ取っている。矢田野エジリ古墳出土の人物埴輪と同一技法であり、焼成具合や発色の状況から見ても、矢田野エジリ

遺構名	遺物の概要	遺構名	遺物の概要
SB214	遺物出土なし。掘立柱建物の形態から古代認定。	SB316	遺物13点。古代Ⅳ2期主にⅠ～Ⅱ期の須恵器・土師器。
SB215	遺物出土なし。掘立柱建物の形態から古代認定。	SB326	遺物28点。古代Ⅳ2期主にⅤ～Ⅵ期の須恵器・土師器。 坏A灯明具2点、須恵質の人物埴輪1点。
SB218	遺物出土なし。掘立柱建物の形態から古代認定。		
SB303	遺物14点。古代Ⅳ2新～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB329	遺物2点。古代Ⅰ～Ⅱ期の須恵器。
SB304	遺物11点。古代Ⅴ期前後の須恵器期・土師器。	SB330	遺物35点。古代Ⅴ期頃の須恵器・土師器。
SB305	遺物11点。古代Ⅳ～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB331	遺物10点。古代Ⅱ期の須恵器・土師器。
SB311	遺物39点。古代Ⅳ期頃の須恵器・土師器。	SB332	遺物出土なし。掘立柱建物形態から古代認定。
SB314	遺物1点。古代Ⅲ～Ⅴ期の土師器。	SB333	遺物10点。古代Ⅰ～Ⅱ期の須恵器・土師器。
SB315	遺物14点。古代Ⅳ期前後の須恵器・土師器。	SB334	遺物3点。古代Ⅱ～Ⅲの須恵器。

今回報告地区の古代掘立柱建物出土遺物一覧表

の埴輪と同一窯産と考えられよう（小松市教育委員会『矢田野エジリ古墳』1992年）。額見町遺跡からは極めて少量ではあるが、6世紀前半に位置付けられる須恵器坏Hが出土しており、特にH地区からは定量出土する。近隣にそのような時期の古墳、特に人物埴輪を伴うとすれば、それは埴輪の性格からして、首長墳として位置付けられるものであり、額見町遺跡の北東に近接立地する三湖台古墳群最大の前方後円墳、白のほぞ古墳が最も可能性が高い。当古墳の時期は、中司照世氏が古墳の形状から示した6世紀中頃という時期と（中司照世「加賀における古墳時代の展開」『古代文化』29巻9号、1977年）、伊藤雅文氏が埴輪や葺石を持たない点から示した5世紀中頃という時期とがあるが（伊藤雅文「加賀国の大型古墳の特質について」『発掘された北陸の古墳報告会資料集』まつおか古代フェスティバル実行委員会、1997年）、当埴輪を白のほぞ古墳からの流出資料と位置付ければ、有力な時期判断資料となりえるだろう。中司氏の6世紀中頃説を支持したい。

3. 古代炉状遺構出土遺物

古代炉状遺構としたものには、鍛冶炉、製炭土坑、屋外炉的な被熱遺構がある。SJ65、SJ72、SJ75は鍛冶炉で、SJ66は製炭土坑、他は屋外炉と思われるものである。遺物も少なく、特筆すべき遺物も出土してないが、鍛冶炉や製炭土坑の時期を示す遺物を図示しているので、解説しておきたい。

まず、SJ65だが、10点の須恵器と土師器が出土している。1の須恵器坏Aが炉床下から出土しており、概ね古代Ⅳ期に位置付けられる。

SJ66は19点の須恵器・土師器が出土しているが、図示できたのは2と3の須恵器坏B蓋・坏Aで、いずれも古代Ⅳ1期に位置付けられる。他の遺物も概ね同じ時期に位置付け可能である。

SJ72は15点の須恵器・土師器が出土しているが、図示できたのは4の須恵器碗のみで、古代Ⅵ2～Ⅵ3期に位置付けられるものである。他の遺物はⅤ期に位置付けられるものもあるため、遺構帰属時期は、古代Ⅴ～Ⅵ期とするのが妥当だろう。

4. 古代集石遺構出土遺物

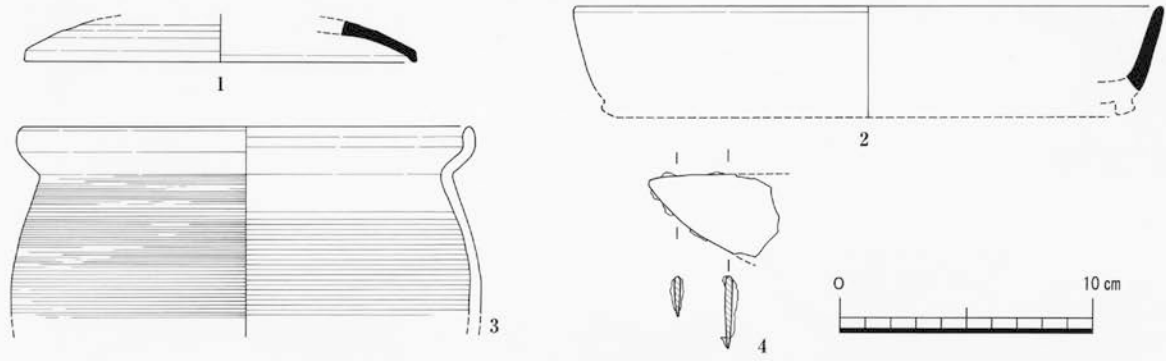
本報告の古代集石遺構は4基確認されるが、図示したSX04以外はほとんど遺物の出土がない。

SX04は古代Ⅳ期に位置付けられる図示した須恵器坏B蓋と盤A以外に壺瓶類の破片、土師器煮炊具の破片等43点が出土している。概ね同様の時期のものである。

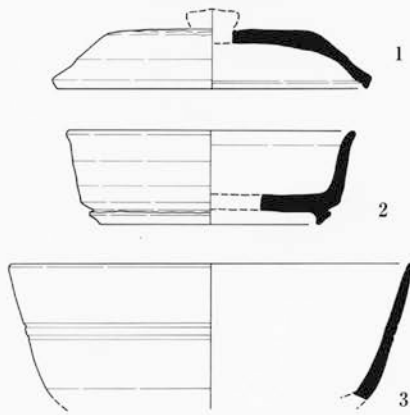
第2項 古代土坑出土遺物

古代土坑から出土する遺物は総点数6,511点と、今回報告地区の中では11.4%の高い割合を占める。ここに図示した遺物も140点と多いが、一つの遺構で出土する一括性高い資料群となると、その数は少ない。ここでは、編年資料として比較的一括性をもつ土器群を中心として、遺物解説を行う。また、出土遺物の中には特筆すべき資料、特殊な資料もあるため、それらについては一括資料としての性格を有していなくとも、解説を加えることとしたい。

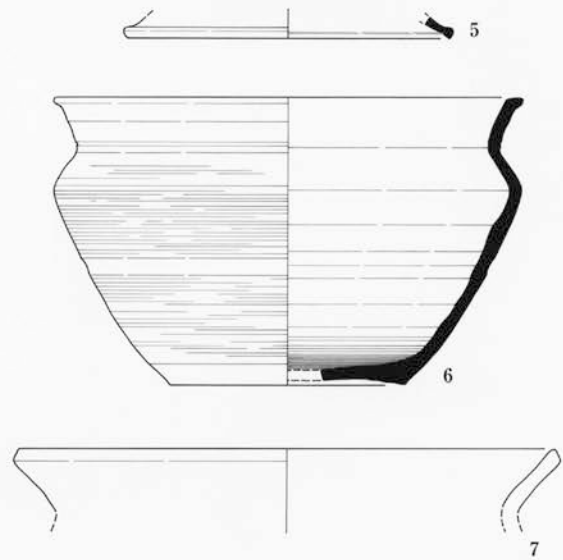
〈SI119出土遺物〉



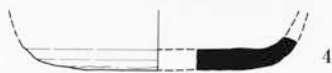
〈SB303出土遺物〉



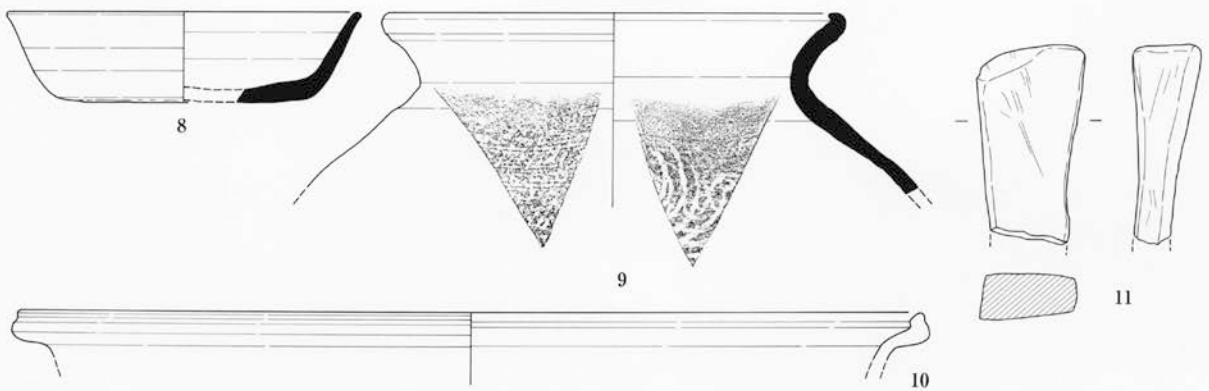
〈SB315出土遺物〉



〈SB305出土遺物〉



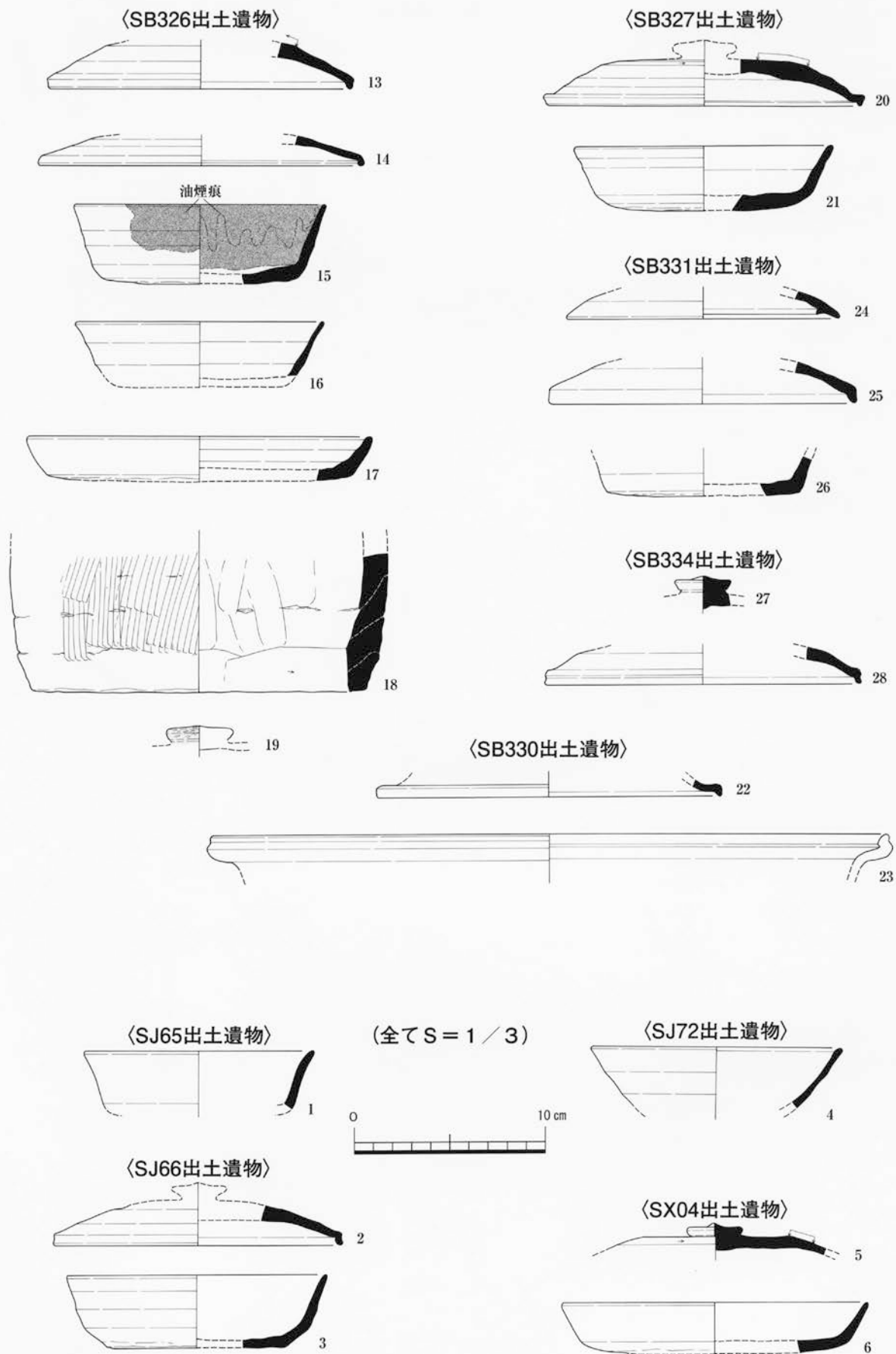
〈SB316出土遺物〉



〈SB317出土遺物〉



第 60 図 古代竪穴建物出土遺物 (SI119)・古代掘立柱建物出土遺物 1 (SB303～SB317、全て S = 1 / 3)



第 61 図 古代掘立柱建物出土遺物 2 (SB326 ~ SB334)・古代炉状遺構等出土遺物 (SJ65・SJ66・SJ72・SX04)

1. SK393 出土遺物

当土坑は通常規模の土坑で、出土遺物も多いとは言えないが、時期的にまとまった土師器煮炊具が105点ほど出土しており、浅鍋6割、長胴釜3割、短胴小釜1割で構成される。図示したものは2点とも土師器浅鍋で、古代Ⅵ1期頃に位置付けられ、外面スス痕跡、内面ヨゴレ痕跡など、煮炊き使用の痕跡を持つ。共伴する須恵器は貯蔵具のみで、使用済みの煮炊具をまとめて廃棄した感がある。

2. SK395 出土遺物

SK393に隣接する土坑で、土器の時期は若干後出するが、時期的にまとまった土師器煮炊具が多く出土する点でSK393によく似ている。須恵器は17点出土するも、ほとんどがⅤ期以前のもので、図示した3のみが当土坑に伴うものと理解する。南加賀窯産の椀Aで、4の土師器椀Aや5の椀Bと、口縁部内面が肥厚する点や器形特徴など類似しており、同時期のものと判断される。全体的な器形や法量、口縁部内側が肥厚する特徴、椀Bの高台がやや足高風となる点など、南加賀7A期の標識資料とした当遺跡SK49の土師器焼成坑に特徴に近い。つまり、古代Ⅶ1期に下る可能性があるが、3の椀Aは古代Ⅵ3期新段階に位置付けられよう。なお、須恵器椀Aは内外面にスス痕をもち、5の土師器椀Bも内外面にススの付着が見られる。これに土師器煮炊具が共伴する訳だが、古代Ⅵ3期的特徴を持つもので、144点出土する。図示したものは6点と少ないが、いずれも外面被熱による剥落やスス付着、内面頸部にコゲ帯痕跡など煮炊き使用痕跡を伴う。

以上の土器以外に匣鉢形土師製品と鉄製品が出土している。匣鉢形片は32点出土しており、12・13のとおり、円筒形の土師器焼成道具で、口径14cm台のものである。鉄製品は刃部を欠損する雁又式鉄鏃で、篋被部は突閃形態、茎部は刺突形態を呈する。

3. SK400 出土遺物

当土坑は中世井戸SE02の外周土坑として掘削されたものであるが、古代遺物が定量出土している。須恵器食膳具105点、須恵器貯蔵具118点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具99点を出土しており、図示した須恵器食膳具に示すように古代Ⅴ～Ⅵ期に位置付けられるものが大半を占める。同時期に位置付けられる土師器鉢Eも2個体(21・22)出土しており、図示していないが須恵器鉢E片も12点確認される。土器の時期や仏器的器種の出土から見て、仏堂的建物に関連して掘られた可能性もあるが、井戸は中世に位置付けられるものであり、周辺からの流れ込みや混在と見るのが妥当だろう。

4. SK407 出土遺物

通常規模の土坑で、概ね古代Ⅳ期に位置付けられる土器が出土している。当土坑において特筆すべきは須恵器甕の出土量である。大甕65点、中甕81点、小甕68点が出土しており、図示した須恵器小甕25は略完形品である。南加賀窯産の焼き歪み品で、焼成の際の胴部亀裂が入っている。製品出荷されずに廃棄されたものと見られるが、当土坑の甕類片は同様の意味で廃棄された可能性があろう。なお、有段式の円筒形土師製品が2個体出土しており、内面にはススの付着が見られる。

5. SK408 出土遺物

通常規模の土坑で、須恵器食膳具61点、須恵器貯蔵具86点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具516点を出土するが、図示できたものはさほど多くはない。概ね古代Ⅳ2古期を前後する時期に位置付けられるもので、須恵器はほとんどが南加賀窯産、土師器も南加賀窯産でほぼ占められる。特筆すべき器種として40の台付き鉢が出土している。脚部に方形スカシをもつもので、内面には被熱の際のススの付着が顕著に見られる。

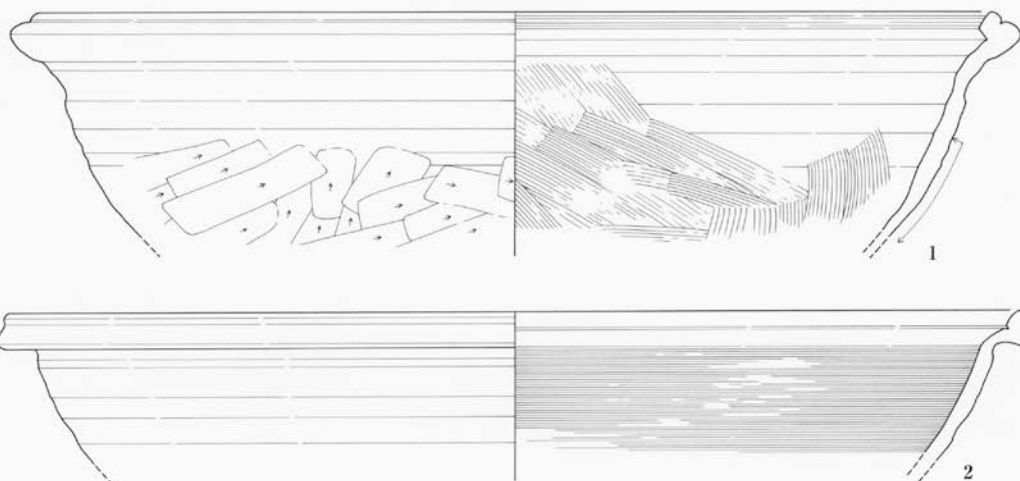
6. SK409 出土遺物

SK408に連結する土坑で、規模、形状ともに類似し、出土土器の時期も近いが、古代Ⅳ2古～新时期と若干後出するものが多い。須恵器食膳具40点、須恵器貯蔵具49点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具153点が出土しており、須恵器、土師器ともにほぼ南加賀窯産で占められる。なお、42の須恵器坏B身であるが、古代Ⅳ2古期に位置付けられる略完形品で、外底面には焼成前の「生」刻書が確認される。当刻書須恵器については、『額見町遺跡Ⅳ』の第4章総括において、他の「生」墨書と共に考察しているので参照願いたい(187頁)。

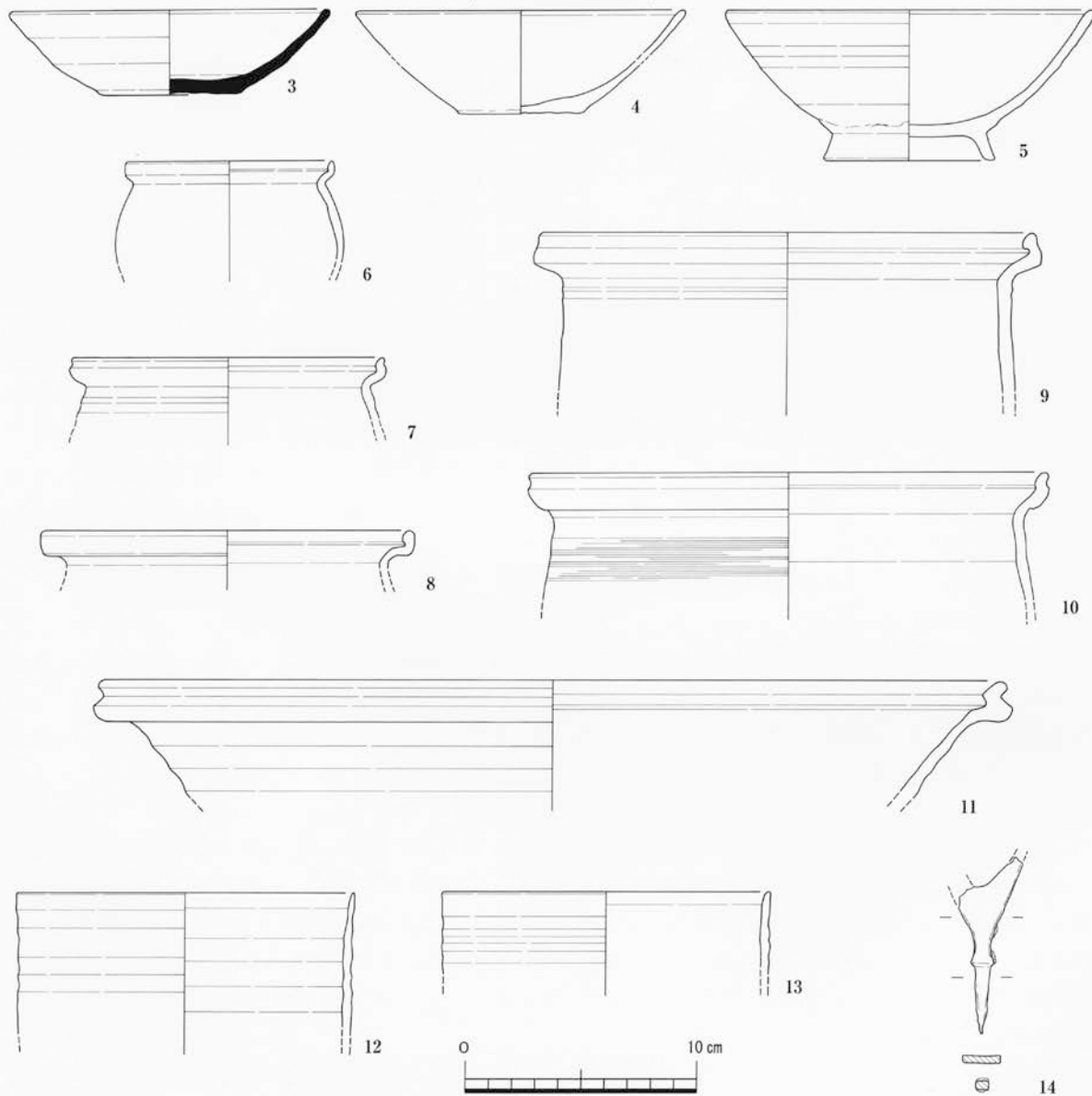
7. SK422 出土遺物

通常規模の土坑で、須恵器食膳具96点、須恵器貯蔵具72点、土師器食膳具19点、土師器煮炊具351点が出土している。図示したように、古代Ⅱ3～Ⅲ期に位置付けられるものが主体で、当地区の中では古い時期の土坑

〈SK393出土遺物〉



〈SK395出土遺物〉

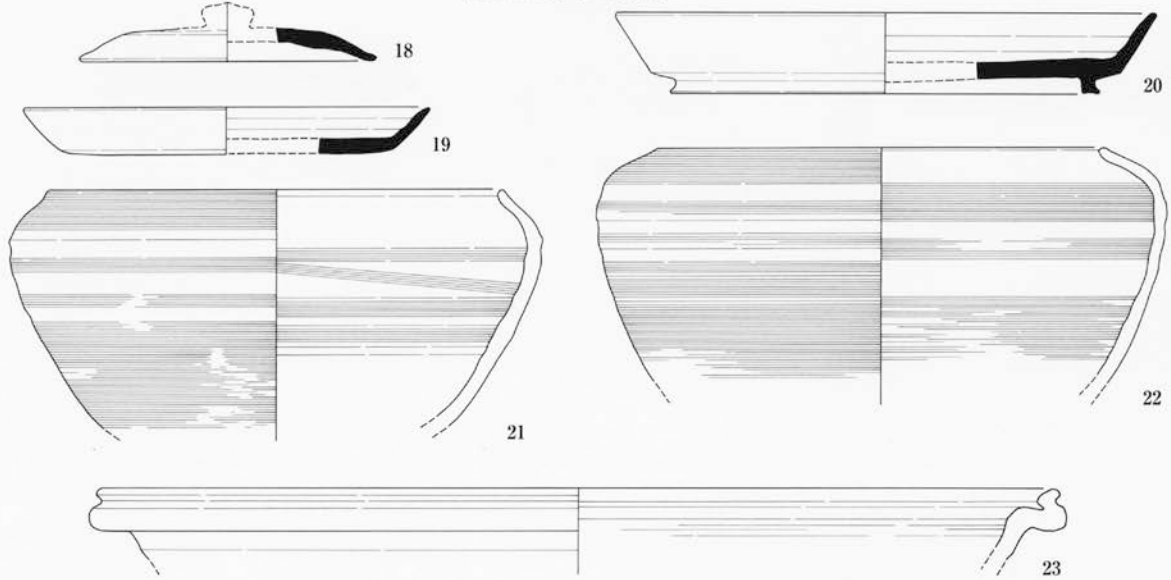


第62図 古代土坑出土遺物1 (SK393・SK395、全てS=1/3)

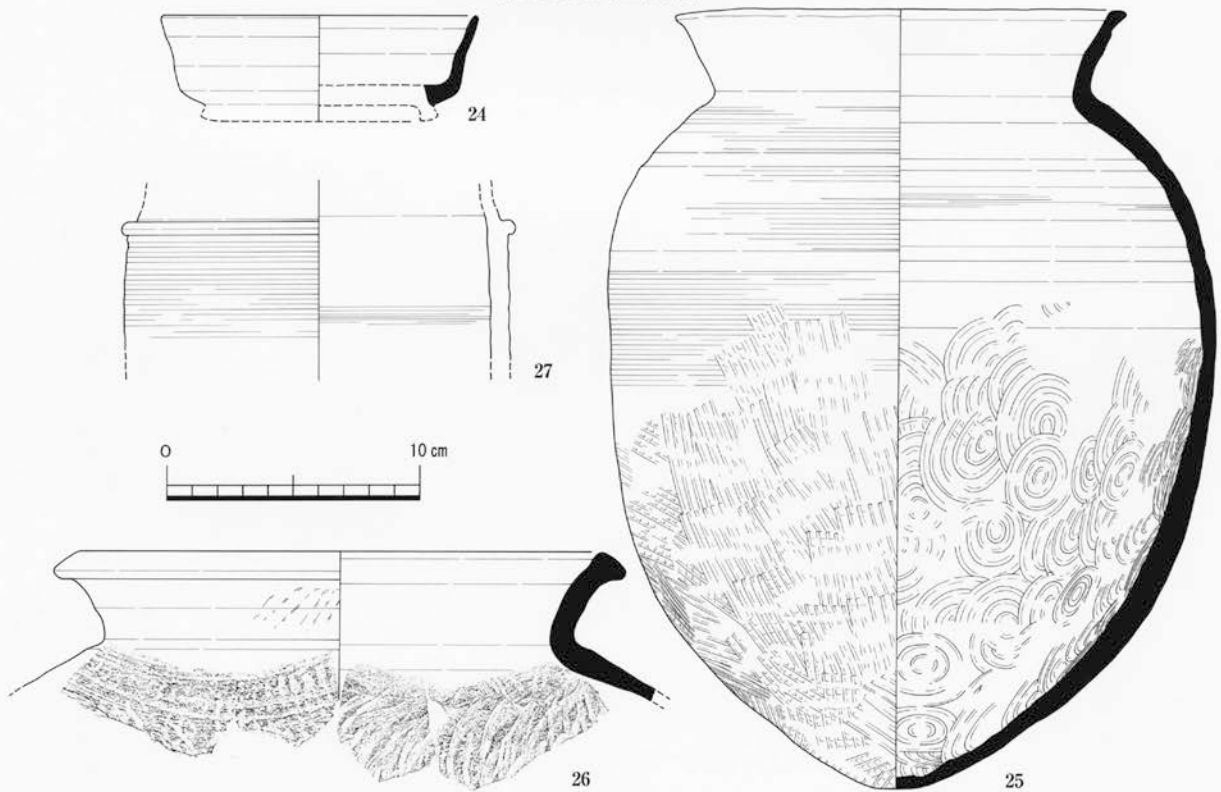
〈SK398出土遺物〉



〈SK400出土遺物〉

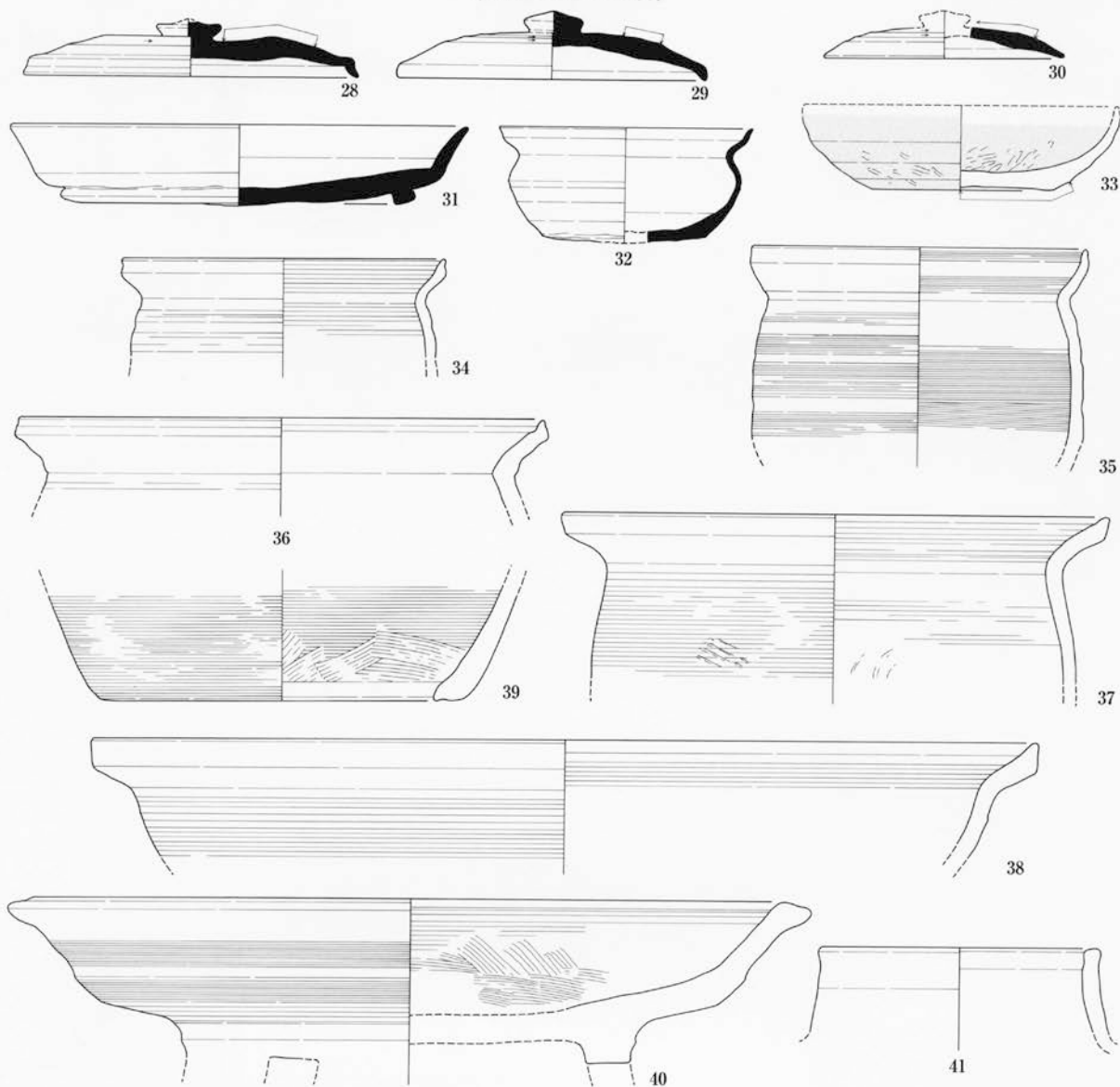


〈SK407出土遺物〉

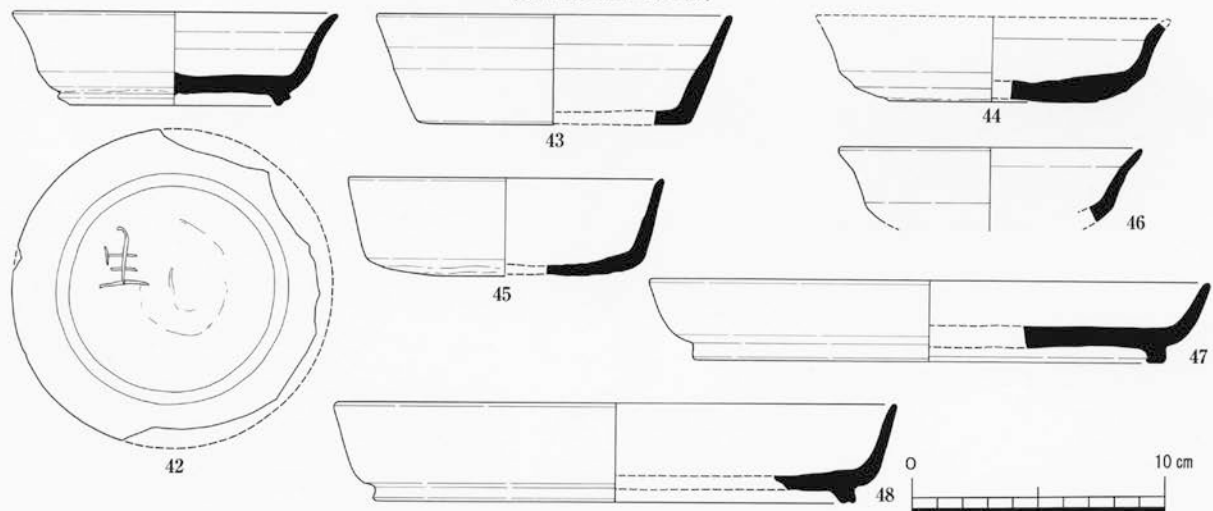


第 63 図 古代土坑出土遺物 2 (SK398・SK400・SK407、全て S = 1 / 3)

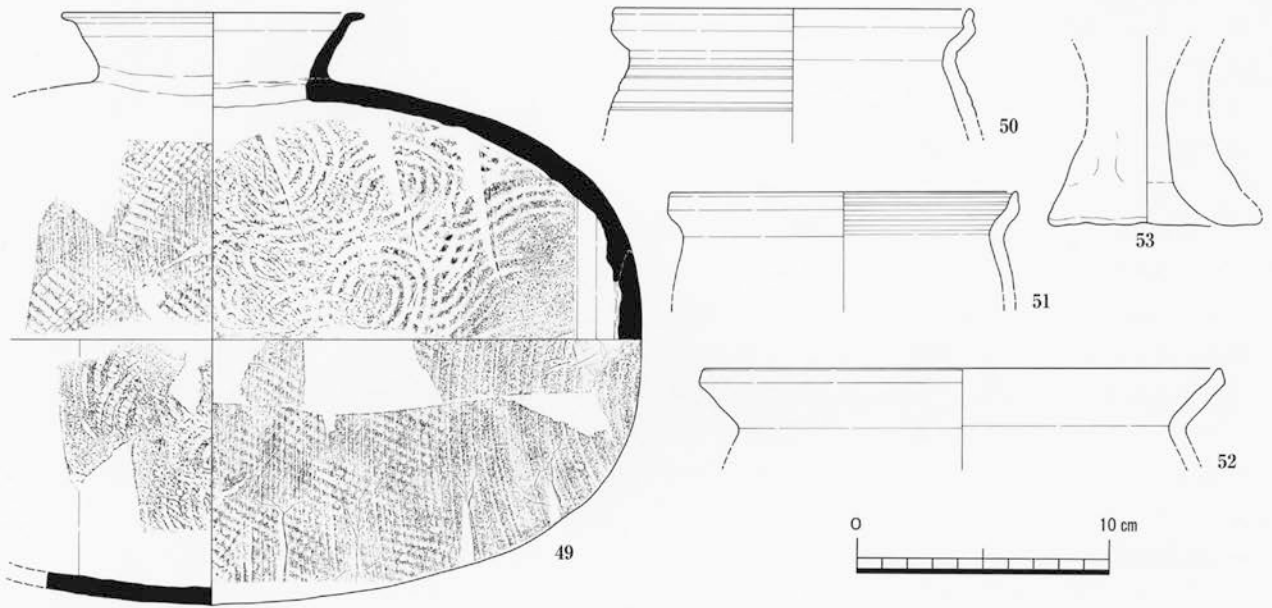
〈SK408出土遺物〉



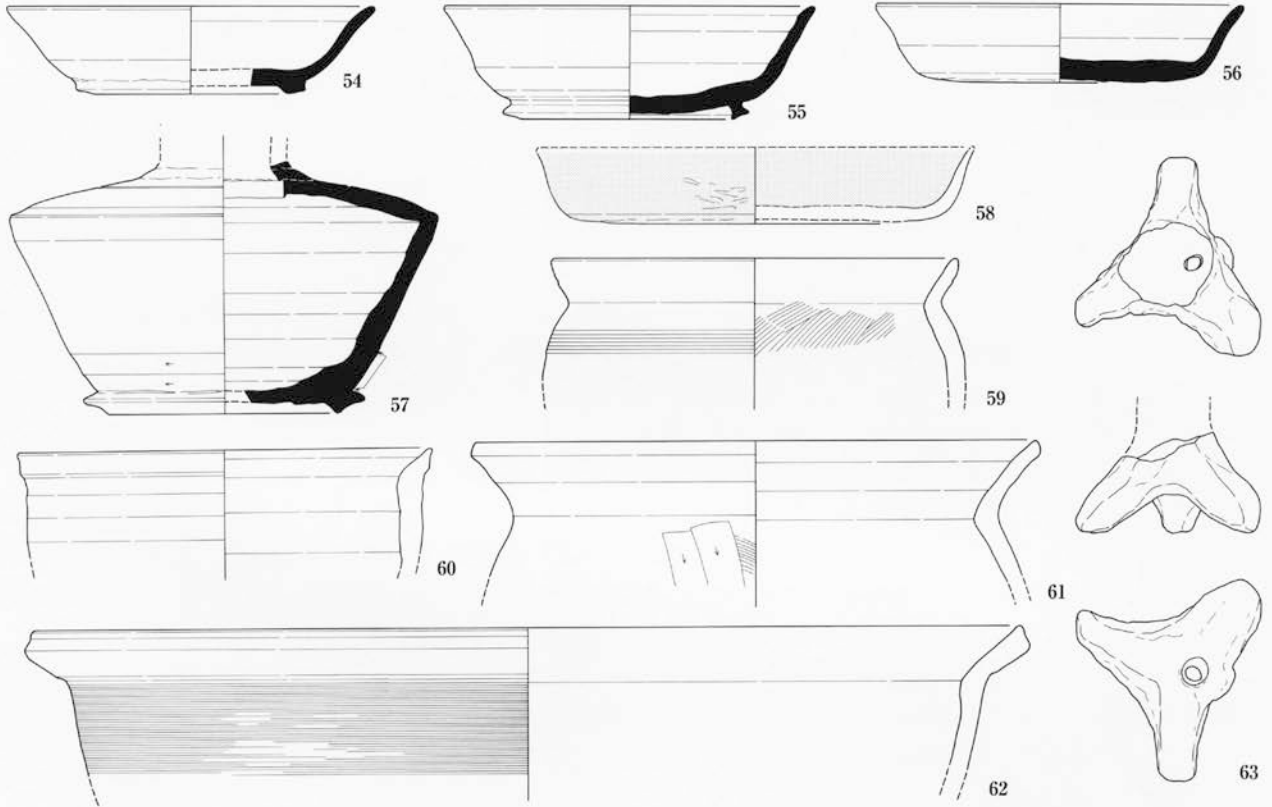
〈SK409出土遺物〉



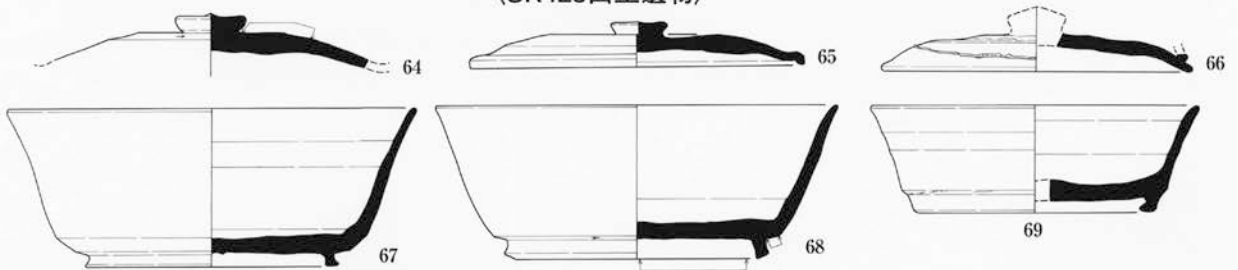
第64図 古代土坑出土遺物3 (SK408・SK409 - 1、全てS = 1 / 3)



〈SK422出土遺物〉



〈SK423出土遺物〉



第 65 図 古代土坑出土遺物 4 (SK409 - 2・SK422・SK423 - 1、全て S = 1 / 3)

資料である。須恵器、土師器ともに南加賀窯産がほとんどを占めるが、60の鉢状器形を呈す土師器短胴小釜は北加賀に多い砂粒質の素地粘土を持つもので、搬入品に位置付けた。また、63の支脚形土師製品だが、地元B類胎土のもので、脚端が三叉に分かれる形態のものである。形態などから同時期に位置づけるべきものとする。

8. SK423・SK424 出土遺物

2基の土坑が連結しており、出土遺物が同時期であることと、接合関係にある遺物が多かったことから、同時期に廃棄、埋没した土坑と位置付けた。SK423で須恵器食膳具245点、須恵器貯蔵具72点、土師器煮炊具268点、円筒形土師製品4点、SK424で須恵器食膳具360点、須恵器貯蔵具180点、獣足盤や馬形などの特殊須恵製品3点、土師器食膳具50点、土師器煮炊具560点、支脚形や円筒形、竈形、管状錘などの土師製品5点が出土する。遺物の出土量が多く、器種も豊富で、古代Ⅳ2新时期前後の良好な土坑資料と言える。須恵器胎土は91の盤Aで能美窯産が確認できた以外は全て南加賀窯産で、南加賀窯産でも良質な胎土を使用するものが多い。この点も当期の特徴と言えよう。当土坑の特筆すべき遺物は多く、坏部内面に「大」と思われる墨書を施す須恵器高坏A(74)や胴部に波状文を3段施し、小型鉢状器形を呈す作りの良い優品の小型壺(76)、把手付鉢Bの半完形品(92)などがあるが、その中でも以下の須恵器について、詳しく述べておきたい。

《須恵器獣足盤：94》 獣足盤は盤本体部分が欠損するものの、完存する2本の足部が出土しており、接着部の様子から盤の高さが8～10cm程度を測る平底の大型三足盤であったと推察される。足部の盤との剥離面には櫛目状線刻が入れられており、膝が曲がり、足が真っ直ぐ立つように付けられている。獣足装飾は5本の爪(指)が写実的に描かれ、極めて精巧に作られており、大きさや作りなどから見て優品価値の高い特注品と位置付けられる。古代Ⅳ2期～Ⅴ1期頃に位置付けられる南加賀窯産で、仏堂の建物で使用される火舎として特注生産されたものだろう。

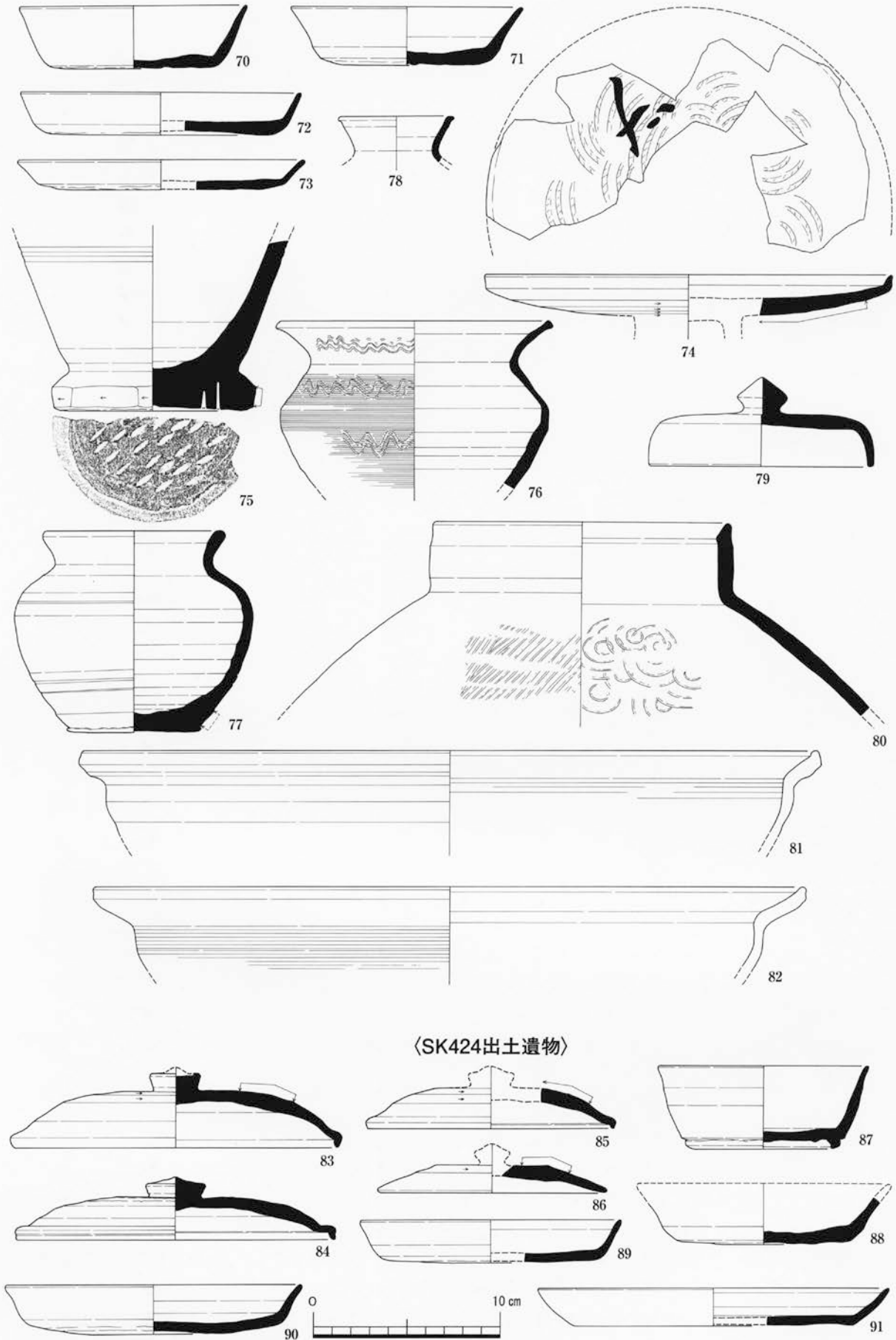
《須恵器大甕：95》 南加賀窯産で、他の器種よりも半世紀ほど古く位置付けられる。破片での出土だが、口縁部から底部まで復元できており、大甕の成形方法が復元できる数少ない資料である。復元される成形方法は、①鉢状底部成形：底部円盤に粘土紐積み上げ成形し(高15cm程度)、丸底に叩き出し成形した後、内面をハケ目調整、外面をナデ調整する。②胴部積み上げ成形：①の鉢状底部が乾燥した後、その上へ粘土紐積み上げ+叩き成形(内面亀裂の入ったDb当て具)をしながら、胴部上位まで積み上げ成形する。③胴部上位叩き出し成形：胴部中位の張り出しと頸部への絞りのための叩き出し成形(内面Dc当て具)をする。④胴部中位の形を整えるための叩きを施す(内面亀裂の入ったDb当て具)。⑤口縁部成形：ロクロ成形で口縁部を成形する。⑥頸部接合：胴部乾燥の後、胴部上端を切り揃え、その上に粘土紐積み上げし、⑤の別作り口縁部を接着して、接合頸部をユビナデして仕上げる。⑦黄土塗布：成形完了の甕の胴部上半内外面に黄土(赤色酸化鉄粒を混ぜ込んだ土)を塗布する。

以上が成形方法だが、黄土塗布により当部位の叩き具痕、当て具痕は目地が埋まった感じで、光沢のない黒色釉と化し、その上位では濃緑色の降下釉が垂れて付着する。鉄釉とも呼ばれる黄土塗布による化粧は、猿投窯の大甕を中心として6世紀には確認できるものであり、南加賀窯では8世紀前半から散見される。

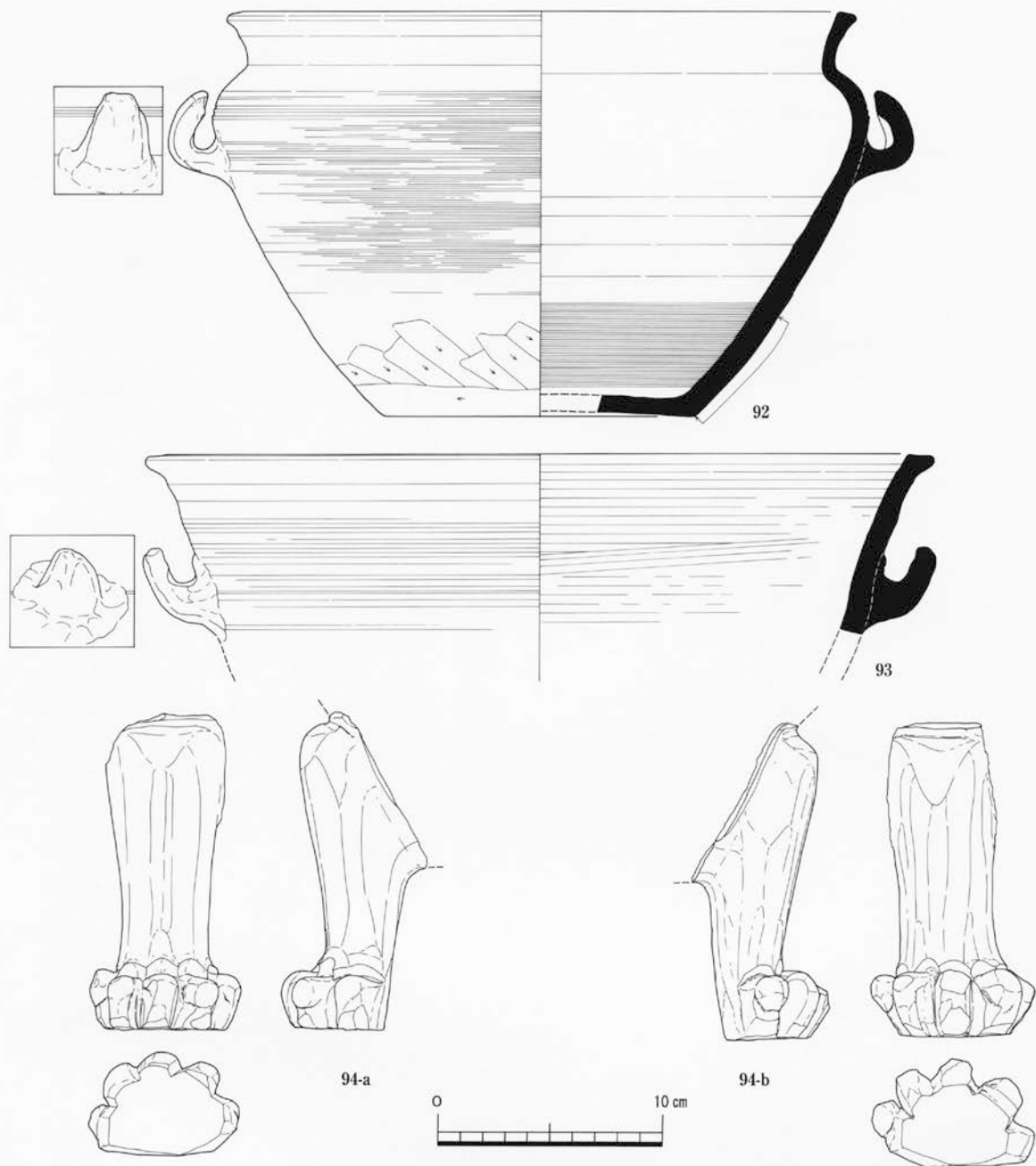
《馬形須恵製品：96》 馬形は頭部、尾部、脚部四本を欠く胴体部分の完存品で、太い粘土紐を何本か合わせて中実の胴部としている。背の部分には線刻とともに粘土の剥離痕があり、粘土貼付による鞍の装飾が施されていたものと予想される。南加賀窯産で、Ⅱ3期以降のものだろう。

9. SK425 出土遺物

小型の土坑で、須恵器食膳具21点、須恵器貯蔵具11点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具225点の出土遺物の構成が示すように、土師器煮炊具を主に廃棄している。特に、土師器浅鍋が多く、図示したように煮炊具の9割以上が浅鍋である。ほとんどが外面スス痕、内面ヨゴレ痕の煮炊き痕跡を持つもので、何かの目的で浅鍋を大量に使用し、まとめて廃棄したものと考えられよう。時期は古代Ⅳ2新时期を前後する時期にほぼまとまり、99の須恵器瓶Dもほぼその時期に位置付けられる。口頸部を欠損する胴部完存品で、頸部剥離痕から見て欠損後に使用した痕跡は認められない。肩に2個対で、胴部下位に1個の三耳が付される当器種の古形態で、耳の成形も粘土塊を貼り付けで整形し、穴を開けて作るものである。底部糸切りを行うもので、南加賀窯産である。なお、南加賀窯産の須恵器貯蔵具専用焼台(100)が出土しているが、口縁部がやや内傾して立ち上がる形態のもので、古代Ⅳ2新时期に位置付けて問題のないものである。口縁部は欠損している。



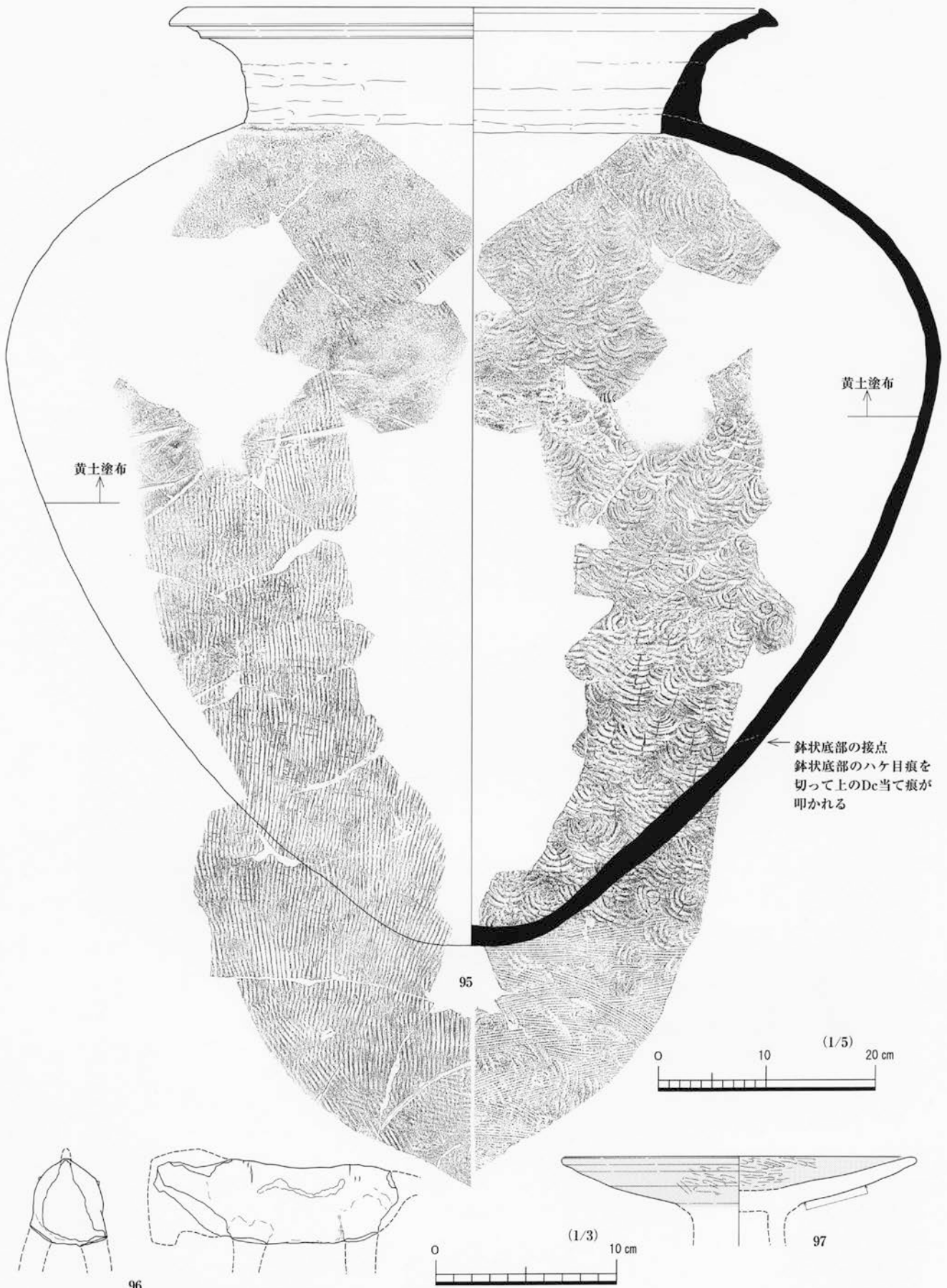
第 66 図 古代土坑出土遺物 5 (SK423 - 2 · SK424 - 1、全て S = 1 / 3)



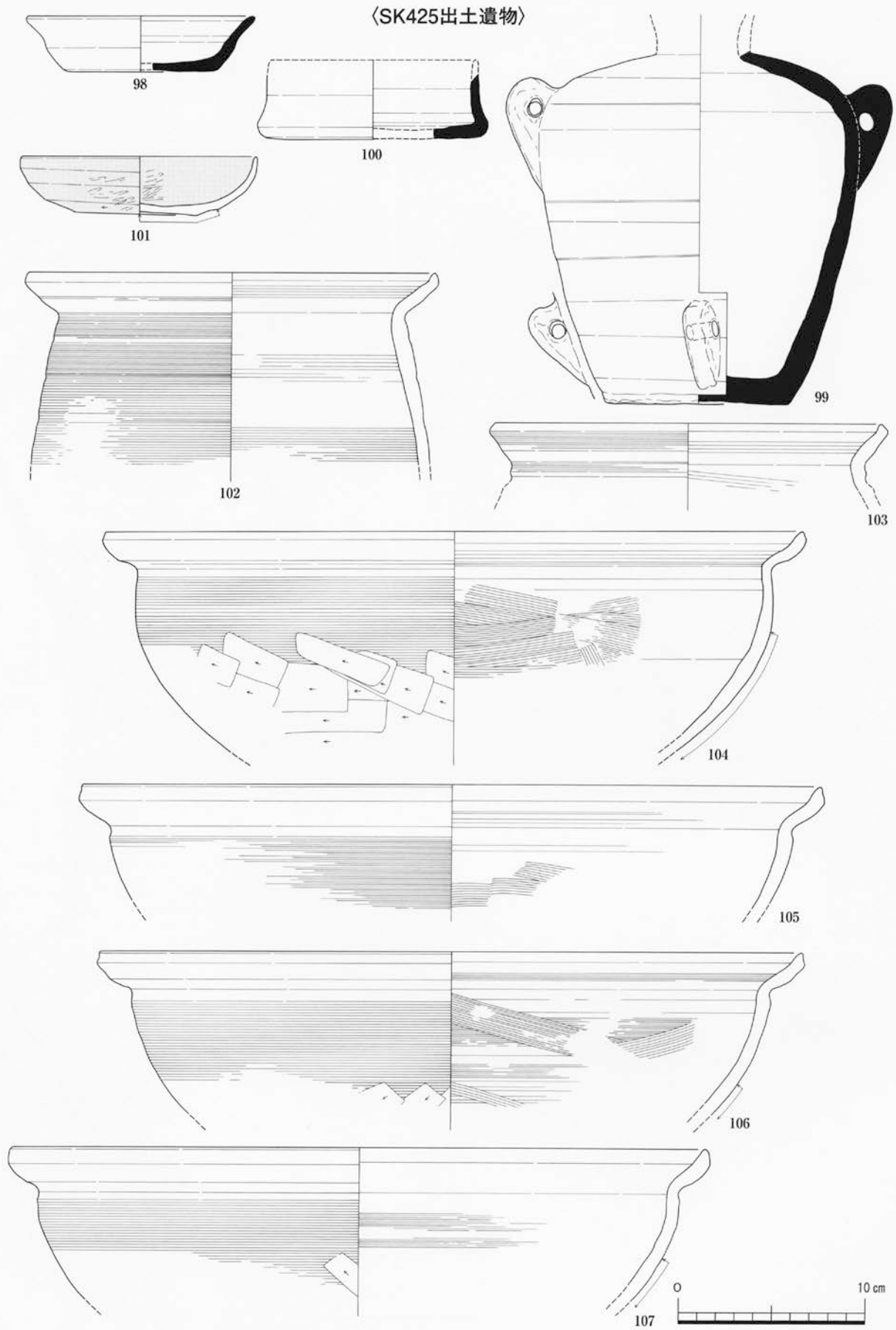
第 67 図 古代土坑出土遺物 6 (SK424 - 2、全て S = 1 / 3)

10. SK426 出土遺物

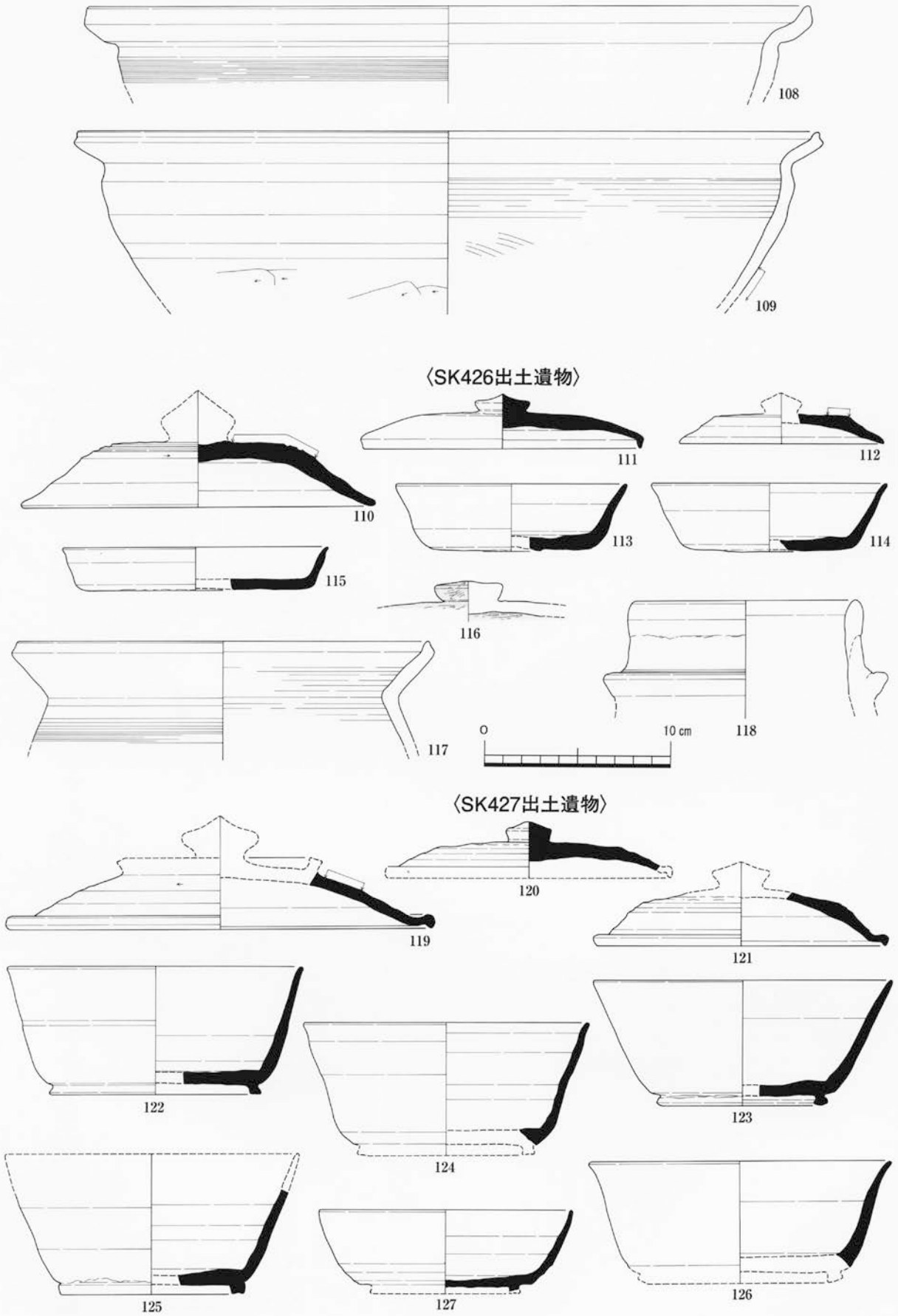
方形プランを呈す土坑で、SK425 に隣接して掘られる。出土土器は古代Ⅳ 2 新期を前後する時期にまとまる傾向があり、SK425 と関連性を持って掘られた土坑なのであろう。須恵器食膳具 90 点、須恵器貯蔵具 41 点、土師器食膳具 19 点、土師器煮炊具 215 点、円筒形土師製品 2 点が出土しており、須恵器、土師器ともに南加賀窯産で占められる。特筆すべきものとしては、110 の特殊蓋がある。口縁部折り曲げのない素口縁の大型蓋で、天井部に沈線を施すなど鉢蓋と位置付けられる。また、118 の円筒形土師製品は玉縁状有段式のもので、内面にはスス痕跡が残る。



第68図 古代土坑出土遺物7 (SK424-3、95のみS=1/5、他は全てS=1/3)



第69図 古代土坑出土遺物8 (SK425-1、全てS=1/3)



第70図 古代土坑出土遺物9 (SK425 - 2、SK426・SK427 - 1、全てS = 1 / 3)

11. SK427 出土遺物

小型の土坑であり、出土遺物も須恵器食膳具 70 点、須恵器貯蔵具 18 点、土師器食膳具 8 点、土師器煮炊具 150 点と多くはないが、須恵器食膳具を中心に比較的残りの良いものが多い。古代V1期を中心にV2期に下るものも含む資料で、当地区では数少ない当期の良好な土坑資料である。須恵器、土師器ともに南加賀窯産が大半を占めており、坏Bを中心に出土している。南加賀窯産特有ともいえる突帯付鏡蓋（119）の出土が確認でき、130の須恵器鉢Eが出土する。鉢Eは薄手の精巧な作りのもので、当期に多い土師器鉢Eに比べると優品に位置付けられるだろう。

12. SK435 出土遺物

遺物出土総点数が40点未満の土坑であるが、図示したように支脚形土師製品が4個体廃棄されていた。当遺跡では一般的な支脚形の形態である、中心に孔をもつ円筒形のC類（137～139）が主体だが、下端が八字に広がる低い形態の特殊な器形を呈すものも出土しており（140）、これは基部に横からスカシ孔が穿たれていた。支脚形として他に例のない特異な形態である。なお、C類の略完形品137には「×」のヘラ記号が記されている。支脚形に「×」記号を記すものは少なからず確認されており、土師器煮炊具の底面に見られる「×」のヘラ記号との関連または何か火にまつわる呪術的な意味が込められていた可能性もある。この「×」記号を持つ同形態の支脚形が当土坑の位置する、 $\phi 21 \cdot 22\text{Gr} \sim 21\text{Gr}$ の古代土器溜まり遺構において広く出土しており、古代土器廃棄場にまとめて捨てられたものか、または、この区域がそのような煮炊き行為を伴うような飲食儀礼祭祀の場にあたっていた可能性がある。



第71図 古代土坑出土遺物 10 (SK427 - 2・SK428・SK435、全てS = 1 / 3)

第3項 古代の道路状遺構出土遺物

今回報告を行う区域には、道路状遺構2が存在している。道路状遺構2は、溝状遺構SD23の掘削とその下底面の整地により道路構築する切通し形態のもので、ここで扱うものは全てSD23より出土した遺物である。なお、SD23はH区古代土器溜まり遺構と重複し、土器溜まり層を掘削して構築しているため、SD23として遺物取り上げたものの中に古代土器溜まり遺構に帰属すべきものが多く混在している。極力、そのようなものはH区古代土器溜まり遺構に帰属させて報告したが、抽出しきれていないものが一定量含まれていることを予め断っておきたい。

SD23から出土した遺物は、須恵器食膳具884点、須恵器貯蔵具1,626点、土師器食膳具49点、土師器煮炊具1,050点、土師製品7点、石製品14点と多い。その多くは溝状遺構の覆土より出土する遺物であるが、溝の底面整地土の中にも遺物が含まれており、これが道路構築年代を示す資料となる。H区部分では先に示したように、下層に存在する古代土器溜まり遺構のために整地土層の土器の抽出が困難だが、F区部分では下位に遺構重複がないため、整地土に食い込む遺物の抽出が比較的容易である。細片資料の遺物の詳細を確認していないため、不確定要素はあるが、図示した8の須恵器甕蓋や10の須恵器坏B蓋、20の須恵器坏B身が整地土層出土であり、概ね古代V2期に位置付けられよう。これよりも古い時期の土器は確認されるが、古代VI期まで下る資料は確認できておらず、H区についてもVI期に下る資料は確認されない。H区では、26・27の須恵器坏Aや32の須恵器盤A、44の須恵器瓶Bが整地土層に伴う古代V2期資料と位置付けられようか。以上、出土遺物から見て、道路状遺構2の構築年代は古代V2期であり、以下にそれよりも古く位置付けられる遺物も含め、特筆すべき資料を中心として解説する。

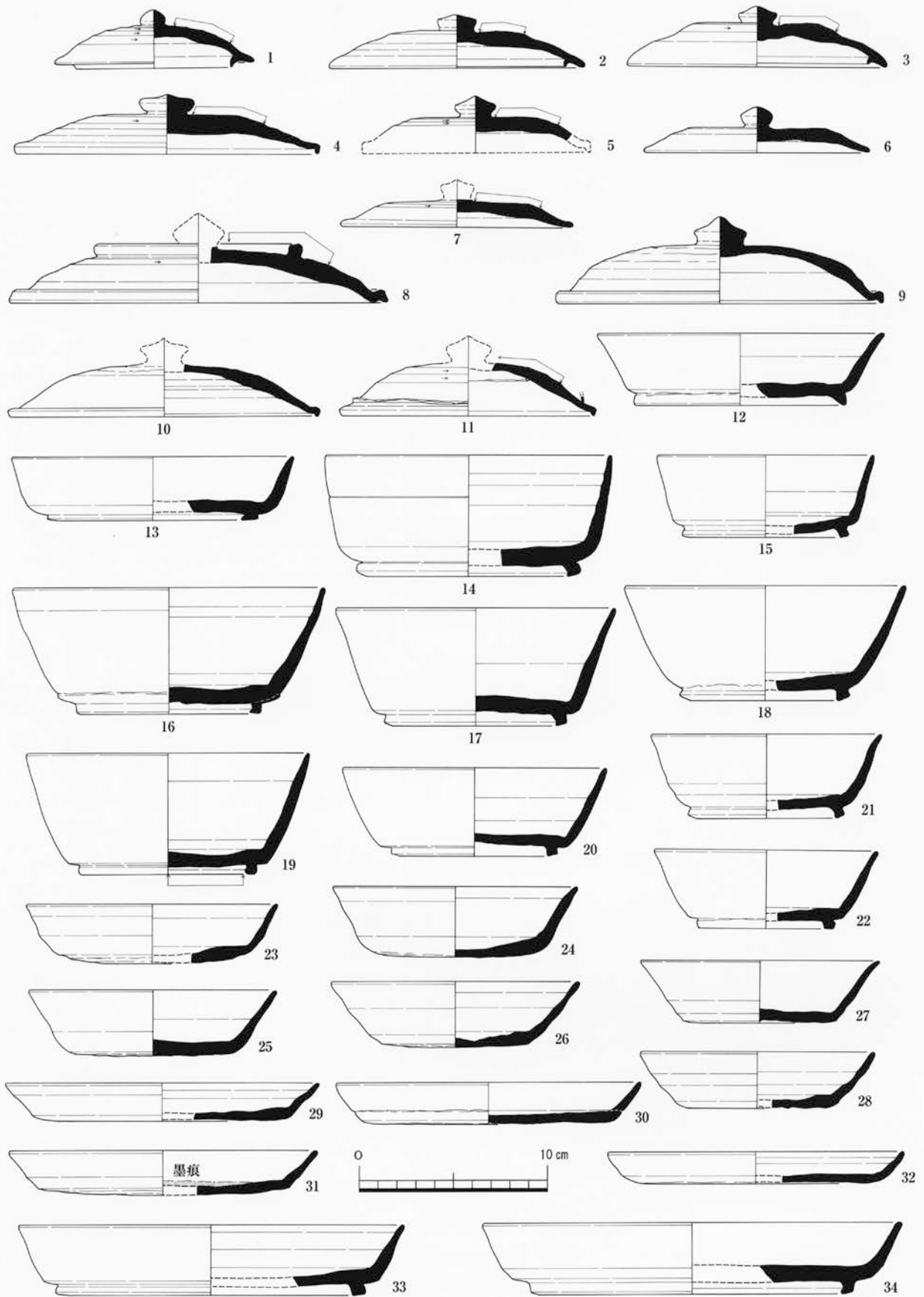
《古代Ⅱ2期の須恵器》 この時期に位置付けられる遺構資料はなく、当資料が今回報告地区の中では最もまとまった当期資料である。1の坏G蓋と41の甕、49の平瓶、55の壺Ⅰ、56～58の中甕が該当し、坏G蓋と甕は能美窯産、中甕は南加賀窯南群産、平瓶と壺Ⅰは南加賀窯北群産である。坏G蓋は当期の典型的な形態の半完形品であり、壺Ⅰも典型的な当期の器種である。また、甕の注口部外周には注口具を差し込んだ際の欠けが認められる。なお、時期は古代Ⅱ2期に下るが、坏A蓋の半完形品が2個体近接して整地層に埋められており、坏G蓋の出土地点と近接するなど、意図的な埋納も感じられる。

《古代Ⅳ2新时期～V2期の須恵器食膳具》 当遺構出土土器の中心となる時期で、4～7の坏B蓋、15～22の坏B身、25～28の坏A、29～32の盤A、33・35の盤Bが該当する。31の盤A（転用墨溜め）と35の盤Bが能美窯産である以外は、全て南加賀窯産である。能美窯産を始めとして、南加賀窯産でもこの時期の須恵器には白色に高火度焼成するものが多く、白色胎土を選択するなど優品生産の意識が感じられ、この時期の南加賀地域産須恵器の特徴となっている。

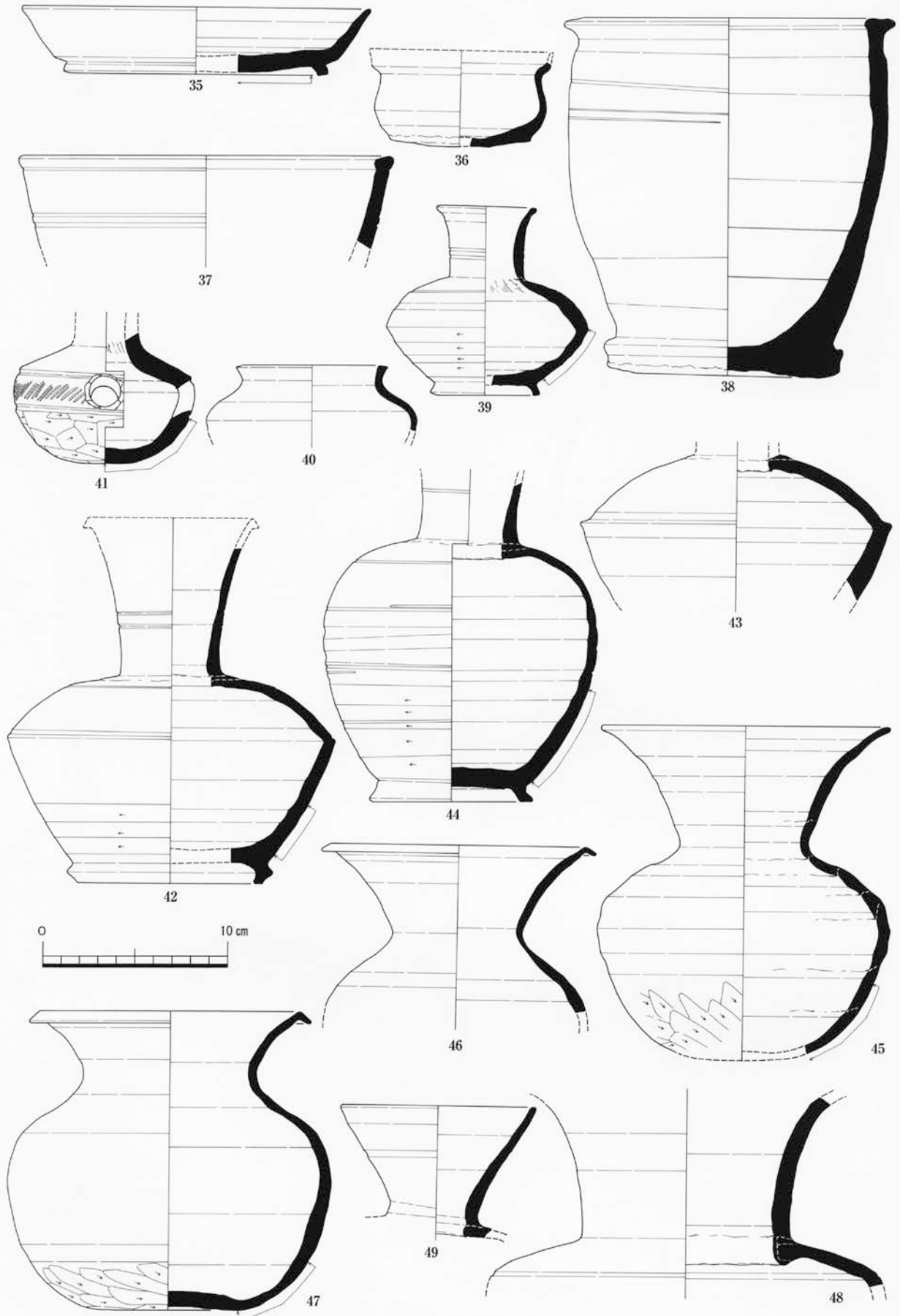
《古代Ⅳ2新时期～V2期の須恵器鉢・壺・瓶類》 38の鉢F、39・40の小型壺F・小型瓶A、42～44の瓶A・瓶B、51～54の壺Fが該当する。38の鉢Fや39の小型瓶A、42の瓶A、44の瓶B、53の壺Fは半完形などの遺存度高いもので、特に瓶A、瓶Bは口縁部を欠くが、胴部は略完形のものである。破片で出土しており、完形に近いものを破碎した感がある。なお、45～47の丸底で球胴形の胴部を呈し、広口の口頸部が付く、他に例を見ない瓶が存在するが、全体的に薄手に作る点や口頸部がラッパ状に開き、口縁部端を外側に折り曲げる形状、焼成具合や色調の点から、当期に位置づけるものと判断した。南加賀窯産であり、瓶Gと器種名を付した。このような胴部球胴器形で頸部を絞る器形の瓶類は、胴部上端にあたる部分を円盤閉塞してから球胴に変形させる風船技法で成形するものが多いのだが、当器種については、瓶Dのような胴部端からそのまま粘土紐を積み上げて口頸部成形している。胴部から頸部への繋ぎの部分が薄くなる特徴や口頸部器形は瓶Dに近似しており、技法的に共通性を見出せる。

《古代Ⅳ2～V期の須恵器甕》 これまで報告した道路状遺構において、路面造成する際の土器として須恵器甕を使用する事例が多かったが、当遺構においてもそれは共通しており、遺存度高く復元できる須恵器甕が5個体出土している。いずれも中甕で、59の胴部が長胴化する古代V期に出現する形態である以外は、いずれも古代Ⅳ2期に位置付けられる。胴部上端から口頸部へ粘土紐を積み上げて外反器形を作り出すもので、口縁部端を面形成して仕上げる。4個体とも全体的な器形は似ているが、60・61が胴部径44～48cm、器高45～51cmの通常規模なのに対し、62・63は胴部径38～40cm程度とひとまわり小型を呈す。小型のものは底部欠損のため、全

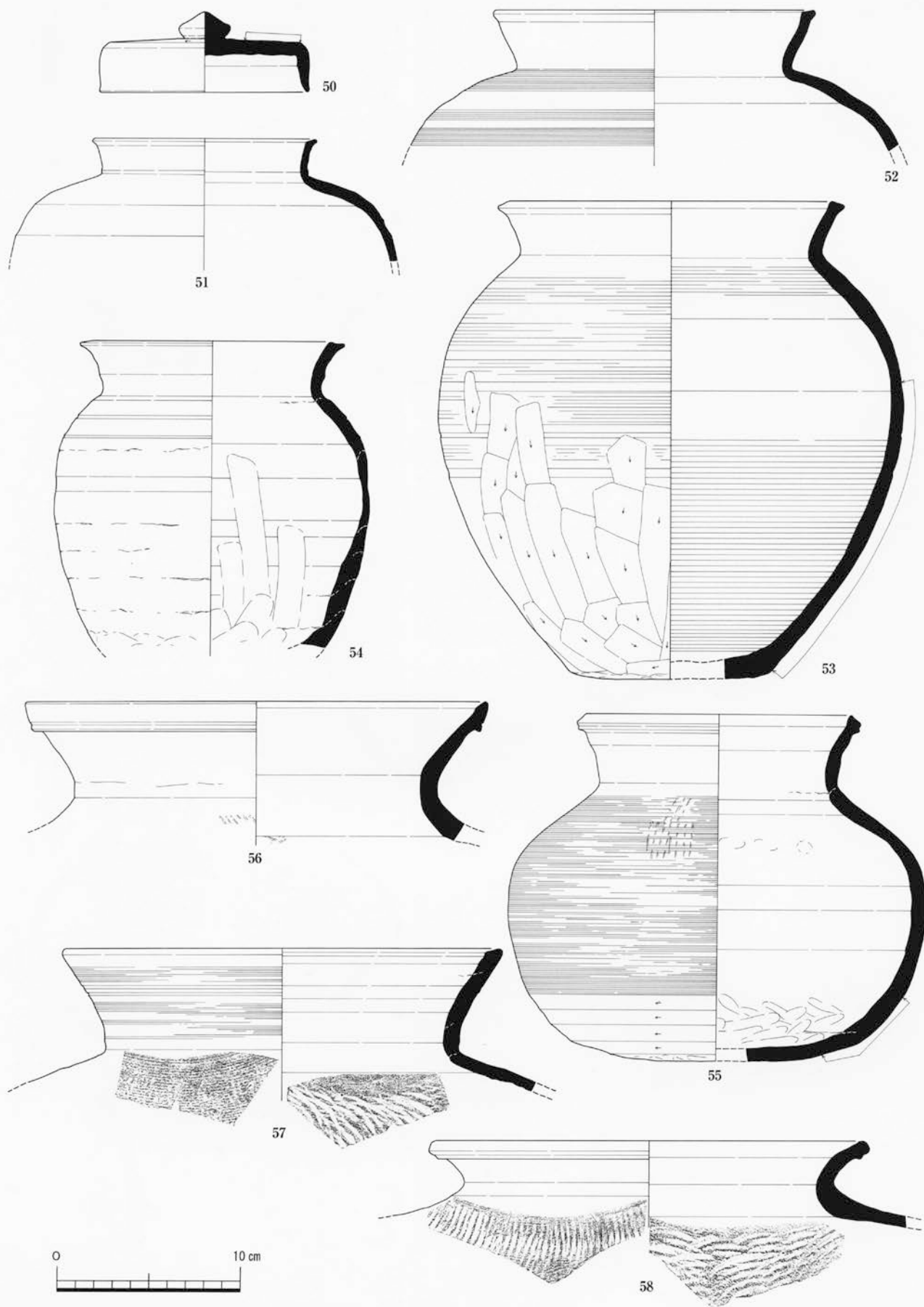
〈道路状遺構2:SD23出土遺物〉



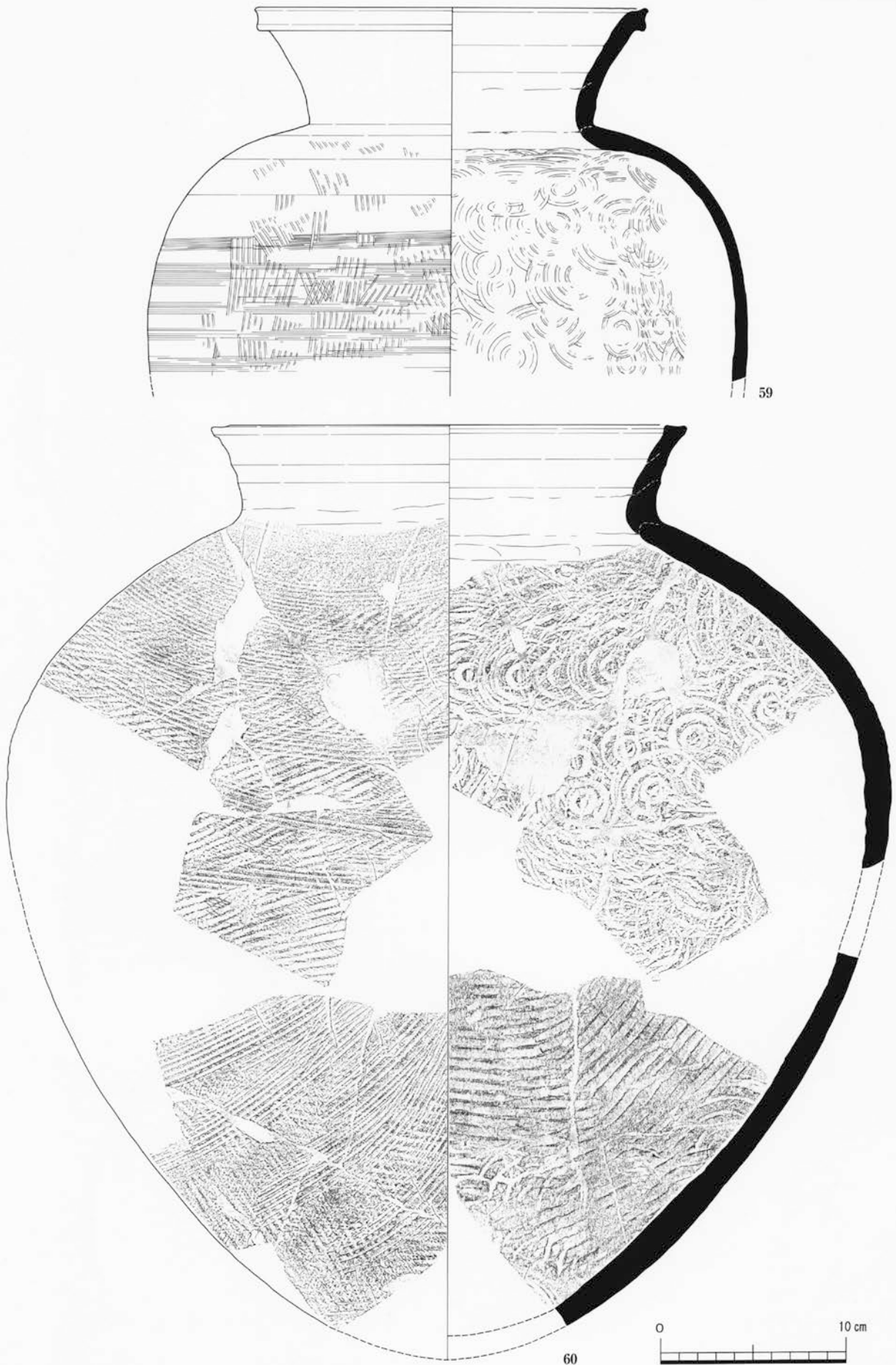
第72図 古代道路状遺構出土遺物1 (道路状遺構2-1、全てS=1/3)



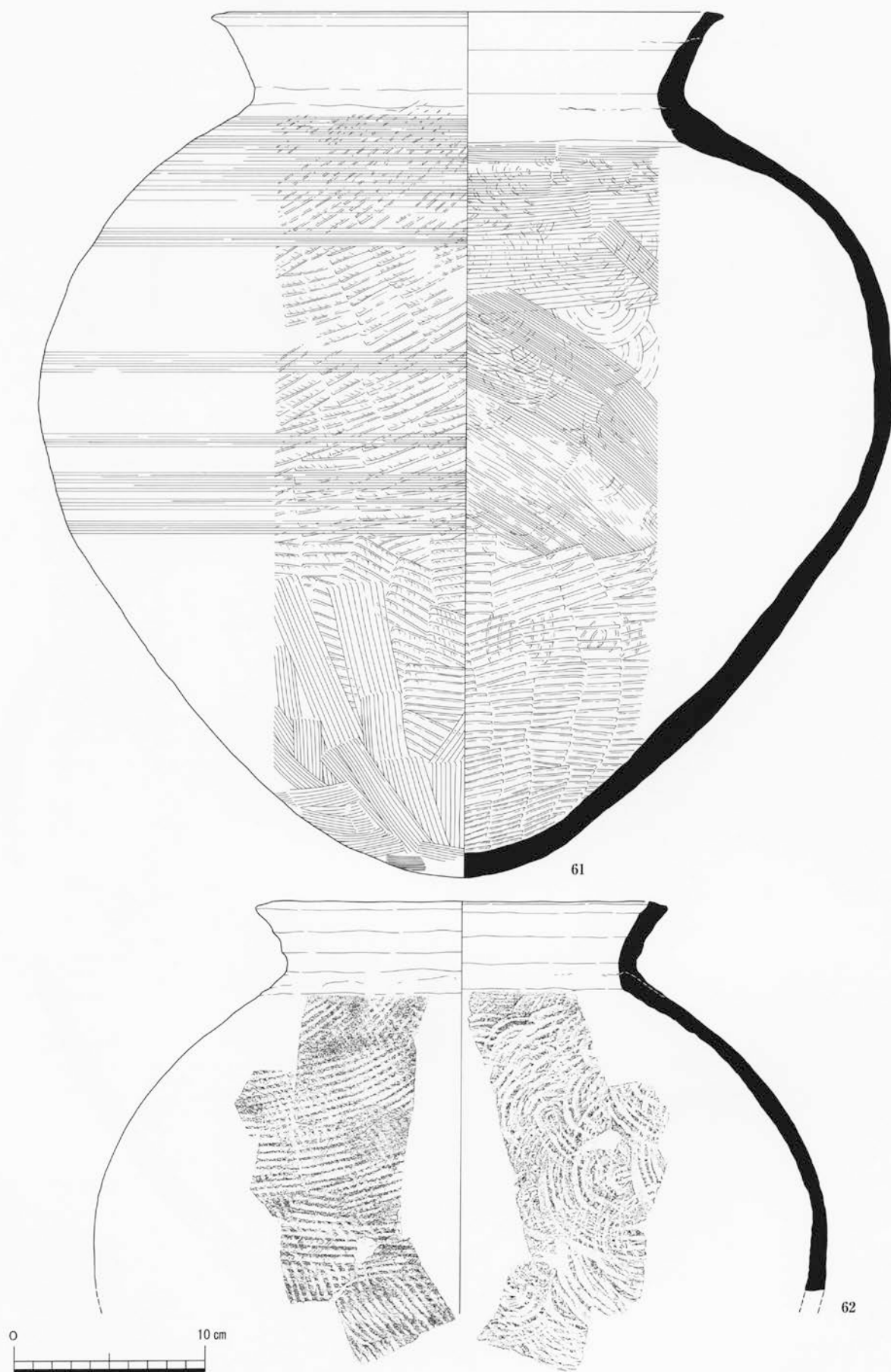
第73図 古代道路状遺構出土遺物2（道路状遺構2-2、全てS=1/3）



第74図 古代道路状遺構出土遺物3 (道路状遺構2-3、全てS=1/3)

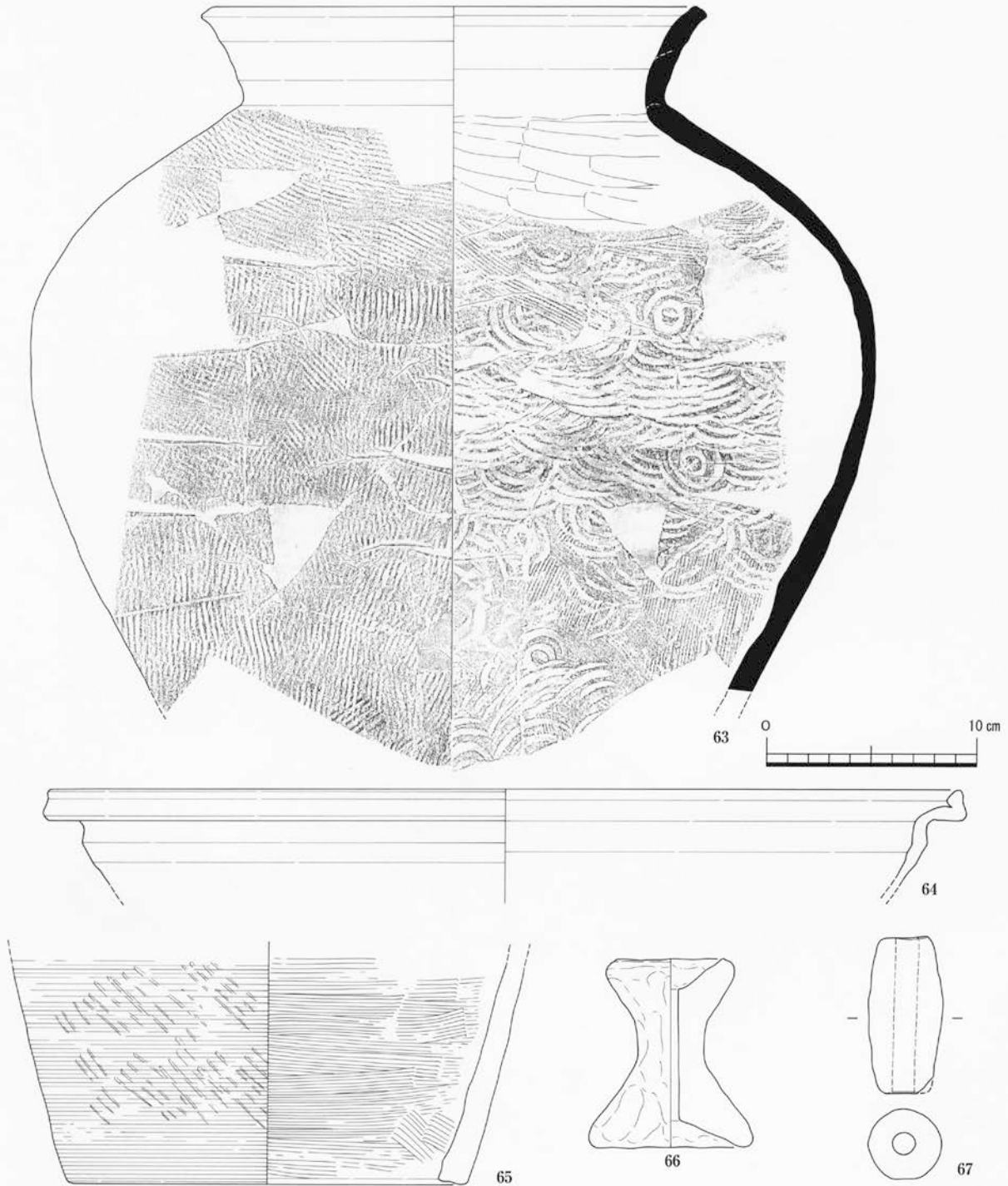


第75図 古代道路状遺構出土遺物4（道路状遺構2-4、全てS=1/3）



第76図 古代道路状遺構出土遺物5 (道路状遺構2-5、全てS=1/3)

体的な成形方法は不明だが、60・61の甕は遺存度が高く、成形方法の分かる資料で、兩個体に共通する叩き具や成形方法が看取できる。成形手順を示すと次の通りとなる。①胴部1次成形：底部円盤に粘土紐積み+横軸成形叩き（外面Hc類叩き具、内面Da類当て具）をして胴部上端まで積み上げる→②胴部上半2次成形：肩部の張り出しと胴部上端への絞込みを横軸成形叩き出し（外面Hc類叩き具、内面Da類当て具）により成形する→③口頸部成形：胴部上端から口頸部へ粘土紐積み成形し、回転ナデ調整で仕上げる。④胴部調整：外面カキ目調整（61のみ内面横～斜め方向のハケ目調整）→⑤底部叩き出し成形：成形台からはずし、底部叩き出し成形を縦軸叩き（外面Hc類叩き、内面He類叩き）により行う→⑥底部調整：底部付近外面をカキ目調整器具にて縦方向ハケ目調整。以上、兩個体とも同じ成形工具を使用し、底部叩き出し後に外面ハケ目調整で仕上げるという特徴を有しており、同一工人による製作の可能性が高い。

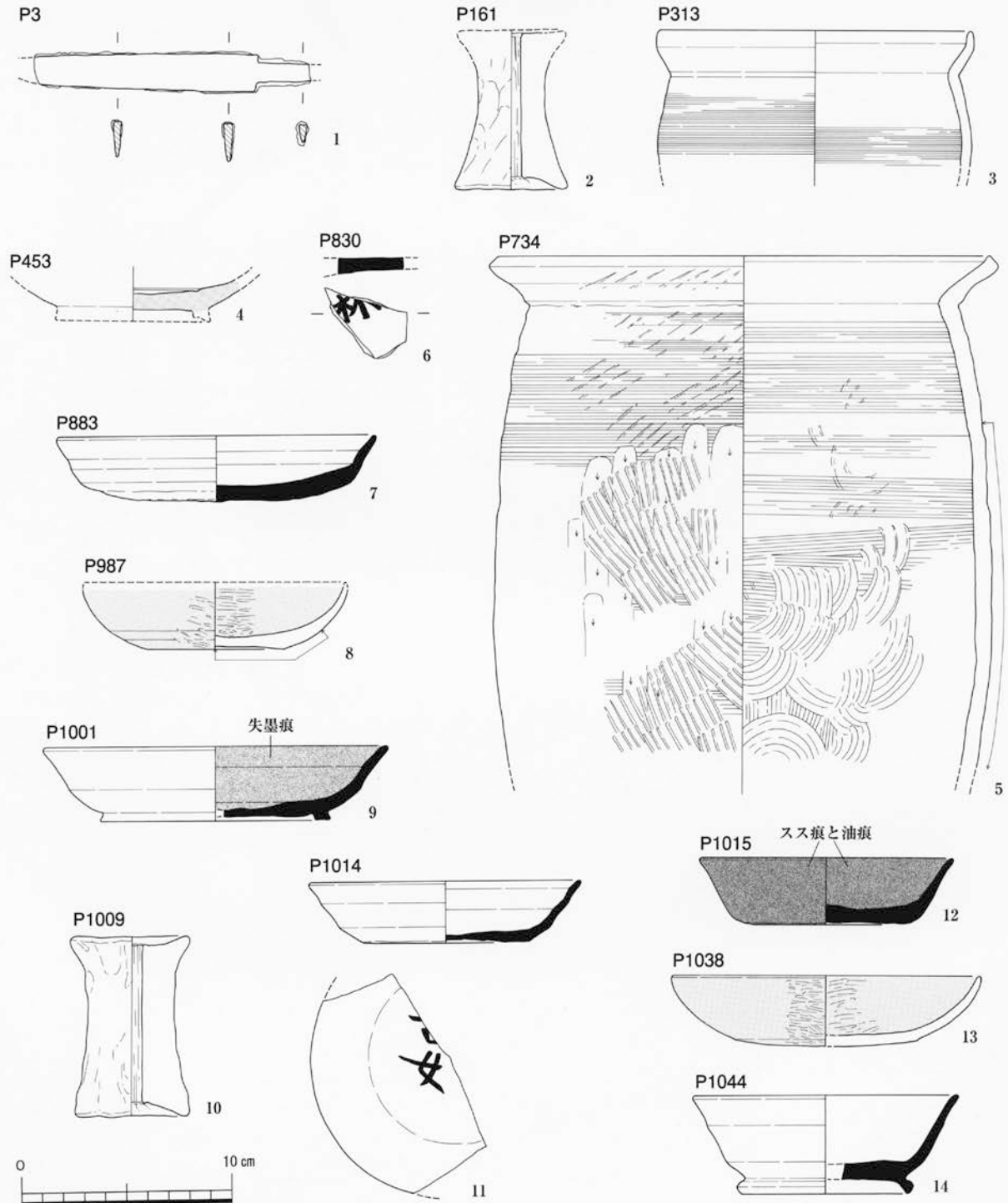


第77図 古代道路状遺構出土遺物6（道路状遺構2-6、全てS=1/3）

第4項 古代のピット出土遺物

古代に位置付けられるピットは数多く存在するが、図化可能な遺存率が高い遺物を出土する事例は少ない。意識的な埋納を思わせる完形品出土や複数の土器がまとまって出土する事例もなく、ここでは墨書土器と朱墨転用硯、緑釉陶器、鉄製品を取り上げる。まず、墨書土器は外底面に「林」と読める6の坏A底部片と外底面に「吉女」と読める11の坏A半完形品がある。6はV期、11はVI 1期に位置付けられる。朱墨転用硯はⅢ期に位置付けられる9の坏B身半完形品で、内面全体に朱が付着し、内底面広く摩滅痕が確認される。劣化も著しく長期使用された可能性が高い。緑釉陶器は4の近江産軟陶の底部片で、底面糸切りナデ調整や釉色から近江中相に位置付ける。鉄製品は刃部が10 cm以上を測る1の大型刀子で、直刃形態を有し、関は両角形態、背は平造りである。

〈H区ピット出土遺物〉



第78図 古代ピット出土遺物 (全てS=1/3)

第5項 古代土器溜まり遺構出土遺物

今回報告を行う区域には、H区め～ゆ-18～26Grにおいて大規模な古代土器溜まりが確認される。今回の報告でH区古代土器溜まり遺構としたものだが、特に、も～ゆ-21Grにおいて集中箇所があり、その周辺のGrにおいても土器集中が確認された。調査段階ではも～ゆ-21Grの集中箇所について、特に土器溜まり5として取り上げたが、その集中区の中にもまとまりを持った集中単位があり、単位ごとに時期に若干の差異があったため、今報告ではH区古代土器溜まりと大きく捉える中で、土器溜まり5とした箇所を5つの集中区（集中1～5）に分けた。集中1～5以外はH区古代土器溜まりとして一括して扱い、調査時に土器溜まり4としたものについても、隣接Grの集中区と特に差異が認められなかったため、H区古代土器溜まりの中に包括して報告する。

1. 集中1出土遺物

須恵器食膳具123点、須恵器貯蔵具104点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具315点、総点数551点と、5つの集中単位の中では出土量が最も少ない。出土土器は古代Ⅰ期の須恵器をはじめとして、古代Ⅳ1期からⅣ2新期まで時期幅をもって土器が出土するが、Ⅳ2古期に位置付けられる須恵器が主体を占め、いずれも南加賀窯産で占められる。当集中区で特筆すべきは、9の円面硯と11の鉄鎌である。円面硯は脚部中程に「十」字スカシをもつ南加賀窯産の圈足円面硯で、脚径は復元で17cmを測る。低平で大型の形態を呈すが、古代Ⅲ期まで上がる可能性は低く、Ⅳ期頃に位置付けられようか。鉄鎌は広身柳葉形鎌で、刃部先端と茎部を欠損するものである。当遺跡では検出例の少ない形態の鉄鎌である。

2. 集中2出土遺物

須恵器食膳具424点、須恵器貯蔵具385点、土師器食膳具42点、土師器煮炊具1,330点を出土する集中単位で、古代Ⅲ期からⅥ期の幅で土器が出土する。ただ、図示した12・16・18・20～22の須恵器食膳具に見るように古代Ⅳ2新期からⅤ1期に中心があり、この時期の土器廃棄遺構と位置付けた。須恵器は南加賀窯産が大半を占め、12・18のような当期の特徴である良質の白色粘土を使用した須恵器が定量確認される。特筆される出土品としては、22の盤Bがある。21の盤Bと器形や法量が酷似しており、同時期のものと位置付けられるが、22は体部カキ目調整、底面ケズリ調整を伴う点で異なる。外底面中央には脚部の痕跡も見られ、脚付器種になる可能性が高い。盤Bに脚の付される器種は、赤彩土師器でⅤ2期頃に金沢末窯跡群で確認例があるが、他に例を知らない。8世紀後葉～9世紀前半の時期に信濃地域で有台坏や無台坏の坏部器形に脚部が付される特徴的な高坏が生産されており、その影響で越後頸城地方の滝寺窯跡群においても生産が確認されている（新潟県教育委員会『滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』2006年）。南加賀窯跡群や能美窯跡群では、8世紀後葉～9世紀前半に東海系器種の生産を受容する傾向が見られており、当器種の存在もそのような東海系器種の受容の中で生まれたものと理解されよう。

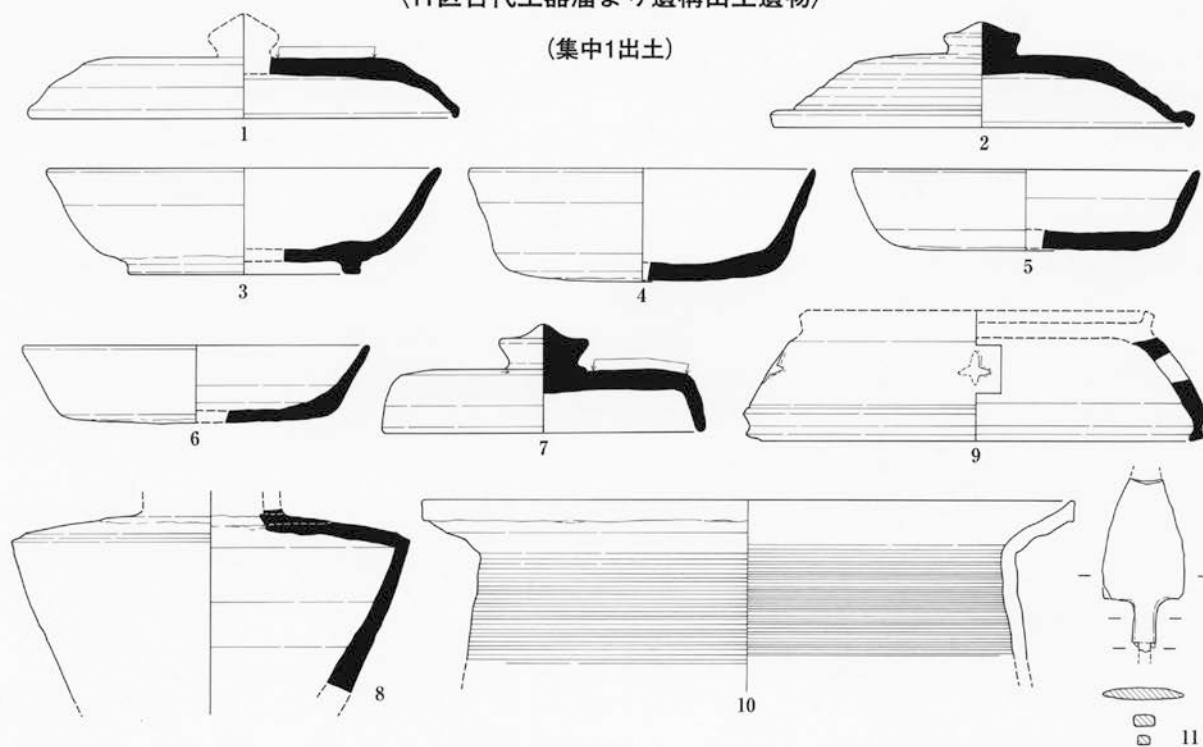
3. 集中3出土遺物

須恵器食膳具587点、須恵器貯蔵具617点、土師器食膳具51点、土師器煮炊具1,663点を出土する集中単位で、H区古代土器溜まりの中では最も土器の集中が顕著な単位である。集中2同様、土器の時期幅はあるが、図示した27～45の須恵器食膳具に見るように古代Ⅲ期からⅣ1期に中心があり、共伴する完形の大型瓶A2個体と獣足付羽釜についても同時期と位置付けた。須恵器は南加賀窯産でほぼ占められ、赤彩土師器も南加賀窯産と思われる。当集中で特筆される出土品は貯蔵具である。出土点数を見ても貯蔵具割合が高く、完形品や半完形品が多い。特に、50・51の瓶Aは器高32cm、胴径23cm程度を測る大型品で、いずれも底部や台部を一部欠損するだけの略完形2個体が横に潰れる形で出土した。口頸部の長さや外反して広がり気味となる器形、胴部の算盤玉形に張り出す形態から古代Ⅲ期頃に位置付けられるもので、当器種の一般的な法量である器高25cm、胴径18cmと比べるとひとまわり大型を呈す特殊品である。南加賀窯産であり、祭祀的な意味合いを持つ特殊容器として特注されたものだろう。

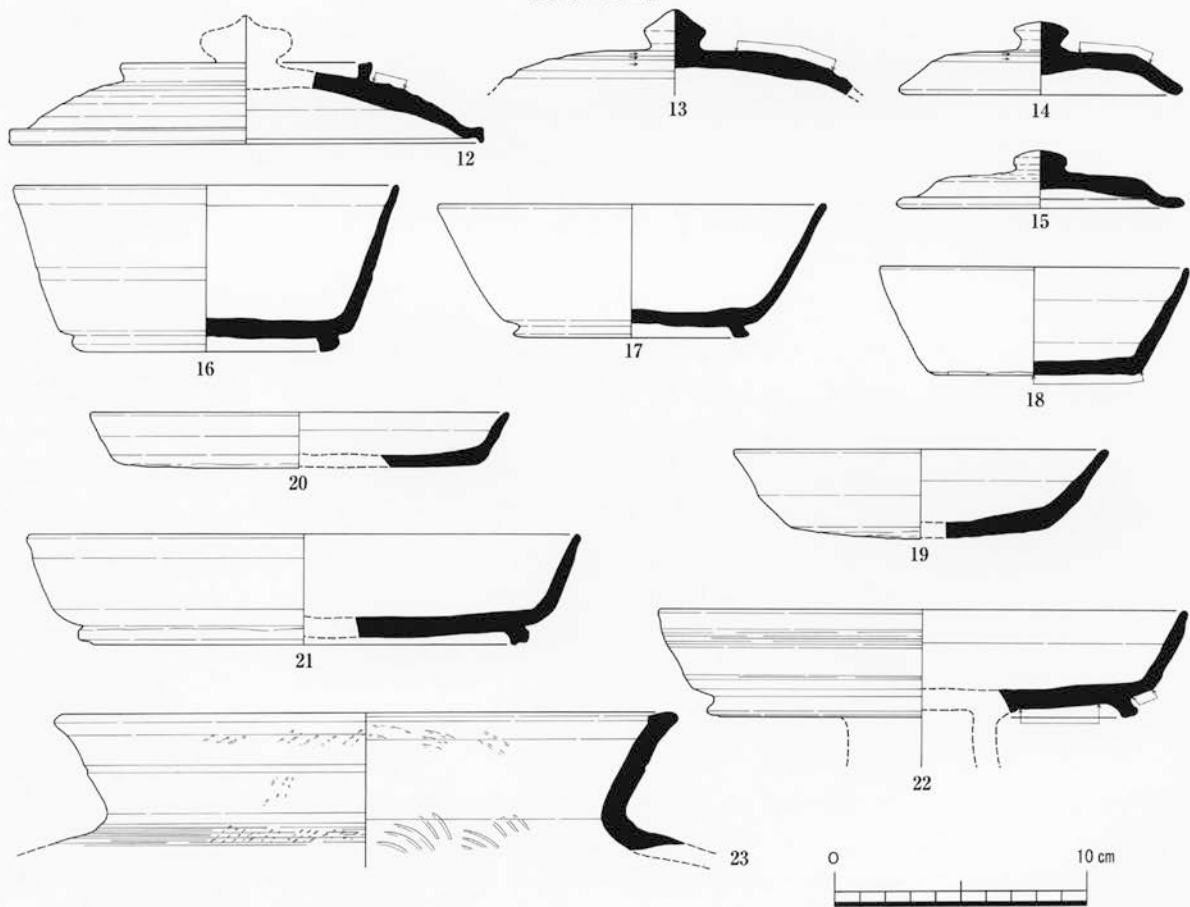
同様に祭祀的容器として使用され、当集中単位に廃棄されたものとして、53の南加賀窯産獣足付羽釜が上げられる。高台を持たない丸底气味の短頸壺を原型として、胴部中位に鋳が付され、それにかかるように長めの獣足が三足付されるもので、獣足意匠は膝状の作り出しと下端接地部の刻みによる簡易な指装飾によって表現している。羽釜は本来銅製品が原型であり、それをモデルに8世紀代に多彩釉陶器や緑釉単彩陶器として生産される、竈とセットをなす煮炊具である。胴上位に張りをもって頸部へと窄まり、口縁部で極めて短く立ち上がる器形が基本であり、竈に掛ける煮炊具のため、足を付すことはない。どちらかと言えば、当遺跡出土の羽釜は、短頸壺

〈H区古代土器溜まり遺構出土遺物〉

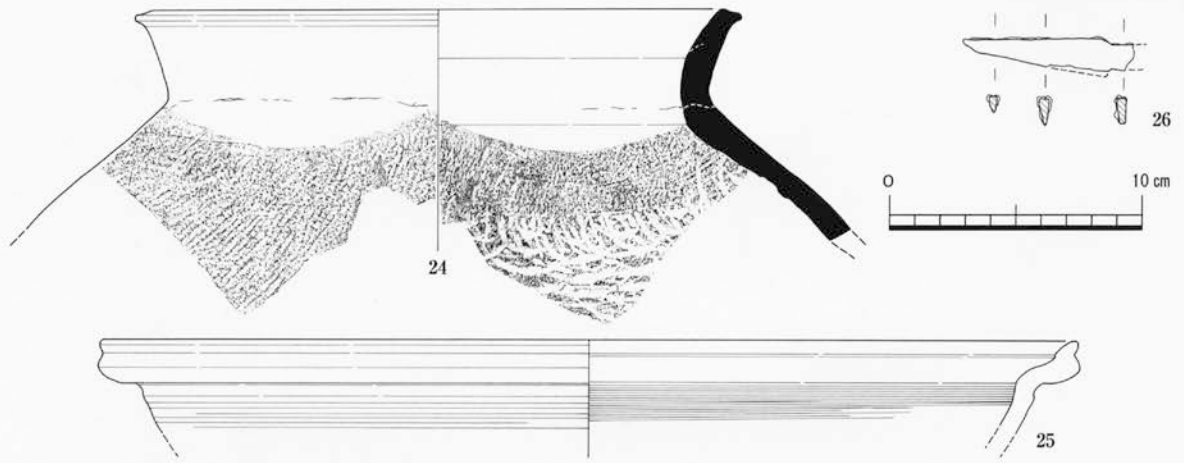
(集中1出土)



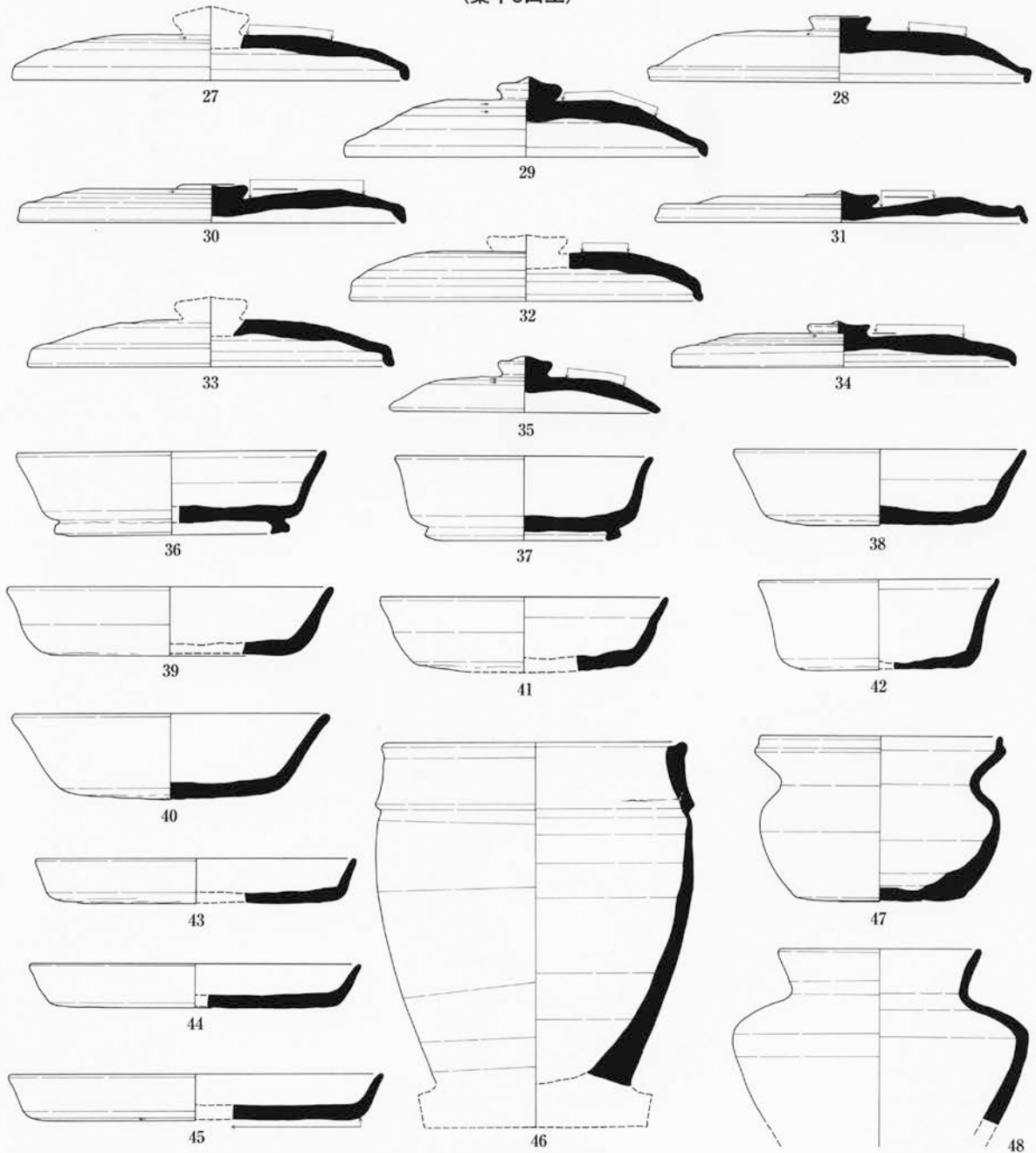
(集中2出土)



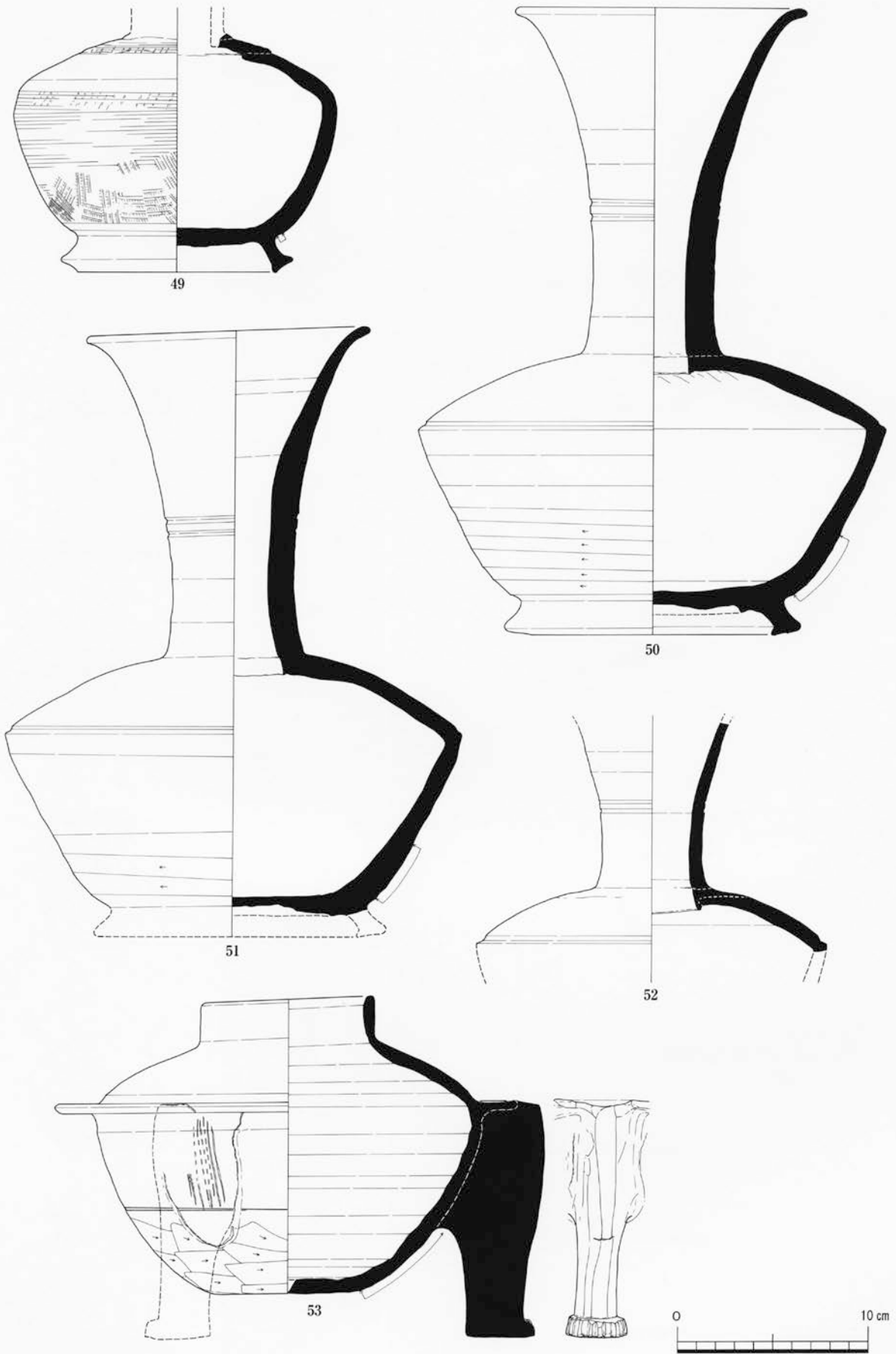
第79図 古代土器溜まり遺構出土遺物1 (集中1・集中2-1、全てS=1/3)



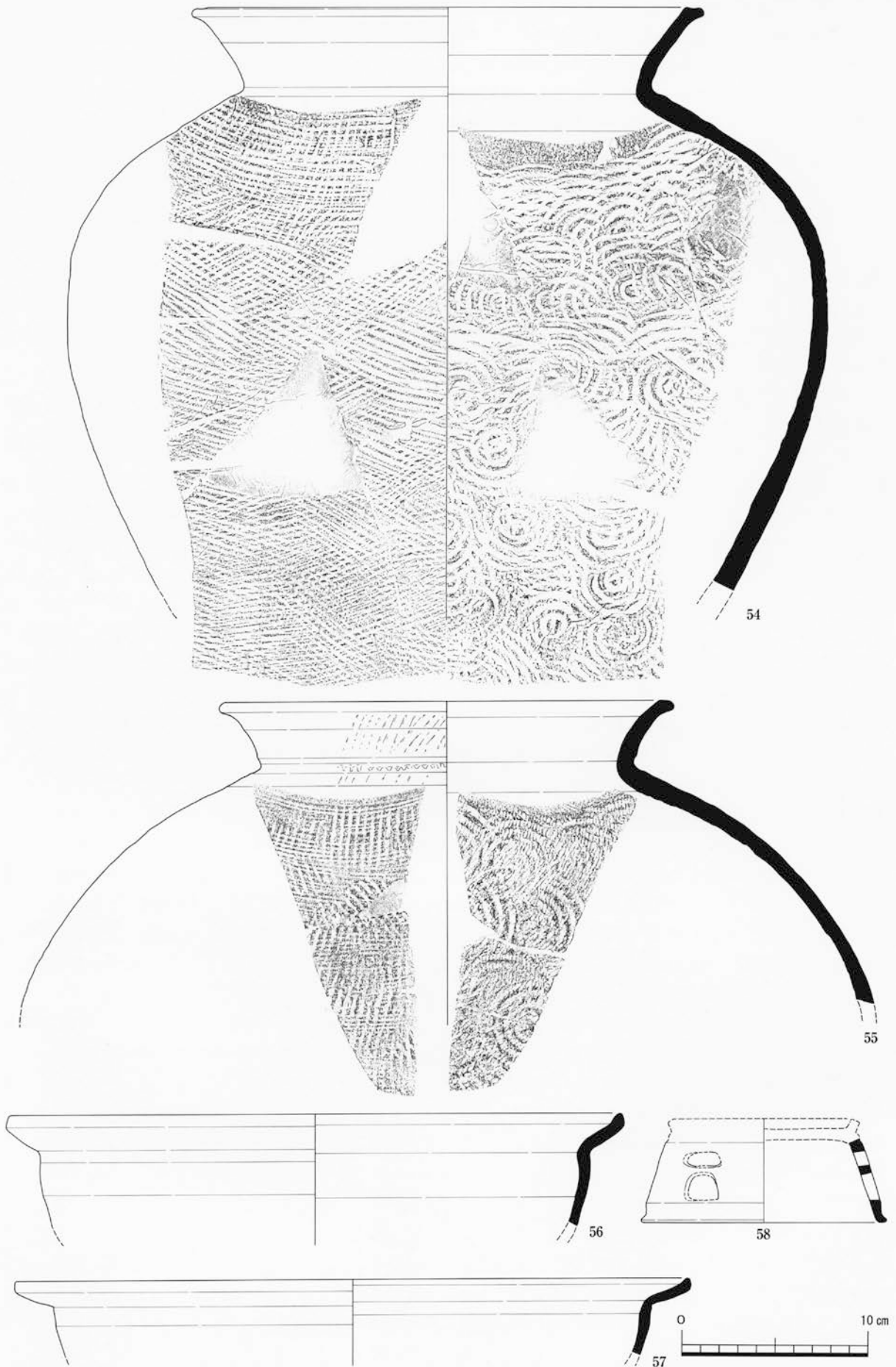
(集中3出土)



第80図 古代土器溜まり遺構出土遺物2 (集中2-2・集中3-1、全てS=1/3)



第81図 古代土器溜まり遺構出土遺物3 (集中3-2、全てS=1/3)



第82図 古代土器溜まり遺構出土遺物4 (集中3-3、全てS=1/3)

に三足の獣足が付される獣足壺に鐔を付したものであり、鐔付き獣足壺とするのが適当かもしれない。ただ、そうしなかったのは、当羽釜の足部が獣足壺の獣足形態とは形状に大きな違いがあったことと、獣足壺に鐔付きのものがなく、三足を付さなければ、施釉陶器羽釜に近似していたことにある。時期が新しくなれば、土師器羽釜に三足を付すものも出現していることを考え、竈に掛ける羽釜から竈を必要しない足付きの羽釜へという発展形態とし、獣足羽釜と位置付けた。なお、同じ南加賀窯産で同一形態を持つ足付羽釜の胴部片が加賀市松山C遺跡で出土しており（石川県埋文『加賀市松山C遺跡』2001年）、これに関しては胴部上位に沈線文が施される。

他の貯蔵具としては鉢類や甕類などの出土が多いが、甕類では特に中甕が多く、図示した54・55も通常法量の中甕である。破片が小さく、集中2、集中3、集中5に散在して分布しており、一括廃棄という出方はしていない。また、56・57は土師器浅鍋を須恵器窯で還元焰焼成したものである。器形や調整等から、古代Ⅳ1期からⅣ2古期に位置付けられるもので、土師器煮炊具同様に砂礫を多く混在させた胎土を使用している。土師器煮炊具の還元焰焼成は意識的に生産されたものではなく、焼成失敗品としての位置付けがなされるものであることから、このような煮炊具の出土は須恵器生産関連遺跡であることの傍証となろう。

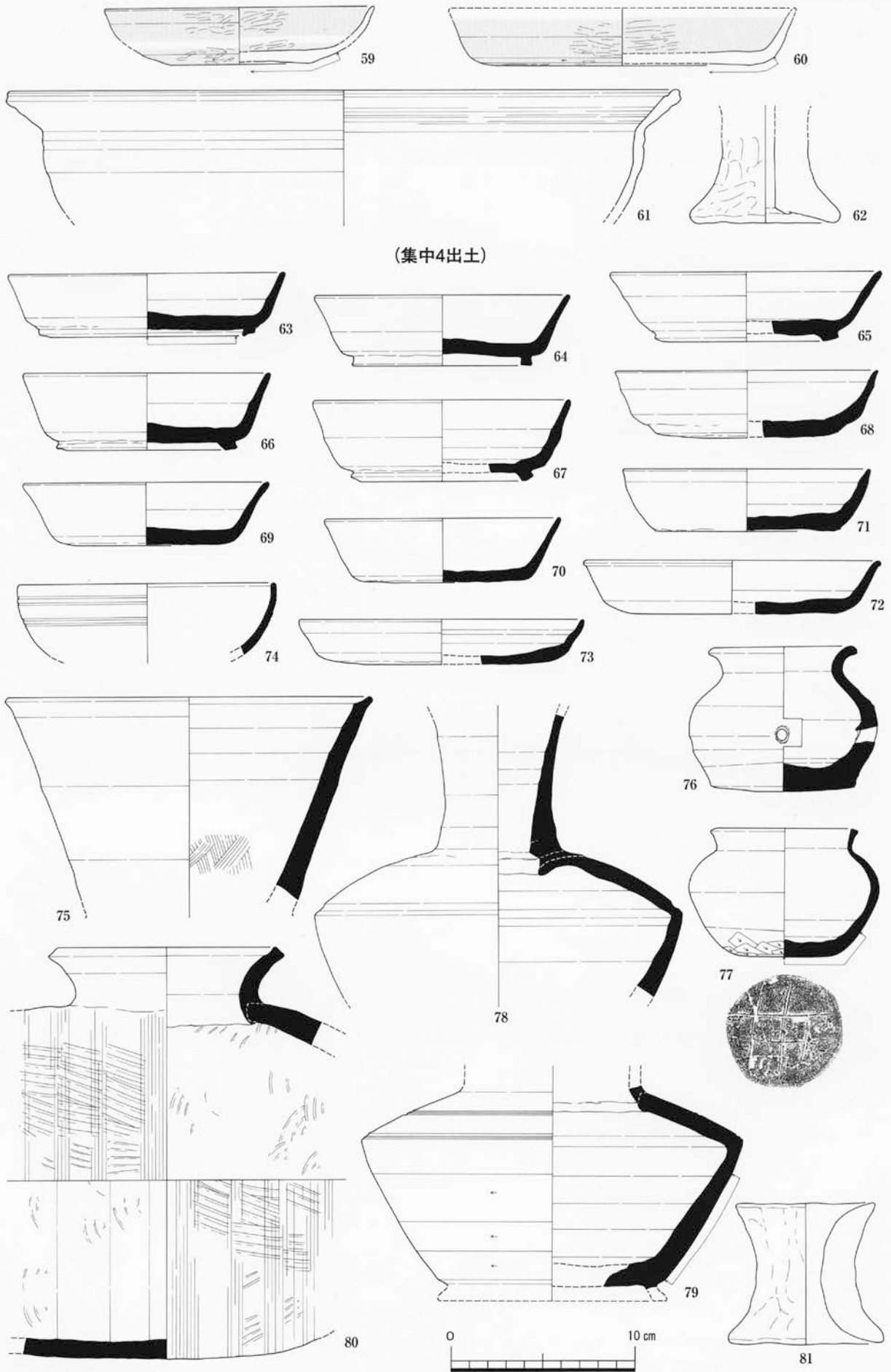
4. 集中4出土遺物

須恵器食膳具208点、須恵器貯蔵具180点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具1,656点を出土する集中単位である。図示したものは須恵器主体だが、土師器煮炊具が破片で多量出土している。出土須恵器は一部古代Ⅳ2新～Ⅴ1期に位置付けられるものも混在するが、63～69・71・72の須恵器食膳具に見るように古代Ⅲ～Ⅳ1期に位置付けられるものが主体で、図示した貯蔵具についても同時期に位置付けられる。集中3と时期的に符合しており、この時期の土器廃棄場として一体的な存在であった可能性がある。須恵器産地は79が金沢末窯産かと思われる瓶Cが確認されるが、他は南加賀窯産で占められている。当集中単位で特筆すべき遺物としては、74の甕と76・77の小型壺Fがある。甕は体部沈線を2条2段に施す体部内湾器形のもので、口縁端部で内側に若干肥厚させる。全体的に薄手で丁寧な作りをしており、金属器を強く意識した製品と位置付けられる。小型壺Fの2個体はいずれも完形品で、76は厚手の作りでやや粗製、77は薄手で作りの良いものである。76は胴部下位に外側からの孔径8mm程度の穿孔があり、77は外底面に「井」のヘラ記号がある。穿孔を有す小型壺は注口器種として開けられたものと祭祀の意味合いで開けられたものがあるが、焼成前であることと穿孔の大きさから、前者が該当しよう。ただ、完形品の小型壺廃棄は祭祀的行為であり、特に77の底面ヘラ記号には呪術的意味合いがあるのかもしれない。

5. 集中5出土遺物

須恵器食膳具422点、須恵器貯蔵具645点、土師器食膳具23点、土師器煮炊具1,151点を出土する集中単位である。須恵器貯蔵具の出土量が多く、その中でも甕類が7割近い破片数を占める。甕類の中には遺存度高いものもあり、中甕をまとめて廃棄した感がある。須恵器は古代Ⅲ～Ⅳ1期に位置付けられる食膳具を含むが、主体は古代Ⅳ2新时期からⅤ1期にかけてのもので、82～85・87・88・91・96～104・106～109が当期に該当する。産地は一部能美窯産が含まれるが、主体は南加賀窯産で、この時期に見られる良質の白色胎土による須恵器はあまり目立たない。

貯蔵具では112の鉢Fや114と115の壺Aの半完形品は当該期のものであり、略完形の小型鉢（111）も同時期に位置付けられる。半完形の2個体の壺Aは114が底部糸切りによる平底で胴部に張りを持つ葉壺形、115が内底面からの突き出しによる丸底成形の長胴気味の器形と、異なるタイプをしている。潰れて出土したというよりも、破片が散在する廃棄の仕方をしており、この時期は短頸壺の完形が出土すること事態が特殊であり、2個体を廃棄する行為は祭祀的と位置付けられよう。次に甕類だが、図示したものは古代Ⅲ期からⅣ2古期頃に位置付けられるもので、食膳具や壺瓶類よりも1～2段階古く位置付けられるものが主である。これは大型貯蔵具の使用年数の長さ、伝世的な使用に起因したものであり、集落における大型貯蔵具の在り方としては普遍的に確認できる現象である。甕で特に注目されるものはないが、他の集中単位同様に、破片での出土が主で、広く散在して分布する様相が見られる。なお、時期は古代Ⅲ期頃と古いのが、113の瓶Aは注目される須恵器である。瓶Aは通常、胴部円盤閉塞をした後に算盤玉形に変形させて、胴上端を円形切り取り後、別作り口頸部を接合させる器種だが、当製品においては、円形切り取り後に頸部に粘土紐を積んで胴部上で口頸部を水挽き成形した感がある。金沢末窯産のものと思われ、特徴的である。

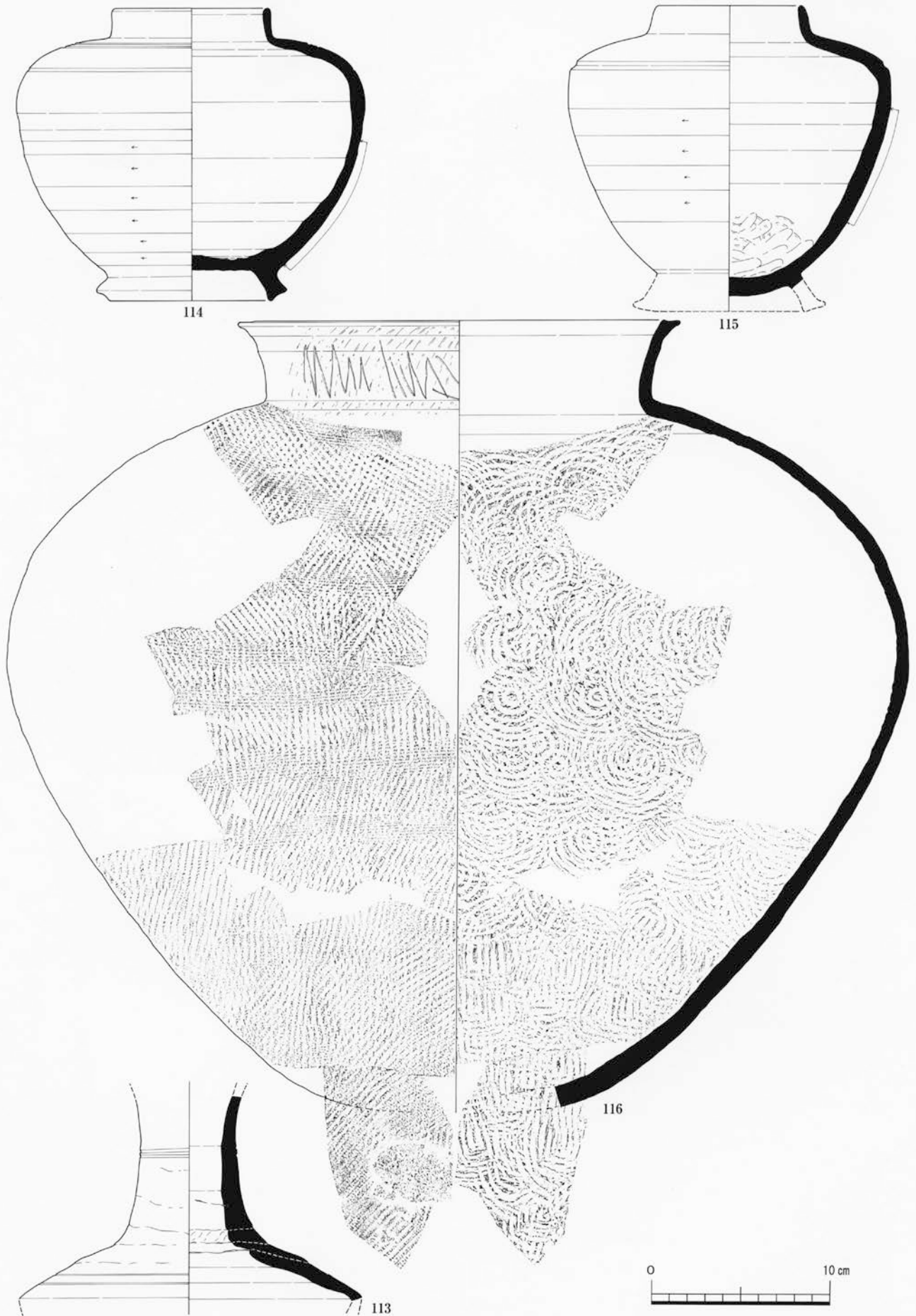


第83図 古代土器溜まり遺構出土遺物5 (集中3-4・集中4、全てS=1/3)

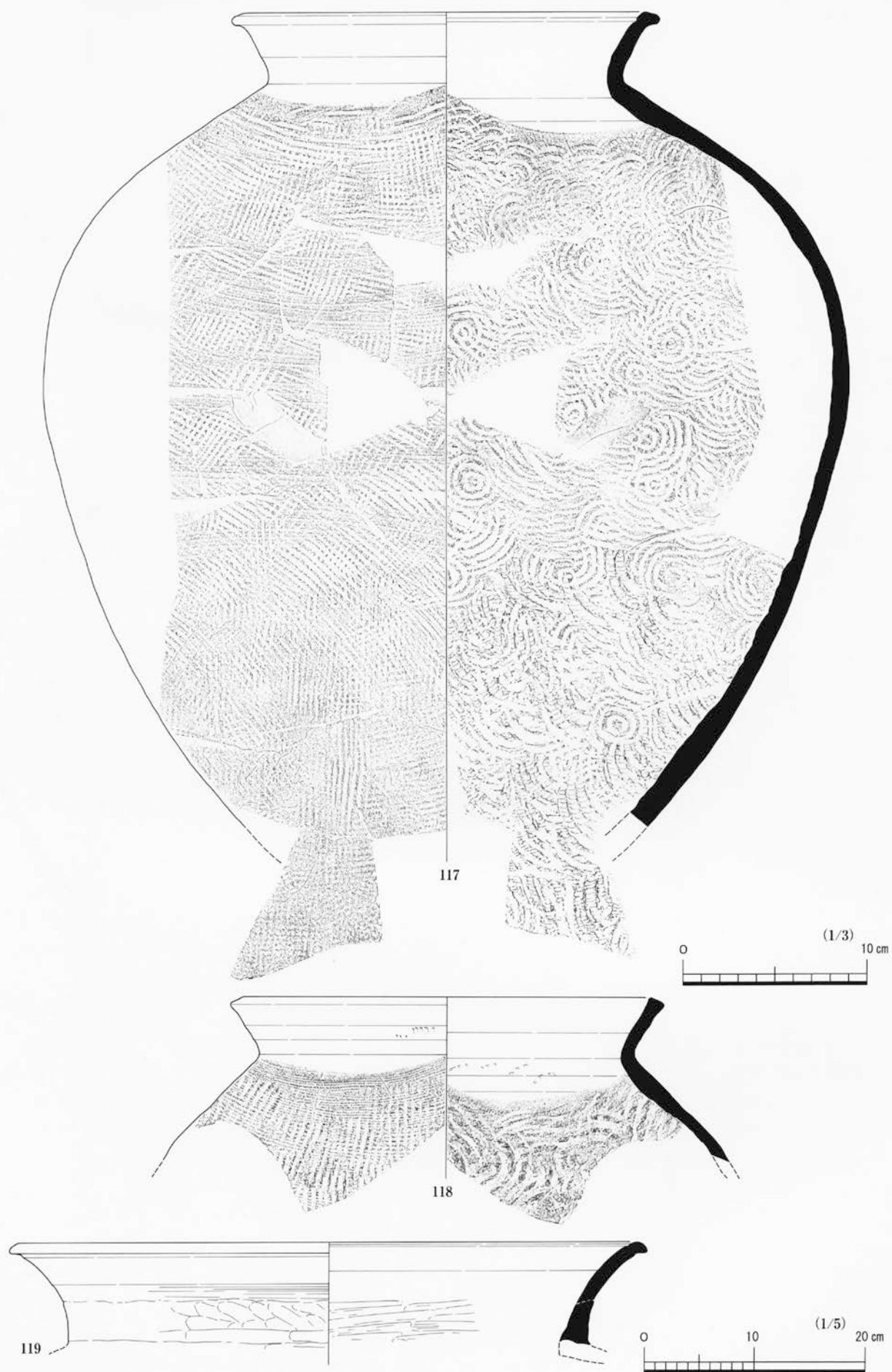
(集中5出土)



第84図 古代土器溜まり遺構出土遺物6 (集中5-1、全てS=1/3)



第 85 図 古代土器溜まり遺構出土遺物 7 (集中 5-2、全て S=1/3)



第86図 古代土器溜まり遺構出土遺物8 (集中5-3、117・118はS=1/3、119はS=1/5)

6. 集中単位以外の出土遺物

H区古代土器溜まり遺構として提示するものは、土器溜まり4と各Gr土器溜まり遺構並びに包含層として土器上げしたものであり、その中から上記集中単位を除外したものについて以下に述べる。須恵器食膳具 9,580点、須恵器貯蔵具 8,767点、土師器食膳具 1,000点、土師器煮炊具 13,132点、須恵製品 9点、土師製品 151点、石製品 245点で構成され、ここにおいても須恵器貯蔵具の割合が高い。須恵器食膳具は、古代Ⅱ3期からⅥ2期までと幅があり、時期的にまとまるとは言い難いが、集中単位出土土器の時期である古代Ⅳ1期からⅤ1期までの土器が多く確認される傾向はある。この時期のものは灯明痕をもつ坏Aが破片で22点確認されており、漆の付着するものも4点確認される。転用硯は坏B蓋で4点だが、盤Aの内底面に磨耗痕の顕著なものが10点ほどあり、これに関しても転用硯の可能性はある。前回報告のG地区古代土器溜まり遺構に見られた仏教系遺物の様相に近く、その縁辺的な位置付けだろう。このようなG地区土器溜まりからの流れで分布する土器溜まりに対し、も〜ゆ〜21Gr周辺の集中単位を中心としてその周辺に分布する土器溜まりがある。それ以外にも土器出土はあるため、H地区古代土器溜まり遺構を明確に2分できないが、大きくはそのような2つの土器廃棄場が存在していたものと理解されよう。以上を視野に入れつつ、以下では、特筆される出土遺物の項目ごとに解説する。

《6〜7世紀前半の須恵器》 120と121の坏H身、そして123の蓋が6世紀、古墳4様式に、122の坏H身と183の鉢、184の鉢F、190の甕、191の台脚が7世紀前半、古代Ⅰ期に位置付けられる。

古墳4様式の須恵器はいずれも南加賀窯産で、120は口径や口縁部端の内傾面の形成特徴から4様式Ⅰ新时期に、121は立ち上がりの長さや口径の大きさから4様式Ⅱ2期にそれぞれ位置付けられる（望月精司「南加賀窯跡群における在地窯の出現都地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』2009年）。今回報告地区で出土した人物埴輪は4様式Ⅱ1〜2期に併行するものであり、同時期の須恵器と言えよう。なお、123は鈕を欠くため、確証はないが、6世紀後半の長頸瓶に付される瓶蓋と理解した。ただ、特徴的な天井部のロクロヒダ形成は仏器的でもある。

古代Ⅰ期の須恵器は、122の能美窯産坏Hが当器種の最小径段階にある点から古代Ⅰ2期に位置付けられる。当該段階の典型的な形態であり、図化していないが、同時期の坏G蓋も能美窯産、190の甕も同時期の能美窯産と位置付けられ、能美窯産が定量を占める段階と言える。他の器種としては、体部内傾する無頸壺的な金属器系鉢（183）と、体部に施した沈線区画内に櫛歯の連続刺突文を施す鉢F（184）があるが、いずれも南加賀窯南群産であり、この点も当期の産地構成を示す特徴と言えよう。なお、191は小型の台脚片であるが、基部にスカシ状の切込みがあるもので、小型長頸瓶か甕の台脚になるものと理解する。台脚端部の形態は若干異なるが、類似した台脚の付く甕が南加賀窯跡群で生産されており、小型丸底瓶的な器種に付されるのが穏当だろう。

《須恵器小型鉢類》 小型鉢は平底で低い器高を呈し、口縁部で外屈した後口縁部端を上へ摘み上げる形態のものが基本器形と言えるが、形態には器高の高いタイプのもの（集中3：47、集中5：110）や口縁部摘み上げをしないタイプのもの（集中5：111）があるなど様々である。ただ当土器溜まりで報告するタイプは前述の基本器形のものばかりで、7個体（176〜182）とまとまった数が出土する。胎土は全て通常の須恵器胎土であり、油煙痕をもつような灯明具使用のものはない。当器種の用途の主な部分に灯明具があるが、灯明具使用は通常、粗い砂礫を混在させるような土師器煮炊具の胎土を持つ傾向が強く、その点から見ても異なる用途、仏教系行為に伴うものではなく、祭祀具的要素の強いものだったのだろう。供物を捧げる小分けの容器的存在だろうか。

《特徴的な須恵器貯蔵具》 195の四耳壺と199の大甕、201の中甕のみを取り上げる。四耳壺は胴部上位の破片だが、上下に貫通する方形把手形態と肩の張る胴部器形から、短頸壺器形を呈す四耳肩と判断した。南加賀窯産で、肩部外面に雨垂れ状の連続刺突文を施す。このような短頸壺器形の四耳壺は古代Ⅳ〜Ⅴ期に能美窯や南加賀窯で生産が確認されているが、胴部に連続刺突文を有するものはなく、文様構成も特徴的である。

大甕（119）は口頸部外面に櫛描波状文を2段に施す古代Ⅱ3期頃に一般的に見られる形態のものだが、口頸部成形痕跡が遺存する数少ない事例であったため、成形方法と手順について以下に解説を加える。①胴部成形完了後上位端部を切り取り整形する→②別作りで口頸部を下から順に粘土紐積み叩き成形して口縁部端まで積み上げ成形する（外面平行線文叩き、内面同心円文当て）→③ロクロ回転を利用し、内外面をナデ調整し、口縁部端挽き出し成形する→④横走沈線文2条と櫛描波状文2段を施す→⑤口頸部を成形台からはずして、胴部上端に繋ぎ粘土を挟む形で接合する→⑥繋ぎ粘土部分をユビナデにより内外面調整して仕上げる。

中甕（201）は底部平底気味に仕上げる古代Ⅵ2〜Ⅵ3期に特徴的に見られる長胴気味器形のもので、遺存状

態が良く、成形技法が観察できる数少ない事例であったため、以下に復元できる成形の手順を提示する。①成形台の上に底部円盤を固定し、順に胴部粘土紐積み成形（胴部張りの少ない器形や横軸叩き痕跡が見えない点から、粘土紐積み成形時に1次成形叩きを伴わない可能性が高い）を行いながら、胴部上端まで積み上げる→②頸部をロクロ回転を利用しながら絞り、口縁部へと開く器形に積み上げ成形する→③胴部上位から口頸部にかけてロクロ回転を利用したナデ調整を施すとともに、口縁部端を挽きだし成形する→④胴部の器面を整えるため、下から上への縦軸整面叩き（外面Ha叩き、内面芯持ち材の無紋当て具：中央にキズあり）を施す→⑤成形台から底部をはずし、製品を横に抱えた姿勢で、胴部下位から底部縁辺までにかけての上から下への縦軸整面叩き（外面He叩き、内面He当て）を施して仕上げる（底部中央内外面には叩きが及ばず、平底部を残して仕上げる）。

《**円面硯**》 H地区古代土器溜まり遺構からは、先に述べた集中単位出土のものも含め、7個体の圈足円面硯が出土している。いずれも南加賀窯産で、遺存度低く、全形を復元できるものはないが、脚部スカシ形態は、長方形スカシを有すタイプや楕円形スカシを有すタイプ、十字スカシを有すタイプ、円孔スカシを多く配すタイプなど、様々な脚部スカシ形態のものが出土しており、集中単位出土のものも含め、ここでまとめて述べたい。

長方形スカシ 圈足円面硯で最も多いタイプだが、当土器溜まりでは203のみ確認できた。硯面に陸と海の区画を行う内堤をもつ形態を呈し、堤が有台坏の高台形態に似る。その作りから古代Ⅳ期に位置付けられよう。

楕円形スカシ 当遺跡では比較的確認されるタイプで、当土器溜まりでも204と集中3-58が確認される。204は縦長楕円形を4方に、58は上下2段に開けた横長楕円形スカシを3方に穿つもので、前者は脚の厚さから8世紀前半に、後者は8世紀後半以降に位置付けられるだろう。

十字スカシ 集中1で硯面部を欠損する9が、集中単位以外で脚部下位を欠損する202が出土する。いずれも4方にスカシをもつが、脚の厚さや径が異なるため同一個体とは考えがたい。前者は脚下位で稜を形成し、壺瓶の台脚状形態を持つもの、後者は坏B高台のような小さな周堤を有すもので、硯面に顕著な磨耗痕と墨痕をもつ。

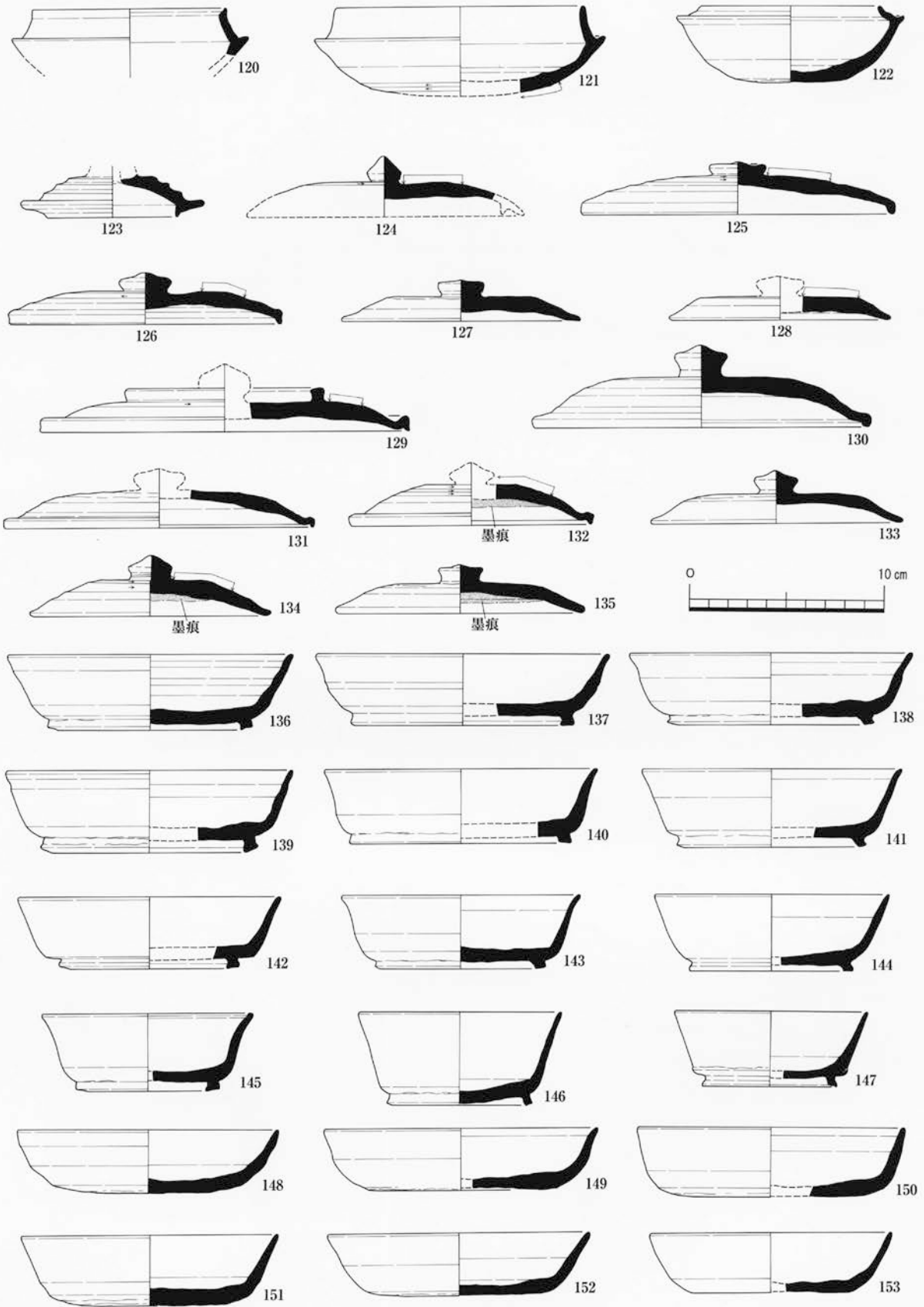
円孔スカシ 205の円孔スカシをもつタイプは、脚径が10cm未満の小型のもので、間隔狭く、円孔を1列に配すタイプである。なお、図化していないが、円孔を上下2段に交互配するものも確認されている。

《**馬形須恵製品**》 208は胴幅が6.3cmを測る大型の馬形須恵製品で、胴部前方と足部、尾部の先端を欠損する。表面は指ナデ調整するもので、鞍等の表現もなく、裸馬として作られている。大型のためか、胴部中央に空洞を有し、その気抜き穴が後ろ足後方に開けられている南加賀窯産のものである。

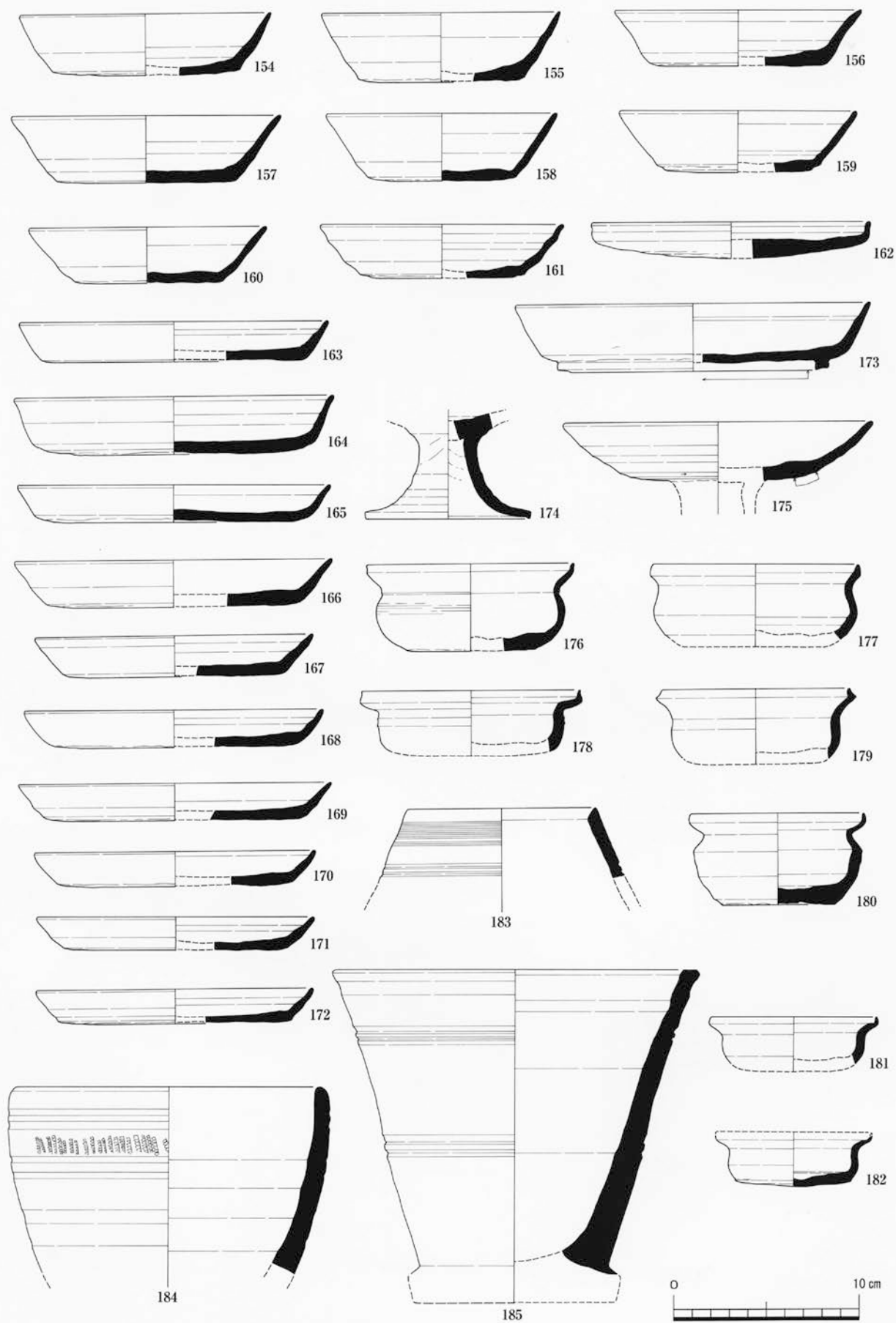
《**支脚形土師製品**》 支脚形土師製品は、中心に孔をもつ円筒形で上下端を若干広げるC類が出土するが、226・227はその中でも小型で、脚の太さが2.5cm程度と細い形態を呈す。完形に近い2個体であり、胎土から南加賀窯産と思われる。それ以外は一般的な形態、大きさをもつもので、特にゆ〜ら-21・22Grにまとまる傾向がある。SK435において同形態の支脚形が3個体廃棄されており、SK435の位置から考えても一連の廃棄品の可能性があるが、当土器溜まり出土の219・221～225は強い焼成による剥離痕や黒斑の顕著なものが多く、焼成時の焼き損じに伴う廃棄品である可能性が高い。

《**鉄製品**》 図示したものの全てが古代に位置付けられるものか不確定要素があるが、鉄鎌、刀子、馬具、鎌、釣針、釘、棒状製品等を古代の遺物として図示した。鉄鎌は柳葉形鉄鎌と雁又式鉄鎌とが出土する。柳葉形はこれまでの報告地区においてはほとんど確認できなかったものだが、H区古代土器溜りでは238と239の他、集中1でも大型の11が出土している。その中でも238は刃部が4.8cm、鎌身8.6cmを測る大型尖根式のもので、長い茎部にかけても遺存する良好な資料である。関部が突関形態を呈し、茎部の付け根付近から強く折れ曲がっている。239は刃部先端を欠く小型の柳葉形で、関部は突関形態を呈す。次に、雁又式鉄鎌だが、当遺跡で最も出土事例の多い形態で、ここでは240と241を図化した。両資料とも関部が突関形態となるものだが、241は茎部が長く、240は茎部が短く刺突形態をとる。なお、254の棒状製品としたものは、断面方形のもので、中央付近が幅広くなるものであり、柳葉形鉄鎌の未製品の可能性がある。他の地区でも鉄鎌未成品は出土しており、当遺跡内で武器類を生産していたことの証となろう。刀子は複数出土するが、遺存度よいものは242の略完形品のみで、他は断片的な資料である。242は刃幅1cm程度の小型の刀子だが、刃部長は推定で9cm程度を測り、関部は直角片関を呈する。馬具は轡類にあたる部分（247）が出土している。両端が円環状となる棒状製品で、片側の円環に角度が付いていることから、引き手部と理解される。長さは14.7cmを測り、完形品で出土している。なお、248は曲鎌、249は釣針、その他、釘と棒状製品、不明鉄製品が出土する。

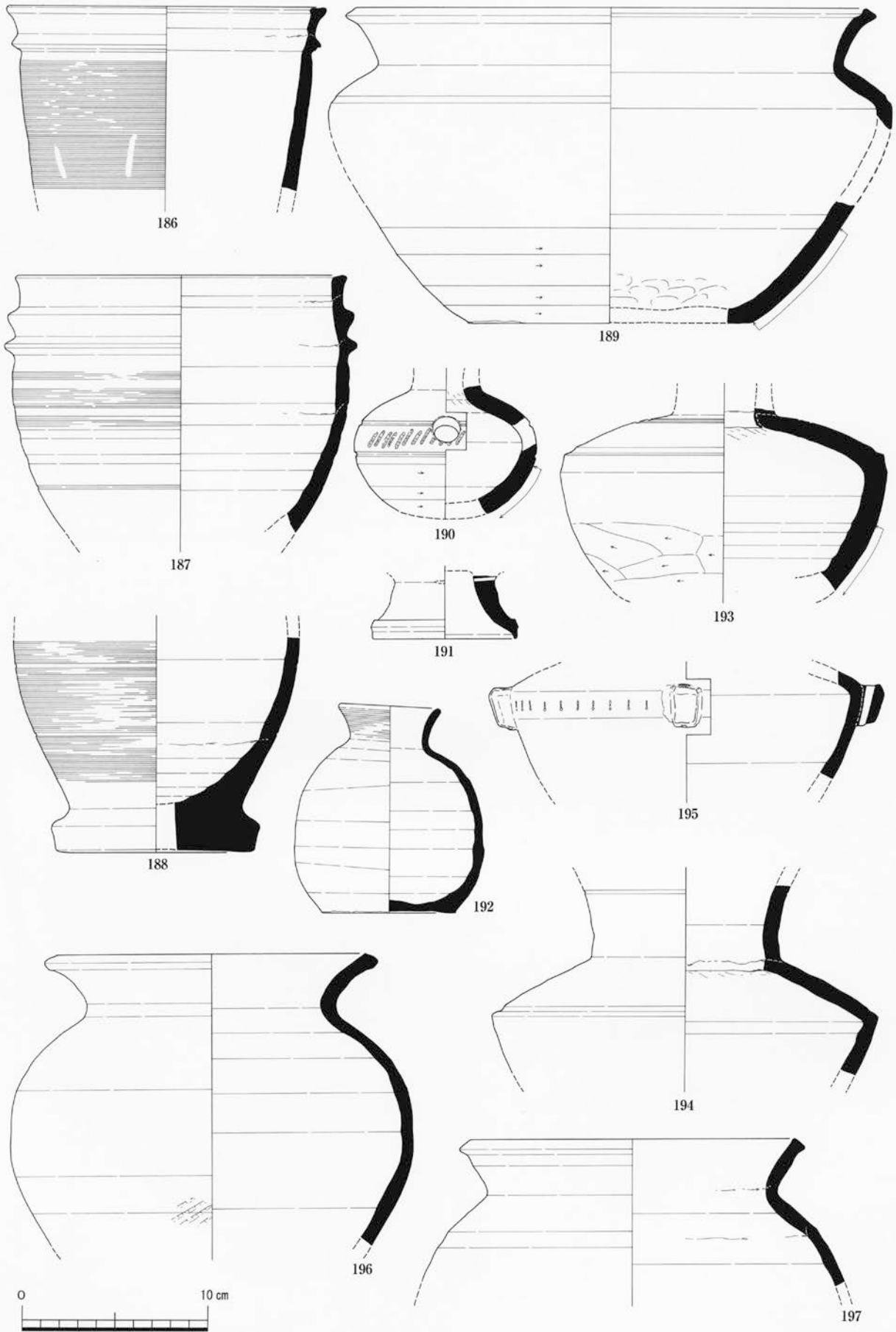
(集中単位以外)



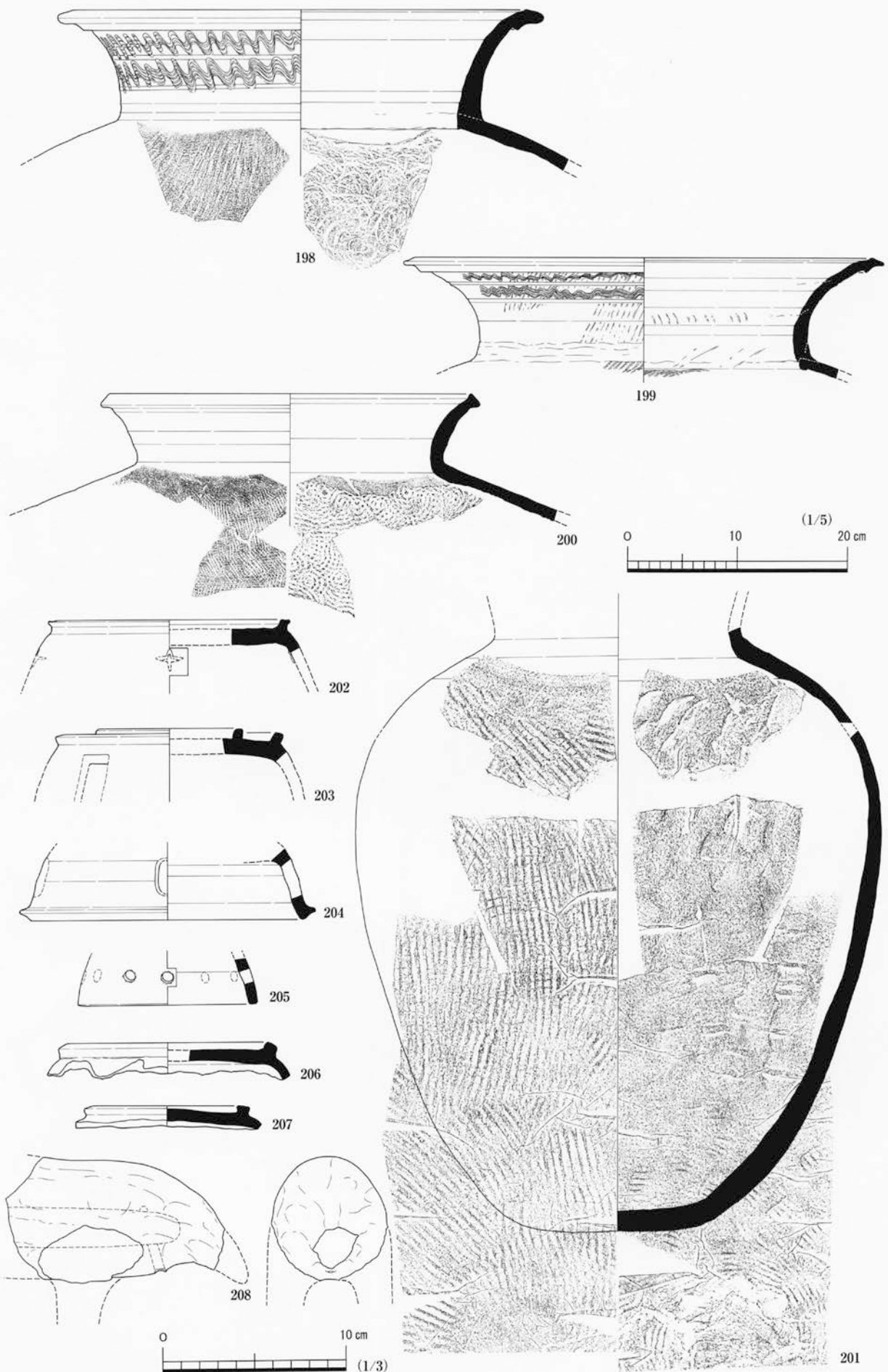
第87図 古代土器溜まり遺構出土遺物9 (集中単位以外-1、全てS=1/3)



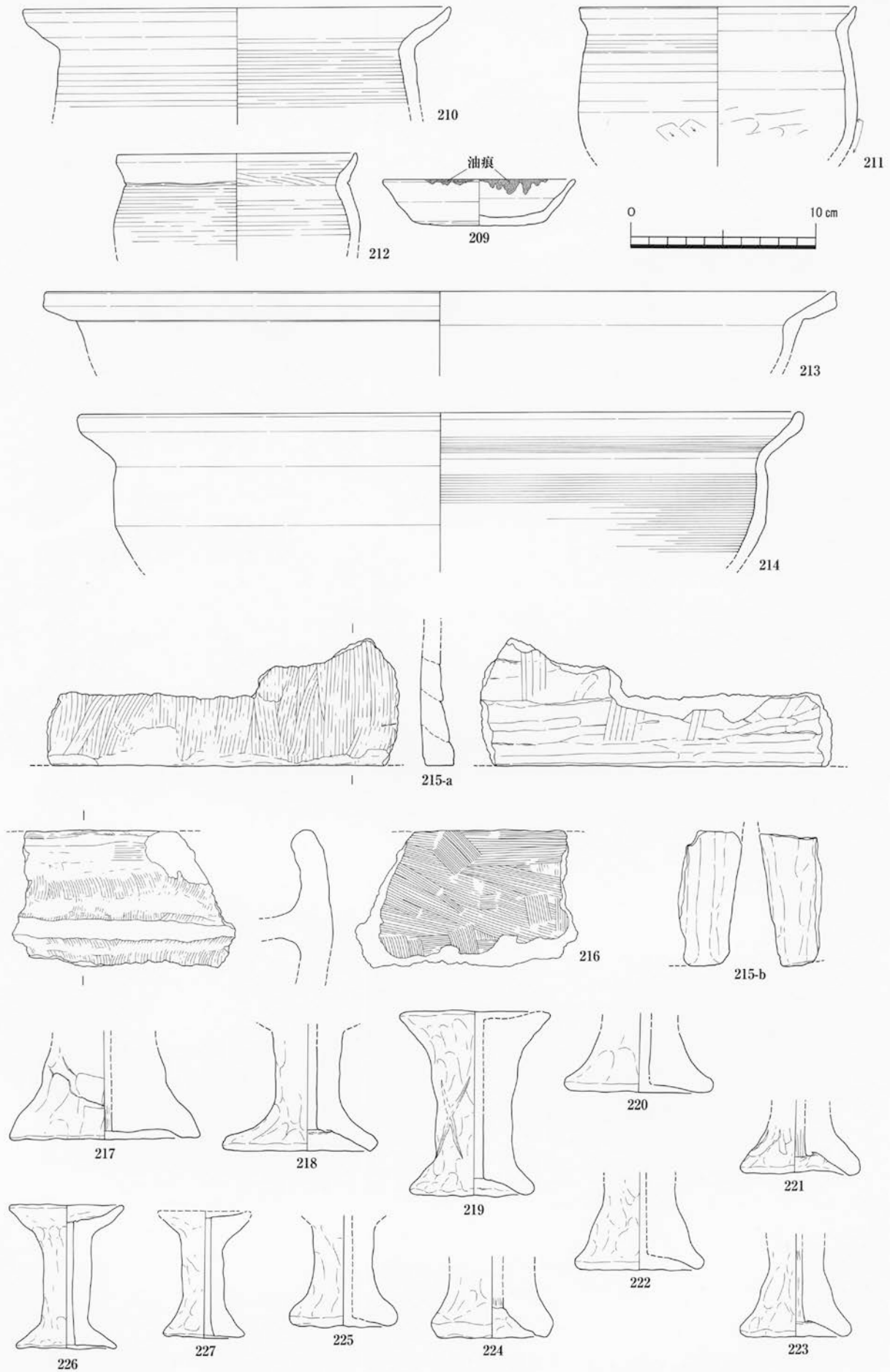
第88図 古代土器溜まり遺構出土遺物10（集中単位以外-2、全てS=1/3）



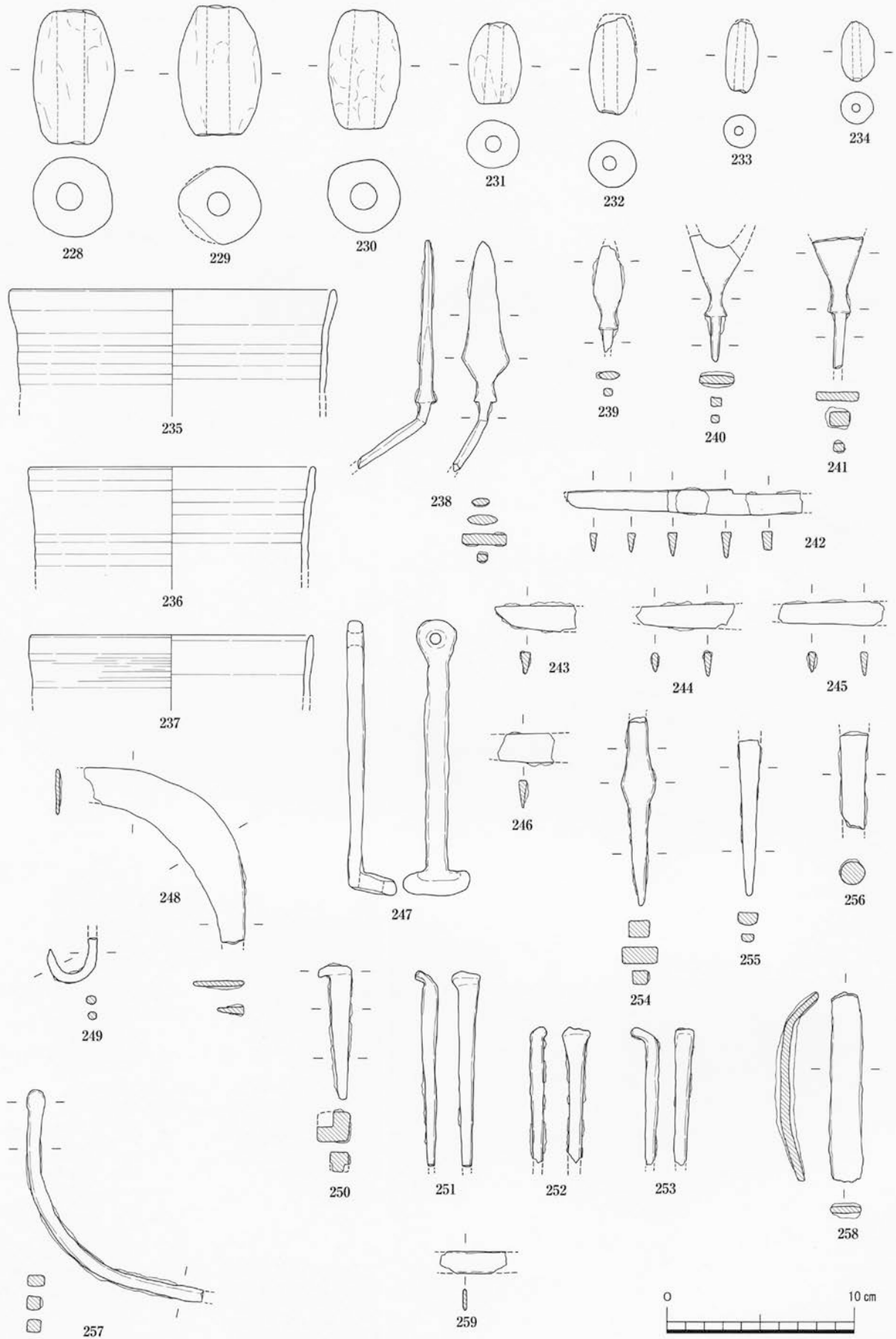
第 89 図 古代土器溜まり遺構出土遺物 11 (集中単位以外-3、全てS=1/3)



第90図 古代土器溜まり遺構出土遺物12(集中単位以外-4、198~200は $S = 1/5$ 、201~208は $S = 1/3$)



第91図 古代土器溜まり遺構出土遺物13 (集中単位以外-5、全てS=1/3)



第92図 古代土器溜まり遺構出土遺物14 (集中単位以外-6、全てS=1/3)

第3節 中世の遺構出土遺物解説

ここで述べる遺物は、中世遺構出土遺物としているが、田嶋編年の古代Ⅶ期から中世1期までのもので、望月の暦年代観では10世紀後半から12世紀末までにあたり、厳密には古代末期頃にあたるものである。

今回の調査区においては、掘立柱建物、土坑、井戸、土器溜まりなど、当期に位置付けられる遺構が多く、掘立柱建物から960点（土師器食膳具954／灰釉陶器1／白磁5）、土坑から2,306点（土師器食膳具2,296／土師器煮炊具5／土師器土製品1／灰釉陶器3／白磁1）、井戸から331点（土師器食膳具324／灰釉陶器3／白磁4）、土器溜まり及び包含層から15,309点（土師器食膳具14,894／土師器煮炊具33／灰釉陶器104／白磁267／焼締陶器10／須恵系陶器1）、その他、溝や炉状遺構、ピットから1,473点（土師器食膳具1,455／灰釉陶器10／白磁6／焼締陶器2）が出土する（古代遺構に混在する土器が多かったため、含めて示した）。以下に個別遺構出土の遺物説明を行うが、分類名称や編年区分は、筆者が『額見町遺跡Ⅲ』の中で示した総括論稿「南加賀地域の平安後期土器群に関する編年的考察」に基づくものとするので、参照いただきたい。

第1項 中世掘立柱建物出土遺物

中世掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は、以下に示す一覧表のとおり、100点を越える遺物出土量をもつ大型掘立柱建物が確認されている。以下に出土量の多い掘立柱建物のみを記述する。

1. SB306 出土遺物

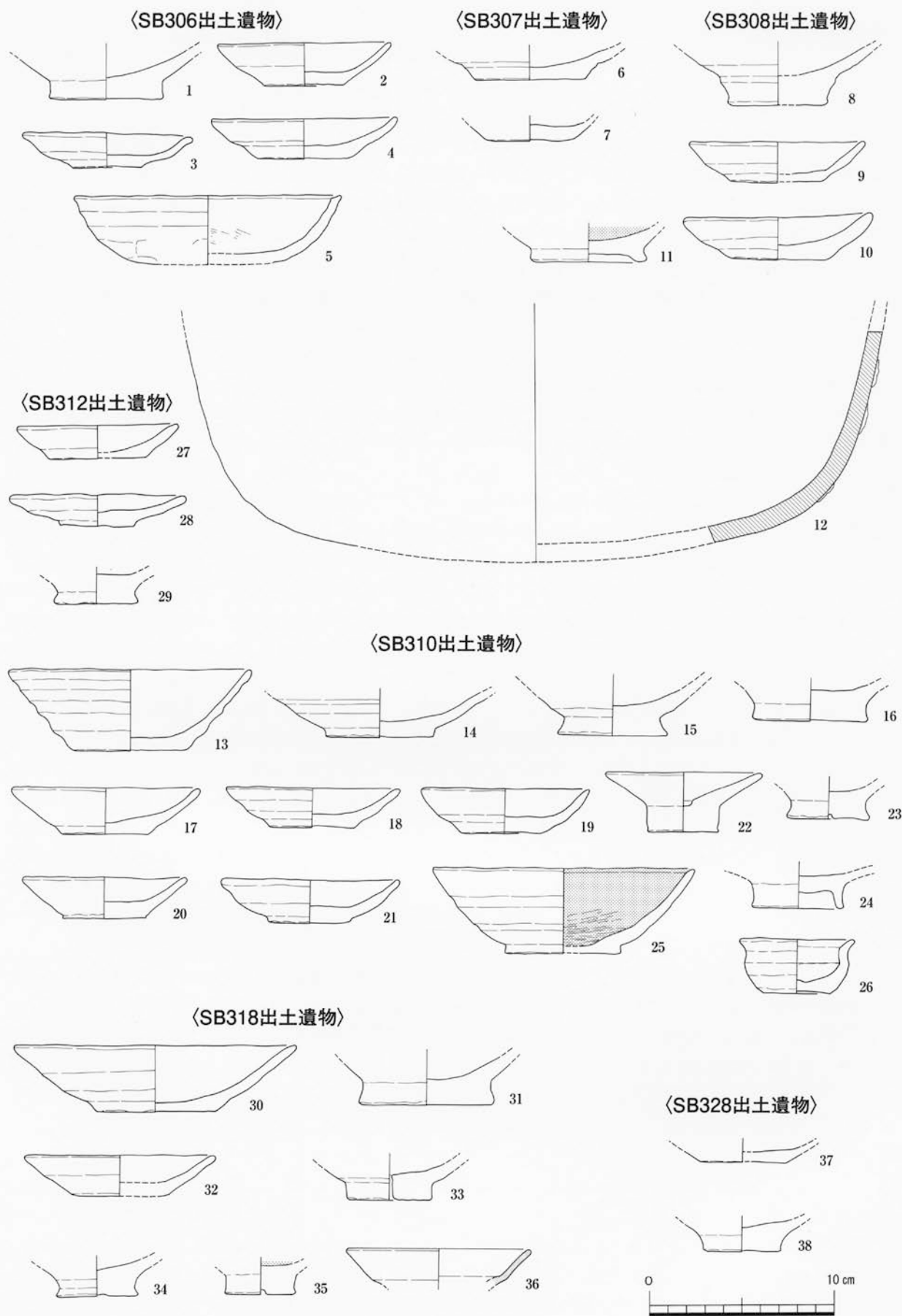
各柱穴から出土遺物があり、総点数123点を数える。図化できた土師器食膳具には通常のロクロ成形の土師器以外に、非ロクロ成形の大皿1点がある。近隣のピット出土のものにも非ロクロ成形の大皿片があり（P393、第99図33）、別個体だが、同じ胎土と色調をしている。この非ロクロ成形皿については、体部下位から底面にかけて成形時の指ナデ痕が残り、内面はハケ目工具によるナデが施されるもので、口縁部内側に面を形成し、外面に2段ナデを施すものである。口径14.4cmを測る大皿で、胎土はA類胎土に近く、在地産と思われる。加賀地域における非ロクロ成形土師器食膳具の出現は、これまで藤田編年のⅡ-I1期に位置付けられる白江梯川遺跡410号井戸が初出とされているが、当資料が他のロクロ成形土師器と同時期のものと位置付けられれば、それを遡る資料となりえる。ロクロ成形土師器は図示したとおり、柱状椀の存在や平底小皿の器形などから、南加賀編年8B期、藤田編年ではI-II1期に位置付けられるもので、非ロクロ成形土師器皿の出現期とは間に1型式ないしは2型式を挟む。ただ、京都系土師器における口縁部2段ナデを施す大皿の定着は11世紀中頃にはありそうで、その点から能登の矢駄アカメ遺跡出土非ロクロ成形土師器皿も11世紀末～12世紀初頭の年代観を与えている。口径や器形の類似性、口縁部2段ナデの特徴など類似しており、当資料も初源期の非ロクロ成形土師器皿と位置付け、図示したロクロ成形土師器と共伴するものとした。なお、詳細は確認していないが、ほぼ同時期の加賀市田尻シンペイダン遺跡大溝資料において、同様の非ロクロ土師器皿が出土しているとされており、南加賀地域においても、在地の中で京都系土師器皿の生産を単発的にだが、受容していたことを物語る。

2. SB308 出土遺物

柱穴から204点もの土師器が出土するが、図示できたものは少なく、柱状椀と平底小皿、内黒輪高台椀のみである。いずれも南加賀8B期頃に位置付けられるものと判断されるが、これらに伴ってP13からは鉄鍋片が出土している。口径40cm程度を測ると推察されるもので、胴部下位付近の大型片が捨てられていた。大型鉄製品が遺跡に遺存することは稀であり、意識的な埋納の可能性もある。

遺構名	遺物の概要	遺構名	遺物の概要
SB243	古代遺物11点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。	SB313	古代遺物5点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。
SB306	遺物123点。中世I-II期の土師器と白磁。	SB317	古代遺物2点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。
SB307	遺物16点。中世1期の土師器。	SB318	遺物79点。中世I-II1期の土師器と白磁。
SB308	遺物204点。中世I-I1期の土師器。	SB319	遺物1点。中世1期の土師器。古代遺物10点混在。
SB309	古代遺物10点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。	SB320	遺物7点。中世1期の土師器。古代遺物29点混在。
SB310	遺物247点。中世I-II1期の土師器と白磁。	SB327	古代遺物23点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。
SB312	遺物14点。中世I-II1期の土師器。	SB328	遺物7点。中世I-II1期の土師器。古代遺物11点混在。

今回報告地区の中世掘立柱建物出土遺物一覧表



第 93 図 中世掘立柱建物出土遺物 (SB306 ~ SB328、全て S = 1 / 3)

3. SB310 出土遺物

各柱穴から土師器食膳具が出土しており、半完形の土師器皿など246点にのぼる。図示したものは平底小皿や柱状小皿の器形から、ほぼ8B期に位置付けられるもので、中では24の輪高台小皿は特徴的である。D類胎土のもので、H区土器溜まり集中Bでまとまって出土している。

第2項 中世土坑出土遺物

今回報告の区域では、多くの土師器食膳具を出土する埋納土坑が確認されている。比較的遺構数は多く、土師器食膳具を大量廃棄するSK419をはじめとして、SK396、SK397、SK399、SK420、SK421でもまとまった土器の廃棄がある。以下に各土坑出土遺物の解説を行う。なお、各器種の器形類型について、アルファベット表記しているが、これは『額見町遺跡Ⅱ』報告のB区上層土器溜まりでの分類を基本とし、『額見町遺跡Ⅲ』報告の筆者編年試案にて使用した小皿分類、『額見町遺跡Ⅳ』報告のSK472での器形分類に基づくものである。

1. SK396 出土遺物

浅い土坑であるが、土師器食膳具が290点出土している。図示したとおり、平底碗、平底小皿、内黒輪高台碗が多く、柱状高台器種は少ない。破片での数値割合では、通常土師器77%、内黒土師器23%で構成され、図示したもので内黒が多い。内黒は大半が輪高台碗で、ほとんどのものが比較的丁寧な内面ミガキ調整を伴う。24～26のような深碗器形を呈すものが主体だが、底径は小さく厚手で、碗形を呈すもやや外傾気味といった感じである。ただ、これに混じって体部外傾器形のものが存在しており、内面ミガキ調整を伴わない新型の27が確認される。通常土師器でも平底碗1が体部外傾器形のa類系統を呈し、柱状高台器種も少ないが定量確認されることが時期決定の要素となろう。昨年度報告のSK472に極めて近い様相を持つもので、時期的には南加賀8B期に包括されるものの、多分に8A期の様相を引き摺る資料群と言えるだろう。胎土はA類とD類が拮抗して存在し、平底小皿は8～11がA胎土のa類系統、14～16がD胎土のc類系統、17～19がD胎土のd類系統に分類される。つまり、碗形系統の小皿①類型に該当するものばかりで、他類型のものは確認されない。

2. SK397 出土遺物

SK396に隣接する土坑で、出土遺物は土師器食膳具が73点と少ないが、半完形品など遺存度高いものが多い。図示したものではA類系胎土が8割以上を占め、特に橙褐色に発色するB類胎土が目立つ。破片点数での内黒土師器の率は48%の高率で、当資料が内黒再興期に位置付けられることがわかる。平底碗の体部外傾器形や内黒輪高台碗の内面ミガキ調整の省略、白磁系②類型のb1類が主体的に存在することなどから考えて、南加賀8B期の典型的な資料群と言えるだろう。なお、平底小皿で1点確認される北加賀系のC類胎土は、底部大きく体部が短く立つ器形の③類型である。SK472以降、定量確認される類型だが、SK472でもC類胎土にのみ確認されており、当器形が北加賀から持ち込まれたことを示唆する。以上の土師器食膳具に共伴して、1点灰陶陶器碗の底部破片が出土している。東濃窯産と思われるもので、高台の特徴や底面ナデ消しを伴うなどの点から、明和27号窯式に位置付けられる可能性がある。

3. SK399 出土遺物

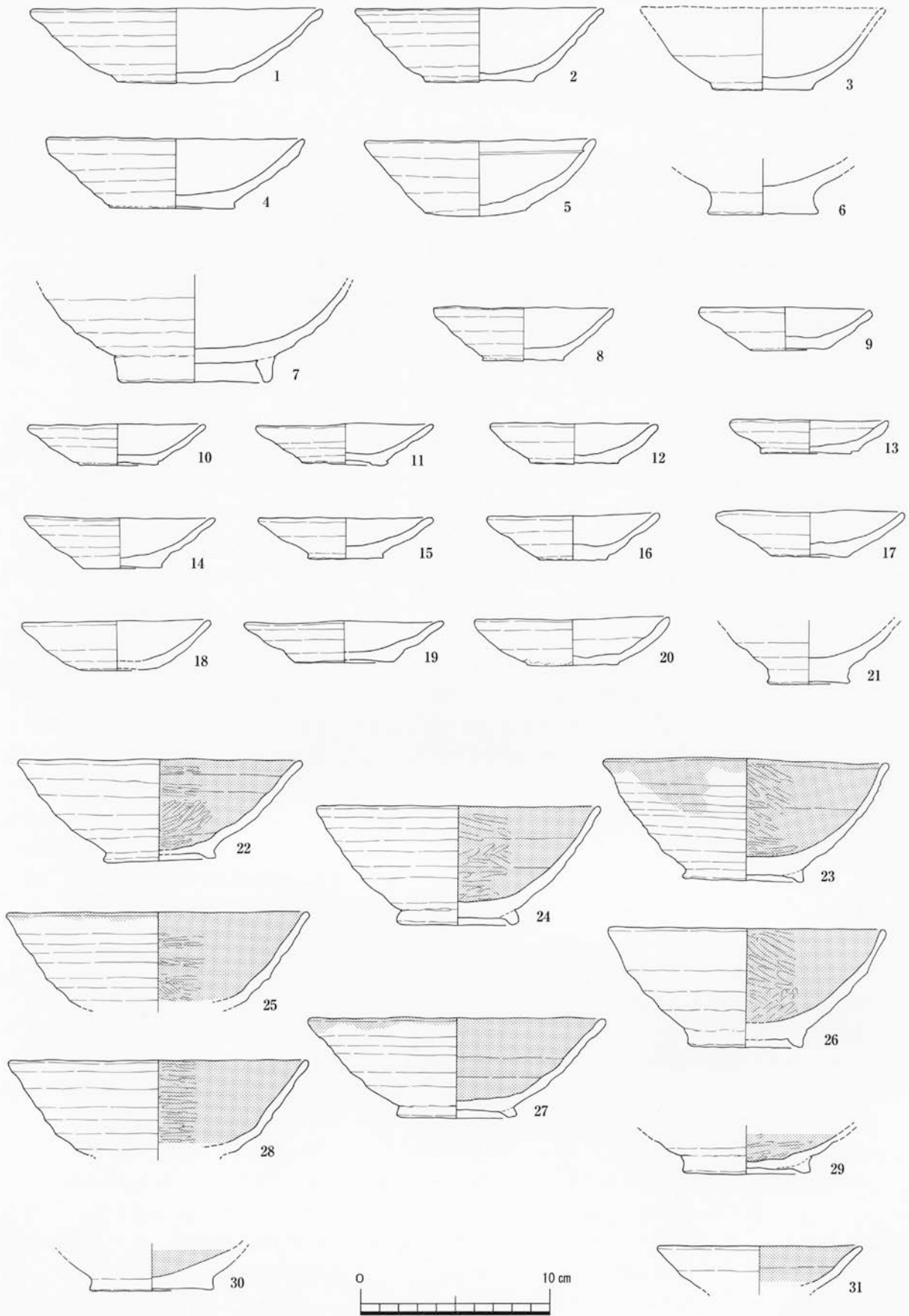
小型で浅い土坑だが、土師器食膳具が140点出土する。土師器における内黒率は18%あるが、図示できたものは64の輪高台碗の底部破片だけで、内面ミガキ調整が施されないものである。土師器胎土はA類系統が主体で、器形は平底碗で体部外傾のa類系やd類系が主体を占める。B区上層土器溜まり資料に近い様相を持つもので、平底小皿も当資料で主体的であったa類系とc類系が主体を占める。SK396と同様、南加賀8B期の典型的な土師器資料と言える。

4. SK419 出土遺物

大型の総柱建物SB308、SB310の柱穴と重複して存在する大型の土器廃棄土坑で、『額見町遺跡Ⅲ』において平安時代後期の土器編年案提示をした際に、南加賀8A期の標識資料として既に土器様相の概要を提示したものである(望月精司「南加賀地域の平安後期土器群の編年的考察」『額見町遺跡Ⅲ』2008年)。ただ、今回の整理に伴い再検討した結果、一部内容変更した部分もあるため、その辺を修正提示する。

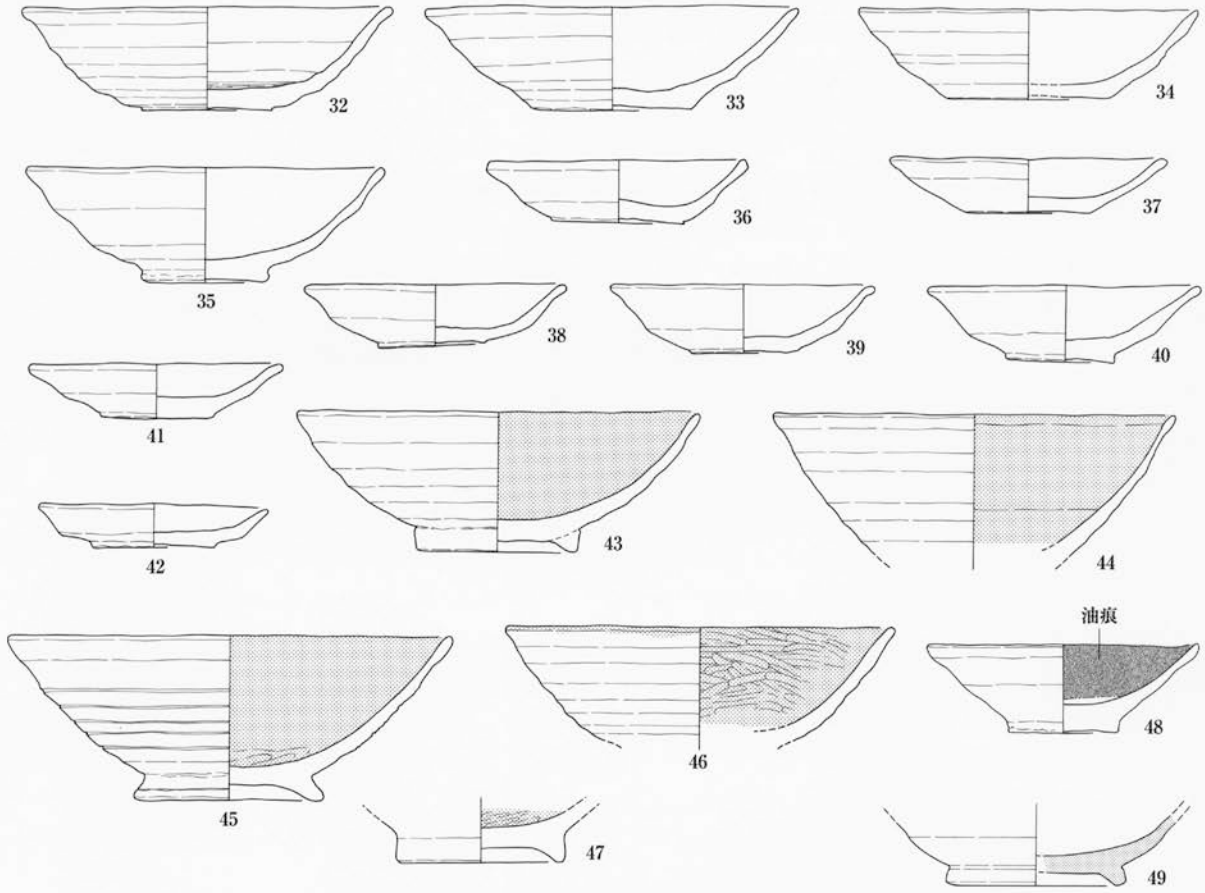
当土坑からは、土師器食膳具が1,372点出土しており、鍋等の煮炊具も2点出土する。土師器における内黒率は破片数で17%あり(『額見町遺跡Ⅳ』報告で提示した際に12%と報告したが、今回報告精査の結果17%となっ

〈SK396出土遺物〉

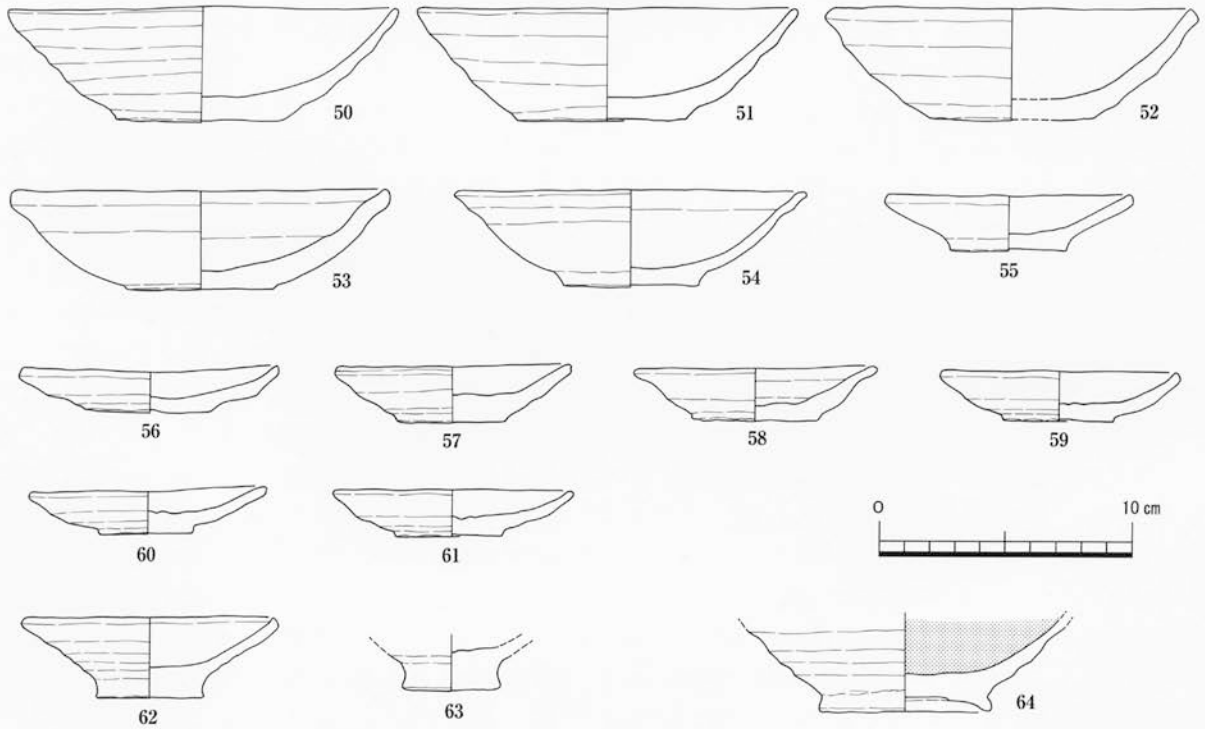


第94図 中世土坑出土遺物1 (SK396、全てS = 1 / 3)

〈SK397出土遺物〉



〈SK399出土遺物〉



第95図 中世土坑出土遺物2 (SK397、SK399、全てS = 1 / 3)

た)、この数値はSK472の18%に近い数値である。また、当資料では白磁を含まないことも特徴の一つにあげられ、灰釉陶器の共伴は半完形品の東濃窯産の輪高台碗が確認できる。高台の器形や底面ナデ消し調整、体部外傾器形の特徴、無釉を思わせるような口縁部のみの漬け掛けなど、明和27号窯式に位置付けられ、時期的にも当資料群と符合する。暦年代観を示す一つの根拠資料となろう。

次に土師器食膳具の組成についてだが、底部個体識別数値では、通常土師器で平底碗23%、輪高台碗2%、平底小皿62%、柱状小皿1%、内黒土師器で輪高台碗8%、柱状碗1%、柱状小皿3%であり、通常平底小皿が過半数の高い割合を持つ。以降、通常平底碗の増加と柱状高台碗皿の増加とともに減少傾向を辿るが、当期はその過渡の様相を示す段階で、柱状高台器種は依然少ない段階である。8期成立の指標の一つとして柱状高台器種の出現をあてているが、当期はその初期段階と言えるわけである。以下に、各器種の説明を行う。

通常平底碗はA類胎土主体で構成される。通常法量、小型法量ともに深碗型と浅碗型があり、どの形態が主体的に存在するかというのではなく、各形態とも定量存在の様相をもつが、通常法量深碗型(65~67)は当期に顕在化する器形法量のものと言える。A類胎土で、口径14cm前後、厚手の底部と体部下位の張り、外反気味の口縁部が特徴であるが、類似形態がD類胎土でも見える(78)。SK472報告でe類とした器形に該当しよう。これに対し、ひとまわり大型の口径15cm前後を測るのが、通常法量浅碗型(69~71・80)である。A類胎土で、底部は厚く、体部外傾気味をなす。B区上層土器溜まりでa類とした口径16cm程度の大きく開く器形のタイプではないが、そのような器形へ変化する碗形態であろう。小型法量は、口径12.5~13cm程度のもので、器形から何種かに分けられるが、やや体部下位に膨らみを持つe類系統(72~75)と底部から体部へそのまま外傾するa類系統(76・77)とがある。いずれもA類胎土で、D類胎土は浅碗形のものが確認される。

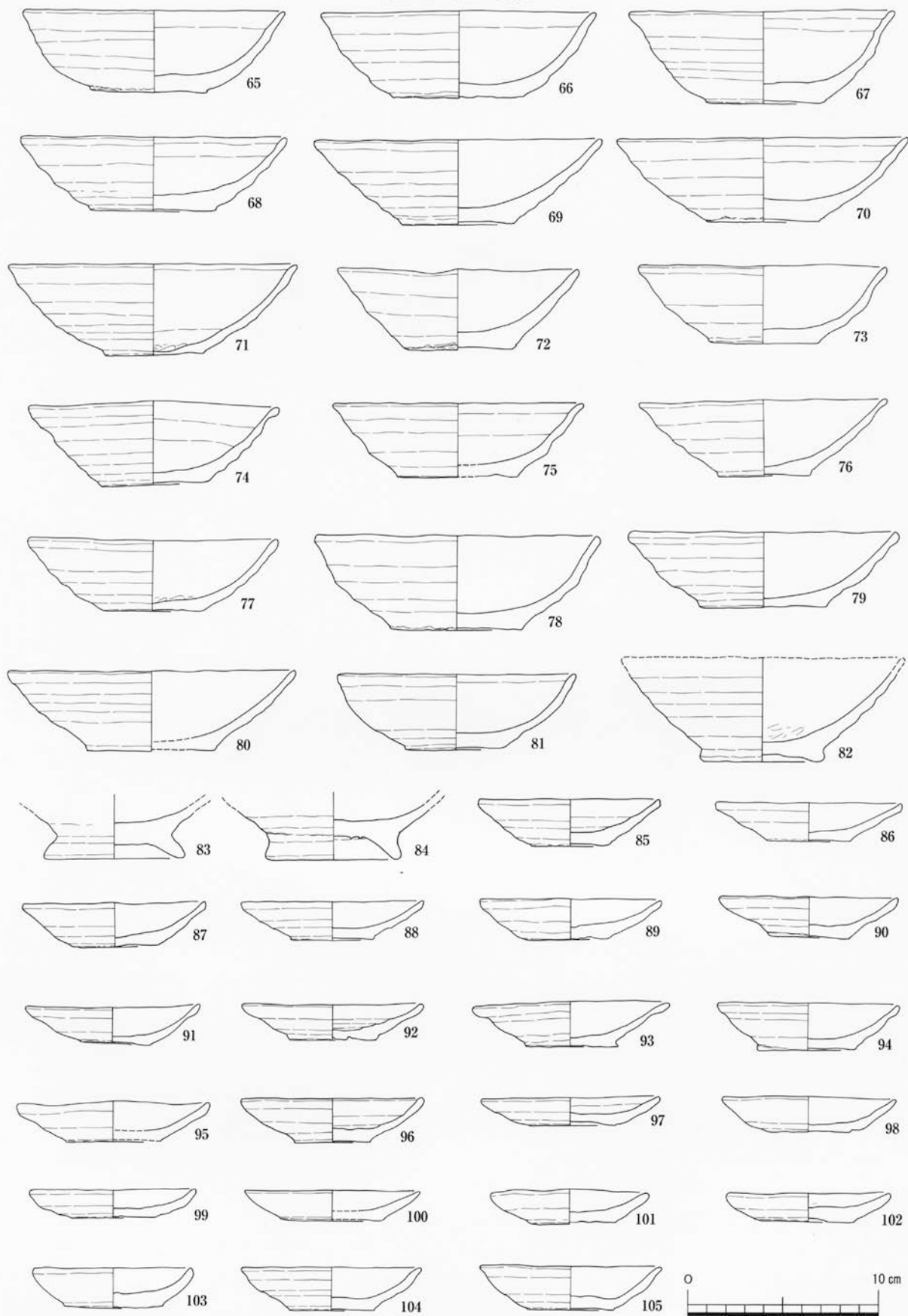
通常輪高台碗は破片での出土であるため、様相を捉えにくいだが、83・84の高台器形は当期より出現し、8B期に増加する新たな輪高台碗器形で、そこから体部外傾の強い皿形輪高台碗が出現してくると予想される。数量的に少ないことも当期の特徴と捉えられようか。なお、82の高台の低い形態については、古代以来の系統を引く碗器形の可能性があるが、内底面にミガキ調整が一部見られ、色調の感じから、本来内黒土師器であったものが焼成の加減で内面の炭化吸着が酸化消滅した製品と判断するのが妥当だろう。

通常平底小皿は、口径8cm台の小型の一群や10cm台の大型の一群が存在するが、8割近くは9.0~10.0cmの範囲で分布する。胎土別では、A・B類が69%、D類が27%、C類が4%で存在し、A・B類胎土は、大きな底部から体部直線的に開き口縁部端に面をもつa類系統(85~92・94・95)と、体部下位で膨らみをもち口縁部で外反するb1類系統(104~112)、砂粒多く古代的胎土(A3類)で小型底部から体部が開く器形をもち、ひとまわり大型法量を呈す薄手作りのf類(113~118)の大きく3つに分類される。f類は7期からの古代的小皿の系譜を残すもの、b1類は白磁模倣系の②類型にあたるものである。なお、口径8cm台の小型で体部が強く開く扁平な器形が定量存在するが(99~103)、これをi類として分類する。D類胎土は、比較的径小さく突出する底部から体部開く器形のc1類系統(127~129)、底径大きめで口縁部内側の肥厚するc3類系統(130)、やや大ぶりで体部開く器形のd類系統(131・132)、そして体部下位で膨らみを持ち、口縁部で外反する②類型が定量存在する(121~126)。A類胎土のものよりも扁平器形であることが特徴で、底径大きくやや底部薄手に作られる。また、底径大きく扁平盤形器形を呈す③類型(133・134)も少量確認される。胎土は北加賀のC類に限定されるが、次の8B期古相に位置付けられるSK472で定量確認される器形のもので、当期が初出だろう。8C期に定着、主体化する器形と言える。C類胎土の平底小皿は量が少なく、類型抽出には至らない。

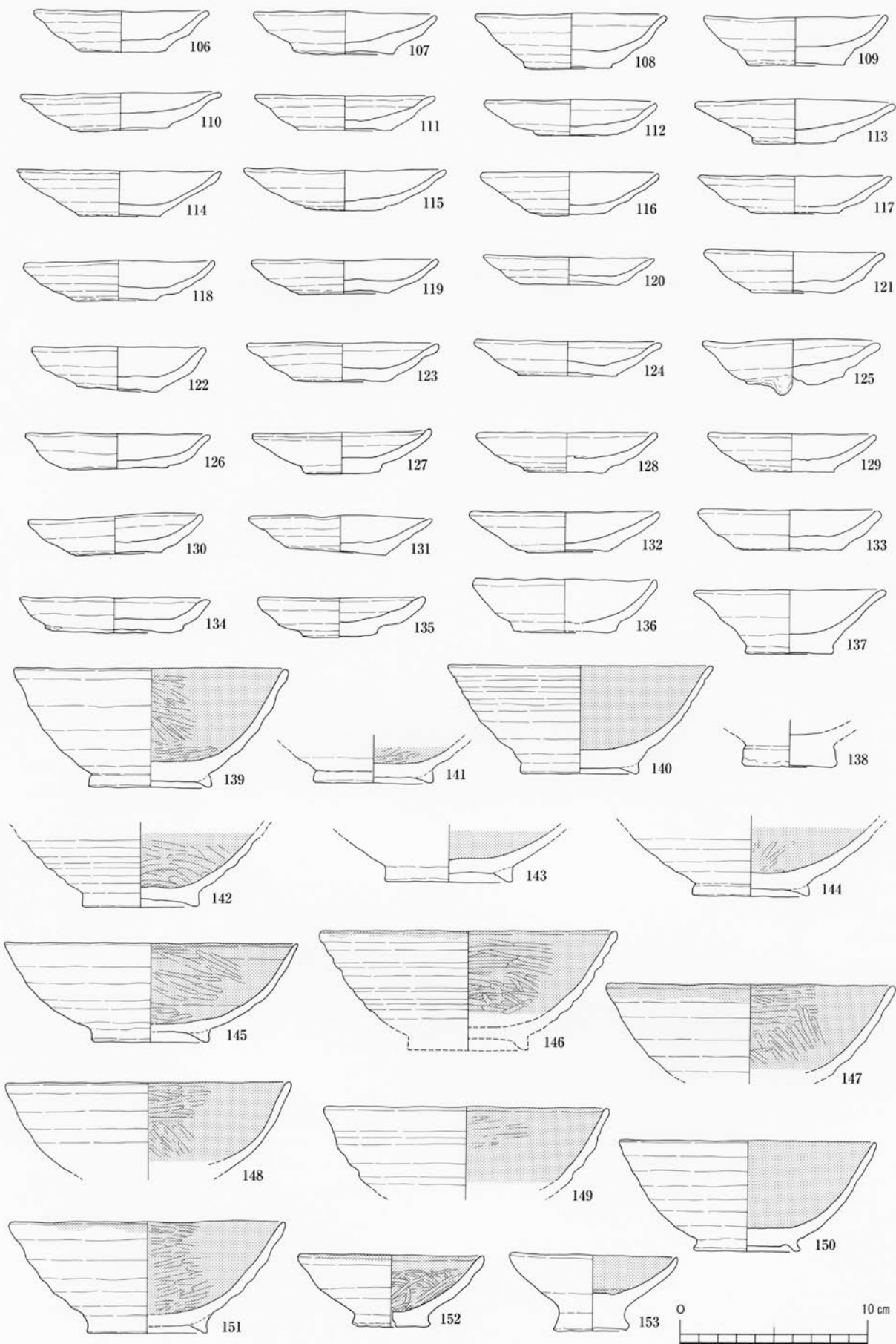
内黒輪高台碗は、口径13.5~16cmのなかで幅を持って分布するが、法量分化の様相はない。胎土はA・B類とD類胎土とがほとんどで、C類胎土は少ない。A類胎土は、内面に粗いミガキ調整を施すものがほとんどで、ロクロナデのみで仕上げるものは140と143のみである。やや深碗気味に立ち上がる器形のもので、底面ナデ調整が基本である。D類胎土は145の浅碗器形と146~149のやや深碗気味となる器形、150のやや小型で深碗器形を呈すものとがある。内面ミガキ調整を基本的に施し、A類胎土よりも丁寧に作られる。なお、小型深碗器形のもので内面ロクロ調整のままのもので、底面に糸切り痕を残し、高台は小さく丁寧に作られる、特徴的な作りのものである。C類胎土の151は体部外傾器形のもので、底面に糸切り痕を残し、内面に比較的丁寧なミガキ調整を施すものである。SK142で出土したC類胎土のものに類似する。

柱状高台小皿は通常のもので僅かに出土するが、内黒焼成が主体の段階である。出土量が少なく、胎土はA類

〈SK419出土遺物〉



第96図 中世土坑出土遺物3 (SK419-1、全てS=1/3)



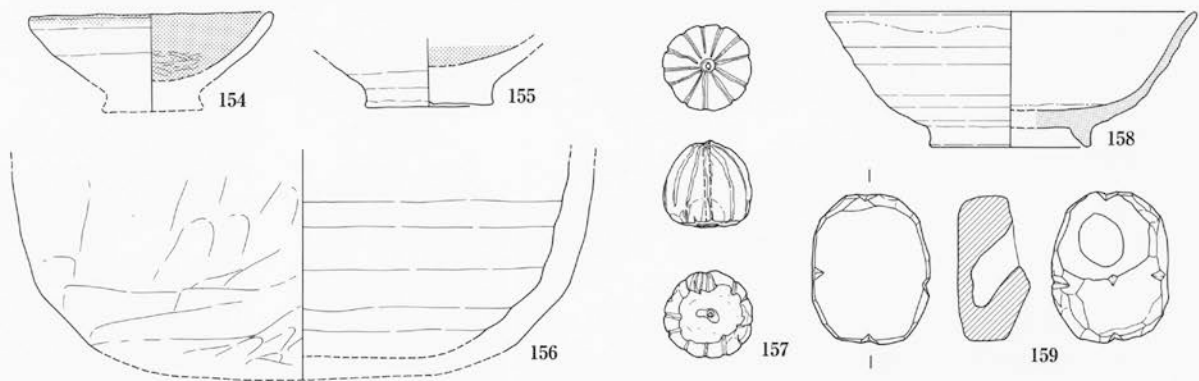
第97図 中世土坑出土遺物4 (SK419-2、全てS=1/3)

のみ、器形はいずれも碗形を呈し、内面ミガキ調整を施すものが主体的に存在する。いずれも、柱状高台器種の出現期様相と言えるもので、これ以降、量が増えるとともに通常土師器化、皿形化が進行する。なお、当器種には柱状高台碗を小型にした器形を持つ 152 が存在する。底面に成形時の粘土振れによって生じる隙間が底部を貫通しているもので、これは故意に穿孔したものではないので、底部に穴が開いていても当器種の用途には何ら問題がなかったことを示すだろう。当器種の用途の一端を物語る資料と言える。

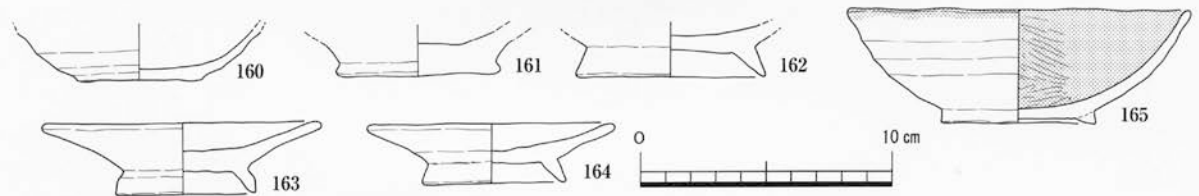
その他の器種としては、156 の土師器鍋、157 の土師質権状錘、そして 159 の錘状石製品がある。

土師器鍋は A 類胎土のもので、外面ヘラナデ、内面ヨコナデを施す。胴部下半の破片だが、外反する口縁部がつく浅鍋器形の中世的土製鍋の初源的な事例と言える。外面にはススの付着が見られる。

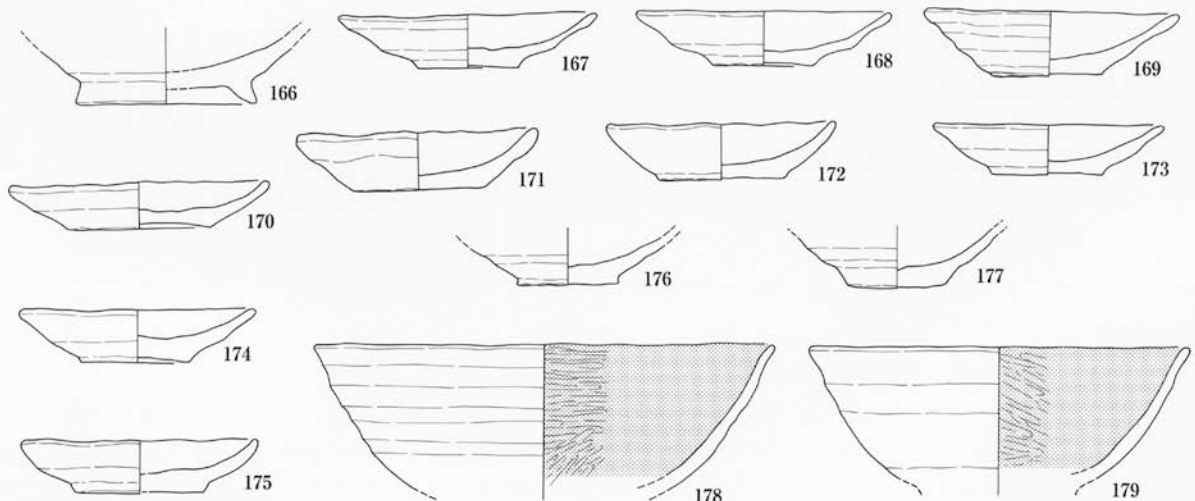
土師質権状錘は A 類胎土で、共伴関係と胎土から当期に位置付けているが、当土製品は 7 世紀後半に出現し、以降古代において生産され続ける竿秤の錘、つまりは権衡の土製品である。筆者は当土製品について、北陸の事例を集成し、論述したことがあるが（望月精司「古代権状錘に関する一考察—北陸出土権衡資料の検討を中心として—」『北陸古代土器研究』第 10 号 北陸古代土器研究会）、このような花卉状の線刻をもち、中軸に貫通孔をもつタイプは、権状錘の出現期から継続的に生産され続ける代表的なタイプである。錘の頂部に別作り鈕が取



〈SK420出土遺物〉



〈SK421出土遺物〉



第 98 図 中世土坑出土遺物 5 (SK419-3、SK420、SK421、全て S = 1 / 3)

り付くタイプで、穿孔はそのためのものと理解される。欠けなどもみられない完形品で使用痕も確認されない。

錘状石製品は、石材が砥石に使用されるような白色凝灰岩で、各面が磨かれる砥石転用かとも考えられるものである。ただ、磨かれていない部分に径1cmほどの穴が斜めに挟りこまれている点、断面台形を呈す形状など、獣脚状のものの接地部分の破片を転用したようにも見える。この原型石製品を楕円形加工し、四隅に紐掛けのための挟りを刻んだもので、四方結束による用途、つまりは錘として転用されたものと位置付ける。だが、漁撈網錘とは考え難く、同じ土坑で出土する土師質権状錘の存在を考えれば、権として使用された可能性もある。

5. SK420 出土遺物

当土坑は、SK419に隣接して存在する浅い小型土坑で、SB308、SB310の柱穴と重複する。土坑内から84点の土師器食膳具が出土しているが、図示できたものは少なく、土坑一括として提示できる資料ではない。ただ、略完形の輪高台小皿2点(163・164)が出土しており、SB310で出土する同器種と同じものと理解される。いずれもD類胎土のもので、口径10cm前後、台径5.5cm前後を測る。柱状高台小皿よりも若干口径が大きい、全体的な作りや法量から、古代に遡る性格のものとは考え難く、柱状高台小皿の輪高台タイプと考えたい。体部が皿形に開く器形から考えて、柱状高台器種の変化過程に位置付け、8B期と判断するのが妥当だろう。なお、このような輪高台小皿は北陸地域の中では確認しにくい、越後や出羽、陸奥においては柱状高台器種の出現とともに出現、併存してくる器種である。当遺跡においても、前後の脈絡なく突然出現する器種であり、単に柱状高台が輪高台となった偶発的なものの可能性もあるが、越後や東北との繋がりの中で出現した器種の可能性もあろう。

6. SK421 出土遺物

当土坑もSK419に隣接して存在する浅い小型土坑で、SB310の柱穴と重複する。土坑内から109点の土師器食膳具が出土しており、内黒土師器の率は約2割、器種は平底小皿を中心とする。

主体を占める平底小皿は、A・B類胎土が主体で、古手器形を呈すf類(167・168)と底径大きく体部が開くa類系統で構成される(169～173)。f類に比べてa類はひとまわり小型で、厚手のものが多い。

柱状高台小皿は底部付近の破片だが、体部の立ち上がり器形から、椀形を呈すタイプと判断される。内黒土師器ではないが、出現期的器形を呈すものと判断される。

輪高台椀は、通常土師器の166と内黒土師器とがある。通常土師器は体部椀形となるもの。内黒土師器は深椀器形を呈し、体部薄手に作られるもので、内面ミガキ調整を施す。A類胎土(179)とD類胎土(178)とがあり、D類胎土の方が薄手で内面ミガキ調整が丁寧に施される。

以上、平底小皿の器形や柱状小皿の椀形器形、内黒輪高台椀の作りなど、8A期に位置付けて妥当と判断する。

第3項 中世井戸・炉状遺構・ピット出土遺物

1. 中世井戸出土遺物

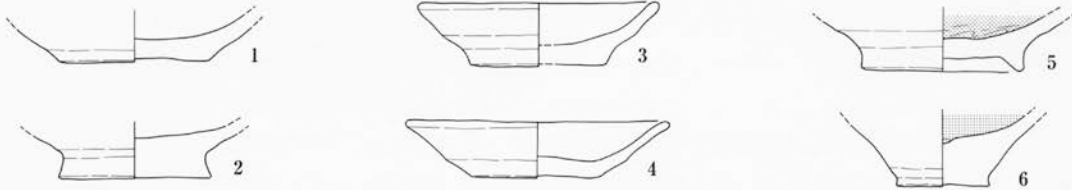
(1) SE02 出土遺物

形状や深さから井戸と判断されるものだが、埋土状況や下底面の掘削形状から、掘りかけ途中で廃絶された井戸と判断される遺構である。埋土中に土器が含まれており、中世に位置付けられる土師器食膳具が34点出土する。破片が主であるため、遺構の時期決定には不確定要素が含まれるが、いずれの土器も概ね8B期に位置付けられるものである。SE02の外周土坑としたSK400の出土遺物も概ね8B期であるため、そこから紛れた込んだ可能性もあるが、掘削、埋め戻し時に混入したものだとなれば、井戸掘削段階は、出土遺物の時期よりも新しいこととなろう。類似する中世の素掘り井戸SE01が西方で検出されているが、これは8C期に位置付けられる遺構であり、SE02の掘削断念の後に、場所を谷の下方へと改めて、掘削し直した井戸となれば、SE02の掘削もこの時期に下る可能性があるだろう。ただ、SE01の掘削から廃絶までに時間差がある可能性もあり、その場合は8B期という考えも成り立つことになる。

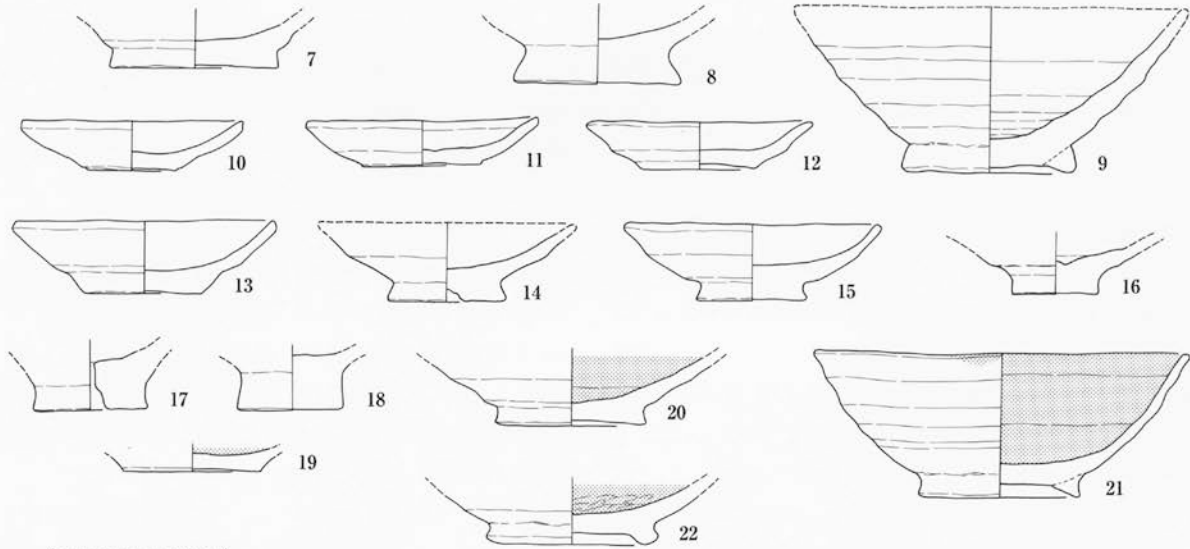
(2) SE02 外周土坑 (SK400) 出土遺物

大型の不整形土坑で、古代土器と中世土器とがほぼ同量程度で出土する。ただ、古代土器は時期幅があり、特定時期にまとまらない点と中世土器に遺存度高いものが定量確認される点から、中世に位置付けられる遺構と判断した。土師器が食膳具269点、煮炊具1点に対し、白磁・灰釉陶器は7点と多く、図化できた資料も多い。

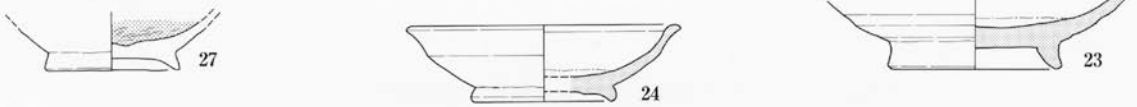
〈SE02出土遺物〉



〈SE02外周土坑(SK400)出土遺物〉



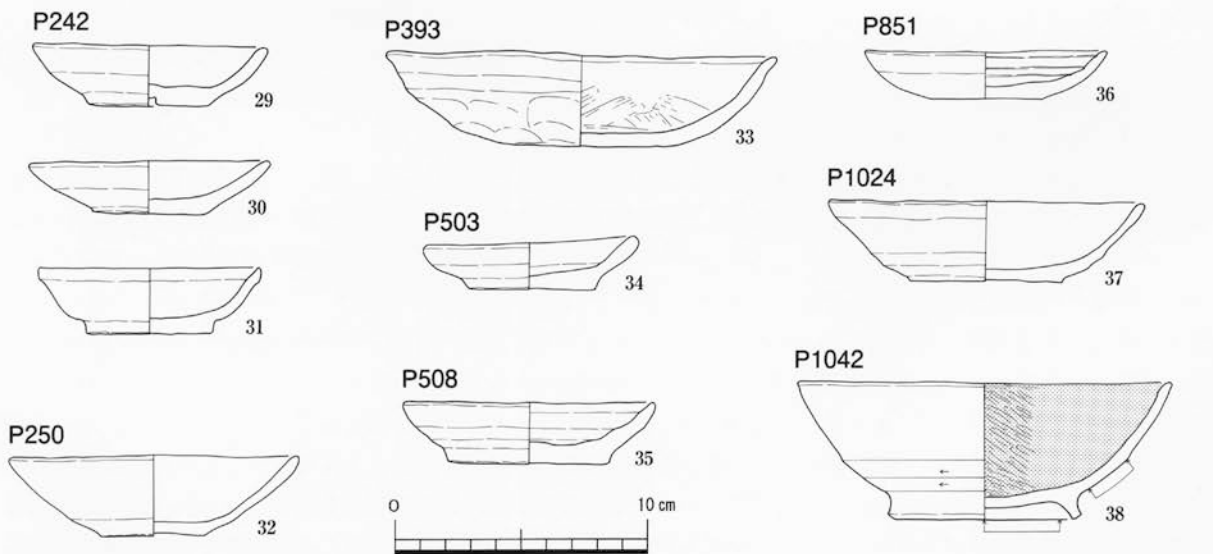
〈SJ70出土遺物〉



〈SJ71出土遺物〉



〈H区ピット出土遺物〉



第99図 中世井戸・炉状遺構・ピット出土遺物 (SE02、SE02 外周土坑、SJ70、SJ71、ピット、全て S = 1 / 3)

土師器食膳具は、内黒土師器率が2割強であり、小皿類が主体的に存在する。体部浅碗形または皿形を呈す柱状高台小皿が定量存在する点や、定型的な柱状高台碗が少量ながら確認される点、内黒輪高台碗が内面ロクロナデ仕上げを主体としている点、平底小皿形態が典型的な a 1 類、 b 1 類を主に構成される点などを総合して、B 区上層土器溜まり遺構に極めて近い様相と判断し、8 B 期と位置付ける。なお、これら土師器食膳具に伴って、白磁や東濃窯産灰釉陶器が出土する。灰釉陶器は碗 23 の高台形状や回転ミガキ調整、皿 24 の体部開く器形、施釉範囲などから、明和 27 号窯式期に位置づけられるものと判断される。白磁に関しても、25 の碗は玉縁口縁部形状と釉調などから山本 IV 1 b 類、26 の皿は口縁部形状から山本 V 2 類に該当可能なものであり、いずれも 8 B 期の暦年代観に矛盾はない。

2. 中世炉状遺構出土遺物

中世に位置付けられる炉状遺構は少なく、SJ70 では内黒土師器輪高台碗を、SJ71 では通常土師器柱状高台小皿を掲載した。SJ70 の内黒輪高台碗は、底部付近の破片だが内面ミガキ調整が残る点から 8 A 期に、SJ71 の土師器柱状高台小皿は、浅碗形を呈する器形の定型化した柱状小皿の形態を持つ点から 8 B 期に位置付ける。

3. 中世ピット出土遺物

今回の報告地区では中世の掘立柱建物が多いこともあって、中世ピットの数は多く、特に半完形復元可能な土師器食膳具を出土するピットのみを図示した。38 の内黒輪高台碗は、高台が断面方形で体部下位から底面にかけてケズリ調整が入り、内面ミガキ調整も丁寧に施される点、全体的な器形、法量から 7 A 期から 7 B 期に、37 の通常平底碗は、胎土や器形、法量から 7 B 期から 7 C 期に、32 の通常平底碗も、同様の時期と位置付けられるが、小型法量となっている点から 7 C 期に位置付けるのが妥当だろう。それ以外は全て 8 B 期に位置付けられるものと見られる。小皿類はいずれも略完形に近いもので、ピット埋納の性格を考えられよう。特に、3 個体の小皿類を埋納する P 242 は、SB310 の建物脇に掘られるピットで、建物の地鎮に伴う可能性がある。

当ピット遺物の中で最も注目されるのは、P 393 より出土した 33 の土師器大皿である。P 393 は SB306 P 8 の横に掘られるピットで、SB308 の建物に伴う可能性を持つものだが、その可能性を示すように、同形態、同胎土の土師器大皿が SB306 で出土している。この土師器大皿は体部下位から底面にかけて成形時の指ナデ痕を残し、内面はハケ目工具によるナデ調整、口縁部内側に面を形成し、外面に 2 段ナデを施す非ロクロ成形の半完形品である。先の掘立柱建物出土遺物の中でも説明したが、加賀地域における在地産非ロクロ成形土師器食膳具としては最古事例であり、8 B 期に南加賀地域においても、在地の中で京都系土師器皿の生産を一部ではあるが、開始していることを物語る資料と言える。

第4項 H区中世土器溜まり遺構出土遺物

G 地区から H 地区の谷部には広く中世土器の廃棄が見られるが、大きくは 5 つの土器集中区に分けられ、西から順に G 区で 1 と 2、H 区で 1～3 の番号を付した。つまり、前回報告の G 地区では、り・る・れ - 44Gr を G 区 1 号土器溜まり、れ・る - 36・37Gr を G 区 2 号土器溜まりとして報告し、今回報告の H 地区では、よ・ら・り・る - 29～33Gr を H 区 1 号土器溜まり、や・ゆ・よ・ら・り - 24～28Gr を H 区 2 号土器溜まり、り - 23Gr を H 区 3 号土器溜まりとして報告することとした。以下に 1～3 号の 3 箇所の土器溜まりについて述べる。

1. H区中世 1 号土器溜まり出土遺物

H 区の西南端区域、よ・ら・り・る - 29～33Gr に分布する土器溜まりで、土師器食膳具片 4,196 点、土師器煮炊具片 8 点、陶磁器片 103 点を出土する。土師器食膳具から大きく 7 B 期、8 B 期、8 C 期の 3 時期に区分することが可能で、土師器食膳具様相については各時期に分けて、陶磁器類については土師器食膳具に帰属させて報告することは困難であるため、一括して述べる。

7 B 期の土師器食膳具 数量は少ないが、り 30Gr 付近を中心に当期の土師器食膳具が分布する。口径 12 cm 前後の土師器平底碗と輪高台碗を主に構成され、これに口径 10 cm 前半台の平底小皿 (8) が加わる。口径の大きさや小型碗的な器形など、平底小皿出現期の様相を有しており、定型的な小皿とはなっていない段階である。胎土は全て A3 類で、古代的土師器発色を有する。なお、8 の平底小皿の底部には焼成前の穿孔がある。

8 B 期の土師器食膳具 ら 31Gr、り 29・30Gr に多い傾向はあるが、特に集中するわけではなく、広く散在する様相である。通常土師器平底碗の器形が体部外傾する新型器形である点や、平底小皿の法量と a 類系統、b 類系

統の器形が主体を占める点、柱状高台小皿が通常土師器主体で存在する点、内黒土師器輪高台碗の体部外傾器形と内面ミガキ調整の省略化傾向、内黒柱状高台碗の器形と内面ミガキ調整の省略などから、8B期と位置付けた土師器群である。なお、注目されるものとしては、30の内黒輪高台碗がある。北加賀産と思われるC類胎土の底部破片で、内底面には入念なミガキ調整、底面には「菊花状かき出し高台技法」の痕跡を残す。北加賀の8A期に顕在化する内黒輪高台碗の高台技法であるが、8B期にも残存する可能性がある。

8C期の土師器食膳具 ら31～33Grを中心に比較的多く土師器食膳具が出土する。土器溜まりという性格から、一括性に乏しい資料だが、当期の数少ないまとまった土師器資料群と言える。器種は通常土師器の平底碗と柱状高台碗、平底小皿、柱状高台小皿、内黒土師器の輪高台碗と柱状高台碗・小皿であるが、内黒土師器は8B期に比べると減少しており、特に輪高台碗の減少が著しい。主体を占めるのは平底小皿で、36～54を上げたが、口径8cm台に主体を置き、全体的に厚手の作りをもつ。各胎土類型により器形が異なり、A類胎土では古代から続く碗系統①類型36～38と、底径大きく扁平型③類型の39～41が存在。D類胎土では③類型は確認できず、いずれも碗系統の①類型で構成(42～46)。北加賀産C類胎土では碗系の①類型は47のみで、③類型が器形にバリエーションをもちながら、大半を占める(48～54)。C類胎土が多い点と③類型が主体を占める点が特徴と言えるだろう。また、当期の特徴として柱状高台器種が定量加わることがあげられる。59・60の体部皿形に広く器形のもの55～58の底径大きくやや碗形呈すものがあるが、全体的に厚手の特徴を持つ。なお、66の浅鍋も当期に位置付けたが、非ロクロ成形の厚手のもので、石英状の細砂粒素地をもつ北加賀系の胎土である。当期以降、散見される中世的煮炊具で、外面にはススが付着している。

陶磁器類 陶磁器類は8B～8C期の土師器群に伴うものである。灰釉陶器の碗と小瓶、白磁の碗と皿が出土しており、図化可能な遺存度高いものが多い。まず、灰釉陶器だが、碗はいずれも東濃窯産と思われるもので、67・68は口縁部外反器形や無釉である状況から西坂1号窯式に、69は内面体部に施釉が認められる点から明和27号窯式に位置付けられる可能性がある。なお、70の小瓶は碗類とは胎土が異なり、やや赤味を呈す。胴部下位に沈線が施され、底面ナデ消しの比較的丁寧な作りのもので、猿投窯産の可能性もある。白磁は、いずれも玉縁口縁をもつもので、玉縁の形態と胎土や釉調から、中規模玉縁で胎土は硬質、釉調は水色系を呈す71・72と、小さな玉縁で体部内湾器形、陶器質の胎土、白く化粧土がのる73～75、薄く長い玉縁で体部は外傾、内面に段があり、化粧土を伴う76、大きく厚い玉縁で、全体的に厚手、硬質の胎土を持ち、釉調は灰色を呈す77に分けられる。それぞれ、山本信夫氏の太宰府白磁分類でのXI1類、II1類、II5類、IV1類に該当し、XI1類は山本B期、II1～IV1類は山本C期に位置付けられる。山本B期は10世紀末～11世紀に、山本C期は11世紀後葉から12世紀前半に対比されることから、山本B期の白磁は7B期に伴う可能性もないとは言えないが、加賀地域における白磁の共伴は主に8期以降であり、伝世品と見るのが穏当だろう。

2. H区中世2号土器溜まり出土遺物

1号土器溜まりの北東方、H区古代土器溜まりの南西側に隣接して分布する土器溜まりで、分布域は、や・ゆ・よ・ら・り-24～28Grと広く、土師器食膳具片6,607点、土師器煮炊具片13点、陶磁器片178点を出土する。内黒土師器率は比較的高く、陶磁器類の出土が目立つことが特徴として上げられよう。当土器溜まりは出土土器に時期的なまとまりがあり、特に、図化可能な遺存度高いものは、概ね8B期に位置付けられる。出土地点は、ゆ26・27Gr～よ27Grと、ら25・26Grに集中しており、比較的一括性高い土器廃棄遺構と捉えられる。

通常土師器食膳具では、平底碗、柱状高台碗、輪高台碗、平底小皿、柱状高台小皿、輪高台小皿が出土する。平底小皿と平底碗が主体的に存在し、定型的な柱状高台碗が存在している。

平底碗は8個体図示したが、やや小型を呈す80・81・87が存在することと、深碗器形を呈す85が存在すること、82の古手f類器形を呈すものが存在することが特徴であるが、一方、83・84の碗は体部開く新型器形であり、それらが共存する様相を持つ。胎土はA類胎土とD類胎土とが拮抗して存在し、柱状高台碗に近い深碗器形を呈す86はD類胎土のものである。

柱状高台碗は、数は多くないが、体部外傾器形の定型的な器形のを2個体図示した。いずれもA類胎土で、口縁部端を面形成する特徴を持つ。8A期の深碗器形を呈すタイプが、体部外傾化の器形変化を行ったものだろう。なお、輪高台碗は底部破片のみで、様相は掴めないが、94の北加賀系C類胎土は大型法量を持つ。

平底小皿は遺存度高いA・B類胎土16個体とD類胎土6個体を図示した。口径は8cm台のものや10cm台のもの

のもあるが、ほぼ9cm台に中心を持つ。器形は古代以来の椀器形の系統にある①類型が主体で、白磁模倣の②類型は少数派。③類型は確認できない。①類型ではB区上層溜まりの小皿分類で示したa類系統が主体を占める。当器形はA・B類胎土の7割を占め、D類胎土では②類型が目立つ。

柱状高台小皿は少ないが、内黒土師器の同器種よりは多く、当器種が通常土師器として定着し始めたことを物語る。ただ、図示したものは全て底部破片であり、様相を捉えにくい。遺存する体部の様相から、椀形呈すものと皿形呈すものとが確認でき、椀形から皿形へ変化する過程の段階と位置づけられよう。なお、当資料では柱状高台小皿の輪高台タイプとも言える、輪高台小皿が定量出土する。SB310、SK420のところでも述べたが、北陸地域には定着しない器種で、新潟や東北からの影響下で出現した可能性がある。口径10.5cmを測る118とそれよりやや大型の119とやや小型の121があり、底面糸切り後のナデ調整を施す。SB310、SK420と同様に、全てD類胎土であり、体部器形は強く開く皿形を呈す。これら皿形器形に対し、117は椀形器形を呈す同一器種の可能性がある。小型輪高台椀とも位置付けられるが、口径9.6cmと柱状高台小皿と同じ口径である点と輪高台の作りが小皿とよく似ている点などから、輪高台小皿の椀形タイプと位置付けたい。

内黒土師器食膳具では輪高台椀を主に、少量の柱状高台椀、柱状高台小皿が出土する。

輪高台椀は口径15cm台を中心として、13cm台の小型一群と16cm以上を測る体部外傾器形がある。胎土はA類とD類が拮抗して存在する。128の体部外傾器形は8B期に新たに出現する新型器形で、内面ロクロナデで仕上げるが、他の椀は粗いながらも内面ミガキ調整を施す。131のようなミガキ調整を入念に施し、シャープな作りの高台を付すものも存在し、古い様相を残す。器形も先の体部開くタイプを少数派とし、深椀器形が体部外傾化してきたような器形が主流など、8A期の様相を残す傾向があり、小法量の一群の存在も同様と言えるだろう。

柱状高台椀はD類胎土のみで、深椀器形を呈す。内面ミガキ調整が丁寧で、作りの良いものである。

柱状高台小皿については先に触れたように数が少なく、内黒土師器主体から通常土師器主体へ移行する段階と言えるだろう。内面にミガキ調整をもたない浅椀形を呈す。

以上の土師器食膳具については、冒頭で8B期に位置付けられると述べたが、平底椀や内黒輪高台椀の小型法量、深椀器形の残存傾向、内黒土師器のミガキ調整の残存など、8A期の様相を残しており、G区SK472の土師器様相に近い。過渡の段階とは言えないが、8B期の中では古相呈す一群と言えるだろう。

土師器煮炊具では新旧2タイプの鍋が出土している。新型の142は、口縁部が「く」字屈曲する内外面ユビナデ調整する厚手の非ロクロ成形品で、胎土は北加賀系の胎土。同種のものが、H区中世1号土器溜まりで出土している。8B期以降に出現してくる煮炊具と言えよう。これに対し、旧型の140・141は、体部が大きく開き、口縁部端で内側に屈曲するもので、古代以来の北陸型の系譜を引く、ロクロ成形の浅鍋である。体部外面に手持ちケズリ調整を施し、底部は丸底に仕上げる。胎土は地元A類胎土で、当期をもって消滅する器種だろう。

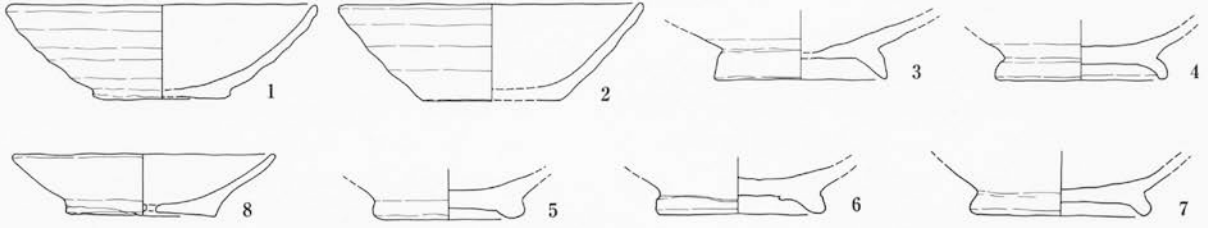
陶磁器類は灰釉陶器碗と白磁碗が出土するが、白磁の出土量が多く、冒頭で述べた一括性高い土師器食膳具集中廃棄区域ではほぼ出土している。灰釉陶器碗は東濃窯産と思われるもので、145・146は施釉を厚めに施すことと高台形態から丸石2号窯式に、144・147は施釉が極めて薄いか無釉で、器形等から明和27号窯式に位置付けられるものと見る。白磁碗は数が多いが、149～151が中規模の玉縁口縁をもち、釉調や胎土から山本信夫氏の白磁分類でのXI1類、山本B期に位置付けられる以外は、全て山本C期に位置付けられるものである。C期のものは玉縁口縁をもつものと、やや外反する口縁部をもつものがある。玉縁状口縁の中で、小型玉縁を呈す152・154は陶器質胎土や化粧土の特徴から山本II1類に、長く薄い玉縁となる153・155・156は山本II5類に、厚く大きな玉縁を呈す158・159は山本IV1類に分類される。外反口縁のものは、底部付近の見込み段と底部形態から、160を山本II3類、161を山本V1類にそれぞれ分類する。

3. H区中世3号土器溜まり出土遺物

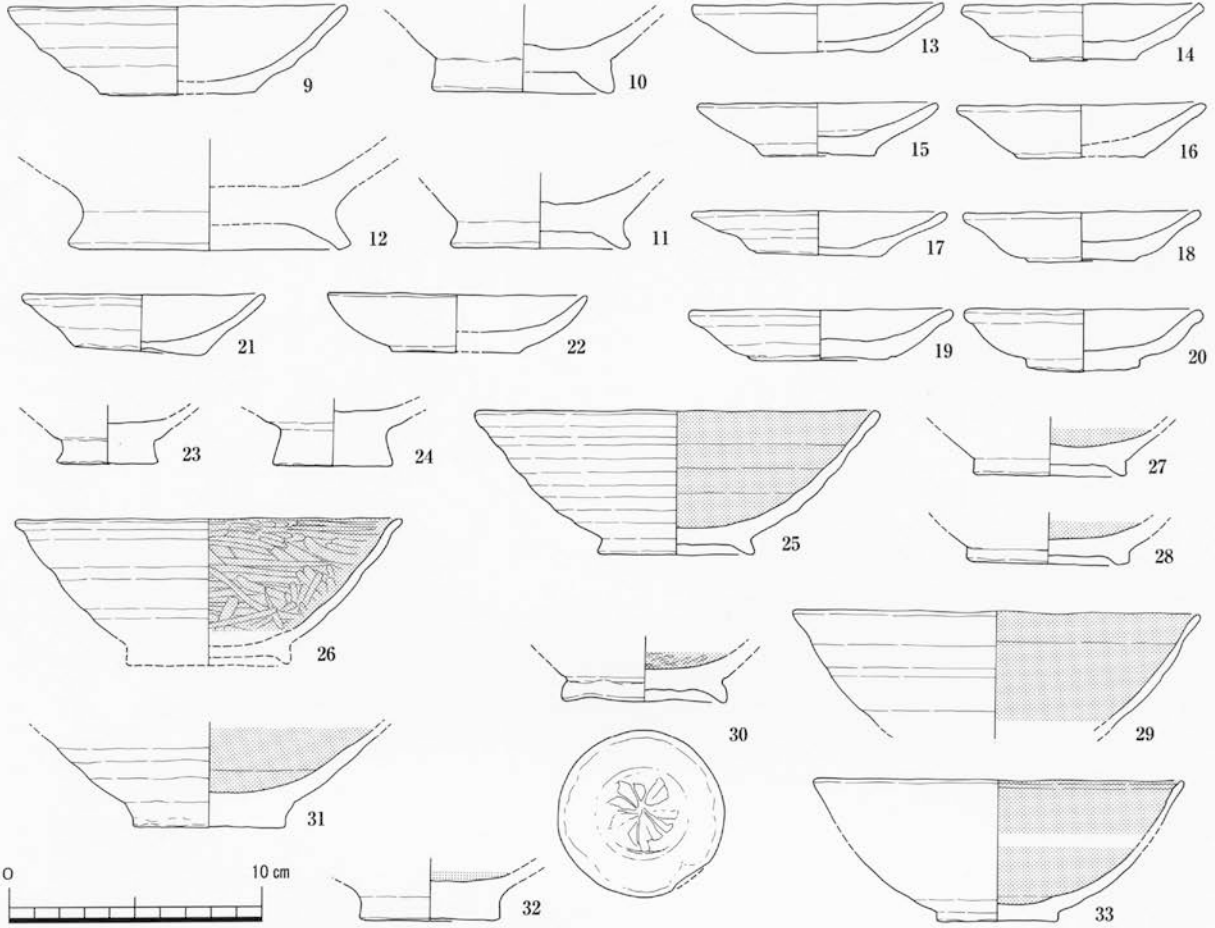
り23Grの一角に通常土師器平底小皿8枚が完形ないしは半完形でまとめて廃棄されていた一括資料である。全ての小皿が歪み、粗雑に作られており、同じ胎土(A類胎土)、焼色をもつ。同時焼成された土師器小皿を一括して持ち込み、当地に廃棄した可能性があるが、ただ、作りの特徴は数種類あり、口径にもばらつきがある。つまり、作り手は複数存在している可能性が高く、底径大きなa類系の器形のもの主体だが、168と169はb2類系統のものだろう。また、a類系統の中でも口径10cm近い大振りのもと9cm未満の小振りのものがあり、体部の厚さにも違いがある。小皿の器形から、時期は8B期と推察される。

〈H区中世1号土器溜まり出土遺物〉

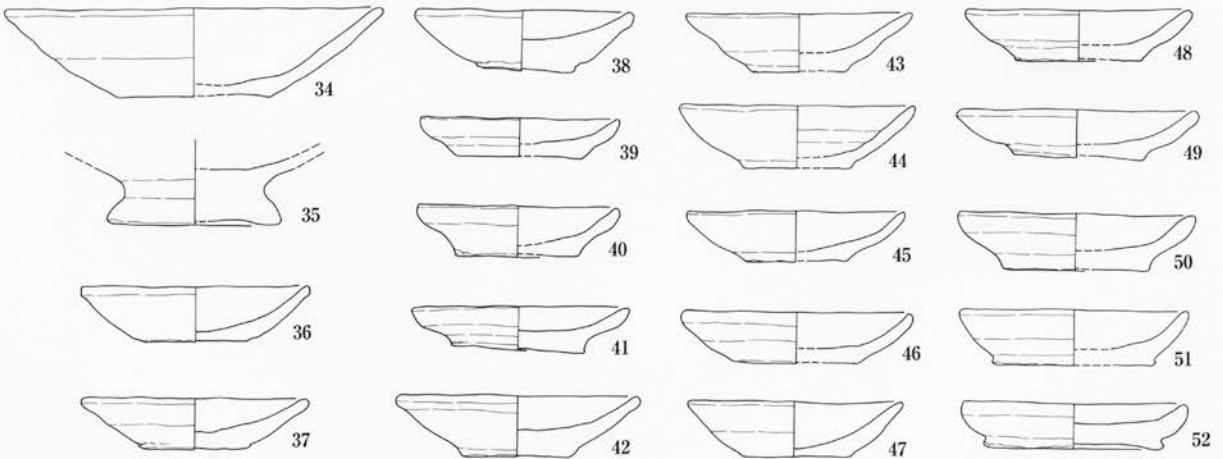
(7B期)



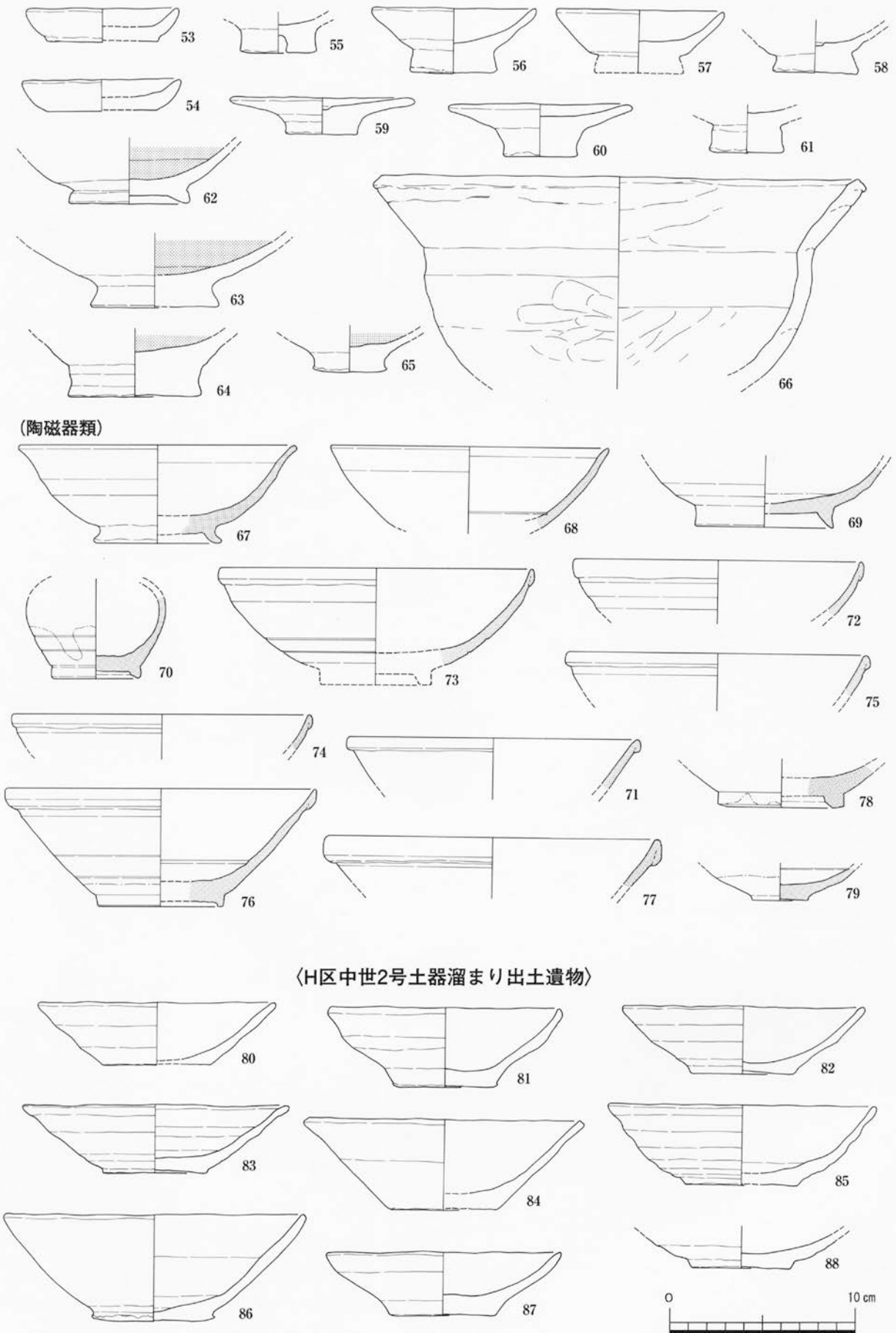
(8B期)



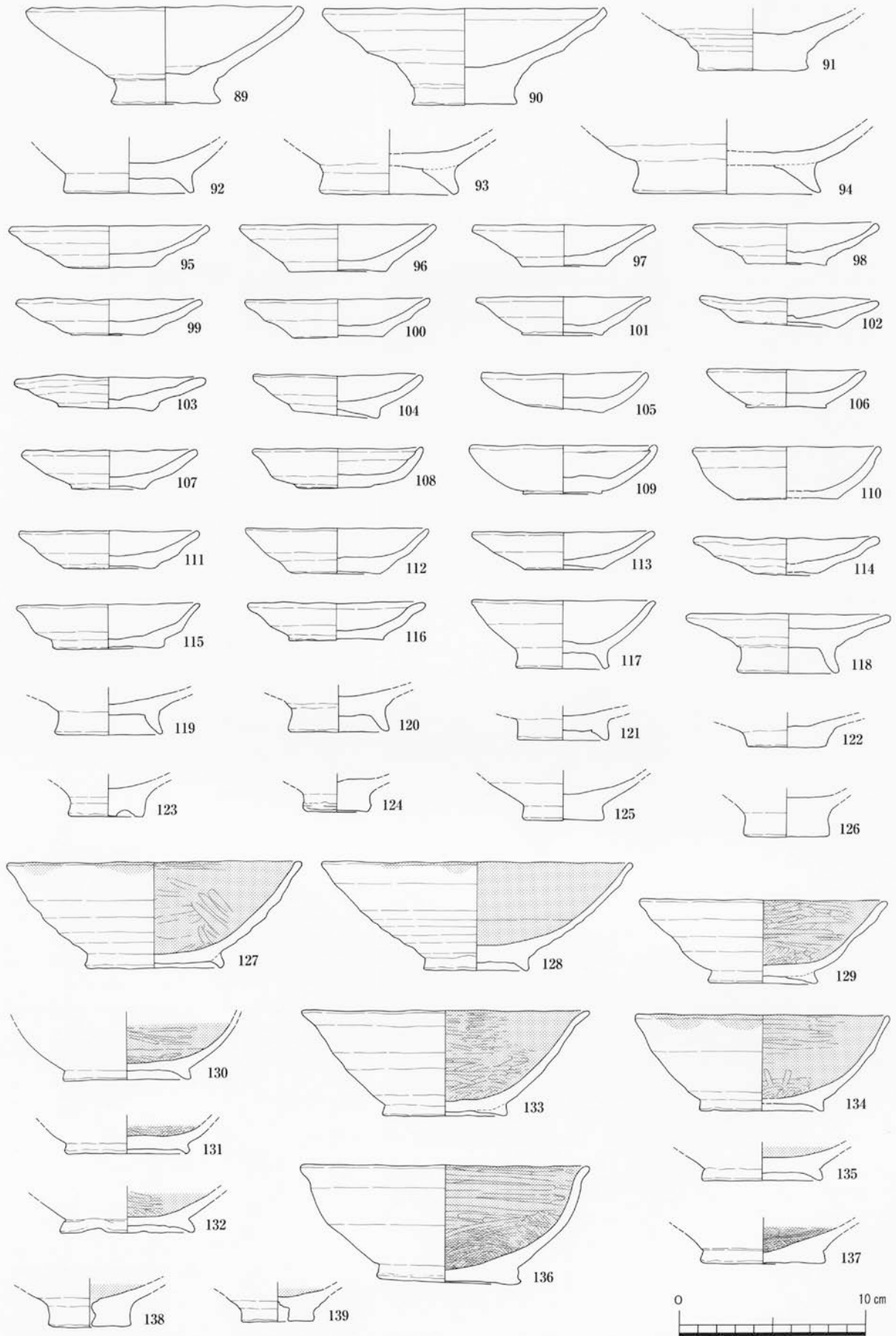
(8C期)



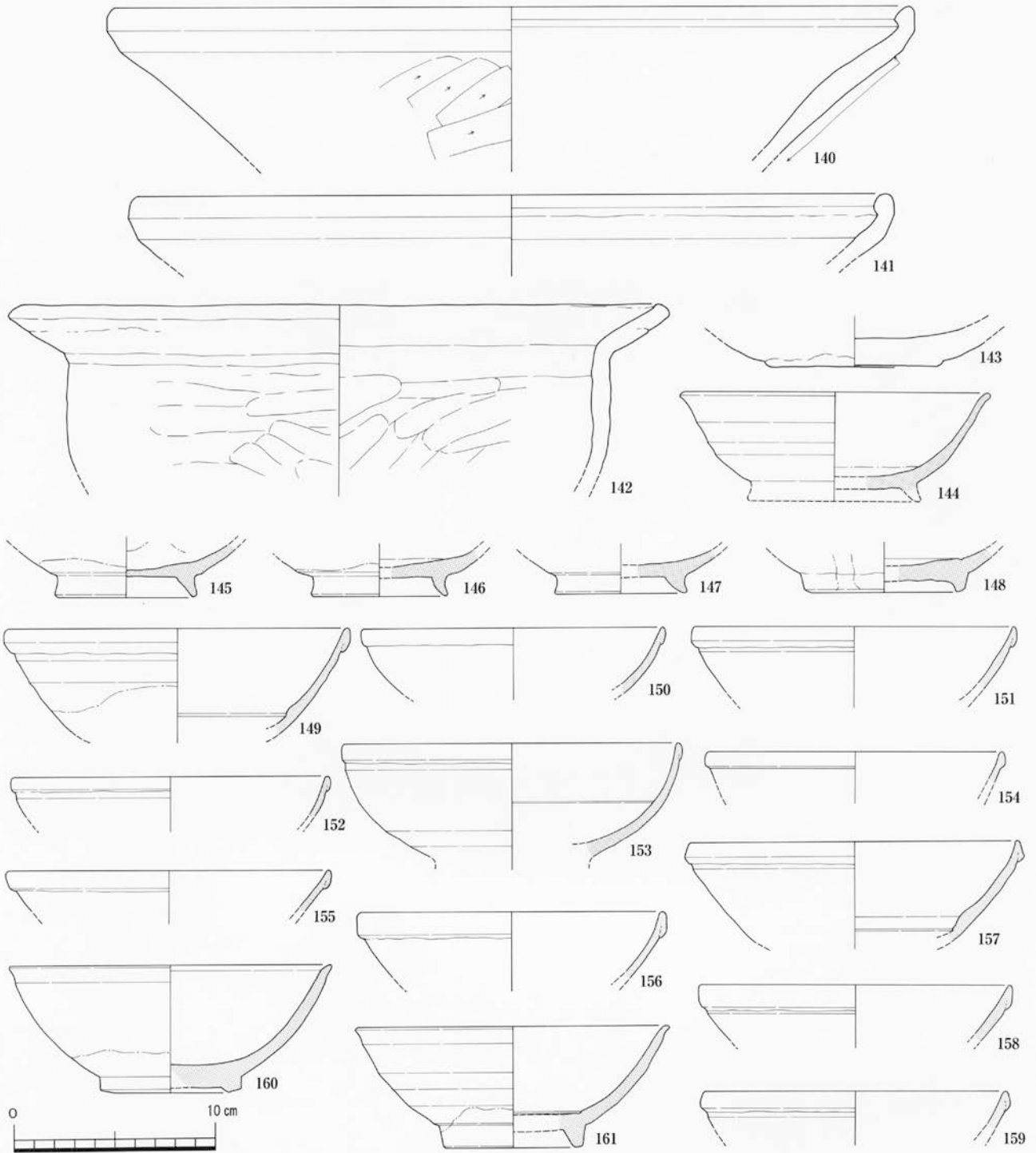
第100図 中世土器溜まり遺構出土遺物1 (1号土器溜まり-1、全てS=1/3)



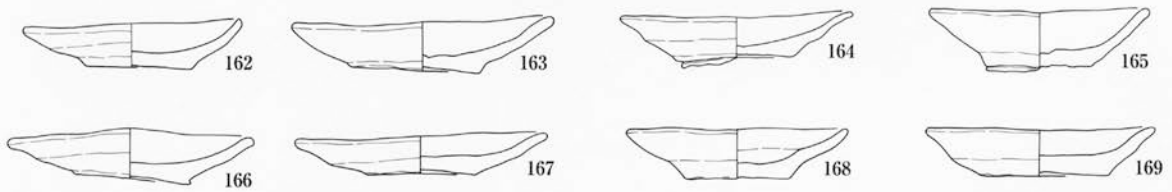
第101図 中世土器溜まり遺構出土遺物2 (1号土器溜まり-2、2号土器溜まり-1、全てS=1/3)



第102図 中世土器溜まり遺構出土遺物3 (2号土器溜まり-2、全てS=1/3)



〈H区中世3号土器溜まり出土遺物〉



第103図 中世土器溜まり遺構出土遺物4 (2号土器溜まり-3、3号土器溜まり、全てS=1/3)

付表1 額見町遺跡V 報告区域出土古代遺物観察表

1. 竪穴建物出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号	
SI119	1	須恵・坏B蓋中	SI119掘方土坑5	□15.5	南加通常	5Y6/1・良好	口縁片	Ⅱ1		重焼Ⅰ	SI119-1	
	2	須恵・盤B	SI119掘方15	□123.2	南加通常	2.5Y8/1・不良	1/20	Ⅱ1			SI119-2	
	3	土師・切刷小釜B	SI119掘方	□117.7, 頸16.4, 胴18.6	窯場A3	10YR8/4・良好	1/5	Ⅱ2古	内外カキ目			SI119-1
	4	鉄・鎌	SI119掘方3	5.1×3.3×0.2	-	-	刃先片	-		重量10.4g		SI119-1H

2. 掘立柱建物出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SB303	1	須恵・坏B蓋中	SB303P1	□12.3	南加良土	2.5Y8/1・堅緻	1/6	Ⅱ2新	底へラ切りナデ	重焼Ⅱa	SB303-1
	2	須恵・坏B身中	SB303P9+よ32'7"・よ31	□11.3, 高3.7, 台9.5, 台高0.45	南加通常	5Y6/1・良好	1/3	Ⅱ2新	底へラ切りナデ	使用痕無	SB303-2
SB305	3	須恵・坏B身大	SB303-1+ゆ33'7"・よ32-33'7"	□15.8	南加通常	2.5Y7/1・良好	1/6	Ⅱ2新	体外沈線2条		SB303-3
	4	須恵・坏A	SB305P11	-	南加通常	2.5Y8/2・不良	底片	Ⅱ2古	底へラ切りナデ		SB305-1
SB315	5	須恵・坏B蓋中	SB315P12	□12.7	南加通常	2.5Y7/1・良好	口縁片	V		重焼Ⅱa	SB315-1
	6	須恵・鉢B	SB315P3+SD23+土器'74・'17・'27'7"	□18.4, 体18.5, 高11.4, 底9.3	南加通常	2.5Y6/1・良好	1/4	V	外カキ目, 底糸切り痕	使用痕無	SB315-2
SB316	7	土師・長刷蓋B	SB315P14	□12.2, 頸18.2	窯場A2	7.5YR6/4・良	口縁片	Ⅱ1~Ⅱ2			SB315-1
	8	須恵・坏A	SB316P9+む26	□13.8, 高3.6	南加通常	7.5Y6/1・良	2/5	Ⅱ2古	底へラ切りナデ	使用痕無	SB316-1
	9	須恵・小壺	SB316P4+も26・27	□17.9, 頸15.3	南加南群良土	10YR4/1・堅緻	1/20	I 1	外Ha叩き後カキ目, 内Da当て	陶器窯の焼成	SB316-2
	10	土師・浅鍋B	SB316P6	□136.0, 頸33.6	窯場A2	7.5YR7/4・良	口縁片	Ⅱ2	内カキ目		SB316-1
SB317	11	石敷品・紙石	SB316P3	7.9×4.3×2.7	凝灰岩	-	4/5	-		擦痕有, 紙面4, 重量92g	SB316-2
	12	須恵・坏B身小	SB317P2	□13.5	南加通常	7.5Y7/1・不良	1/15	V			SB317-1
	13	須恵・坏B蓋中	SB326P4	□15.8	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/6	Ⅱ1	天ケズリ	重焼Ⅰ	SB326-2
	14	須恵・坏B蓋大	SB326P4+も30	□16.7	南加通常	N6/0・良好	1/4	Ⅱ2		重焼Ⅰ	SB326-1
SB326	15	須恵・坏A (灯明具)	SB326P10	□13.0, 高3.15	南加通常	2.5Y8/2・不良	1/3	Ⅱ2	底へラ切りナデ	内外油痕	SB326-4
	16	須恵・坏A	SB326P10	□12.8	南加良土	10B6/1・良好	1/6	V2			SB326-3
	17	須恵・盤A	SB326P1	□17.8, 高推2.4	南加通常	2.5Y6/1・良好	1/15	Ⅱ2	底へラ切りナデ		SB326-5
	18	須恵・人物埴輪	SB326P2	底17.5	南加通常	7.5YR5/2・良好	円筒部片	6 C 2/4	外縁ハケ目, 内縁ナデ後下端ケズリ		SB326-6
SB327	19	土師・坏B蓋	SB326P10	径3.5, 蓋高0.8	窯場A1	5YR7/6・良好	鈕片	Ⅱ1~Ⅱ2	内外ミガキ	使用痕不明, 両面赤彩	SB326-1
	20	須恵・坏B蓋中	SB327P1+土器'75・'15・'24'7"・'22・'23'7"	□16.4	南加通常	10YR6/1・堅緻	1/5	Ⅱ1	天ケズリ	重焼Ⅰ, 使用痕無, 内天ヘラ記号	SB327-1
SB330	21	須恵・坏A	SB327P5+ゆ26'7"・よ27'7"・ら24・33'7"	□13.4, 高3.4	南加通常	5YR5/4・良	1/3	Ⅱ1	底へラ切りナデ	使用痕無	SB327-2
	22	須恵・坏B蓋大	SB330P2	□11.7	南加良土	5Y6/1・良	口縁片	V2			SB330-2
SB331	23	土師・浅鍋B	SB330P3	□135.4, 頸32.6	窯場A3	7.5YR8/3・良	口縁片	V2			SB330-1
	24	須恵・坏A蓋中	SB331P6	□14.2, 蓋11.8	南加北群	10YR7/1・良好	口縁片	Ⅱ2		重焼Ⅰ	SB331-1
SB334	25	須恵・坏B蓋中	SB331P8	□15.8	南加南群	2.5Y7/1・良好	口縁片	Ⅱ3		重焼Ⅰ	SB331-2
	26	須恵・坏A	SB331P7	-	南加通常	2.5Y7/1・良好	1/10	Ⅱ2	底へラ切りナデ		SB331-3
SB334	27	須恵・坏B蓋	SB334P6	径2.9, 蓋高0.95	南加通常	10Y5/1・良	鈕片	Ⅱ3		重焼Ⅰ	SB334-1
	28	須恵・坏B蓋中	SB334P1	□116.4	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	口縁片	Ⅱ3		重焼Ⅰ	SB334-2

3. 炉状遺構・集石遺構出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SJ65	1	須恵・坏A	SJ65床下	□11.8	南加砂多	2.5Y8/1・不良	1/10	Ⅱ1~Ⅱ2			SJ65-1
	2	須恵・坏B蓋中	SJ66-4+ゆ27'7"・よ26'7"	□14.8	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/6	Ⅱ1	天へラ切りナデ	重焼Ⅰ	SJ66-1
SJ72	3	須恵・坏A	SJ66-1	□13.4, 高3.8	南加通常	2.5Y7/1・良	1/4	Ⅱ1	底へラ切りナデ		SJ66-2
	4	須恵・輪	SJ72	□13.0	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/5	Ⅱ2~Ⅱ3			SJ72-1
SX04	5	須恵・坏B蓋中	SX04-14・15	径2.9, 蓋高0.6	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/2	Ⅱ	天ケズリ	重焼Ⅱa, 使用痕無	SX04-1
	6	須恵・盤A	SX04-43・44	□15.8	南加通常	2.5Y7/1・良	1/6	Ⅱ2	底へラ切りナデ	使用痕無	SX04-2

4. 土坑出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号	
SK393	1	土師・浅鍋B	SK393-26	□137.8, 頸37.4	窯場A2	10YR7/4・良	1/5	Ⅱ1~Ⅱ2	ロクロナデ後外ケズリ, 内ハケ目	外下半部, 内ヨゴレ	SK393-1	
	2	土師・浅鍋B	SK393-8・10	□140.2, 頸38.0	窯場A2	7.5YR6/5・良好	1/8	Ⅱ1~Ⅱ2	ロクロナデ後内カキ目	外縁, 内ヨゴレ	SK393-2	
SK395	3	須恵・椀A	SK395-113	□136.6, 高3.6, 底6.1	南加通常	2.5Y8/1・良	2/3	Ⅱ1	底糸切り痕	内外一部煤, 内底摩耗中, 口縁に成形時ゆがみ	SK395-1	
	4	土師・椀A	SK395-168・171	□144.0, 高推4.5, 底5.4	窯場A1	10YR8/3・良	1/2	Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SK395-1	
	5	土師・椀B	SK395-67・145・178	□15.6, 高6.5, 台7.2, 台高1.1	窯場A1	2.5YR6/4・良	2/3	Ⅱ1	底糸切りナデ消し	内外煤痕	SK395-4	
	6	土師・短刷小釜B	SK395-17	□18.8, 頸8.2, 胴9.8	窯場A2	7.5YR7/4・良	1/5	Ⅱ		内外剥落	SK395-10	
	7	土師・短刷小釜B	SK395-109	□132.2, 頸12.2	窯場A2	5YR6/4・良好	口縁片	Ⅱ2	内外ロクロナデ	外縁, 内無げ	SK395-9	
	8	土師・短刷小釜B	SK395-59・63	□15.6, 頸13.8	窯場A2	7.5YR6/3・良	口縁片	Ⅱ3		内口縁焦げ帯	SK395-12	
	9	土師・長刷蓋B	SK395-27	□121.0, 頸19.2, 胴19.6	窯場A2	7.5YR7/4・良	1/15	Ⅱ3	内外ロクロナデ	外縁, 内ヨゴレ	SK395-11	
	10	土師・長刷蓋B	SK395-8	□122.0, 頸20.2	窯場A2	5YR7/4・良	口縁片	Ⅱ3	外カキ目	内ヨゴレ外赤化剥落	SK395-8	
	11	土師・浅鍋B	SK395-2	□138.4, 頸36.0	窯場A1	7.5YR7/6・良	口縁片	Ⅱ3	内外ロクロナデ		SK395-1	
	12	土師・厚鉢状	SK395-131	□14.4	窯場A2	7.5YR7/5・不良	1/10	Ⅱ~Ⅱ	内外ロクロナデ		SK395-5	
	13	土師・厚鉢状	SK395-127	□14.0	窯場A1	7.5YR8/4・良	口縁片	Ⅱ~Ⅱ	内外ロクロナデ		SK395-6	
	14	鉄・雁又鋸	SK395-98	7.5×2.7×0.6	-	-	刃先欠損	-		匙被部突角, 基部剥突, 重量9.2g	SK395-14	
	SK398	15	須恵・坏A	SK398-3・7+よ32'7"	□13.0, 高3.7	南加通常	10Y6/1・良好	2/5	Ⅱ2	底へラ切りナデ	使用痕無	SK398-1
		16	須恵・盤A	SK398-9	□17.3, 高2.2	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	1/6	Ⅱ2	底へラ切りナデ	使用痕無	SK398-2
SK400	17	須恵・高坏A	SK398-8	□121.8, 高2.1	南加砂多	5Y6/1・良好	1/5	Ⅱ2古	外坏下ケズリ	坏内底摩耗弱	SK398-4	
	18	須恵・坏B蓋小	SK400BC上層+SK423-8-51・294+も25・'27	□111.6	南加通常	N5/0・堅緻	2/3	V	天へラ切りナデ	重焼Ⅱa, 使用痕無	SK400-1	
	19	須恵・盤A	SK400-26+SK423-335+P969+土器'74+も26・'24・'26	□116.0, 高1.8	南加良土	2.5Y7/1・堅緻	1/4	V	底へラ切りナデ	使用痕無	SK400-2	
	20	須恵・盤B	SK400D上+SE02上層+も25	□121.2, 高3.2, 台17.0, 台高0.6	南加通常	7.5Y7/1・良	1/6	V	底へラ切りナデ	使用痕無	SK400-3	
SK400	21	土師・鉢E	SK400-38・39・47・92・98	□18.0, 体21.0	窯場A1	10YR7/3・良	1/6	V	内外カキ目	使用痕無	SK400-2	
	22	土師・鉢E	SK400-A・B・C・D上~下層	□117.6, 体22.6	窯場A1	10YR7/3・良	1/10	V	内外カキ目	使用痕無	SK400-1	

付表1 額見町遺跡V報告区域出土古代遺物観察表

遺構	番号	種類・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号	
SK400	23	土師・浅鍋B	SK400-83	□137.6, 頸36.0	窯場A3	10YR7/3・良	口縁片	V2			SK400-3	
	24	須恵・坏B身中	SK407-57	□112.4	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	1/6	Ⅱ2古			SK407-1	
	25	須恵・小壺	SK407-11・13~19・21・23・24・26・27・29・30・34・43・47~50・56・60・157・158・160・161・163・165~172・174・176・178・181・184・189・197・199・201~203・210・211 + SK408B + る27	□117.8, 頸14.8, 胴23.9, 頸高3.3, 胴高27.7, 高31.0	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	4/5	Ⅱ2	外カキ目後Ha吹き、内Da当て	使用痕無、焼ゆがみ・焼けひずみ品、焼成中の割傷あり		SK407-2
				□120.4, 頸18.6	南加通常	5PB4/1・良好		Ⅱ	外He吹き後カキ目、内Db当て			SK407-3
SK407	27	土師・円筒形	SK407-214	胴15.6	窯場A3	7.5YR7/5・良	破片	Ⅱ2	外カキ目	内煤付着	SK407-1	
	28	須恵・坏B身中	SK408-216・249・A	□14.2, 高推2.5, 鈕2.8, 鈕高推0.9	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	1/2	Ⅱ2古	天ケズリ	重焼Ⅰ, 使用痕無	SK408-4	
	29	須恵・坏B身中	SK408-175・184・B + SK409 + る28	□13.1, 高2.9, 鈕2.5, 鈕高0.95	南加通常	10Y6/1・良好	2/5	Ⅱ2古	天ケズリ	重焼Ⅱb, 使用痕無	SK408-3	
	30	須恵・坏B身小	SK408-147・300 + る20・27	□110.2	南加通常	2.5Y7/1・良好	2/3	Ⅱ2古	天ケズリ	重焼Ⅱa, 使用痕無	SK408-1	
	31	須恵・壺B	SK408-187・194・199・293 + SK409-2 + る27・28・り28	□19.4, 高3.5, 台17.1, 台高0.4	南加砂多	10YR7/1・堅緻	3/4	Ⅱ2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無、底突出	SK408-5	
	32	須恵・小型壺	SK408-116 + る27	□10.6, 頸9.1, 胴9.9, 高4.9	南加通常	10YR7/1・堅緻	1/4	Ⅱ	底ヘラ切り	使用痕無	SK408-6	
	33	土師・輪A	SK408-8	底7.8	窯場A1	7.5YR8/6・良	4/5	Ⅱ2古	底糸切りケズリ後内外ミガキ	使用痕無、肉面赤彩	SK408-1	
	34	土師・短胴小釜B	SK408-21	□13.6, 頸12.1, 胴13.0	窯場A3	7.5YR8/5・良	1/20	Ⅱ2	内外カキ目		SK408-5	
	35	土師・短胴小釜B	SK408-330	□14.2, 頸12.9, 胴14.2	窯場A2	10YR8/4・良好	1/6	Ⅱ2	内外カキ目	内頸部焦げ	SK408-4	
	36	土師・長胴釜B	SK408-108	□122.2, 頸20.0	窯場A3	5YR6/6・良好	口縁片	Ⅱ2古	外カキ目		SK408-3	
	37	土師・長胴釜B	SK408-263	□123.2, 頸19.4, 胴20.6	窯場A3	10YR7/4・良	1/20	Ⅱ2古	成形印後カキ目		SK408-2	
	SK408	38	土師・浅鍋B	SK408-296	□40.2, 頸37.0	窯場A2	10YR7/4・良	1/20	Ⅱ2	内外カキ目		SK408-7
39		土師・瓶B	SK408-214・243・247	底15.6	窯場A3	7.5YR8/4・良好	底片	Ⅱ2	内外カキ目、内下端ハケ目	内底薄焦げ	SK408-9	
40		土師・付鉢	SK408-9・18	□13.0, 鉢高3.3, 基19.4	窯場A3	10YR7/4・良	1/20	Ⅱ2	内外カキ目、ハケ目	内煤、脚部方形スカシ	SK408-8	
41		土師・円筒形	SK408-181 + SK407-192	□111.8	窯場A3	7.5YR7/5・良	口縁片	Ⅱ2			SK408-6	
42		須恵・坏B身中	SK409-21	□112.8, 高3.7, 台8.3, 台高0.4	南加通常	7.5Y6/1・良好	5/6	Ⅱ2古	底ヘラ切りナデ	内底摩耗中、外底面ヘラ掻き「生」	SK409-5	
43		須恵・坏A	SK409-44	□113.9, 高4.35	南加通常	5Y5/1・良好	1/10	Ⅱ2			SK409-2	
44		須恵・坏A	SK409-75 + る309* * りれ28	□12.8, 高推3.3	南加通常	5Y6/1・良好	2/3	Ⅱ2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-4	
45		須恵・坏A	SK409-39	□112.4, 高2.9	南加通常	2.5GY6/1・良好	1/5	Ⅱ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-3	
46		須恵・坏A	SK409-69	□111.9	南加通常	5Y6/1・良好	1/6	Ⅱ2			SK409-①	
47		須恵・壺B	SK409-119 + P648	□122.0, 高3.2, 台18.7, 台高0.7	南加通常	7.5YR7/4・良	1/5	Ⅱ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-7	
48		須恵・壺B	SK409-36~38・103	□122.1, 高3.9, 台19.1, 台高0.5	南加通常	10Y6/1・良	1/4	Ⅱ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-6	
49		須恵・横瓶	SK409-88・100~102・105~107・116 + SK408 + る249* * りれ28 + る26・30・31* * りり・り29~31* * りれ29・30* * り他	□111.8, 頸9.2, 高23.4	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	1/3	Ⅱ	外Ha吹き後カキ目、内ロクロナデ後Dc当て後ナデ	両面閉塞技法	SK409-9	
SK409	50	土師・短胴小釜B	SK409-41	□114.0, 頸12.9	窯場A2	10YR7/5・良好	1/10	Ⅱ2新	外カキ目		SK409-2	
	51	土師・短胴小釜B	SK409-97	□113.6, 頸12.7	窯場A3	5YR7/4・良好	1/10	Ⅱ2古	内カキ目	外剥落	SK409-3	
	52	土師・長胴釜B	SK409-31	□120.5, 頸17.6	窯場A3	7.5YR8/4・良	口縁片	Ⅱ2古			SK409-1	
	53	土師・支脚形	SK409-115 + る249* * り	下8.5	地元B2	5YR7/3・良好	1/4	Ⅱ~Ⅲ		被熱赤化	SK409-4	
	54	須恵・坏B身中	SK422-174 + SK315P3 + 土器* * り4 + る26* * り	□14.5, 高3.5, 台9.0, 台高0.3	南加南群	2.5Y6/1・堅緻	1/4	Ⅱ3	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK422-2	
	55	須恵・坏B身中	SK422-1	□14.5, 高4.5, 台9.8, 台高0.5	南加通常	10YR7/2・良好	5/6	Ⅱ3	底ヘラ切り後ミガキ	内底摩耗強	SK422-3	
	56	須恵・坏A	SK422-121・129・321	□114.9, 高3.1	南加通常	10Y6/1・良	1/2	Ⅲ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK422-4	
	57	須恵・瓶A	SK422-118・123・124・153・170 + 土器* * り24・237・492・493 + る25* * り	頸5.2, 胴17.0, 胴高9.8, 台11.0, 台高0.4	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	2/3	Ⅱ3~Ⅳ	外削下位ケズリ	両面閉塞技法	SK422-7	
	58	土師・坏F	SK422-125	□12.2, 高推3.0	窯場A1	10YR8/4・良	1/6	Ⅲ	底ヘラ切り、内外ミガキ	両面赤彩	SK422-1	
	59	土師・短胴小釜B	SK422-273・345	□115.8, 頸14.8, 胴16.8	窯場A3	5YR6/5・良好	1/10	Ⅱ3	内外カキ目、内ハケ目	内口縁薄焦げ	SK422-2	
	60	土師・短胴小釜B	SK422-356・374 + る26	□116.2, 頸15.8, 胴15.6	窯場A3	5YR6/5・良好	1/10	Ⅱ~Ⅲ	内外ロクロナデ	内口縁焦げ	SK422-5	
	61	土師・長胴釜B	SK422-126	□122.2, 頸19.2	窯場A3	5YR7/5・良好	口縁片	Ⅱ3	外ハケ目後縦ケズリ		SK422-3	
SK422	62	土師・浅鍋B	SK422-231	□139.0, 頸36.6	窯場A3	5YR6/5・良好	口縁片	Ⅲ	外カキ目		SK422-4	
	63	土師・支脚形	SK422-218・219	下7.4, 脚2.8, 残高4.0	地元B2	7.5YR7/4・良好	1/3	Ⅱ3	指面痕	被熱赤化、縦痕有、下部三叉形痕	SK422-7	
	64	須恵・坏B身中	SK423-171・261 + SK424-158・425	鈕2.8, 鈕高0.7	南加通常	10Y7/1・良	2/5	Ⅱ2	天ケズリ	重焼Ⅱb, 使用痕無	SK423-4	
	65	須恵・坏B身中	SK423-11・15 + SK424-165・176・323・D	□113.2, 高1.7, 鈕2.2, 鈕高0.6	南加通常	N6/0・堅緻	2/3	Ⅱ1	天ヘラ切りナデ	重焼Ⅱb, 使用痕無	SK423-3	
	66	須恵・坏B身小	SK423-C上層 + SK424-308	□112.2	南加通常	10YR8/1・堅緻	1/2	Ⅱ1	天ヘラ切りナデ	重焼Ⅱb, 使用痕無	SK423-2	
	67	須恵・坏B身大	SK423-79・143・147・148・150・152・168・182・183	□116.0, 高6.25, 台10.0, 台高0.5	南加通常	2.5Y7/1・良好	2/3	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-5	
	68	須恵・坏B身大	SK423-A上層 + る23* * り	□115.8, 高6.1, 台10.4, 台高0.8	南加サラ土	5PB5/1・堅緻	1/10	Ⅱ2新	底ケズリ	使用痕無	SK423-6	
	69	須恵・坏B身中	SK423-199・200・202・205・206・208~210・300・301	□112.8, 高4.25, 台9.6, 台高0.5	南加通常	N6/0・良好	5/6	Ⅱ2新	底ヘラ切りナデ	内口縁・台端摩耗中	SK423-7	
	70	須恵・坏A	SK423-240・243・269 + SK400-37	□112.0, 高3.35	南加通常	2.5GY6/1・良好	1/3	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-9	
	71	須恵・坏A	SK423-146・232 + SK424-11・180・248	□112.2, 高3.15	南加砂多	5Y6/1・不良	2/3	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底面ヘラ記号「」	SK423-8	
	72	須恵・壺A	SK423-21 + SK424-67・A + 土器* * り4 + る26* * り・り27* * り・り25* * り	□114.8, 高2.3	南加サラ土	2.5Y6/1・良好	1/2	Ⅱ2新	底ヘラ切りナデ	内底摩耗強	SK423-10	
	SK423	73	須恵・壺A	SK423-41・45・C下層 + 土器* * り4 + る25* * り・り26* * り	□115.2, 高1.6	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/4	Ⅱ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-11
74		須恵・高坏A	SK423-160 + SK424-419 + 土器* * り5 + る26* * り	□121.7	南加通常	2.5Y6/1・良好	坏部1/4	Ⅱ2新	坏部内Dc当て	使用痕無、墨書「大ッ」	SK423-13	
75		須恵・鉢F	SK423-35・245	底10.7	南加通常	5B5/1・良好	1/6	Ⅱ2	底ヘラ先刺突、底外側面ケズリ	内底摩耗中	SK423-18	
76		須恵・小型壺	SK423-52・56・82・238 + SK424-153・164・211・212 + る25* * り・り31* * り	□114.3, 頸11.1, 胴14.4	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/4	Ⅱ	外カキ目後、3条波状文を3段		SK243-14	
77		須恵・小型壺	SK423-4・251 + る26* * り・り26* * り・り28	□12.2, 頸8.4, 胴12.8, 高10.8, 底5.2	南加砂多	5B5/1・良好	1/2	Ⅱ2	底糸切り痕	使用痕無、底面楞状痕	SK423-16	
78		須恵・小型壺	SK423上層 + SK424・D + る23・25* * り	□16.2, 頸4.4	南加サラ土	2.5Y6/1・堅緻	口縁片	Ⅱ			SK423-15	
79		須恵・壺A蓋	SK423-217 + SK424-217	□111.8, 高4.8, 鈕2.7, 鈕高2.0	南加砂多	2.5Y6/1・堅緻	1/2	Ⅱ		重焼正位	SK423-12	
80		須恵・中壺	SK423-50・290 + 土器* * り5 + る27* * り	□115.7, 頸16.2	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	胴上片	Ⅱ~Ⅳ	外He吹き、内Da当て		SK423-19	
81		土師・浅鍋B	SK423-37	□139.4, 頸37.0	窯場A2	2.5Y8/2・良	1/20	Ⅱ1	内カキ目		SK423-2	
82		土師・浅鍋B	SK423-259	□138.0, 頸34.0	窯場A3	7.5YR8/4・良	1/20	Ⅱ1	外カキ目		SK423-1	
SK424		83	須恵・坏B蓋大	SK424-183・293・305・326・327・A・D + る26* * り・り25	□117.2, 高推4.3, 鈕2.7	南加通常	5Y7/1・良好	略完	Ⅱ1	天ケズリ	重焼Ⅱa, 使用痕無	SK424-2
		84	須恵・坏B蓋大	SK424-130 + る26	□116.9, 高3.4, 鈕3.2, 鈕高1.2	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/3	Ⅱ1	天ヘラ切りナデ	重焼Ⅱa, 使用痕無	SK424-3

付表1 額見町遺跡V報告区域出土古代遺物観察表

5. 道路状遺構2出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
道路2 SD23	1	須恵・坏G蓋	SD23N-23-141・床下24・O-176・P-上層+φ19 ^フ ツ	□110.3, 高8.2, 高3.05, 紐1.3, 紐高0.8	能美サラ土	25Y7/1・良好	3/4	I 2	天ケズリ	重焼II、使用痕無、天ヘラ記号?	SD23-1
	2	須恵・坏A蓋中	SD23N-24-124-133-158-164・上層・床下F11-23-55-73-83	□135, 高11.4, 高2.8, 紐2.1, 紐高0.95	南加北群	10YR7/1・堅緻	4/5	II 2	天ケズリ	重焼I、使用痕無	SD23-2
	3	須恵・坏A蓋中	SD23N-50-112-137-175-196-199+φ19 ^フ ツ	□137, 高11.8, 高3.2, 紐2.0, 紐高1.0	南加北群	10YR7/1・堅緻	1/2	II 2	天ケズリ	重焼I、使用痕無、火ぶくれ	SD23-3
	4	須恵・坏B蓋大	SD23N-73-95-105-162-219・床下25・上層	□160, 高3.15, 紐2.95, 紐高1.1	南加砂多	10Y6/1・不良	2/3	IV 2新	天ケズリ	使用痕無	SD23-11
	5	須恵・坏B蓋中	SD23S-25	紐2.15, 紐高1.1	南加白土	25Y7/1・良	1/4	IV 2新	天ケズリ	内天磨耗中	SD23-12
	6	須恵・坏B蓋小(転用規)	SD23N-94	□108, 高2.4, 紐1.7, 紐高1.1	南加通常	25Y7/1・堅緻	2/3	IV 2新	天ヘラ切りナデ	重焼I、内天磨耗強と墨痕	SD23-13
	7	須恵・坏B蓋小	SD23L-61	□121	南加通常	10Y7/1・良好	1/3	V 1	天ケズリ	重焼II b、使用痕無	SD23-14
	8	須恵・鏡蓋大	SD23-165	□198	南加白土	25Y8/1・堅緻	2/5	V 2	天ケズリ	重焼I、使用痕無、突帯付	SD23-1
	9	須恵・坏B蓋大	SD23P-16-20-21・上層-22-26・F+も15-16	□117.1, 高4.6, 紐2.8, 紐高1.6	南加良土	N6/0・良好	1/3	V 2	天ヘラ切りナデ	重焼II a、使用痕無	SD23-4
	10	須恵・坏B蓋大	SD23-148+は19	□163	南加白土	10YR7/1・堅緻	1/8	V 2	天ヘラ切りナデ	重焼I、使用痕無	SD23-5
	11	須恵・坏B蓋中	SD23上層-42・F+も15-16	□134	南加白土	25Y8/1・堅緻	1/5	V 1	天ケズリ	重焼II a、使用痕無	SD23-6
	12	須恵・坏B身中	SD23H-10-17-18-22-23-26-29-31・F層-110-104・上層	□150, 高3.8, 台11.0, 台高0.45	南加白土	10YR6/1・良好	1/2	III	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-25
	13	須恵・坏B身中	SD23N-135	□148, 高3.35, 台11.1, 台高0.4	南加通常	10YR7/1・良好	1/3	III 新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-26
	14	須恵・坏B身大	SD23P-21-24+土器 ^フ ツ5	□150, 高6.5, 台11.9, 台高0.6	南加砂多	10YR7/1・良好	2/3	IV 2古	底ヘラ切りナデ、体部外沈線1条	使用痕無	SD23-20
	15	須恵・坏B身小	SD23P-232-237+土器 ^フ ツ5	□114, 高4.35, 台8.8, 台高0.5	南加砂多	10YR7/1・良好	4/5	IV 2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-27
	16	須恵・坏B身大	SD23Q-床下20-R-8-S-39-60・上層+P138+φ20-22 ^フ ツ+φ21 ^フ ツ+φ27 ^フ ツ	□164, 高5.7, 台9.8, 台高0.5	南加通常	25Y7/2・堅緻	2/3	V 1	底ヘラ切りナデ	内底中央磨耗弱、外底ヘラ記号「 」	SD23-24
	17	須恵・坏B身中	SD23Q-51-101-111-202-220-274・F層+土器 ^フ ツ5+φ22 ^フ ツ+φ22 ^フ ツ	□147, 高6.3, 台9.6, 台高0.65	南加通常	10YR7/1・堅緻	4/5	V 1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-21
	18	須恵・坏B身大	SD23J-7-17-19-57-66-68-69・下層-上層+φ17-18 ^フ ツ+P60	□148, 高6.1, 台9.0, 台高0.6	南加通常	25Y7/1・良好	1/2	V 2	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底面ヘラ記号?	SD23-22
	19	須恵・坏B身大	SD23H-16-49-145-146・床下5・上層・F層-135-G-1-4-11	□148, 高6.45, 台9.4, 台高0.5	南加通常	5Y7/1・良好	1/2	V 1	底ケズリ	使用痕無	SD23-23
	20	須恵・坏B身中	SD23-227・上層18	□139, 高4.7, 台8.7, 台高0.55	南加白土	25Y6/1・良好	1/2	V 2	底ヘラ切りナデ	内底磨耗弱	SD23-7
	21	須恵・坏B身中	SD23T-29+土器 ^フ ツ5+φ22 ^フ ツ+φ25 ^フ ツ	□122, 高4.5, 台8.3, 台高0.6	南加通常	10YR7/1・堅緻	1/3	V 1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-29
	22	須恵・坏B身中	SD23O-110+土器 ^フ ツ5	□117, 高4.2, 台7.2, 台高0.4	能美	25Y6/1・良	2/3	V 2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-28
	23	須恵・坏A	SD23P-40-43-1上層	□132, 高3.2	南加通常	25Y7/1・良	1/4	IV 2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-17
	24	須恵・坏A	SD23P-260-326-405	□128, 高3.8	能美	25Y8/1・良	1/2	IV 2古	底ヘラ切りナデ	内底磨耗弱	SD23-16
	25	須恵・坏A	SD23P-226+土器 ^フ ツ5	□129, 高3.5	南加通常	N5/0・良好	1/2	IV 2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-15
	26	須恵・坏A	SD23N-37-38-60-63-76・床下10・下層	□131, 高3.5	南加通常	25Y8/2・不良	2/3	V 2	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底ヘラ記号「×」	SD23-19
	27	須恵・坏A	SD23P-200-222-243-283-437+土器 ^フ ツ5+も19 ^フ ツ	□126, 高3.3	南加通常	25Y7/1・良好	3/4	V 2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-18
	28	須恵・坏A	SD23上層-24	□123, 高3.0	南加通常	10Y6/1・良好	1/3	V 2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-8
	29	須恵・盤A	SD23上層-54-56-59-61-70	□164, 高2.0	南加通常	10Y6/1・良好	2/3	V 2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-10
	30	須恵・盤A	SD23P-169-284+土器 ^フ ツ5	□160, 高2.2	南加通常	10YR7/1・堅緻	1/2	V 2	底ヘラ切りナデ	内底磨耗弱	SD23-30
	31	須恵・盤A(転用規)	SD23上層-58-62-85-C-F	□160, 高2.4	能美	5Y6/1・良好	1/4	V 2	底ヘラ切りナデ	内底墨痕と摩耗中	SD23-9
	32	須恵・盤A	SD23P-439-639-732+土器 ^フ ツ5+φ20 ^フ ツ+φ25 ^フ ツ	□156, 高1.7	南加通常	5Y6/1・良	1/2	V 2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-31
	33	須恵・盤B	SD23R-31-S-74+土器 ^フ ツ5+φ22 ^フ ツ	□204, 高3.75, 台16.4, 台高0.6	南加砂多	25Y6/1・良好	2/5	V 1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-32
	34	須恵・盤B	SD23L-66-67+φ19 ^フ ツ	□122.0, 高3.8, 台17.1, 台高0.7	南加砂多	25Y7/1・良	1/4	IV 2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-34
	35	須恵・盤B	SD23I-97+も17-φ17	□188, 高3.7, 台12.2, 台高0.45	能美	25Y6/1・良好	1/3	IV 2新	底ケズリ	内底磨耗弱	SD23-33
	36	須恵・小型鉢	SD23S-79+土器 ^フ ツ5	類8.9, 体9.4	南加砂多	25Y7/1・堅緻	2/5	IV 2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SD23-37
	37	須恵・鉢F?	SD23P-9+ま17	□120.0	南加通常	5Y6/1・良	1/10	IV 2	沈線		SD23-①
	38	須恵・鉢F	SD23P-128-140-147-148-154-361-364-366-412-414-465-467-O-95-Q-105-R-23-S-4+土器 ^フ ツ5+φ21-24 ^フ ツ+φ21-22 ^フ ツ+φ32 ^フ ツ+φ33	□152, 体17.0, 高19.3, 底12.6	南加通常	25Y7/1・良好	5/6	IV 2新	底成形台痕、体部上位沈線3条	内底磨耗強、外底もみから痕、ヘラ記号?	SD23-41
	39	須恵・小瓶A	SD23P-10・上層3-13-51	□149, 頸4.0, 胴10.8, 高10.2, 台5.9, 台高0.55	南加通常	5PB6/1・堅緻	3/4	V	胴下半ケズリ、頸シボリ痕		SD23-39
	40	須恵・小壺	SD23P-38+φ22 ^フ ツ	□172, 頸7.6, 胴11.4	南加通常	5Y7/1・堅緻	1/10	IV 2新			SD23-38
	41	須恵・壺	SD23O-152	類3.5, 胴9.7, 胴高6.5	能美	7.5YR6/4・良	胴完	I 1	底ケズリ、胴面刺突文	注口縁欠け	SD23-40
	42	須恵・瓶A	SD23上層-14-19-32-35-39-41-43-44-47-P-20-89+も15-17	類6.0, 胴17.7, 胴高11.3, 台11.0, 台高1.2	南加通常	5B6/1・堅緻	9/10	V 1	胴下半ケズリ、円盤閉塞技法		SD23-12
	43	須恵・瓶A	SD23P-201-205-223-313・床下4-Q-36-42-S-75+φ22 ^フ ツ	類4.5, 胴16.8	南加通常	10YR7/1・堅緻	1/2	V 1	円盤閉塞技法		SD23-43
	44	須恵・瓶B	SD23G-10-床下25-II-7-8-120-127-床下43-115-19-22-23-114・床下2-床下71・上層+土器 ^フ ツ5+も17 ^フ ツ+φ18 ^フ ツ	類5.7, 胴14.8, 胴高14.1, 台8.8, 台高0.7	南加通常	10YR6/1・良好	9/10	V 2	底余切り痕、円盤閉塞技法、胴下半ケズリ、頸部沈線、胴部沈線4段	外底ヘラ記号「×」	SD23-46
	45	須恵・瓶G	SD23D-90-133-206・床下F-N-14-17-18-21-28-32-35-78-98-114-156-182-217-230-床下14・床下59+土器 ^フ ツ5+土器 ^フ ツ5	□156, 頸7.0, 胴15.8, 頸高6.5	南加通常	5PB6/1・堅緻	2/3	V?	頸部積み上げ、胴下半ケズリ		SD23-54
	46	須恵・瓶G	SD23D-137-N-117-139-147・床下19-上層-P-F層+φ20 ^フ ツ	□136, 頸7.0	南加通常	5PB6/1・堅緻	1/5	V			SD23-49
	47	須恵・瓶G	SD23N-134・床下30-43-64-81+SK441+SK436+土器 ^フ ツ5-II-176-IV-8-427-548-673-699-VI-884-1068-1070-1073-1079-1092+φ22 ^フ ツ	□140, 頸9.4, 胴17.6, 高16.2	南加通常	25Y7/1・堅緻	1/2	V	底指痕痕、胴下半ケズリ		SD23-3
	48	須恵・瓶C	SD23P-423-Q-21-T-7+土器 ^フ ツ5	類11.4	南加通常	25Y7/1・堅緻	1/6	IV 2古	円盤閉塞技法		SD23-48
	49	須恵・平瓶	SD23H-68+φ31 ^フ ツ+よ29	□104, 頸5.0, 頸高6.2	南加通常	5Y6/1・堅緻	胴断片	I 2			SD23-50
	50	須恵・壺A蓋	SD23N-20-149-O-床下15	□111.2, 高4.4, 紐2.8, 紐高1.5	南加通常	25Y7/1・堅緻	2/3	V	天ケズリ	使用痕無、逆位焼	SD23-35
	51	須恵・壺F	SD23I-2-79-127-154・床下3-M-下層-O-37-I-下層-上層-65-66-194-19+SK215+φ20 ^フ ツ	□120, 頸11.3	南加通常	25Y7/1・堅緻	1/8	IV 2新	ロクロナデ		SD23-③
	52	須恵・壺F	SD23L-17-29・下層-K-58+SK255+P732+も16-17	□174, 頸15.2	南加通常	10B6/1・堅緻	1/20	V-IV 2	外カキ目		SD23-a

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
道路2 SD23	53	須恵・甕F	SD23P-8・34・54・58・146・239・258・279・287・306・350・443・床F5・12・Q5・38・47・81・92・98・117・140・154・155・163・床F2・R-27・S-床F19・T-床F13 + 土器F75 + 土器F77・み23F77・み24F77・み22・23F77・み20・22・23F77他	□17.5, 頸16.4, 胴25.4, 類高2.8, 胴高23.4, 高26.2	南加通常	25Y6/1・堅緻	1/2	V	胴内外カキ目後、外下半縦ケズリ		SD23-52
	54	須恵・甕F	SD23G-20・88・95・H-10・25・56・66・79・85・87・89・92・96・106・108・109・113・117・132・138・143・144・床F30・36・141・111・Q88 + も16~18F77 + 417	□12.8, 頸11.8, 胴17.2, 類高2.8	南加砂多	25Y7/1・良好	4/5	V	内縦ナデ		SD23-53
	55	須恵・壺I	SD23R-床F39 + SB327P4 + 砂23・25F77・上23・24・26F77・み23F77・み22・23F77他	□114.9, 頸13.0, 胴22.8, 高19.0	南加北群	5YR5/4・良	1/4	I	胴外叩き後カキ目下位ケズリ、胴内下位ナデツケ		SD23-3
	56	須恵・中甕	SD23F28	□25.0, 頸19.8, 類高4.8	南加サラ土	10YR7/1・良好	口顔片	II	胴外Ha叩き		SD23-59
	57	須恵・中甕	SD23K-12 + も20F77・み19・20F77	□23.6, 頸19.2, 類高5.4	南加南群	10YR7/1・堅緻	口顔片	I	胴外叩き後カキ目、内Da当て		SD23-60
	58	須恵・中甕	SD23O-84	□23.4, 頸20.2, 類高2.5	南加砂多	25Y7/1・良	口顔片	VI	胴外He叩き、内Da当て		SD23-58
	59	須恵・中甕	SD23Q-104・108・114・117・119・121~124・126~128・130~132・134・135・162・198・199・下層・P-6・23・248 + 土器F75他	□21.2, 頸15.5, 胴32.7, 類高6.3	南加通常	25Y7/1・良好	1/8	V2	胴外He叩き後ナデ・カキ目、内Da当て		SD23-55
	60	須恵・中甕	SD23J-下層・O-177・P-10・22・33・46・52・120・142・172・190・210・215・218・268・270・273・292~294・297・300・309・315・319・325・329・341・351・354・356・358・360・362・370・374・382・384・395・403・407・436・453・454・床F11・Q-8・9・11・24・28・30・34・40・49・52・58~60・64・77・165・173・183・203・206・237・253・291・床F30・R-111・112・床F6・21・S-62・床F46 + SK408 + SK449 + 土器F75 + 土器F77・み21・22F77・上25F77・み20F77・み30F77他	□23.4, 頸22.3, 胴47.8, 類高5.0, 高推50.7	南加サラ土	25Y6/1・良好	1/2	IV	胴外He叩き→粗カキ目→下半He叩き出し→下半縦ハケ目、胴内Da当て→下半He当て	使用痕無	SD23-6
	61	須恵・中甕	SD23D-179・K-18・P-1・18・19・28~31・62・63・102~105・107・108・121・167・186・189・203・219・220・224・230・269・304・305・311・333・337・371・375・385・438・444・床F7・Q7・144・285・床F19・R-106・121・122・S-32・77 + 土器F75 + も21F77・み20~22F77・み20~22・25・26F77	□24.8, 頸22.2, 胴44.6, 類高4.8, 胴高40.5, 高45.3	南加通常	10YR6/1・良好	4/5	IV	胴外He叩き→カキ目→下半He叩き出し→下半縦ハケ目、胴内Da当て→横ハケ目と下半斜ハケ目→下半He叩き出し	外底磨耗中	SD23-56
	62	須恵・中甕	SD23P-4・85・295・床F1・Q-162・床F23・R-10・14・47 + SB324P4 + 土器F75 + 土器F77・み22・23F77・み26F77	□19.6, 頸18.2, 胴38.4, 類高3.5	南加通常	10YR6/1・良好	1/20	IV	胴外He叩き、内Da当て		SD23-1
	63	須恵・中甕	SD23O-83・171・183・186・P-1・5・13・55~57・60・69・77・79・82・83・86~101・104・106・110~112・114・116・118・119・11?・120・121・123・124・126・134・137~140・144・145・150~153・155・156・158~160・164・168・171・176・180・185・202・235・250・263・271・277・319・338・341・348・377・394・410・411・415・416・418~420・424・425・427・440・441・460・床F9・Q-10・26・31・61・86・床F + 土器F75 + も24F77・み20~23F77	□23.0, 頸20.0, 胴40.3, 類高4.5	南加通常	5YR6/1・良	1/4	IV2	胴外He叩き→カキ目→下位Ha叩き出し、胴内Da当て		SD23-37
	64	土師・浅鉢B	SD23O-6	□143.0, 頸40.2	窯場A2	7.5YR8/5・良好	1/20	V	ロクロナデ		SD23-2
	65	土師・甕	SD23O-170 + 土器F75	底19.0	窯場A3	10YR7/4・良	底片	IV	外叩き後カキ目、内縦ハケ	内底コゲ	SD23-5
	66	土師・支脚形	SD23Q-床F24 + 土器F75 + 砂21	F6.0, F7.8, 高9.0, 孔0.8	地元B2	10YR7/4・良好	3/5	II	指ナデ	使用痕無	SD23-3
	67	土師・管状鉢	SD23F-39	7.3 × 3.5, 孔1.1	窯場A1	7.5YR7/5・良好	略完	-	指ナデ	重量83.1g	SD23-4

6. H区古代ピット出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
H区 古代 ピット	1	鉄・刀子	P3	132 × 19 × 0.6	-	-	両端欠損	-	-	両角削、重量23.6g	H13-8
	2	土師・支脚形	P161	F5.4, 高推7.6, 孔1.0	地元B1	10YR8/4・良	4/5	II	指ナデ	使用痕無、里底	P-9
	3	土師・短脚小甕B	P313	□14.8, 頸13.8, 胴15.0	窯場A2	10YR8/3・良	1/6	IV2	内外カキ目	外縦内焦げ	P-3
	4	緑釉・有台碗	P453 + 丸33	-	釉色濃緑色	7.5YR8/6・軟陶	1/3	近江中相	底糸切り後ナデ	使用痕無	P-8
	5	土師・長脚甕B	P734 + P735	□23.2, 頸20.3, 胴23.6	窯場A2	5YR6/5・良好	1/6	IV2	成彩叩き→内外ハケ目→外割下半縦ケズリ→下半He叩き出し、内割下半縦ハケ目→下半Da当て	使用痕無	P-4
	6	須恵・坏A	P830	-	龍美	2.5Y7/1・良好	底片	V	底へラ切りナデ	使用痕無、外底墨書「林？」	P-5
	7	須恵・甕A	P883	□15.0, 高3.15	龍美	2.5Y7/2・良	1/2	V1	底へラ切りナデ	使用痕不明	P-6
	8	土師・碗A	P987	底6.5	窯場B1	7.5YR8/4・良	2/5	IV1	底糸切り後ケズリ後内外ミガキ	両面赤彩	P-2
	9	須恵・坏B身 (朱墨転用鏡)	P1001 + も29・砂25・み31・め29	□16.2, 高3.5, 台10.9, 台高0.3	南加通常	N6/0・堅緻	2/5	III	底へラ切りナデ	内全体朱墨痕と底摩耗痕	P-2
	10	土師・支脚形	P1009	F5.7, F5.5, 高8.6, 孔1.0	窯場A1	5YR6/3・良好	7/8	III~IV	指ナデ	被熱赤化	P-8
	11	須恵・坏A	P1014	□12.8, 高2.9	南加通常	10Y6/1・良好	2/5	VI	底へラ切り痕	使用痕無、外底墨書「吉女？」	P-4
	12	須恵・坏A (灯明具)	P1015	□12.0, 高3.2	南加通常	7.5YR7/6・不良	2/3	IV2新	底へラ切りナデ	内外全体、裏底と油痕	P-3
	13	土師・碗F	P21 + P1038	□14.5, 高3.35	窯場A1	5YR7/5・良好	2/5	II3	底へラ切り後内外ミガキ	使用痕無、両面赤彩	P-1
	14	須恵・坏B身小	P1043 + P1044 + 砂29・み27	□12.4, 高4.7, 台7.8, 台高0.6	南加南群	5Y6/1・良好	1/2	II2	底へラ切りナデ	内底摩耗弱	P-1

付表1 額見町遺跡V報告区域出土古代遺物観察表

7. H区古代土器溜り遺構

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
H区 古代 土器 溜り 集中1	1	須恵・坏B蓋大	土器 ^ノ 75 I-113-162	□16.8	南加通常	25Y7/1・良好	1/4	Ⅱ2古	天ケズリ	重焼Ⅱb、使用痕無	H ^ノ 75-8
	2	須恵・坏B蓋大	土器 ^ノ 75 I-213-215	□16.9、高4.2、紐3.0、 紐高1.3	南加白土	75Y7/1・良好	1/3	Ⅱ2新	天ヘラ切りナデ	重焼Ⅰ、使用痕無	H ^ノ 75-10
	3	須恵・坏B身中	土器 ^ノ 75 I-78 + 624 ^ノ マ	□15.4、高4.2、台9.2、 台高0.5	南加通常	25YR6/3・良好	1/5	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	内底摩耗弱	H ^ノ 75-31
	4	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 I-255	□113.6、高4.45	南加通常	25Y8/1・不良	2/5	Ⅱ2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-46
	5	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 I-91	□113.8、高3.2	南加通常	75Y6/1・良好	1/3	Ⅱ2古	底ヘラ切りナデ	内底摩耗弱	H ^ノ 75-45
	6	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 I-207-219-294	□113.6、高3.1	南加通常	10Y5/1・良好	1/4	Ⅱ2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-56
	7	須恵・甕A蓋	土器 ^ノ 75 I-122-Ⅱ-191 + 625 ^ノ マ	□112.6、高4.3、紐3.5、 紐高1.8	南加砂多	25Y7/1・堅緻	1/2	Ⅱ2新	天ケズリ	正位焼、内天磨耗弱	H ^ノ 75-18
	8	須恵・甕A	土器 ^ノ 75 I-28-73-106-153-177 + 621	頸5.6、胴15.8	南加通常	25Y6/1・堅緻	1/3	Ⅱ	円盤閉塞技法		H ^ノ 75-16
	9	須恵・甕足円面視	土器 ^ノ 75 I + 620	脚17.0	南加通常	25Y7/1・良好	1/15	Ⅱ2		脚に十字スカシ	H ^ノ 75-20
	10	土師・長胴釜B	土器 ^ノ 75 I-195-197	□125.8、頸21.2	窪地B2	5YR7/5・良好	1/20	Ⅱ2古	内外カキ目		H ^ノ 75-7
11	鉄・柳葉形鏝	土器 ^ノ 75 I-42	6.8×3.3×0.5	-	-	-	西端欠損	-	鏝被部台開、重量11.6g	H13-29	
12	須恵・甕蓋	土器 ^ノ 75 ⅢB + 625-27 ^ノ マ	□118.6	南加白土	25Y8/1・堅緻	1/5	V1	天ケズリ	重焼Ⅰ、使用痕無	H ^ノ 75-83	
13	須恵・坏B蓋大	土器 ^ノ 75 ⅢB-824	紐2.4、紐高1.5	南加通常	10YR6/1・良好	1/4	V1	天ケズリ	重焼Ⅱa、内天磨耗弱	H ^ノ 75-9	
14	須恵・坏B蓋小	土器 ^ノ 75 ⅢB-393-787	□111.2、高2.9、紐2.2、 紐高1.1	南加通常	10YR6/2・良	1/2	Ⅱ2新	天ケズリ	重焼Ⅱ、使用痕無	H ^ノ 75-77	
15	須恵・坏B蓋小	土器 ^ノ 75 ⅢB-1044 + 622	□111.5、高2.3、紐2.1、 紐高0.8	南加通常	5Y6/1・良好	1/3	Ⅱ2新	天ヘラ切りナデ	重焼Ⅱ、使用痕無、内天ヘ ラ記号「×」	H ^ノ 75-16	
16	須恵・坏B身大	土器 ^ノ 75 ⅢB-19-83-95-345-Ⅱ-504・ 630-631-1460-ⅡC + 622 ^ノ マ	□115.0、高6.6、台10.55、 台高0.55	南加通常	25Y8/1・良好	2/3	V1	底ヘラ切りナデ	内天磨耗弱	H ^ノ 75-22	
17	須恵・坏B身大	土器 ^ノ 75 ⅢB-372-691-718-806・ 1026-ⅡC + 624 ^ノ マ	□115.2、高5.35、台9.3、 台高0.45	南加通常	10YR6/1・良好	2/5	V2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-26	
18	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 ⅢB-295-B + SD23 + 624 ^ノ マ + 622 ^ノ マ + 625	□112.0、高4.3	南加良土	75YR6/3・良好	4/5	V1	底ケズリ	使用痕無	H ^ノ 75-61	
19	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 ⅢB-577 + 625 ^ノ マ・629 ^ノ マ + 624 ^ノ マ	□114.6、高3.5	南加通常	10YR7/1・堅緻	2/5	Ⅱ2	底ヘラ切りナデ	外底磨耗中	H ^ノ 75-39	
20	須恵・甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-250-261-793-Ⅱ-288 + 622 ^ノ マ	□116.5、高2.2	南加通常	5Y7/1・良	1/5	Ⅱ2新	底ヘラ切りナデ		H ^ノ 75-64	
21	須恵・甕B	土器 ^ノ 75 ⅢB-208-452-778-828・ 1014-Ⅱ-451 + 620-21-25 ^ノ マ・626 ^ノ マ	□121.6、高4.4、台17.8、 台高0.5	南加通常	N5/0・良好	1/4	Ⅱ2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-72	
22	須恵・胸付盤B	土器 ^ノ 75 ⅢB-20-59-304-309-Ⅱ-292・ 1360-1439 + 621-23 ^ノ マ	□120.7、坏高4.25、台17.0、 台高0.6	南加砂多	N6/0・良好	1/5	Ⅱ2新	盤部底ケズリ	使用痕無	H ^ノ 75-71	
23	須恵・中甕	土器 ^ノ 75 ⅢB-890	□124.2、頸20.6、頸高4.2	南加通常	25Y8/2・不良	□1頸片	Ⅱ	外日叩き後カキ目、内D当て 後ナデ		H ^ノ 75-23	
24	須恵・中甕	土器 ^ノ 75 ⅢB-714-802-919-Ⅱ-610・ 1178 + SK425 + SK435 + SK440 + SD23 + 625 ^ノ マ・622 ^ノ マ・626 ^ノ マ	□122.5、頸21.5、頸高3.5	南加砂多	25Y6/1・良好	□1頸片	Ⅱ2	割外Ha叩き後カキ目、内Da 当て		H ^ノ 75-4	
25	土師・浅鍋B	土器 ^ノ 75 ⅢB-739	□136.6、頸35.3	窪地A2	75YR8/4・良好	1/40	V1	内外カキ目	内焦げ痕、外煤痕	H ^ノ 75-13	
26	鉄・刀子	土器 ^ノ 75 ⅢB-47	6.8×1.3×0.6	-	-	2/3	-	-	四部斜角両開、重量7.4g	H13-II-④	
27	須恵・坏B蓋大 (転用視)	土器 ^ノ 75 ⅢB-573 + SD23R93 + 622・ 23 ^ノ マ・622 ^ノ マ・624 ^ノ マ	□117.7	南加通常	N5/0・堅緻	1/3	Ⅲ	天ケズリ	重焼Ⅰ、内天磨耗強、墨痕 有	H ^ノ 75-8	
28	須恵・坏B蓋中	土器 ^ノ 75 ⅢB-308-1011-1254-1257-C + 622 ^ノ マ	□117.0、高3.0、紐2.8、 紐高0.6	南加通常	25Y6/1・堅緻	1/2	Ⅲ	天ケズリ	重焼Ⅰ、内天磨耗中	H ^ノ 75-1	
29	須恵・坏B蓋中	土器 ^ノ 75 ⅢB-1108	□116.4、高3.6、紐2.9、 紐高1.1	南加砂多	N6/0・堅緻	3/4	Ⅱ1	天ケズリ	重焼Ⅰ、使用痕無	H ^ノ 75-5	
30	須恵・坏B蓋中	土器 ^ノ 75 ⅢB-1120-1121	□117.4、高1.7、紐3.2、 紐高0.7	南加通常	10Y6/1・良	1/4	Ⅲ	天ケズリ	重焼Ⅰ、使用痕無、焼ゆが み	H ^ノ 75-7	
31	須恵・坏B蓋中	土器 ^ノ 75 ⅢB-132-746-Ⅰ-103	□116.8、高1.5、紐3.4、 紐高0.75	南加通常	10YR5/1・堅緻	1/2	Ⅲ	天ケズリ	重焼Ⅰ、使用痕無	H ^ノ 75-11	
32	須恵・坏B蓋中	土器 ^ノ 75 ⅢB-1093-1095	□115.8	南加通常	N5/0・良好	1/3	Ⅱ1	天ケズリ	重焼Ⅰ、使用痕無	H ^ノ 75-3	
33	須恵・坏B蓋中	土器 ^ノ 75 ⅢB-1121-1421	□116.4	南加通常	N6/0・良好	1/4	Ⅲ-Ⅱ1	天ヘラ切りナデ	重焼Ⅰ、使用痕無	H ^ノ 75-4	
34	須恵・坏B蓋中	土器 ^ノ 75 ⅢB-470-509-792-V-520 + SK444	□115.6、高2.1、紐2.75、 紐高0.7	南加通常	N5/0・良好	完形	Ⅱ1	天ケズリ	重焼Ⅰ、内天中央磨耗中	H ^ノ 75-1	
35	須恵・坏B蓋小	土器 ^ノ 75 ⅢB-782-783-991	□112.2、高2.5、紐2.5、 紐高0.8	南加通常	5Y6/1・良好	1/2	Ⅱ2新	天ケズリ	重焼Ⅱb、使用痕無、内天ヘ ラ記号「 」	H ^ノ 75-13	
36	須恵・坏B身中	土器 ^ノ 75 ⅢB-1090-1408 + 627 ^ノ マ	□113.8、高3.8、台10.7、 台高0.6	南加通常	5Y6/1・良好	1/3	Ⅲ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-85	
37	須恵・坏B身小	土器 ^ノ 75 ⅢB-38-Ⅱ-713-1306-1318- 1346	□111.6、高3.8、台8.8、 台高0.45	南加通常	25Y7/1・良好	3/5	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	内底中央磨耗中	H ^ノ 75-28	
38	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 ⅢB-856-883-1181	□113.0、高3.5	南加通常	25Y8/1・良	1/2	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-41	
39	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 ⅢB + 622-24 ^ノ マ	□114.6、高3.1	南加通常	75Y6/1・良好	1/5	Ⅲ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-52	
40	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 ⅢB-1048-1216	□114.0、高3.9	南加通常	10Y6/1・良好	1/3	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	内底磨耗中	H ^ノ 75-47	
41	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 ⅢB-256-D + 623 ^ノ マ	□113.0、高推3.4	南加通常	5Y6/1・良好	1/5	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-57	
42	須恵・坏A	土器 ^ノ 75 ⅢB-850	□110.8、高4.1	南加通常	5Y6/1・良好	1/4	V1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-55	
43	須恵・甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-Ⅱ-Ⅱ-898-1180 + 622・ 23 ^ノ マ	□114.3、高2.05	南加通常	25Y8/2・不良	1/5	Ⅱ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-68	
44	須恵・甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-418-636-916-1453-B + SK441 + 621 ^ノ マ	□114.8、高2.0	南加通常	5Y5/1・良好	2/5	Ⅱ2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-2	
45	須恵・甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-686-B-Ⅱ-1078-1088- 1137	□116.9、高2.1	南加通常	N5/0・良好	1/2	Ⅱ1	底ケズリ	使用痕無	H ^ノ 75-80	
46	須恵・鉢F	土器 ^ノ 75 ⅢB-4-315-341-Ⅱ-168-444・ 449-471-477-480-491-812-857-862・ 1143-1175-1176-1205 + 622-23 ^ノ マ + 624 ^ノ マ・620	□113.4、体14.4	南加砂多	N6/0・良好	4/5	Ⅱ1	口クロナデ	使用痕無	H ^ノ 75-9	
47	須恵・小型鉢	土器 ^ノ 75 ⅢB-809-C-V-509 + 622 ^ノ マ + 623 ^ノ マ	□109.9、高7.6、頸9.0、 頸10.8	南加通常	5B5/1・良好	1/3	Ⅱ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 75-8	
48	須恵・小壺F	土器 ^ノ 75 ⅢB-1116	□99.0、頸8.0、胴13.4	南加通常	10YR7/1・堅緻	3/5	Ⅱ	口クロナデ	使用痕無	H ^ノ 75-17	
49	須恵・甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-1466-Ⅱ-389	頸5.0、胴16.5、胴高12.5、 台12.1、台高1.6	南加通常	N6/0・良好	完形	Ⅱ2	円盤閉塞技法、丸底叩き	使用痕無	H ^ノ 75-11	
50	須恵・大型甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-883-B	□114.5、頸7.5、胴22.5、 台15.4、頸高18.3、 胴高13.4、高32.9、台高1.3	南加砂多	25Y7/1・良好	略完	Ⅲ	円盤閉塞技法、割外下位ケ ズリ、肩部と頸部沈線		H ^ノ 75-13	
51	須恵・大型甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-661-861-863-865- 1135-B	□114.2、頸7.4、胴23.9、 頸高17.0、高推31.8	南加砂多	25Y7/1・良好	台欠完形	Ⅲ	円盤閉塞技法、割外下位ケ ズリ、肩部と頸部沈線		H ^ノ 75-12	
52	須恵・甕A	土器 ^ノ 75 ⅢB-528-1025-1205-ⅡC + SD23 + 623 ^ノ マ・623-24 ^ノ マ	頸5.8、胴18.4	南加通常	5Y5/1・堅緻	1/5	Ⅱ1	円盤閉塞技法、頸部沈線		H ^ノ 75-44	
53	須恵・甕足付羽釜	土器 ^ノ 75 ⅢB-572-Ⅱ-659-773-915・ 961-1009-1186-V-583-780-Ⅱ-274・ 487-868 + SD23 + 622 ^ノ マ・621 ^ノ マ	□8.6、頸9.2、胴20.1、 頸高2.2、胴高13.2、 高17.8、足高12.2、 足端3.2×3.7	南加通常	10YR7/1・良好	3/4	Ⅱ1	胴中に鐫付設し、3足の 獸足(足端に刻み)貼付、割 外下位沈線、その下ケズリ調 整	無蓋器種	H ^ノ 75-61	

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号	
H区 古代 土器 溜まり 集中3	54	須恵・中壺	土器ⅡⅤⅢ-37・46・76・292・323・333・527・584・984・Ⅳ-376・541・574・576・687・726・750・761・855・866・990・1172・1292・1372・Ⅴ-341・635・Ⅵ-133・163・164・168・179・201・229・242・286・534・545・552・645・928・SB318+SK441+SK444+SD23+も22・25ⅡⅤⅡ・Ⅳ・Ⅴ22ⅡⅤⅡ・Ⅴ21・23・26ⅡⅤⅡ	□25.7, 頸20.0, 胴41.0, 高4.3	南加通常	10YR7/1・良好	1/6	Ⅲ~Ⅳ	外He叩き、内Dc当て		HⅡⅤ5-4	
	55	須恵・中壺	土器ⅡⅤⅢ-104・114・122・152・172・210・382・466・528・Ⅳ-136・138・152・154・450・452・464・472・479・489・583・1010・1152・1153・1239・1416・1442・1443・SB318+SK408+SK422+SK424+SD23+Ⅳ19・22・24ⅡⅤⅡ・Ⅴ27ⅡⅤⅡ・Ⅴ25・26ⅡⅤⅡ	□23.0, 頸20.0, 高3.5	南加通常	N4/0・良好	1/20	Ⅲ~Ⅳ	口頸叩き後ナデ、胴外Ha叩き後カキ目、内Dc当て	使用痕無	HⅡⅤ5-5	
	56	須恵・浅鍋	土器ⅡⅤⅢ-127・1033・Ⅳ-216・617	□132.8, 頸29.6	南加混和材	2.5Y8/1・堅緻	1/10	Ⅳ	ロクロナデ	土師器還元焼成	HⅡⅤ5-18	
	57	須恵・浅鍋	土器ⅡⅤⅢ-169・324・ⅣC+Ⅳ22ⅡⅤⅡ	□136.2, 頸32.2	南加混和材	2.5Y8/1・堅緻	1/20	Ⅳ	ロクロナデ	土師器還元焼成	HⅡⅤ5-19	
	58	須恵・團足円面碗	土器ⅡⅤⅢ-272・234+り33ⅡⅤⅡ・る32ⅡⅤⅡ・よ32ⅡⅤⅡ	脚13.2	南加通常	2.5Y6/2・堅緻	1/3	V		上下2段円形スカシを3方	HⅡⅤ5-3	
	59	土師・碗A	土器ⅡⅤⅢ-260・270・271・344	□114.6, 底7.4	窯場A1	5YR7/6・良好	1/2	Ⅲ	底ケズリ後内外ミガキ	両面赤彩	HⅡⅤ5-5	
	60	土師・盤A	土器ⅡⅤⅢ- 383	—	窯場A1	7.5YR8/4・良	1/5	Ⅳ	底ケズリ後内外ミガキ	両面赤彩	HⅡⅤ5-6	
	61	土師・浅鍋B	土器ⅡⅤⅢ-1259	□136.0, 頸32.8	窯場B2	7.5YR8/4・良	1/30	Ⅳ	内カキ目	使用痕不明	HⅡⅤ5-14	
	62	土師・支脚形	土器ⅡⅤⅢ-847	F8.1, 孔1.0	地元B2	5YR7/3・良	1/4	Ⅱ	指ナデ痕	被熱赤化	HⅡⅤ5-20	
	63	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢ-370・463・510・620・712・713・784	□114.8, 高3.45, 台11.6, 台高0.4	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	3/5	Ⅲ	底ケズリ	内底摩耗中	HⅡⅤ5-27	
H区 古代 土器 溜まり 集中4	64	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢ-387+Ⅳ20ⅡⅤⅡ	□113.8, 高3.85, 台9.8, 台高0.5	南加通常	2.5Y6/1・良好	3/4	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	内底摩耗弱	HⅡⅤ5-25	
	65	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢ-842+土器ⅡⅤⅣ4・121+Ⅳ25・26ⅡⅤⅡ・ら24・25ⅡⅤⅡ	□114.6, 高4.8, 台10.0, 台高0.4	南加通常	5Y6/1・良好	1/4	Ⅲ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-84	
	66	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢ-40・154・171	□113.3, 高4.2, 台9.8, 台高0.4	南加通常	5G5/1・良好	4/5	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	内底摩耗弱	HⅡⅤ5-29	
	67	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢ-405・863・864・Ⅵ-143・258・1020	□113.7, 高4.4, 台9.8, 台高0.4	南加通常	7.5Y7/1・良好	1/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	内面磨耗	HⅡⅤ5-23	
	68	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢ-455・Ⅴ-787・788・790・793	□114.1, 高3.65	南加通常	2.5Y8/2・不良	1/3	Ⅲ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-44	
	69	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢ-653・654	□113.2, 高3.4	南加通常	5Y7/1・良	1/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-42	
	70	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢ-120~122	□112.7, 高3.5	南加通常	10Y7/1・良	1/5	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	内底摩耗中	HⅡⅤ5-49	
	71	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢ-73・160・170・200・876	□113.3, 高3.4	南加通常	10Y7/1・良	2/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-60	
	72	須恵・盤A	土器ⅡⅤⅢ-60・114	□115.8, 高2.9	南加通常	10Y6/1・良好	1/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-66	
	73	須恵・盤A	土器ⅡⅤⅢ-436	□115.4, 高2.45	南加通常	7.5Y6/1・良好	1/4	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-70	
	74	須恵・鉢身	土器ⅡⅤⅢ-804	□113.8	南加通常	N5/0・堅緻	1/10	Ⅲ	体沈線2条×2段	使用痕無	HⅡⅤ5-73	
	75	須恵・鉢F	土器ⅡⅤⅢ-597・598	□119.6	南加通常	5YR5/2・良好	1/6	Ⅱ	内下位縦ハケ目	使用痕無	HⅡⅤ5-10	
	76	須恵・小壺F	土器ⅡⅤⅢ-352	□17.3, 高7.95, 頸6.5, 胴10.3, 底7.8	南加通常	2.5Y6/1・良好	完形	Ⅳ	底ヘラ切り	使用痕無、胴中位円孔	HⅡⅤ5-5	
	77	須恵・小壺F	土器ⅡⅤⅢ-101・105・880・ⅥAB+Ⅳ18・19ⅡⅤⅡ・Ⅳ19・20ⅡⅤⅡ	□17.3, 頸7.3, 高7.0, 胴10.3	南加通常	10YR6/1・堅緻	9/10	Ⅳ	底ケズリ	使用痕無、外底ヘラ記号「卍」	HⅡⅤ5-6	
	78	須恵・瓶A	土器ⅡⅤⅢ-641・Ⅴ-75・108・109・112・Ⅵ-12・13・15・21・450・A+6.21・Ⅳ20	頸6.8, 胴20.0	南加白土	10YR7/1・良好	1/3	Ⅳ	円蓋摺擦技法		HⅡⅤ5-14	
	79	須恵・瓶C	土器ⅡⅤⅢ-294・Ⅵ-823・1144+SD23+6.22・Ⅳ18	頸9.6, 胴20.7	未定?	2.5Y6/1・良好	1/4	Ⅲ~Ⅳ	胴上位・中位沈線各2条、胴下位ケズリ		HⅡⅤ5-47	
	80	須恵・横瓶	土器ⅡⅤⅢ-703・Ⅴ-471・490+SK387+SK409+土器ⅡⅤⅣ4・218+も20・23ⅡⅤⅡ・Ⅳ19・24ⅡⅤⅡ・Ⅳ23・25ⅡⅤⅡ・Ⅳ24ⅡⅤⅡ・ら16ⅡⅤⅡ・る29ⅡⅤⅡ	□111.8, 頸10.0, 高22.4	南加通常	2.5Y6/1・良好	1/20	Ⅳ	胴外He叩き後カキ目、内Da当て後ナデ		HⅡⅤ5-23	
	H区 古代 土器 溜まり 集中5	81	土師・支脚形	土器ⅡⅤⅢ-223・326	上7.4, 下8.4, 高7.7, 孔1.6	地元B2	5YR7/4・不良	2/5	Ⅱ	指ナデ痕	被熱赤化	HⅡⅤ5-19
		82	須恵・鉢蓋大	土器ⅡⅤⅢ-805・880・1169+Ⅴ-25+SD23	□20.7, 高4.0, 径3.0, 底高1.6	南加通常	2.5Y6/1・良好	2/5	Ⅳ	天ケズリ、天2条沈線	重焼1、使用痕無	HⅡⅤ5-6
		83	須恵・坏B蓋大(転用碗)	土器ⅡⅤⅢ-327+SD231下層+Ⅳ22・27・28ⅡⅤⅡ	□116.0	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	1/3	Ⅳ	天ケズリ	重焼1、内天磨耗強、墨痕	HⅡⅤ5-9
		84	須恵・坏B蓋小	土器ⅡⅤⅢ-549	□114.2, 高2.8, 径2.2, 底高0.9	南加通常	5Y6/1・良好	1/5	Ⅳ	天ケズリ	重焼1、使用痕無	HⅡⅤ5-15
		85	須恵・坏B蓋小	土器ⅡⅤⅢ-72・73・75	□111.9, 高2.7, 径2.1, 底高1.2	南加通常	10YR6/1・堅緻	1/2	Ⅴ	天ケズリ	重焼1、使用痕無	HⅡⅤ5-12
		86	須恵・坏B身大	土器ⅡⅤⅢⅣA・Ⅴ-17・847・881・Ⅵ-495・518・650・976+Ⅳ24ⅡⅤⅡ	□117.2, 高7.05, 台12.3, 台高0.65	南加通常	10YR7/1・堅緻	2/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-20
		87	須恵・坏B身大	土器ⅡⅤⅢⅣ-494・495・1263・Ⅵ-267・297+ら22ⅡⅤⅡ・Ⅳ23ⅡⅤⅡ・よ23・24ⅡⅤⅡ	□116.0, 高6.4, 台11.4, 台高0.5	南加通常	2.5Y7/1・良好	2/5	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-19
		88	須恵・坏B身大	土器ⅡⅤⅢⅤ-153・873・Ⅵ-116・727+も20ⅡⅤⅡ	□116.6, 高6.7, 台10.6, 台高0.4	南加通常	5Y7/1・良好	2/5	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-21
		89	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢⅥ-368・369・839	□113.5, 高3.7, 台10.9, 台高0.4	南加砂多	10Y7/1・良	2/5	Ⅲ	底ケズリ	使用痕無	HⅡⅤ5-32
		90	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢⅥ-331~333・335	□113.4, 高4.1, 台9.6, 台高0.6	南加通常	2.5Y7/1・良好	2/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	内底中央摩耗弱	HⅡⅤ5-24
		91	須恵・坏B身中	土器ⅡⅤⅢⅥ-22・44・46	□112.3, 高4.25, 台8.2, 台高0.4	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	1/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-33
		92	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-931	□113.6, 高3.8	南加通常	5Y7/1・不良	1/5	Ⅳ	底ヘラ切りナデ		HⅡⅤ5-54
93		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-1007~1010・1109	□113.2, 高3.8	南加通常	2.5Y8/2・不良	3/4	Ⅳ	底ヘラ切りナデ		HⅡⅤ5-36	
94		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-1100・1134・1135・1138	□113.0, 高3.5	南加砂多	2.5Y6/1・良好	1/2	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-37	
95		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-334・340・804	□113.6, 高3.6	南加通常	7.5Y7/1・良	1/4	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-53	
96		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-48~50・52・53	□112.8, 高3.3	南加通常	2.5Y7/1・良	1/2	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-38	
97		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-843~846・860~863	□113.3, 高3.4	南加通常	10Y7/1・良	4/5	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-34	
98		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-629・Ⅵ-441・442・448・944	□113.0, 高3.4	南加通常	5Y7/1・良	2/5	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	内底中央摩耗弱、外底ヘラ記号「 」	HⅡⅤ5-48	
99		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-735・841・1064・C+ら24ⅡⅤⅡ	□113.4, 高3.1	能美	5Y6/1・良好	2/3	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	内底摩耗中	HⅡⅤ5-78	
100		須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥ-637・652・749・1020	□112.4, 高3.0	南加通常	2.5Y7/1・良好	3/4	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	内底摩耗弱	HⅡⅤ5-35	
101	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣA・Ⅴ+Ⅳ19・20ⅡⅤⅡ・Ⅳ19ⅡⅤⅡ	□111.6, 高3.5	南加通常	2.5Y8/1・良好	4/5	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-62		
102	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-Ⅵ-181・226・577	□112.5, 高4.0	南加通常	10Y6/1・良好	2/5	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-43		
103	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-503・570・643・853	□112.5, 高3.85	南加通常	10Y7/1・良	2/3	Ⅳ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-40		
104	須恵・坏A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-167・223・225・561・564	□112.7, 高3.3	南加良土	10Y6/1・良好	1/3	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	内底摩耗弱	HⅡⅤ5-50		
105	須恵・盤A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-145・C+も23ⅡⅤⅡ+よ21	□117.3, 高1.9	能美	7.5Y7/1・良	1/6	Ⅳ	底ケズリ	使用痕無	HⅡⅤ5-69		
106	須恵・盤A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-465・512・951+SK444	□116.0, 高2.75	南加通常	10Y6/1・良好	1/5	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-3		
107	須恵・盤A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-45・718・840・851・F	□116.7, 高2.35	南加通常	10Y7/1・良好	1/4	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-67		
108	須恵・盤A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-11	□115.8, 高2.65	南加通常	5Y7/1・良	1/8	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-79		
109	須恵・盤A	土器ⅡⅤⅢⅥⅣ-172・987	□115.3, 高1.85	南加通常	5Y6/1・良好	1/5	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HⅡⅤ5-65		

付表1 額見町遺跡V報告区域出土古代遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
H区 古代 土器 溜まり 集中5	110	須恵・小型鉢	土器 ^ノ 795VI-9-64-65	底72	南加通常	25Y6/1-堅緻	7/8	IV2	底ヘラ切り痕	使用痕無	H ^ノ 795-2
	111	須恵・小型鉢	土器 ^ノ 795VI-688	1111.3, 高4.7, 底8.5	南加通常	10YR7/1-良好	9/10	IV2	底石系切り痕	使用痕無	H ^ノ 795-1
	112	須恵・鉢F	土器 ^ノ 795III-557-567-636-989-IV-572-VI-138-194-195-529-857-1058+ + ^ノ 222 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 222 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 22-28・ ^ノ 21	1190, 体196	南加砂多	25Y6/1-良好	4/5	V1	外カキ目後下位履ハケ、体下位沈線	使用痕無、体外ヘラ記号?	H ^ノ 795-4
	113	須恵・飯A	土器 ^ノ 795VI-1037-1096	胴8.8, 胴19.4	未定?	25Y7/1-良好	1/5	II-IV	内盤指捺技法、頸部、胴上位各2条		H ^ノ 795-15
	114	須恵・壺A	土器 ^ノ 795V-2-VI-97-120-154-458-459-464-466-473-480-485-491-633-654-655-827-946-968+SK435+SK444+SD23+ ^ノ 24 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 20 ^ノ 7 ^ノ	118.5, 胴9.0, 胴19.4, 胴高1.6, 胴高14.8, 高16.4	南加通常	10YR7/1-良好	3/4	V	底系切り痕、胴下半ケズリ、胴上位沈線		H ^ノ 795-5
	115	須恵・壺A	土器 ^ノ 795IV-439-VI-247-350-386-392-393-403-409-415-686-741+SD23+ ^ノ 19 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 21 ^ノ 7 ^ノ	118.1, 胴9.3, 胴18.1, 胴高1.6	南加通常	25Y7/1-良好	3/4	IV2	胴下半ケズリ、胴内下位叩き出し後ナアツケ	有蓋痕跡	H ^ノ 795-51
	116	須恵・中壺	土器 ^ノ 795III-50-62-113-191-270-284-297-307-378-1059-IV-372-389-419-421-498-539-556-586-588-606-631-695-709-729-741-903-957-1121-1126-1157-1194-V-768-VI-113-150-236-285-371-373-374-402-404-405-408-411-413-415-417-423-424-427-432-737-903+SK408+SK424+SK436+SD23+ ^ノ 20-22 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 19-23 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 21-25 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 22-27 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 23 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 30 ^ノ 7 ^ノ	1122.8, 胴21.6, 胴50.5, 胴高4.4, 高推45.0	南加通常	25Y6/1-良好	1/8	IV2	胴外Ha叩き→カキ目→胴下半Ha叩き出し、胴内Dc当て→胴下半Ha当て、口胴外H叩き→ナデ→波状文		H ^ノ 795-7
	117	須恵・中壺	土器 ^ノ 795III-49-167-IV-92-1067-VI-614-VI-70-132-292-314-319-367-514-571-591-593-604-611-681-682-694-697-712-715-726-758-776-793-794-798-802-816-817-819-821-835-878-1004-1006-1012-1062-1118+SB310+SB330+SK422+SK424+SK426+SD23+SD62+土器 ^ノ 794+ ^ノ 23 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 20-23-26 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 19-20-22-26-28 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 23-25-26 ^ノ 7 ^ノ ・ ^ノ 31 ^ノ 7 ^ノ	1121.4, 胴19.4, 胴43.8, 胴高3.6	南加砂多	N5.0-良好	1/3	III-IV1	胴外Ha叩き→粗カキ目→胴下半Ha叩き出し、胴内Dc当て→胴下半Dc当て		H ^ノ 795-6
	118	須恵・中壺	土器 ^ノ 795III-183-VI-598-601	1122.2, 胴20.4, 胴高3.1	南加良土	N4.0-堅緻	口顔片	II-III	胴外Ha叩き後カキ目、内Da当て後ナデ		H ^ノ 795-22
	119	須恵・大壺	土器 ^ノ 795VI-109-110+ ^ノ 24 ^ノ 7 ^ノ	1155.4, 胴47.0, 胴高9.3	南加通常	25Y6/1-良好	口顔片	IV	胴部つなぎ粘土痕		H ^ノ 795-30
	120	須恵・坏日身	121	1199, 受12.2, 立高1.6	南加通常	25Y6/1-不良	1/10	古墳4-1新	口縁端内傾段形成	重焼正位	H ^ノ 795-3
121	須恵・坏日身	121	1127, 受15.0, 立高1.7	南加砂多	25Y7/1-堅緻	1/6	古墳4-1新	底ケズリ	重焼正位、使用痕無	H ^ノ 795-2	
122	須恵・坏日身	122	1192, 受11.6, 立高0.6, 高3.9	能美砂多	N6.0-良好	3/4	12	底ヘラ切りナデ	重焼正位、使用痕無	H ^ノ 795-19	
123	須恵・瓶蓋?	土器 ^ノ 794	1194, 高6.6	南加良土	25Y7/1-良	継欠	?	様状口クロヒタ	重焼正位	H ^ノ 795-1	
124	須恵・坏G蓋中	124	1117, 高1.4	南加北群	25Y6/1-堅緻	1/3	II1	天ケズリ	重焼1、使用痕無	H ^ノ 795-12	
125	須恵・坏B蓋中	125	1160, 高2.7, 継2.9, 継高0.7	南加通常	10YR5/1-堅緻	2/5	II3	天ケズリ	重焼1、使用痕無	H ^ノ 795-5	
126	須恵・坏B蓋中	126	1138, 高2.65, 継1.7, 継高1.0	南加通常	10YR5/1-堅緻	1/2	IV1	天ケズリ	重焼1、使用痕無	H ^ノ 795-4	
127	須恵・坏B蓋小	127	1122, 高2.1, 継2.4, 継高0.9	南加通常	5Y5/1-堅緻	1/2	IV2	天ヘラ切りナデ	重焼II b、内天磨耗前	H ^ノ 795-7	
128	須恵・坏B蓋小	128	1114	南加通常	10YR5/1-堅緻	1/3	IV1	天ケズリ	重焼1、使用痕無	H ^ノ 795-1	
129	須恵・鉢蓋大	129	1189	南加通常	10YR7/1-堅緻	1/3	V	天ケズリ	重焼1、使用痕無、焼ゆがみ	H ^ノ 795-7	
130	須恵・坏B蓋大	130	1172, 高4.3, 継2.7, 継高1.65	南加通常	10YR7/3-良	1/5	V1	天ヘラ切りナデ	重焼II a, 使用痕無	H ^ノ 795-6	
131	須恵・坏B蓋大	131	1158	南加通常	25Y6/1-良好	1/3	V2	天ヘラ切りナデ	重焼II a、内天中央磨耗中	H ^ノ 795-2	
132	須恵・坏B蓋中(転用)	132	1123	能美良土	5Y6/1-良好	1/3	V1	天ケズリ	内天中央磨耗強、墨痕	H ^ノ 795-3	
133	須恵・坏B蓋小	133	1129, 高2.7, 継2.2, 継高1.2	南加通常	10YR7/1-堅緻	1/3	IV2古	天ヘラ切りナデ	重焼1、内天中央磨耗中	H ^ノ 795-9	
134	須恵・坏B蓋小(転用)	134	1124, 高3.1, 継2.2, 継高1.2	南加通常	N6.0-良好	1/3	IV2古	天ケズリ	重焼1、内天中央磨耗強、墨痕	H ^ノ 795-10	
135	須恵・坏B蓋小(転用)	135	1128, 高2.5, 継2.3, 継高0.9	南加通常	5Y5/1-良好	2/5	V1	天ヘラ切りナデ	重焼1、内天磨耗強、朱墨痕有	H ^ノ 795-11	
136	須恵・坏B身中	136	1146, 高3.9, 台10.6, 台高0.4	南加通常	5Y5/1-良好	1/2	III	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-35	
137	須恵・坏B身中	137	1150, 高3.7, 台11.4, 台高0.5	南加通常	25Y6/1-良好	1/5	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-9	
138	須恵・坏B身中	138	1145, 高3.7, 台10.6, 台高0.4	南加通常	25Y6/1-良好	1/3	III	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-32	
139	須恵・坏B身中	139	1146, 高4.2, 台11.2, 台高0.7	南加通常	10YR5/1-良好	1/4	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-31	
140	須恵・坏B身中	140	1139, 高3.8, 台11.4, 台高0.35	南加通常	25Y8/1-良	1/8	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-4	
141	須恵・坏B身中	141	1132, 高4.0, 台9.7, 台高0.45	南加通常	10Y6/1-良好	1/4	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-29	
142	須恵・坏B身中	142	1133, 高3.7, 台9.1, 台高0.55	南加通常	25Y6/1-堅緻	1/5	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-30	
143	須恵・坏B身中	143	1122, 高3.8, 台8.8, 台高0.4	南加通常	25Y6/1-堅緻	2/3	IV2古	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-2	
144	須恵・坏B身中	144	1120, 高3.95, 台8.4, 台高0.35	南加砂多	10YR6/1-堅緻	1/3	IV2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-3	
145	須恵・坏B身小	145	1107, 高4.0, 台高0.5	南加通常	N6.0-良好	1/3	IV2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-5	
146	須恵・坏B身小	146	1103, 高4.8, 台7.4, 台高0.45	能美白土	10YR8/1-良好	1/2	V1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-4	
147	須恵・坏B身小	147	1198, 高3.9, 台7.0, 台高0.55	南加通常	7.5YR5/1-良	2/5	V1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-27	
148	須恵・坏A	148	1133, 高3.3	南加通常	5YR6/6-不良	2/5	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底ヘラ記号	H ^ノ 795-17	
149	須恵・坏A	149	1141, 高3.2	南加通常	10YR7/2-不良	3/4	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-13	
150	須恵・坏A	150	1136, 高3.6	南加通常	25Y7/2-良	2/5	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-11	
151	須恵・坏A	151	1131, 高3.65	南加通常	5Y7/1-良	2/5	IV1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-50	
152	須恵・坏A	152	1134, 高3.2	能美	5Y7/1-良好	2/3	IV2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底ヘラ記号「J」	H ^ノ 795-34	
153	須恵・坏A	153	1123, 高3.1	南加通常	25Y6/1-良好	1/5	IV2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-7	
154	須恵・坏A	154	1134, 高3.3	南加通常	10YR8/4-不良	3/4	IV2新	底ヘラ切りナデ	使用痕無	H ^ノ 795-16	

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
H区 古代土器 遺まり 集中 単位 以外	155	須恵・坏A	上29	□112.8,高3.7	南加通常	2.5Y8・2・不良	1/3	Ⅱ2新	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-18
	156	須恵・坏A	ぬ24F 71	□113.2,高3.05	南加通常	N5・0・良好	1/4	V1	底へラ切りナデ	内底摩耗弱	H97-12
	157	須恵・坏A	ぬ24F 71	□114.5,高3.6	南加通常	N6・0・良好	1/3	V1	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-15
	158	須恵・坏A	土器F 714 + ヤ27F 71・ぬ27	□112.3,高3.65	南加通常	10YR7/1・堅緻	2/3	V2	底へラ切りナデ	使用痕無、外底へラ記号「×」	H97-14
	159	須恵・坏A	ぬ21	□112.6,高3.3	能美	7.5Y6/1・良好	1/4	V2	底へラ切りナデ	外底へラ記号「×」	H97-10
	160	須恵・坏A	ゆ28F 71	□112.6,高3.0	南加通常	5Y6/1・良好	3/4	Ⅱ2	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-41
	161	須恵・坏A	ヤ23F 71	□13.0,高2.9	南加通常	2.5Y8/1・不良	1/3	Ⅱ2	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-14
	162	須恵・盤A	り29F 71・よ33F 71・ゆ22F 71	□14.8,高1.9	南加通常	5Y7/1・良	1/5	Ⅱ1	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-55
	163	須恵・盤A	ヤ23・25F 71・ゆ23・24F 71	□16.5,高2.15	能美砂多	5PB6/1・良	1/4	Ⅱ2新	底へラ切りナデ	内底摩耗弱	H97-54
	164	須恵・盤A	土器F 714 + ヤ26F 71・ぬ22F 71	□117.0,高3.1	能美	10YR7/2・良好	4/5	Ⅱ2新	底へラ切りナデ	内底中央摩耗弱	H97-11
	165	須恵・盤A	土器F 714 + も26F 71	□16.7,高2.0	南加通常	5Y6/1・良好	1/2	V1	底へラ切りナデ	内底中央摩耗中	H97-10
	166	須恵・盤A	も20F 71・ぬ22F 71	□17.0,高2.5	南加通常	10YR7/1・堅緻	1/3	V1	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-24
	167	須恵・盤A	ヤ19F 71 + 土器F 715	□15.0,高2.2	南加通常	5Y6/1・良好	1/3	V1	底へラ切りナデ	内底摩耗弱、外底へラ記号「1」	H97-81
	168	須恵・盤A	ぬ23F 71	□116.0,高2.0	能美	10Y6/1・良好	1/3	V1	底へラ切りナデ	内外底磨耗中	H97-22
	169	須恵・盤A	ゆ27・ヤ27F 71	□116.8,高2.0	南加通常	2.5Y8/2・不良	1/4	V1	底へラ切りナデ	使用痕不明	H97-51
	170	須恵・盤A	ゆ27F 71	□15.0,高1.9	南加通常	2.5Y8/2・不良	1/8	V1	底へラ切りナデ	使用痕不明	H97-52
	171	須恵・盤A	ゆ28F 71	□14.8,高1.8	南加通常	N5・0・良好	1/8	V2	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-53
	172	須恵・盤A	上22	□14.8,高2.3	南加通常	5Y6/1・良好	1/3	Ⅱ2	底へラ切りナデ	使用痕無	H97-12
	173	須恵・盤B	土器F 714	□19.0,高3.6,台14.6,台高0.5	南加通常	2.5Y6/1・良好	1/3	Ⅱ2新	底ケズリ	使用痕無	H97-9
	174	須恵・高环G小	よ23F 71・ら22	脚8.9,脚高4.5,基3.2	南加北群	5Y7/1・不良	脚片	Ⅱ2	シボ有		H97-22
	175	須恵・高环G	も23・24F 71・ら24F 71	□16.6,坏高3.2	南加通常	2.5Y7/2・良	1/6	Ⅱ3	坏下位ケズリ	倒立焼、使用痕無	H97-8
176	須恵・小甕鉢	ゆ27F 71	□11.1,頸9.6,胴10.2,高4.6,底7.0	南加良土	5PB5/1・堅緻	1/6	Ⅲ～Ⅳ1	底へラ切りナデ		H97-1	
177	須恵・小甕鉢	も26F 71	□11.1,頸10.4,胴11.0	南加通常	5Y6/1・堅緻	1/3	Ⅲ～Ⅳ1			H97-2	
178	須恵・小甕鉢	も19F 71	□11.8,頸10.0,胴10.0	南加通常	5Y6/1・堅緻	1/5	Ⅲ～Ⅳ1			H97-7	
179	須恵・小甕鉢	ヤ23F 71・ゆ23F 71	□10.0,頸9.0,胴9.2	南加通常	N6・0・堅緻	1/8	Ⅲ～Ⅳ1			H97-6	
180	須恵・小甕鉢	も25F 71・ヤ25F 71	□9.3,頸8.0,胴9.2,高4.9,底6.1	南加通常	5Y6/1・堅緻	2/5	Ⅲ～Ⅳ1	底へラ切り痕		H97-3	
181	須恵・小甕鉢	も19F 71	□18.9,頸7.8,胴7.8	南加通常	N5・0・良好	1/5	Ⅲ～Ⅳ1			H97-5	
182	須恵・小甕鉢	ら24・25F 71・り24F 71	口推8.4,頸7.0,胴7.0,高推2.9,底6.2	南加通常	N6・0・堅緻	2/5	Ⅲ～Ⅳ1	底へラ切り痕		H97-4	
183	須恵・鉢(鏡)	ぬ25	□10.1	南加南群	N6・0・堅緻	口縁片	Ⅰ	外カキ目、沈線2条		H97-14	
184	須恵・鉢F	ゆ25F 71・ヤ29・よ28	□16.2	南加南群	10YR7/1・堅緻	1/6	Ⅰ～Ⅱ1	沈線区内南側点文	使用痕不明	H97-23	
185	須恵・鉢F	ゆ28F 71・よ27F 71・み31・む30・ら27 + SB243 + SB245 + SK409 + SD38	□19.6	南加砂多	2.5Y7/1・良好	2/5	Ⅱ3～Ⅲ	体2条沈線×2段	内底摩耗	H97-2	
186	須恵・鉢F	ら29F 71・ら30・33F 71	□17.0	南加サラ土	N5・0・堅緻	1/3	Ⅲ～Ⅳ1	外カキ目	使用痕無	H97-21	
187	須恵・鉢F	り31・32F 71・ゆ28F 71 + SD43	□17.6,体18.9	南加良土	2.5Y6/1・良好	1/3	V	外体カキ目、2条沈線	使用痕無	H97-3	
188	須恵・鉢F	土器F 714 + も26F 71 + ヤ26・27F 71・ゆ26・28・29F 71	底107	能美サラ土	2.5Y7/1・良好	1/3	V	外体カキ目、2条沈線、底糸切り痕	内底摩耗強	H97-6	
189	須恵・鉢B	も24・26F 71・ゆ24・25F 71・よ24・25F 71・ら25F 71・土器F 714 + SK422 + SK423 + SK424	□127.6,頸25.0,胴30.2	南加サラ土	5Y6/1・良	1/8	Ⅱ	外体下位ケズリ、内底指ナデ痕		H97-17	
190	須恵・甕	も19F 71・ヤ18・19F 71	頸3.6,胴9.8	能美	N5・0・良好	1/5	Ⅰ	外脚下半ケズリ、胴中位沈線区内南側点文	胴中位1.5cmの凹孔	H97-16	
191	須恵・甕?	ぬ22F 71	台7.6,台高3.2	南加サラ土	5Y6/1・堅緻	台片	Ⅰ～Ⅱ?	スカシ有	甕の台脚部の可能性有	H97-15	
192	須恵・小甕鉢E	ら27F 71	□15.3,頸4.2,胴10.2,高11.2,底7.2	南加通常	5Y6/1・良好	完形	Ⅱ	底糸切り痕		H97-14	
193	須恵・甕A	も19F 71・ヤ27F 71・ら23F 71 + 土器F 714 + 土器F 715 + SD23	頸5.7,胴17.6	南加砂多	2.5Y5/1・堅緻	1/3	Ⅱ2～Ⅲ	円盤磨擦技法、外胴上位2条沈線、下位ケズリ		H97-42	
194	須恵・甕C	ぬ17・も15・ヤ19・り25F 71 + SD23他	頸10.1,胴20.8	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	1/5	Ⅱ3～Ⅲ	円盤磨擦技法、頸部沈線		H97-①	
195	須恵・四耳甕	ら30F 71 + SK272	胴19.0	南加通常	2.5Y7/1・良好	胴片	Ⅱ2	肩部南側斜切突文、上部縦穿孔把手を4方貼付		H97-①	
196	須恵・甕F	も23・24F 71・ヤ24・25F 71・ゆ24・25F 71・よ27F 71・ら22・24F 71 + 土器F 714 + SB200 + SB318 + SK210 + SK422	□116.6,頸13.4,胴21.7	南加通常	2.5Y5/1・堅緻	1/10	Ⅲ～Ⅳ	胴下位Ha叩き後ナデ		H97-3	
197	須恵・鉢F	ら29F 71	□17.4,頸15.5,頸高2.9	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	胴上片	Ⅱ			H97-25	
198	須恵・大甕	ヤ19・25・26F 71・ゆ23・24・26・27F 71・よ24・26F 71・ら24・26・29F 71・り26・29F 71・ら29F 71 + 土器F 715	□41.0,頸33.0,頸高10.0	南加通常	2.5Y6/1・堅緻	胴上片	Ⅱ3	胴外H叩き後カキ目、内Db当て、口頸沈線区画波状文2段		H97-7	
199	須恵・大甕	土器F 714・108・388 + も26F 71・り30F 71・ら29F 71 + SK422 + SK387他	□43.6,頸30.2,頸高9.5	南加南群	2.5Y7/1・堅緻	口頸片	Ⅱ3	口頸外H叩き、内D当て、胴内に工具のキズ		H97-8	
200	須恵・大甕	け21・30F 71・も24・26F 71・ヤ25・27・28F 71・ゆ24・26・27F 71・よ24・26・27・30・32F 71・ら24・26F 71・り25・27F 71・ら33F 71 + SB308 + SB318 + SK387 + SK403 + SK420 + SE01他	□32.5,頸27.6,頸高6.2	南加通常	N6・0・良好	胴上片	Ⅱ2	胴外Ha叩き後カキ目、内Da当て		H97-1	
201	須恵・中甕	ゆ24F 71・よ32F 71・ら29・33F 71・り31・ら33F 71・ら31・33F 71 + SB304 + SE03 + SK387他	頸13.3,胴28.7,胴高32.4	南加通常	2.5Y6/1・良好	2/3	Ⅱ2	胴外Ha叩き後下位He叩き、内SD当て後下位He当て、底面叩きはなし	外底磨耗中	H97-2	
202	須恵・團足内面視	も26F 71・ヤ18	堤121	南加通常	2.5Y7/1・堅緻	1/10	Ⅱ～Ⅲ	脚に十字スカシ	底面磨耗強、墨痕	H97-10	
203	須恵・團足内面視	ヤ28F 71	内堤7.2,外堤11.6	南加通常	2.5Y7/1・良好	1/15	Ⅱ～Ⅲ	方形スカシ	倒立焼、使用痕不明	H97-21	
204	須恵・團足内面視	ゆ27F 71	脚16.0	南加通常	5Y5/1・良好	脚片	Ⅱ～Ⅲ	楕円形スカシ4方?		H97-10	
205	須恵・團足内面視	も25F 71	脚9.8	南加南群	2.5Y7/1・堅緻	脚片	—	小円孔スカシ12方?		H97-28	
206	須恵・坏B身(転用)	よ26F 71・ゆ27・ら29F 71・ら26F 71	台10.9,台高0.4	南加通常	2.5Y5/1・良好	底片	Ⅱ1	底へラ切りナデ	外底磨耗強	H97-37	
207	須恵・坏B身(転用)	よ26F 71	台9.0,台高0.4	南加通常	2.5Y5/1・良好	底片	Ⅱ1	底へラ切りナデ	外底磨耗強	H97-38	
208	須恵・馬形	ゆ26	—	南加通常	5Y5/1・良好	胴1/2	Ⅱ?	指ナデ	胴中央空洞	H97-8	
209	土師・小形坏A(灯明具)	ヤ27F 71	□10.2,高3.0	窯場A1	10YR8/4・良	1/3	V1	底へラ切り	口内外油痕	H97-1	
210	土師・長脚釜B	り25F 71	□23.0,頸19.2	窯場A2	7.5YR7/5・良好	1/10	Ⅱ	内外カキ目	使用痕無	H97-1	
211	土師・短脚小釜B	ヤ26	□14.8,頸14.0,胴15.1	窯場A2	5YR6/5・良	1/5	Ⅲ～Ⅳ1	外下半ケズリ、内下半指ナデ	内口縁焦げ痕	H97-3	
212	土師・短脚小釜B	も20F 71	□12.8,頸11.9,胴13.3	窯場A2	7.5YR6/4・良	1/6	Ⅲ～Ⅳ1	内外カキ目	内口縁焦げ	H97-①	
213	土師・浅鍋B	も23F 71	□42.6,頸37.5	窯場A3	7.5YR8/4・良	1/20	Ⅱ	外割落	使用痕不明	H97-1	
214	土師・浅鍋B	ゆ19F 71	□39.0,頸35.2,胴35.6	窯場A3	7.5YR7/5・不良	1/20	Ⅱ	内カキ目	外底、内ゴブレ	H97-1	
215	土師・甕形	a:よ24・26・27F 71 + S3130 + 土器F 715, b:SK424	—	窯場A1	10YR8/4・良好	底片	Ⅱ	内外粗ハケ	内薄葉、a・b同一個体	H97-3	
216	土師・甕形?	よ26F 71・ら26F 71・り30F 71・ら29F 71	—	窯場A3	5YR6/5・良好	掛口片	—	内外ハケ目		H97-1	
217	土師・支脚形	ゆ29	F10.2,残高5.0	地元B2	5YR6/3・良好	1/6	Ⅱ	指ナデ	外被熱赤化	H97-11	
218	土師・支脚形	ら21F 71	F8.4,残高6.6	地元B2	7.5YR8/5・良好	3/5	Ⅱ	指ナデ	使用痕無、焼成割離、黒斑	H97-2	
219	土師・支脚形	ら21F 71	F.8.2, F.6.8, 高10.0	地元B2	10YR8/4・良好	3/5	Ⅱ	指ナデ	使用痕無、焼成割離、黒斑	H97-1	

付表2 額見町遺跡V報告区域出土中世遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
H区 古代 土器 溜まり 集中 単位 以外	220	土師・支脚形	ら22	F8.0, 残高35	地元B1	5YR7/4-良	1/10	II	指ナデ	外被熱赤化	H ⁺ 79-①
	221	土師・支脚形	よ21	F6.4, 残高3.3	地元B2	10YR5/1-良好	1/6	II	指ナデ	全体黒斑	H ⁺ 79-10
	222	土師・支脚形	ら21	F7.0, 残高4.7	地元B2	10YR7/3-良好	1/10	II	指ナデ	使用痕無、焼成剥離、黒斑	H ⁺ 79-4
	223	土師・支脚形	ゆ20・21 ⁺ マ	F6.0, 残高4.9	地元B1	10YR8/4-良	1/3	II	指ナデ	黒斑	H ⁺ 79-1
	224	土師・支脚形	よ22	F6.6, 残高3.5	地元B2	7.5YR7/5-良好	1/6	II	指ナデ	使用痕無	H ⁺ 79-1
	225	土師・支脚形	ら21 ⁺ マ	F5.8, 残高5.4	地元B1	10YR5/2-良好	1/5	II	指ナデ	使用痕無、黒斑	H ⁺ 79-②
	226	土師・支脚形	や19 ⁺ マ	L6.0, F5.4, 高7.75	窪場A3	7.5YR8/6-良好	略完	IV	指ナデ	被熱赤化	H ⁺ 79-1
	227	土師・支脚形	ゆ23	高径6.9, 上径5.0, 下4.3	窪場A3	7.5YR7/5-良	略完	IV	指ナデ	使用痕無	H ⁺ 79-9
	228	土師・管状鉢	り27 ⁺ マ	7.2×4.3, 孔1.45	窪場A1	7.5YR7/3-良好	略完形	-	指ナデ	重量113.8g	H ⁺ 79-2
	229	土師・管状鉢	や24 ⁺ マ	6.9×4.4, 孔1.2	窪場A1	10YR7/3-良	略完	-	指ナデ	重量99.8g	H ⁺ 79-1
	230	土師・管状鉢	よ25 ⁺ マ	6.3×3.9, 孔1.4	窪場A1	10YR8/4-不良	完形	-	指ナデ	重量68.3g	H ⁺ 79-1
	231	土師・管状鉢	よ27 ⁺ マ	4.3×2.8, 孔0.8	窪場B1	10YR7/4-良好	完形	-	指ナデ	重量24.7g	H ⁺ 79-3
	232	土師・管状鉢	や24	残4.9×2.5, 孔0.7	窪場A1	7.5YR7/5-良	略完	-	指ナデ	重量25.2g	H ⁺ 79-6
	233	土師・管状鉢	ゆ25 ⁺ マ	残3.8×1.7, 孔0.4	窪場A1	10YR6/3-良	略完	-	指ナデ	重量9.1g	H ⁺ 79-2
	234	土師・管状鉢	や24 ⁺ マ	3.2×1.7, 孔0.4	窪場A1	2.5YR7/6-良	略完	-	指ナデ	重量7.1g	H ⁺ 79-2
	235	土師・匣鉢状	ら31 ⁺ マ	□117.2	窪場A1	10YR8/4-良	1/8	Ⅷ	内外ロクロナデ	使用痕不明	H ⁺ 79-2
	236	土師・匣鉢状	ら31 ⁺ マ	□115.1	窪場A1	10YR8/3-良	1/8	Ⅷ	内外ロクロナデ	使用痕不明	H ⁺ 79-4
	237	土師・匣鉢状	ら31 ⁺ マ	□14.8	窪場A1	7.5YR8/4-良	1/10	Ⅷ	外一部カキ目、他ロクロナデ	使用痕不明	H ⁺ 79-3
	238	鉄・柳葉形鏝	も18	12.4×2.5×1.0	-	-	-	略完	-	鏡被部突開、重量23.3g	H14-⑥
	239	鉄・柳葉形鏝	ゆ28 ⁺ マ	5.8×1.55×0.7	-	-	-	3/4	-	鏡被部突開、重量10.3g	H ⁺ 79-B
	240	鉄・雁又鏝	ゆ25 ⁺ マ76	6.7×2.7×0.45	-	-	-	3/4	-	鏡被部突開、基部刺突、重量11.1g	H ⁺ 79-A
	241	鉄・雁又鏝	よ26 ⁺ マ37	7.0×2.7×0.8	-	-	-	両端欠損	-	鏡被部突開、重量14.7g	H13-⑫
	242	鉄・刀子	や24 ⁺ マ73	12.4×1.4×0.5	-	-	-	略完	-	直角片開、背平造、重量11.5g	H15-⑨
	243	鉄・刀子	ゆ31	4.3×1.4×0.5	-	-	-	刃部片	-	背平造、重量8.3g	H ⁺ 79-C
	244	鉄・刀子	ゆ23 ⁺ マ1	5.2×1.4×0.4	-	-	-	刃部片	-	重量5.7g	H ⁺ 79-E
	245	鉄・刀子	り27	5.6×1.3×0.35	-	-	-	刃部片	-	重量4.8g	H ⁺ 79-D
	246	鉄・刀子	ゆ23 ⁺ マ	3.1×1.8×0.5	-	-	-	刃部片	-	重量4.8g	H ⁺ 79-F
	247	鉄・馬具	ら24 ⁺ マ59	14.7×3.6×2.6	-	-	-	完形	-	くつわ部分、重量54.0g	H13-②
	248	鉄・曲鎌	も23 ⁺ マ129	-	-	-	-	両端欠損	-	重量22.2g	H鉄-A
249	鉄・釣針	ゆ28	2.3×2.7, φ0.45	-	-	-	基部欠損	-	重量2.5g	H13-④	
250	鉄・釘	り31 ⁺ マ20	7.3×1.8×1.6	-	-	-	略完	-	断面方形、重量21.2g	H14-⑧	
251	鉄・釘	よ24 ⁺ マ128	10.5×1.5×0.85	-	-	-	略完	-	重量15.5g	H15-II-④	
252	鉄・釘	も25 ⁺ マ20	7.3×1.5×0.8	-	-	-	3/4	-	重量13.2g	H14-⑦	
253	鉄・釘	よ27	7.3×1.0×1.6	-	-	-	略完	-	重量9.2g	H15-⑦	
254	鉄・織未成品	り25 ⁺ マ34	10.1×1.9×0.9	-	-	-	上端欠損	-	柳葉形織未成品、重量26.1g	H14-⑤	
255	鉄・棒状製品	り28	8.4×1.2×0.7	-	-	-	不明	-	不明製造品、重量6.6g	H13-II-③	
256	鉄・棒状製品	よ23	5.2, φ1.35	-	-	-	破片	-	重量40.6g	H13-⑤	
257	鉄・棒状製品	土器 ⁺ マ4-340-341	16.0×7.0×0.7	-	-	-	不明	-	断面方形棒状製品の先端部円形加工、長頸織の未成品？重量27.5g	H14-⑫	
258	鉄・不明品	り32 ⁺ マ	10.2×1.7×0.9	-	-	-	不明	-	未成品？重量29.0g	H13-⑩	
259	銅・不明品	ゆ23	3.5×1.2×0.2	-	-	-	破片	-	重量4.7g	H ⁺ 79-G	

付表2 額見町遺跡V報告区域出土中世遺物観察表

1. 掘立柱建物出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SB306	1	土師・柱状椀	SB306P7	底6.2	H-D2	7.5YR8/6-良	底片	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB306-1
	2	土師・平底小皿	SB306P2	□19.2, 高2.3, 底4.2	H-D2	7.5YR7/6-良	2/3	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB306-2
	3	土師・平底小皿	SB306	□19.0, 高1.9, 底3.8	H-B	10YR7/3-良	3/4	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無、口縁に黒斑	SB306-3
	4	土師・平底小皿	SB306P6	□110.0, 高2.2, 底5.0	H-A	10YR8/3-良	3/4	中I-II	底糸切り痕	使用痕無	SB306-5
	5	土師・大皿	SB306P4	□114.4, 高3.7	H-Aに近似	10YR6/2-良	1/6	中I-II	溝口クロ成形、外体一底指ナデ痕、内ハケナデ、口縁部2段ナデ	京都系土師器製の模倣品	SB306-6
SB307	6	土師・平底椀	SB307P7	底6.0	H-D2	10YR8/3-良	底片	中I	底糸切り痕	使用痕無	SB307-2
SB308	7	土師・平底椀	SB307P7	底4.6	H-A3	10YR8/3-良	底片	中I	底右糸切り痕	使用痕無	SB307-1
	8	土師・柱状椀	SB308P7	底5.4	H-D2	7.5YR6/6-良	底片	中I-II	底糸切り痕	使用痕無	SB308-1
	9	土師・平底小皿	SB308P12	□19.4, 高2.0, 底5.0	H-B	7.5YR7/6-良	1/4	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB308-3
	10	土師・平底小皿	SB308P9	□110.0, 高2.3, 底5.4	H-A	10YR8/3-良	3/5	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB308-5
	11	土師・輪高台椀	SB308P8	台6.2, 台高0.4	H-A	10YR8/3-良	底片	中I-II	底糸切りナデ	使用痕無	SB308-7
	12	鉄・鏝	SB308P13	厚1.0	-	-	-	胴下底片	中I?	鏝物、重量1220g	H13-①
	13	土師・平底椀	SB310P2-P3	□112.9, 高4.4, 底6.2	H-A	10YR8/3-不良	1/3	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-1
	14	土師・平底椀	SB310P19	底5.8	H-D2	7.5YR7/6-良	1/4	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-3
	15	土師・柱状椀	SB310P3	底6.0	H-B	10YR7/4-良	底片	中I-II	底右糸切り痕、外底凹痕	使用痕無	SB310-4
	16	土師・柱状椀	SB310P5	底6.0	H-D2	10YR8/3-良	底片	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-5
SB310	17	土師・平底小皿	SB310P7	□110.0, 高2.5, 底4.7	H-C	7.5YR8/4-良	2/5	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-8
	18	土師・平底小皿	SB310P9	□19.4, 高2.1, 底4.8	H-A	10YR8/3-良	1/2	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-9
	19	土師・平底小皿	SB310P15	□19.0, 高2.4, 底4.4	H-A	10YR8/3-不良	略完	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-11
	20	土師・平底小皿	SB310P8	□18.6, 高2.3, 底4.4	H-D2	7.5YR7/6-良	1/2	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-7
	21	土師・平底小皿	SB310P15	□19.4, 高2.4, 底4.4	H-C	10YR8/4-不良	2/3	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-10
	22	土師・柱状小皿	SB310P19	□18.3, 高3.3, 底3.9	H-C	10YR8/4-不良	2/5	中I-II	底糸切り痕、内底凹痕	使用痕無	SB310-13
	23	土師・柱状小皿	SB310P18	底4.4	H-D	10YR8/3-良	底片	中I-II	底右糸切り痕、外底凹痕	使用痕無	SB310-14
	24	土師・輪高台小皿	SB310P2	台4.95, 台高1.0	H-D2	7.5YR8/6-良	1/3	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-15
	25	土師・柱状椀	SB310P1+ら26	□114.1, 高4.7, 底6.2	H-D	10YR7/3-良	1/4	中I-II	底糸切り痕、内底ミガキ	使用痕無	SB310-16
	26	土師・小盥	SB310P19	□16.0, 高2.9, 底3.6, 胴5.6	H-D	10YR7/4-良好	2/3	中I?	底右糸切り痕	使用痕無	SB310-2
SB312	27	土師・平底小皿	SB312P5	□18.6, 高1.8, 底5.2	H-C	10YR7/4-不良	1/6	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB312-1
	28	土師・平底小皿	SB312P8	□19.2, 高1.7, 底4.0	H-A	10YR8/3-良	完形	中I-II	底右糸切り痕	使用痕無	SB312-2
	29	土師・柱状小皿	SB312P4	底4.4	H-A	10YR8/3-良	底片	中I-II	底右糸切り痕、外底凹痕	使用痕無	SB312-3

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SB318	30	土師・平底碗	SB318P13	□15.2, 高3.6, 底6.6	H-D2	10YR8/2・良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SB318-1
	31	土師・柱状碗	SB318P19	底7.2	H-D2	10YR8/3・良	底片	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SB318-2
	32	土師・平底小皿	SB318P8	□19.9, 高2.2, 底5.2	H-D2	10YR6/4・良	1/6	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SB318-3
	33	土師・柱状小皿	SB318P12	底4.6	H-C	7.5YR8/3・不良	1/2	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕、底凹痕貫通	使用痕無	SB318-6
	34	土師・柱状小皿	SB318P18	底4.4	H-D	10YR7/2・良	1/2	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SB318-4
	35	土師・柱状小皿	SB318P8	底3.8	H-A	10YR7/4・良好	底片	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	内黒焼成	SB318-7
	36	白磁・皿	SB318P3 + φ22* 内・φ27* 外	□9.8	釉色7.5Y8/1	2.5Y8/1・堅緻	1/4	山本C期	山本白磁分類M1類	使用痕無	SB318-③
SB328	37	土師・平底小皿	SB328P7	底4.6	H-A	10YR7/2・不良	底片	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SB328-2
	38	土師・柱状小皿	SB328P4	底4.2	H-A	10YR6/3・良	1/2	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SB328-1

2. 土坑出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SK396	1	土師・平底碗	SK396-222	□15.1, 高4.0, 底6.2	H-A	10YR8/3・不良	3/4	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SK396-1
	2	土師・平底碗	SK396-195	□12.8, 高3.9, 底5.8	H-A3	7.5YR8/5・良好	3/4	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕不明	SK396-2
	3	土師・平底碗	SK396-9	底5.3	H-A3	7.5YR7/4・良好	1/3	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-3
	4	土師・平底碗	SK396-98-99	□13.4, 高3.7, 底6.6	H-D2	7.5YR7/5・良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-5
	5	土師・平底碗	SK396-28	□12.0, 高4.0, 底5.6	H-D	10YR8/2・不良	完形	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	SK396-4
	6	土師・柱状碗	SK396-103	底5.8	H-D2	7.5YR8/5・良	底片	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、外底に黒斑	SK396-7
	7	土師・輪高台碗	SK396-144	台8.1, 台高1.0	H-D2	7.5YR8/4・良	1/10	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-9
	8	土師・平底小皿	SK396-8-190	□9.4, 高2.8, 底4.2	H-B	7.5YR7/5・良	2/5	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-16
	9	土師・平底小皿	SK396-75	□8.9, 高2.3, 底4.2	H-A	7.5YR8/4・良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-25
	10	土師・平底小皿	SK396-58	□9.2, 高2.2, 底4.1	H-A3	7.5YR8/4・良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	内外火色	SK396-12
	11	土師・平底小皿	SK396-97	□9.3, 高2.2, 底4.4	H-A3	10YR8/4・良好	4/5	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-14
	12	土師・平底小皿	SK396-105-214	□8.7, 高2.1, 底4.7	H-A	10YR8/3・良	2/3	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-15
	13	土師・平底小皿	SK396-2	□8.2, 高1.8, 底7.2	H-B	7.5YR7/4・良好	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-10
	14	土師・平底小皿	SK396-76	□9.8, 高2.7, 底4.1	H-D2	7.5YR8/5・良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕、内底ラセン状ナデ	使用痕無	SK396-24
	15	土師・平底小皿	SK396-138	□9.0, 高2.2, 底4.0	H-D	10YR8/1・不良	1/2	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SK396-27
	16	土師・平底小皿	SK396-20	□8.9, 高2.3, 底3.6	H-D2	10YR8/4・良	完形	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-23
	17	土師・平底小皿	SK396-36	□9.8, 高2.4, 底4.0	H-D	10YR8/3・不良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-11
	18	土師・平底小皿	SK396-157	□9.9, 高2.6, 底4.1	H-D	7.5YR7/5・良	1/3	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SK396-19
	19	土師・平底小皿	SK396-29-34	□10.2, 高2.2, 底5.2	H-D	10YR8/3・良	2/5	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SK396-17
	20	土師・平底小皿	SK396-21	□10.2, 高2.5, 底4.8	H-C	5YR7/5・良	1/2	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-13
	21	土師・柱状小皿	SK396-175	底4.3	H-A	10YR8/3・良	3/4	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK396-28
	22	土師・輪高台碗	SK396-65~67	□14.9, 高5.4, 台5.9, 台高0.3	H-D2	7.5YR7/4・良好	2/5	中1-Ⅱ1	内粗ミガキ、底ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK396-32
23	土師・輪高台碗	SK396-119-138-142-212	□14.9, 高6.4, 台6.3, 台高0.3	H-A	10YR8/4・良	5/6	中1-Ⅱ1	内粗ミガキ、底ナデ消し	使用痕無、内黒焼成	SK396-30	
24	土師・輪高台碗	SK396-43	□15.8, 高6.3, 台6.4, 台高0.3	H-A	10YR8/4・良	3/4	中1-Ⅱ1	内粗ミガキ、底ナデ消し	使用痕無、内黒焼成	SK396-31	
25	土師・輪高台碗	SK396-74	□15.6	H-B	7.5YR7/4・良好	1/5	中1-Ⅱ1	内粗ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK396-①	
26	土師・輪高台碗	SK396-173-175-177-180	□14.5, 高6.3, 台6.0, 台高0.4	H-D	10YR8/3・不良	1/5	中1-Ⅱ1	内粗ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK396-34	
27	土師・輪高台碗	SK396-42	□15.6, 高5.3, 台6.3, 台高0.3	H-A	7.5YR8/3・不良	2/3	中1-Ⅱ1	底ナデ消し、内口ロナデ	使用痕無、内黒焼成	SK396-33	
28	土師・輪高台碗	SK396-106-83-94-96	□15.6	H-D	7.5YR7/5・良好	1/4	中1-Ⅱ1	内ミガキ	使用痕無、内黒焼成、外火色有	SK396-29	
29	土師・輪高台碗	SK396-90	台6.7, 台高0.2	H-D2	10YR8/3・良	1/3	中1-Ⅱ1	底ナデ消し、内粗ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK396-8	
30	土師・柱状碗	SK396-17	底6.5	H-C	2.5YR7/4・良	底片	中1-Ⅱ1	不明	使用痕不明	SK396-37	
31	土師・柱状小皿	SK396-201	□10.6	H-A	10YR8/4・良	1/5	中1-Ⅱ1	内外口ロナデ	内黒焼成	SK396-35	
SK397	32	土師・平底碗	SK397-3-4-6-11	□14.6, 高4.1, 底5.2	H-A	7.5YR5/2・良	2/3	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕、内底回転ミガキ	使用痕無、内外黒斑有	SK397-3
	33	土師・平底碗	SK397-5-11	□14.7, 高4.1, 底6.3	H-B	7.5YR8/4・良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK397-2
	34	土師・平底碗	SK397-28	□13.3, 高3.6, 底6.5	H-D2	7.5YR8/3・良	1/3	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SK397-1
	35	土師・柱状碗	SK397-2	□14.0, 高4.6, 底5.0	H-B	7.5YR7/5・良	2/5	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK397-4
	36	土師・平底小皿	SK397-27	□10.0, 高2.5, 底5.1	H-A	7.5YR7/4・良	4/5	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、黒斑有	SK397-12
	37	土師・平底小皿	SK397-40	□10.6, 高2.2, 底4.9	H-A3	10YR8/3・良	3/4	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、外火色有	SK397-10
	38	土師・平底小皿	SK397-14	□10.1, 高2.4, 底4.2	H-B	7.5YR7/4・良好	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、外底黒斑有	SK397-6
	39	土師・平底小皿	SK397-26	□10.0, 高2.7, 底4.2	H-A	10YR8/3・良	4/5	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK397-9
	40	土師・平底小皿	SK397-22	□10.6, 高3.0, 底4.25	H-B	10YR8/4・良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK397-8
	41	土師・平底小皿	SK397-41	□9.8, 高2.2, 底4.5	H-B	2.5YR7/4・良好	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK397-7
	42	土師・平底小皿	SK397-44	□8.9, 高1.8, 底4.8	H-C	10YR7/4・不良	略完	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、口縁黒斑	SK397-11
	43	土師・輪高台碗	SK397-1-9-32-33-60	□15.8, 高5.55, 台6.3, 台高0.4	H-A	7.5YR8/3・良	3/5	中1-Ⅱ1	内口ロナデ、底ナデ消し	使用痕無、内黒焼成	SK397-17
	44	土師・輪高台碗	SK397-61	□15.8	H-A	10YR8/3・良	1/4	中1-Ⅱ1	内外口ロナデ	使用痕無、内黒焼成	SK397-14
	45	土師・輪高台碗	SK397-15	□17.4, 高6.5, 台7.6, 台高0.55	H-B	7.5YR7/4・良	3/4	中1-Ⅱ1	外体沈線5条・高台1条、内口ロナデ、外底ナデ消し、内底ナデツケ	使用痕無、内黒焼成	SK397-16
	46	土師・輪高台碗	SK397-29-30	□15.2	H-D2	7.5YR8/4・良	1/5	中1-Ⅱ1	内ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK397-15
	47	土師・輪高台碗	SK397-52	台6.4, 台高0.6	H-A	10YR7/4・良	底片	中1-Ⅱ1	底ナデ消し、内ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK397-5
	48	土師・柱状小皿	SK397-39	□10.6, 高3.5, 底4.3	H-A3	7.5YR7/5・良好	1/2	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	内黒斑	SK397-13
49	灰釉・有台碗	SK397-21	台7.1, 台高0.5	東濃産	2.5Y8/1・堅緻	1/10	明和27産	底ナデ消し	内底摩耗中	SK397-1	
SK399	50	土師・平底碗	SK399-23-25-26	□15.3, 高4.5, 底6.6	H-A	10YR6/3・良好	3/4	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、底黒斑有	SK399-10
	51	土師・平底碗	SK399-75-91-93	□14.9, 高4.4, 底7.2	H-A	2.5Y7/3・良	4/5	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、底黒斑有	SK399-11
	52	土師・平底碗	SK399-55-79	□14.1, 高4.4, 底6.4	H-A	10YR7/4・良	1/3	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無、外底黒斑有	SK399-14
	53	土師・平底碗	SK399-63-82	□14.8, 高3.9, 底5.8	H-A	10YR8/3・良	1/5	中1-Ⅱ1	底糸切り痕	使用痕無	SK399-13
	54	土師・平蓋碗	SK399-103-105-108-下層	□13.6, 高3.7, 底5.4	H-D	10YR6/3・良	2/3	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、内外黒斑有	SK399-12
	55	土師・平底小皿	SK399-60	□9.6, 高2.2, 底4.6	H-A	10YR6/4・良好	4/5	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、外火色有	SK399-4
	56	土師・平底小皿	SK399-94-下層	□10.0, 高1.6, 底5.0	H-A	10YR7/2・良	2/3	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	SK399-6
	57	土師・平底小皿	SK399-42-43	□9.2, 高2.2, 底4.3	H-A	10YR7/3・良	5/6	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無、外火色有	SK399-7
	58	土師・平底小皿	SK399-98	□9.4, 高2.1, 底5.0	H-B	5YR7/6・良	7/8	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK399-1
	59	土師・平底小皿	SK399-56	□9.2, 高1.9, 底4.3	H-D2	10YR6/3・良	7/8	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕、内底ラセン状ナデ	内全体に煤付着	SK399-2
60	土師・平底小皿	SK399-87-89	□9.3, 高1.7, 底3.6	H-D2	7.5YR7/6・良	3/4	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕、内底ラセン状ナデ	使用痕無	SK399-3	
61	土師・平底小皿	SK399-11	□9.3, 高1.9, 底4.2	H-D2	7.5YR8/6・良	2/3	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕、内底ラセン状ナデ	使用痕無	SK399-5	
62	土師・柱状小皿	SK399-62	□9.6, 高3.2, 底4.2	H-A	10YR5/2・良	1/2	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK399-8	
63	土師・柱状小皿	SK399-67	底3.9	H-D2	7.5YR8/6・良	1/3	中1-Ⅱ1	底右糸切り痕	使用痕無	SK399-9	
64	土師・輪高台碗	SK399-52	台6.8, 台高0.4	H-B	7.5YR7/4・良	1/2	中1-Ⅱ1	底糸切り痕ナデ、内口ロナデ	使用痕無、内黒焼成	SK399-15	

付表2 額見町遺跡V報告区域出土中世遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SK419	65	土師・平底碗	SK419-314・393	□136, 高4.4, 底6.2	H-A3	7.5YR6/3・良好	2/3	中1-I	底右糸切り痕、内底ラセン状ナデ	使用痕無、内外に黒斑有	SK419-16
	66	土師・平底碗	SK419-91・93-94	□14.3, 高4.6, 底4.9	H-A	7.5YR7/5・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-13
	67	土師・平底碗	SK419-146	□13.9, 高4.9, 底6.2	H-A3	7.5YR5/3・良好	略完	中1-I	底右糸切り痕	内底摩擦中、内外黒斑有	SK419-12
	68	土師・平底碗	SK419-285・288・290・298・310	□13.8, 高3.9, 底6.6	H-A3	7.5YR6/3・良好	1/2	中1-I	底右糸切り痕	内底摩擦弱、内外黒斑有	SK419-17
	69	土師・平底碗	SK419-29・32・43	□15.0, 高4.5, 底5.9	H-A	7.5YR7/4・良好	1/4	中1-I	底糸切り痕	使用痕無、外火色有	SK419-6
	70	土師・平底碗	SK419-73・201・430	□15.1, 高4.4, 底6.0	H-A	10YR7/2・良	1/2	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無、外黒斑で全体うす黒い	SK419-15
	71	土師・平底碗	SK419-239・377	□15.1, 高4.8, 底5.2	H-A3	7.5YR7/4・良好	5/6	中1-I	底右糸切り痕、内底ナデツケ	使用痕無	SK419-4
	72	土師・平底碗	SK419-153	□12.5, 高4.3, 底5.7	H-A	7.5YR8/3・良	略完	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-1
	73	土師・平底碗	SK419-171・172	□12.9, 高4.1, 底5.8	H-A	7.5YR8/3・良	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-2
	74	土師・平底碗	SK419-82	□13.0, 高4.4, 底5.7	H-A	7.5YR8/3・良好	略完	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ大きい	SK419-3
	75	土師・平底碗	SK419-F71	□13.0, 高3.95, 底6.3	H-A3	7.5YR7/5・良好	1/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無、黒斑有	SK419-11
	76	土師・平底碗	SK419-128~131・149	□13.0, 高4.1, 底4.8	H-A	10YR8/2・良好	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-5
	77	土師・平底碗	SK419-399	□12.9, 高3.7, 底5.2	H-A	10YR8/3・良	2/5	中1-I	底右糸切り痕、内底ナデツケ	使用痕無	SK419-10
	78	土師・平底碗	SK419-83・332・351	□14.6, 高5.0, 底6.8	H-D	10YR8/2・良	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-14
	79	土師・平底碗	SK419-11・340・345	□13.9, 高4.0, 底6.2	H-D2	7.5YR6/3・良	2/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-8
	80	土師・平底碗	SK419-333	□15.0, 高4.2, 底6.8	H-A	10YR8/3・良	1/6	中1-I	底糸切り痕	使用痕無	SK419-9
	81	土師・平底碗	SK419-224・225	□12.4, 高4.0, 底5.3	H-D	7.5YR7/5・良	略完	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-7
	82	土師・輪高台碗	SK419-283・299	台6.4, 台高0.2	H-A	10YR8/3・良	2/5	中1-I	底糸切りナデ、内ミガキ	使用痕無、内黒焼成失敗品?	SK419-18
	83	土師・輪高台碗	SK419-246	台7.4, 台高0.75	H-A	10YR7/3・良	底片	中1-I	底糸切りナデ	使用痕無	SK419-21
	84	土師・輪高台碗	SK419-322	台7.0, 台高1.2	H-A	10YR8/3・良	底片	中1-I	底ナデ	使用痕無	SK419-20
	85	土師・平底小皿	SK419-210・213	□9.4, 高2.5, 底4.1	H-A	10YR8/3・良	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-66
	86	土師・平底小皿	SK419-F32	□9.6, 高2.0, 底4.4	H-B	7.5YR7/5・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-91
	87	土師・平底小皿	SK419-F59	□9.6, 高2.3, 底4.5	H-A	10YR8/3・良好	略完	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-90
	88	土師・平底小皿	SK419-F89・90	□9.5, 高2.05, 底4.3	H-B	7.5YR8/4・良好	1/2	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-58
	89	土師・平底小皿	SK419-59	□9.5, 高2.2, 底4.5	H-A	7.5YR8/3・良	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-85
	90	土師・平底小皿	SK419-422	□9.4, 高2.2, 底4.2	H-A	10YR8/4・良好	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-50
	91	土師・平底小皿	SK419-416	□9.1, 高1.8, 底3.7	H-A	10YR8/4・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-78
	92	土師・平底小皿	SK419-267	□9.4, 高1.9, 底4.6	H-A	10YR8/3・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕、内ラセンナデ	使用痕無	SK419-53
	93	土師・平底小皿	SK419-417	□10.2, 高2.4, 底4.8	H-A3	7.5YR7/5・良好	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-68
	94	土師・平底小皿	SK419-242	□9.4, 高2.5, 底5.1	H-A	10YR8/3・良	5/6	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-52
	95	土師・平底小皿	SK419-280・359	□10.0, 高2.1, 底5.0	H-B	7.5YR7/5・良	1/4	中1-I	底糸切り痕	使用痕不明	SK419-96
	96	土師・平底小皿	SK419-77	□9.5, 高2.3, 底4.0	H-A	10YR8/3・良	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-48
	97	土師・平底小皿	SK419-205	□9.4, 高1.5, 底4.4	H-A	10YR8/3・良	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-75
	98	土師・平底小皿	SK419-127	□9.0, 高1.85, 底4.4	H-A	10YR8/3・良	完形	中1-I	底糸切り痕	使用痕無	SK419-87
	99	土師・平底小皿	SK419-220	□8.5, 高1.5, 底4.4	H-B	5YR6/5・不良	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-62
	100	土師・平底小皿	SK419-F67	□9.2, 高1.6, 底5.3	H-B	7.5YR7/5・良好	1/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-95
	101	土師・平底小皿	SK419-174	□8.2, 高1.8, 底4.5	H-B	7.5YR7/5・良	略完	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-73
	102	土師・平底小皿	SK419-F42	□8.5, 高1.5, 底5.2	H-B	7.5YR7/5・良好	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-74
	103	土師・平底小皿	SK419-F9~11	□8.2, 高2.1, 底5.2	H-A	10YR7/4・良好	2/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-84
	104	土師・平底小皿	SK419-F52	□9.3, 高2.3, 底4.6	H-B	7.5YR8/5・良	1/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-97
	105	土師・平底小皿	SK419-269	□9.4, 高2.3, 底4.5	H-B	5YR7/5・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-67
	106	土師・平底小皿	SK419-139・160	□9.1, 高2.3, 底4.6	H-B	7.5YR7/5・良	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-63
	107	土師・平底小皿	SK419-135	□9.7, 高2.2, 底5.4	H-A	10YR8/4・良好	5/6	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-56
	108	土師・平底小皿	SK419-343	□10.0, 高3.0, 底4.6	H-B	7.5YR7/5・良	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-25
	109	土師・平底小皿	SK419-121	□9.6, 高2.6, 底5.2	H-A	10YR8/4・良	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-24
	110	土師・平底小皿	SK419-187	□10.4, 高2.0, 底5.2	H-B	7.5YR7/5・良好	略完	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-76
	111	土師・平底小皿	SK419-2	□9.4, 高1.9, 底5.0	H-A	10YR7/3・良	5/6	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-49
	112	土師・平底小皿	SK419-144	□9.1, 高1.9, 底4.2	H-A	7.5YR8/3・良	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-86
	113	土師・平底小皿	SK419-134	□10.5, 高2.3, 底4.4	H-A3	7.5YR7/4・良	略完	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無、外黒斑有	SK419-22
	114	土師・平底小皿	SK419-374	□10.8, 高2.4, 底4.4	H-A3	7.5YR8/3・良好	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-93
	115	土師・平底小皿	SK419-41	□10.6, 高2.2, 底4.2	H-A3	7.5YR8/5・良	1/2	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-69
	116	土師・平底小皿	SK419-232	□9.4, 高2.3, 底4.2	H-A3	10YR8/4・不良	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-60
	117	土師・平底小皿	SK419-48	□10.0, 高2.0, 底4.8	H-A3	7.5YR7/5・良	1/4	中1-I	底糸切り痕	使用痕無	SK419-99
	118	土師・平底小皿	SK419-74・79・302	□10.0, 高2.1, 底4.4	H-A3	10YR7/4・良好	7/8	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-71
	119	土師・平底小皿	SK419-342	□9.9, 高1.8, 底4.8	H-A3	5YR7/5・良好	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-88
	120	土師・平底小皿	SK419-273	□9.0, 高1.5, 底5.2	H-A3	10YR8/4・良好	3/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-54
	121	土師・平底小皿	SK419-138・143・155	□9.5, 高2.2, 底4.4	H-D2	7.5YR7/5・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-65
	122	土師・平底小皿	SK419-420	□9.2, 高2.3, 底4.4	H-D2	5YR7/5・不良	完形	中1-I	底糸切り痕	使用痕無	SK419-82
	123	土師・平底小皿	SK419-50	□10.0, 高2.05, 底5.0	H-D2	7.5YR7/5・良	1/2	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-59
	124	土師・平底小皿	SK419-154	□9.8, 高1.8, 底5.2	H-D2	10YR7/4・良	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-51
	125	土師・平底小皿	SK419-356	□9.3, 高2.3, 底5.2	H-D2	10YR8/4・良	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無、切り離し粘土付着、ゆがみ著しい	SK419-81
	126	土師・平底小皿	SK419-F70	□9.8, 高1.9, 底5.4	H-D	10YR7/3・良	完形	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-57
	127	土師・平底小皿	SK419-270~272	□9.5, 高2.2, 底4.1	H-D2	7.5YR8/5・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕、内底ラセンナデ	使用痕無	SK419-23
	128	土師・平底小皿	SK419-189	□9.5, 高2.15, 底4.4	H-D2	10YR8/5・良	略完	中1-I	底右糸切り痕、内底ラセンナデ	使用痕無	SK419-55
	129	土師・平底小皿	SK419-123	□8.9, 高2.05, 底4.4	H-D2	7.5YR8/4・良	略完	中1-I	底右糸切り痕、内底ラセンナデ	使用痕無、外火色有	SK419-64
	130	土師・平底小皿	SK419-101・104・105	□9.1, 高2.05, 底4.9	H-D	10YR8/4・良好	略完	中1-I	底右糸切り痕	外火色有	SK419-89
	131	土師・平底小皿	SK419-F36	□9.7, 高1.9, 底5.3	H-D2	10YR8/4・良	完形	中1-I	底右糸切り痕	外全体に煤	SK419-80
	132	土師・平底小皿	SK419-F50	□10.1, 高2.1, 底4.5	H-D	7.5YR8/3・不良	完形	中1-I	底糸切り痕	使用痕不明、外底黒斑有	SK419-77
	133	土師・平底小皿	SK419-414	□9.4, 高2.2, 底5.6	H-D	7.5YR7/5・良	1/2	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-61
	134	土師・平底小皿	SK419-204・221・384	□10.0, 高1.8, 底7.4	H-D	10YR7/4・不良	2/5	中1-I	底右糸切り痕	内底摩擦弱、内底黒斑有	SK419-70
	135	土師・平底小皿	SK419-57	□8.7, 高2.1, 底4.0	H-C	7.5YR8/5・不良	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-26
	136	土師・平底小皿	SK419-173・186	□9.6, 高2.9, 底5.4	H-C	5YR7/4・良	1/4	中1-I	底糸切り痕	使用痕無	SK419-83
	137	土師・柱状小皿	SK419-394	□10.0, 高3.4, 底4.7	H-D	7.5YR8/4・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK419-27
	138	土師・柱状小皿	SK419-96	底5.0	H-D2	7.5YR7/4・良	底片	中1-I	底糸切り後ナデ	使用痕無	SK419-28
	139	土師・輪高台碗	SK419-151・152・163・165	□14.4, 高6.4, 台6.1, 台高0.3	H-A	10YR8/2・良	1/3	中1-I	底ナデ消し、内粗ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK419-39
	140	土師・輪高台碗	SK419-35・40・49・58・81・325	□14.0, 高5.8, 台6.3, 台高0.3	H-A	10YR8/4・良好	1/3	中1-I	内クロロナデ、外クロロヒダ、底右糸切り痕	使用痕無、内黒焼成	SK419-37
	141	土師・輪高台碗	SK419-260	台6.4, 台高0.3	H-A	10YR8/2・良	底片	中1-I	内ミガキ、底ナデ消し	使用痕無、内黒焼成	SK419-44
	142	土師・輪高台碗	SK419-328	台6.2, 台高0.25	H-A	10YR6/2・良好	1/3	中1-I	内ミガキ、底糸切りナデ	使用痕無、内黒焼成	SK419-19
	143	土師・輪高台碗	SK419-31	台6.8, 台高0.5	H-A	10YR8/4・良	1/6	中1-I	底ナデ消し	使用痕無、内黒焼成	SK419-43
	144	土師・輪高台碗	SK419-F29・64	台6.2, 台高0.35	H-A	5YR6/3・良	1/6	中1-I	底ナデ消し、内粗ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK419-42
	145	土師・輪高台碗	SK419-110・126	□15.6, 高5.3, 台6.3, 台高0.5	H-D	10YR8/3・良好	1/4	中1-I	底糸切り痕、内粗ミガキ	使用痕無、内黒焼成	SK419-40
	146	土師・輪高台碗	SK419-64・234~236・354	□15.7	H-D	10YR8/3・良	1/3	中1-I	内ミガキ	内黒焼成	SK419-31
	147	土師・輪高台碗	SK419-223	□15.2	H-D2	7.5YR7/5・良好	1/6	中1-I	内ミガキ	内黒焼成	SK419-34
	148	土師・輪高台碗	SK419-428	□15.2	H-D2	10YR8/4・良好	1/6	中1-I	内ミガキ	内黒焼成	SK419-35
	149	土師・輪高台碗	SK419-385	□15.0	H-D	10YR8/3・良	1/6	中1-I	内ミガキ	内黒焼成	SK419-32

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SK419	150	土師・輪高台碗	SK419-51・52・344・349・432	□13.6, 高5.9, 台5.6, 台高0.3	H-D2	10YR8/3・良好	4/5	中1-I	底右糸切り痕, 内口ロナデ	使用痕無, 内黒焼成	SK419-41
	151	土師・輪高台碗	SK419-90-100-306-312	□14.1, 高6.0, 台6.3, 台高0.4	H-C	7.5YR8/4・良	1/3	中1-I	底糸切り痕, 内ミガキ	内黒焼成	SK419-38
	152	土師・柱状小皿	SK419-150	□9.8, 高3.8, 底4.1	H-A	10YR8/3・良好	略完	中1-I	底糸切り痕, 内放射状ミガキ	使用痕無, 内黒焼成, 底中央に粘土すきま穴が貫通	SK419-46
	153	土師・柱状小皿	SK419-294・311	□8.9, 高4.1, 底4.0	H-A	10YR8/3・良	4/5	中1-I	底右糸切り痕, 内口ロナデ	使用痕無, 内黒焼成	SK419-47
	154	土師・柱状小皿	SK419-80	□9.5	H-A	10YR8/3・良	1/5	中1-I	内底ミガキ	使用痕無, 内黒焼成	SK419-45
	155	土師・柱状碗	SK419-180	底5.0	H-D	10YR8/3・良	底片	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無, 内黒焼成	SK419-36
	156	土師・小型鍋	SK419-200-222	-	H-A2	10YR8/3・良	1/6	中1-I	外ヘラナデ, 指ナデ	内黒	SK419-102
	157	土師・権状鉢	SK419-24	径3.5×3.4	H-A	2.5Y7/1・不良	完形	中1-I	側面縦線刻で花弁状装飾, 中心穿孔貫通	使用痕無? 焼成不良で黒色化	SK419-3
	158	灰釉・有台碗	SK419-167+ら259*マ	□14.6, 高5.4, 台6.3, 台高0.8	東濃産	2.5Y7/1・堅緻	2/5	明和27窟	底ナデ消し	内底摩耗中, 内底無輪・外底無輪→無輪焼成か?	SK419-1
159	石製品・鉢	SK419-1	5.9×4.7×2.8	凝灰岩	-	略完?	-	4方にひも掛けの持ち	獸足端部形状の形態, 石製品の転用? 重量66g	SK419-2	
SK420	160	土師・平底碗	SK420-8	底4.9	H-A3	10YR8/2・良	1/4	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK420-1
	161	土師・柱状碗	SK420-15	底6.6	H-A	10YR8/2・良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK420-2
	162	土師・輪高台碗	SK420-9	台7.4, 台高1.0	H-A3	10YR8/2・良	底片	中1-II	底ナデ消し		SK420-3
	163	土師・輪高台小皿	SK420-11	□10.8, 高2.85, 台5.5, 台高0.85	H-D	10YR8/2・不良	4/5	中1-II	底ナデ消し		SK420-5
	164	土師・輪高台小皿	SK420-10	□9.5, 高2.3, 台5.6, 台高0.8	H-D2	7.5YR7/6・良好	完形	中1-II	底ナデ消し	内底摩耗弱	SK420-6
	165	土師・輪高台碗	SK420-3	□13.4, 高4.5, 台6.0, 台高0.2	H-A	7.5YR8/4・良	1/4	中1-II	内ミガキ, 底ナデ消し	使用痕無	SK420-4
SK421	166	土師・輪高台碗	SK421-57	台7.2, 台高0.7	H-C	5YR7/6・不良	底片	中1-I			SK421-12
	167	土師・平底小皿	SK421-44	□10.0, 高2.1, 底4.0	H-A3	10YR8/3・良	1/2	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK421-5
	168	土師・平底小皿	SK421-88	□9.9, 高2.15, 底4.0	H-A3	5YR7/6・良好	2/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK421-4
	169	土師・平底小皿	SK421-38	□9.9, 高2.5, 底4.3	H-A	7.5YR8/2・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK421-1
	170	土師・平底小皿	SK421-36	□10.0, 高1.85, 底5.7	H-B	10YR8/4・良	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK421-3
	171	土師・平底小皿	SK421-33	□9.4, 高2.3, 底5.2	H-A	10YR8/3・良	2/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK421-9
	172	土師・平底小皿	SK421-64	□8.8, 高2.2, 底5.0	H-A	7.5YR8/4・良	4/5	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無, 外底ヘラ記号「J」	SK421-8
	173	土師・平底小皿	SK421-47	□9.0, 高2.0, 底4.4	H-A	7.5YR8/4・良	1/3	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK421-7
	174	土師・平底小皿	SK421-22	□9.2, 高2.1, 底4.3	H-D	10YR8/2・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕	使用痕無	SK421-2
	175	土師・平底小皿	SK421-29	□9.2, 高2.1, 底5.2	H-D	10YR8/2・良	1/3	中1-I	底糸切り痕	使用痕無	SK421-10
	176	土師・柱状小皿	SK421-54	底4.0	H-B	5YR7/6・良	2/5	中1-I	底右糸切り痕, 内底凹痕	使用痕無	SK421-11
	177	土師・平底小皿	SK421-6	底3.8	H-A	7.5YR8/6・良	3/4	中1-I	底右糸切り痕, 内底凹痕	使用痕無	SK421-6
	178	土師・輪高台碗	SK421-85	□11.8	H-D	5YR7/6・良好	1/5	中1-I	内ミガキ	使用痕無	SK421-13
	179	土師・輪高台碗	SK421-12	□11.5	H-A	10YR8/4・良	1/6	中1-I	内粗ミガキ	使用痕不明	SK421-14

3. 井戸・炉状遺構・H区ピット出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SE02	1	土師・平底碗	SE02-6	底6.0	H-A	10YR8/4・良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SE02-1
	2	土師・柱状碗	SE02中層	底6.0	H-B	7.5YR8/6・良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無, 外底面黒斑有	SE02-2
	3	土師・平底小皿	SE02中層	□9.2, 高2.5, 底5.4	H-D2	2.5Y8/2・不良	1/3	中1-II	底糸切り痕	使用痕無	SE02-4
	4	土師・平底小皿	SE02上層	□10.2, 高2.2, 底5.1	H-A	10YR8/3・良	3/5	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SE02-3
	5	土師・輪高台碗	SE02下層	台6.4, 台高0.55	H-A	10YR8/3・良	底片	中1-II	底ナデ消し, 内底指ナデ	内黒焼成	SE02-5
	6	土師・柱状小皿	SE02上層	底3.6	H-A	10YR7/2・良好	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SE02-6
	7	土師・柱状碗	SK400-90	底6.6	H-B	7.5YR7/6・不良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK400-11
	8	土師・柱状碗	SK400-2	底6.6	H-A	7.5YR8/1・良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK400-12
	9	土師・輪高台碗	SK400-20	台6.9, 台高0.3	H-C	7.5YR7/6・良	2/3	中1-II	底糸切り痕, 外底凹痕	使用痕無	SK400-13
	10	土師・平底小皿	SK400-3	□8.7, 高1.95, 底3.5	H-A	10YR8/3・良	3/4	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK400-4
	11	土師・平底小皿	SK400-51	□9.2, 高1.8, 底4.6	H-B	2.5YR7/6・良好	略完	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無, 外全体黒斑有	SK400-1
	12	土師・平底小皿	SK400B5	□8.8, 高1.85, 底4.4	H-D	5YR7/6・良	4/5	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK400-2
	13	土師・平底小皿	SK400B1	□10.2, 高2.9, 底4.6	H-D	10YR7/3・良	7/8	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK400-3
	14	土師・柱状小皿	SK400-25	底4.7	H-B	7.5YR7/8・良	2/3	中1-II	底右糸切り痕, 外底凹痕	使用痕無	SK400-6
SE02 外周土坑 (SK400)	15	土師・柱状小皿	SK400B上・117	□9.6, 高3.05, 底4.4	H-D2	2.5YR7/8・良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無, 内外火色有	SK400-5
	16	土師・柱状小皿	SK400-27	底3.4	H-D2	7.5YR8/4・良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK400-7
	17	土師・柱状小皿	SK400-80	底4.5	H-D2	2.5YR7/6・不良	底片	中1-II	外底凹痕	底部上からの穿孔で貫通	SK400-8
	18	土師・柱状小皿	SK400-68	底4.2	H-D2	5YR8/4・良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	SK400-9
	19	土師・平底碗	SK400-69	底5.4	H-D	10YR7/4・良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無, 内黒焼成	SK400-14
	20	土師・柱状碗	SK400D下層	底5.9	H-A	10YR8/4・良好	1/6	中1-II	底糸切り痕	使用痕無, 内黒焼成	SK400-16
	21	土師・輪高台碗	SK400B3・F34	□14.4, 高4.7, 台6.3, 台高0.5	H-B	2.5YR7/6・良好	2/5	中1-II	底ナデ消し, 内口ロナデ	使用痕無, 内黒焼成	SK400-17
	22	土師・輪高台碗	SK400-114	台6.8, 台高0.4	H-A	5YR7/6・良	底片	中1-II	底ナデ消し, 内底粗ミガキ	使用痕無, 内黒焼成	SK400-18
	23	灰釉・有台碗	SK400-33	台6.8, 台高0.9	東濃産	2.5Y7/1・堅緻	底片	明和27窟	底回転ミガキ	内底摩耗強	SK400-5
	24	灰釉・有台碗(小)	SK400A上+も28・よ26・ゆ26・29・め28	□10.6, 高3.0, 台5.4, 台高0.35	東濃産	2.5Y7/1・堅緻	1/3	明和27窟		内面上半に輪	SK400-4
	25	白磁・碗	SK400-84+ら29Fマ	□11.5	輪色7.5Y7/1	2.5Y8/1・堅緻	1/6	山本C期	山本白磁分類V1b類	内側に輪に輪ダレ	SK400-⑥
26	白磁・皿	SK400D上・A上+ら26Fマ	□11.2	輪色10GY8/1	2.5Y8/1・堅緻	1/10	山本C期	山本白磁分類V2類		SK400-⑦	
SJ70	27	土師・輪高台碗(小)	SJ70B床土中	台5.3, 台高0.4	H-A	10YR6/2・良	底片	中1-I?	内ミガキ, 底ナデ消し	使用痕無	SJ70-1
	SJ71	28	土師・柱状小皿	SJ71-6	□9.0, 高3.0, 底4.3	H-D2	10YR7/3・不良	5/6	中1-II		使用痕不明
H区 中世 ピット	29	土師・平底小皿	P242	□9.0, 高2.4, 底4.8	H-A	10YR8/4・良	7/8	中1-II	底右糸切り痕, 外底凹痕	使用痕無	P-8
	30	土師・平底小皿	P242	□9.4, 高2.1, 底4.5	H-D2	7.5YR8/6・良	略完	中1-II	底右糸切り痕		P-10
	31	土師・柱状小皿	P242	□8.6, 高2.6, 底5.0	H-D2	7.5YR8/6・良	3/4	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	P-13
	32	土師・平底碗	P250	□11.3, 高3.2, 底4.0	H-D2	10YR8/3・良	完形	Ⅱ2新	底右糸切り痕	使用痕無	P-5
	33	土師・大皿	P393	□15.4, 高3.7	H-A-C近似	10YR8/3・良	1/2	中1-II	非口クロ成形, 外体-底指ナデ痕, 内ハケナア, 口縁部2段ナデ	京都系土師器祖模倣品, 外内葉付着	P-3
	34	土師・平底小皿	P503	□8.2, 高1.8, 底5.0	H-A	10YR7/4・良	5/6	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	P-6
	35	土師・平底小皿	P508	□9.8, 高2.4, 底6.4	H-C	10YR7/4・不良	2/5	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	P-12
	36	土師・平底小皿	P851	□9.4, 高1.9, 底4.4	H-C	5YR6/6・良	2/3	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無, 内黒斑有	P-9
	37	土師・平底碗	P1024	□12.3, 高3.2, 底6.0	H-A3	10YR8/4・良	3/5	Ⅱ2新	底右糸切り痕	使用痕無	P-4
	38	土師・輪高台碗	P1042	□14.6, 高5.4, 台7.6, 台高0.7	H-A3	10YR8/3・良好	1/4	Ⅱ2古	外体下半~底ケズリ, 内密ミガキ	使用痕無	P-17

4. 中世土器溜り遺構出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
	1	土師・平底碗	り31㍑	□122,高38,底5.4	H-A3	75YR8/3-良	2/5	Ⅱ2	底糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-32
	2	土師・平底碗	り27・30㍑	□117,高39,底5.5	H-A3	75YR8/4-良好	1/3	Ⅱ2	底糸切り痕	使用痕無,黒斑有	H9㍑-1-31
	3	土師・輪高台碗	り31㍑	台6.8,台高0.8	H-A	75YR5/1-良	底片	Ⅱ2	底ナデ消し		H9㍑-1-66
	4	土師・輪高台碗	り31㍑	台6.8,台高0.65	H-A3	75YR8/4-良好	底片	Ⅱ2	底ナデ消し		H9㍑-1-62
	5	土師・輪高台碗	り31㍑	台6.0,台高0.3	H-A3	10YR8/3-良	底片	Ⅱ2			H9㍑-1-63
	6	土師・輪高台碗	り30㍑	台6.7,台高0.7	H-A	10YR8/4-良	底片	Ⅱ2	底ナデ消し		H9㍑-1-61
	7	土師・輪高台碗	り32㍑	台7.2,台高0.5	H-A3	75YR8/4-良	底片	Ⅱ2	底ナデ消し	使用痕無	H9㍑-1-56
	8	土師・平底小皿	り30㍑	□102,高24.5,底5.9	H-A3	10YR8/3-良	略完	Ⅱ2	底右糸切り痕	使用痕無,底中央穿孔	H9㍑-1-129
	9	土師・平底碗	り32㍑	□13.3,高3.55,底6.1	H-D2	25YR6/3-不良	1/3	中-I-11			H9㍑-1-24
	10	土師・輪高台碗	り30㍑	台7.2,台高0.8	H-D	75YR7/4-良	底片	中-I-11	底ナデ消し		H9㍑-1-67
	11	土師・輪高台碗	り29㍑	台7.0,台高0.6	H-D	75YR7/4-良	底片	中-I-11	底ナデ消し		H9㍑-1-60
	12	土師・輪高台碗	り31㍑	台11.1,台高1.0	H-D2	10YR8/3-不良	底片	中-I-11			H9㍑-1-68
	13	土師・平底小皿	り31㍑	□19.9,高1.9,底5.0	H-A	75YR7/2-不良	1/4	中-I-11	底右糸切り痕	内煤痕	H9㍑-1-107
	14	土師・平底小皿	り29㍑	□19.3,高2.25,底4.2	H-A	10YR8/1-良	3/4	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-126
	15	土師・平底小皿	り31㍑	□19.3,高2.1,底4.6	H-B	5YR7/4-良好	3/4	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-134
	16	土師・平底小皿	り33㍑	□19.6,高2.1,底5.0	H-A	10YR8/2-良	1/3	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無,内外黒斑有	H9㍑-1-121
	17	土師・平底小皿	り30㍑	□19.9,高1.8,底5.1	H-A	10YR8/3-良	完形	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-135
	18	土師・平底小皿	り31	□19.2,高1.9,底4.3	H-A	10YR8/3-良	2/5	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-97
	19	土師・平底小皿	り33㍑	□10.2,高2.0,底5.3	H-B	75YR8/6-良	2/3	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-114
	20	土師・平底小皿	り31㍑	□19.0,高2.5,底4.4	H-B	75YR8/6-良	3/4	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-106
	21	土師・平底小皿	り30㍑	□19.5,高2.2,底5.0	H-D	10YR8/2-不良	略完	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-138
	22	土師・平底小皿	り29㍑	□10.2,高2.3,底5.0	H-D2	10YR8/4-良	1/3	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-125
	23	土師・柱状小皿	り31㍑	底3.9	H-A	75YR6/4-良好	2/5	中-I-11	底右糸切り痕		H9㍑-1-165
	24	土師・柱状小皿	り30㍑	底4.6	H-C	10YR8/4-不良	底片	中-I-11	底糸切り痕		H9㍑-1-172
	25	土師・輪高台碗	り29㍑	□15.7,高5.7,台6.2,台高0.3	H-A	10YR8/3-良	1/2	中-I-11	底ナデ消し,内口クロナデ	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-180
	26	土師・輪高台碗	り31㍑	□15.1	H-A	10YR8/3-良	1/5	中-I-11	内ミガキ	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-185
	27	土師・輪高台碗	り31㍑	台6.0,台高0.35	H-A	75YR7/4-良	底片	中-I-11	底ナデ消し	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-193
	28	土師・輪高台碗	り31㍑	台6.4,台高0.3	H-A	5YR7/4-良	底片	中-I-11	底ナデ消し,内口クロナデ	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-164
	29	土師・輪高台碗	り29㍑	□16.0	H-D	10YR8/3-良	1/5	中-I-11	内口クロナデ	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-186
	30	土師・輪高台碗	り32㍑	台6.5,台高0.5	H-C	10YR7/3-良	底片	中-I-11	底菊花状かき出し高台	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-195
	31	土師・柱状小皿	り30㍑	底6.0	H-A	10YR7/3-良	1/2	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-200
	32	土師・柱状小皿	り32㍑	底5.6	H-A	10YR8/4-良	底片	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-205
	33	土師・柱状小皿	り29㍑	□14.4,高5.6,底4.8	H-D	10YR8/2-良	1/2	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-207
	34	土師・平底碗	り31㍑	□14.6,高3.5,底6.0	H-D2	10YR8/6-不良	1/5	中-I-12			H9㍑-1-29
	35	土師・柱状小皿	り30㍑	底6.8	H-D	10YR8/2-不良	底片	中-I-11	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-50
	36	土師・平底小皿	り33	□18.9,高2.2,底4.0	H-A	10YR8/2-不良	1/3	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-118
	37	土師・平底小皿	り32㍑	□18.6,高2.1,底4.2	H-A	10YR8/3-不良	2/3	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-139
	38	土師・平底小皿	り33	□18.5,高2.4,底3.8	H-A	75YR8/4-良	略完	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無,内外黒斑有	H9㍑-1-116
	39	土師・平底小皿	り31㍑	□17.8,高1.55,底5.0	H-A	10YR8/4-良	2/5	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-108
	40	土師・平底小皿	り30㍑	□17.9,高2.0,底4.8	H-A	10YR7/3-不良	1/5	中-I-12	底糸切り痕		H9㍑-1-127
	41	土師・平底小皿	り31㍑	□18.4,高1.7,底5.25	H-B	75YR7/4-良	3/4	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-131
	42	土師・平底小皿	り29	□19.4,高1.4,底4.2	H-D	75YR8/3-良	1/2	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-144
	43	土師・平底小皿	り30㍑	□18.8,高2.3,底3.8	H-D	75YR7/4-良	1/4	中-I-12	底糸切り痕		H9㍑-1-143
	44	土師・平底小皿	り31㍑	□19.2,高2.5,底4.3	H-D2	5YR6/6-良	1/2	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-105
	45	土師・平底小皿	り31㍑	□18.6,高2.0,底4.0	H-D2	10YR8/3-良	2/5	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-112
	46	土師・平底小皿	り32㍑	□18.9,高2.0,底5.0	H-D2	10YR8/1-良	1/3	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-140
	47	土師・平底小皿	り30㍑	□18.4,高2.2,底4.3	H-C	75YR7/6-良	完形	中-I-12			H9㍑-1-136
	48	土師・平底小皿	り33㍑	□18.6,高2.0,底5.0	H-C	75YR7/6-良	1/3	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-117
	49	土師・平底小皿	り33	□19.4,高1.9,底5.1	H-C	75YR7/4-良	2/3	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-115
	50	土師・平底小皿	り30㍑	□19.2,高2.3,底5.8	H-C	75YR7/8-良	1/4	中-I-12	底糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-128
	51	土師・平底小皿	り33㍑	□18.9,高2.2,底6.4	H-C	75YR7/6-良	1/4	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-119
	52	土師・平底小皿	り31㍑	□18.7,高1.8,底7.0	H-C	10YR7/4-良	2/5	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-109
	53	土師・平底小皿	り31㍑	□18.0,高1.8,底6.0	H-C	5YR6/4-良	1/5	中-I-12	底糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-141
	54	土師・平底小皿	り31㍑	□18.4,高1.7,底6.0	H-C	75YR8/4-不良	1/6	中-I-12	底糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-132
	55	土師・柱状小皿	り31㍑	底4.2	H-D2	10YR8/4-良	底片	中-I-12	底右糸切り痕,外底凹痕	使用痕無	H9㍑-1-156
	56	土師・柱状小皿	り31㍑	□18.9,高3.5,底4.6	H-D	10YR8/4-不良	2/3	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-150
	57	土師・柱状小皿	り30㍑	□19.0	H-D2	10YR8/4-不良	1/2	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-149
	58	土師・柱状小皿	り29㍑	底4.6	H-A	10YR7/3-良好	底片	中-I-12	底右糸切り痕	内底凹痕	H9㍑-1-151
	59	土師・柱状小皿	り33㍑	□19.4,高2.0,底3.8	H-D2	10YR8/4-不良	2/3	中-I-12	底糸切り痕	内底凹痕	H9㍑-1-158
	60	土師・柱状小皿	り32㍑	□19.2,高2.8,底4.0	H-D2	75YR8/4-良	3/4	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-164
	61	土師・柱状小皿	り31㍑	底4.0	H-D2	10YR8/2-不良	底片	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無	H9㍑-1-152
	62	土師・輪高台碗	り30㍑	台6.5,台高0.4	H-D	10YR8/3-良	1/2	中-I-12	底ナデ消し,内口クロナデ	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-187
	63	土師・柱状小皿	り31㍑	底6.8	H-A	10YR7/3-良好	1/6	中-I-12	底糸切り痕	内煤付着,内黒焼成	H9㍑-1-203
	64	土師・柱状小皿	り28㍑	底7.1	H-D2	5YR7/4-良	底片	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-204
	65	土師・柱状小皿	り29㍑	底4.0	H-A	75YR8/4-良好	1/2	中-I-12	底右糸切り痕	使用痕無,内黒焼成	H9㍑-1-210
	66	土師・鍋	り31㍑	□125.8,胴21.0,胴21.0	輸入	5YR6/5-良好	1/15	中-I-12	非口クロ,内外指ナデ	外煤	H9㍑-1-2
	67	灰釉・有台碗	り32・り33・34㍑	□14.8,高5.3,台6.9,台高0.6	東濃産	10YR8/1-良好	1/10	西坂I窯		無釉	H9㍑-1-56
	68	灰釉・有台碗	り30・31・り30㍑	□14.9	東濃産	25Y7/1-良好	1/10	明和27窯	内底見込み段	内外無釉	H9㍑-1-60
	69	灰釉・有台碗	り33㍑	台7.4,台高0.8	東濃産	25Y7/1-良好	底片	明和27窯	底ナデ消し	使用痕無,内体施釉	H9㍑-1-62
	70	灰釉・小瓶	り32・33㍑	胴7.6,台4.8,台高0.4	未知産	10YR7/1-良好	1/2	?	底ナデ消し,胴下位沈澱2段	使用痕無	H9㍑-1-63
	71	白磁・碗	り32㍑	□115.6	輪色75Y8/1	5Y7/1-良好	1/20	山本B期	山本白磁分類Ⅱ1類,玉縁中口縁		H9㍑-1-77
	72	白磁・碗	り26・り30㍑	□115.4	輪色75GY8/1	N8/0-堅緻	口縁片	山本B期	山本白磁分類Ⅱ1類,玉縁中口縁		H9㍑-1-83
	73	白磁・碗	り32㍑	□116.8	輪色5Y8/2	25Y7/1-堅緻	1/5	山本C期	山本白磁分類Ⅱ1類,玉縁小口縁	細貫入	H9㍑-1-68
	74	白磁・碗	り31㍑	-	輪色25Y8/1	10YR8/1-良好	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅱ1類,玉縁小口縁	細貫入	H9㍑-1-86
	75	白磁・碗	り31	-	輪色10YR8/1	N8/0-良好	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅱ1類,玉縁小口縁	細貫入	H9㍑-1-88
	76	白磁・碗	り31・32・り32㍑	□116.6,高6.4,台6.8,台高0.25	輪色10YR8/2	10YR8/1-良好	1/10	山本C期	山本白磁分類Ⅱ5類,玉縁長口縁		H9㍑-1-66
	77	白磁・碗	り29	□117.6	輪色25GY7/1	N7/0-堅緻	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅱ1類,玉縁大口縁		H9㍑-1-16
	78	白磁・碗	り30㍑	台6.8,台高0.6	輪色25GY8/1	25Y8/1-堅緻	底片	?	底ケズリ出し		H9㍑-1-72
	79	白磁・皿	り31㍑	底3.0	輪色5Y7/2	5Y7/1-良好	1/15	山本C期	山本白磁分類Ⅱ1類,底ケズリ		H9㍑-1-94

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
	80	土師・平底碗	り267*7	□112.6,高34.底5.7	H-A	75YR8/3-良	1/4	中1-II	底糸切り痕	使用痕無	H9*712-30
	81	土師・平底碗	り267*7	□112.4,高43.底5.6	H-A	10YR8/2-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-39
	82	土師・平底碗	り267*7	□112.8,高37.底5.6	H-A3	75YR8/2-良	1/3	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-27
	83	土師・平底碗	り267*7	□114.2,高37.底5.6	H-D	10YR8/3-不良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-26
	84	土師・平底碗	り267*7	□114.6,高49.底5.9	H-D	10YR8/2-不良	1/4	中1-II			H9*712-35
	85	土師・平底碗	り267*7	□114.2,高43.5.底6.0	H-D2	10YR8/3-良	1/3	中1-II	底糸切り痕	使用痕無	H9*712-25
	86	土師・平底碗	り257*7	□116.0,高58.底6.6	H-D2	10YR8/3-良好	2/5	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-41
	87	土師・平底碗	り277*7	□112.6,高34.底5.6	H-D2	75YR7/8-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-40
	88	土師・平底碗	り267*7	底5.4	H-D2	75YR8/2-良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-2
	89	土師・柱状碗	り277*7	□114.2,高42.底5.8	H-A	75YR8/1-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-46
	90	土師・柱状碗	り267*7	□114.8,高52.底5.6	H-A	75YR8/1-良	2/5	中1-II	底糸切り痕	使用痕無	H9*712-47
	91	土師・柱状碗	り277*7	底6.0	H-A	10YR7/2-良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-45
	92	土師・輪高台碗	り277*7	台7.0,台高0.7	H-D2	75YR8/4-不良	底片	中1-II			H9*712-59
	93	土師・輪高台碗	り277*7	台7.5,台高1.3	H-D2	75YR8/6-良	底片	中1-II			H9*712-65
	94	土師・輪高台碗	り267*7	台10.0,台高1.5	H-C	5YR7/4-良	底片	中1-II	底糸切り痕	内煤痕	H9*712-197
	95	土師・平底小皿	り267*7	□110.4,高23.底4.9	H-A	10YR7/3-良好	1/2	中1-II	底右糸切り痕	内外黒煤有	H9*712-208
	96	土師・平底小皿	り267*7	□110.2,高25.底5.1	H-B	75YR8/4-良	2/3	中1-II	底糸切り痕	使用痕無	H9*712-101
	97	土師・平底小皿	り277*7	□19.6,高22.底4.6	H-A	10YR8/2-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-95
	98	土師・平底小皿	り277*7	□19.7,高22.底4.4	H-A	10YR8/3-良	7/8	中1-II	底右糸切り痕、内底ラセン状ナデ	使用痕無	H9*712-80
	99	土師・平底小皿	り267*7	□19.6,高19.底4.0	H-A	10YR8/3-良	3/5	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-104
	100	土師・平底小皿	り267*7	□19.8,高20.5.底4.8	H-A	10YR8/2-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-76
	101	土師・平底小皿	り277*7	□19.2,高21.底4.2	H-B	10YR7/4-良好	7/8	中1-II	底右糸切り痕	ゆがみ有	H9*712-81
	102	土師・平底小皿	り277*7	□19.4,高15.底5.4	H-B	10YR8/4-良	完形	中1-II	底右糸切り痕	ゆがみ有	H9*712-94
	103	土師・平底小皿	り267*7	□110.0,高17.底5.0	H-A	10YR8/3-良	略完	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-75
	104	土師・平底小皿	り267*7	□18.9,高21.底4.6	H-A	10YR8/3-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-87
	105	土師・平底小皿	り267*7	□18.9,高18.底4.0	H-A	10YR8/4-良	完形	中1-II	底右糸切り痕	ゆがみ有	H9*712-79
	106	土師・平底小皿	り257*7	□18.3,高20.底4.2	H-A	10YR8/2-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-71
	107	土師・平底小皿	り277*7	□19.2,高21.底3.9	H-D2	10YR8/4-良	3/5	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-91
	108	土師・平底小皿	り267*7	□19.0,高21.底4.1	H-B	5YR7/6-良	完形	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-72
	109	土師・平底小皿	り267*7	□19.8,高26.底4.2	H-B	75YR7/8-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	外口縁に棒状黒煤有	H9*712-74
	110	土師・平底小皿	り267*7	□19.6,高27.底5.5	H-A3	75YR7/6-良好	1/3	中1-I?	底右糸切り痕	使用痕無、外火色有	H9*712-102
	111	土師・平底小皿	り277*7	□19.3,高20.底4.8	H-A	10YR8/2-良	2/3	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-93
	112	土師・平底小皿	り267*7	□19.6,高24.底4.3	H-D2	75YR7/6-良	2/3	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-78
	113	土師・平底小皿	り277*7	□19.6,高20.底4.3	H-D2	10YR8/2-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-96
	114	土師・平底小皿	り277*7	□19.6,高15.底3.5	H-D2	10YR8/4-不良	2/5	中1-II	底糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	H9*712-122
	115	土師・平底小皿	り277*7	□19.6,高24.底6.0	H-D2	10YR8/3-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-90
	116	土師・平底小皿	り257*7	□19.4,高20.底5.0	H-D2	10YR8/4-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-124
	117	土師・輪高台小皿	り247*7	□19.6,高36.5.台5.0,台高0.8	H-D	10YR8/1-良	2/3	中1-II	底ナデ消し	使用痕無	H9*712-179
	118	土師・輪高台小皿	り277*7	□110.5,高30.5.台5.4,台高1.35	H-D2	5YR7/6-良	3/4	中1-II	底糸切り後ナデ	使用痕無	H9*712-177
	119	土師・輪高台小皿	り267*7	台5.8,台高1.1	H-D2	75YR7/6-良	底片	中1-II	底ナデ消し		H9*712-178
	120	土師・輪高台小皿	り267*7	台5.4,台高0.85	H-D2	5YR7/6-良	1/2	中1-II	底ナデ消し	使用痕無	H9*712-175
	121	土師・輪高台小皿	り267*7	台4.9,台高0.5	H-D2	10YR8/3-良	1/3	中1-II	底ナデ消し		H9*712-174
	122	土師・柱状小皿	り277*7	底4.2	H-A	10YR8/4-良好	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-146
	123	土師・柱状小皿	り267*7	底4.0	H-B	75YR7/4-良	底片	中1-II	底右糸切り痕、外底凹痕	使用痕無	H9*712-155
	124	土師・柱状小皿	り267*7	底3.6	H-B	75YR7/6-良	底片	中1-II	底右糸切り痕		H9*712-154
	125	土師・柱状小皿	り267*7	底4.4	H-D	10YR8/1-良	1/2	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無	H9*712-167
	126	土師・柱状小皿	り277*7	底4.6	H-C	10YR8/6-不良	底片	中1-II	底糸切り痕		H9*712-166
	127	土師・輪高台碗	り267*7	□115.2,高57.台7.4,台高0.3	H-A3	75YR8/5-良	2/3	中1-II	底ナデ消し、内粗ミガキ	使用痕無、内黒煤成	H9*712-182
	128	土師・輪高台碗	り267*7	□116.4,高58.台5.6,台高0.4	H-A	10YR8/4-不良	2/3	中1-II	底ナデ消し、内クロクロナデ	使用痕無、内黒煤成	H9*712-184
	129	土師・輪高台碗	り257*7	□113.0,高45.台5.8,台高0.4	H-A3	75YR8/5-良	1/2	中1-II	底ナデ消し、内ミガキ	使用痕無、内黒煤成	H9*712-196
	130	土師・輪高台碗	り257*7・り277*7	台6.8,台高0.5	H-A	75YR8/4-良	1/3	中1-II	底ナデ消し、内縁らにミガキ	使用痕無、内黒煤成	H9*712-192
	131	土師・輪高台碗	り277*7	台6.7,台高0.2	H-A	10YR8/3-良	底片	中1-II	底ナデ消し、内ミガキ	内黒煤成	H9*712-188
	132	土師・輪高台碗	り277*7	台7.2,台高0.3	H-A	75YR7/3-良	底片	中1-II	底ナデ消し、内ミガキ	内黒煤成	H9*712-190
	133	土師・輪高台碗	り257*7	□115.2,高57.台6.6,台高0.3	H-D	10YR8/3-良	3/5	中1-II	底ナデ消し	使用痕無、内黒煤成	H9*712-181
	134	土師・輪高台碗	り257*7	□113.3,高52.台6.6,台高0.4	H-D2	75YR8/4-良	1/3	中1-II	底ナデ消し、内ミガキ	使用痕無、内黒煤成	H9*712-183
	135	土師・輪高台碗	り277*7	台6.4,台高0.4	H-D	10YR8/2-良	底片	中1-II	底ナデ消し、内クロクロナデ	内黒煤成	H9*712-189
	136	土師・柱状碗	り267*7	□115.2,高93.底7.7	H-D	10YR8/4-良	3/4	中1-II	底右糸切り痕、内ミガキ入念	使用痕無	H9*712-202
	137	土師・柱状碗	り277*7	底6.6	H-D	75YR7/4-良	底片	中1-II	底糸切り痕、内ミガキ入念	使用痕無	H9*712-201
	138	土師・柱状小皿	り277*7	底4.4	H-A	10YR7/2-良好	1/2	中1-II	底右糸切り痕	内黒煤成、底中央に空洞	H9*712-212
	139	土師・柱状小皿	り267*7	底3.9	H-D2	75YR7/5-良	底片	中1-II	底右糸切り痕、外底凹痕	内黒煤成	H9*712-213
	140	土師・浅鍋	り277*7	□139.6	H-A	10YR8/3-良	1/20	Ⅱ2	クロクロナデ、外下キケズリ	外煤痕	H9*712-1
	141	土師・浅鍋	り267*7	□137.4	H-A	75YR7/4-良	口縁片	Ⅱ2	クロクロナデ	外煤痕	H9*712-1
	142	土師・鍋	り317*7	□131.6,胴27.0,胴27.0	輸入	5YR5/4-良好	1/10	中1-II	非クロクロナデ	外煤	H9*712-1
	143	土師・鍋	り327*7	底8.4	H-D2	5YR6/4-良	底片	中1-II	底右糸切り痕	使用痕無、内底煤	H9*712-2
	144	灰軸・有台碗	り277*7・り24・り23・り26	□115.1	東濃窯産	25Y7/1-堅緻	1/6	明和27窯	底ナデ消し	使用痕無、内面体部施釉	H9*712-58
	145	灰軸・有台碗	り257*7	台7.0,台高1.0	東濃窯産	10YR7/1-堅緻	底片	丸石2窯	底ナデ消し	内底摩耗中、内外体部施釉	H9*712-28
	146	灰軸・有台碗	り227*7・り257*7	台6.7,台高0.9	東濃窯産	10YR7/1-堅緻	底片	丸石2窯	底ナデ消し	内底摩耗中、内外体部下位まで施釉	H9*712-64
	147	灰軸・有台碗	り277*7	台6.4,台高0.8	東濃窯産	25Y6/1-堅緻	底片	明和27窯	底ナデ消し	内底摩耗中、無釉?	H9*712-61
	148	灰軸・有台碗	り267*7	台8.0,台高0.55	東濃窯産	25Y7/1-堅緻	底片	西坂1窯	底糸切り痕	内底摩耗中、無釉?	H9*712-65
	149	白磁・碗	り27・り22・り26・り32・り25・り32・り27・り30・り30*7	□116.8	輪色25GY7/1	25Y7/1-堅緻	1/8	山本B期	山本白磁分類Ⅱ1類、玉縁中口縁		H9*712-70
	150	白磁・碗	り267*7・り317*7	-	輪色75GY7/1	N8/0-良好	口縁片	山本B期	山本白磁分類Ⅱ1類、玉縁中口縁	細貫入	H9*712-74
	151	白磁・碗	り257*7	-	輪色75Y7/1	25Y7/1-堅緻	口縁片	山本B期	山本白磁分類Ⅱ1類、玉縁中口縁	貫入少	H9*712-80
	152	白磁・碗	り24・り25*7	□115.6	輪色5Y8/1	25Y8/1-良好	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅱ1類、玉縁小口縁	細貫入	H9*712-78
	153	白磁・碗	り25・り26*7	□116.6	輪色5Y7/2	N8/0-良好	1/20	山本C期	山本白磁分類Ⅱ5類、玉縁長口縁		H9*712-79
	154	白磁・碗	り267*7	-	輪色5Y8/2	25Y8/1-良	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅱ1類、玉縁小口縁	細貫入	H9*712-30
	155	白磁・碗	り26・り26・り23*7	□115.9	輪色25GY7/1	N7/0-堅緻	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅱ5類? 玉縁中口縁		H9*712-76
	156	白磁・碗	り267*7	-	輪色25GY8/1	25Y8/1-良好	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅱ5類、玉縁長口縁		H9*712-87

付表2 額見町遺跡Ⅴ報告区域出土中世遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実面番号
H区 中世 2号 土器 77号	157	白磁・碗	ヤ24・25・26・27	□16.2	釉色75Y7/2	N8/0-堅緻	1/15	山本C期	山本白磁分類Ⅰb類、 玉縁大口縁		H77-92-69
	158	白磁・碗	ら257号	-	釉色5Y8/1	N8/0-堅緻	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅰb類、 玉縁大口縁		H77-92-75
	159	白磁・碗	ら257号	-	釉色25GY7/1	2.5Y8/1-堅緻	口縁片	山本C期	山本白磁分類Ⅰb類、 玉縁大口縁		H77-92-90
	160	白磁・碗	も25・よ26・り26・れ28・297号	□16.0、高推6.35、台7.0、 台高0.25	釉色10Y8/1	2.5Y8/1-堅緻	1/8	山本C期	山本白磁分類Ⅱ3類、底ケズ り出し	使用痕無	H77-92-67
	161	白磁・碗	よ277号・ら24・も29・り32・33・よ25 +土器77号5-I	□15.4、高6.0、台6.9、 台高0.9	釉色5GY8/1	N8/0-堅緻	1/5	山本C期	山本白磁分類ⅠV類、ケズリ 出し高台	使用痕無	H77-92-82
H区 中世 3号 土器 77号	162	土師・平底小皿	り237号	□8.5、高1.8、底4.2	H-A	10YR8/4-不良	2/3	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	H77-93-1
	163	土師・平底小皿	り237号	□10.2、高2.0、底5.0	H-A	10YR8/4-良	7/8	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	H77-93-2
	164	土師・平底小皿	り237号	□9.1、高1.6、底5.1	H-A	10YR8/4-良好	略完	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有、底面 に糸切りクズ粘土片付着	H77-93-3
	165	土師・平底小皿	り237号	□8.5、高2.2、底4.2	H-A	10YR8/3-良	略完	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有、底面 に糸切りクズ粘土片付着	H77-93-6
	166	土師・平底小皿	り237号	□9.4、高1.8、底4.5	H-A	10YR8/3-良	完形	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	H77-93-8
	167	土師・平底小皿	り237号	□9.6、高1.5、底4.3	H-A	10YR8/3-良	略完	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	H77-93-5
	168	土師・平底小皿	り237号	□8.6、高2.0、底4.2	H-A	10YR8/3-良	2/3	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	H77-93-4
	169	土師・平底小皿	り237号	□8.9、高1.8、底5.1	H-A	10YR8/4-良	6/7	中Ⅰ-ⅡⅠ	底右糸切り痕	使用痕無、ゆがみ有	H77-93-7

《額見町遺跡Ⅴ報告区域出土古代・中世遺物観察表凡例》

1. 種別・器種について

種別は土器素材の種別、または石製品、鉄、銅等の金属製品の種別を示す。特に土器素材については須恵器と須恵質土製品を須恵とし、土師器と土師質土製品を土師、陶磁器類については灰釉陶器や緑釉陶器、白磁、青磁などの種別を記した。器種名については、特に土器について、額見町遺跡Ⅱの分類案に基づいて記しているのを参照願いたい。

2. 法量について

観察表の法量に示す土器等容器類の口は口径、受は受け部径、返は返り径、鈕径は蓋のつまみ径、底は底部径、台は高台径、脚は脚部径、基は脚基部径、体は体部径、胴は胴部径、頸は頸部径を示し、高は器高、鈕高はつまみ高、立高は口縁部立ち上がり高、返高は返り高、坏高は坏部高、脚高は脚部高、胴高は胴部高、頸高は口頸部高を示す。器でないものについては、長は長軸長、短は短軸長、残長は残存部長、径は最大径、幅は最大幅、上や下は上端径と下端径、孔は孔径、また、特に部位記さずに○×○×としたものは基本的に長さ×幅×厚さを示す。単位は全てcmとした。

3. 胎土について

土器胎土については、古代須恵器、古代土師器、中世土師器については以下に示すおりであるが、灰釉陶器については想定される窯場産地を、白磁については特に比較する内容を示せなかつたので、胎土を記入せず、施釉の色調について記した。また、石製品は石材を記入し、鉄製品については無記入とした。

《古代須恵器胎土》

須恵器の胎土表記については、須恵器窯産地を表記し、南加通常は南加賀窯跡群北群ないしは戸津、二ツ梨などの主流地域の窯産地。南加南群は南加賀窯跡群南群つまり那谷川流域支群産を示す。能美は能美窯跡群産である。特に砂粒や小石、くず石などの含有物の多少のあるものはそれを付記し、砂の少ない良質のものは良土と記す。砂粒含有少なく胎土素地がやや砂粒質のものはサラ土とした。なお、他地域搬入と予測される胎土のものがあったが、和泉陶器窯産の可能性のあるものは陶器産、北加賀の金沢末窯跡群産、高松押水窯跡群産の可能性のあるものは末産、高松産とした。

《古代土師器胎土》

土師器は集落内や集落近傍での生産が予測される地元産と須恵器窯場内生産が予測される窯場産、上記と異なる他地域産と予測される搬入とに分類。さらに以下に細分できる。

- 地元A1 - 粘土質胎土で破面がガサツクもの。細砂粒(黒色・褐色・白色)を多量、黒色擬形鉱物を少量含有する。肌色かくすんだ色を呈するものが多い。
- 地元A2 - 地元A1の砂粒(白色・褐色)混在多い煮炊具系統胎土。但し混和材の大粒砂粒はない。
- 地元B1 - 地元A同様粘土質胎土だが、細砂粒少なく比較的均質な胎土。赤褐色系の濃肌色発色多い。
- 地元B2 - 地元Aよりも、やや大きめの白色粒や褐色粒多く含む煮炊具胎土。鉱物も含有。
- 地元C1 - 破面きれいな粉っぽい胎土のもの。細砂粒含有少なく、濃い肌色から白っぽい発色のものまである。くず石や黒色鉱物、赤色酸化鉄粒を若干含む。能美系統の胎土か?
- 地元C2 - 地元C1に白色くず石や鉱物粒子などをやや多めに混在させる煮炊具胎土。

地元D - 石英細粒を極めて多く含む砂粒質の胎土素地で、白色粒も含む。

地元E - 粘土質胎土素地に大粒の褐色系粒が極多量混在する。製塩土器系胎土。

窯場A1 - 細砂粒多量(地元Aより多)混在の破面ガサツク粘土質胎土で、黒色光る鉱物を含む。総体的に色調は薄い肌色系で南加賀窯産の可能性高い。

窯場A2 - 窯場A1に白色系砂粒を多量含有する煮炊具胎土。

窯場A3 - 窯場A2に褐色や赤色の大粒混和材が多量含有する煮炊具胎土。

窯場B1 - 細砂粒含有の少ない均質な粉っぽい胎土で、白色系から赤味強い発色。能美窯産と推察できる。

窯場B2 - 窯場B1に大粒砂粒(褐色・黄褐色・赤色)を混和材として多量入れる煮炊具胎土。

窯場C - 窯場B1に似るが、赤色酸化鉄粒含有し、赤く発色させる良質土。

搬入A1 - 海綿骨針含むサラサラの砂粒質胎土。砂粒含有少なく、金沢平野等で確認される北系胎土。

搬入A2 - 搬入A1に褐色や白色の大粒砂粒を含有する製塩土器胎土。赤く発色するものが多い。

《古代末～中世土師器胎土》

H-A - 細砂粒極多量含有する破面のガサツク胎土。薄い肌色発色で南加賀系統胎土。なお、小石多量含有のものは特にH-A2、破面はガサツクが、砂粒の目立たない濃肌色呈すものはH-A3とした。

H-B - A系統で類似するが破面ガサツクが強く、くすんだ赤褐色呈す胎土。小石多含有はH-B2とした。

H-C - 細砂粒混在のない粉っぽい胎土(やや粒子粗い)。海綿骨針を稀に含む北加賀系胎土。橙褐色を基本とするが、特に白色系ものはH-C2とする。

H-D - C類に似た粉っぽい胎土だが骨針は含まず、細砂粒を僅かに含有する胎土。白色系統の発色を基本とするが、赤味帯びる発色のものがあり、これはH-D2とした。

H-E - シルト質胎土素地。光る透明感ある鉱物多量含有。金沢末窯産的?

4. 色・焼について

土器の色・焼について(石・鉄は無記入)、色は土器器表面の中で主体を占める色調を、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」1994年版に基づき、その表示方法に従って示した。焼きは土器の焼成具合を、焼締まりの強い順から、堅緻一良好一良一不良の4段階表示で示した。

5. 時期について

観察表に示す時期は、田嶋明人氏の古代土器編年軸(田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」[シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題(報告編)]及び田嶋明人1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と年代」[シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相])に基づく編年標記で示す。古代土器は特に古代と記さず、中世土器のみ中○期と表記した。なお、当土器群の編年観は、『額見町遺跡Ⅱ』と『額見町遺跡Ⅲ』、本書の総括論文に示しているのを参照いただきたい。なお、田嶋編年に対する筆者の年代観については、その年代根拠を『額見町遺跡Ⅲ』と本書総括論文に示したが、三湖台地集落遺跡群編年区分を付記し、以下の表にまとめた。参照いただきたい。なお、これ以外の灰釉陶器、白磁については、灰釉陶器は東濃産灰釉陶器編年案(山内伸浩「結語」『白土原14号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会、1994年及び、尾野善裕「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』

第96号、1999年)、白磁は山本信夫編年案(山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」[概説 中世の土器・陶磁器]中世土器研究会、1995年)に基づいて記した。

6. 調整等について

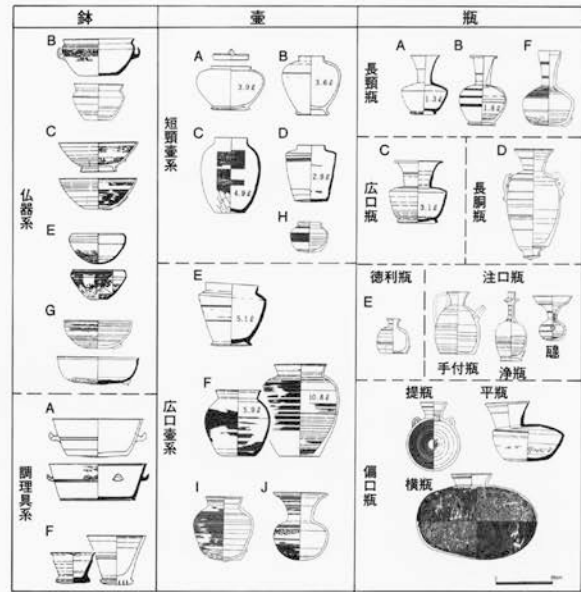
観察表に示す須恵器、土師器の調整等については主要な成形、調整痕跡のみを記載し、甕の叩き具種別については内堀信雄氏の分類案に基づき示した(内堀信雄1988「須恵器甕類に見られる叩き目文について」[シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題]。H類を平行線文、D類を同心円文とし、H a類は平行線彫り込みに直交して木目のあるもの、H b類は右上がり斜交の木目のあるもの、H c類は左上がり斜交木目のあるもの、H e類は木目の見えないもの、D a類は木目の見えないもの、D b類は同心円彫り込みに沿って同心円木目の見える芯材使用のもの、D c類は柁目状木目のもの、SD類は木製無文当て具の年輪痕跡のものとした。なお、白磁では山本信夫氏の大宰府白磁分類案を提示した。

7. 備考について

土器に関する備考では、煮炊き使用痕跡や使用に伴う磨耗痕、付着物、彩色や焼成状態、特殊な施文や施釉、器形特徴、ヘラ記号、重ね焼きを記した。なお重：○としたものは食膳具類の重ね焼き類型を示したもので、I類は蓋身を使用状態の正位で重ねる一段か二段積みもの。II類は蓋を逆位に身に重ねるもので、そのまま柱状に積み重ねるII a類と身蓋+蓋身+身蓋と交互に重ねるII b類とに分けられる。蓋と身を別々にそのまま柱状に重ねるものについてはIII類とした。なお、石製品や金属製品、土製品等については重量や特筆すべきことを記した。

8. 実測番号について

観察表で示す実測番号は、実測原因に記載された番号であり、資料に貼付した資料実測番号と対比可能である。ただ、須恵器と土師器、石製品等、種別により図に付した実測番号を分けたため、番号は重複する。



貯蔵具類器種分類図 (北野 1999 を加筆改変)

南加賀地域古代土器編年軸と三湖台編年、暦年代観

※ () 書きは標識古墳資料

三湖台編年	田嶋編年	細分案	南加賀遺跡群標識	能美遺跡群標識	暦年代観
1 B期	I 1期	古段階	金比羅山1号窟	(+)	7世紀1/4期
1 C期		新段階	金比羅山6号窟	八里向山J遺跡窟	7世紀2/4期
2 A期	I 2期		金比羅山5号窟	(河田山6号墳)	7世紀中頃
2 B期		II 1期	金比羅山7-2号窟	(+)	7世紀3/4期
3 A期	II 1~II 2期		(+)	湯屋B-1号窟	7世紀4/4期
3 B期		II 2期	古段階	戸津六字ヶ丘4号窟	(+)
		新段階	黒瀬2号窟	湯屋A I 2号窟	
3 C期	II 3期	古段階	桃の木山1号窟	湯屋A III支群窟	8世紀初頭
		中段階	戸津46号窟	米丸サクラマチ3号窟	8世紀前葉
		新段階	戸津28号窟	(+)	
3 D期	III 期	古段階	矢田野向山I-1窟	米丸サクラマチ1号窟	8世紀2/2期~8世紀中葉
		新段階	矢田野向山I-III窟	(+)	
4 A期	IV 1期	古段階	二ツ梨一貫山4号窟	八里向山J遺跡窟	8世紀中葉
		新段階	二ツ梨横川1号窟	和気峠山1号窟	
4 B期	IV 2期	古期	箱宮5号窟	和気小ショウブ谷1号窟	8世紀3/4期
5 A期		新期	二ツ梨一貫山9号窟	和気小ショウブ谷2号窟	8世紀4/4期
5 B期	V 1期		戸津5号窟	和気後山谷1号窟	8c末~9c初
5 C期		V 2期	戸津29号窟	和気白石窟	9世紀前葉
6 A期	VI 1期		戸津30号窟	大口窟	9世紀中頃
6 B期		古段階	戸津11号窟	(+)	9世紀後葉~10世紀初頭
		中段階	戸津9号窟	(+)	
	新段階	戸津35号窟・戸津8号窟	-		
6 C期	VI 3期	古段階	戸津37号窟・豆岡向山1A窟		10世紀前葉~950年頃
		中段階	戸津61号窟・戸津38号窟		
		新段階	豆岡向山7窟・戸津48号窟		
7 A期	VII 1期		耳聞山PO-1・額見町SK49		10世紀3/4期
7 B期		古期	千代オオキダ196土坑・額見町SK146		10世紀4/4期
7 C期		新期	敷地天神山・額見町SK110		1000年前後期
8 A期	中1-1期		額見町SK419・SK114・SK142		11世紀2/4期前後
8 B期		中1-II 1期	額見町SK472・SK396・B区上層ダマリ		1070~1110年頃
8 C期		中1-II 2期	額見町SK335・G区中世ダマリ1		1110~1150年頃

第Ⅳ章 総括

— 三湖台地集落遺跡群の古代後半期土器様相 —

1. はじめに

筆者は、2007年刊行の『額見町遺跡Ⅱ』の総括において、額見町遺跡の発掘調査資料及びその周辺の古代集落遺跡資料をもとに、「三湖台地集落遺跡群の古代前半期土器様相」と題する考察（以下「前半期考察」という）を行ったが、紙数の都合や検出遺構の偏りの関係から、8世紀中頃までを論述するにとどまった。そのため、本稿では前半期考察の続編として三湖台4期以降の土器様相について考察を加えるが、須恵器生産が終焉した以降の10世紀中頃～12世紀前半については『額見町遺跡Ⅲ』総括論稿（望月2008a）で述べているため、8世紀中頃～10世紀中頃のみを取り上げ、合わせて、前半期考察では触れられなかった、各期の暦年代観と画期観についてもまとめてみたい。

なお、本稿で述べる編年軸については、大筋では田嶋明人氏が1988年に発表した北陸古代土器編年軸（田嶋1988）に基づいている。ただ、前半期考察でも述べたように、当集落群資料を基軸に据えているため、田嶋編年とは時期区分に若干の差異があり、混乱を避けるため、時期呼称は三湖台○期とした。田嶋編年古代Ⅰ期から古代Ⅵ期までを、三湖台1期から三湖台6期と表記するもので、各期の概要を以下に示す。

- 1期……5世紀末以来の在来型とも言える伝統的な器種、器形、技法を保有する在来型土師器生産を堅持する段階であり、須恵器食膳具の定着とともに食膳具が増加していく段階。
- 2期……在来型土師器に、朝鮮半島や近江、丹波などの移民がもたらしたと予想される移民系土師器が加わるとともに、器種組成においても新旧交代の様相が見えてくる、旧来の在来型土師器生産に変質が見られる段階であり、日常食膳具における土師器から須恵器への置き換え、新たな食膳具組成の導入が見られる段階。
- 3期……移民系煮炊具の在地化とその影響による在来型煮炊具生産の変質、それに付随して生じた土師器生産の須恵器窯場導入がもたらした北陸型煮炊具が成立する段階であり、食膳具における置き食器への移行と宮都型の食膳具様式（律令的土器様式）の導入が見られる段階。
- 4期……在来型土師器生産の払拭と北陸型古代土器生産体制の確立が見られる段階であり、宮都型の食膳具様式を在地化させ、北陸型の古代食膳具様式を成立させる段階。
- 5期……北陸型古代食膳具様式が変質するとともに、素材や色において卓越性を表現できる器の組み合わせによって階層性を表現する王朝国家的食膳具様式への傾斜が始まる段階。
- 6期……王朝国家的食膳具様式を模索する中で須恵器生産の持つ意義が欠落し、須恵器生産は衰退、停止し、それとともに窯場での土師器生産も終焉、4期に確立した基幹的窯場での土器集約生産体制が崩壊する段階。

以上が編年軸の概要だが、各期の中で必要におうじて小期に細分して提示する。また、前半期考察において述べた三湖台4期前半については、その後の検討の中で大きく修正を加えたため、三湖台4期から再論する。

2. 各時期の土器様相

(1) 4期の土器様相

4期は額見町遺跡内で主要な建物様式が竪穴建物から掘立柱建物へと移行していく段階であるとともに、それまで拡大を続けてきた集落経営に停滞または衰退の様相を見せ始める段階である。この様相は三湖台地集落遺跡群（以下では「三湖台集落群」と呼称する）内全体で見られる傾向ではあるが、木場湯に面する島遺跡では当期の後半にピークを迎えているようで、衰退期というよりも集落が動く時期と評価するのが妥当と考える。

また、当期は3期の中で須恵器窯場内に導入された土師器生産が定着し、須恵器・土師器の集約生産が完成される段階である。つまり、北陸型古代土器生産体制の確立期であり、一郡一窯体制の完成期とも称される（望月1997）。同時に、3期に導入・定着を見た移民系煮炊具や宮都系土師器食膳具は北陸型煮炊具、ロクロ成形の赤彩土師器食膳具として定型化し、さらに3期に導入された宮都で成立の律令的土器様式（西1986、18-19頁）を在地化させ、北陸型古代食膳具様式と言えるような、食膳具様式と使用形態を在地の中で成立させる。当期前半では一部在地での土師器生産が遺存する傾向を見せるが、後半には須恵器窯場産に統一され、土師器煮炊具の器形、技法を統一させるとともに、土師器食膳具はヘラ切り椀Fから糸切り椀Aへ移行する。

以上が当期概要だが、前半期考察においては当期を4A期～4D期の4期区分とし、4A期を矢田野向山1号窯Ⅲ次窯に対比させ田嶋編年Ⅲ期新段階に、4B期を二ツ梨横川1号窯に対比させⅣ1期に、4C期を箱宮5号窯に対比させⅣ2古期に、4D期を二ツ梨峠山10B号窯に対比させⅣ2新时期に該当させたが、今回資料再検討した結果、前半期とした4A・B期については、須恵器窯資料では矢田野向山1号窯Ⅲ次窯→二ツ梨一貫山4号窯→二ツ梨横川1号窯の時期変遷が確認されるものの、額見町遺跡資料で見る限り、共伴する土師器食膳具、煮炊具においては土器様相の明確な変化を見出しにくく、型式を画すまでには至らないという結論に達し、1時期にまとめることとした。また、4D期とした古代Ⅳ2新时期についても、画期評価の点からⅣ2古期とⅣ2新时期との境で期を分けるのが妥当と判断し、5期に下げることとした。つまり、三湖台4期は南加賀窯跡群Ⅲ期新段階～Ⅳ1期に併行させて4A期、南加賀窯跡群Ⅳ2古期に併行させて4B期を設定し、2時期区分としたい。

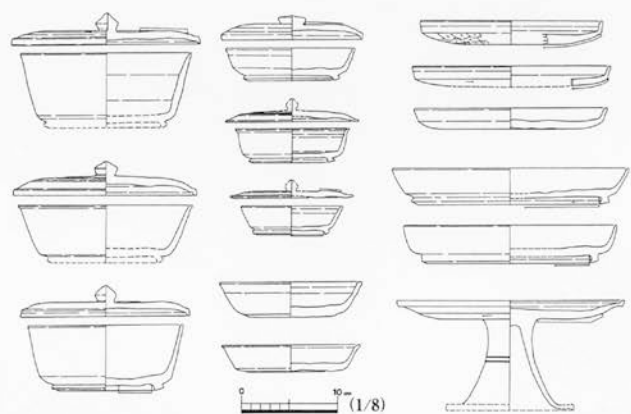
a. 4A期 (第105図)

4A期は、3D期の高級遺跡に先駆的に導入された律令的土器様式が生産の場に浸透し、在地化された食膳具様式として成立することを編年指標とする。標識資料としては、須恵器はSK55とSK385を中心に、土師器食膳具はSI09とSI86を中心に、土師器煮炊具はSI09とSK10を中心に、複数遺構から該当資料を抽出して作り上げた。よって、一括性を問えるものではなく、南加賀窯跡群Ⅲ期新段階～Ⅳ1期と幅をもって設定する。

須恵器は南加賀窯産で占められ、3期まで定量を占めた能美窯産は確認できない。以降、4B期までその様相は続き、5期に入ると能美窯産が再び見られるようになる。食膳具は3法量分化した坏Bと1法量の坏Aでほぼ構成され、当期に定量生産される盤類の出土は極めて少ない。窯資料では、出現期の矢田野向山1号窯Ⅲ次窯こそ、盤A 4%、盤B 1%と少ないが、Ⅳ1期古段階の二ツ梨一貫山4号窯では盤A 23%、盤B 5%、Ⅳ1期新段階の二ツ梨横川1号窯では盤A 25%、盤B 11%と、盤類の定着が看取される。つまり、当期の盤類の定着は、一般集落への供給を前提としたものではなく、高級遺跡における盤類消費を支えるものとして位置付けされた可能性がある。それを示すように、当期の公的性格を持つ加賀市篠原遺跡では須恵器食膳具中、盤A 23%、盤B 5%と(11号土坑の図示点数割合、石川埋文1987)、窯資料の比率に近い。また、3D期に新器種導入された深身坏Bにおいても高級遺跡への供給が主であった可能性がある。額見町遺跡の当期の須恵器食膳具の大半が坏Aと扁平器形中法量の坏Bで占められている状況は、それを物語るであろうし、坏Bの法量分化自体が、宮都での階層性に基づく食膳具様式の模倣という点で、一般集落における日常食膳具には本来必要とされなかった可能性がある。つまり、消費の場においては、3D期の上下二極分化した食膳具様式が依然として継承されていたことを示すが、一方で新たな仏教系器種の生産が開始される段階でもある。水瓶や仏鉢の他、獣足付容器など特殊な容器類の出土が当期から始まっている。当期に出現する初期仏堂SB302に関連して登場するもので(望月2009)、灰皿形の専用灯明具や灯明具に転用された油煙痕付坏A(10・11)の出土がこれ以降目立つようになる。新たな須恵器の使用形態を示すものであり、当集落において「村寺」が成立する重要な画期点でもある。

土師器食膳具においては、一部の特殊なものを除いて赤彩土師器に統一される段階である。南加賀窯産と思われる窯場産A類に統一される様相を持ち、器種では3C期に出現した坏B、坏Aなどの須恵器系器種が目立つ。碗では底部ヘラ切りの碗Fが依然として主流で、従来の通常法量に20の大型扁平器形が加わるが、新たに底部糸切り碗A(21)が出現する。法量は通常の小型のみで、底部厚手で扁平器形を呈し、底面ケズリ調整を施す。碗Aは次の4B期には碗類の主流となって増産される器種であり、4期成立の画期要素の一つに上げられる。

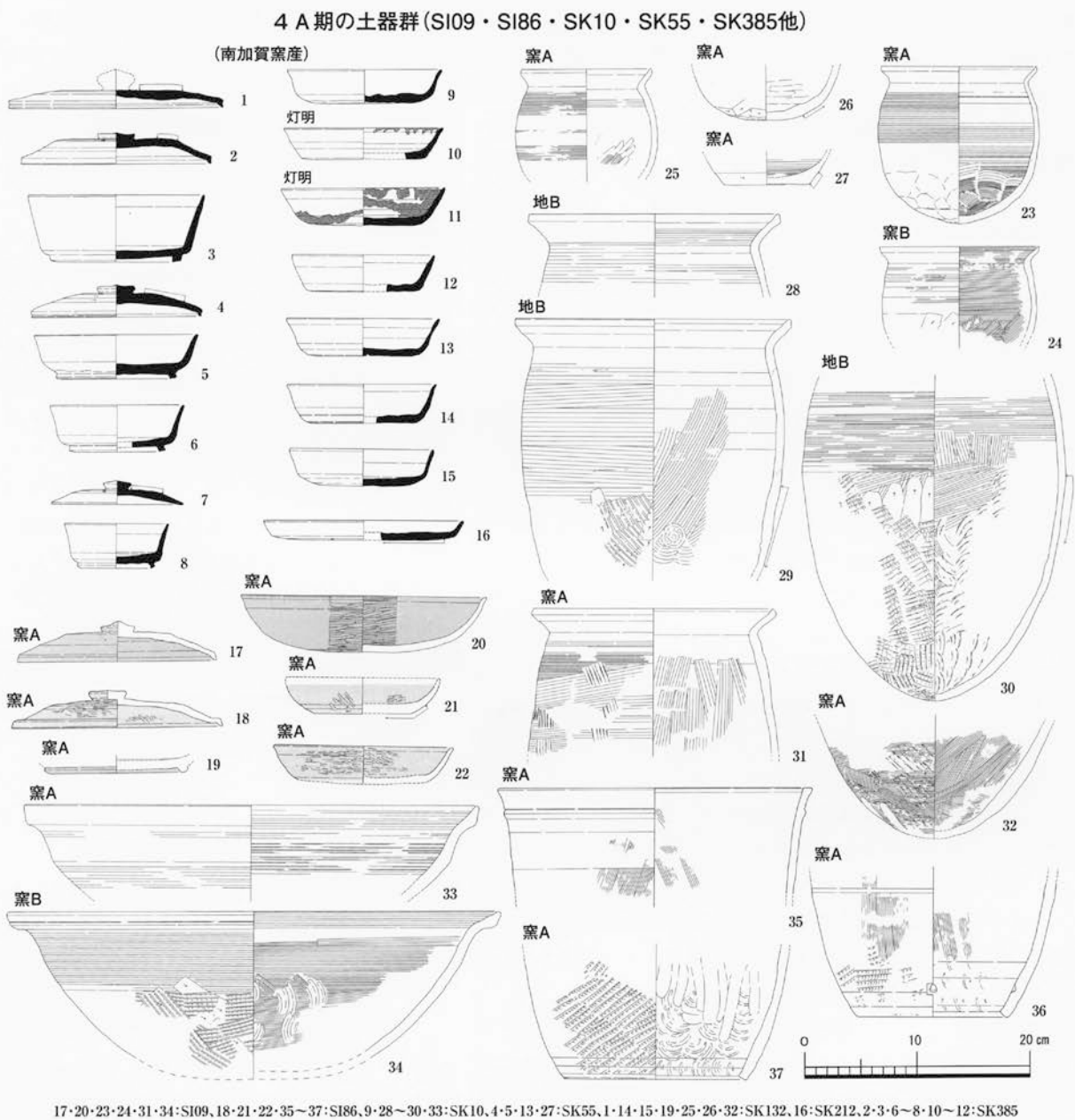
土師器煮炊具は須恵器成形技法によるものに統一されるが、長胴釜の胴部内外面に在来型のハケ目調整併用が多く、短胴小釜では底部を丸底に仕上げる傾向が強いなど、在来型の成形技法、調整技法の残存が見られるが、全体的な器形や口縁部の作りは北陸型煮炊具と言える定型的なものとなっており、加えて27の底部糸切り痕を残し平底のまま仕上げる



第104図 矢田野向山1号窯Ⅲ次窯出土須恵器

短胴小釜の出現は、当期の画期要素の一つに数え得る。土師器煮炊具産地は窯場A類とした南加賀窯産が主体を占める。一部地元B類胎土が長胴釜に見られるが、それも当期までで、次の4B期には窯場産に統一される。

以上、4A期を4期成立の画期に置いたが、それは2期、3期の中で作られてきた土器様式を、地域の中での古代土器生産へ組み込みを図る中で、北陸型と言える土器様式と北陸特有の土器生産体制を形成する点にある。具体的には須恵器食膳具における在地化された坏盤組成と法量分化、赤彩椀Aの出現、定型的北陸型煮炊具の成立などがあげられるが、そこには須恵器窯場での土師器集約生産の本格化が背景としてある。また、当期は三湖台集落群の中で、堅穴建物から掘立柱建物へ建物様式が転換するとともに、拡大を続けてきた集落が移動や停滞へと向かう転換期にあたる。これは当集落群が従前担ってきた政治的意図による移民集落としての性格に終止符が打たれ、新たな形で古代集落経営に基づく再編が試みられたことを示すだろう。それを象徴するものの一つに、当期の仏堂的建物の出現がある。村寺の役割は、それまで民衆に根付いていた在地神祇信仰や共同体意識を解体し、在地権力者が民衆の個別支配を可能とする新たな在地社会秩序を形成する目的があったと評価でき（望月2009）、まさに当期が村寺を核として、新たな支配体系に基づく社会に組み込まれていったことを示すだろう。



第105図 三湖台4A期の土器群 (S = 1 / 6)

b. 4 B期 (第106 図上)

4 B期は4 A期に見られた北陸型古代食膳具様式や北陸型煮炊具が普及、定着し、北陸型古代土器生産体制が貫徹されることを編年指標とする。7世紀前半以来進められてきた古代土器様式整備の到達点と位置付けられる。

標識資料としては、SI105とSK408をあげるが、土師器食膳具はSK218、須恵器食膳具はSK284、SK409を補足資料として使用した。南加賀窯跡群Ⅳ2古期に位置付けられ、近年の標識窯では二ツ梨一貫山12号窯を、土師器焼成坑資料としては、二ツ梨一貫山2号・6号・20号焼成坑をあてる。

須恵器食膳具では主要坏類が4 A期よりも若干小型化し、蓋の鈕形態が擬宝珠形に変化する程度だが、組成の中で盤類の定量存在が大きな要素だろう。良好な一括資料がないため量比は定かではないが、一般集落の日常食膳具に盤類が少量ながらも加わってくる段階と評価でき、それは当期の窯跡資料における盤A 25%、盤B 13%という占有率に現れていると言える(二ツ梨一貫山12号窯、小松市2002)。盤B占有率がピークに達する段階であり、これまでの日常食膳具における、ほぼ1法量の扁平な坏Aと坏Bで構成されてきた単純組成に変化をもたらす。当期も須恵器は南加賀窯産で占められ、能美窯跡群の須恵器生産が停滞状況にあることを物語る。

土師器食膳具は、4 A期に顕在化した坏盤器種が減少し、椀類でほぼ占められる。椀は従前の主体器種だった椀Fが激減し、4 A期に出現した椀Aに主体を移す。4 A期以来の底径大きな扁平器形(13)と底径が小型化した椀形を呈する器形(12)とが存在し、後者の器形がこれ以降の主流となる。当期は赤彩土師器椀Aの量産化とともに、全体的な遺跡出土量が増す段階で、産地はほぼ南加賀窯産に統一される。

土師器煮炊具は、窯場産に統一される。地元産は見られず、当期には煮炊具生産も窯場へほぼ集約された可能性が高い。各種器形は完成された北陸型を呈し、短胴小釜も当期には底部平底へほぼ統一された可能性がある。甑も在来技法を併用しないものが主流となって、4 A期に定型化の様相を呈した北陸型煮炊具から、さらに在来型技法が払拭され、北陸型煮炊具の完成期を迎える。これは同時に北陸型古代土器生産体制の確立を示すものであり、赤彩土師器食膳具増産体制とともに、2期以降、土師器生産の須恵器窯場集約化の方向で進んできた古代的土器生産体制がその貫徹をもって完成期を迎えたものと評価できる。

なお、三湖台集落群としては、4 A期以来、集落の停滞期が続いている。額見町遺跡の中で当期に位置づけられる建物は少なく、集落としては転換期にあっている。4 A期に出現した「村寺」は継続して営まれるようだが、それによる集落の活性化、再編成の様相は見取れない。

(2) 5期の土器様相

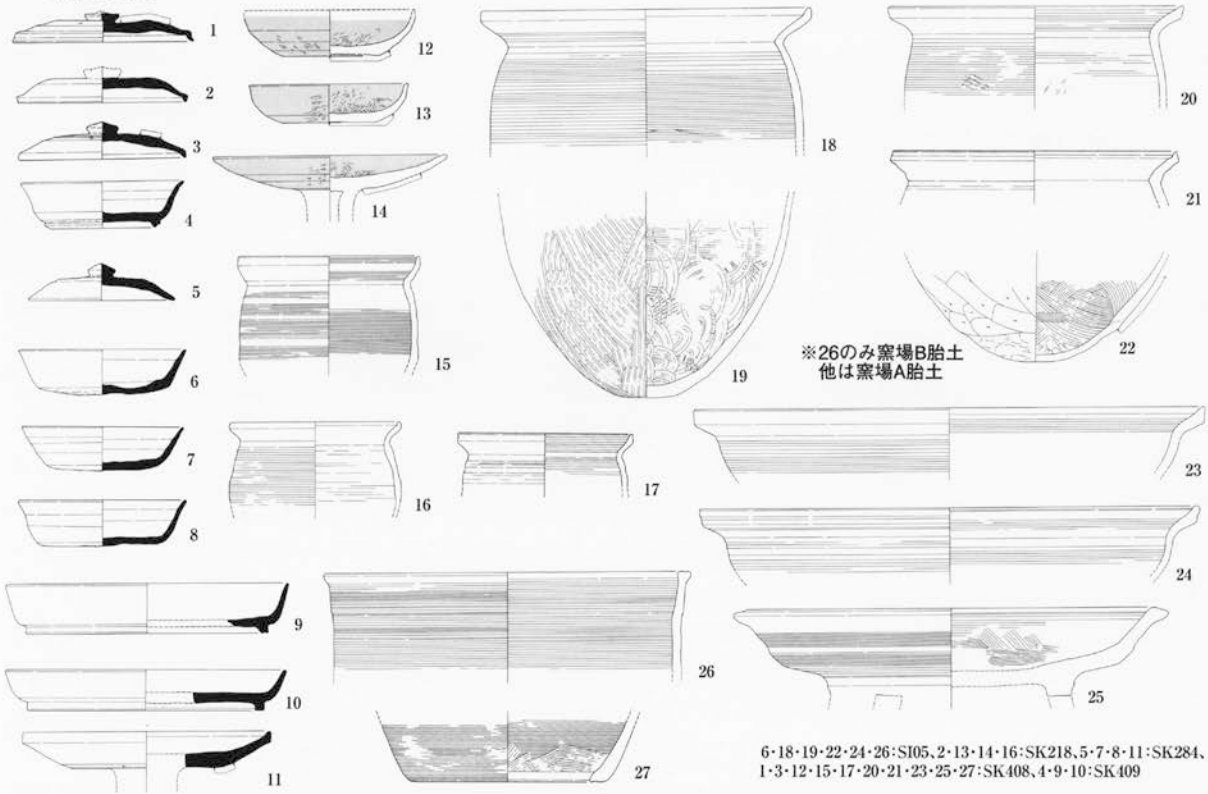
三湖台5期は田嶋編年古代Ⅳ2新时期からⅤ2期に併行する。田嶋明人氏はⅤ期成立をもって、古代土器様式後半期成立の重要な画期に位置付けており、その画期要素として、Ⅳ期が生産面からの画期であるのに対し、Ⅴ期は消費面での画期と位置付けた(田嶋1989、193頁)。需要側での食器に対する指向性が有蓋食器から無蓋食器へ変化したことが重要とし、具体的には坏志向から椀志向への変化、そしてそこには中国製陶磁器を模倣する瓷器系食器の出現が根底にあると位置付けられた。瓷器系食器は北陸では専ら内黒土師器において導入され、それが土師器生産への傾斜と須恵器生産の縮小を招き、一郡一窯体制の崩壊を生んだと理解されている。

このようなⅤ期の画期要素は、北加賀、または能登、越中等の北陸東部で先行導入され、南加賀や越前へと波及してくるが、Ⅴ期以降の変化の様相は地域によって偏りがあり、足並みが揃わない。南加賀窯跡群の場合、内黒土師器生産自体がⅤ期は本格始動しておらず、土師器生産ではまだⅣ期の延長線上にある。加えて須恵器生産重点型の生産体制をⅥ期まで継続させ、北陸型古代土器生産体制の変質、崩壊の兆候は、まだ見られない。つまり、田嶋編年で示した画期要素をそのまま南加賀窯跡群のⅤ期にあてはめることは困難で、Ⅵ期にその変化が表面化してくる。ただ、需要側での食器に対する指向性の変化を見た場合、南加賀窯跡群のⅤ1期に顕在化する猿投窯跡群の原始灰釉陶器を志向した白色堅緻焼成(胎土選択と降下釉堅緻焼成)の優品須恵器生産は注目される。

上記の変化は、能美窯跡群ではⅣ2新时期の和気小しょうぶ谷2号窯(望月2005a)で既に出現しており、同様の現象が会津の大戸窯跡群においても見られるなど(望月2008b、191-192頁)、この時期に原始灰釉陶器を志向する須恵器窯が成立してきた可能性がある。このような優品須恵器を志向する意識は、7世紀後半から金属器を志向する生産の中で見えているが、それが猿投窯跡群を起点とする原始灰釉陶器模倣的な方向性で現れることは重視してよく、そこを基点にⅤ期の変革様相が辿れることを評価し、Ⅳ2新时期をもって新たな消費者指向に

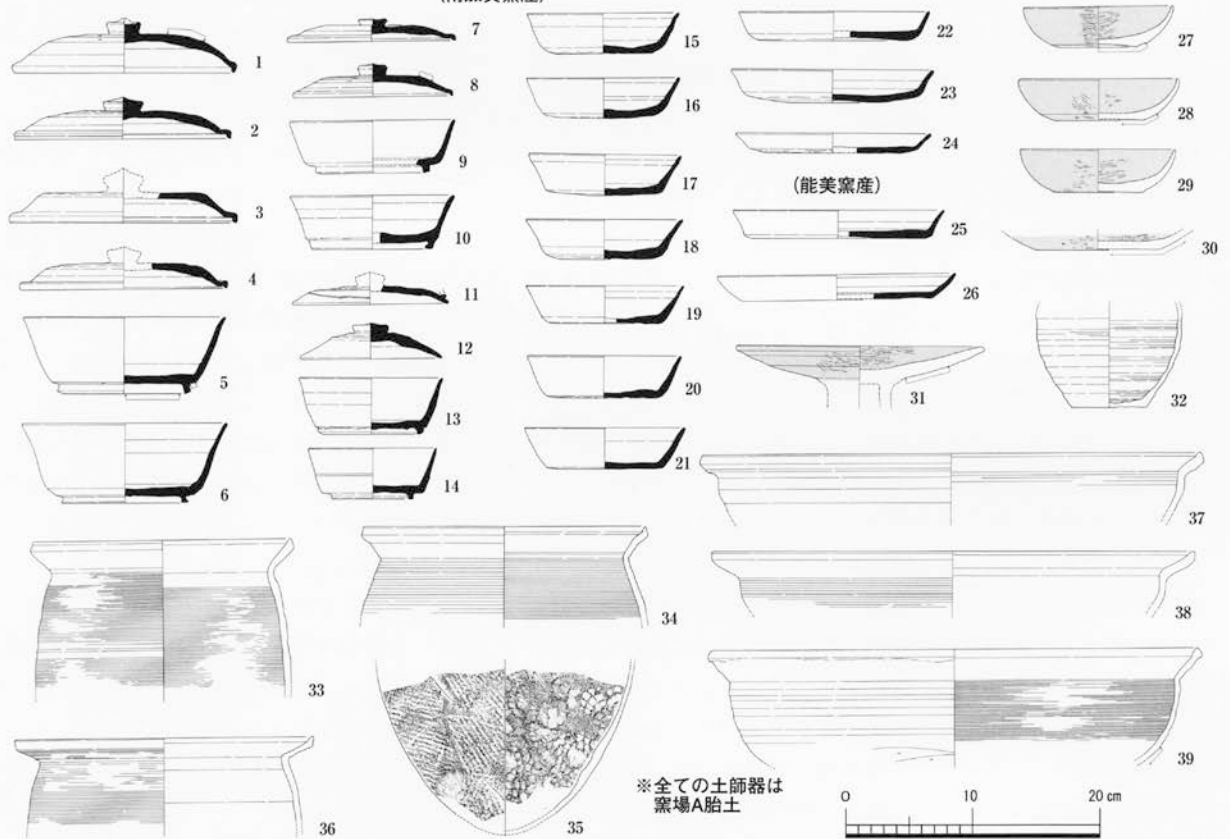
(南加賀窯産)

4 B 期の土器群 (SI105・SK218・SK408他)



5 A 期の土器群 (SI84・SK54・SK235・SK423他)

(南加賀窯産)



32~35:SI84, 8・14・15・16・19・21・25・27・36:SK54, 3・9・12・17・28~30:SK235, 5~7・10・18・20・22・24・37・38:SK423, 1・2・13・23・26・31:SK424

第106図 三湖台4B期・5A期の土器群 (S=1/6)

基づく土器様式が形成される画期とした。それは須恵器のみの素材ではなく、他の素材や色において卓越性を表現できる器の組み合わせによって階層性を表現する土器様式、つまり宇野隆夫氏が提唱される王朝国家的土器様式（宇野 1991、265 頁）が生み出される端緒となる時期と評価する。なお、編年区分としては、田嶋編年Ⅳ 2 新期を三湖台 5 A 期に、Ⅴ 1 期を三湖台 5 B 期、Ⅴ 2 期を三湖台 5 C 期に位置付け、以下に述べる。

a. 5 A 期（第 106 図下）

5 A 期は、4 期に定着、確立された北陸型古代食膳具様式が早々に崩れ、新たな消費者指向に基づく食膳具様式への傾斜が始まることを編年指標とする。それは器の種類と法量により分化した食膳具を複数組み合わせることで、階層性を表現した律令的土器様式から脱却することであり、他の素材（模倣品も含む）や色において卓越性を表現できる器の組み合わせによって階層性を表現する食膳具様式へと変化していく。顕在化するのは 5 B 期だが、当期はそれが導入される端緒となる白色堅緻焼成の優品須恵器の登場が編年の指標となる。

標識資料としては、須恵器食膳具では SK54 と SK423、土師器食膳具では SK235、土師器煮炊具では SI84 を中心として抽出、構成してある。南加賀窯跡群Ⅳ 2 新期に対比でき、基準窯資料では南加賀窯跡群二ツ梨峠山 10 B 号窯（近年では二ツ梨一貫山 10・11 号窯、なお本書で基準窯にあげる二ツ梨一貫山窯資料は全て小松市 2002 による）を、能美窯跡群では和気小しょうぶ谷 2 号窯（辰口町 2005、以下能美窯は同書による）をあげる。

須恵器は大半を南加賀窯産が占めるが、盤 A に限り能美窯産が確認される。当期の能美窯産須恵器は、良質の胎土で白色堅緻焼成する特徴を持ち、作り、調整ともシャープである。南加賀窯産に比して優品の価値付けがなされていた可能性が高く、これはそのような優品須恵器を求める価値観、須恵器への消費者指向の変化に基づくものだったろう。このような優品須恵器生産への意識は、南加賀窯跡群ではまだ顕在化しないが、能美窯跡群では大型の金属器系銃、球胴形長頸瓶、東海系双耳環等の生産や、貯蔵具専用焼台の使用、白色粘土を選択使用した優品須恵器生産などが、当期に始まっており、北陸地域の中では他の窯場に先駆けて導入される（望月 2005a、2008b）。3 期から 4 期までほとんど供給されていなかった能美窯産須恵器が 5 期に突如として三湖台集落群内に持ち込まれるのは、このような要因に基づくと理解する。能美窯跡群が和気東側丘陵地区へ窯場を移動し、活発な生産を行う背景には、そのような需要者側の意識の変化と需要の高まりに対応したものだらう。

当期の須恵器食膳具の特徴としては、盤類の増加と坏 B の大・小法量の増加があげられる。坏 B の法量分化については、既に 3 D 期に先駆的に導入され、4 A 期には 3 法量分化に整理されるとともに一般窯にも波及していくが、一般集落の日常食器の中に大、小法量の坏 B が主体的に存在するようになるのは当期であり、それとともに中法量の扁平坏 B も深身を志向してくる。これに伴い、坏 A もやや深身となり、体部外傾化していく。盤 A の体部も外傾傾向を見せ、5 B 期に明確となる椀形志向の新型薄手食膳具への方向性が当期から示され始める。

土師器食膳具は、赤彩土師器に統一されており、いずれも南加賀窯産と思われる窯場 A 類で占められる。組成は 4 B 期同様、高坏と椀 A が確認され、破片だが坏盤器種も少数ながら供給されている。椀 A は 4 B 期から口径の縮小と椀形化が進行し、底径大きく扁平器形を呈するものは減少する。また、大型法量の椀 A も定量存在し、法量分化が明確化する。なお、土師器煮炊具も、食膳具同様、窯場 A 類産で占められる。4 B 期から目立った器形や器種構成などの変化はないが、全体的に薄手になり、口縁部端の摘みあげが目立つようになる。

三湖台集落群の様相としては、4 期からの変化は読み取れない。額見町遺跡においては依然として集落の停滞期が続いており、竪穴建物も少数だが、当期までは確認される。集落としてはやはり 4 期に変革期があり、5 期はその流れの中で位置付けられるべきだろう。

b. 5 B 期（第 108 図上）

5 B 期は 5 A 期に変革の兆候を見せた、新たな食膳具への指向性が顕在化し、地方の中に宮都で先駆的に導入された新たな食膳具様式を取り入れていくことを編年指標とする。具体的には初期施釉陶器の導入や施釉陶器模倣器種生産、宮都の黒色土器 A 類の影響を受けたであろう内黒土師器の出現があげられる。南加賀では内黒土師器を当期は導入してないが、須恵器による瓷器系器種模倣や白色堅緻焼成の優品須恵器の顕在化が指標となろう。

標識資料としては、SK116 と SK285 をあげる。南加賀窯跡群Ⅴ 1 期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群では戸津 5 号窯を（石川県 1979）、能美窯跡群では和気後山谷 1 号窯をあげる。

須恵器食膳具の各器種に能美窯産が定量を占める段階である。SK116 では図化した 26 点中 5 点が、SK285 では図化した 17 点中 6 点が能美窯産で、器種は坏 B、坏 A、盤 A、盤 B と偏りが無い。能美窯産の特徴は砂粒を

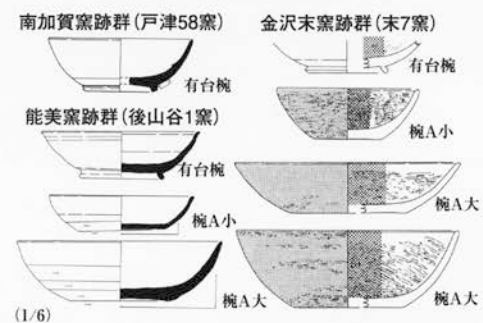
含まない緻密な白色粘土で、可塑性に優れる粘土性質のため小型製品の成形に適し、薄くシャープな作りをすることが特徴と言える。焼き上がり（灰）白色を呈し、焼結がよく、意識的に自然釉が掛かるような優品須恵器の生産も行われる。粘土の質は異なるが類似した白色堅緻焼成（表面化粧土による？）を目指す須恵器生産が、当期の南加賀窯跡群でも見られ、貯蔵具専用焼台の導入や大型の金属器系鉢、東海系器種の生産開始など、5 A 期に先行導入された能美窯跡群の須恵器生産変革の波が南加賀窯跡群へ波及する。同時期に、能登や越前の窯場でも類似した様相が看取できており、南加賀地域の窯場を核に北陸各地へ先進的技術として波及したのだろう（望月 2008b）。越後や出羽、会津においても、様相差はあるが、猿投窯跡群を基点とする同様の現象がみられ、東日本の須恵器生産が当期に目指したひとつの方向性であったと理解したい。そのような特性を有する能美窯産須恵器を当期に積極的に集落内に取り入れることは、灰釉陶器に近い質感を持つ優品須恵器を求める消費者指向に基づくものであり、瓷器系志向の一つの在り方であったと理解したい。

須恵器食膳具の器形特徴としては、大きな底径有す扁平器形が衰退し、総体的に体部外傾化が進行していく。坏Bは扁平器形を当期まで一部残すが、相対的に数量を減らし、深身で碗形を呈す器形が定型化され、それが基本形となる。法量も大が半数近くを占め、中法量が5 A 期に比して激減し、大きくは大小2法量の様相を呈すようになる。食膳具の主体は坏Aと盤Aで、当期までは盤Bも目立つ。体部外傾器形を基本とし、底部を薄く作る傾向がこれ以降進行して、須恵器食膳具終焉への道を歩み始める。また、特殊器種として28の金属器系の大型鉢に伴う天井部突帯を巡らす特徴的な蓋が、当期に顕在化する。鈕には仏器的な装飾を伴うものもあり、8世紀後半の稜鉢に代わる器種として登場する。なお、当期に出現する小型有台碗は重要である。当集落資料では確認できていないが、南加賀窯跡群、能美窯跡群いずれの窯場でも当期から生産が確認される。赤彩土師器碗A模倣の須恵器碗Aが4 B 期から定量存在しているが、それとは異なる系譜を持つもので、底面ケズリ調整後に小さな方形高台を付し、口縁部下に弱い稜を作る特徴を持つ点から、当器種を施釉陶器写しの瓷器系器種と位置付ける。内黒土師器においても、この時期に瓷器写しの有台碗が金沢末窯跡群で生産開始されており、同様の性格を持つものと理解したい。北加賀では土師器で瓷器写しを導入したのに対し、南加賀では須恵器でそれを行う点は地域的な特徴と理解する。なお、これは蛇足だが、当資料で共伴する南加賀窯産須恵器と能美窯産須恵器を比較すると、坏B身の器形と坏Aの器形が、南加賀窯産に比して能美窯産が底径大きく、全体的に扁平器形を呈することに気付く。加えて南加賀窯産の坏B蓋小法量がその出現期から口縁部端を折り曲げない器形を保持するのに対し、能美窯産は22に見るように口縁部折り曲げ器形を呈するなど、窯ごとの個性が目立つ。

土師器食膳具は南加賀では内黒土師器の導入はまだなく、赤彩土師器のみで構成される。器種は碗A主体だが、依然として坏盤類も少量生産される。碗Aは扁平タイプが消え、底径小さな碗形志向の器形にほぼ統一、大型法量も数は少ないが存続する。先述したが、金沢末窯跡群では当期に内黒土師器生産が開始されている。外面赤彩を施す精製品の価値のもので、各種法量のものが存在するが、平底碗については、器形、法量、内外ミガキ調整技法ともに赤彩土師器碗Aと共通する。ほぼ同時期、能登以東に同様の内黒土師器碗Aが出現しており、長岡京での黒色土器A類出現の影響を受け、赤彩土師器に内黒焼成技術が取り入れられたものだろう。内黒焼成はもともと在地に存在する技法であり、需要者側の求めに応じ、宮都の上級食器を真似て、赤彩土師器の内側を黒く焼いたものと理解したい。これに対し内黒有台碗は赤彩土師器に存在する器種ではなく、当初は赤彩を施さないなど、赤彩土師器系統とは考え難く、小型方形高台の作りなど、前述の須恵器と同様、瓷器写しの器種と理解する。

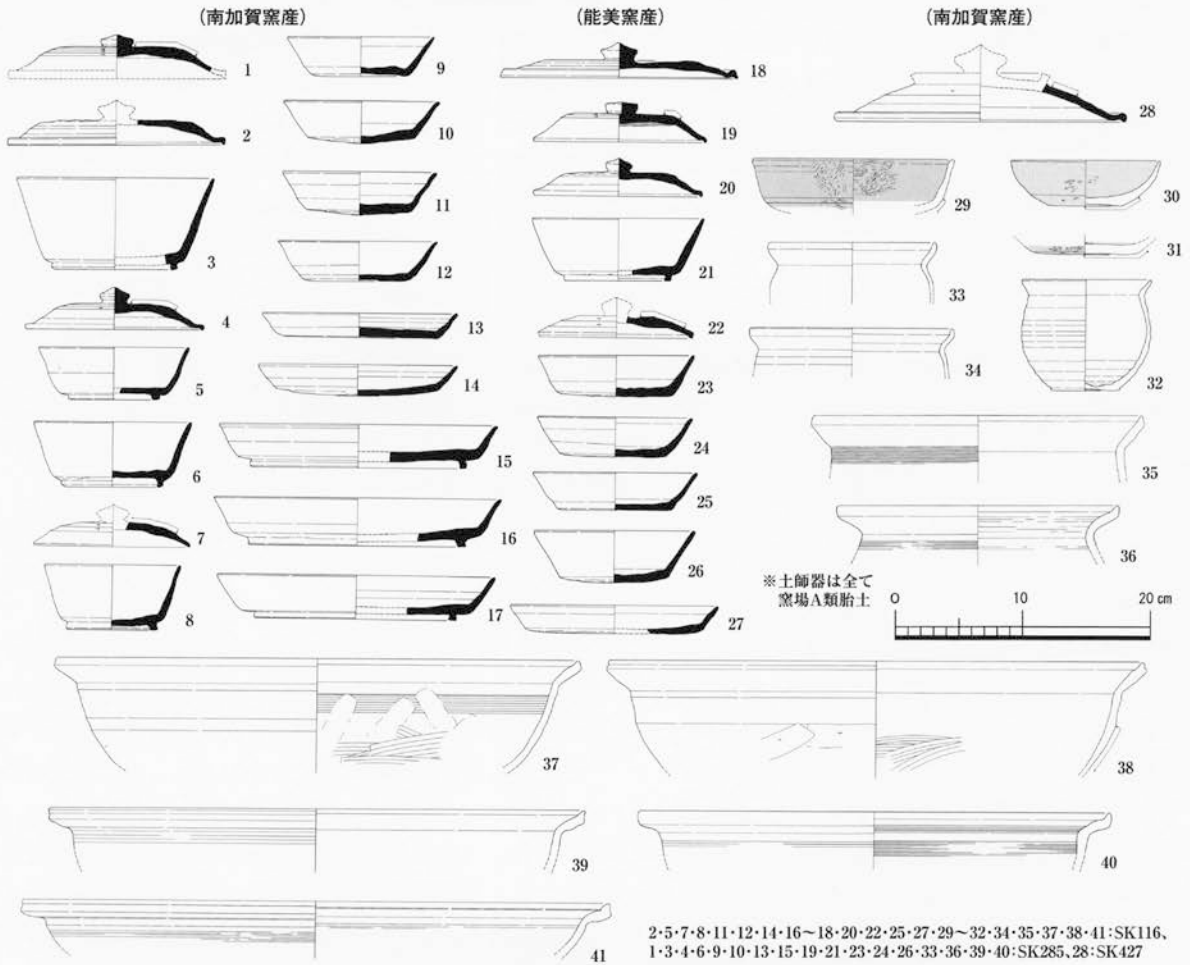
土師器煮炊具は5 A 期から、外面カキ目調整の頻度の減少や薄く引き延ばし成形するものが出現してくるなどの変化が見られる程度で、大きな変化は読み取れない。土師器産地は全て窯場A類胎土で、須恵器とともに土師器が能美窯跡群から供給されることはない。この点も能美窯産須恵器が単に生産拡大に伴って、三湖台集落群へ須恵器供給されたわけではないことを示すだろう。

以上、当期の南加賀での土師器様相を見ると、4 期から継承されるものが多いが、それは生産の場でも確認される。つまり、南加賀窯跡群二ツ梨一貫山支群の様相を見る限り、土

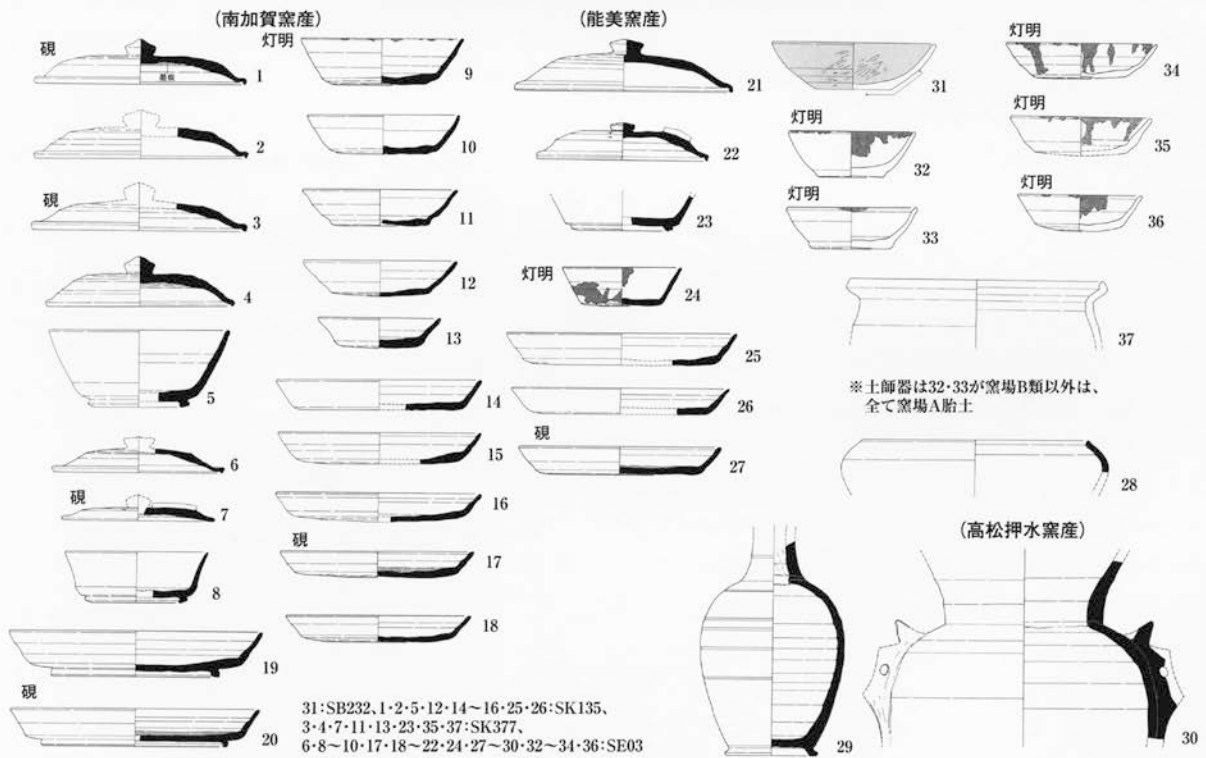


第 107 図 5 B 期の瓷器系有台碗と赤彩系碗 A

5 B期の土器群 (SK116・SK285、他)



5 C期の土器群 (SE03・SK135・SK377、他)



第108図 三湖台5 B期・5 C期の土器群 (S=1/6)

師器焼成坑群経営はⅣ1期からⅤ2期まで継続して営まれるものが多く、Ⅵ期に移動するケースが多い。つまり、内黒土師器生産導入までは同様の生産体制であったと言える。生産経営と消費の場での変化は必ずしも一致するものではないが、須恵器生産を軸に保守的な土器生産体制を維持することが南加賀地域の土器様相に強く反映されているものと言えよう。

なお、三湖台集落群の動向としては、当期も大きな変化は見られない。4A期に初期仏堂として成立したSB302は、大型仏堂の四面廂付掘立柱建物SB259として、当期に建て替えられた可能性が高いが、仏教系遺物として最も多く出土する転用灯明具は、次の5C期に位置付けられるものが多く、当期はあまり目立たない。

c. 5C期 (第108図下)

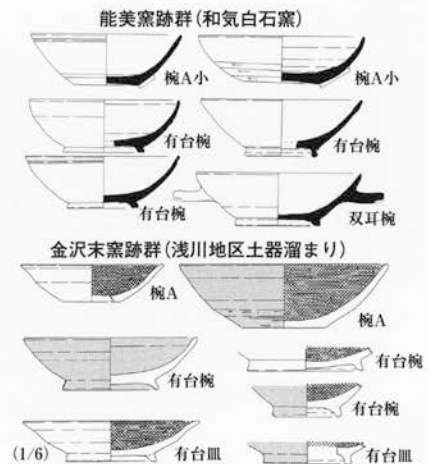
5C期は白色堅緻焼成の優品須恵器生産を維持する点、深身で碗形を志向する坏B、薄手化と体部外傾化の方向性を示した坏Aや盤類がその系統で器形変化していく点で、5B期に顕在化した諸要素を継承しながらそれを進行させる段階と評する。5B期とを分ける編年指標としては、坏B中小法量と盤Bの減産、坏整体部の外傾化と薄手化、そして南加賀では確認されないが、金沢末窯跡群では瓷器系有台皿を内黒土師器食膳具で生産開始する点があげられる。大きな転換は次の6期にあり、消費者指向が無蓋食膳具、碗皿類へと強く傾斜していく。

標識資料としては、SE03、SK135、SK377をあげる。南加賀窯跡群Ⅴ2期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群の戸津29号窯または二ツ梨一貫山3号窯古相資料群が、能美窯跡群では和気白石窯が該当する。

須恵器食膳具では5B期同様に、能美窯産が定量を占める段階である。図示した須恵器食膳具の割合では、SE03で12点中3点、SK135で11点中2点、SK377で9点中2点の能美窯産を確認できており、依然として2～3割を占めている。ただ、5B期に比べると、能美窯産は減少傾向にあり、次の6期にはほぼ姿を消すなど、当期までが能美窯産須恵器の優品性を主張した段階と位置付けられる。南加賀窯跡群、能美窯跡群では白色堅緻焼成を目指す須恵器生産は当期をもって終えており、そのような須恵器に優品価値を求めるような食膳具様式は6期へは継承されなかったと言えよう。他の材質の土器食膳具、施釉陶器や内黒土師器食膳具に優品価値を置き、それと須恵器を組み合わせることにより階層性を表現するものへ変化する。そのような中、須恵器食膳具は製品の質を低下させ、器種淘汰と雑器化の道を歩んでいくのである。

須恵器食膳具器種組成としては、坏Bの扁平器形がほぼ確認できなくなり、深身碗形を呈す器形に統一される。法量は大が過半数を占め、中法量と小法量が一体化し、大小2法量となるとともに、数量は減少傾向を示す。当期の主要器種は坏Aと盤Aである。特に坏Aは食膳具の半数近くを占め、盤Aも多い。盤Bは当期には減産傾向にあるが、当資料は仏教関連遺構という性格からか、比較的目立つ。全体的に体部外傾器形が5B期よりも進行し、全体的に薄手となって、坏B高台も華奢になってくる。特殊器種として5B期に顕在化した金属器系の大型鏡は当期も継続して生産が行われ、東海系器種生産とともに、5B期からの継続の様相を持つ。

土師器食膳具は赤彩土師器で占められる。南加賀でも内黒土師器生産が一部坏類に導入されるが(二ツ梨グミノキバラ窯)、特殊なものであり、外面赤彩の内黒土師器碗皿生産は南加賀窯跡群、能美窯跡群ともに基本的に導入されていない。土師器食膳具の量は5B期同様に少なく、4期から続く赤彩土師器の延長線上にある。ただ、31の碗A器形を見ると、小型の底部から体部開いて立ち上がる器形へと変化しており、当期の金沢末窯跡群生産の外面赤彩内黒土師器碗Aの器形に類似する。金沢では当期に北陸各地に先駆けて瓷器系有台皿を導入する。5B期以来の瓷器系有台碗も形を崩しながら存続しており、瓷器系碗皿が増加する。当期に位置付けられる能美窯跡群和気白石窯でも瓷器系有台碗が増加しており、6期に始まる定型化された皿B、碗B増加、普及の端緒となる。当遺跡では、以上の赤彩土師器に加えて、赤彩を施さない土師器食膳具(32～26)が確認される。底部ヘラ切りの須恵器系小型坏や坏Aで、いずれも灯明痕をもち、仏教用具として使用されている。これらは仏教施設の周辺やそれに伴う大型井戸SE03から出土しており、専用の仏教用具として特別に生産されたものであろう。なお、図示した仏鉢や水瓶など



第109図 5C期の瓷器系碗皿と赤彩系碗A

も同様に、この仏教施設に伴う特殊品である。

集落様相としては、5B期頃に建て替えられたと思われる大型仏堂建物のSB259とそれに併設して南面に建築される「社」的建物、そしてそれら建物に付随する大型井戸SE03が存在し、その周辺で、灯明具や墨書土器、転用硯が多く出土する。当期に位置付けられる土器も多く、額見町遺跡が三湖台集落群の中で、中核的な信仰の場として機能した段階と評価される。ある意味で4期集落動向の到達点であった可能性もあるが、このような信仰に関連する遺構や遺物が多い割に、当期に位置付けられる掘立柱建物は多くはない。このことについて明確な答えを出す資料を有していないが、4期になって、新たな在地社会秩序のもとでの集落経営を模索する中、台地経営の集落としてはその性格上、衰退の道をたどらざるを得なかった可能性があるだろう。

(3) 6期の土器様相

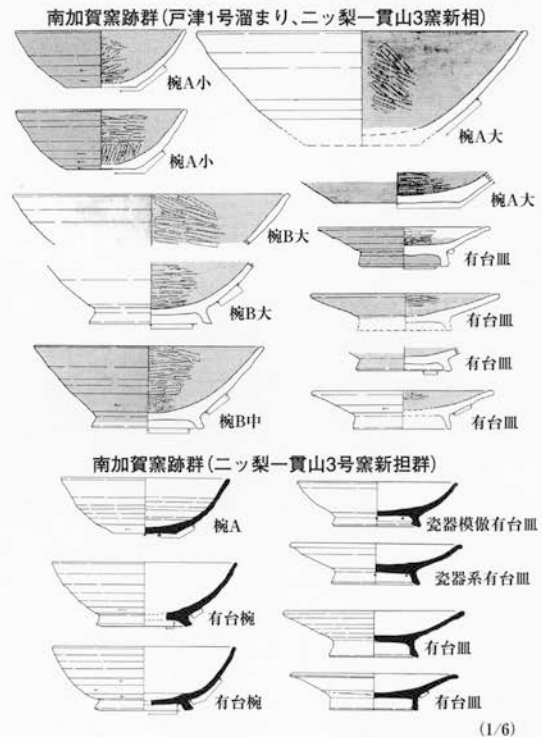
三湖台6期は田嶋編年VI1期～VI3期に対比できる。この6期の中で北陸各地の須恵器生産は停止し、それとともに窯場での土師器生産も終焉、4期に確立した基幹的窯場での土器集約生産体制は崩壊する。つまり、郡一窯体制、北陸型古代土器生産体制の崩壊であり、5世紀末から続いてきた古代窯業が終焉を迎える重要な画期である。6期の土器様相は5期に金沢末窯跡群に先行導入された内黒土師器生産が南加賀にも導入され、それを模倣するようにして皿Bと椀A・Bが須恵器器種として生産が開始されることが5期とを分ける編年指標である。坏盤類から椀皿類への転換であり、6期の中で段階的に、有蓋器種の減産や坏盤類の退化・消滅、そして椀皿類への器種淘汰と進み、須恵器食膳具の質の低下と土師器との互換性を強める中で、須恵器が最終的には軟質焼成されることで、須恵器食膳具のもつ意義はなくなり、その役割を土師器に譲って消えていくのである。古代食膳具の基軸であり、その象徴であった須恵器が段階的に終焉へのステップを刻むものであり、5期にその兆候として現れた王朝国家的食膳具様式への傾斜が明確化される段階と位置付けられよう。同時に、古代土器様式の終焉を意味し、一気に中世的土器様式へと傾斜していく。なお、編年区分としては、田嶋編年VI1期を三湖台6A期に、VI2期を三湖台6B期、VI3期を三湖台6C期に位置付け、3期区分とする。

a. 6A期 (第111図上)

6A期は、南加賀において内黒土師器生産が開始するとともに、須恵器食膳具に内黒土師器食膳具を模倣したような皿Bや椀A・Bが導入されることを編年指標とする。ただ、額見町遺跡では内黒土師器食膳具もそれを模倣した須恵器も確認することはできず、伝統的な坏盤類の須恵器食膳具のみで占められる。消費地において土師器食膳具が定量を占める北加賀とは様相が異なっており、北陸の中で食膳具構成に偏差が目立つ段階である。

標識資料はSK115を中心に、SK126とSE03中上層の土師器で補完、構成してある。南加賀窯跡群VI1期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群の戸津31号窯、ニツ梨一貫山3号窯新相資料をあげる。能美窯跡群では和気支群での須恵器生産が終焉しており、当段階には著しく生産規模を縮小し、丘陵部奥へ窯場を移動する。

須恵器は5期に顕在化した能美窯産須恵器がほぼ消滅し、南加賀窯産で占められる。19・20は能美窯産だが、器形から5C期の位置付けも可能であり、器種が盤類のみであることも注目される。能美窯産須恵器の減少は、能美窯跡群の生産規模縮小に基づくものだが、能美窯跡群の和気地区での終焉自体が須恵器に優品的価値を求めなくなった現れであり、それとともに南加賀窯産須恵器にもそのような白色堅緻焼成の優品意識は欠落していく。当期の須恵器食膳具の特徴としては、坏B小法量の減少に基づく大法量への淘汰傾向、盤Bの消滅が上げられる。また、当資料

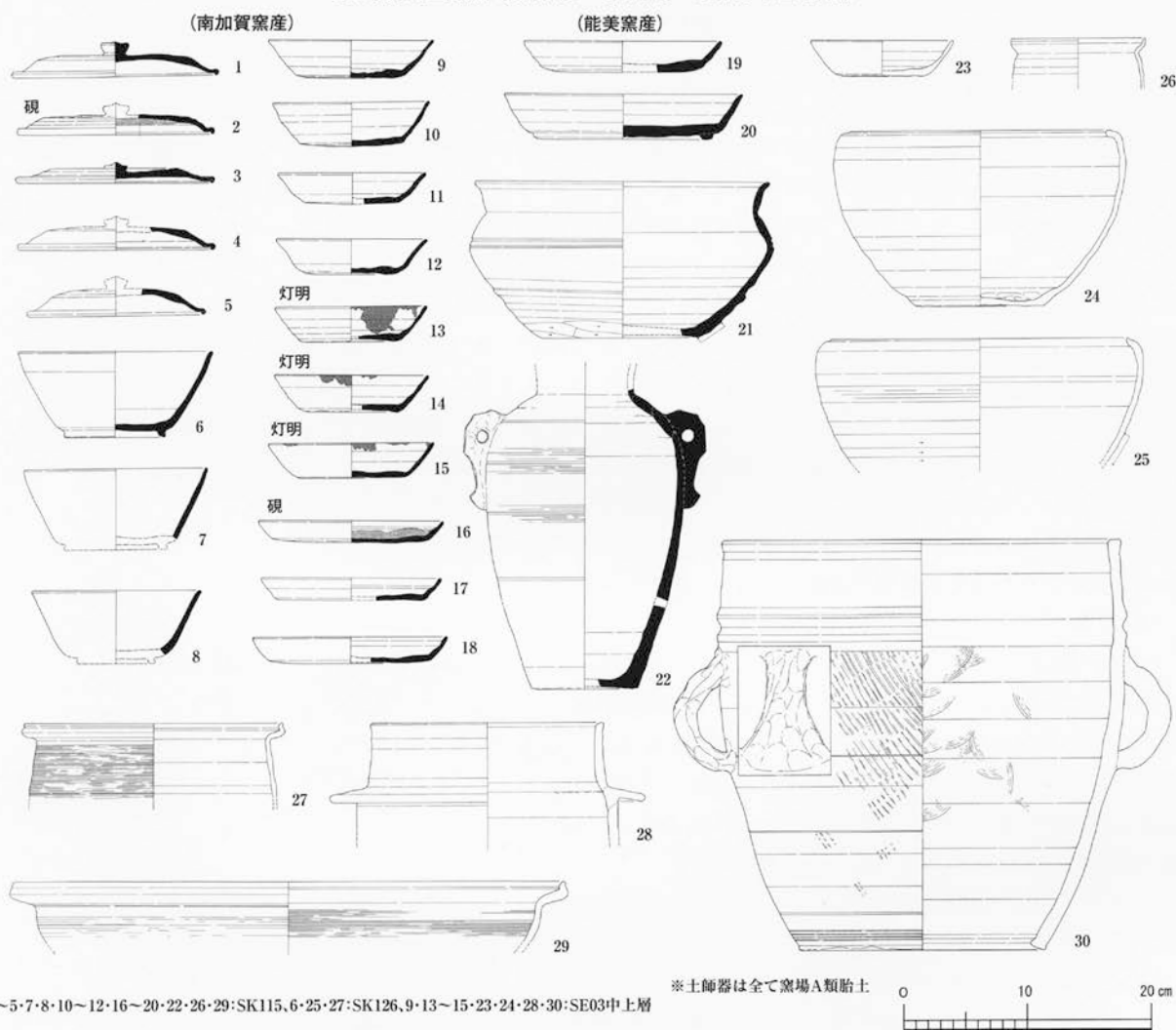


第110図 6A期の内黒土師器と須恵器の椀皿

では確認できていないが、坏B蓋の無鈕化がなされる段階で（二ツ梨一貫山3号窯新相群で確認）、6B期には無鈕蓋へ統一される。食膳具組成の中心は坏Aと盤Aである。5C期に一部見られた薄手で体部外傾する器形がより進行してそれへ淘汰される。また、窯場資料だが、新器種として瓷器系有台皿が導入されることは当期の重要な画期要素である。前代より続く赤彩系碗Aと瓷器系有台碗も存在するが、瓷器系有台皿の量は多く、口縁部外反タイプは施釉陶器模倣と言える優品である。有台碗も依然として精製品として作られており、坏盤類に比べて碗皿器種は優品意識が高い器種である。

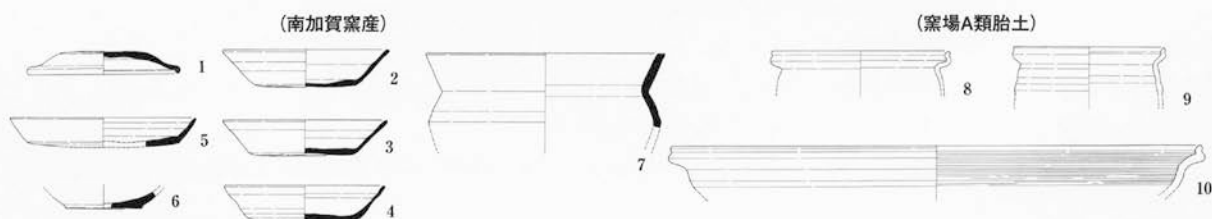
土師器食膳具は、当資料では23の灯明具使用の坏Aが存在するのみで、当期に南加賀窯跡群で生産が開始される内黒土師器食膳具は組成の中に加わってこない。南加賀地域の集落遺跡では依然として、須恵器食膳具でほぼ構成される段階であり、北加賀とは様相が異なる。内黒土師器食膳具の生産開始とともに、赤彩土師器生産は行われなくなっており、赤彩土師器碗Aは同系統の器形の中で内黒化するとともに外面ミガキ調整を省略する。また、瓷器系の有台皿と有台碗が出現するが、有台皿が同時期の須恵器器形に似ているのに対し、有台碗は碗A

6A期の土器群 (SK115・SK126・SE03中上層他)



1~5・7・8・10~12・16~20・22・26・29:SK115, 6・25・27:SK126, 9・13~15・23・24・28・30:SE03中上層

6B期の土器群 (SK177)



第111図 三湖台6A期・6B期の土器群 (S=1/6)

を有台化した器形で、須恵器の瓷器系有台碗とは異なる。碗A同様、法量分化が見られ、碗Bと位置付けできる。これをもって内黒土師器食膳具の基本器種は成立し、6C期の碗皿統一へ歩み始める。

土師器煮炊具としては、5C期からの薄手化と口縁部の顕著な挽き出しによるS字状化が始まる。胴部のカキ目調整は衰退し、胎土は砂礫を混和させるものが見られなくなって、砂気が多い胎土が使われる。当期の特徴的な器種に羽釜と大型の甌、そして平底の仏鉢が上げられる。ほぼ出土がSE03やその周辺土坑に限られており、大型仏堂に関連するものだが、南加賀窯跡群ニツ梨一貫山窯跡でもこの時期から6B期にかけて生産が確認されているので、当期を特徴付ける器種と位置付けられる可能性を持つ。

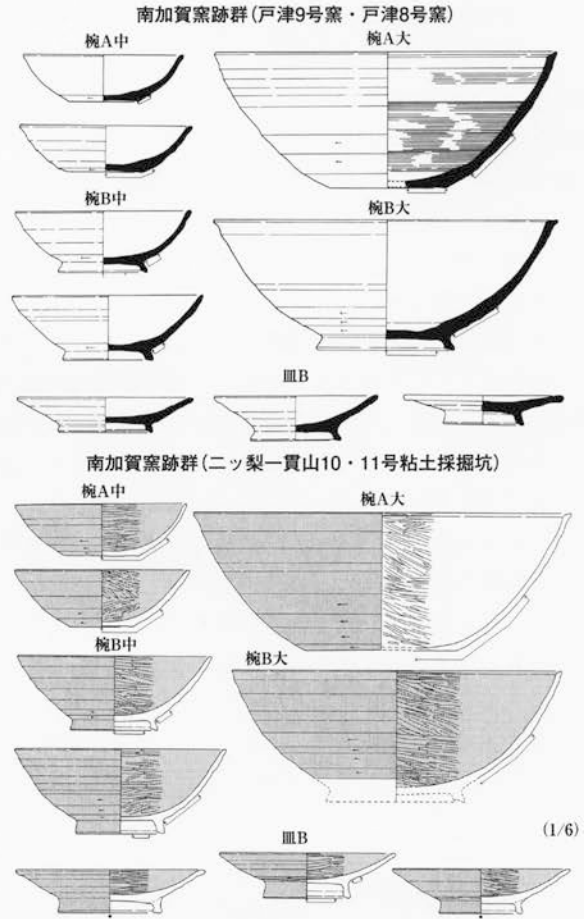
三湖台集落群の様相としては、5期から明らかに衰退傾向を強める。これ以降7期まで集落は最も落ち込んでおり、それは総体的な土器出土量に現れている。SE03の仏教行為に基づく出土品があるため、信仰拠点としてその活動が維持されていたものと理解されるが、集落動向としては、建物数は減少し、古代集落の終焉へ向かっていたと評されよう。

b. 6B期 (第111図下)

6B期は坏盤器種が食膳具組成の主体を占めた最後の段階である。6A期に導入された須恵器有台皿は在地化され、瓷器模倣器種としてではなく、在地化された皿Bとして組成の中に定着し、有台碗も6A期の内黒土師器碗Bのような法量分化を行い、瓷器系模倣から在地化された碗B器種として定着してくる。主体を占める坏盤器種は作りや器形を退化させ、坏B蓋の無鈕化と坏B小の無台化、盤Bの消滅などが当期の編年指標となる。

標識資料はSK177をあげる。当期のまとまった資料は乏しく、次の6C期と合わせて三湖台集落群が最も衰退する時期と言える。南加賀窯跡群VI2期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群戸津9号窯をあげるが、当期は須恵器窯編年から戸津11号窯(古段階)→戸津9号窯(中段階)→戸津8号窯(新段階)→戸津35号窯(新段階)の細分が可能である(望月1992, 2004)。南加賀窯跡群は当期に再興が図られ、生産増へと向かい、次のVI3期まで活発な生産が行われる。そのような時期に南加賀窯跡群、南加賀製鉄遺跡群の工人集落としての性格付けが可能であった当集落群が衰退するのは矛盾するが、そこには、当再興が加賀国府の設置と加賀国分寺の成立に基づいていることと関連しよう。南加賀窯跡群の経営が再興とともに郡主導の経営から国衛主導の経営に代わった可能性があり、それに伴って三湖台集落群とは切り離された経営へ移行したものと考えたい。

須恵器、土師器ともに南加賀窯産で占められる段階で、食膳具は6A期同様、須恵器主体で構成される。生産地では本来内黒土師器食膳具生産が本格化し、土師器焼成坑を群集経営する様相が見られるため、消費地への供給拡大がなされるはずだが、専ら上級遺跡や寺院関連の遺跡への供給が主で(梯川中流域の国府周辺集落や浄水寺などの山林寺院では須恵器食膳具に拮抗する量の内黒土師器食膳具が出土する)、一般集落への食膳具供給は須恵器が主体であったのだろう。



第112図 6B期の須恵器碗皿と内黒土師器碗皿



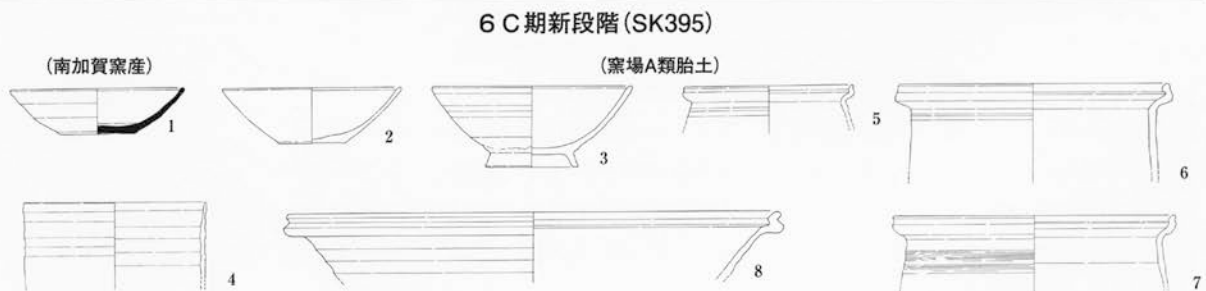
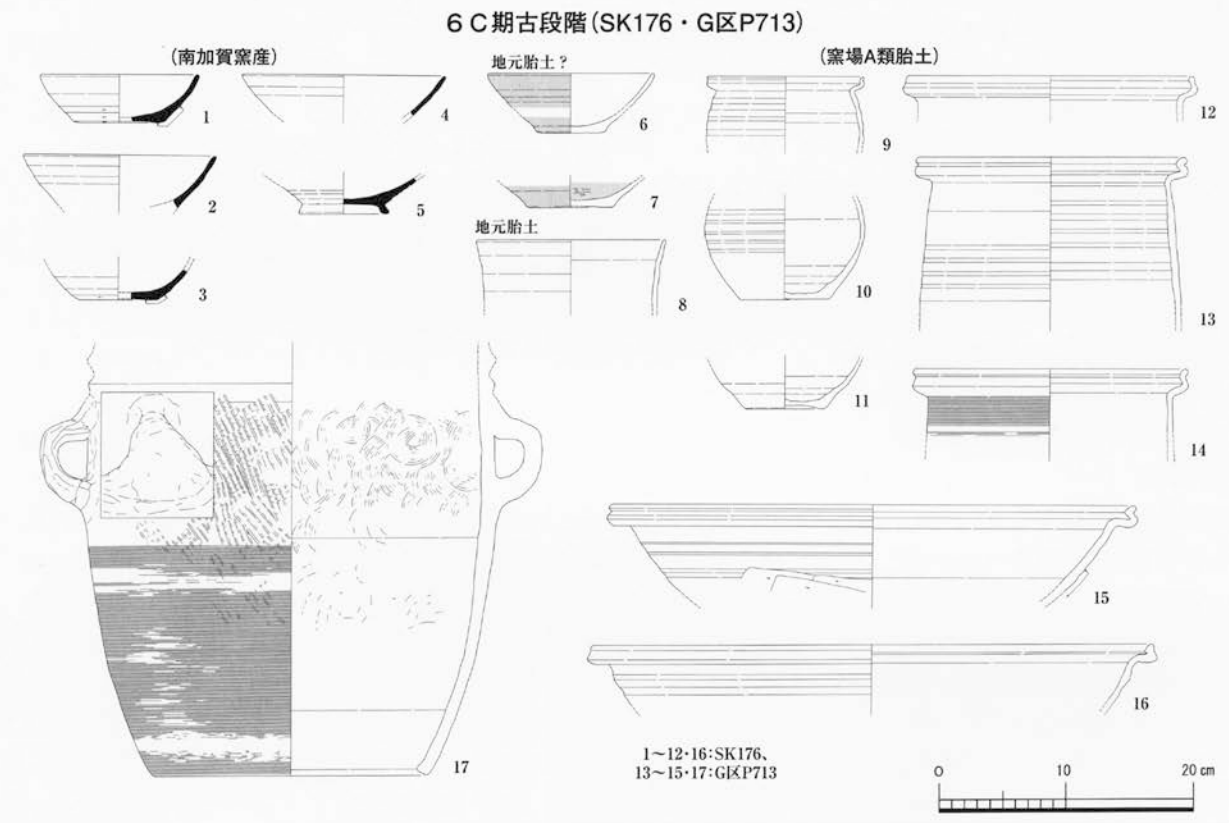
第113図 6B期の須恵器坏盤と平安京II中期の土師器碗皿

当期の須恵器食膳具は、椀皿類の定着を一つの特徴とするが、依然として坏盤器種が主体であることには変わりなく、須恵器窯での組成比率でも坏A 5割、坏B 2割、盤A 15%といった状況である（望月 1992）。ただ、皿Bが1割と定着することは注目され、椀皿器種を求める消費の場が増えたことを意味しよう。しかしながら、三湖台集落群の様相を見ると、須恵器皿Bの出土は極めて少なく、内黒土師器食膳具と同様、これらの器種は限られた消費の場への供給で、一般集落での日常食器においては依然、坏盤類主体の食膳具構成であったと言えよう。また、当期の特徴としては、坏B蓋の無鈕化への統一、坏B身小法量の無台化の他、坏Bの椀形化の進行、坏A、盤Aの極度の薄手化が上げられる。体部外傾した浅い器形をなし、第113図のように、宮都の非ロクロ成形土師器椀皿に近い器形を志向していく。

土師器食膳具は当資料では提示できないが、内黒土師器は全て外面赤彩を施すものに依然統一されている段階で、内面に丁寧なミガキ調整を施す。器種は椀A・B、皿Bで構成され、皿Bは1法量だが、椀類は中法量を基点に小と大に多様な法量分化をする。特に大法量には大型鉢状製品が存在し、金属器的器種も確認される。なお、土師器煮炊具については6A期から薄手化の進行と口縁部挽き延ばしの進行のみで、大きな変化は見られない。

c. 6C期（第114図）

6C期は須恵器食膳具の椀皿器種への統一と土師器食膳具の増加を編年指標とする。北陸各地の須恵器生産は既に6B期で衰退、終焉の様相を見せていたが、南加賀窯跡群などの国単位の中核窯でも須恵器生産の終焉を迎える。それとともに、窯場での土師器生産も解体され、平野部の集落近郊へ土師器生産が分散していく。つまり、当期をもって北陸型古代土器生産体制が崩壊するものであり、7世紀以来の須恵器を軸とする古代的土器様式が



第114図 三湖台6C期の土器群 (S=1/6)

終焉する。このような土師器生産分散化の動きは7期に本格化するものだが、額見町遺跡では既に当期にその兆候が現れている。当期の標識資料としてあげたSK176では土師器煮炊具や内黒土師器とともに、8のような匣鉢状土師製品が碎片で多量出土している。いずれも被熱痕や焼け弾けの見られるもので、土師器焼成に伴う窯道具と見られる。当窯道具は内黒土師器食膳具を合わせ口で重ね焼きする際に使用される道具で、南加賀窯跡群特有のものである。つまり、南加賀窯跡群で土師器生産を行っていた土師器工人が当集落で土師器生産を行ったことを示すものであり、額見町遺跡では7A期まで同様の焼成方法で内黒土師器生産が行われる（望月2008a）。

6C期は南加賀窯跡群VI3期に対比できるが、南加賀窯跡群では豊富な窯資料から、当期を戸津37号窯（古）→戸津61号窯（中）→二ツ梨豆岡向山7号窯（新）の3期細分している（望月2004）。椀皿の器形が底部、高台部径縮小し、体部外傾化のしていくもので、標識資料としてあげたSK173は椀A器形と底部ケズリ調整から古段階に位置付けられるものである。内黒土師器椀Aを伴うが、量的には依然として須恵器が主体であり、外面赤彩を施すことを基本とする。なお、G区P713もほぼ同時期に位置付けられるもので、ここでは煮炊具がまとめて廃棄されていた。薄手で、口縁部の挽き出しとS字状屈曲が明瞭となることを特徴としている。

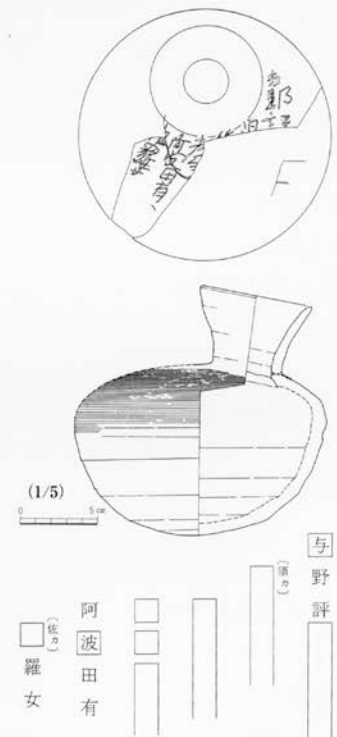
以上の古段階に対し、新段階の標識資料としてSK395をあげる。内黒焼成しない土師器椀皿が定量伴う段階で、須恵器椀皿と器形、法量とも同様で、互換性を持つ。6期は急速な須恵器品質の低下が進行するが、焼成が甘くなることもその一つであり、そこから赤彩、内黒しない土師器椀皿生産へと進むことは、製品コスト削減の究極の在り方であったと言えよう。器形変化としては、須恵器椀皿の底部小型化と体部外傾化、そしてやや足高の椀Bが存在することも特徴の一つである。土師器煮炊具の口縁部のS字状屈曲は上から潰れたような器形に変化し、長胴釜の胴部はまっすぐ立つ器形となる。内黒土師器食膳具の確認はないが、当期は依然として外面赤彩を施すことを基本とする段階で、7期の外面赤彩を施さない内黒土師器食膳具とは技術的に異なっている。

3. 各期の暦年代観と画期の設定と評価

(1) 各期の暦年代観について

ここでは、三湖台1期から6期までの暦年代観について述べておきたい。なお、三湖台4期については直接的な文字資料、三湖台6期については宮都と対比可能な瓦資料が存在するので、それらを使用し、在地での暦年代観を示すことが可能だが、その他の時期については暦年代根拠を示せる資料がない。このため、宮都編年の援用に拠って暦年代観を示す以外に方法はなく、当該期の須恵器特徴を陶邑窯跡群編年（以下「陶邑窯」とする）または宮都の土器組成等に当てはめ、そこから宮都での暦年代観をスライドさせて年代考察を試みたい。

まず、三湖台1期だが、1A期は田嶋古墳様式の終末期、1B期は田嶋古代編年I1期古段階、1C期はI1期新段階に位置付け、1A期から1B期へは坏Hの成形技法が大型底円盤ケズリ技法から丸底成形技法へ転換したこと、また、1B期から1C期へは坏Hの小型化と定型的な鉢の登場を編年指標としている。これを陶邑窯編年とすり合わせると、1A期は陶邑窯TK43型式、1B期は陶邑窯TK209型式に対比でき、1C期はそれに後続する陶邑窯狭山池北堤窯下層灰層に対比できる（古代の土器1998、192 - 195頁、199頁、279 - 281頁）。暦年代根拠資料を持つ宮都編年に照らし合わせれば、588年に造営が開始される飛鳥寺の整地土中土器群が陶邑窯TK43型式に位置付けられることと、7世紀初頭に没した押坂彦人大兄の墓とされる牧野古墳出土須恵器が陶邑窯TK209型式に位置付けられること、645年焼失の蘇我邸造営地とされる甘樫丘東麓焼土層中土器群が陶邑窯狭山池北堤窯下層灰層に近いこと、そして狭山池北堤窯の狭山池の木樋の年輪年代が616年というデータがあることから（佐藤2007、315頁及び菱田2007、19 - 28頁を参考）、これらを概ねスライドさせ、1A期を6世紀4/4期、1B期を7世紀1/4期、1C期を7世紀2/4期頃に位置付けたい。



第115図 那谷金比羅山窯の刻書平瓶

三湖台2期は、2A期を坏Hの最小径化と坏Gの出現に、2B期を坏Hの衰退と坏Gの坏A化に編年指標を置く。田嶋編年のI2期とII1期に対比でき、これを陶邑窯編年とすり合わせると、2A期は陶邑窯TG68号窯、2B期は陶邑窯TK217号窯に対比可能である(古代の土器1998、238-239頁、200-201頁)。暦年代根拠資料を持つ宮都編年に照らし合わせれば、660年~667年に存在したとされる中大兄皇子の水落遺跡漏刻遺構周辺出土土器が陶邑窯TK217号窯に位置付けられる(佐藤2007、315頁を参考)。また、地元資料としては、2A期に位置付け可能な南加賀窯跡群那谷金比羅山8号窯出土の平瓶に「与野評……」という評名刻書した資料がある(石川埋文1985)。全国的な立評は孝徳朝期(645~654)に行われたとされており、水落漏刻遺構の年代観ともあわせ、三湖台2A期を7世紀中頃に、2B期を7世紀3/4期頃に位置付けたい。

畝田西遺跡群出土坏A



ニツ梨一貫山4号窯出土坏A



第116図 天平二年
銘墨書須恵器と窯資料

三湖台3期は、3A期を定型的な坏B・坏Aの出現と法量分化の導入、3B期を坏G的器種の欠落と坏A・Bの定着、3C期を有蓋坏Aの消滅と坏Bの中法量への統一化と主体化、3D期を坏身器形の扁平化と坏Aの増加、そして一部上級遺跡に導入される深身の坏Bや盤類を加えた多様な法量分化に基づく食膳具組成の導入においている。田嶋編年のII1期末~II2期古相とII2期、II3期、III期古段階に対比できるもので、これを陶邑窯編年とすり合わせると、3A期は陶邑窯TK46型式に、3B期は陶邑窯TK48型式に、3C期は陶邑窯KM226号窯に、3D期は陶邑窯KM302号窯に対比可能である(古代の土器1998、206頁、213頁、274頁、和泉市1998)。暦年代根拠資料を持つ宮都編年に照らし合わせれば、藤原宮遷都時期(694年)の直前時期を示すとされる藤原宮SD1901A資料がTK48型式に位置付けられること、平城宮遷都(710年)の際に埋め立たとされる下ツ道西遺跡SD1900A資料がKM226号窯に近い点、長屋王家邸宅遺跡SD4750で出土した紀年銘木簡(716年)共伴資料または平城京左京一条三坊十五坪SD485で出土の紀年銘木簡(728・729年)共伴資料がKM302号窯に近い点などから(佐藤2007、315頁及び菱田2007、19-28頁を参考)、その暦年代観をスライドさせて、三湖台3A期を7世紀4/4期頃に、3B期を7世紀末頃に、3C期を8世紀初頭頃に、3D期を8世紀初頭を除いた前葉頃から一部2/4期に位置付けたい。

三湖台4A期は、南加賀窯跡群III期新段階からIV1期に位置付けられるが、その段階の文字資料として上げられるのが、金沢市畝田西遺跡群出土の天平二年(750年)の紀年銘墨書がある南加賀窯産須恵器坏Aである。器形や法量から、ニツ梨一貫山4号窯のものに近く、IV1期古段階に位置付け可能と判断する。紀年銘をそのまま年代観と見れば、三湖台4A期は8世紀中頃を前後する時期に位置付けられることとなり、3D期の年代観とも齟齬がない。三湖台4B期についてはそれに後続させて8世紀3/4期に位置付けておくのが妥当だろう。

三湖台5期は、白色堅緻焼成の須恵器が出現する5A期に始まり、5B期の内黒土師器導入と施釉陶器模倣と思われる有台碗の出現、そして5C期には施釉陶器模倣器種の定着と集落への施釉陶器搬入という展開を見せる。白色堅緻焼成が5期変革の端緒となっているが、本格化するのは5B期であり、施釉陶器模倣器種の出現も当期に見られ、それは猿投窯跡群で導入される原始灰釉陶器生産などの優品須恵器生産に影響を受けての現象と見ている。このような原始灰釉陶器と言える胎土精選と意識的な降下釉焼成を食膳具に本格導入するのは、黒笹7号窯段階とされており(古代の土器2001、22-27頁)、この窯では白磁写しとされる有台碗が生産されている。これが後の灰釉陶器生産へ繋がったものと見られており、黒笹7号窯は長岡京期(784~794年)併行と位置付けがなされている。また、長岡京跡の出土土器を見ると、その新相段階には組成の中に定量の黒色土器A類が加わるようになっており、この様相も三湖台5B期の赤彩土師器の内黒土師器化に繋がるものと言え。つまり、5B期を概ね長岡京期の後半から後続する平安京I期中に併行させ、8世紀末から9世紀初頭と考えておきたい。これに先行する三湖台5A期については8世紀4/4期に位置づけ、猿投窯跡群で瓶類に優品生産意識が顕在化する折戸10号窯に併行する時期としたい。次の三湖台5C期は平安京遷都後、平安京I期新に対比されるものと考えている。5C期の施釉陶器模倣器種の定着は、猿投窯跡群における施釉陶器生産の本格化に対応した動きと見ており、そしてこの頃には初期施釉陶器が出土してくる。平安京I期新の暦年代観については、810年から840年とされており(平尾1990、103頁を参考)、9世紀前葉段階に位置付けておきたい。

三湖台6期の暦年代観については、南加賀窯跡群で生産される須恵質相輪セットや軒先瓦の瓦当文様系譜年代、

そして国分寺設置と修復記事の年代等から以前に考察したことがある（望月 2005b）。詳しくは当考察を参照いただきたいが、Ⅵ1期については、標識窯とした戸津31号窯から出土する須恵質塔相輪セットを加賀国分寺転用（841）に伴う整備に関連するものと位置付け、9世紀中頃をあてた。Ⅵ2期については、Ⅵ2期古段階に生産されたと予想する平安京系複弁四葉蓮華文軒丸瓦とC字対称形均整唐草文軒平瓦の瓦当文様を平安京での瓦当文様変遷に当てはめ、当窯資料の文様退化傾向などから、平安京蘭林坊、豊楽院の軒先瓦セットに対比可能と考え、9世紀後葉頃とした。この9世紀後葉段階をもって国分寺転用に伴う伽藍整備用瓦生産は終り、Ⅵ3期には修復瓦の生産が行われている。Ⅵ3期古段階に生産された複弁四葉蓮華文軒丸瓦はⅥ2期古段階に比べて複弁が離れていく傾向から、仁和寺南院円堂（創建904年）のものに類似しているが、形が崩れており、若干の後出と見て、10世紀前葉から2/4期と見ている。Ⅵ3期新段階にも同じ瓦范のものは生産されているが、新たな文様の軒平瓦が加わり、また同時期に生産されたと推察される高尾廃寺に葺かれる単弁八葉蓮華文軒先瓦（複弁八葉蓮華文軒先瓦の単弁化したもの）から、平安宮等の同系文様変遷の中に当てはめ、10世紀中頃の年代観を与えている。以上の瓦文様系譜より、6A期を9世紀中頃、6B期を9世紀後葉から10世紀初頭、6C期を10世紀前葉から中頃までの暦年代観を与えたい。

（2）画期設定と評価

三湖台集落群出土土器編年は、本論の冒頭でも述べたように、土器様式の変化のみならず、三湖台集落群の集落経営動向、丘陵部手工業生産動向も視野に入れた、複合的な要素で組み立てており、その中で画期をどこに置くかを考えている。以下では、各画期要素を整理し、画期区分において修正があれば付け加えておきたい。

1期成立の画期について、本編年では三湖台集落群成立という視点から設定している。1A期から1C期まで主体となる食膳具組成や煮炊具組成に変化はなく、土器様相としてひと括りできるものとして包括した。ただ、南加賀窯跡群の窯場移動や新たな須恵器窯構造導入、丘陵部での砂鉄製錬の開始は次の1B期からであり、三湖台集落群の本格的な経営も1B期から始まる。そういう視点から言えば、1B期が古代型集落経営、古代型手工業生産経営の成立期であり、1A期はその先鞭として当台地に集落設置されたものとみるのが正しい。その意味で1A期を三湖台集落群の成立の前段集落と位置付け、1A期を0期に設定したい。1B期は古代型集落経営、古代型手工業生産経営開始の画期であり、それは田嶋編年のI1期成立に対応する。

2期、3期は、古墳時代的な伝統的土器様式から宮都型の律令的土器様式へと段階的に整備されていった時期であり、その端緒を2期の成立に、本格的な土器組成の導入を3期の成立に置くことで当期の段階的な画期を評価した。具体的には2期は日常食膳具における土師器から須恵器への置き換え、それまでの坏H主体組成から坏G主体組成への転換など、伝統的な土器様式から脱却し、3期に成立する新たな土器様式を模索する段階と位置付ける。3期は2期に成立した坏Gが坏Aへ変化し、坏Bの出現と法量分化の導入、そして宮都系土師器食膳具を模倣して成立したロクロ成形の赤彩土師器食膳具など、宮都で成立した律令的土器様式とその使用形態を模倣し、宮都型の土器様式を地域に作り出していく段階で、律令的土器様式導入期という位置付けが可能である。

また、土師器煮炊具においても在来型土師器煮炊具から北陸型土師器煮炊具が成立するまでの段階的な画期が設定できる。つまり、2期では在来型技法による煮炊具に朝鮮系を主体とした移民系煮炊具の技法が導入される段階、3期では朝鮮系煮炊具が在地化し、窯場生産への導入とともに北陸型煮炊具の原型ができ上がる段階で、3期の終わりをもって古代前半型の土器様式はほぼ整備されたと言える。このような土器様式の段階的な画期は、三湖台集落群経営、丘陵部手工業生産においても確認される。つまり、2期に三湖台集落群の中で先行成立した集落が終焉する一方で、新たな集落が成立し、集落内での本格的な精錬、鍛冶、同様に丘陵部でも製鉄が本格稼働する。3期には壁支柱堅穴建物という新たな建物様式の導入とともに新たな移民の加入によって集落の拡大が図られ、3C期から3D期に古代前半型集落のピーク、そして丘陵部手工業生産も同時にピークを迎えている。これは中央主導のもと施策的に行われてきた三湖台集落群経営と丘陵部手工業生産が、この時期に結実したものであり、土器様式の変化と付随するのは、両者が中央主導で行われた施策的なものであったからであろう。

このような三湖台地集落群経営と丘陵部手工業生産においてピークを迎えた3期末から、4期には額見町遺跡での集落停滞、また新たに拡大する集落も存在するようで、三湖台集落群の移動期、転換期に位置付けられる。それを象徴する存在として古代「村寺」の出現があり、従前の集落経営の在り方から新たな組織編成を試みた時

期であったと位置付ける。丘陵部手工業生産においては、製鉄の状況に大きな変化は見られないものの、須恵器窯場においては土師器生産が本格導入され、須恵器と土師器の窯場集約生産が完成する。土師器量産化に対応するため、土師器焼成坑を群集経営し、それに伴うかのように須恵器窯も同一丘陵斜面に並列築窯の集約生産の様相を色濃くする。土師器生産の窯場への集約は、北陸型煮炊具の完成を促し、同時に赤彩土師器食膳具の普及と、須恵器食膳具における宮都模倣の律令的土器様式を在地化するという形で、地域に定着を図った。これは2・3期土器様式を地域型に変質させることで北陸型とも言える土器様式を確立したものと見え、同時に北陸各地に地域差を顕在化させていく。2・3期の宮都型模倣から地域型へという段階であり、在地化されたと言う意味で、完成期であるとも捉えられるが、また同時に地域型の成立は中央の求心力低下、中央統制の弛緩を意味しており、そこに5・6期に変質していく素地が内包されているとも言える。

5期以降の三湖台集落群は停滞、衰退状態が続き、7期まで大きな変化はないため、土器様式とその生産動向により画期設定しているが、5期成立の画期については白色堅緻焼成という優品須恵器生産に置いている。根底は猿投窯跡群を頂点とする優品須恵器生産を志向する動きにあり、宮都における猿投窯産須恵器の積極的な需要、優品須恵器を求める消費者の食膳具に対する意識変化がある。宮都で発現した優品意識は8世紀末～9世紀初頭に施釉陶器や漆器、黒色土器などを加えて、多様な素材による食膳具様式を成立させていくが、5B期の変化はそれに対応した動きであり、北陸にも内黒土師器生産の導入、施釉陶器模倣が行われ、4期に成立した北陸型古代食膳具様式の変質、そして平安後期に成立する王朝国家的食膳具様式への傾斜が始まる。

このように、5期は4期までに見られた古代前半型の土器様式から王朝国家的土器様式へと傾斜していく古代後半型の土器様式への変革期という位置付けができるが、6期の土器様式はそれをより具現化したものであり、6A期の南加賀窯跡群における内黒土師器生産の導入が端緒となる。同時に須恵器における優品意識の欠落、須恵器生産における量産化と低コスト化という経営戦略を明確にしていく。その結果が6C期の椀皿への淘汰であり、焼成と生産において土師器化していくことで、須恵器生産の持つ意味は急速に薄れ、基幹的窯場での須恵器生産の減産、停止へと向かい、6期をもって北陸各地の須恵器生産が終焉する。

以上、画期要素を述べたが、1期は推古朝の画期、2期・3期は孝徳朝、天武朝の画期、4期は聖武朝の画期、5期は桓武朝の画期と、奇しくも政治上の変動期に重なる。土器様式の変化は直接的に中央施政から影響を受けて変わっていくものではないが、政治的変動の波またはそれを生み出す兆候が、地方政治や儀礼様式に影響を与え、地方の土器様式に何らかの形で映し出されたものと見るべきだろう。詳細は稿をあらため、再考したい。

引用文献

石川県教育委員会 1979『戸津5号窯』
 石川県立埋蔵文化財センター 1985『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』
 石川県立埋蔵文化財センター 1987『篠原遺跡』
 石川県埋蔵文化財センター 2006『金沢市畷田西遺跡群V』
 和泉市教育委員会 1998『KM302号窯跡発掘調査報告書』
 宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究—北陸を舞台として—』桂書房
 金沢市教育委員会 1989『金沢市末窯跡群』
 金沢市教育委員会 2001『金沢市末窯跡群II』
 古代の土器研究会 1993『古代の土器2 都城の土器集成II』
 古代の土器研究会 1998『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』
 古代の土器研究会 2001『古代土器研究4』
 小松市教育委員会 1991『戸津古窯跡群I』
 小松市教育委員会 1992『戸津古窯跡群II』
 小松市教育委員会 2002『二ツ梨一貫山窯跡』
 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』京都編集工房
 佐藤 隆 2007『7・8世紀須恵器編年の再構築と都城出土資料の様相』『大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2005年度 共同研究成果報告書』
 田嶋明人 1988『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』北陸古代土器研究会
 田嶋明人 1989『加賀・能登の古代土器生産』『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
 辰口町教育委員会 2005『和気後山谷窯跡群』
 西 弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

菱田哲郎 2007『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会
 平尾政幸 1990『平安前期の土器』『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所
 望月精司 1990『矢田野向山1号窯跡の土器様相』『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』小松市教育委員会
 望月精司 1992『須恵器のまとめ』『戸津古窯跡群II』小松市教育委員会
 望月精司 1997『北陸における古代土器生産体制の変質と展開』『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
 望月精司 2004『9～10世紀における南加賀窯跡群の須恵器・土師器・瓦』金沢大学考古学研究室検討会資料
 望月精司 2005a『能美窯跡群の8世紀後半～9世紀中頃の須恵器編年と窯場動向』『和気後山谷窯跡群』辰口町教育委員会
 望月精司 2005b『南加賀窯跡群の平安期軒先瓦に関する編年的考察』『小松市内遺跡発掘調査報告書I(二ツ梨山向山窯跡・狐山遺跡)』小松市教育委員会
 望月精司 2008a『南加賀地域の平安後期土器群に関する編年的考察』『額見町遺跡III』小松市教育委員会
 望月精司 2008b『須恵器窯専用焼台に関する考察—北陸の貯蔵具専用焼台の導入と展開、系譜を中心として—』『白門考古論叢』II 中央考古会・中央大学考古学研究会
 望月精司 2009『額見町遺跡の古代「村寺」に関する考察』『額見町遺跡IV』小松市教育委員会

挿図出典一覧

第104図：望月1990より転載。第107図：辰口町2005、小松市1991、金沢市2001を合成作図。第109図：辰口町2005、金沢市1989を合成作図。第110図：小松市1991、2002を合成作図。第112図：小松市1992、2002を合成作図。第113図：小松市1992、古代の土器1993を合成作図。第115図：石川埋文1985より転載。第116図：石川埋文2006、小松市2002を合成作図。その他は筆者作図。

第V章 自然科学分析報告

— 額見町遺跡の自然科学分析 —

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

額見町遺跡（石川県小松市額見町に所在）は、加賀平野南部、小松・江沼平野（経済企画庁総合開発局、1974）の紫山湯南部に面する段丘上に位置する。本遺跡周辺の地形地質は、鮎野（1988）を参考にすると、ほぼ直線的な海岸線沿いに小松砂丘が分布し、加賀平野南東部側に中部更新統の堆積物からなる丘陵地が、加賀市片山津地区・橋立などに海岸段丘が分布し、砂丘と丘陵地に挟まれた湯埋積平野にその名残として紫山湯・木場湯などが存在する。これまでの発掘調査により、竪穴住居跡・堀立柱建物跡・鍛冶炉跡などが検出されており、7世紀から12世紀まで続く集落遺跡であることが明らかにされている。

今回は、当時の採取されていた貝類の種類を知るために貝類同定、燃料材の種類を調べるために植物珪酸体分析・炭化材同定、須恵器の内容物を検討するために植物珪酸体分析・微細物分析・土壤理化学分析（リン・炭素分析）、土坑内への遺体埋納について検討するために土壤理化学分析（リン・炭素分析）を実施する。なお、貝類同定は早稲田大学の金子浩昌先生にお願いし、結果を署名原稿として掲載する。

2. 試料

試料は、資料1～7である（表1）。資料1は、A区SK12で出土した貝類である。全て水洗いされた状態である。SK12は小土坑で、土器出土はなく、時期の特定はできないが、7世紀～10世紀と推定される。周辺で貝類を産出する土坑がなく、単独で存在する。また、本遺跡南側に位置する念仏林南遺跡の21号土坑から採取された貝類（資料1b）を比較試料として同定する。

資料2は、H区SK404から採取された炭化材混じりの灰層である。SK404は、鍛冶に使用する木炭を生成するための遺構と考えられており、遺物は8世紀と12世紀のものが出土し、時期の特定はできない。遺構覆土が1層～6層まで分層され、この内の4層についてB区・C区の2ヶ所から試料が採取された。この内、B区から採取された試料について植物珪酸体分析を実施する。また、樹種同定は、B区・C区から採取された土壤試料中から各5点、合計10点を抽出した。

資料3は、H区SK425で検出された須恵器瓶D（V報告第31図）内の土壌である。SK425では、須恵器瓶Dと土師器長胴釜、浅鍋が完形に近い形で出土し、時期的には8世紀後半と推定されている。須恵器瓶D（V報告第80図99）は、頸部から上が欠損するが、胴部が完形であった。

資料4は、お38Gr土器溜まりのほぼ中央で検出された須恵器瓶D（II報告第93図）内の土壌である。本来、浅い土坑内に須恵器と土師器が疎らに廃棄されたと考えられている。須恵器瓶D（II報告第156図8）は、頸部から上が欠損するが、胴部が完形であり、時期的に9世紀中頃と推定されている。

表1 分析試料の一覧

番号	遺跡名	区	地点	時期	採取層位等	分析項目				
						貝	CW	PO	微細	土理
資料1	額見町遺跡	A区	SK21	7～10世紀	覆土	●				
資料1b	念仏林南遺跡		21号土坑	古代	覆土	●				
資料2	額見町遺跡	H区	SK404	8～12世紀	4層B区		●	●		
					4層C区		●			
資料3	額見町遺跡	H区	SK425	8世紀後半	須恵器瓶(No.1)内土			●	●	●
資料4	額見町遺跡	B区	お35Gr土器集中	8世紀後半～9世紀前半	須恵器瓶(No.60)内土			●	●	●
資料5	額見町遺跡	G区	SK332	12世紀頃	2層					●
資料6	額見町遺跡	G区	SK335	12世紀頃	2層					●
資料7	額見町遺跡	G区	SK340	12世紀頃	2層					●

凡例) 貝：貝類同定 W：樹種同定 PO：植物珪酸体分析 微細：微細遺物分析 土理：土壤理化学分析（リン・炭素分析）

資料5は、G区SK332内下層土である。SK332は、上面に大きな礫石や完形に近い土師器碗皿が置かれ、その直下に焼土や炭化物が混在する（IV報告第35図）。一部、被熱面の確認がなされている。墓坑としての用途が推定されており、時期的に11世紀末頃と推定されている。試料は、覆土2層から採取された。

資料6は、G区SK335内下層土である。円形の土坑で、上層に礫石や土師器碗皿が置かれ、焼土が分布するが、被熱面が認められない（IV報告第35図）。墓坑としての用途が推定されており、時期的に12世紀前半頃と推定されている。試料は、覆土2層から採取された。

資料7は、G区SK340内下層土である。SK332と同様な特徴をもつことから、墓坑としての用途が推定されている（IV報告第35図）。時期的にも12世紀前半頃と推定されている。試料は、覆土2層から採取された。

3. 分析方法

(1) 貝類同定

既に水洗いされた状態であったので、肉眼観察により形態的な特徴を捉えて、種類を同定する。

(2) 植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈し、植物体が土壌中に取り込まれた後、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離して単体となる。しかし、植物体あるいは植物体が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残される場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。そのため、珪化組織片の産状から当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。今回、土壌中に含まれる珪化組織片を抽出するため、以下の方法で分析する。

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、単細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために植物珪酸体群集と珪化組織の分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎にそれぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(3) 樹種同定

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(4) 微細物分析

資料3では、試料の総重量1762.9gの内、801.7gを秤量する。資料4は、試料の総重量2090.2gの内、800.5gを秤量する。なお、重量は、いずれも湿重である。これら秤量した試料について、数%の水酸化ナトリウム水溶液を加えて一昼夜放置して、試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。その中から遺物を抽出し、種類がわかるものを同定する。

(5) 土壌理化学分析（リン・炭素分析）

土壌理化学分析として今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸の含量測定を行う。リン酸は骨に多量に含まれ、土壌中に固定されやすい性質を持つ。そのため、遺体が埋葬されると土壌中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由来のリン酸成分の影響が強い場合、腐植含量も高くなることが想定されるため、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定する。

リン酸は、硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、腐植はチューリン法でそれぞれ行う（土壌養分測定法委員会、1981）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法

(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5 mmのふるいを全通させる(微粉碎試料)。リン酸含量は、風乾細土試料 2.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約 5 ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約 10ml を加え再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P₂O₅) 濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P₂O₅ mg/g) を求める。

腐植含量の測定は、微粉碎試料 0.100 ~ 0.500 g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃ の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org - C 乾土%) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

4. 結果

(1) 貝類同定

額見町遺跡の貝類遺体

早稲田大学 金子浩昌

額見町遺跡および念仏林南遺跡より検出された貝類の種名を表 2 に、同定結果を表 3 に示す。額見町 SK12 土坑から検出された貝類は、ヤマトシジミを主体とし、これにカワシンジュガイが混入するものであった。

ヤマトシジミは、ごく稀に最大殻長 33.0 mm に達するものがあるが、大部分が 20.0 ~ 25.0 mm の殻であった。ヤマトシジミとしては、小さい殻が主であったと言える。

カワシンジュガイは殻長 50.0 mm が最大で、多くは 35 ~ 40.0 mm であった。カワシンジュガイとしては小さい殻である。

汽水種のヤマトシジミが主体で鹹水種と全く含まないのは、この紫山潟がラグーン化し、鹹水の影響が著しく弱まっていたことによるのであ

う。また、カワシンジュガイは、河川による陸水の流れを直接受ける池沼に棲息し、そこで採ることができたと推定される。検出されたカワシンジュガイのサイズが小さいことから、成長する前に採られていると考えられる。

一方、念仏林南遺跡では、淡水貝としてはオオタニシとカワシンジュガイに限られた。このことから、額見町遺跡よりさらに内陸に深まった位置にあり、ここではヤマトシジミの採捕できる入江がなく、カワシンジュガイ

表 2 検出貝類種名表一覧

軟体動物門	Phylum	Mollusca
腹足綱	Class	Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass	Prosobranchia
原始腹足目	Order	Archaeogastropoda
リュウテンサザエ科	Family	Turbinidae
サザエ		<i>Turbo cornutus</i>
中腹足目	Order	Mesogastropoda
タニシ科	Family	Vivipariidae
オオタニシ		<i>Cipangopaludina japonica</i>
斧足綱	Class	Pelecypoda
弁鰓亜綱	Subclass	Eulamellibranchia
古異歯目	Order	Palaeoheterodonta
カワシンジュガイ科	Family	Margaritiferidae
カワシンジュガイ		<i>Margaritiferidae laevis</i>
異歯目	Order	Heterodonta
シジミガイ科	Family	Corbiculidae
ヤマトシジミ		<i>Corbicula japonica</i>

表 3 貝類同定結果

番号	遺跡名	区	地点	種類	部位	数量	サイズ	
							殻長(mm)	殻高(mm)
資料 1	額見町	A区	SK12	ヤマトシジミ	右殻	437	16~33	16~31
					左殻	431	17~33	17~33
					殻頂残左右不明	26		
					破片	56.9 g		
				カワシンジュガイ	右殻	41	33~48	20~25
					左殻	40	36~50	21~25
破片	17.5 g							
資料 1b	念仏林南	-	21号土坑	サザエ	破片	2		
				オオタニシ	殻頂残	4		48~55
					破片	1		
				カワシンジュガイ	左殻	13	35~65	21~33
					右殻	15	35~66	20~33

注) 数量で個数を計算できない破片は重量を示す。

やオオタニシの棲息する池沼が貝類の採捕場所となっていたと考えられる。ここでは額見町遺跡と比較して、やや大きいカワシンジュガイが採られている。オオタニシは普通の大きさである。他の土坑における貝の検出状況遺物の出土状況、時代性等を考慮する必要があるが、これらの貝はより淡水化の進んだ環境で採集されたものと思われる。また、サザエの殻片2点が採集されている。殻は大きくないが、棘がよく発達している様子が認められる。現在の加佐ノ岬辺りなどでみられる外海の岩礁海岸で採られて運ばれてきたと推定される。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表4、図1に示す。各試料とも植物珪酸体が検出される。保存状態は、概して良好である。以下、試料ごとに植物珪酸体および組織片の産状について述べる。

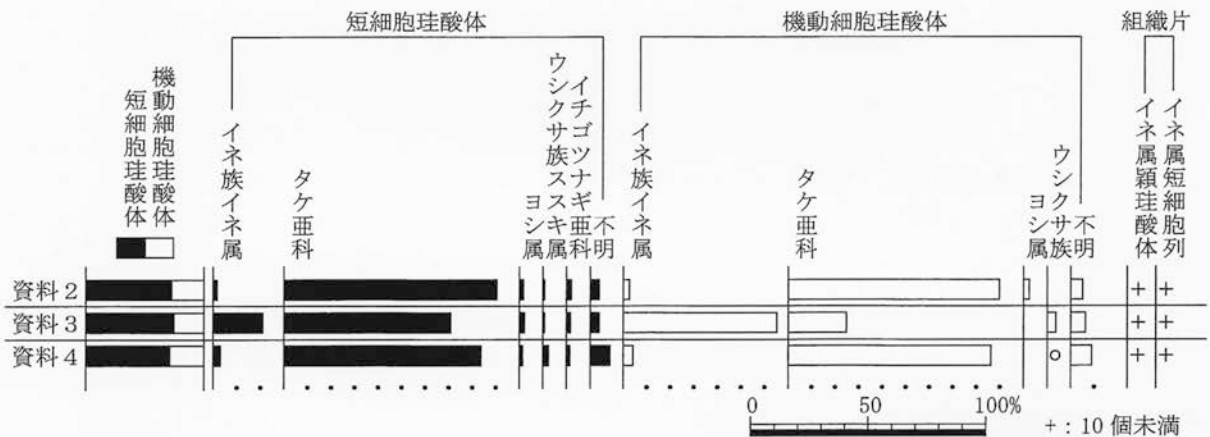
資料2は、栽培植物であるイネ属の籾殻に形成されるイネ属穎珪酸体と葉部に形成される短細胞列がわずかに認められる。単体の植物珪酸体の産状は、タケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに検出される。

資料3でもイネ属穎珪酸体と短細胞列が検出される。単体の植物珪酸体は、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに検出される。これらの種類のなかでは、イネ属とタケ亜科が多産する。

資料4もイネ属穎珪酸体と短細胞列が検出される。単体の植物珪酸体の産状はタケ亜科が優占し、イネ属、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに検出され、群集組成が資料2と類似する。

表4 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	資料2	資料3	資料4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属		5	67	9
タケ亜科		283	226	251
ヨシ属		5	7	4
ウシクサ族ススキ属		2	2	7
イチゴツナギ亜科		6	5	4
不明キビ型		5	6	15
不明ヒゲシバ型		6	6	7
不明ダンチク型		1	-	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属		3	71	5
タケ亜科		106	27	106
ヨシ属		3	-	-
ウシクサ族		-	4	1
不明		6	7	11
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体		313	319	300
イネ科葉身機動細胞珪酸体		118	109	123
総計		431	428	423
組織片				
イネ属穎珪酸体		2	7	1
イネ属短細胞列		3	7	2



(3) 樹種同定

炭化材は全て落葉広葉樹のクリに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

(4) 微細物分析

分析の結果、いずれの試料も残渣は少なく、ほとんどが泥化できなかった土塊である。以下、試料ごとに結果を示す。

資料3は、炭化材片、土器片が検出された。炭化材片は、数ミリの微細なものが、湿重0.4g検出された程度であり、樹種を特定できない。土器片は、大きさ19×14mm程度、乾燥重量1.2gの土器片である。

資料4は、炭化種実と炭化材片が検出された。炭化種実は、4個検出された。この内、3つは大きさ1mm程度の卵形、先端部が尖り、薄くて堅くざらつく表面で、深い溝が2本入っており、種類を特定することができない。

(5) 土壤理化学分析 (リン・炭素分析)

結果を表5に示す。各成分は、腐食含量が4.54～8.53%、リン酸含量が3.43～7.78P₂O₅ mg/gであった。

表5 土壤理化学分析結果

試料名	区	地点	土性	土色	腐植含量(%)	P ₂ O ₅ (mg/g)	
資料3	H区	SK425	LiC	10YR2/2	黒褐	4.54	4.07
資料4	B区	お35Gr土器集中	LiC	10YR2/1	黒	6.80	3.43
資料5	G区	SK332	LiC	10YR1.7/1	黒	7.93	5.01
資料6	G区	SK335	LiC	10YR1.7/1	黒	8.53	7.78
資料7	G区	SK340	HC	10YR2/3	黒褐	5.06	5.18

注1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

注2) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

LiC・・・軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

HC・・・重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

5. 考察

(1) 出土貝類からみた捕食状況

本遺跡から出土した貝類は、大半が汽水性のヤマトシジミであった。おそらく、小松砂丘の後背にあたった潟などから採取されたと推定される。また、淡水性のカワシンジュガイが検出されており、池沼などに棲息する貝類も収穫されていたことが分かる。一方、念仏林南遺跡で検出された貝類では、個体数が少ないが、その中でも淡水域に棲息するカワシンジュガイが主体であった。このことは、両遺跡が段丘の縁辺部に位置し、念仏林南遺跡が内陸に立地するという位置関係を反映していると考えられる。なお、当時は、貝類以外にも獣類・魚類、さらに可食植物が重要な食料源であったと考えられ、生活残渣を廃棄した土坑等に含まれる骨類や種実遺体の調査が望まれる。

(2) 燃料材の種類

SK404は、鍛冶燃料材を製炭した土坑であり、炭化材は製炭材の一部と考えられている。樹種は、いずれもクリであった。この結果から、クリ材を選択的に製炭していた可能性がある。

日本における製鉄は、多くは砂鉄を原料とするために、製鉄の過程で還元を必要とする。そのために還元効果の高い木炭（岸本，1984）を必要とし、還元効果を維持するためには強く火持ちの良い材質のクヌギやコナラ等が適材である。一方、鍛冶では、酸化焔で高温を得ることが必要であるが、その場合には柔らかく燃えやすい材質の木炭が適している。クリは、木炭にすると軟質で燃えやすく、立ち消えする性質を有し、鍛冶燃料材としては適材とされる（岸本・杉浦，1980）。近世に書かれた鉄山秘書でも、製鉄燃料材としてクヌギ・コナラ、鍛冶燃料材としてクリやマツをそれぞれ適材として挙げている（窪田，1987）。これらの結果から、鉄山秘書に書かれている木材利用が8世紀～12世紀まで遡ることが推定される。焼成目的に応じて燃料材の種類を使い分ける例は、二ツ梨一貫山窯跡F地区で検出された8世紀～9世紀の土師器焼成坑と須恵器窯跡でも確認されている（小松市教育委員会2002『二ツ梨一貫山窯跡』第5章第3節「二ツ梨一貫山窯跡F地区で使用された窯の燃料材について」）。これらの結果から、当時から木材の材質を生木と製炭した場合の違いまで認識しており、用途に合わせて適材を選択・利用していたことが推定される。

一方、植物珪酸体で稲稈殻に形成される穎珪酸体やイネ属葉部の珪化組織片がわずかながらも検出され、灰層内にこれらの植物体の灰が混入していたことがうかがえる。これより、補助燃料として稲藁が用いられていたと考えられる。仮に燃焼後の灰を外部へ廃棄したとしても、検出される珪酸体列がイネ属に限定されることから、本土坑で使用されていた草本類は稲藁が主体であったと推定される。

(3) 廃棄土坑出土須恵器の内容物

SK425および土器溜まりから出土した須恵器内充填土壌の土壤理化学性は、腐植含量が比較的高く、多少なりとも土壤腐植の影響を受けていることが考えられる。また、リン酸含量は、資料3が4.07P₂O₅ mg/g、資料4が3.43P₂O₅ mg/gであった。ここで、リン酸が土壌中に普通に含まれる量、いわゆる天然賦存量については、い

くつかの報告事例がある (Bowen,1983 ; Bolt&Bruggenwert,1980 ; 川崎ほか,1991 ; 天野ほか,1991)。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約 3.0 P₂O₅ mg/g 程度である。また、化学肥料の施用など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地で 5.5P₂O₅ mg/g という報告例があり (川崎ほか,1991)、骨片を含む土壌で 6.0P₂O₅ mg/g を超える場合が多い (パノリ・サーヴェイ株式会社,未公表)。なお、各調査例の記載単位が異なるため、P₂O₅ mg/g で統一した。今回、両須恵器内土壌とも天然賦存量を上回るリン酸含量が測定されることから、外的要因に由来するリン酸成分の富化が現れていると推定される。したがって、土器内土壌は、何らかの要因によりリン酸が富化された土壌であると考えられる。ただし、後述する墓坑と推定される土坑覆土と比較するとリン酸含量は低い。

一方、植物珪酸体分析および微細物分析では、穎珪酸体、イネ属葉部の珪化組織片、炭化材片、不明炭化種実が検出された。しかし、いずれの種類も検出個数がわずかであることから、土器内にこれらの種類が保存されていくことは考えにくい。これら検出された植物遺体は稲藁や稲粃、燃料材、生活残渣が遺構内に投棄または、流入し、土壌と混在した後に、土器内へ混入したことが考えられる。

以上、今回の結果から、須恵器瓶D内には動物遺体や植物遺体が直接埋納されていたことは考えにくい。比較的高いリン酸は、植物遺体などの生活残渣を含んだ周辺土壌の流れ込みによる可能性がある。したがって、今回は土器内容物について明確にできず、用途の検討まで至らなかった。この点に関しては、土坑覆土における植物化石の産出状況や土壌の理化学性と比較・検討して明らかにしていきたい。

なお、検出された単体の植物珪酸体も、大半が周辺土壌に含まれていたものと考えられる。多産したタケ亜科珪酸体は他の珪酸体と比較し風化に強く、生産量の多いことが指摘されている (近藤,1982 ; 杉山・藤原,1986)。そのため、他の珪酸体より残留しやすく、また台地・丘陵地や段丘上の堆積物で多産することが多い。このことから、元々土壌中に多く含まれていたと考えられる。しかし、イネ属は、栽培種であり、遺構が埋積する際に混入したと考えられる。中でも資料3でイネ属が多産することは、遺構によって埋積状況が異なっていたと推定される。

(4) 遺体埋納の検証

墓坑としての用途が推定されている SK332・SK335・SK340 では、腐植含量が比較的高い。しかし、リン酸含量は、各土坑とも 5.0P₂O₅ mg/g 以上であり、先述した天然賦存量を大きく上回る値であった。したがって、これら3基の土坑とも、外的要因によるリン酸の富化が認められ、内部に何らかの動物遺体が埋納されていたと考えられる。すなわち、これらの土坑は、埋葬遺構である可能性が高いと判断される。

ところで、自然状態で土壌の理化学的性質は、平衡状態を保つために均質になる性質がある。しかし、人為的な埋納が行われると、場所により組成にばらつきが生じる (例えば、中根 1992 など)。これが、遺体埋納の決め手になることがある。また、脂質分析により、ヒトに由来するコレステロールとコプロスタノールの多産と、アラキジン酸 (C20)・ベヘン酸 (C22)・リグノセリン酸 (C24) の検出によって、遺体埋納の痕跡を立証できるとされる (中野,1993 ; 1995)。よって、今後、さらに複数の調査事項を設定し3次的に調査を行うことでより詳細な情報が得られるものと期待される。

引用文献

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。

農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.

Bowen,H.J.M. (1983) 「環境無機化学－元素の循環と生化学－」. 浅見輝男・芋野充男訳, 297p.

博友社 [Bowen,H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements] .

Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M. (1980) 「土壌の科学」. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY] , p.235-236.

土壌養分測定法委員会編 (1981) 「土壌養分分析法」. 440p., 養賢堂.

粕野義夫 (1988) 石川県南部地域, 「日本の地質5 中部地方Ⅱ」, p.149-152, 共立出版株式会社.

川崎 弘・吉田 滯・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.

- 岸本定吉 (1984) 木炭の博物誌. 260p., 総合科学出版.
- 岸本定吉・杉浦銀治 (1980) 日曜炭やき師入門. 250p., 総合科学出版.
- 近藤鍊三 (1982) Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和 56 年度科学研究費 (一般研究 C) 研究成果報告書, 32p.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特徴と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 窪田蔵郎 (1987) 改訂 鉄の考古学. 308p., 雄山閣.
- 中根秀二 (1992) 1号方形周溝墓の自然科学的分析. 「田園調布南2 都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.133-149. 都立学校遺跡調査会.
- 中野益男 (1993) 脂肪酸分析法. 「第四紀試料研究法2 研究対象別分析法」, p.388-403. 東京大学出版会.
- 中野益男 (1995) 脂肪酸分析の現状と課題. 考古学ジャーナル, 386, p.2-8.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1993) 自然科学分析からみた人々の生活 (1). 慶應義塾藤沢校地理蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p.347-370. 慶応義塾.
- ベドロジスト懇談会編 (1984) 「土壌調査ハンドブック」, 156p., 博友社.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.

《考古学的見地からのコメント》

望月 精司

今回、当資料の自然科学分析を依頼した意図と分析結果に関する埋蔵文化財調査担当のコメントとして、以下に示す。

1. 出土貝類の分析

本台地集落遺跡群においては、三湖に面する台地上に位置する点から、貝の廃棄が見られる遺跡が目立つ。今回、当遺跡の出土貝類と近接する念仏林南遺跡出土の貝類を分析に出したのは、同じ潟縁に位置する台地集落なのに、主体となる貝に違いが見られたからである。これは同じ潟縁でも採取する貝を意図的に変えていたのかとも想定したが、分析の結果では、それが潟縁でも集落の位置する場所に起因するであろうことが判明した。つまり、汽水性の柴山潟に直接面する額見町遺跡に対し、潟から河川で入り込んだ念仏林南遺跡という立地条件にあり、近場での貝採取を基本としていた様子が読み取れた。

2. 製炭土坑の樹種と灰層分析

額見町遺跡では7世紀中頃以降、精錬鍛冶、鍛錬鍛冶が行われているが、それに使用する燃料木炭を得るため土坑での製炭が行われている。分析した土坑 SK404 はそのうちのひとつで、鍛冶燃料材としてどのような樹種が使われているのかを目的として分析した。分析の結果で樹種が全てクリ材とされており、クリ材の選択的使用を想定されているが、複数の製炭土坑資料を分析対象とし、データとして信憑性の高いものとしなかった点は反省点である。製鉄、特に鍛冶工程におけるクリ材使用については、このデータも含めて、北陸の須恵器窯や土師器焼成坑、製鉄炉等の出土炭化材をもとに、論じたことがあるので参照されたい (望月精司「北陸地方の古代窯業・製鉄業の森林利用」『古代窯業の森林利用技術—陶人と森の関わり—』東北芸術工科大学, 2008年)。また、灰層内の植物珪酸体分析で、イネ属の植物体が検出されたことは収穫であった。これは、製炭土坑においても土師器焼成と同様に稲藁を木材焼成の補助燃料とした覆い焼きが行われていた可能性があり、興味深い。

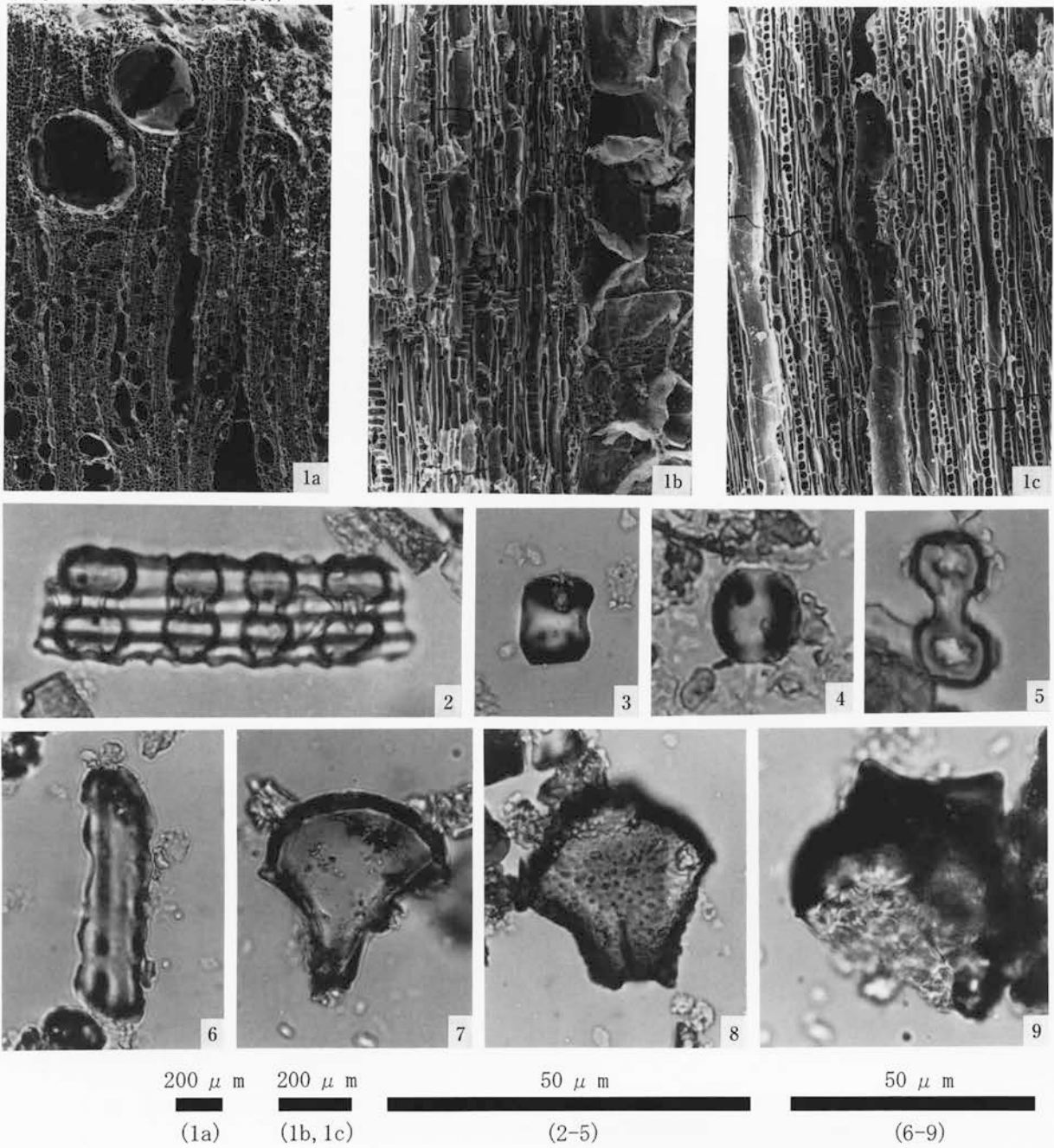
3. 胴部完形須恵器瓶類の内容物分析

土坑や土器溜まり遺構より出土した胴部完形の須恵器瓶類について、蔵骨器や特殊容器としての使用の可能性を想定し、土器内土壌の分析を行った。その結果、リン酸含有が通常より若干高い数値ではあったが、蔵骨器と特定できるような数値ではなく、また内容物に影響を受けた土壌の検出もなかった。遺構埋納段階で内容物が遺存するような土器廃棄は、それが意図的な埋納を行うものでない限り、土器内土壌にそのような影響が出ることはないものと判断される。

4. 墓坑の可能性を持つ土坑内埋土の土壌分析

土坑形態や土器出土状況、埋土層の状態から墓坑の可能性を持つ土坑が複数検出されているが、そのうち中世段階に位置付けられる土坑3基について、動物遺体から放出されるリン酸についてその多寡を目的とした土壌分析を行った。その結果、分析を行った全ての土坑で通常よりも高いリン酸含量が認められ、動物遺体埋葬のための土坑であることを補強する資料となった。ただ、今回の分析が中世のみに偏り、古代墓坑について行えなかったことは残念であり、またリン酸含有のみの分析ではなく、脂質分析を併用することで、人体埋納であることを確実にすることが可能であるとの見解は参考となった。

図版 炭化材・植物珪酸体



1. クリ (資料2 B区) a: 木口, b: 柁目, C: 板目
2. イネ属短細胞列 (資料3)
3. タケ亜科短細胞珪酸体 (資料4)
4. ヨシ属短細胞珪酸体 (資料2)
5. ススキ属短細胞珪酸体 (資料4)
6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (資料4)
7. イネ属機動細胞珪酸体 (資料3)
8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (資料4)
9. イネ属穎珪酸体 (資料2)

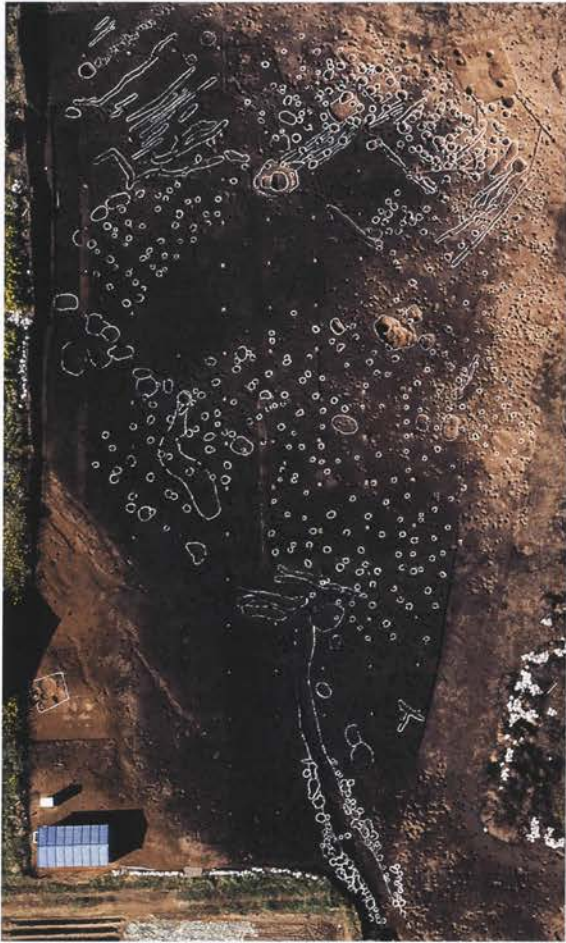


写真2 額見町遺跡H地区

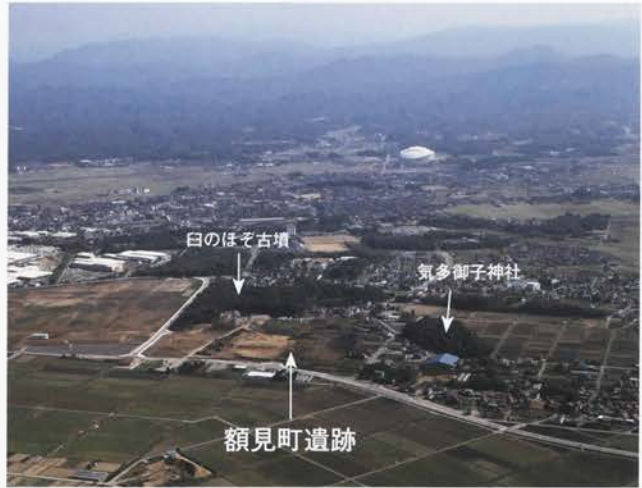


写真1 額見町遺跡遠景斜め航空写真(北西方向から)

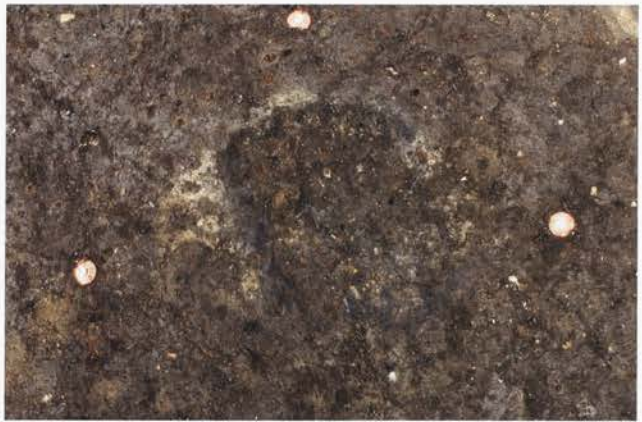


写真3 SJ70 鍛冶炉 検出状況



写真5 SJ65 鍛冶炉検出状況



写真6 SJ65 鍛冶炉断ち割り



写真4 SJ70 鍛冶炉断ち割り



写真7 SJ72 鍛冶炉検出状況



写真8 SJ72 鍛冶炉断ち割り断面



写真9 SJ75 鍛冶炉検出状況と断ち割り

《鍛冶炉 遺構調査写真》



写真10 SK394 土師器焼成坑 検出状況



写真11 SK394 土師器焼成坑 被熱断ち割り

《土師器焼成坑 遺構調査写真》



写真12 SK404 製炭土坑完掘状況



写真15 SK412 製炭土坑検出状況



写真16 SJ66 製炭土坑検出状況



写真13 SK404 覆土土層



写真14 SK404 焼床断ち割り



写真17 SJ66 製炭土坑断ち割り

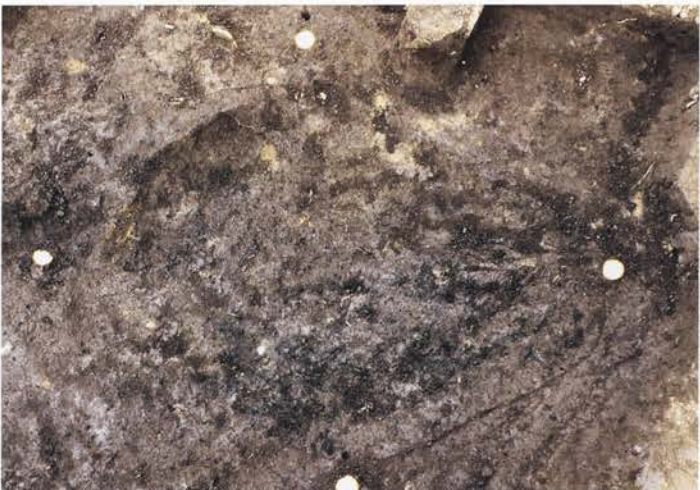


写真18 SK415 製炭土坑完掘状況



写真19 SK415 覆土と炭層検出状況

《製炭土坑 遺構調査写真》



写真20 SI119 完掘状況（部分的に貼床検出、掘方土坑プラン露出）



写真21 SI119 カマド被熱・ソデ掘方状況



写真22 SJ119 掘方

《竪穴建物 遺構調査写真》



写真23 SX05 完掘

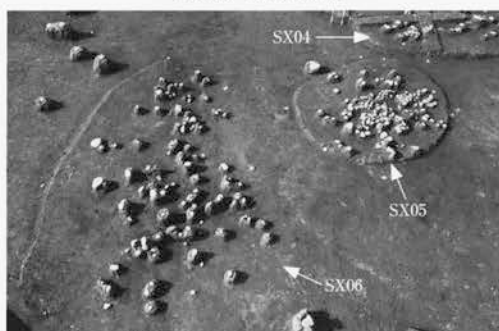


写真24 SX06・SX05・SX04

《集積遺構 遺構調査写真》



写真25 SK419 上層遺物完掘状況



写真28 SK423・424 遺物出土状況



写真26 SK419 遺物アップ



写真27 SK419 樁状錘出土状況



写真29 SK424 出土遺物アップ



写真31 SE02 井戸跡 完掘
（標高〇〇m地点より）

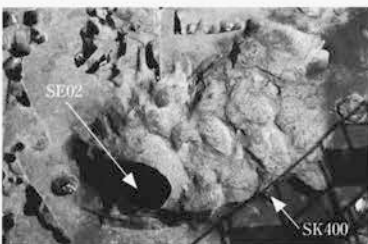


写真32 SE02・SK400 完掘



写真30 SK425 完掘

《SK 土坑 SE 井戸 遺構調査写真》



写真 33 SD23 (F地区側) 完掘

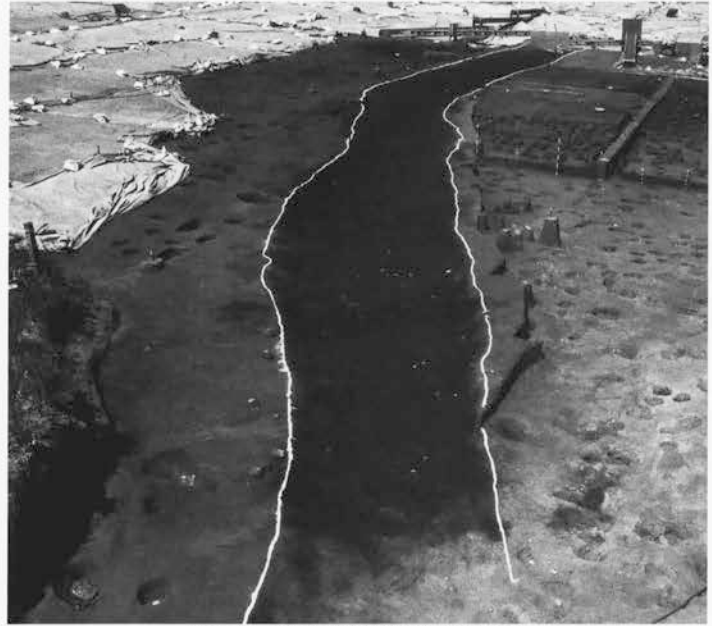


写真 35 SD23 (H地区側) 完掘全景



写真 34 SD23 (F地区側) 完掘アップ



写真 36 SD23 (H地区側) 完掘アップ



写真 37 SD23 (H地区側) 覆土遺物出土状況

《道路状遺構 2 遺構調査写真》



写真 38 土器溜まり遺構遠景



写真 39 土器溜まり遺構近景



写真 40 土器溜まり遺構遺物アップ

《土器溜まり遺構 遺構調査写真》



写真1 VI 1期の墨書須恵器「吉女？」

写真2 VI期の墨書須恵器「林？」

写真3 IV 2古期の刻書須恵器「生」

写真4 IV 2新期の墨書須恵器「大」？



古代溜まり集中4-76

写真5 IV 1期の須恵器小型鉢（胴穿孔）

古代溜まり集中4-77

写真6 IV 1期の須恵器小型鉢（底面ヘラ記号「卍」）



SK424-94a



SK424-94b

写真7 IV 2新期の獣足盤の足部



写真8 IV 1期頃の須恵器獣足付羽釜



写真9 IV 1期の須恵器大型長頸瓶A (完形品の2個体廃棄)



写真10 IV 2新期の須恵器三耳瓶



写真11 V期頃の須恵器瓶G



写真13 VI 1期の須恵器中小甕 (平底風底部)



写真12 IV 1期の焼歪みある須恵器小甕

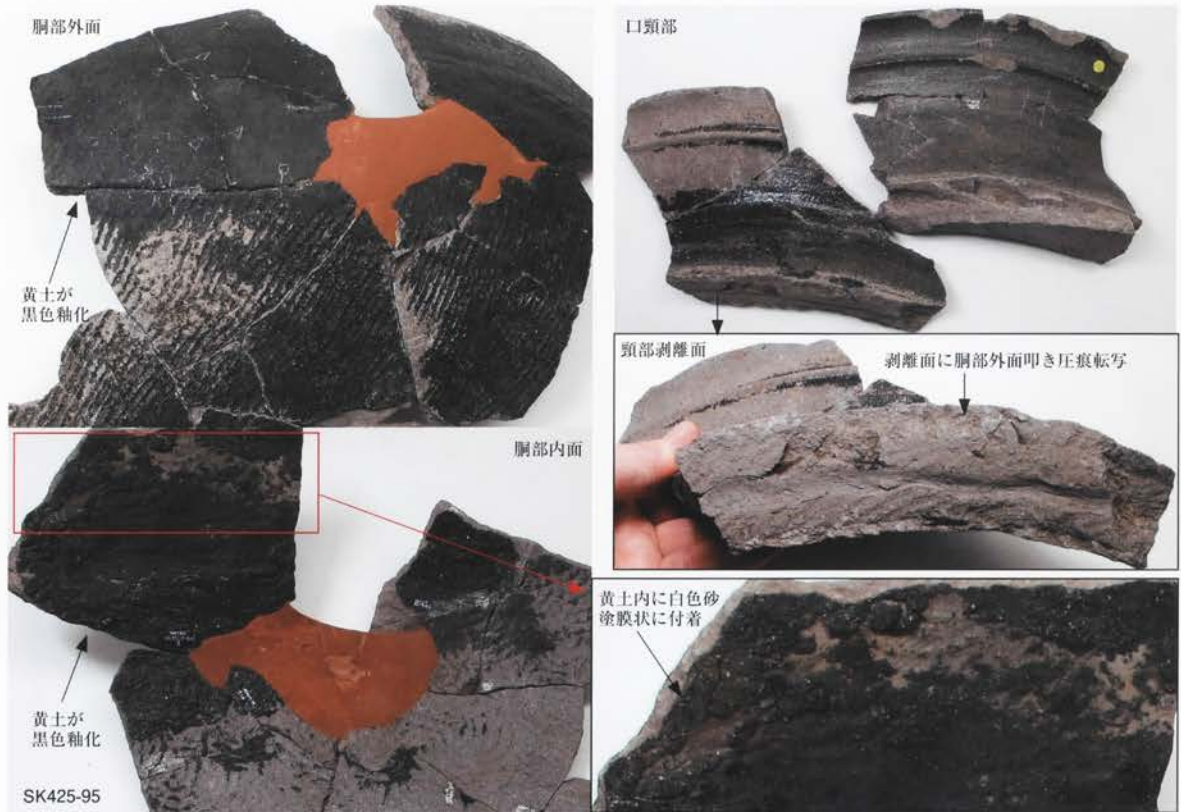


写真14 IV期の須恵器大甕 (胴部上半に黄土塗布焼成痕跡)



写真15 IV 2新期の馬形須恵質製品 (四肢と首、尾が欠損)



写真16 IV期頃の馬形須恵質製品 (大型胴中空タイプ)



写真17 古墳時代後期の須恵質埴輪 (人物埴輪の円筒部)



写真18 古代の支脚形土師質製品 (左の一群は堅緻焼成の黒斑付き)



写真19 古代の鉄製品



写真20 中世1期の内黒土師器有台碗

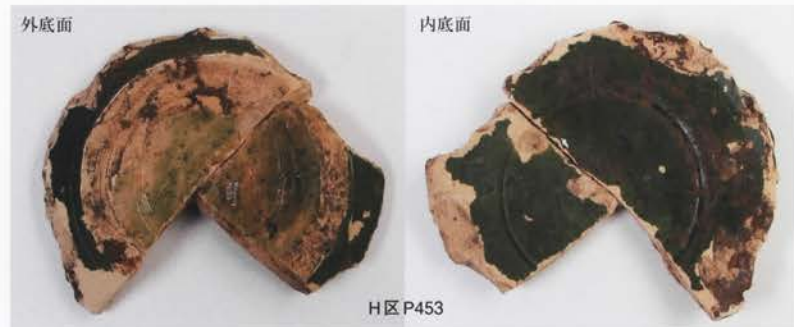


写真22 平安後期の近江産緑釉陶器有台碗



写真21 中世1期の非ロクロ土師器大皿



写真23 中世1期の土師質権状錘 (土製権衡)



写真24 中世1期の錘状石製品 (製品転用品?)

額見町遺跡 V

- 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 -

発行日 平成 22 年 3 月 31 日

編集・発行者 小松市教育委員会
文化課 埋蔵文化財調査室
〒 923-0801 石川県小松市園町ホ 62 番地
(TEL) 0761-24-8132

印刷 英文堂印刷

Excavation Reports of Cultural Sites
in Nukamimachi Sites
Vol. V



H区古代土器溜まり周辺出土のIV期の須恵器貯蔵具

2010. 3. 31

Komatsu City Board Of Education